岐阜県文化財保護センター調査報告書　第68集

南青柳遺跡 南青柳古墳 大平前遺跡

2002

財団法人　岐阜県文化財保護センター

南青柳遺跡（みなみあおやぎ） 南青柳古墳（みなみあおやぎ） 大平前遺跡（おおひらまえ）

2002

財団法人　岐阜県文化財保護センター

第 9 号住居跡出土土器

第35号住居跡出土土器

2 巻頭図版

第54号住居跡出土土器

第 1 号土器集積出土土器

序

関市は岐阜県中南部に位置し、中濃地域の中核都市としての歩みを続けてきました。関市域のこうした位置づけは、既に古代にその萌芽をみることができます。壬申の乱で大活躍したムゲツ氏は、関市域の大半を含む武儀郡に勢力を張り、当市内の下有知付近に本拠をおいた豪族と考えられています。国指定史跡の弥勒寺跡や弥勒寺東遺跡などは、それにゆかりの深い遺跡として周知のところであります。中世には、刀鍛冶の町として全国屈指の技術を誇りました。近世以降も名刀の産地、刃物産業の町としてその伝統は受け継がれて行きます。また、「関」という地名が示すように、郡上街道と金山街道を結ぶ地であり、長良川水運の下有知湊とともに、陸水の交通の要衝でもありました。中濃地域の政治・軍事・産業の要地としての役割は、近世・近代と連綿として続いてきたことになります。

関市は、平成12年度に市制50周年を迎え、新たな飛躍を目指そうとしています。近年大規模な開発も相次いで計画、推進されていますが、岐阜県土地開発公社による関市下有知地内における「関テクノハイランド開発事業」もその一つであります。この報告書は、それに伴う埋蔵文化財発掘調査として実施した、南青柳遺跡と大平前遺跡の調査報告書であります。

南青柳遺跡からは、弥生時代末から古墳時代初頭にかけての竪穴住居跡82軒と、５世紀後半の造り出し付きの円墳である南青柳古墳を発見しました。前者は、この地域に「クニ」が形づくられる時期の集落のあり方を示すよい資料であり、後者は、大和政権の国家統一が完成に近づく時期の中濃地域の首長層の状況を示すものと考えられます。いずれも、ムゲツ氏が歴史上に登場する以前のこの地域の歴史を明らかにする上で、貴重な資料を提供したものと考えます。

一方、大平前遺跡からは、奈良時代の巨岩を中心とする祭祀遺構が発見されました。県内では珍しい事例と言えます。関市役所の北に広がる水田地帯を地元の人々は、古くから吉田沖と呼びならわしてきました。かつては条里制の跡がよく残る場所として知られ、ここでの水田経営は長い歴史をもっています。その水源地を眼下に一望できる場所に存在する大平前遺跡の祭祀遺構は、水分（みくまり）の地を管掌する神に対する祭祀に関連するものと思われます。これもまた古代の人々の精神文化を理解するうえで、貴重な発見となりました。

本報告書が埋蔵文化財に対する認識を深めるとともに、当地の歴史研究の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び出土品の整理・報告書作成にあたりまして、多大な御支援・御協力をいただいた関係諸機関並びに関係者各位、関市教育委員会、地元地区の皆様に深く感謝いたします。

平成14年３月

財団法人　岐阜県文化財保護センター
理事長　　服　部　卓　郎

例　言

1　本書は岐阜県関市下有知字南青柳・砂行に所在する南青柳遺跡（岐阜県遺跡番号 21205-06350）・南青柳古墳（岐阜県遺跡番号 21205-09074）、同字大平前・荘洞に所在する大平前遺跡（岐阜県遺跡番号 21205-09241）の発掘調査報告書である。

2　本調査は関テクノハイランド開発事業に伴うもので、岐阜県土地開発公社から岐阜県が委託を受けた。発掘調査は、財団法人岐阜県文化財保護センターが実施した。

3　発掘調査は、八賀晋三重大学名誉教授の指導のもと、南青柳遺跡・南青柳古墳の調査を平成10年度、大平前遺跡の調査を平成11年度に実施した。なお、発掘調査の担当者は以下の通りである。

南青柳遺跡・南青柳古墳　　岡田吉孝、野村元次（平成10年4月～11年3月）
　　堀正人（平成10年12月～11年3月）
大平前遺跡　　岡田吉孝（平成11年4月～11年7月）

4　整理作業は、平成11・12年度に実施し、岡田吉孝が担当した。

5　本書の執筆・編集は岡田が行った。

6　遺物の写真撮影は、アートフォト右文に委託して行った。

7　地形測量・空中写真測量は国際航業株式会社に委託して行った。

8　石器の実測、計測、観察は、株式会社アルカに委託して行った。

9　住居跡出土炭化材及び南青柳古墳出土鉄剣付着の木質の樹種同定、住居跡（ＳＢ35・ＳＢ50）・土坑（ＳＫ01）焼土の熱残留磁化測定、住居跡等出土土器の胎土分析、包含層出土ガラス玉片の蛍光Ｘ線分析は、（株）パレオ・ラボに委託して行った。その結果は第２章７節に掲載した。

10　発掘調査及び報告書の作成にあたって、次の方々や諸機関から御指導・御協力を賜った。記して感謝の意を表する。（敬称略、五十音順）

赤澤徳明、伊藤聡、宇野隆夫、篠原英政、高木宏和、西中川駿馬、渡辺博人、関市教育委員会

11　出土遺物の実測図の縮尺は、土器は1/3、鉄製品は鉄剣・鉄刀が1/4、その他は1/2、ガラス製品は1/2、石器は2/3・1/3である。スケールはそれぞれに添付した。なお、出土状況図に示した遺物の実測図は土器・石器は1/8、鉄製品は鉄剣・鉄刀が1/8、その他は1/4である。

12　遺構の略号は、下記のものを用いた。

・住居	ＳＢ	・溝	ＳＤ	・土坑	ＳＫ
・土器集積	ＳＵ	・柱穴・小穴	Ｐ	・その他	ＳＸ

13　遺構番号は、原則として発掘調査時のものを用いた。住居跡・溝・土坑は01番から通し番号で、遺構内の土坑・柱穴・小穴は遺構ごとに１番から付した。

14　遺物番号は、石器以外については、遺構を優先して住居跡、ＳＫ・ＳＤ、古墳、包含層の順に付した。その際、土器を１番から、金属製品を2001番から、ガラス製品を3001番から付した。石器は器種別に1001番から付した。なお、大平前遺跡出土土器は、800番から付した。

15　写真図版中にある遺物写真の番号は遺物挿図における番号と同一である。なお、番号が付してないものは、遺物挿図に掲載しなかった遺物である。

16　本文中の方位は、国土座標Ⅶ系の座標北を示している。

17　土及び土器類の色調は、小川正忠・竹原秀雄1996『新版標準土色帖』（日本色研事業株式会社）による。

18　本報告書の作成に当たっては、隣接する砂行遺跡と遺構・遺物の時期がほとんど共通することから、同遺跡の報告書『砂行遺跡』（成瀬正勝編 2000［財］岐阜県文化財保護センター）の分析・研究に全面的に依拠した。

19　調査記録及び出土品は、財団法人岐阜県文化財保護センターで保管している。

本　文　目　次

序
例言
第1章　調査の概要…… 1
　第1節　調査に至る経緯…… 1
　第2節　発掘調査の経過と方法…… 3
第2章　南青柳遺跡・南青柳古墳の調査…… 9
　第1節　遺跡周辺の立地…… 9
　第2節　周辺の遺跡…… 9
　第3節　基本層序と遺構・遺物の概要…… 10
　　第1項　基本層序……10
　　第2項　遺構・遺物の概要……14
　第4節　遺構と遺物…… 29
　　第1項　弥生時代～古墳時代の遺構と遺物……29
　　第2項　南青柳古墳と遺物…… 173
　　第3項　その他の遺構…… 193
　第5節　包含層出土の遺物…… 198
　第6節　南青柳遺跡出土の石器…… 219
　第7節　自然科学分析…… 226
　　第1項　南青柳遺跡住居炉跡及び土坑焼土の焼成年代…… 226
　　第2項　南青柳遺跡出土弥生末～古墳中期土器の胎土材料…… 232
　　第3項　南青柳遺跡の竪穴住居跡出土炭化材・南青柳古墳出土鉄剣付着木質部の樹種同定　248
　　第4項　南青柳遺跡出土ガラス製品の成分分析…… 253
　　第5項　南青柳遺跡出土のウシ・ウマ遺体…… 256
　第8節　まとめ…… 257
第3章　大平前遺跡の調査…… 261
　第1節　遺跡の立地と歴史的環境…… 261
　第2節　基本層序…… 262
　第3節　遺構と遺物…… 262
　第4節　まとめ…… 267
遺構一覧表
遺物観察表
図版

挿　図　目　次

図1　関テクノハイランド造成予定地内試掘確認調査地点および遺跡位置図 …… 2
図2　南青柳遺跡調査前地形測量図及び航空測量図化範囲 …… 4
図3　南青柳遺跡調査区区割り図 …… 5
図4　南青柳遺跡・大平前遺跡周辺遺跡分布図 …… 11
図5　南青柳遺跡基本層序 …… 13
図6　南青柳遺跡遺構分布図 …… 17・18
図7　南青柳遺跡遺構名称図 …… 19・20
図8　南青柳遺跡時期別遺物出土点数分布図（1）…… 27
図9　南青柳遺跡時期別遺物出土点数分布図（2）…… 28
図10　ＳＢ０１・０２周辺地形図 …… 30
図11　ＳＢ０１実測図 …… 31
図12　ＳＢ０２実測図 …… 32
図13　ＳＢ０３・０４周辺地形図 …… 33
図14　ＳＢ０３実測図 …… 34
図15　ＳＢ０４実測図 …… 34
図16　ＳＢ０５・０６・０７周辺地形図 …… 35
図17　ＳＢ０５実測図 …… 36
図18　ＳＢ０６実測図 …… 37
図19　ＳＢ０７実測図 …… 38
図20　ＳＢ０７遺物出土状況図 …… 38
図21　ＳＢ０８・１０周辺地形図 …… 39
図22　ＳＢ０８実測図 …… 40
図23　ＳＢ０９周辺地形図 …… 41
図24　ＳＢ０９実測図 …… 41
図25　ＳＢ０９遺物出土状況図 …… 42
図26　ＳＢ１０実測図 …… 43
図27　ＳＢ１１・１２周辺地形図 …… 44
図28　ＳＢ１１実測図 …… 45
図29　ＳＢ１１遺物出土状況図 …… 45
図30　ＳＢ１２実測図 …… 46
図31　ＳＢ１３周辺地形図 …… 47
図32　ＳＢ１３実測図 …… 48
図33　ＳＢ１４・１５周辺地形図 …… 49
図34　ＳＢ１４実測図 …… 49
図35　ＳＢ１５実測図 …… 50
図36　ＳＢ１６周辺地形図 …… 51
図37　ＳＢ１６実測図 …… 52
図38　ＳＢ１７～２２周辺地形図 …… 53
図39　ＳＢ１７実測図 …… 54
図40　ＳＢ１８・１９実測図 …… 55
図41　ＳＢ２０実測図 …… 56
図42　ＳＢ２１実測図 …… 57
図43　ＳＢ２２実測図 …… 58
図44　ＳＢ２３周辺地形図 …… 59
図45　ＳＢ２３実測図 …… 60
図46　ＳＢ２３遺物出土状況図 …… 60
図47　ＳＢ２４実測図 …… 61
図48　ＳＢ２４～２７周辺地形図 …… 62
図49　ＳＢ２５実測図 …… 62
図50　ＳＢ２６実測図 …… 64
図51　ＳＢ２７実測図 …… 65
図52　ＳＢ２８・３０周辺地形図 …… 66
図53　ＳＢ２８実測図 …… 67
図54　ＳＢ２９周辺地形図 …… 68
図55　ＳＢ２９実測図 …… 68
図56　ＳＢ３０実測図 …… 69
図57　ＳＢ３１周辺地形図 …… 70
図58　ＳＢ３１実測図 …… 71
図59　ＳＢ３２・３３周辺地形図 …… 72
図60　ＳＢ３２実測図 …… 72
図61　ＳＢ３３実測図 …… 73
図62　ＳＢ３４・３６・３８周辺地形図 …… 74
図63　ＳＢ３４実測図 …… 74
図64　ＳＢ３５周辺地形図 …… 75
図65　ＳＢ３５実測図 …… 76
図66　ＳＢ３５遺物出土状況図 …… 78
図67　ＳＢ３６実測図 …… 79
図68　ＳＢ３７周辺地形図 …… 80
図69　ＳＢ３７実測図 …… 81
図70　ＳＢ３７遺物出土状況図 …… 81
図71　ＳＢ３８実測図 …… 82
図72　ＳＢ３９～４３周辺地形図 …… 83
図73　ＳＢ３９実測図 …… 83
図74　ＳＢ４０実測図 …… 84
図75　ＳＢ４１実測図 …… 85
図76　ＳＢ４２実測図 …… 87
図77　ＳＢ４３実測図 …… 88
図78　ＳＢ４４・４５周辺地形図 …… 89
図79　ＳＢ４４実測図 …… 89
図80　ＳＢ４５実測図 …… 90
図81　ＳＢ４６・４８周辺地形図 …… 91
図82　ＳＢ４６実測図 …… 92
図83　ＳＢ４７周辺地形図 …… 93
図84　ＳＢ４７実測図 …… 94
図85　ＳＢ４８実測図 …… 95
図86　ＳＢ５０・５２周辺地形図 …… 96
図87　ＳＢ５０実測図 …… 97
図88　ＳＢ５２実測図 …… 98
図89　ＳＢ５３・６１・６２・７０周辺地形図 …… 99
図90　ＳＢ５３実測図 …… 99
図91　ＳＢ５４～６９周辺地形図 …… 100
図92　ＳＢ５４実測図 …… 101
図93　ＳＢ５４遺物出土状況図 …… 102
図94　ＳＢ５６実測図 …… 104
図95　ＳＢ５７実測図 …… 105
図96　ＳＢ５８実測図 …… 107
図97　ＳＢ５９実測図 …… 108
図98　ＳＢ６０実測図 …… 110
図99　ＳＢ６０遺物出土状況図 …… 110
図100　ＳＢ６１実測図 …… 111
図101　ＳＢ６２実測図 …… 112
図102　ＳＢ６３遺物出土状況図 …… 113
図103　ＳＢ６３実測図 …… 114
図104　ＳＢ６４実測図 …… 116
図105　ＳＢ６５実測図 …… 117
図106　ＳＢ６６実測図 …… 118
図107　ＳＢ６７実測図 …… 119
図108　ＳＢ６８実測図 …… 120
図109　ＳＢ６９実測図 …… 122
図110　ＳＢ７０実測図 …… 123

図111 ＳＢ７１～８１周辺地形図…… 124
図112 ＳＢ７１実測図…… 124
図113 ＳＢ７２実測図…… 125
図114 ＳＢ７３実測図…… 127
図115 ＳＢ７４実測図…… 128
図116 ＳＢ７５実測図…… 130
図117 ＳＢ７６実測図…… 131
図118 ＳＢ７７実測図…… 132
図119 ＳＢ７８実測図…… 133
図120 ＳＢ７９実測図…… 135
図121 ＳＢ８０実測図…… 136
図122 ＳＢ８１実測図…… 137
図123 ＳＢ８２～８５周辺地形図…… 138
図124 ＳＢ８２実測図…… 139
図125 ＳＢ８３実測図…… 140
図126 ＳＢ８４実測図…… 141
図127 ＳＢ８５実測図…… 142
図128 ＳＵ０１・０２周辺地形図 …… 143
図129 ＳＵ０１上層検出状況…… 143
図130 ＳＵ０１下層検出状況…… 144
図131 ＳＵ０２検出状況…… 145
図132 住居跡出土土器（１）…… 146
図133 住居跡出土土器（２）…… 147
図134 住居跡出土土器（３）…… 148
図135 住居跡出土土器（４）…… 149
図136 住居跡出土土器（５）…… 150
図137 住居跡出土土器（６）…… 151
図138 住居跡出土土器（７）…… 152
図139 住居跡出土土器（８）…… 153
図140 住居跡出土土器（９）…… 154
図141 住居跡出土土器（10）…… 155
図142 住居跡出土土器（11）…… 156
図143 住居跡出土土器（12）…… 157
図144 住居跡出土土器（13）…… 158
図145 住居跡出土土器（14）…… 159
図146 住居跡出土土器（15）…… 160
図147 住居跡出土土器（16）…… 161
図148 住居跡出土土器（17）…… 162
図149 住居跡出土土器（18）…… 163
図150 住居跡出土土器（19）…… 164
図151 住居跡出土土器（20）…… 165
図152 住居跡出土土器（21）…… 166
図153 住居跡出土土器（22）…… 167
図154 住居跡出土土器（23）…… 168
図155 住居跡出土土器（24）…… 169
図156 住居跡出土土器（25）・ＳＵ出土土器（1）…… 170
図157 住居跡出土土器（26）・ＳＵ出土土器（2）…… 171
図158 ＳＵ出土土器（3）・ＳＫ及びＳＤ出土土器
住居跡出土鉄製品…… 172
図159 南青柳古墳調査前地形測量図…… 174
図160 南青柳古墳墳丘測量図…… 175
図161 南青柳古墳墳丘推定復元図…… 176
図162 南青柳古墳墳丘断面図…… 179・180
図163 南青柳古墳主体部実測図…… 183
図164 Ｐ０１・Ｐ０８実測図 …… 184
図165 南青柳古墳主体部・盗掘坑遺物出土状況…… 185
図166 南青柳古墳墳丘上面・裾部周辺遺物出土状況… 186
図167 南青柳古墳主体部・盗掘坑出土鉄製品（１）… 190
図168 南青柳古墳盗掘坑出土鉄製品（２）…… 191
図169 南青柳古墳墳丘・裾部周辺出土土器南青柳古墳
墳丘盛土内出土土器…… 192
図170 ＳＤ実測図…… 194
図171 ＳＫ実測図…… 195・197
図172 包含層出土土器（１）…… 208
図173 包含層出土土器（２）…… 209
図174 包含層出土土器（３）…… 210
図175 包含層出土土器（４）…… 211
図176 包含層出土土器（５）…… 212
図177 包含層出土土器（６）…… 213
図178 包含層出土土器（７）…… 214
図179 包含層出土土器（８）…… 215
図180 包含層出土土器（９）・土製品 …… 216
図181 包含層出土土器（10）…… 217
図182 包含層出土土器（11）・鉄製品・ガラス製品 … 218
図183 南青柳遺跡出土石器（１）…… 220
図184 南青柳遺跡出土石器（２）…… 221
図185 南青柳遺跡出土石器（３）…… 222
図186 南青柳遺跡出土石器（４）…… 223
図187 南青柳遺跡出土石器（５）…… 224
図188 南青柳遺跡出土石器（６）…… 225
図189 Shibuya（1980）による地磁気永年変化曲線… 229
図190 住居跡ＳＢ35№７の段階交流消磁測定結果… 230
図191 住居跡および土坑焼土の磁化方向とShibuya
（1980）による地磁気永年変化曲線の一部 … 229
図192 胎土中の粒子組成図…… 246
図193 伊勢－三河湾周辺の地層分布図…… 247
図194 算盤玉型ガラス玉片の蛍光Ｘ線スペクトル図… 255
図195 緑色ガラス玉片の蛍光Ｘ線スペクトル図…… 255
図196 大平前遺跡調査前地形測量図…… 261
図197 大平前遺跡測量図…… 263
図198 大平前遺跡祭祀遺構実測図…… 265・266
図199 大平前遺跡ピット・ＳＫ位置図…… 268
図200 大平前遺跡ピット・ＳＫ実測図…… 269
図201 大平前遺跡遺物出土状況図…… 270
図202 大平前遺跡出土土器…… 272

表　目　次

表１　南青柳遺跡発掘調査経過表 …… 6
表２　南青柳遺跡・砂行遺跡時期区分 …… 14
表３　Ⅱ期・Ⅲ期実測土器一覧 …… 26
表４　住居跡および土坑焼土の焼成年代推定結果… 228
表５　住居跡および土坑焼土の残留磁化測定結果… 231
表６　土器試料とその特徴…… 241
表７　胎土中の粒子計数一覧（その１）…… 242
表８　胎土中の粒子計数一覧（その２）…… 243
表９　土器胎土中の砂粒分類…… 244
表10　胎土材料の粘土と岩石組み合わせの関係…… 244
表11　土器胎土の粘土および砂粒の特徴…… 245
表12　南青柳遺跡出土材の樹種同定結果…… 252
表13　南青柳遺跡の各遺構別検出樹種と点数…… 252
表14　ガラス製品の化学組成…… 254

表15　南青柳遺跡住居跡一覧表…… 275
表16　南青柳遺跡ＳＤ一覧表…… 276
表17　南青柳遺跡ＳＫ一覧表…… 277
表18　南青柳遺跡ピット一覧表…… 277
表19　住居跡・ＳＵ・ＳＤ・ＳＫ出土土器観察表…… 279
表20　南青柳古墳出土土器観察表…… 289
表21　包含層出土土器観察表…… 290
表22　住居跡出土鉄製品観察表…… 296
表23　南青柳古墳出土鉄製品観察表…… 296
表24　包含層出土鉄製品観察表…… 296
表25　包含層出土ガラス製品観察表…… 296
表26　大平前遺跡出土土器観察表…… 295
表27　南青柳遺跡出土石器観察表…… 297

写　真　図　版

図版１　南青柳遺跡全景、南青柳遺跡遠景(北東から)、南青柳遺跡遠景(北西から)
図版２　南青柳遺跡調査前(南から)、北尾根西部遺構検出状況、ＳＢ01、ＳＢ01・ＳＤ01・ＳＫ01、ＳＢ02、ＳＢ03、ＳＢ04、ＳＢ04内Ｐ04遺物検出状況
図版３　ＳＢ05・06、ＳＢ07、ＳＢ07遺物検出状況、ＳＢ08、ＳＢ09、ＳＢ09遺物出土状況、ＳＢ10、ＳＢ11遺物出土状況
図版４　ＳＢ13・39・40（遠景）、ＳＢ13、ＳＢ14、ＳＢ15・32、ＳＢ16、南谷遺構検出状況（西から）、ＳＢ17(上)・48(下)、ＳＢ18・19
図版５　ＳＢ20・21、ＳＢ22・24、ＳＢ23遺物出土状況、ＳＢ23地床炉半掘状況、ＳＢ25・27・ＳＫ16、ＳＢ26、ＳＢ11（左上）・ＳＢ35（中央）・ＳＢ28（右上）、ＳＢ29
図版６　ＳＢ30、ＳＢ31(上)・54(下)、ＳＢ33、ＳＢ34、南谷上部（ＳＢ35・46・16付近）遺構検出状況、ＳＢ35炭化材検出状況、ＳＢ35、ＳＢ35鉄鏃出土状況
図版７　ＳＢ35遺物（器台）出土状況、南谷西部遺構検出状況、ＳＢ36、ＳＢ37遺物出土状況、ＳＢ38、ＳＢ39（右）・40（左）、ＳＢ40、南谷東上部遺構検出状況
図版８　ＳＢ41、ＳＢ41炭化材検出状況、ＳＢ43(上)・42（下）、ＳＢ43(上)、ＳＢ44、ＳＢ47検出状況、ＳＢ47、ＳＢ17(上)・48(下)
図版９　北谷遺構検出状況(西北より)、ＳＢ50、ＳＢ50地床炉検出状況、ＳＢ52、ＳＢ53、ＳＢ09（上）・ＳＢ31(中)・ＳＢ54(下)、ＳＢ56、北谷遺構検出状況（東より）
図版10　ＳＢ58、ＳＢ59、ＳＢ60、ＳＢ61、ＳＢ62、ＳＢ62地床炉検出状況、ＳＢ36（上）・59（中上）・63(中下)・65(下)、ＳＢ63
図版11　ＳＢ64、ＳＢ65、ＳＢ66、ＳＢ67、ＳＢ68、ＳＢ69、東谷遺構検出状況（西北より）、東谷遺構検出状況（南東より）
図版12　ＳＢ71、ＳＢ73、ＳＢ74、ＳＢ75、ＳＢ76、ＳＢ78遺物出土状況、ＳＢ79、ＳＢ80
図版13　ＳＢ81、ＳＢ82、ＳＢ83、ＳＢ85、ＳＵ01、ＳＵ02、南谷東部遺構検出状況（南西より）、ＳＢ01より砂行遺跡を望む
図版14　南青柳古墳遠景（南西より）、南青柳古墳遠景（東より）
図版15　南青柳古墳遠景（北西より）、南青柳古墳全景（真上上空から）
図版16　南青柳古墳造り出し部付近、南青柳古墳調査前（北東より）、南青柳古墳（北東より）、南青柳古墳（南西より）、南青柳古墳（北西より）
図版17　南青柳古墳主体部（北から）、南青柳古墳墳丘断ち割り状況（北側）、南青柳古墳主体部（西から）、主体部鉄剣・鉄刀出土状況、盗掘坑遺物出土状況
図版18　Ｐ01検出状況、Ｐ01半掘状況、Ｐ01完掘状況、Ｐ08完掘状況、南青柳古墳から南西を望む、ＳＤ01、ＳＫ01検出状況、ＳＫ01完掘状況、
図版19　ＳＤ01・ＳＫ01、ＳＫ22半掘状況、ＳＫ08検出状況、ＳＫ25検出状況、大平前遺跡全景（真上から）
図版20　大平前遺跡遠景（東から）、祭祀遺構（東から）
図版21　大平前遺跡調査前（東から）、大平前遺跡調査前（西から）、祭祀遺構（東から）、祭祀遺構（西南から）、巨岩前礫群（東から）、祭祀遺構（西北から）、巨岩前礫群（西から）、礫群除去後
図版22　住居跡出土土器（１）
図版23　住居跡出土土器（２）
図版24　住居跡出土土器（３）
図版25　住居跡出土土器（４）
図版26　住居跡出土土器（５）
図版27　住居跡出土土器（６）
図版28　住居跡出土土器（７）
図版29　住居跡出土土器（８）
図版30　住居跡出土土器（９）
図版31　住居跡出土土器（10）・ＳＵ出土土器（１）
図版32　ＳＵ出土土器（２）・ＳＤ出土土器・包含層出土土器（１）
図版33　包含層出土土器（２）
図版34　包含層出土土器（３）・住居跡出土土器（11）
図版35　住居跡出土土器（12）
図版36　住居跡出土土器（13）
図版37　住居跡出土土器（14）
図版38　住居跡出土土器（15）
図版39　ＳＵ・ＳＫ・南青柳古墳盛土内出土土器・住居跡出土鉄製品
図版40　南青柳古墳主体部出土鉄製品
図版41　南青柳古墳盗掘坑等出土鉄製品
図版42　南青柳古墳盗掘坑等出土鉄製品（裏面）
図版43　南青柳古墳墳丘上面・裾部周辺出土土器
包含層出土ガラス製品、包含層出土土器（４）
図版44　包含層出土土器（５）
図版45　包含層出土土器（６）・土製品
図版46　包含層出土鉄製品
図版47　南青柳遺跡出土石器（１）
図版48　南青柳遺跡出土石器（２）
図版49　南青柳遺跡出土石器（３）
図版50　大平前遺跡出土土器・石器
図版51　南青柳遺跡土器胎土中の粒子顕微鏡写真
図版52　南青柳遺跡出土炭化材（１）
図版53　南青柳遺跡出土炭化材（２）

第１章　調査の概要

第１節　調査に至る経緯

南青柳遺跡は関市下有知字南青柳・砂行に、大平前遺跡は同大平前・荘洞に所在する。昭和62年に、この両遺跡の所在地を含む関市下有知地区の丘陵部に関テクノハイランドの造成が計画された。造成予定地内（約745,000㎡）の周知の遺跡としては、西端の丘陵裾部付近に砂行古窯（砂行遺跡の東に隣接、注１）と滅失したとされていた砂行遺跡（砂行遺跡のＥ区）、東端部の水田域の端に檀ノ木洞遺跡（注２）の一部が含まれることが知られるのみで、予定地の大半を占める丘陵や丘陵裾部、また東部の水田域の大部分では、埋蔵文化財の存在は確認されていなかった。しかし、周辺には数多くの遺跡が存在することから（図４　周辺遺跡分布図参照）、予定地内には上記の遺跡以外にも古墳や古窯跡、集落跡などが存在することは、十分に予想された。そこで、関市教育委員会の助言を受けつつ、平成６年12月に（財）岐阜県文化財保護センターが造成地内の全域にわたって分布調査を実施した。その結果、遺跡が存在する可能性がある箇所として確認されたのは、合計62ヵ所にのぼった（図１）。このうち緑地帯として保存される区域に含まれる11ヵ所（１～４・13・29・46・47・56・59・60の各地点）を除く51カ所と檀ノ木洞遺跡の延長と考えられる東端部の水田部、そしてその後に追加された11地点（Ａ～Ｋの各地点）について、平成７～８年度に試掘確認調査を行うこととなった。

その結果、本稿で報告する南青柳遺跡・大平前遺跡のほか、砂行遺跡（30・31・36・37地点）・深橋前遺跡（Ｉ・Ｊ地点）・檀ノ木洞遺跡（水田部）の各遺跡の存在が確認されるに至った（図１）。

南青柳遺跡は、平成７年度に実施した49・50地点、８年度に実施したＡ地点の試掘確認調査によってその存在が確認された。49・50地点はいずれも尾根頂部で、分布調査では古墳が存在する可能性が指摘されていた。十字にトレンチを設定し、表土から人力で平面的に掘削し、遺構・遺物を確認する方法を採り、必要に応じてトレンチの増設を行った。Ａ地点は南に開放する谷で、谷の上部に古窯跡、谷の入り口付近に集落跡の存在を想定した。トレンチは谷の中央部に南北に設定した。谷部は流土が厚く堆積していることから、土色の変化や遺構、遺物の存在を慎重に確認しながら、重機で平面的に掘削した。

その結果49地点では、人工的な盛土を確認し、直径20ｍ前後の古墳（後の南青柳古墳）が存在することが判明した。50地点では、被熱痕跡を伴う方形のコーナーを持つ土坑（後のＳＫ01）の存在と古式土師器を包含する土層（後のＳＢ01の埋土）を確認した。Ａ地点では遺構の確認はできなかったが、古式土師器の良好な包含層が存在することを確認した。近くに遺構の存在が予想されたが、谷の東側斜面はきわめて急斜面であり、遺構が存在するとすれば西側から北側にかけての斜面であろうと推定した。

大平前遺跡は、平成８年度に実施した11・12地点の試掘確認調査によって遺跡であることが確認された。関テクノハイランドの造成予定地の東端に突き出た尾根頂上近くに巨岩が露出しており、古墳の可能性が考えられたことから、その前および背後にトレンチを設定した。その結果、巨岩前には人為的な敷石が存在することを確認でき、巨岩から東に向かって下る急斜面に設定したトレンチからは

8世紀代の須恵器坏蓋・坏身の小片が出土したため、古代の祭祀にかかわる遺構と判断した。

以上の試掘確認調査の結果に基づいてそれぞれ遺跡の範囲を決定した。その後、岐阜県教育委員会及び事業者との協議を経て、南青柳遺跡は平成10年度に、大平前遺跡は平成11年度に、(財) 岐阜県文化財保護センターが岐阜県からの委託を受け、発掘調査を実施することになった。

南青柳遺跡の調査は、平成10年4月28日から開始したが、当初の調査範囲は、尾根頂上部に遺構や遺物を検出した試掘確認調査結果を受けて、尾根頂上部を中心とする区域に設定されていた。調査の進展に伴い、調査範囲外の斜面中腹に住居跡を中心とする遺構が多く存在することが確実な状況となった。そのため、同年9月から10月の上旬にかけて遺跡の範囲確認調査を実施した。その結果、北谷、東谷、またあまりに急斜面のため遺構の存在は想定できなかった南谷の東側斜面にも遺跡の範囲が広がることが確認され、調査範囲を当初計画の3,300㎡から5,700㎡に拡大することになった。

文化財保護法第57条の6第1項の規定により、遺跡発見の届け出を行った結果、遺跡の名称は、遺跡の立地する字名から、それぞれ南青柳遺跡、大平前遺跡となった。「南青柳遺跡」は、『岐阜県遺跡地図』に載る周知の遺跡として、今回の調査範囲の南約150mにすでに存在する。関市がここにグランド（下有知グランド）を造成する際、削平された尾根の裾部から2軒の弥生時代末～古墳時代初頭の竪穴住居が発見されたことにより、南青柳遺跡と遺跡名が決定され、関市教育委員会によって緊急発掘調査が行われた（注3）。今回の調査地点は、同一の字名に含まれ遺跡の時代も共通することから、旧「南青柳遺跡」の範囲を拡大して、同名称を用いることになった。

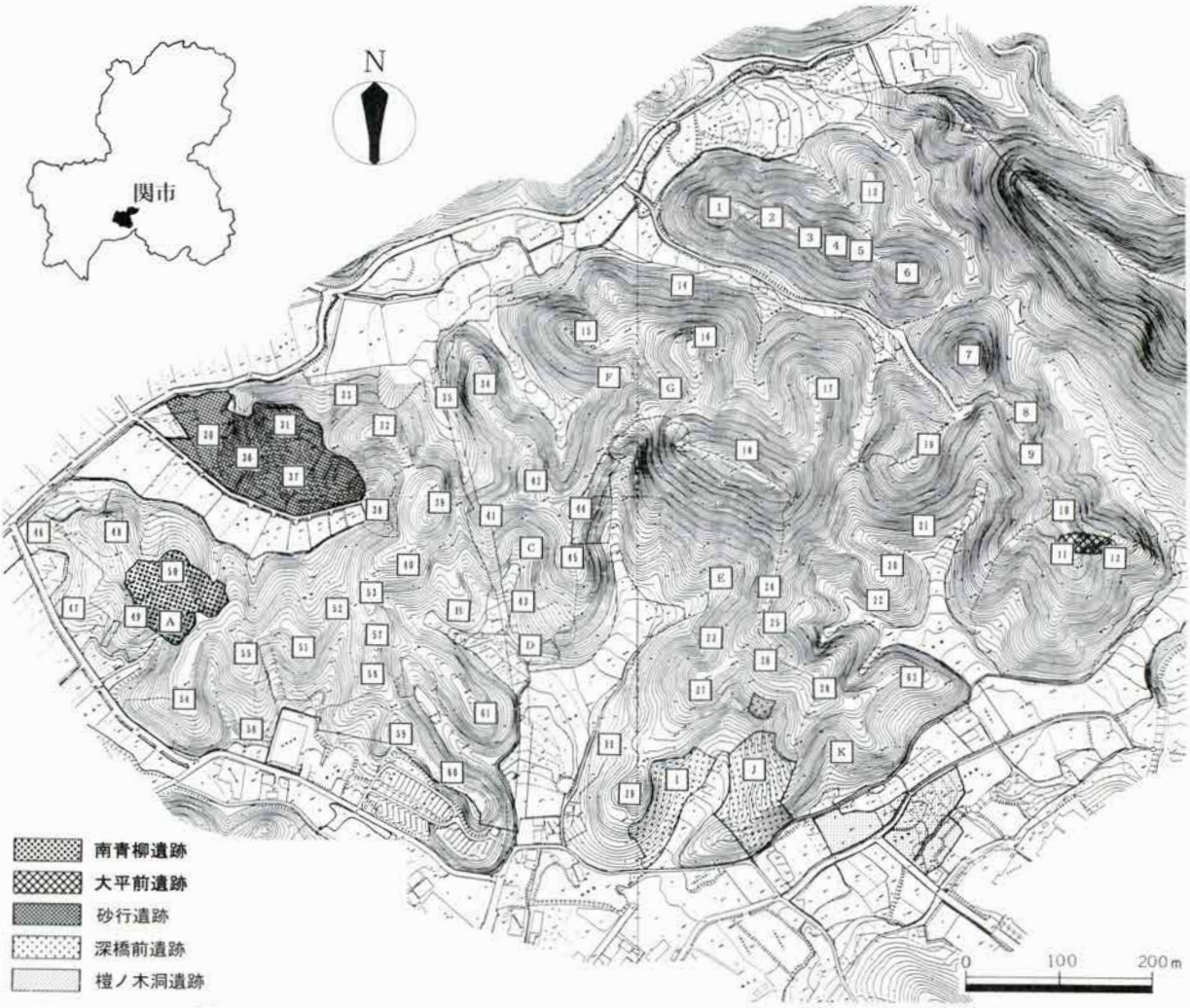


図1　関テクノハイランド造成予定地内試掘確認調査地点および遺跡位置図

第２節　発掘調査の経過と方法

1　南青柳遺跡発掘調査の経過と方法

⑴　調査期間

平成10年４月27日～平成11年３月23日

⑵　グリッド設定方法（図２）

平成９年１月に砂行遺跡とあわせて行った地形測量終了後、磁北を基準として５ｍ×５ｍのグリッドをやはり砂行遺跡と連動させる形で設定した。したがってグリッドの名称は、砂行遺跡が北から南に向かってＡ～Ｚ行、西から東に向かって１～53列という設定になっているのに対し、本遺跡は、北から南に向かっては、砂行遺跡に続いてアルファベットの小文字でｃ～ｚ行、それに続いてイ～ヘ行とし、西から東に向かっては、砂行遺跡の１列～24列に対応させている。

⑶　調査区域の区分設定（図３）

本遺跡は調査区域が起伏に富み、地形上のまとまりがあるのに加え、遺構の分布もこれに対応する形でまとまりがみられることから、調査を進めるに当たって、便宜上北尾根、南尾根、南谷、北谷、東谷の５区に区分し、原則的にこの区分ごとに調査を進めた。この調査時の区分の呼称は、本報告書の記述に当たって、当該遺構、遺物の検出区域を示すうえで有効との考えからそのまま採用した。

５つの区分けは主として地形・遺構の種類を考慮して行った。各区の立地及び区分けは以下の通り。

北尾根：本遺跡の北の尾根を中心とし、北谷・南谷・東谷の各谷に下る斜面の傾斜の変換点付近をもって境界とした。

南尾根：本遺跡の南の尾根頂上部の南青柳古墳を中心とする区域。北谷とは斜面の傾斜の変換点となるｑ行を基本に境界を設定し（ＳＢ38を含むｑ７グリッドは北谷に含めた）、南谷とは８列を境とした。

北　谷：本遺跡の北西部にある北に向かって開く谷。北尾根とは９列を境とし、南尾根との境界設定は、前述の通り。

南　谷：本遺跡の中央南寄りにある南に向かって開く谷。北尾根との境は斜面の傾斜の変換点を原則としたが、一つの遺構が２地区にまたがらないようにグリッドに基づいて設定したため、北尾根との境は凹凸が生じている。

東　谷：本遺跡の東部にある北に向かって開く谷。北尾根との境は斜面の傾斜の変換点、南谷との境は北尾根から南東方向に派生する尾根付近とし、遺構の分布状況を考慮して17列以東を東谷に区分した。

(4)　調査対象面積

5,700㎡

(5)　調査の経過（表１）

平成９年１月に、砂行遺跡とともに業者委託によって調査区の現況地形測量及びグリッド杭の設定を行った。

翌平成10年４月から表土掘削作業を開始した。表土の掘削は、原則として尾根上を人力で、各谷は

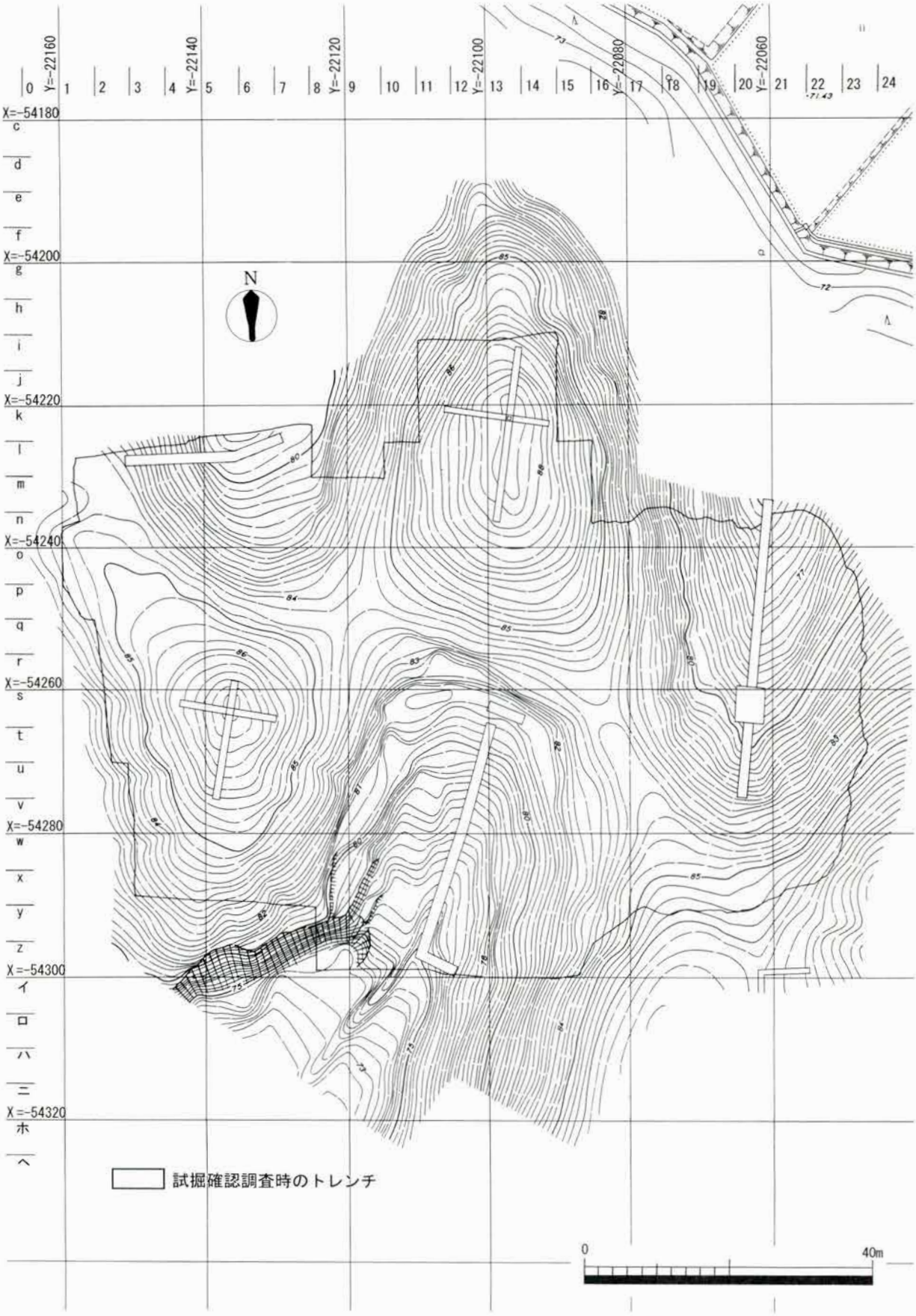


図2　南青柳遺跡調査前地形測量図及び航空測量図化範囲（1/800）

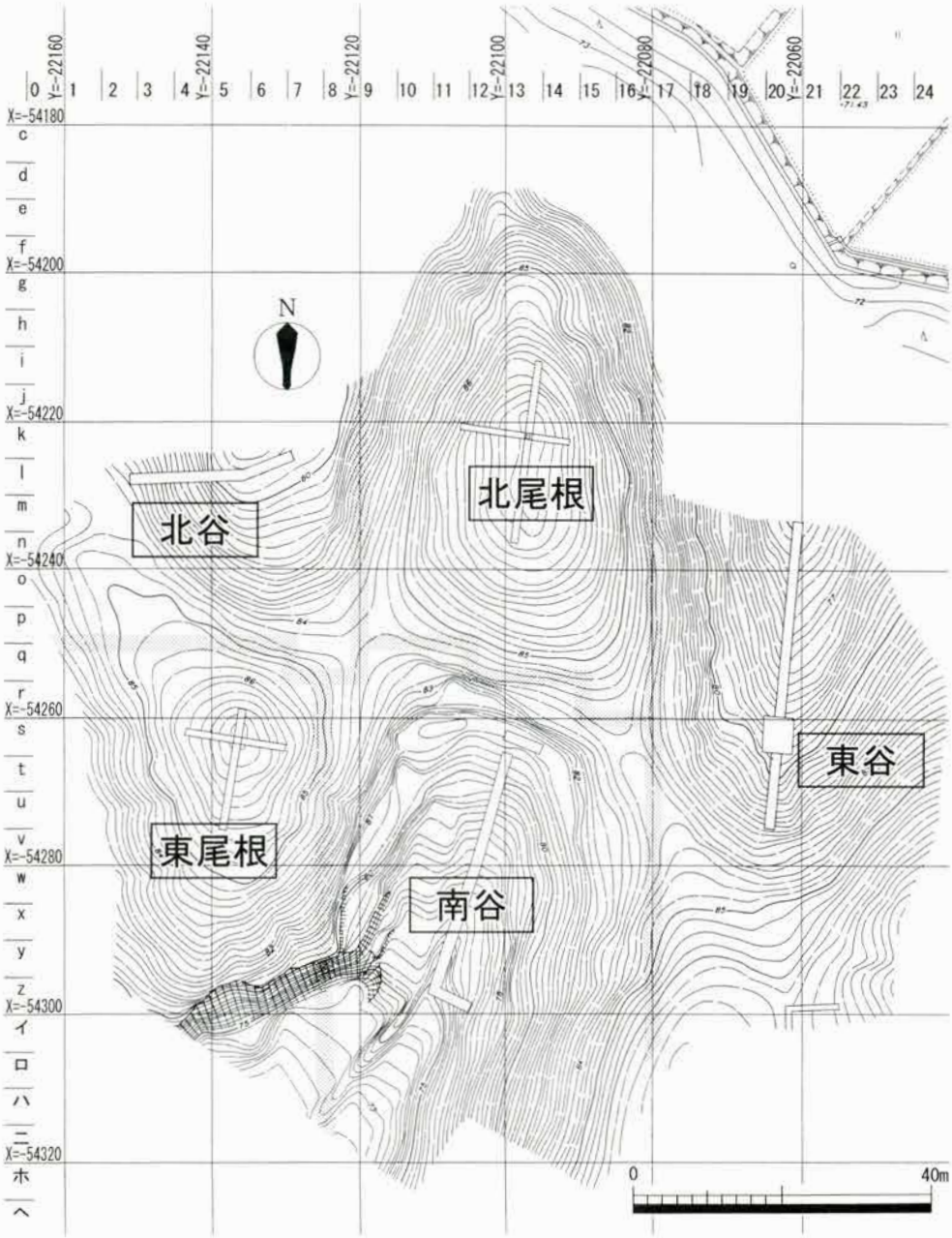


図３　南青柳遺跡調査区区割り図

重機を用いて行った。人力による表土掘削は全体の約60%と広く、包含層の掘削・遺構の検出作業と並行させた。主要な遺構の調査経過は、表１の通りである。

(6)　主要な遺構の調査経過と方法

①住居跡の調査の経過と方法

各谷部分では流土の堆積が厚かったため、その部分の表土の除去は重機を用いた。ただし、北谷の上部は孟宗竹が密に繁茂していたため、遺構保護の観点から人力で掘削した。困難を極める作業であった。尾根および尾根から谷へ下る傾斜の変換点までは、遺構面までの堆積が浅く、繁茂する樹木の根を丹念に切り、切り株を除去しつつ検出を進めなければならず、人力で掘削作業を行った。

グリッド境のアゼは、住居跡のプランが検出されるまで基本的に残し、住居跡にかかわるものにつ

表１　南青柳遺跡発掘調査経過表

調査内容＼月	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
包含層の掘削	―	―	―	―	―	―	―	―	―			
住居跡検出		―	―	―	―	―	―	―	―	―		
住居跡掘削				―	―	―	―	―	―	―	―	―
住居跡完掘状況の実測										―	―	―
南青柳古墳の墳丘面検出				―	―	―						
南青柳古墳の主体部調査							―	―				
古墳・住居跡の断ち割り調査											―	―
空中写真測量（計２回）											①	②

いては極力記録を残した。

住居跡の掘削は、主軸設定とともに四分割して四分法を原則とした。ただし、切り合い関係の明白な住居跡については、切り合いを立面で記録するため変則的な分割を行った。

住居跡内の土坑・小穴は、住居跡の主軸や並びを意識して半截し、断面の記録を残した。

遺構の実測は、全面を1/50の縮尺で空中写真測量を行い、加えてより詳細を期すため1/20の縮尺で平面図・断面図（立面図）を手測りで行った。

遺物の取り上げは、包含層の段階では層位（Ⅰ～Ⅳ層）とグリッド名の記録を原則とし、住居跡のプランが検出された後は、住居の埋土の層位（最上層を01層とし以下02層、03層･･･　と呼称）を記録した。床面に密着する状況で検出されたものについては、1/10の縮尺で出土状況図を残すよう努めた。また、掘削途中に良好な状態で検出されたものについても、出土状況図を残した。

炭化材が認められるものは、実測後サンプルを採取し、一部を科学分析（樹種鑑定）した。また、地床炉や焼失住居の床面に被熱痕跡が顕著なものについても、熱残留磁化測定を行った。

②南青柳古墳の調査の経過と方法

墳丘の表土の除去は、すべて人力で行った。主体部は試掘結果から石材を用いたものではないとの判断を当初から持ち、主体部掘り方の検出後、主軸及び土層観察用のアゼを設けて掘削を進めるという方法をとった。試掘時の十字トレンチが主体部の一部を破壊し、木棺痕跡の底近くまで及んでいたこともあって、アゼの設定は変則的なものとならざるを得ず、主体部の検出も、孟宗竹の切り株が密集していたこと、また主体部埋土の土色が盛土の土色と大差ないことも手伝って困難を極めた。掘削の途中で主体部西側の木棺痕跡と考えていたものは、実際は盗掘坑の掘り方であることが判明した。

墳丘と主体部の状況を立面的に観察するため、十字に断ち割りトレンチを岩盤が露出する深さに墳丘裾まで入れた。断ち割りトレンチの幅は50ｃｍとした。トレンチの設定に当たっては、墳丘の盛土を同一面で観察するために、主軸からはずれるが、試掘時の十字トレンチを掘り下げる形で設定した。墳丘内の他の遺構の有無を確認するため、古墳頂部を中心に４本のサブトレンチを入れ精査したが、第２主体部等の遺構は存在しなかった。遺構の実測は、墳丘平面を1/20の縮尺で空中写真測量を行っ

た。主休部は1/10の縮尺、墳丘断面は1/20の縮尺で手測りで行った。

なお、この古墳の造り出し部の両脇にあたる位置から、長軸70cm ほどの小穴をそれぞれ１基ずつ検出した。古墳の付属施設であり、祭祀に伴うものと想定し、慎重に調査を進めた。

③その他の遺構の調査

ＳＤの調査は、土層観察用のアゼを適宜設定して埋土を掘削した。ＳＫ、ピットの調査は、検出後主軸を設定し半截した。いずれも1/50の縮尺で空中写真測量を行ったが、詳細を期すため、断面図と平面図の実測を1/20の縮尺で手測りで行った。ＳＵは、出土状況を手測りで実測した。

⑺　遺跡・遺物の公開・広報

平成11年３月５日に、同じ関テクノハイランド造成地内で平行して調査を進めていた深橋前遺跡の現地説明会にあわせて、榿ノ木洞遺跡とともに現地公開を実施し、約100名の参加を得た。

同年７月10日に、シティプラザ美濃加茂で開催された「岐阜県新発見考古速報 1999－平成11年度岐阜県発掘調査報告会－」の配布資料に、南青柳遺跡の概要を報告した。また、平成12年２月16日～3月5日に開催した「発掘速報展－いにしえの美濃と飛騨－」においては、主要な遺物の展示と解説を行い、それに先だって岐阜新聞に連載された同展示会の紹介記事には、南青柳古墳の概要を報告した（同年２月21日付、朝刊）。

2　大平前遺跡発掘調査の経過と方法

⑴　調査期間

平成11年５月６日～平成11年７月７日

⑵　グリッド設定方法（図196）

平成11年４月、調査に先立ち地形測量を実施し、その後磁北を基準として５ｍ×５ｍのグリッドを設定した。グリッド名称は、北から南に向かってＡ～Ｆ行とし、西から東に向かってＩ～10列とした。

⑶　調査対象面積

600㎡

⑷　調査の経過と方法

平成11年４月に、業者委託によって調査区の現況地形測量及びグリッド杭の設定を行った。

同年５月から表土掘削作業を開始した。表土の掘削は全面を人力で行った。調査区東南部はチャートの岩盤が露出しており、シダや灌木の根が割れ目を覆っていたが、ここが祭祀の場として使用された可能性もあるとの判断から、それの除去に努めた。巨岩の前及び背後は祭祀の中心と考えられることから、遺構や遺物の検出を慎重に進めた。グリッド境のアゼは、調査の最終段階まで残し、記録を残した。前庭部の礫群は実測終了後、人為的なものかどうかを確認するためと下層の遺構や遺物の有無を確認するため、断ち割りトレンチを入れた後、全てを除去し岩盤まで掘削した。

遺構の実測は、全面を1/50の縮尺で空中写真測量を行ったが、前庭部の平面はより詳細を期すため1/20の縮尺で手測りで行い、空中写真測量図の校正に活用した。また、巨岩と前庭部の立面については、 1/20の縮尺で手測りで実測した。東南部の岩盤の実測は、空中写真測量で作成された粗図をもとに現場で調査員が校正した。ピット、土坑は、検出後に主軸を設定し半截した。いずれも1/50の縮尺で空中写真測量を行ったが、詳細を期すため断面図と平面図の実測を1/20の縮尺で手測りで行った。

調査の日程は、表土掘削と遺構の検出作業を４月末から６月中旬まで、前庭部の調査を５月下旬から６月下旬、遺構（ピット、土坑）の掘削を６月下旬、遺構の実測を６月中旬から７月上旬といった進捗状況であった。なお、空中写真測量は６月30日に実施した。

⑤　遺跡・遺物の公開・広報

平成12年７月８日に、大垣市スイトピアセンターで開催された「岐阜県新発見考古速報2000－平成12年度岐阜県発掘調査報告会－」の配布資料に、大平前遺跡の概要を報告した。

３　遺物・調査記録の整理作業

平成11・12年度の２カ年にわたって、出土遺物・調査記録の整理作業を行った。作業の基本的な流れは、以下の通りである。

遺物の洗浄→土器の硬化剤処理→遺物の注記→土器の接合→遺物の実測・観察表の作成
→遺構・遺物実測図の製図→遺物の写真撮影→図版作成→遺物・実測図の収納・保管

なお、本報告書の本文の執筆は上記の作業と並行し、金属製品の保存処理・科学分析は適宜行った。

４　発掘調査及び整理作業の体制

［（財）岐阜県文化財保護センター調査部］

調査部長　山元敏治（平成10～11年度）、高橋幸仁（平成12年度）
調査部次長　高橋幸仁（平成10～11年度）　武藤貞昭（平成12年度）
担当調査課長　片桐隆彦（平成10年度）、飯沼暢康（平成11～12年度）
担当調査員　岡田吉孝（平成10～12年度）、野村元次（平成10年度）
堀　正人（平成10年12月～11年３月）
発掘作業従事者　＜南青柳遺跡＞
石木徳江、石木冨士子、伊藤守、太田美代治、奥田美代子、片桐小夜子
川崎安幸、冠者栄作、熊澤喜三郎、神山春夫、後藤慶治、佐藤和江
佐藤鋼二郎、多田千恵子、塚原修二、中島公一、林重夫、樋口百合子
広田徳子、松岡喜美子、山田たつ子、吉田津多子　（以上平成10年度）
池田一男、五十川港、大澤賢夫、亀山富士子、輿道子、杉山仁、高井芳枝、
中島満澄、平田アヤ子、平田鐘次、横山六平
（以上平成10年12月～11年３月）
＜大平前遺跡＞
石木徳江、五十川港、高井譲、樋口百合子、吉田隆男
整理作業従事者　岩崎いつわ、春日井典子、木下晴代、澤田昌子、高橋紀美、棚橋絹代
樋口弘子、堀三恵

注（第１章のみ）
1　篠原英政 1996『砂行古窯』関市文化財調査報告第20号、関市教育委員会
2　丘陵部を昭和63年に関市教育委員会が調査。
3　篠原英政・吉田英敏　1980『南青柳遺跡』関市文化財調査報告第６号、関市教育委員会

第2章　南青柳遺跡・南青柳古墳の調査

第1節　遺跡周辺の立地

南青柳遺跡は、長良川を西に望む関市下有知字南青柳・砂行にある。郡上郡方面から続く山地は南へ向かうにつれ高度を減じ丘陵化してくるが、下有知地区はその南端付近に位置する。そして、この遺跡は丘陵の南向き斜面および尾根に挟まれた谷を中心に立地している。この辺りは、地質時代の第三紀の活動に伴う土地の隆起によってできた砂岩およびチャート質の岩盤と、古長良川が上流から運んだ砂礫の層からなる。遺跡周辺は、丘陵地の尾根と放射状に刻まれた谷からなっており、この谷に丘陵から流れ込んだ土砂と、古長良川が運んだ砂礫が堆積して谷底平野が形成されている。その結果、遺跡の下層にはチャートの砂礫が多く含まれている。遺跡の南方は丘陵を隔てて一面の水田地帯が展開しているが、条里割もかってみられたことから考えると、水田とするための土地条件は悪くなく、開発の歴史も古いところである。

古長良川はその後河床を低下させて現在の流路を形成したが、その河床の低下の過程は河岸段丘の姿に残されている。遺跡の西方数百mのところに河岸段丘の縁を示す段丘崖があり、国道156号線はその崖を昇降して通過している。なお、段丘面の崖に沿って南北に古い集落がみられるが、これは東に広がる水田地帯に比べるとやや高燥地を呈しているので、水田には向かないが排水は良いので集落が成立したといえる。因みに、集落の中にある農地は畑地となっている。

第2節　　周辺の遺跡

南青柳遺跡のある関市域は、古くから人間の営みのあったことが明らかにされている。旧石器時代の遺跡は12カ所が知られており、大きく次の4群に分けられる。長良川と津保川によって形成された段丘に立地する西部の竹之越・松原・中・赤土坂遺跡の一群、津保川による段丘に位置する東部の唐鋤・平井・野田遺跡の一群、長良川による段丘に位置する山王・向中野・松ケ洞遺跡の一群という北部3群と、関市域中心部の安桜山東麓に位置する日吉神社遺跡の一群である。

縄文時代の遺跡は29カ所確認されている。遺跡の立地は、旧石器時代の遺跡をほぼ踏襲する形をとっており、長良川流域の右岸および左岸に展開する河岸段丘および山麓斜面の遺跡群、長良川の支流の津保川の流域に形成された河岸段丘の遺跡群、関市中心部の山麓から北部谷底平野周辺の遺跡群という3地域に大別される。縄文時代早期に営まれた遺跡には、長良川下流の千疋地区右岸に位置する塚原遺跡、左岸小屋名地区にある松原遺跡、関市の東北部に当たる神野地区で津保川が蛇行して谷底平野を形成する周辺の山麓の神野遺跡などがあげられ、なかでも、押型文土器が出土した塚原遺跡は早期前半に位置するものとされる。前期の遺跡としては、前述の松原遺跡、前期前半の木島式や前期後半の北白川下層式、十三菩提式土器が出土した岩利ケ洞遺跡がある。中期の遺跡には、中央の広場を囲むようにして円形に配置された掘立柱建物と、その外側に竪穴住居が配置された塚原遺跡の遺構・遺物が代表的であり、後・晩期の遺跡には、出土した土器から後期に最も栄えたと考えられる松

原遺跡、下有知の向山の南斜面に位置する山王遺跡があげられる。

弥生時代を迎えると、河岸低湿地を多く有する関市域は水稲耕作を営むのに好都合な土地となった。いまだ水田の発掘例はないが、大杉遺跡からは石庖丁が出土しており、この地方における水稲耕作を裏付ける資料となっている。また、樫王式土器が出土した重竹遺跡Ａ地点と遠賀川系の甕の口縁部分が出土した松ケ洞遺跡、および南青柳遺跡（昭和54年、関市教育委員会調査）の３遺跡では住居跡が確認されている。

続く古墳時代には数多くの古墳が造られ、現在でも169基の古墳を確認することができる。単独で存在するものは29基、群集墳として存在するものは21カ所に140基である。これらの分布は、下有知・池尻・千疋・広見など市域の西部に集中するが、長良川右岸の千疋・池尻・広見地区は、半径３キロメートルの中に106基が存在し、関市全体の60％を超えている。中でも千疋地区にある前期古墳を有する陽徳寺裏山古墳群および後期古墳の塚原古墳群はこの地域の代表的古墳とされる。その他、関市域には集中的に方墳が分布するが、その背景には、古代を通じて武義郡の有力豪族であったムゲツ氏の存在がうかがわれる。この時代の集落跡には、３世紀後葉の住居跡が発見されＳ字状口縁台付甕が出土した重竹遺跡Ａ地点および松原遺跡があげられ、南青柳遺跡や砂行遺跡の東方500ｍに存在する榿ノ木洞遺跡では５世紀後葉の住居跡が発見されている。

その後、ムゲツ氏は在地豪族としての立場を高めていく。壬申の乱における身毛君広の功は、『続日本紀』に天武天皇から封80戸、功田８町を賜るとあるように、その範囲は当時の有知郷および跡部郷を含むと思われることから、南青柳遺跡付近の班田も含まれていたものと思われる。そして、白鳳時代にはムゲツー族の氏寺としての弥勒寺を造営するに至るのである。この時代の集落跡として、市域の西に広がる平地部の重竹遺跡（～室町）、榿ノ木洞遺跡などの集落遺跡が点在する。

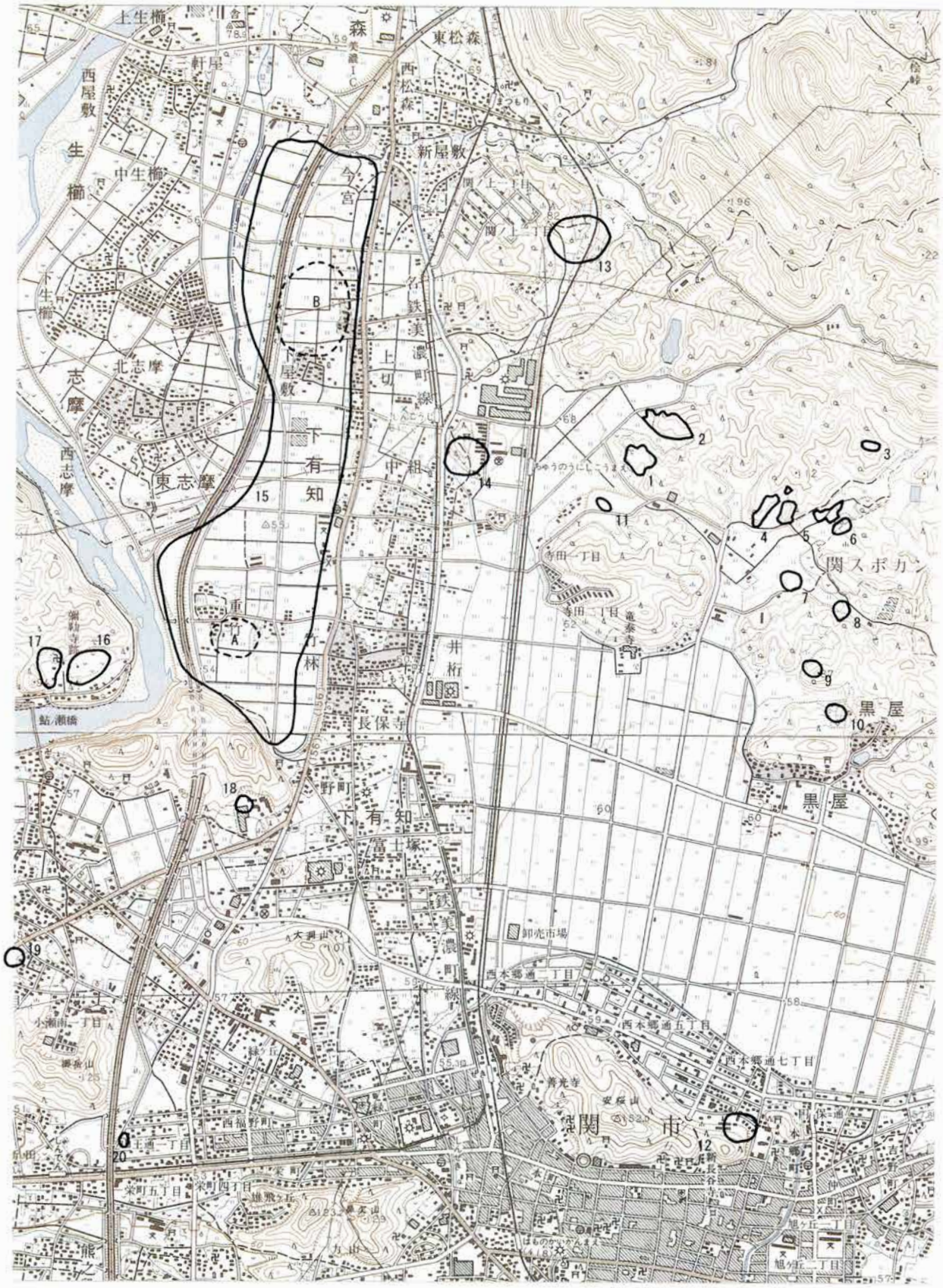
平安時代に入ってもムゲツ氏の支配は続き、郡衙推定地とされる弥勒寺東遺跡と長良川をはさんで対岸に位置する重竹遺跡Ｂ地点は、この時代においては県内でも有数の集落跡となっている。ムゲツ氏の本拠地がこの近辺にあったことが想定される。また、榿ノ木洞遺跡では丘陵の南斜面に立地する集落跡が発見されている。また、榿ノ木洞古窯が隣接する。その周辺には池之洞・田之洞・末洞などの古窯跡が分布する。さらに、『和名抄』の有知郷の存在や、下有知の神光寺（真言宗）の建立、『美濃国神明帳』の下有知大宮明神や、下有知御厨（伊勢神宮領）の設置など、この地方の繁栄を物語るものは枚挙に暇がない。

（以上成瀬正勝編 2000『砂行遺跡』［財］岐阜県文化財保護センター　第２章「遺跡の立地と環境」＜鈴木隆雄執筆＞より引用、一部改変）

第３節　基本層序と遺構・遺物の概要

第１項　基本層序

南青柳遺跡における層序は、試掘・確認調査の結果をもとに、基本的に以下のように区分して調査を進めた。大きく上層から下層の順番にⅠ～Ⅵの６層に分層したが、層序及び各層の特徴は基本的に隣接する砂行遺跡と一致する。以下、同遺跡の報告書（注３）の記述に依拠しながら、各層の解説を行う。



国土地理院発行　1:25000 地形図

1 南青柳遺跡　2 砂行遺跡　3 大平前遺跡　4 深橋前遺跡　5·6 榿ノ木洞遺跡　7 末洞遺跡
8 末洞古窯跡　9 田之洞古窯跡　10 池之洞古窯跡　11 南青柳遺跡（関市教委調査分）
12 日吉神社遺跡　13 向中野遺跡　14 松ヶ洞遺跡・松ヶ洞古墳群　15 重竹遺跡　16 弥勒寺東遺跡
17 弥勒寺跡・弥勒寺古墳　18 山王遺跡　19 御前塚古墳　20 小瀬方墳

図4　南青柳遺跡・大平前遺跡周辺遺跡分布図

Ⅰ層：調査前の地表を覆う表土で、森林に堆積する腐葉土を指す。

Ⅱ層：斜面部分では、尾根上部の砂岩基盤が風化・浸食によって斜面裾部に向かって流れ、堆積した砂質の流土層である。尾根上部にはほとんど存在せず、斜面の下部になるほど厚く堆積し、最大70ｃｍを測る。土色は、起源となる岩盤の色調によって異なり、明褐色または黄褐色を呈する。近世の遺物をわずかではあるが包含し、主として近世に形成された層と判断した。尾根上部における大規模な岩盤の風化・浸食は、近世以降の現象と推定される。

Ⅲ層：尾根頂部～斜面上部付近では、おそらくⅡ層形成期に浸食を受けたと考えられ堆積が認められない。Ⅱ層と同様斜面下部にいくほど堆積がみられる傾向にある。しかし、斜面裾部でも層の厚さは20～30ｃｍ以内にとどまり、ほぼ均一な厚さで堆積することから比較的安定した層といえる。土質はやや粘性のある砂質で、土色は褐色～暗褐色である。

斜面部分では、Ⅲ層の上面のみから白瓷系陶器など中世の遺物が出土することから、Ⅲ層上面は中世段階の地表面と判断した。Ⅲ層内には８世紀代の須恵器・５世紀代の須恵器・土師器・弥生土器が包含される。また古墳時代中期に造営されたと考えられる南青柳古墳の墳丘北裾部ではこのⅢ層が墳丘を覆って堆積し、そのまま北谷部のⅢ層に連続する状況が確認できることから、古墳時代中期以降中世に至るまで、緩やかに形成された層と判断した。

Ⅳ層：尾根頂部付近では、Ⅲ層と同様に浸食を受けて流出したものと考えられ、斜面裾部に厚く堆積する傾向にある。Ⅲ層より分布範囲は狭い。斜面裾部や谷部では、最大25ｃｍとやや厚く堆積している。土質は粘性があり、土色は極暗褐色または黒褐色を呈する。

Ⅳ層上面は、南青柳古墳の墳丘築造時の地表面であり、古墳時代中期段階以前に形成されたものと考えられる。Ⅳ層の上層内には弥生土器・土師器が包含されるが、下層内は縄文時代の土器・石器の包含に変化する。弥生時代末～古墳時代末の竪穴住居はⅣ層をやや掘り下げた段階で検出される。

Ⅴ層：尾根頂部や斜面には認められず、谷部、それも谷底にあたる箇所に堆積する。Ⅳ層の分布範囲よりさらに狭い。谷底では、現地表から約1.5m下が上面となる。土質はⅣ層よりさらに粘性が強く締まりがあり、土色は黒色である。

Ⅴ層内には、縄文時代の石器がわずかに包含されることから、縄文時代のある時期までに形成されたものと判断した。土器は、出土しておらず形成が開始された時期については不明である。

Ⅵ層：尾根頂部付近では砂岩の岩盤で、裾部では岩盤の風化・浸食によって堆積した粘質土である。前者は後者の下に必ず潜り込むように存在する。Ⅵ層以下には遺物包含や遺構面を検出できず、岩盤と粘質土を一括してⅥ層とした。粘質土は、起源となる砂岩の色調とによって様々に変化するが、基本的には黄褐色から明褐色の粘性が強く締まりのある層である。起源が同じであるためⅡ層の土色と共通するが、土質が大きく異なる。弥生時代・古墳時代の竪穴住居の床面は、Ⅵ層を掘り込んだ面をそのまま利用することが多い。

低地部では、水の影響を受けて還元し、土色が灰色又は青灰色に変化するが、斜面部分のⅥ層粘質土の連続である。試掘調査時の土層観察では、北谷や東谷の北端（調査区域外）谷底付近で表土より約２メートル掘り下げたあたりでこの灰色または青灰色の粘質土を確認した。この下にやはり、砂岩の岩盤が存在するものと考えられるが、確認できてはいない。

南青柳遺跡は丘陵に立地するため地形は複雑で、基本層序は南・北尾根部と谷部の斜面域では異なる。以下では、それぞれについて概説する。

(1) 北尾根の基本層序

尾根頂部付近では、Ⅰ層と薄く堆積したⅡ層の下にⅥ層岩盤が現れ、遺物包含層は存在しない。しかし、Ⅵ層岩盤を掘り込んだ竪穴住居等の遺構は、覆土がⅡ層に置換されてはいるが、検出は可能である。q行以北11列～17列の間の区域は、以上の層序が当てはまる。それより下の斜面から徐々にⅡ層の堆積が厚くなり、谷部への傾斜の変換点付近からⅢ層の薄い堆積が認められるようになる。

(2) 南尾根墓域の基本層序

Ⅰ層：腐葉土、Ⅱ層：墳丘盛土起源の流土、Ⅲ層：暗褐色土、Ⅵ層：黄褐色粘質土及び砂岩岩盤からなる。古墳築造当時は、隣接する砂行1号古墳の事例から考えて尾根頂上部にもⅣ層（暗褐色土～極暗褐色土）の堆積が見られたと考えられるが、本古墳の場合は、古墳築造の際の盛土や削り出しによって、Ⅳ層は失われたものと考えられる。墳丘北側裾部から下にはⅢ層の堆積が見られるが。墳丘北側裾部を除く古墳の周辺では、Ⅱ層の直下でⅥ層となり、本来堆積していたはずのⅢ層は流出、Ⅳ層以下の各層は、墳丘盛土に利用されたと考えられる。

(3) 谷部の基本層序

Ⅰ層：腐葉土、Ⅱ層：黄褐色～明褐色砂質流土、Ⅲ層：暗褐色砂質土、Ⅳ層：極暗褐色土または黒褐色粘質土、Ⅴ層：黒色粘質土、Ⅵ層：黄褐色～明褐色砂質粘質土及び砂岩基盤からなる。Ⅰ・Ⅱ層は全面に分布するが、Ⅲ層は斜面裾部と谷部、Ⅳ層は斜面裾部と谷部に分布する。Ⅴ層は谷底付近にのみ狭く分布する。斜面裾部や谷部では、Ⅰ層と極めて厚く堆積したⅡ層を除去すると、Ⅲ層がほぼ全面に表れ、Ⅲ層の掘削途中で多くの遺物が検出される。Ⅲ層を除去し、Ⅳ層を平面的に掘り下げる過程で、竪穴住居の掘り方プランが見え始める。竪穴住居の検出は、極暗褐色や黒褐色系の遺構面に微妙な差しかない同色系の土が入るため困難を極めたが、Ⅳ層上部で行った。各谷の住居は、Ⅳ層の直下にⅥ層が堆積する区域までに、ほとんどの住居が造られており、床面はⅥ層を掘り込んで形成している。谷の下部の谷底に近い区域に営まれているものの中には、Ⅳ層の下層を掘りこんで床面を形成しているものも見受けられるが、Ⅳ層を取り除きⅤ層まで掘り下げると、弥生時代の遺構は床面のみを残してなくなる。

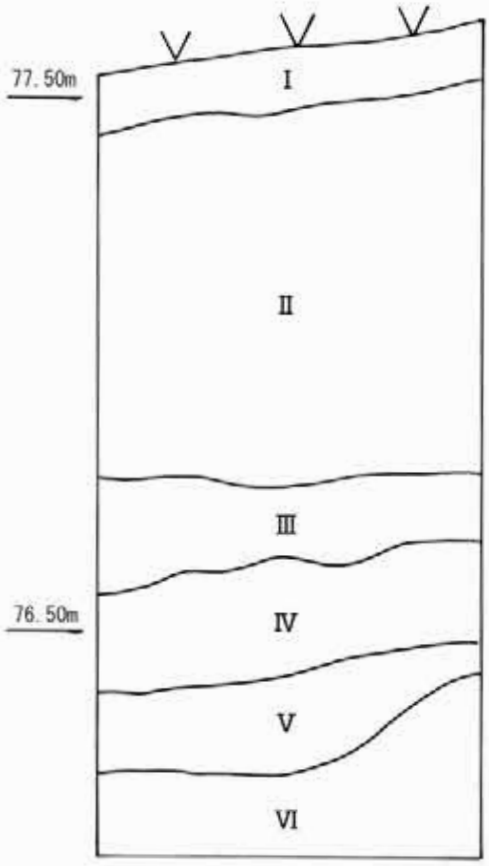


図5　南青柳遺跡基本層序（w12付近）

第２項　遺構・遺物の概要

１　南青柳遺跡の時期区分について

南青柳遺跡から検出された遺構と遺物は、縄文時代から近代までにわたっている。これらの遺構や遺物の年代観に基づいて、記述の便宜上、下記のように時期区分を行った。なお、時期区分の設定にあたっては、同一遺跡と考えられる砂行遺跡の発掘調査報告書の時期区分を原則的に採用したが、一部小時期区分を追加（Ⅱ－５期、Ⅵ－１期）した。

Ⅰ期は、弥生時代中期以前を一括した。この時期の明確な遺構は確認されなかったこと、遺物も少量で年代的なまとまりもないことから、小時期区分は行わなかった。

Ⅱ期は、弥生時代後期末から古墳時代前期初頭までとした。本遺跡の竪穴住居跡82軒はすべてこの時期のものである。また、南谷、北谷に多く検出されたピット・土坑の大半はこの時期に帰属するものである可能性がある。Ⅱ期は、遺構の切り合い関係とともに、出土土器の形態変化に基づいて細分した。ただし、Ⅱ期の第１小期に該当する遺構は本遺跡では検出されていない。細分に当たっては、近年周辺地域で確立されつつある古式土師器の編年観を参考にした。ただし、当遺跡出土の土器には在地色が見られることから、周辺地域の編年とは厳密には対応しない。

Ⅲ期は、古墳時代中期である。古墳１基（南青柳古墳）がⅢ－２期のものである。また、包含層

表２　南青柳遺跡・砂行遺跡時期区分

時期	小時期	時代区分・土器編年への対応	年代
Ⅰ期		弥生時代中期以前	
Ⅱ期		山中式後期から廻間１式	
	１期	高坏Ａ類を主体とする。山中式後半期から廻間Ⅰ式０段階の時期	２世紀後半～末
	２期	高坏Ａ類と高坏Ｂ類が共伴する。廻間Ⅰ式０段階の時期	２世紀末
	３期	高坏Ｂ類と高坏Ｃ類が共伴する。廻間Ⅰ式１段階の時期	３世紀初頭
	４期	高坏Ｃ類を主体とする。廻間Ⅰ式２～３段階の時期	３世紀前半
	５期	高坏Ｃ類を主体とするが、４期より新相。廻間Ⅰ式４段階の時期	３世紀中葉
Ⅲ期		古墳時代中期	
	１期	高坏Ｇ類を主体とする。松河戸Ⅱ式の時期	５世紀前半～中葉
	２期	高坏Ｈ類を主体とする。宇田式の時期	５世紀後半～末
Ⅳ期		古墳時代後期	
	１期	古墳時代後期前半～後半	６世紀～７世紀
	２期	古墳時代後期末～奈良時代前半、岩崎４１号窯期～岩崎２５号窯期	７世紀末～８世紀中葉
Ⅴ期		平安時代、白瓷黒笹９０号窯期後半単独	10世紀初頭前後
Ⅵ期		鎌倉時代以降、白瓷系陶器白土原以降	

※上記表中の年代は、研究者によって見解が異なる。目安として参照されたい。

（第Ⅲ層）から出土した宇田式の土師器や初期須恵器もこの時期のものである。なお、Ⅱ期とⅢ－２期との間には長期の空白期があるが、その時期の遺構・遺物は検出されていない。

Ⅳ期は、古墳時代後期から奈良時代前半までであるが、当遺跡では２期に細分した。Ⅳ－１期は、古墳時代後期後半までとし、これに帰属するものとしては、ＳＫ01およびＳＤ01が考えられる。Ⅵ－２期は古墳時代後期末から奈良時代前半までとした。遺構は検出できなかったが、北尾根南斜面で比較的集中して出土した須恵器はこの時期のものである。ただし、遺物数はごく少ない。

これ以後、当遺跡では、全くの空白期に入り、再び人の営みが確認できるようになるのは、鎌倉時代に入ってからであり、白瓷系陶器・中近世陶磁器がごくわずかに出土している。

なお、Ⅲ－２期からⅥ期は須恵器の、Ⅵ期は白瓷系陶器の年代観に基づいて、時期区分を行った。

各期の時期区分と他地域との併行関係は、表２の通りである。

２　遺構の概要（図６・７）

(1)　Ⅰ期

Ⅰ期、すなわち弥生時代中期以前の遺構は、検出されなかった。ただし、谷部のⅤ層を中心として遺跡のほぼ全域から縄文時代の石器が出土しており、縄文時代の遺構がかつては存在していたことを伺わせる。遺跡が急斜面に立地することから、恐らくそれらのほとんどは、流れてしまっているものと考えられる。Ⅰ期の土器は、縄文時代後期が１点、晩期～弥生時代初頭が１点出土しているのみである。

(2)　Ⅱ期の遺構

①竪穴住居跡

Ⅱ期は、当遺跡において最も活発な人の営みが確認できる時期である。廻間Ⅰ式期を中心とする時期の竪穴住居跡が尾根上から中腹の急斜面にわたって展開しており、合計82軒が検出された。太平洋戦争中や戦後に耕作のために削平された南尾根西側斜面にも、同様に住居域が広がっていたものと推測され、本来の住居軒数はさらに多かったものと考えられる。これらの住居跡は、尾根頂部の01号住居跡や尾根間の鞍部に立地する05・06・44号住居跡など、ごく一部を除いて大半が中腹の急斜面に立地している。また、谷の入り口に近い斜面には、住居が築かれず、奥の方に谷をとり囲むように扇形に集落が展開する傾向があり、選地のあり方に規則性を見て取れる。

以上のような立地であるため残存状態は良好とは言えない。尾根側の壁面と両隅、および左右の壁の一部がかろうじて残っているため、住居の検出が可能となったが、谷側の床面は著しく崩落しているものが多い。したがって、住居の規模や平面形を復元できないものが多いが、比較的残存状態の良好な事例から推定すると、竪穴住居跡の形態はⅡ期を通してほぼ一貫しているようで、床面の平面形は正方形または等高線に沿う方向に長い長方形であったと考えられる。また、尾根側からの斜面をくだる雨水の流れ込みを防いだり、または流土による住居の埋没を避けるために、住居の外部山側に、溝（以下「山側周溝」と仮称する）を掘削しているものも見られる（ＳＢ41・42・47）。

竪穴住居跡が最も密集している地点（ＳＢ16・28・35・46、ＳＢ59・60・63・65付近）では、最大３時期の切り合い関係が認められる。各住居跡出土の土器のうち一括性の高い土器群相互の比較からは、土器の形態変化も３つの段階（廻間Ⅰ式の２～４段階）が確認されることから、当遺跡には少な

くともⅡ－３～Ⅱ－５期の３時期の竪穴住居跡が存在すると判断した。３時期を通して、立地に変化はみられない。

竪穴住居跡の中には、焼失したものも含まれ、一括性の高い土器を検出し得た。

②ピット・土坑・溝

住居域の各所、とくに南谷と東谷に多く検出したピット・土坑は、検出面から考えてこの時期に属するものが多いと考えられる。Ｐ59、ＳＫ11・16・19・23を除いて、遺物が全く出土しておらず、時期の特定はできず、性格もほとんどについて不明である。ＳＫ11・19については、埋土の下層からⅡ期の土器や砥石が出土しており、この時期に帰属すると考えられる。性格については不明である。ＳＤとしたもののうち、ＳＤ01以外はすべてこの時期のもので、ＳＤ02・03・06は住居跡の山側周溝と考えられる。ＳＤ04・05もその可能性がある。

⑶ Ⅲ期の遺構

①南青柳古墳

南尾根頂部に立地する中期古墳である。南に造り出しを設ける造り出し付き円墳で、円丘部は２段築成である。葺石・埴輪は存在しない。

円丘部の中央に木棺直葬の主体部を検出したが、木棺の痕跡のみであり、主体部土坑掘り方は流出してしまった可能性が高い。西側が盗掘によって破壊されていたが、木棺痕跡の底面の両脇に添う位置から鉄剣、鉄刀がほぼ完形で出土し、盗掘坑の埋土からは短甲や馬具などの破片が出土した。また、墳丘面や墳丘裾部からは、破砕された須恵器の小片が散布・投棄された状態で出土した。これらの遺物からこの古墳は５世紀後半から末の築造と推定した。なお、この古墳の造り出し部の両脇のほぼ対称となる位置に、それぞれ１基ずつの小穴（西側－Ｐ01、東側－Ｐ08）を検出した。遺物は出土していないが、古墳に付属する施設で、造り出し部を中心とする墓前祭祀に関係する遺構と考えられる。

②その他

南谷の包含層（第Ⅲ層）の一カ所から集中して出土した宇田式を中心とする土師器、北尾根から南尾根に連続する鞍部から出土した初期須恵器は、南青柳古墳の遺物と併行する時期のものである。近隣に遺構は検出されなかったことから、古墳に関連する遺物である可能性が高いと思われる。

⑷ Ⅳ期の遺構

北尾根頂上部で検出したＳＫ01・ＳＤ01が、Ⅳ－１期の遺構と考えられる。いずれもＳＢ01に近接するが、それぞれ切り合うのを避けるように掘削されていることから、当初はⅡ期のものである可能性を考えたが、出土遺物や科学分析の結果から、この時期の遺構である可能性が高いと判断した。

また、北尾根から南谷に向かってくだる斜面の包含層から比較的まとまって出土した須恵器は、Ⅳ－２期のもので、遺構の確認はできなかったが、斜面上部に火葬墓等が存在した可能性がある。

⑸ Ⅵ期の遺構

当遺跡の最南部で検出したＳＫ25は、遺物が出土せず判然としないが、中世段階のものである可能性がある。包含層からは白瓷系陶器・中近世陶磁器がわずかに出土している。

炭焼き土坑と考えられるＳＫ04・06・08・24のうち、ＳＫ08は近世以前に遡る可能性があるが、他は近代以降のものと思われる。

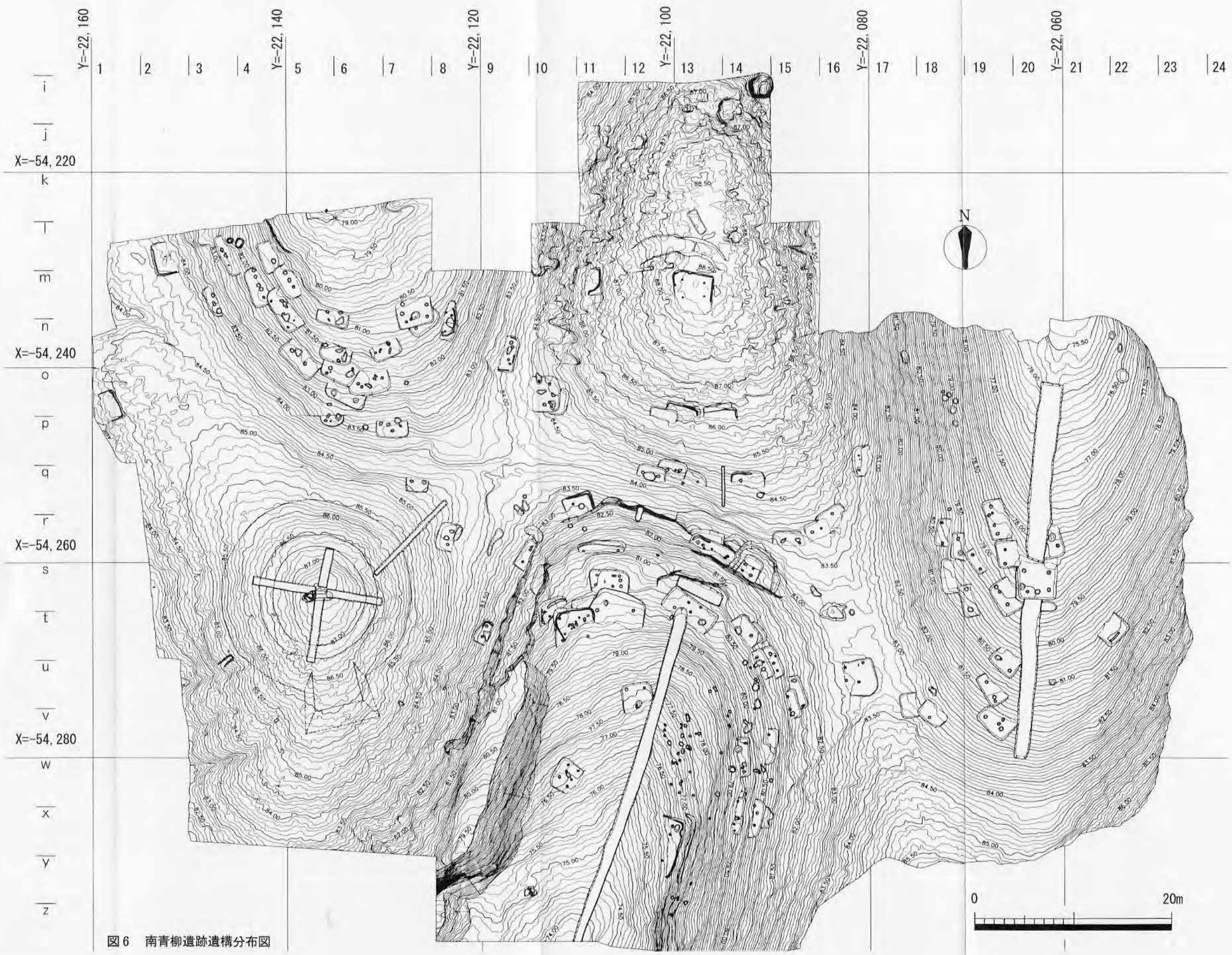


図6　南青柳遺跡遺構分布図

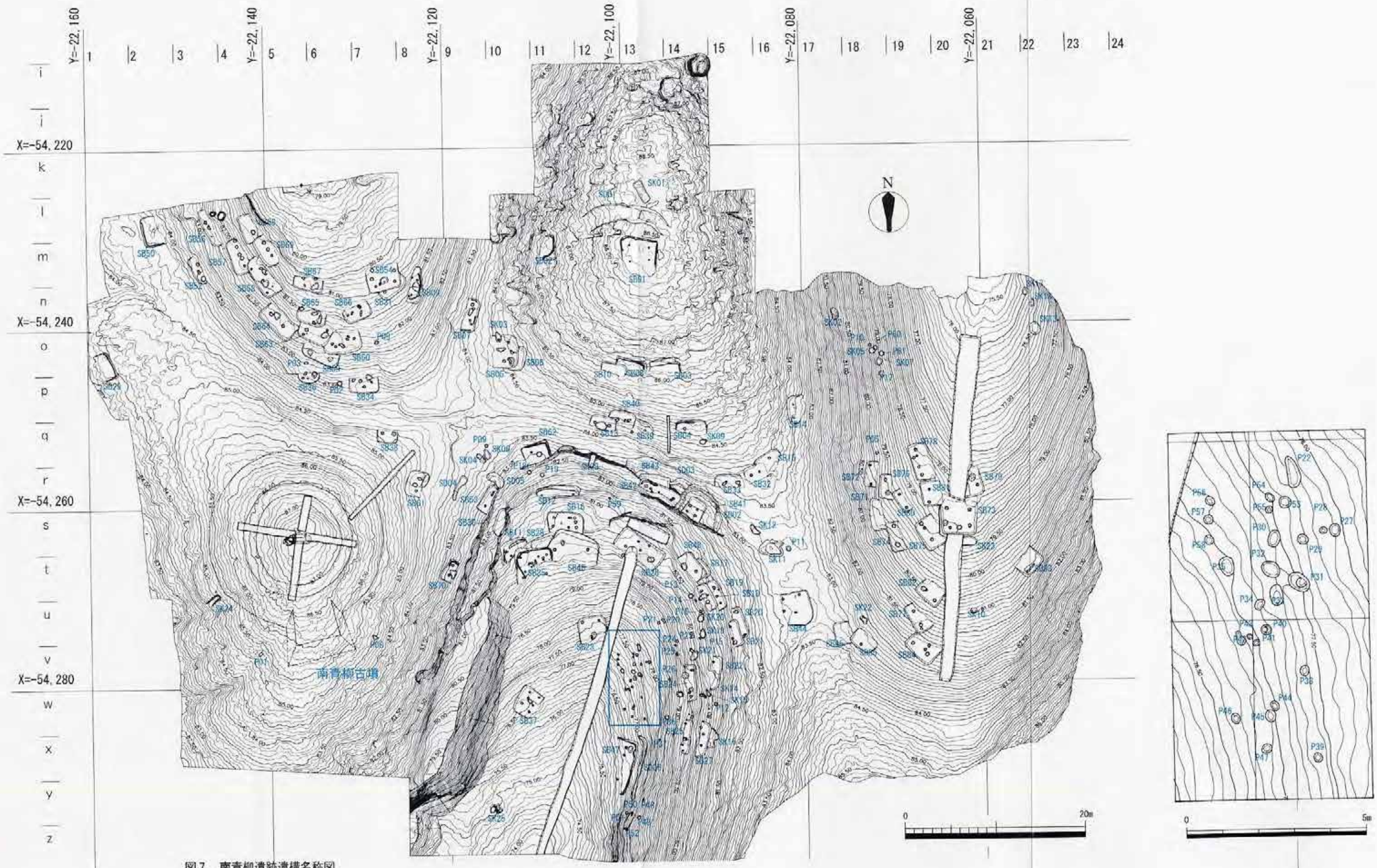


図7　南青柳遺跡遺構名称図

３　遺物の概要

(1) Ⅰ期の縄文土器・弥生土器

ＳＢ16内Ｐ４およびＳＢ58の埋土から、各１点のこの時期に帰属する土器片が出土している。住居跡に帰属する土器ではないので、包含層扱いとしたが、前者が縄文後期、後者が晩期～弥生時代初頭の土器片である。本稿では、遺物量が少ないため、特に細分は行わなかった。

(2) Ⅱ期・Ⅲ期の弥生土器・土師器（土器の縮尺は１／６）

この時期は、明確な遺構及び、それに伴う遺物が数多く確認されており、基本的に既存の研究（注４）に基づいて（赤塚次郎氏の研究成果［赤塚1990・1992・1994］による）、以下のように分類したが、分類に当たっては隣接する砂行遺跡の報告書の分類項目を基本的に踏襲した。したがって、当遺跡からは出土していない器種の分類項目も含まれるが、分類方針の大系を示す意味ですべてを示した。ただし、一部当遺跡出土資料にあわせて、細分項目を追加した。

①高坏

主として、坏部の形態からＡ～Ｉの９類に分類した。

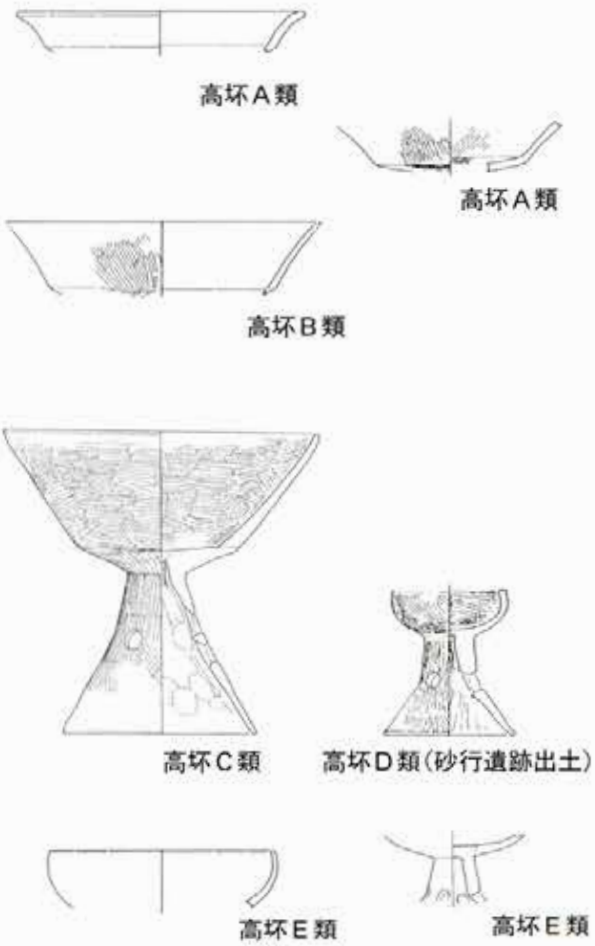
○高坏Ａ類：坏部に段をもち、坏部上段が外反するもの。（山中分類高杯Ａ２類）

○高坏Ｂ類：坏部に段をもち、口径と稜径の差が小さく坏部が比較的浅いもの。（廻間分類Ａ１類）

○高坏Ｃ類：坏部に段をもち、口径と稜径の差が大きく坏部が比較的深いもの。口縁部は内彎する。（廻間分類高坏Ａ２類）

○高坏Ｄ類：ワイングラス形高坏を一括する。
※南青柳遺跡ではＤ類と断定できる個体は出土していない。

○高坏Ｅ類：坏部が椀形の高坏（後述する宇田期のものを除く）を一括する。



○高坏Ｆ類：有稜高坏を一括する。

高坏Ｆ類

高坏Ｆ類

○高坏Ｇ類：屈折脚を基本的に伴う有段高坏。
（松河戸分類高坏Ｂ類）

高坏Ｂ類

○高坏Ｈ類：坏部が椀形で、屈折脚を伴うもの。
（松河戸分類高坏Ｄ類）

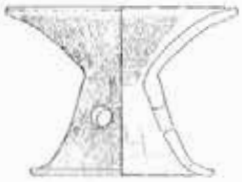
高坏Ｇ・Ｈ類脚部

○高坏Ｉ類：その他の高坏。

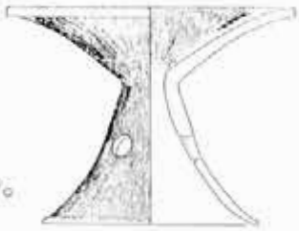
高坏Ｈ類

②器台

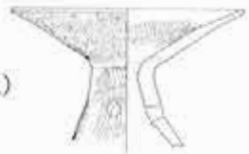
主として脚部の形態から、Ａ・Ｂの２類に分類し、Ｂ類を細分した。


器台Ａ類（砂行遺跡出土）

○器台Ａ類：脚基部が太く円柱状を呈し、裾部は大きく外反するもの。
（山中分類器台Ａ類）
※南青柳遺跡ではＡ類と断定できる個体は出土していない。


器台Ｂ１類（砂行遺跡出土）

○器台Ｂ類：脚基部は細く円錐状の脚部をもつもの。
Ｂ１類：脚端部が外反するもの。
（廻間分類器台Ｃ類）
※南青柳遺跡ではＢ１類と断定できる個体は出土していない。


器台Ｂ類

Ｂ２類：脚端部が内彎するもの。
（廻間分類器台Ａ類）

○器台Ｃ類：その他の器台。

器台Ｂ２類

器台Ｂ２類

③鉢

主として口縁部の形態から、Ａ～Ｄの４類に分類した。

○鉢Ａ類：口縁部が短く外傾し、段をもつもの。

鉢Ａ類

○鉢Ｂ類：口縁部が長く外傾し、端部にわずかに段をもつもの。

鉢Ｂ類　鉢Ｂ類

○鉢Ｃ類：口縁部が長く外傾し、緩やかに内彎するもの。

○鉢Ｄ類：その他の形態のものを一括する。

鉢Ｃ類　鉢Ｃ類

④甕

主として口縁部から頸部にかけての形態から、Ａ～Ｊの10類に分類し、Ａ類・Ｇ類を細分した。Ａ類は、既存の研究にはなかったが、隣接する砂行遺跡で良好な資料が出土し、同報告書で最も在地色の強い土器として位置づけられたものである。

甕Ａ１類

○甕Ａ１類：頸部が曲線的にくびれ、口縁は長く外反するもの。口縁端部は面を形成して刻み目状にクシ条痕を入れ、口縁内面には櫛状工具による列点文を巡らせる。器壁外面は全面に渡り細密な縦方向のクシ条痕調整、平底の底部外面には布目圧痕が認められるものを典型とする。

甕Ａ２類

○甕Ａ２類：形態は甕Ａ１類と同様であるが、調整（外面ナナメハケ・ナデなど）、文様（横線文・列点文などの施文）に変化のあるものを一括する。

甕Ａ２類

○甕Ｂ類：口縁部が短く外傾して段をもつもの。

甕Ｂ類

甕Ｂ類

○甕Ｃ類：口縁部は長く外傾し、端部にわずかに段をもつもの。底部は平底である。

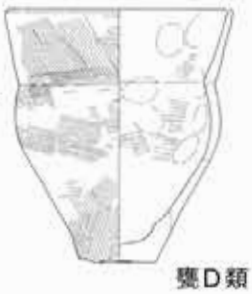
甕Ｃ類

○甕Ｄ類：長く外傾したくの字状の口縁部をもつもの。底部は平底である。

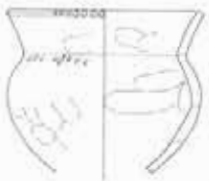
○甕Ｅ類：短く外傾したくの字状の口縁部をもち、端部に刻み目を施すもの。底部は台付きと推定される。

（山中分類甕Ａ類）

※南青柳遺跡ではＥ類と断定できる個体は出土していない。



甕Ｄ類



甕Ｄ類

○甕Ｆ類：Ｓ字状口縁台付甕を一括する。

甕Ｆ類

甕Ｆ類

○甕Ｇ１類：北陸系（月影式）の甕で口縁部内面に明瞭な段を持つもの。

甕Ｇ１類

○甕Ｇ２類：北陸系（月影式）の甕で口縁部内面に段を持たないもの。

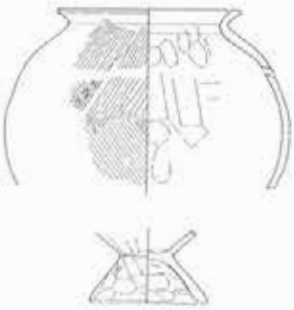
甕Ｇ２類

甕Ｇ２類

○甕Ｈ類：短く外傾するくの字状の口縁をもつもの。（砂行遺跡出土のⅢ期の甕資料）

※南青柳遺跡ではＨ類と断定できる個体は出土していない。

○甕Ｉ類：宇田型甕を一括する。



甕Ｉ類

○甕Ｊ類：その他の甕。

⑤壺

主として体部と口縁部の形態及び大きさからA～E類に分類し、A・B・C・D類は細分した。

○壺A類：パレススタイル壺を一括する。口縁部形態により、以下の3類に細分する。

A1類：口縁部は外反して、内面に平坦面をもたないもの。（山中分類壺A1類）

A2類：口縁内面に平坦面をもつもの。

A3類：口縁内面が内彎するもの。
※南青柳遺跡ではA3類と断定できる個体は出土していない。

○壺B類：壺A類の範疇に入らない大型の壺で3類に細分した。

B1類：口縁部が外反する広口壺。

B2類：口縁部が内彎する広口壺。
※南青柳遺跡ではB2類と断定できる個体は出土していない。

B3類：その他の広口壺を一括する。

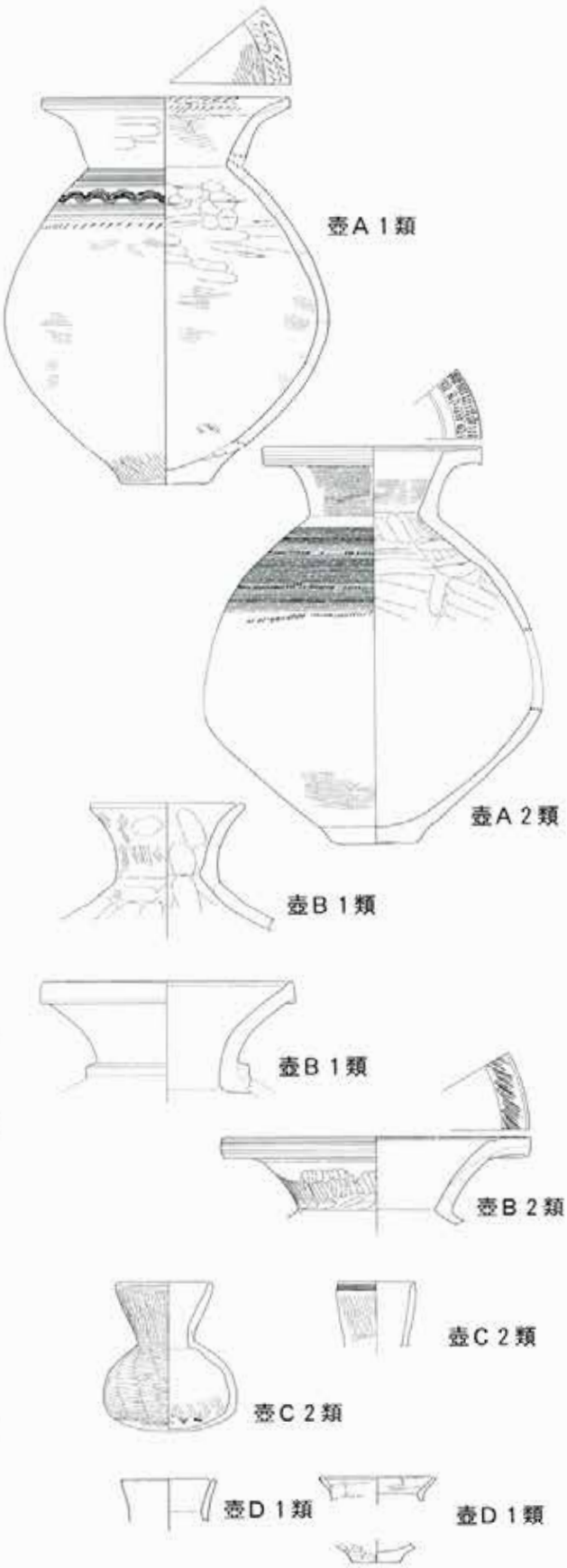
○壺C類：頸部が体部より長い中・小型の長頸壺で、以下の2類に細分した。

C1類：直口または外反する口縁部をもつ長頸壺。
※南青柳遺跡ではC1類と断定できる個体は出土していない。

C2類：内彎する口縁部をもつ長頸壺。

○壺D類：頸部が体部より短い中・小型の短頸壺で、以下の2類に細分した。

D1類：外反する口縁部をもつ短頸壺。



Ｄ２類：内彎する口縁部をもつ短頸壺。

壺Ｄ２類

壺Ｄ２類

○壺Ｅ類：小型丸底壺を一括する。

なお、以上の他にミニチュア土器があるが、上記の分類には含めない。

壺Ｅ類

壺Ｄ２類

⑶ Ⅲ期の須恵器

南青柳古墳の墳丘上面と墳丘裾部及び包含層（Ⅲ層）から検出された初期須恵器である。器種名は、既存の名称を用い、特に細分は行わない。有蓋高坏、無蓋高坏・坏蓋・坏身・広口壺・甕がある。

なお、本稿ではⅡ・Ⅲ期の弥生土器・土師器・須恵器は、口径や底部径が復元できる個体を基本的にすべて図化して掲載した。その個体数を器種別に、また遺構の種類ごとに以下に示す。

表３　Ⅱ・Ⅲ期実測土器一覧

器種／遺構	Ⅱ期の弥生土器・土師器						Ⅲ期		合計
	高坏	器台	鉢	甕	壺	その他	土師器	須恵器	
Ⅱ期竪穴住居跡	45	41	65	178	95	20	—	—	444
Ⅱ期の他の遺構	7	2	4	10	7	0	—	—	30
南青柳古墳	—	—	2	1	2	—	0	14	19
包含層	28	14	23	81	43	6	10	2	207
合計	80	57	94	270	147	26	10	16	700

※その他には、破片であるため器種分類の不可能なもの（高坏と器台の脚裾部片など）やミニチュア土器などの特殊な器種が含まれる。なお、鉢と甕のうち頸部から口縁部のみが残存する個体の器種分類は、形態、調整、大きさ等を総合的に検討して分類したが、特に鉢Ｂ類と甕Ｃ類、鉢Ｃ類と甕Ｄ類の区別は難しく、決定的なものではないことをお断りしておく。

⑷ Ⅳ期の須恵器

遺構に伴うものはなく、包含層から若干出土している。８世紀代のもので、砂行遺跡や深橋前遺跡（注５）の出土例から考えて、破壊された火葬墓に伴う可能性がある。これも、器種は既存の名称を用い細分は行わない。坏蓋・台付長頸壺がある。

⑸ Ⅵ期の白瓷系陶器と施釉陶磁器

いずれも包含層から出土している。遺物量はごく少なく器種名は既存のものに従い細分もしない。

⑹ 金属製品

Ⅱ期では、ＳＢ35から鉄製主頭斧箭鏃が完形で、ＳＢ69から鉄製鉈の刃部から柄部にかけての破片が出土している。包含層の第Ⅳ層から出土した鉄製曲刃鎌もこの時期に帰属するものと思われる。Ⅲ期では、南青柳古墳の主体部から鉄剣、鉄刀（いずれも完形）や不明鉄製品が出土し、主体部盗掘坑

からは鋲留短甲、心葉形杏葉などの破片が出土した。包含層の第Ⅲ層の下層から出土した釘1点もこの時期に帰属する可能性がある。上記の他、時期は特定できないが、包含層第Ⅱ層の下層から鉄製曲刃鎌1点、釘1点が出土している。

(7) 石器類

南青柳遺跡からは合計371点の石器類が出土したが、製品はごく少なく、実測可能なものはつとめて実測したが、合計54点にとどまる。出土した石器には、削器・石核・石鏃・石匙、打製石斧・打欠石錘・敲石・磨石・石皿・台石・砥石・不明石製品・剥片類がある。時期は、旧石器に属するもの5点、弥生時代に属する可能性のあるもの7点、他は縄文時代のものである可能性が高い。

実測した石器のうち、遺構内出土のものは27点と半数に上るが、弥生時代に属する可能性のあるもの以外の多くは、おおむね出土層位も上層からのものが多い。遺構のほとんどが急斜面に立地することから、斜面上部からの流れ込みと考えられる。

(8) 遺物の出土状況（※土器は計18,324点出土。ただし接合後の点数である。）

図8・9に種別ごとのグリッド別の出土点数を示した。Ⅱ期の弥生土器・土師器は、竪穴住居跡の分布域に、Ⅲ期の須恵器は南青柳古墳が存在する南尾根とその周辺に集中して分布する。Ⅲ期の土師器は、南谷の特定のグリッドのみから出土している点が注目される。Ⅳ期の須恵器は、北尾根から南谷上部および東谷に集中する。中世の遺物は数が少ないが分布の偏りは見られない。石器は、一見Ⅱ期の土器の分布と重なるようだが、実際は谷部からの出土が多い。特に北谷からの出土が目立つ。

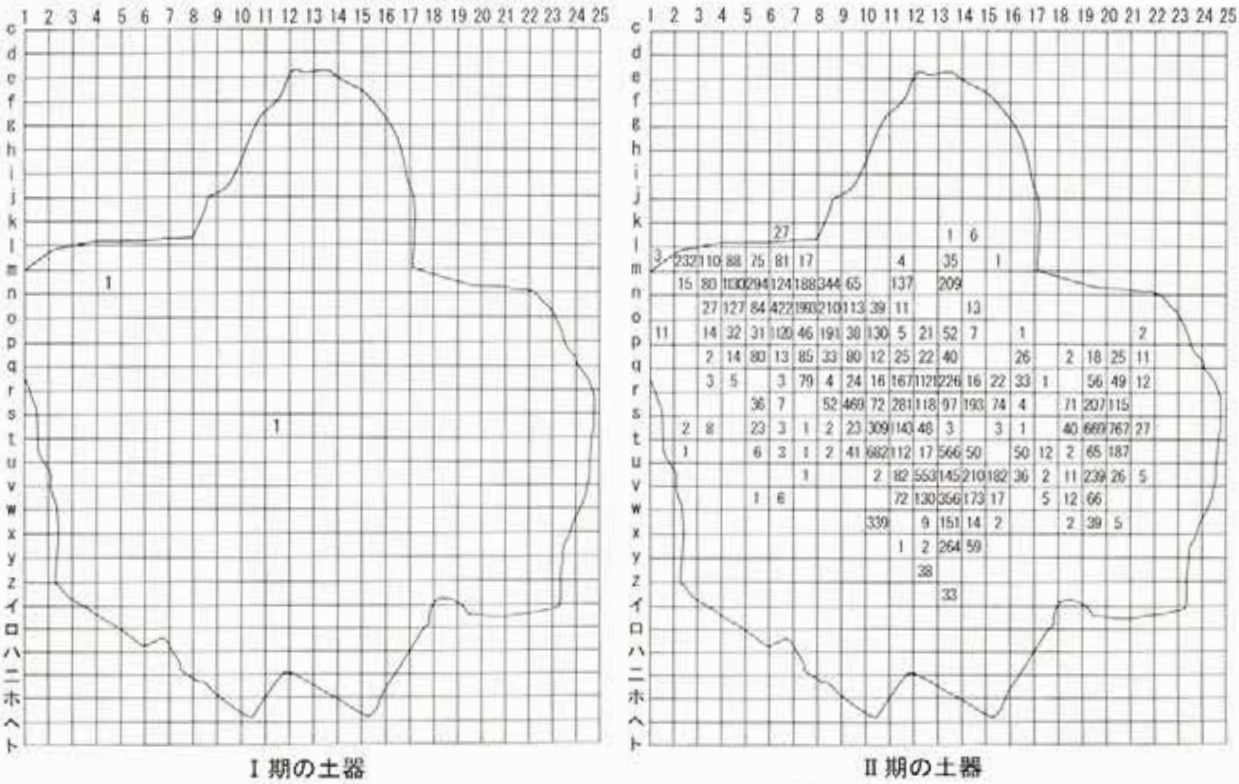
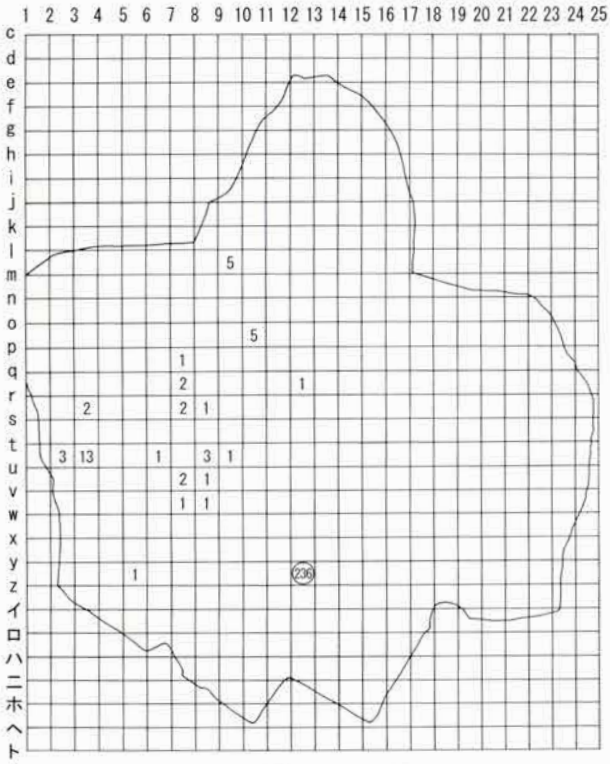
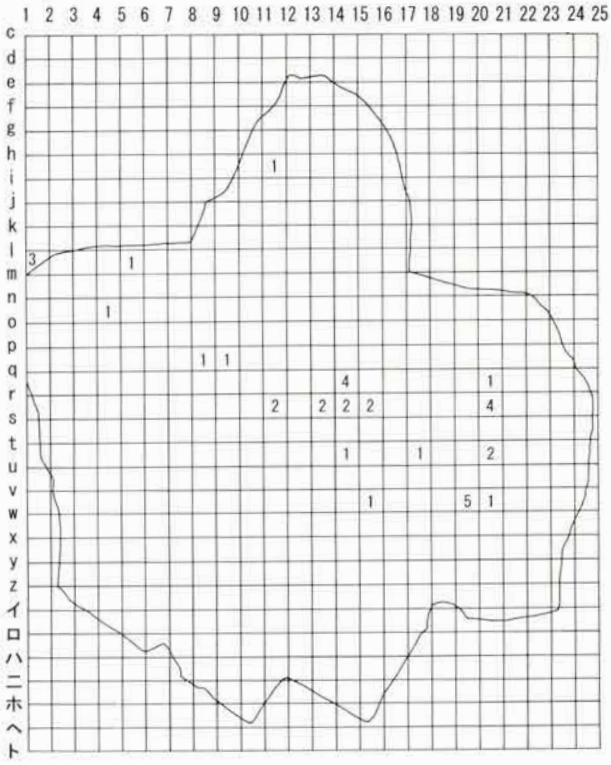


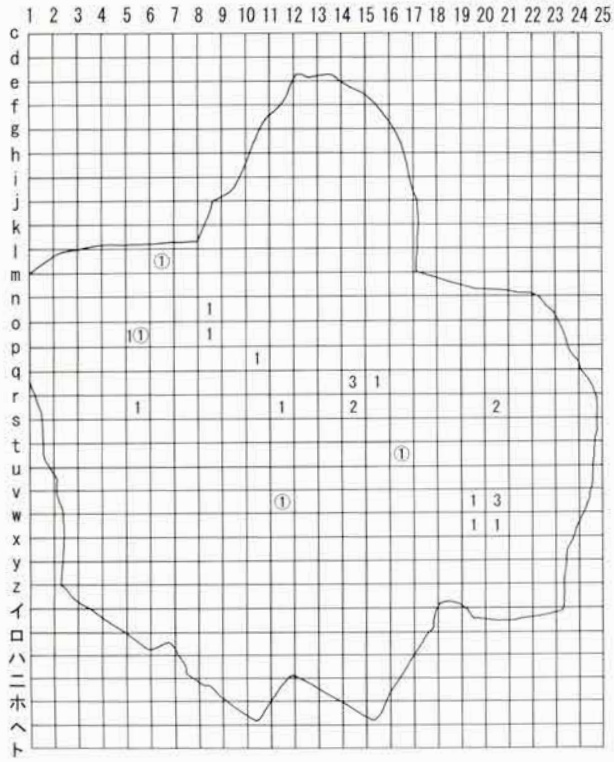
図8　南青柳遺跡時期別遺物出土点数分布図（1）



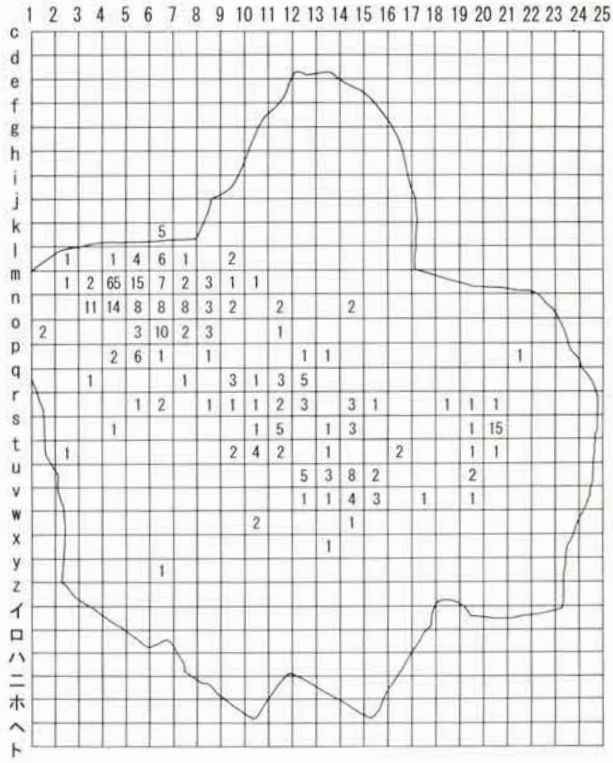
Ⅲ期の土器（○印土師器）



Ⅳ期の土器



Ⅵ期の土器（○印中近世陶磁器）



石器

図９　南青柳遺跡時期別遺物出土点数分布図（２）

第４節　遺構と遺物

第１項　弥生時代～古墳時代の遺構と遺物

本節では、当遺跡で発見された弥生時代末から古墳時代初頭にかけての竪穴住居跡を中心とする遺構について記述する。

竪穴住居跡は82軒で、現地調査で用いた遺構略号をここでも用いる。竪穴住居跡の検出作業は「北尾根」、「南尾根」、「南谷」、「北谷」、「東谷」と進め、略号は、おおむね検出した順に１番から付した（例えば、１号住居跡の略号は、「ＳＢ01」とした）。したがって、住居跡番号はおおよそ地区ごとにまとまっている。ただ、残存状況のよくない住居跡が多いうえに、住居跡の埋土と住居跡掘り方の土色の区別が微妙であるものが多く、当初住居跡と判断して調査を進めながら、結局は誤認であったケースもあった。欠番はできる限り無くすよう、欠番が生じた場合、その後に発見された住居跡にその番号を与えるようにつとめたが、最終的には、ＳＢ49、51、55は欠番となった。

以下、住居跡番号順に、竪穴住居跡の解説を進める。記述に当たっては、北に隣接する砂行遺跡の報告書で用いられた以下の用語を用いる。同一遺跡であるとの判断にもとづき、用語の統一性を図るためである。各用語の解説はすべて同報告書の記述を原則的に引用した。

○「傾斜度」：遺構そのものの傾斜ではなく、立地する周辺地形の傾斜を百分比で示す。
○「隅角」：方形の竪穴住居跡の４つの隅を指す。南青柳遺跡では、丸くおさめるものと、角張らせるものとが認められる。
○「壁溝」：住居跡内床部の壁際に認められる溝。
○「谷側」・「山側」：遺構からみて、立地する斜面の下側・上側を指す。
○住居跡の「幅」・「奥行き」：谷側から見た住居の左右の長さを、住居跡の「幅」とする。それに直行する長さを住居跡の「奥行き」とする。なお、測点は、掘り方の上端部ではなく、床面で行った。壁溝が存在する場合は壁溝も含めた。
○「山側周溝」：住居外で、山側のみを巡る溝。
○「地床炉」・「支柱石」：住居床面の中央近くに確認される炉跡で、被熱した浅い土坑と、土坑の片隅に寄った位置に「支柱石」を１石設けたものを基本とする。
○「排水溝」：住居の床面に、壁溝とは別に掘削された溝。当遺跡での明確な確認例はないが、砂行遺跡の事例では幅や深さは壁溝と同様であるが、規則性がなく、住居内の排水を意図したものと考えられる。しかし、多くの場合、住居内で完結して住居外まで連続しない。

ＳＢ０１

遺構（図11、図版２）

m13グリッドにあり、南に向かってわずかに傾斜（傾斜度６％）するものの、ほぼ平坦な北尾根頂上部に立地する。ＳＤ01、ＳＫ01が北側に隣接するが、切り合い関係はなく、それぞれの遺構が単独で存在する。

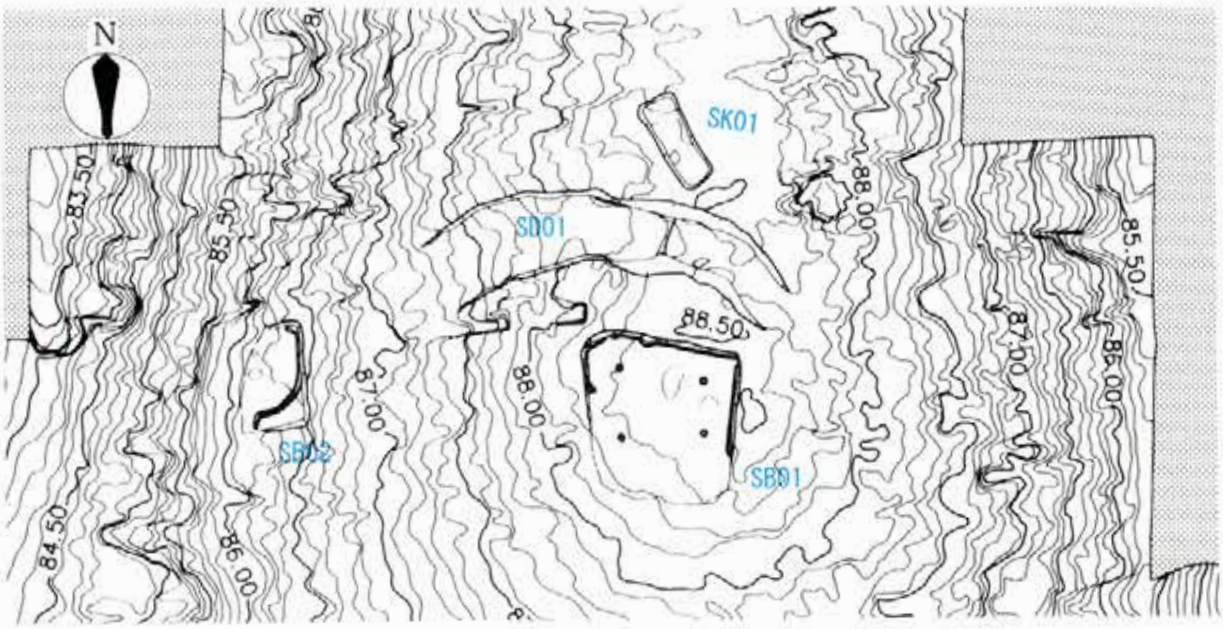


図10　ＳＢ01･02　周辺地形図（1/200）

隅角は北東隅角・北西隅角が残存し、西はややいびつながらも丸くおさめられ、東は角張っている。幅4.24m、残存部の奥行き4.6mを測り、いびつなものの正方形に近い平面形であったと考えられる。全面砂岩の岩盤を掘り抜いて形成されている。頂上部の岩盤は風化による剥離、崩落が著しく、壁面は山側で最大26cm の深さを確認できるものの、遺存状況はよくない。住居内の埋没は、壁際から進行しており、自然埋没と判断される。

壁溝は山側壁面に沿って途中途切れながらも残存部を全周しているが、谷側まで巡っていたかは不明である。

主柱穴は４基を確認した。Ｐ１は深さ45cm、Ｐ３は深さ35cm と岩盤を深く掘り抜いているが、Ｐ３・Ｐ４は浅く不明瞭である。

地床炉は、それに該当すると考えられる土坑は見当たらないが、中央山側寄りおよび東寄りに被熱痕跡が認められ、ここでは炭化材も検出した。その規模や位置から考えると、前者が地床炉であった可能性がより高いと考えられる。地床炉に伴う浅い土坑の床面のみが、かろうじて残存したものと考えることができるが、支柱石は認められなかった。

ＳＢ01で特筆すべきは、この住居が海抜88.31mという当遺跡の最高所に立地し、ここからは、きわめて眺望に優れている点である。すなわち、この住居からは、当遺跡の全ての竪穴住居跡を見渡すことができ、それのみにとどまらず、北に隣接する砂行遺跡を一望でき、さらに、南西方向には、弥勒寺の対岸にそびえる山王山（向山）をはじめとして、関市下有知の平野部および関市南西部の長良川両岸に展開する丘陵部を見通すことができるのである。この住居に近接する住居が無く、頂上部に単独で存在していること、住居の規模が比較的大きい部類に入ることなどを総合すると、そこにこの住居の特殊な性格を読み取ることも可能かと思われるが、後述のように出土遺物にはきわだった特徴は認められない。

なお、この住居跡と北側に隣接するＳＤ01、ＳＫ01は、各遺構がそれぞれを避け合うかのように存

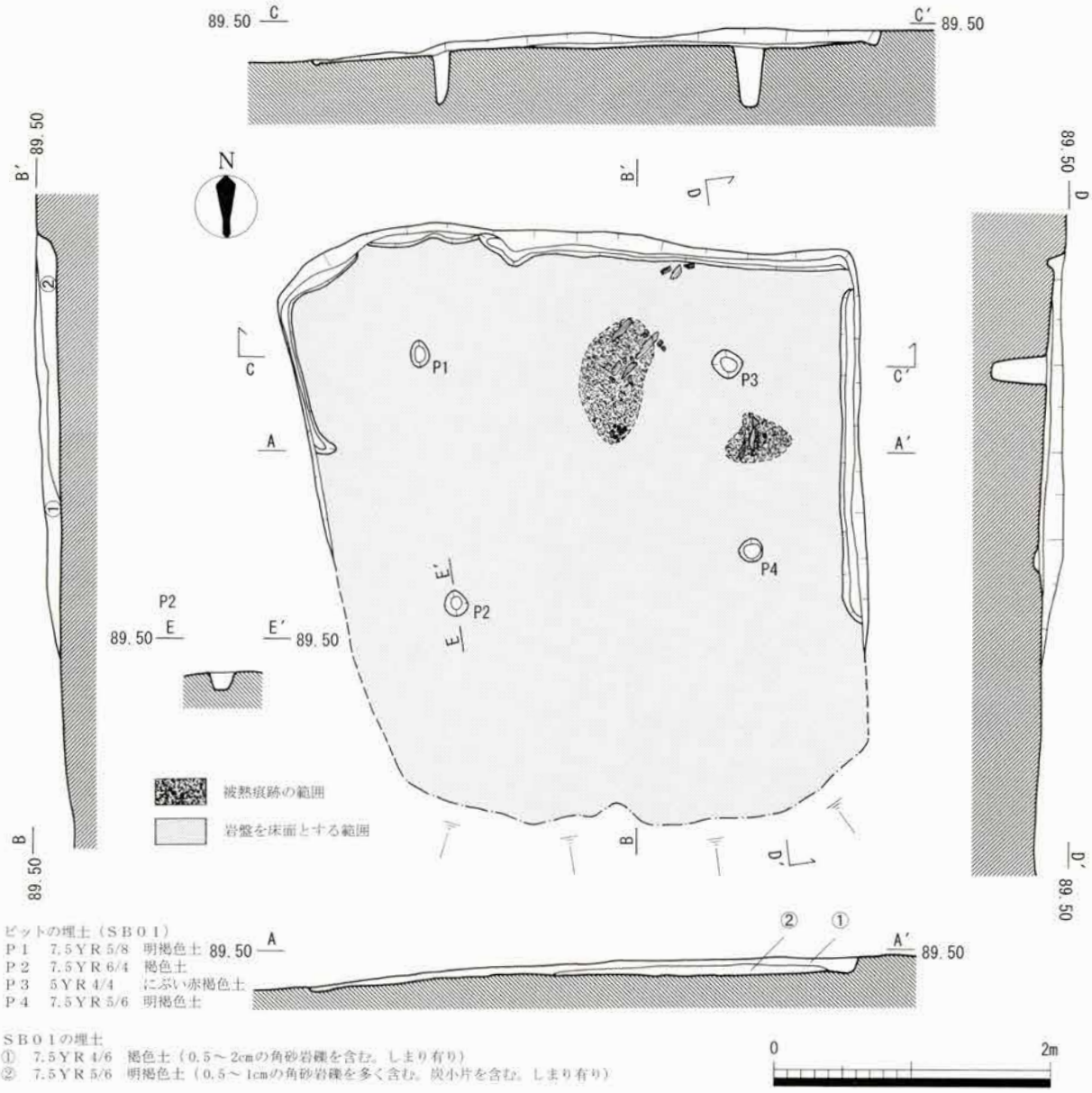


図11　ＳＢ01 実測図

在していることから、当初は同時期の、関係性の強い遺構である可能性を想定した。しかし、その後の調査の結果からは、むしろその可能性は低いことをうかがわせる材料が多い。ＳＤ01、ＳＫ01については、「第３項　その他の遺構」で解説する。

遺物（図132、図版34）

土器は209点が出土したが、図化できたのは４点である。１は器台受け部、２は壷Ｂ類体部で、大型品と考えられる。３・４は壷底部だが、出土状況、胎土の状況から３はおそらく２に接続するものと思われる。当住居が尾根頂上部に単独で存在する住居であることから、他からの混入は考えられず、出土遺物はすべて当住居に帰属するものと言える。

ＳＢ０２

遺構（図12、図版２）

m11グリッドにあり、北尾根から西に向かって下る急な傾斜（傾斜度27.8%）地に単独で立地する（周辺地形図は、図10）。隅角は北東・南西隅角が残存し、いずれも丸くおさめられている。幅3.26m、残存部の奥行き1.8mを測る。平面形は、正方形であったか長方形であったかは判断できない。山側の壁面及び床面は砂岩の岩盤を掘り抜いて形成されている。頂上部と同様、この辺りの岩盤は風化による剥離、崩落が著しく、壁面は山側で最大32cm の深さを確認できるものの、遺存状況はよくない。住居内の埋没は、壁際から進行しており、自然埋没と判断される。壁溝は北東隅角付近から山側壁面に沿って巡るが、途中から住居内部へとやや幅を広げながら掘削方向を変えている。途中から排水溝に変換している可能性が高いと考えられるが、住居内で完結し、住居外までは連続していない。

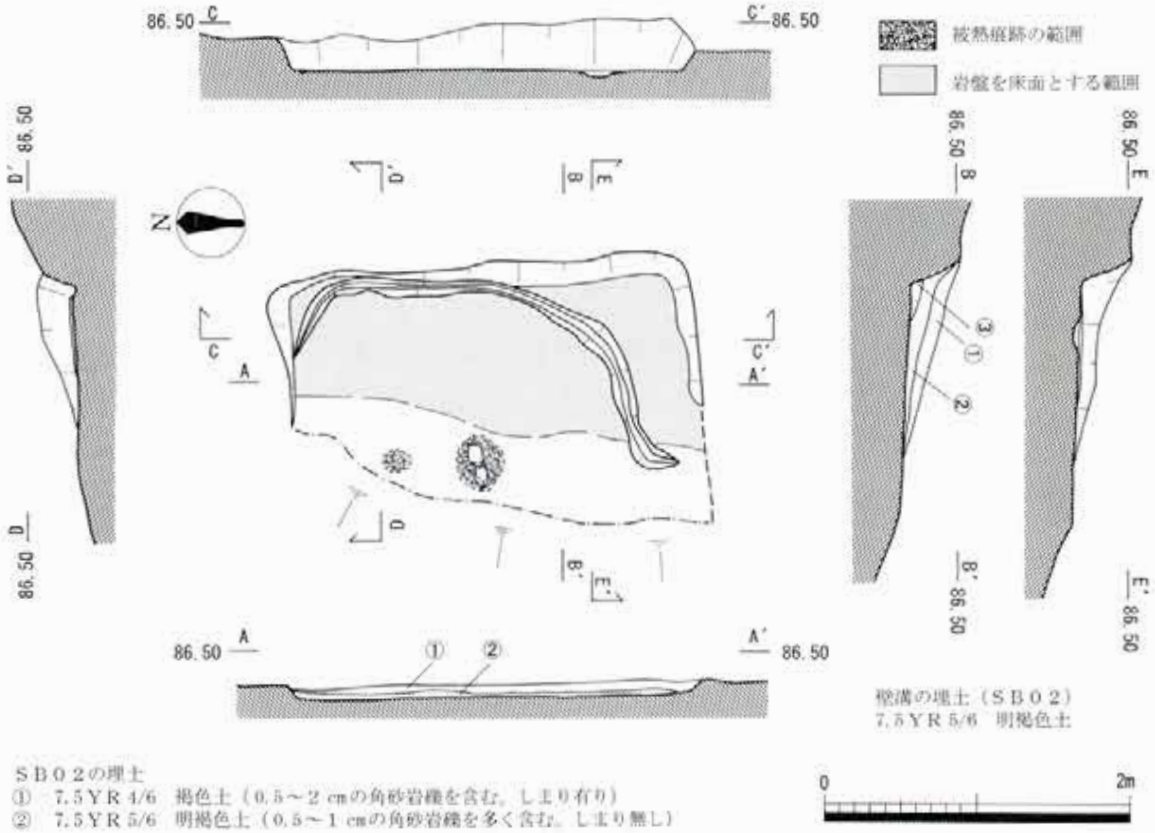


図12　ＳＢ02 実測図

主柱穴は検出できなかった。

地床炉は、それに該当すると考えられる土坑は見当たらないが、中央谷側に被熱痕跡が認められ、その中央部に二つに割れた長楕円形の支柱石（長軸27cm）を検出した。被熱痕跡は地床炉の北側にも検出したが、より小規模なもので、その性格は不明である。

遺物（図132、図版22・34）

土器は137点が出土し、図化できたのは４点である。５は高坏Ｃ類で、口縁部内面を１cm ほどの幅で肥厚させ、３条の沈線を施している。６の高坏脚部は内彎し、端部は平坦に仕上げられている。７・８は甕Ｄ類で前者は頸部が強く屈曲し、口縁部がやや外反するが、後者はゆるやかに屈曲し口縁

部は真っすぐに長く外傾する。いずれも現存部分には装飾は認められない。５・６の高坏は①層からの出土であるが、②層の堆積の浅い谷側寄りの出土であり、近隣に他の遺構は無いため、全てこの住居に帰属するものと考えられる。

ＳＢ０３

遺構（図14、図版２）

ｏ13グリッドにあり、北尾根から南に向かって下るやや急な傾斜（傾斜度23.8%）地に立地する。SB08が西に並ぶように隣接する。住居の北側にコの字状のテラスが掘削されている。このテラスの床面は傾斜が強く住居とは判断しなかったが、平面形から考えて別の住居である可能性も残る。隅角

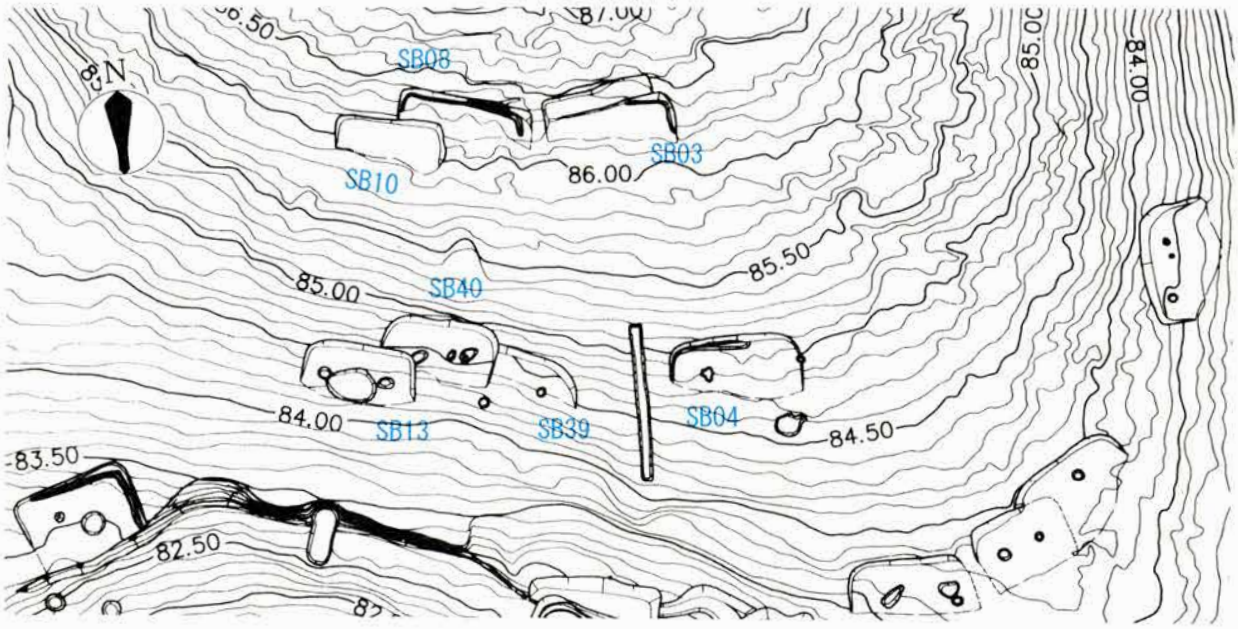


図13　ＳＢ03・04 周辺地形図（1/200）

は北東隅角が残存し、丸くおさめる形状である。幅3.4m、残存部の奥行き1.7mを測る。平面形は、正方形であったか長方形であったかは判断できない。残存部分は、全面にわたって砂岩の岩盤を掘り抜いて形成されている。頂上部と同様、この辺りの岩盤は風化による剥離、崩落が著しく、壁面は山側で最大22cm の深さを確認できるものの、遺存状況はよくない。住居内の埋没は、壁際から進行しており、自然埋没と判断される。壁溝は北東隅角付近から山側壁面に沿って巡る。

主柱穴・地床炉は、検出できなかった。

遺物（図132、図版34）

土器は26点が出土し、図化できたのは３点である。９は高坏Ｆ類で口縁部は内彎して立ち上がり、外面に横線11条を施す。10は高坏の脚部、11は平底甕の底部である。いずれも床面に接して出土しており、この住居に帰属するものと考えられる。

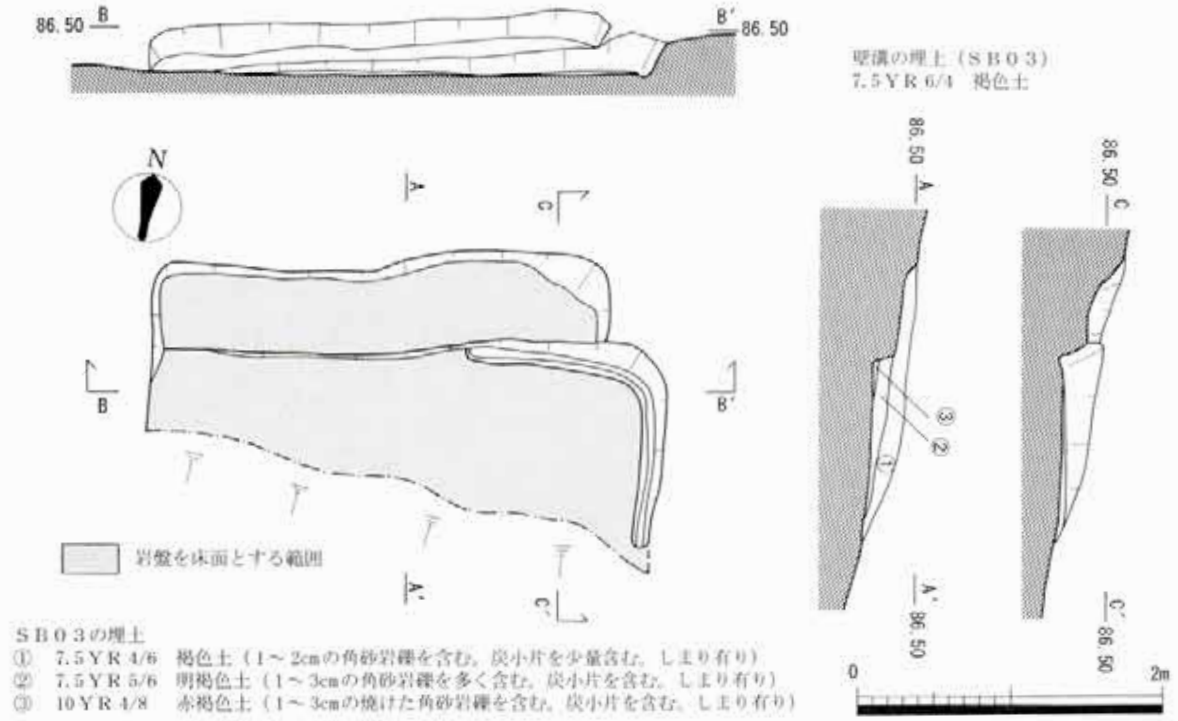


図14　ＳＢ03 実測図

ＳＢ０４

遺構（図15、図版２）

ｑ14グリッドにあり、北尾根から南に向かって下るやや急な傾斜（傾斜度23.8%）地に立地する（周辺地形図は、図13）。西方にＳＢ39が近接する。隅角は北西・北東隅角が残存し、いずれも丸くおさめられている。幅3.52m、残存部の奥行き1.60mを測る。平面形は、正方形であったか長方形であったかは判断できない。山側の壁面及び床面の一部は砂岩の岩盤を掘り抜いて形成されている。壁

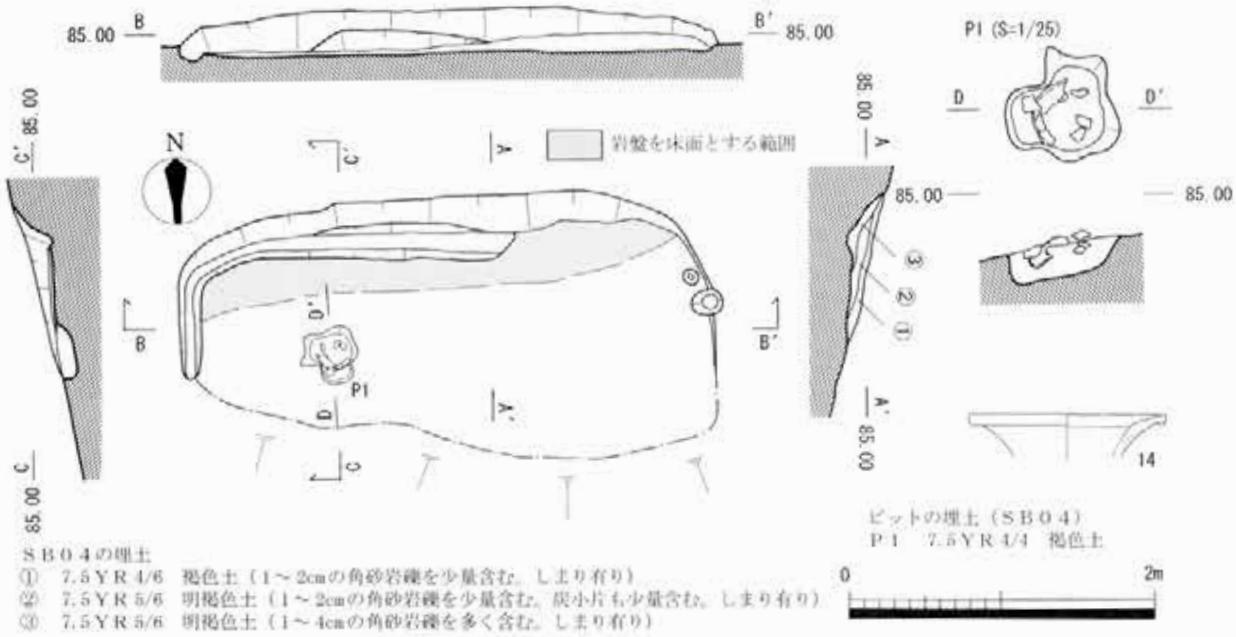


図15　ＳＢ04 実測図

面は山側で最大24cm の深さを確認できるものの、遺存状況はよくない。住居内の埋没は、壁際から進行しており、自然埋没と判断される。壁溝は山側壁面の中央部辺りから、西半分に壁面に沿って巡る。

主柱穴が存在すると考えられる位置には、不整形の小穴（Ｐ１）を検出した。Ｐ１からは壷の口縁部が、埋納されたかのような状況で出土した。住居廃絶にともなう祭祀等の可能性を考えさせる事例かと思われる。

地床炉は検出できなかった。

遺物（図132、図版22・34）

土器は16点が出土し、図化できたのは３点である。14は壺Ｂ１類で外反する口縁端部を垂下拡張させる。口縁内面に段を持ち、平坦面をつくろうとする意識を見て取れるが、水平にはなっていない。12・13は平底甕の底部である。いずれも、床面に近い位置からの出土で、この住居に帰属するものと考えられる。

ＳＢ０５

遺構（図17、図版３）

ｏ10グリッドにあり、北尾根と南尾根の鞍部の西に向かって下るゆるやかな傾斜(傾斜度14.8%)地に立地する。ＳＢ06の西側を切って掘削されている。また、後世（時期不明）の土坑（ＳＫ03）によって北辺の一部を切られている。西北にはＳＢ07が近接する。隅角は北東・南東隅角が残存しいずれも丸くおさめられている。幅3.74m、残存部の奥行き3.46mを測る。平面形は正方形であったと考えられる。北東隅の壁面及び床面は、砂岩の岩盤を深く掘り抜いており、最大深さは56cm を測る。住居内の埋没は、壁際から進行しており、自然埋没と判断される。壁溝は認められなかった。

主柱穴と考えられるものはＰ１・Ｐ３を検出したが、山側壁面に平行しない位置であり、浅く不明瞭である。

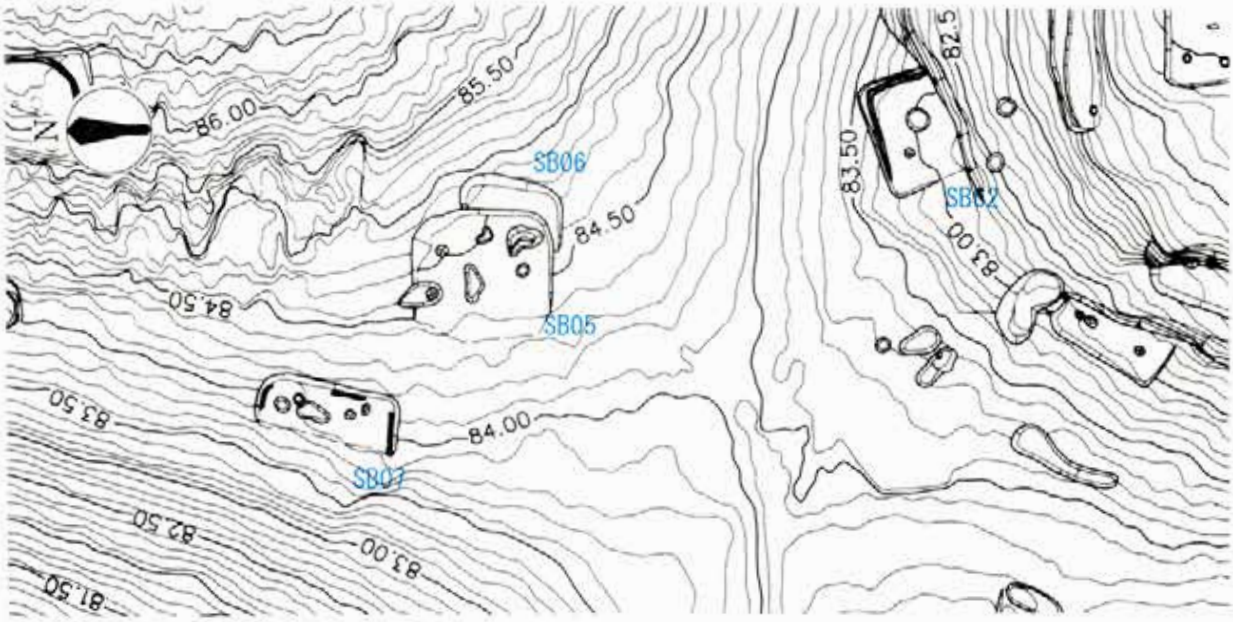


図16　ＳＢ05・06・07 周辺地形図（1/200）

地床炉は、住居の中央に位置する深さ12cm 前後の浅い土坑（ＳＫ１）が、それに該当する可能性がある。支柱石は検出できなかった。

遺物（図132）

土器は、小片ばかり78点が出土した。図化できたのは３点である。15は甕Ｇ１類で北陸系の要素を感じさせる。16は甕Ａ類の底部で摩滅が著しいが、外面にわずかに縦方向の櫛条痕が残存する。17は平底甕の底部。18は壺Ｂ１類の口縁部であるが、現存部分には装飾は認められない。18を除いて②、③層からの出土であるが、いずれも小片で、あまりに摩耗が激しいことから、この住居に帰属する可能性を指摘するにとどめたい。

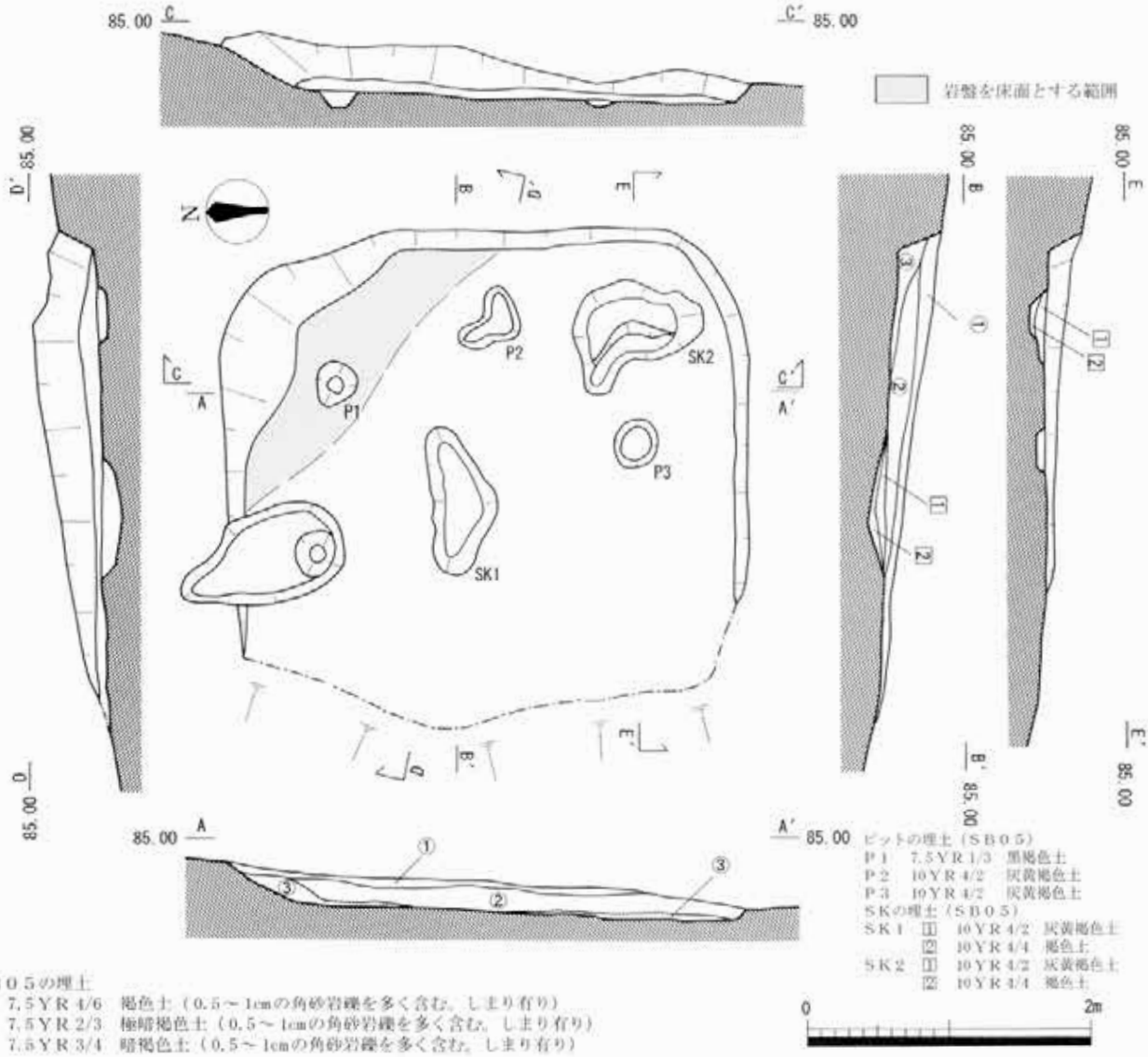


図17　ＳＢ05 実測図

ＳＢ０６

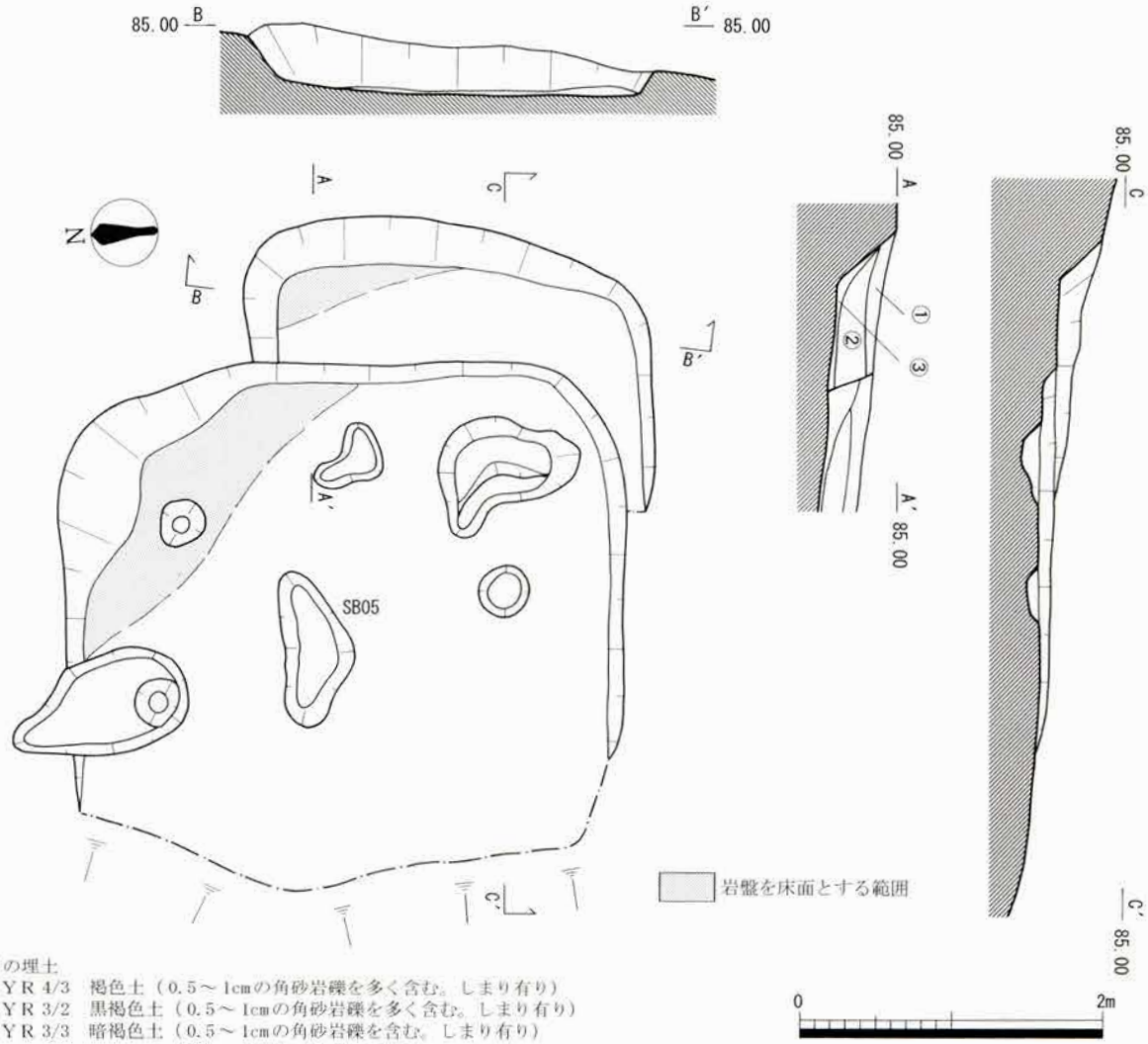
遺構（図18、図版３）

ｏ10グリッドにあり、北尾根と南尾根の鞍部の西に向かって下るゆるやかな傾斜(傾斜度14.8%)地に立地する(周辺地形図は、図16)。この住居は、西側をＳＢ05によって切られている。西北にはＳＢ07が近接する。隅角は北東・南東隅角が残存し、いずれも丸くおさめられている。幅2.72m、残存部の奥行き1.42mを測る。平面形は正方形か長方形か判然としない。北東隅の壁面及び床面は砂岩の岩盤を深く掘り抜いており、最大深さは40cm を測る。住居内の埋没は、壁際から進行しており、自然埋没と判断される。壁溝は認められなかった。

ＳＢ06によって破壊されている部分が大きく、主柱穴および地床炉と考えられるものは、検出できなかった。

遺物

土器は、①・②層から摩耗の激しい小片ばかり22点が出土したが、図示できるものは無かった。

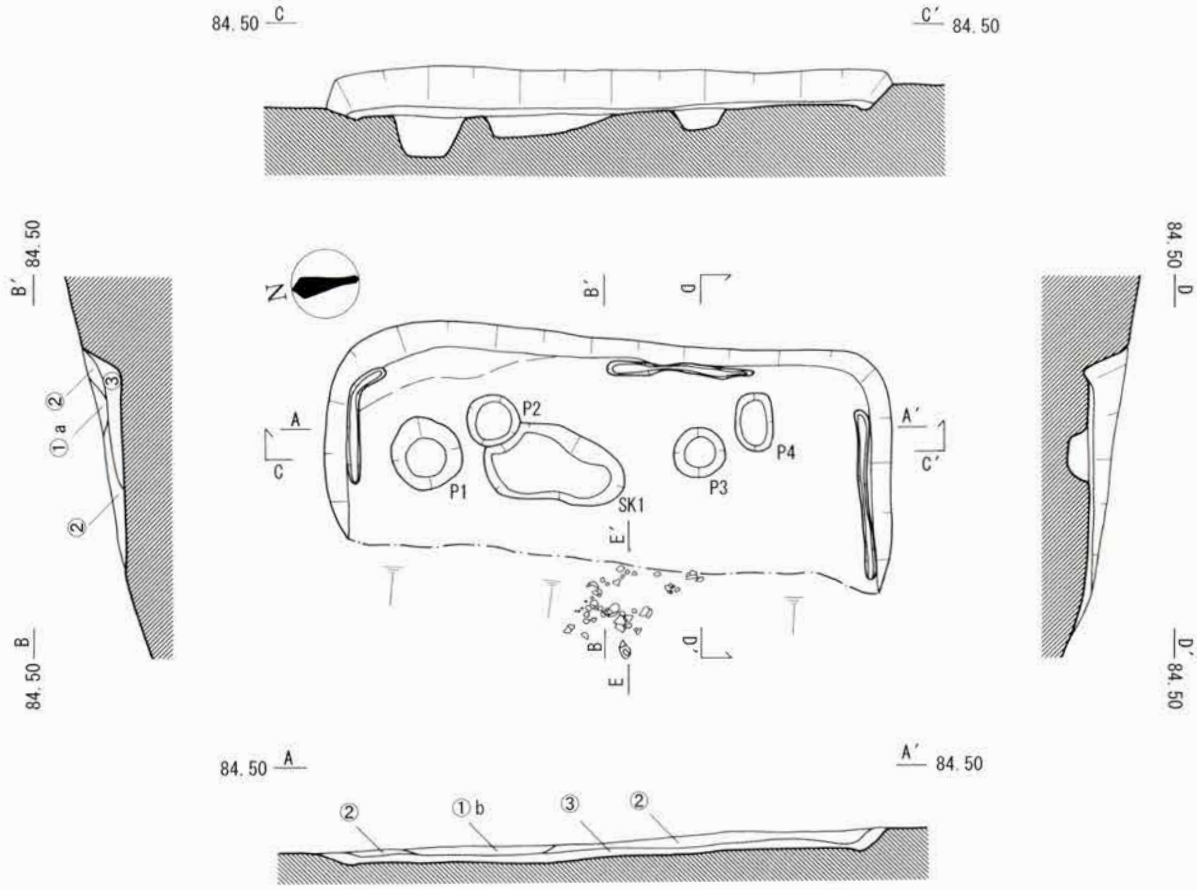


ＳＢ０６の埋土
① 7.5ＹＲ 4/3　褐色土（0.5～1cmの角砂岩礫を多く含む。しまり有り）
② 7.5ＹＲ 3/2　黒褐色土（0.5～1cmの角砂岩礫を多く含む。しまり有り）
③ 7.5ＹＲ 3/3　暗褐色土（0.5～1cmの角砂岩礫を含む。しまり有り）

図18　ＳＢ06 実測図

ＳＢ０７

遺構（図19、図版３）



ピットの埋土（ＳＢ０７）
Ｐ１　7.5ＹＲ 4/6　褐色土
Ｐ２　7.5ＹＲ 4/6　褐色土
Ｐ３　7.5ＹＲ 4/6　褐色土
Ｐ４　7.5ＹＲ 4/6　褐色土
ＳＫ１の埋土（ＳＢ０７）
7.5ＹＲ 3/3　暗褐色土

ＳＢ０７の埋土
①ａ　7.5ＹＲ 3/4　暗褐色土（1～2cmの角砂岩礫を含む。しまり有り）
①ｂ　7.5ＹＲ 4/4　褐色土（0.5cmの角砂岩礫を多く含む。しまり有り）
②　7.5ＹＲ 4/3　褐色土（1cmの角砂岩礫を含む。しまり有り）
③　7.5ＹＲ 4/6　褐色土（1～5cmの角砂岩礫を多く含む。しまり有り）

0　2m

図19　ＳＢ07 実測図

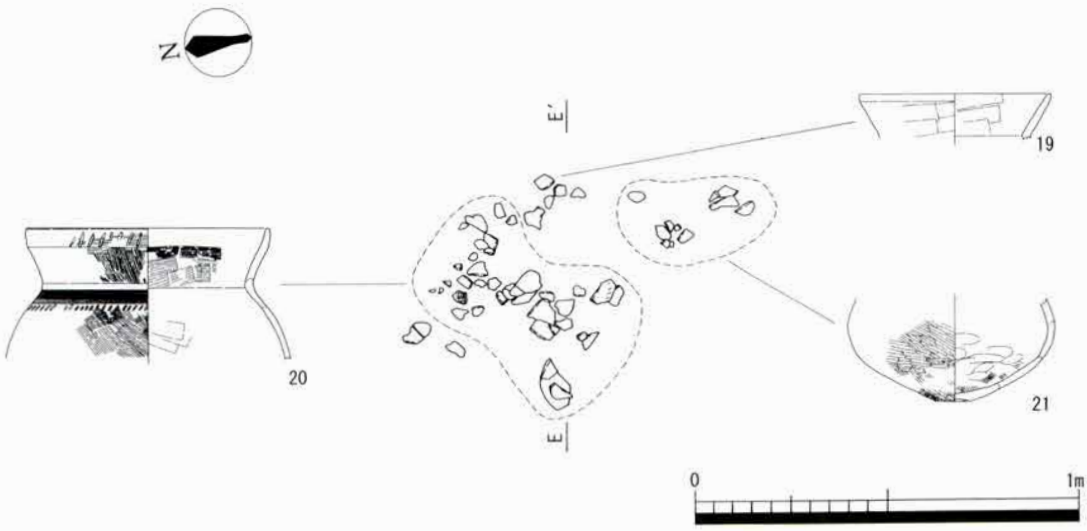


図20　ＳＢ07 遺物出土状況図

ｎ９グリッドにあり、北尾根から西北に向かって下るやや急な傾斜(傾斜度24%)地に立地する。東南にＳＢ05・ＳＢ06が隣接する（周辺地形図は、図16)。隅角は北東・南東隅角が残存し、いずれも丸くおさめられている。幅3.74m、残存部の奥行き1.48mを測る。平面形は、正方形であったか長方形であったかは判断できない。住居内の埋没は、壁際から進行しており、自然埋没と判断される。

壁溝は壁面に沿って一部に認められるが、連続しない。

柱穴の可能性あるＰ１～４を検出したが、Ｐ２・Ｐ４は深さが10cmほどと浅く、Ｐ１・Ｐ３が主柱穴の可能性が高いと考えられる。

地床炉は、中央左寄りに検出した深さ12cmほどの浅い土坑（ＳＫ１）が、それに該当する可能性を持つ。支柱石は認められなかったが、土坑の埋土には炭の小片が多く含まれていた。

遺物（図133、図版22）

土器は、住居中央部の端の谷に向かって傾斜が変換する箇所、すなわちＳＢ07の床面が流出により崩れはじめる地点にまとまって出土した（図19・20)。43点が出土しているが、ほとんどが図示し得た３個体と同一個体の破片と思われる。19は甕Ｄ類。20は甕Ｃ類で推定口径25.6cmの大型の甕である。口縁部は長く外傾し、端部に段を持っている。口縁部外面にハケによる刻み目を、頸部外面に横線14条とやはりハケによる列点文を施している。21は、壷Ａ類で、外面に赤彩を施し、体部最大径が下位に位置する。底部は凹み底である。出土状況から判断して、いずれも本住居に帰属するものと考えられる。

ＳＢ０８

遺構（図22、図版３）

ｏ13グリッドにあり、北尾根から南に向かって下るやや急な傾斜（傾斜度21.3%）地に立地する。南西側をＳＢ10に切られ、東にはＳＢ03が並ぶように隣接する。隅角は北西・北東隅角が残存し、いず

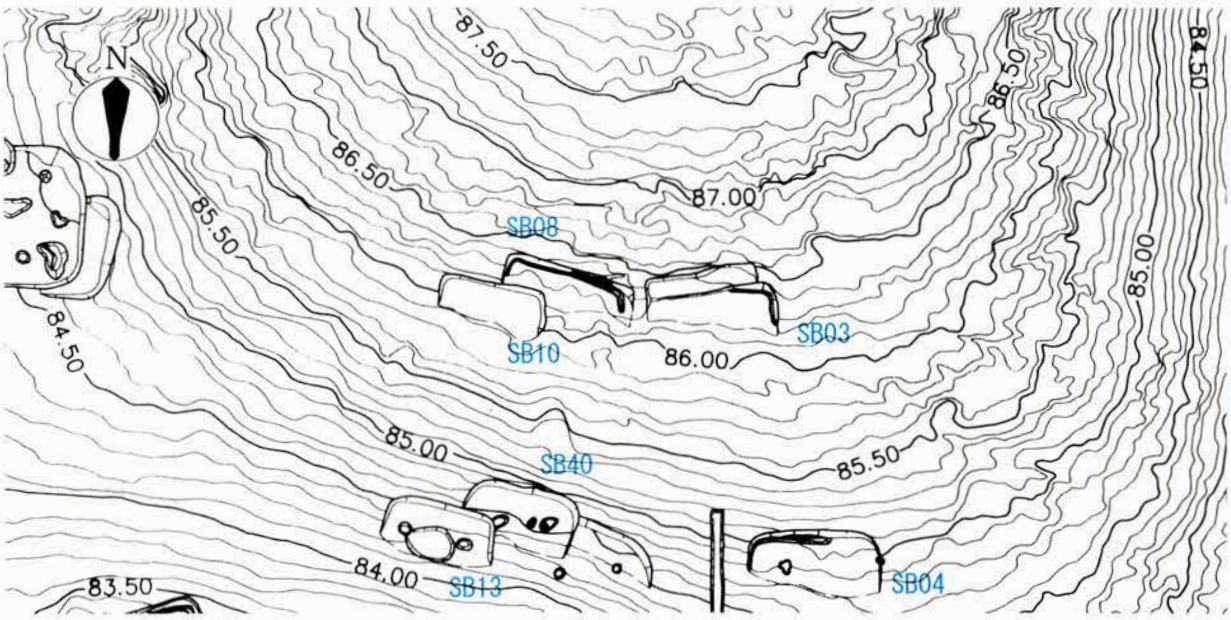


図21　ＳＢ08・10 周辺地形図（1/200）

れも丸くおさめられている。幅3.58m、残存部の奥行き1.20mを測る。平面形は、正方形であったか長方形であったかは不明である。山側の壁面及び床面は砂岩の岩盤を掘り抜いて形成されている。この辺りの岩盤は風化による剥離、崩落が著しく、壁面は山側で最大20cm の深さを確認できるものの、遺存状況はきわめてよくない。

壁溝は壁面に沿って巡るが、谷側にいくに従って浅く不明瞭となるため、谷側まで巡っていたかどうかは不明である。

柱穴、地床炉は、検出した床面には認められなかった。

遺物

土器は、土師器の小片が４点出土したが、図示できるものは無かった。

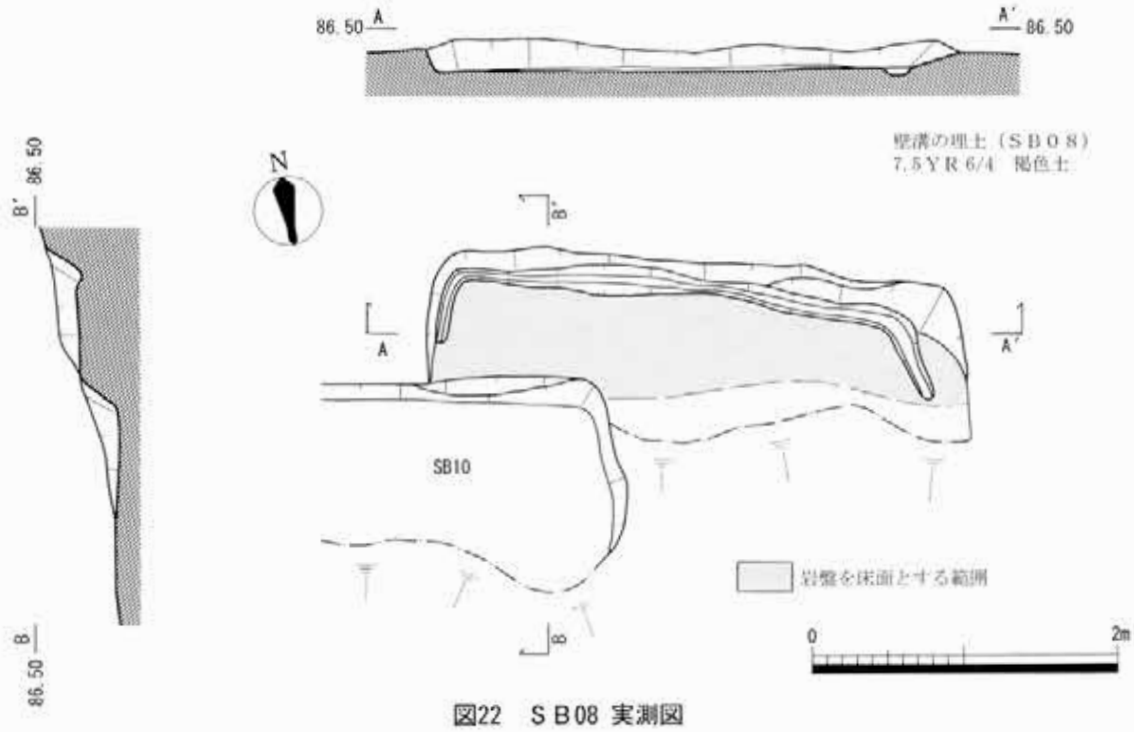


図22　ＳＢ08 実測図

ＳＢ０９

遺構（図24、図版３）

ｍ８グリッドにあり、北谷の、西に向かってくだる急な傾斜(傾斜度27.8%)地に立地する。西には、ＳＢ31、ＳＢ54が隣接する。隅角は北東･南東隅角が残存し、いずれも丸くおさめられている。幅4.10m、残存部の奥行き1.42mを測る。平面形は、正方形であったか長方形であったかは判断できない。壁面は山側で最大40cm の深さを確認できるものの急斜面に立地するため谷側は著しく流出し、残存状況はよくない。住居内の埋没は壁際から進行しており、自然埋没と判断される。

壁溝は基本的に山側壁面の形状に合わせて巡るが、壁際ではなく、かなり床面の中に入った位置を巡っている。壁溝の北の端は住居内で完結し、住居外までは連続していない。

主柱穴はＰ２・Ｐ３を検出したが、いずれも浅く不明瞭ではある。

地床炉は、それに該当すると考えられるものとして、最大深さ８cm の浅い土坑（ＳＫ１）を検出し

たが、支柱石は認められなかった。

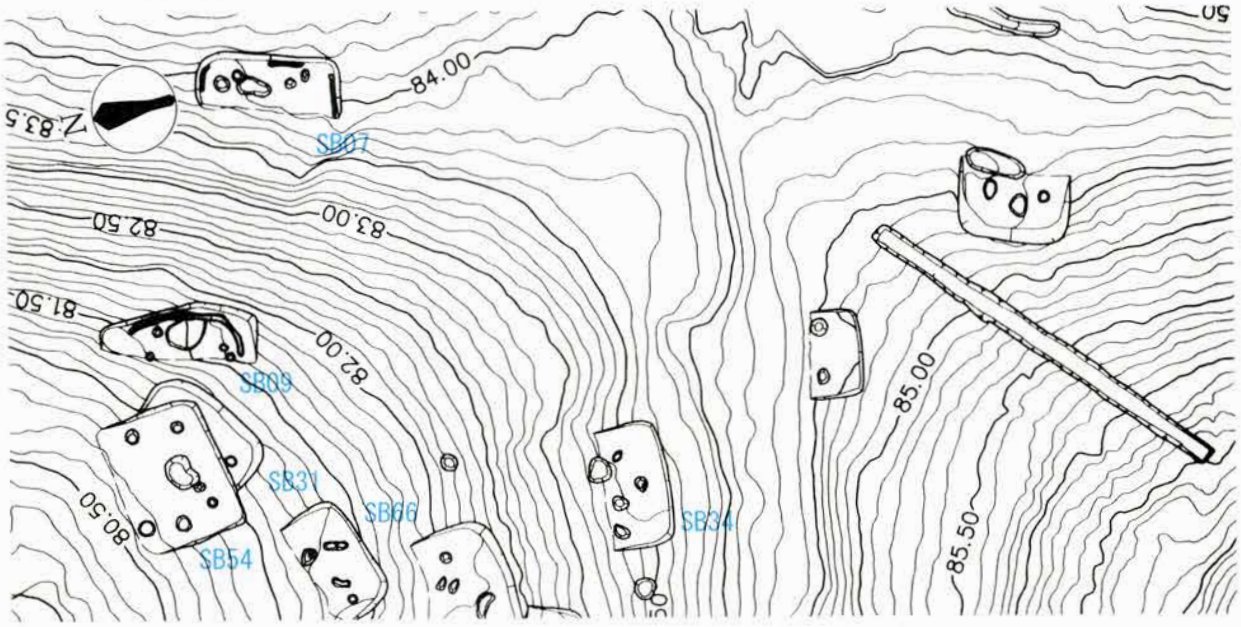


図23　ＳＢ09 周辺地形図（1/200）

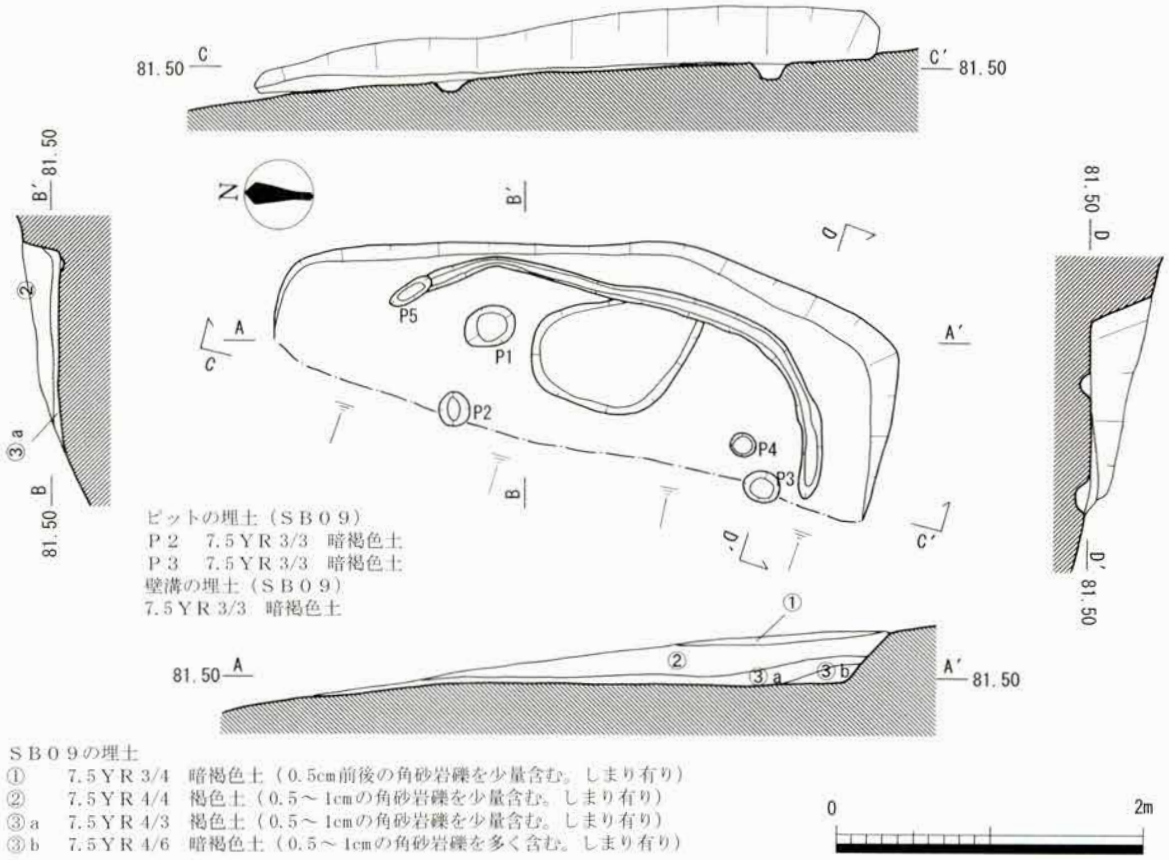


図24　ＳＢ09 実測図

遺物（図25・133・134、図版22・23・34）

土器は316点が出土したが、当遺跡の住居跡の中で最も良好な状況で出土した。図示した土器の多くは、検出した床面のほぼ中央の床面に接する位置に、まとまって出土した（図25、図版３）。接合率

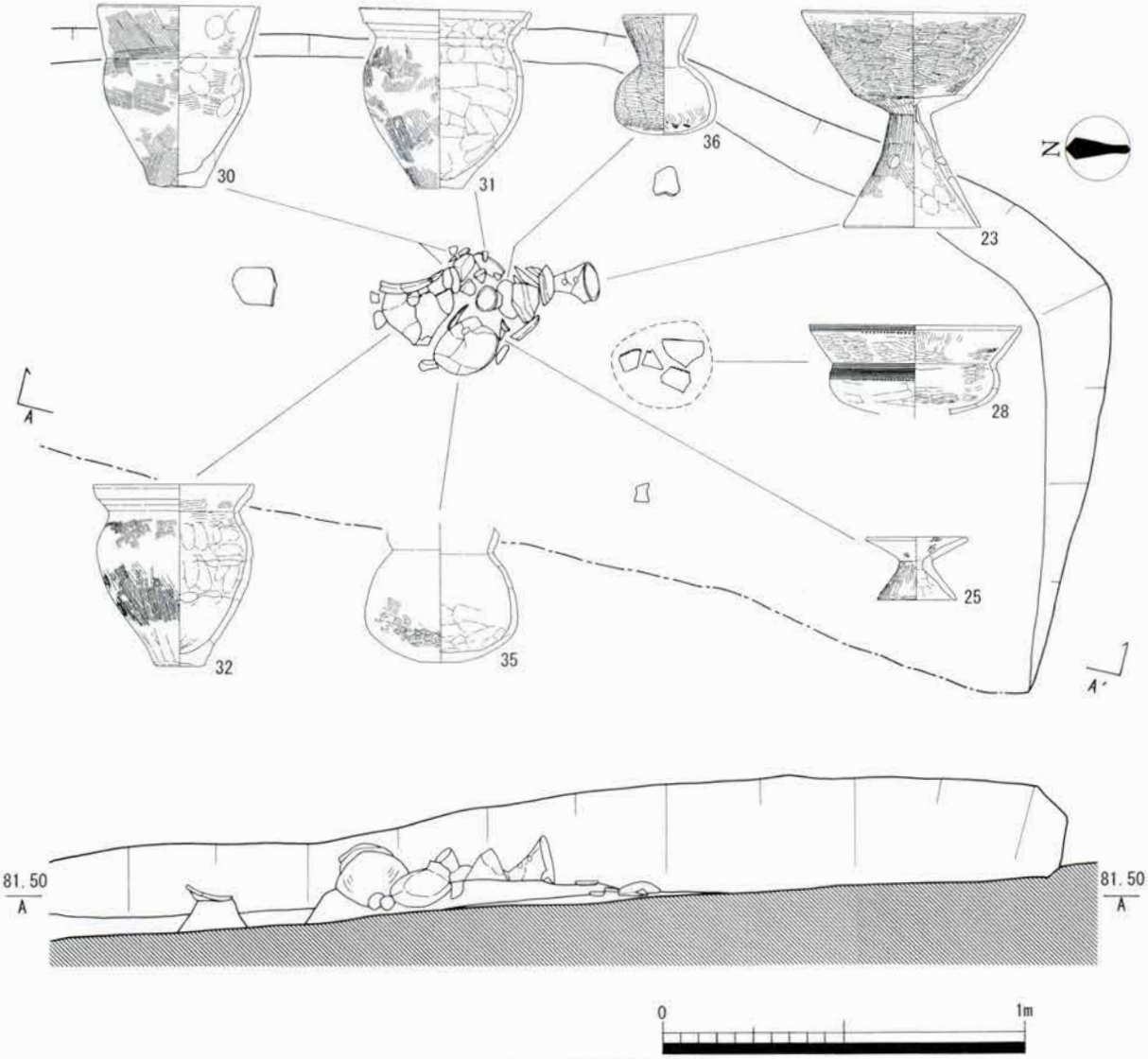


図25　ＳＢ09 遺物出土状況図

も極めてよく、完形またはほぼ完形に近く復元できたものは７点を数え、遺存状態はきわめて良好であり、破損した土器を投棄したものではない。出土状況は日常の使用状況ではなく、明らかに意図的にまとめられた状況と言え、住居廃絶時の祭祀等特別な意味合いを感じさせる。器種も豊富で、当遺跡の１軒の住居で用いられた土器の組成を考えるうえで、貴重な資料である。計18個体を図示し得たが、22、24、33、34、37～39の７個体は、①・②層からの出土であり、混入である可能性が高い。

22は高坏または器台の脚部で、長脚の裾部を内彎させている。23・24は高坏Ｃ類で、23は高く立ち上がる坏部の口縁端部を内彎させている。脚部は長脚で裾部を内彎させ、透かし孔は３方向だが、一カ所が２孔、他の二か所が１孔と変則的である。当遺跡出土の高坏Ｃ類の器壁の最終調整は、縦方向のミガキを基本とするが、この個体の坏部の調整は横方向のミガキである。24は口縁部片で、口縁端部を内彎させている。

25は、器台Ｂ２類で、脚部が内彎する小型の器台である（口径11.3㎝）。当遺跡出土の器台の法量を概観すると、口径が15㎝を越えるものと11㎝前後の小型なものとに二分されるようである。26・27は器台の受け部で、27は口縁端部をわずかに拡張し擬凹線を施している。

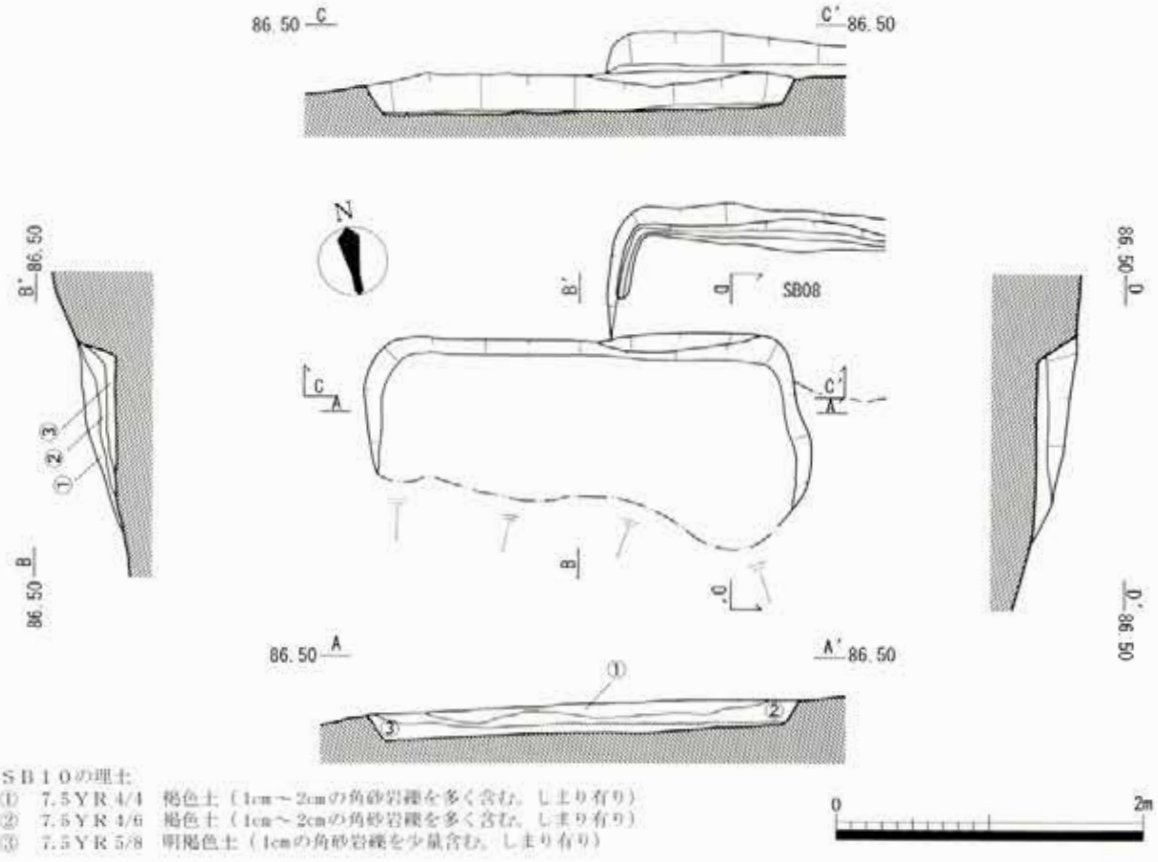
28は鉢Ｂ類・29は鉢Ｃ類である。28は、頸部は強く屈曲し、口縁部は緩やかに内彎しつつ長く外傾する。内外面にミガキ調整を施し、口縁端部外面および頸部に横線と列点文からなる文様を施す。29は口縁部の内湾がより顕著な小型品である。

33～34は甕であるが、30がＤ類、31がＧ1類、32がＧ2類、33がＣ類とバラエティに富む。30は頸部の屈曲が弱く、口縁部はくの字状に長く外傾しつつ上方に真っすぐに伸びている。31・32は北陸系の法仏、月影式の影響下に作られたものと考えられる。体部以下の形態は甕Ａ・Ｃ・Ｄ類とほとんど差が無いが、口縁部外面は段を持って外反して開く。段は器壁を肥厚させることで形成し、外面下端にわずかな突起を作り出している。頸部の屈曲は、典型的な北陸系のものと比較すると緩やかであり、北陸の影響の元で在地で生産されたものと考えられる。口縁内面に明瞭な段を持つ31はＧ1類、持たない32はＧ2類に分類した。34は甕の体部片の頸部付近の破片で、横線と列点文が認められる。

35～40は壷である。35は壷Ｄ2類で、最大径が体部下位に位置し、凹み底である。口縁部は先端部を欠くが、内彎傾向が明瞭な短頸壷である。36は完形品で出土した。壷Ｃ2類で口縁部がゆるやかに内彎し、最大径が体部下位に位置する。小さな凹み底である。頸部は縦方向体部は横方向に丁寧なミガキを施している。37も壷Ｃ２類で、口縁部が緩やかに内彎しつつ外傾し、端部外面に横線を施す。

ＳＢ１０

遺構（図26、図版３）



ＳＢ１０の埋土
① 7.5ＹＲ 4/4　褐色土（1cm～2cmの角砂岩礫を多く含む、しまり有り）
② 7.5ＹＲ 4/6　褐色土（1cm～2cmの角砂岩礫を多く含む、しまり有り）
③ 7.5ＹＲ 5/8　明褐色土（1cmの角砂岩礫を少量含む、しまり有り）

図26　ＳＢ10 実測図

ｏ12グリッドにあり、北尾根の南に向かって下るやや急な傾斜（傾斜度20.6%）地に立地する（周辺地形図は、図21）。ＳＢ08の南西側を切っている。隅角は北西・北東隅角が残存し、いずれも丸くおさめられている。幅2.96m、残存部の奥行き1.42mを測る。平面形は、正方形であったか長方形であったかは不明である。山側の壁面及び床面は砂岩の岩盤を掘り抜いて形成されている。壁面は山側で最大24cm の深さを確認できる。住居内の埋没は、壁際から進行しており、自然埋没と判断される。

壁溝、柱穴、地床炉は、検出した床面には認められなかった。

遺物

土器は、小片が６点出土したが、図示できるものは無かった。

ＳＢ１１

遺構（図２８、図版５）

ｓ10グリッドにあり、南谷の、南東に向かってくだる極めて急な傾斜（傾斜度31.2%）地に立地する。南側をＳＢ35が切り、ＳＢ30が北に、ＳＢ28が東に隣接する。隅角は北西、北東隅角が残存し、いずれも丸くおさめられている。幅3.18m、残存部の奥行き1.80mを測る。平面形は、正方形であったか長方形であったかは不明である。壁面及び床面は地山を深く掘り抜いて形成されており、壁面の深さは、山側で最大52cm を確認できるものの、急斜面に立地するため谷側は著しく流出しており、残存状況はよくない。住居内の埋没は、壁際から進行しており、自然埋没と判断される。

壁溝はやや幅広だが浅く、基本的に壁面の形状に合わせて巡るが、途中で途切れ連続していない。

主柱穴はＰ１を検出したが、浅く不明瞭ではある。

地床炉は、検出した床面には認められなかった。

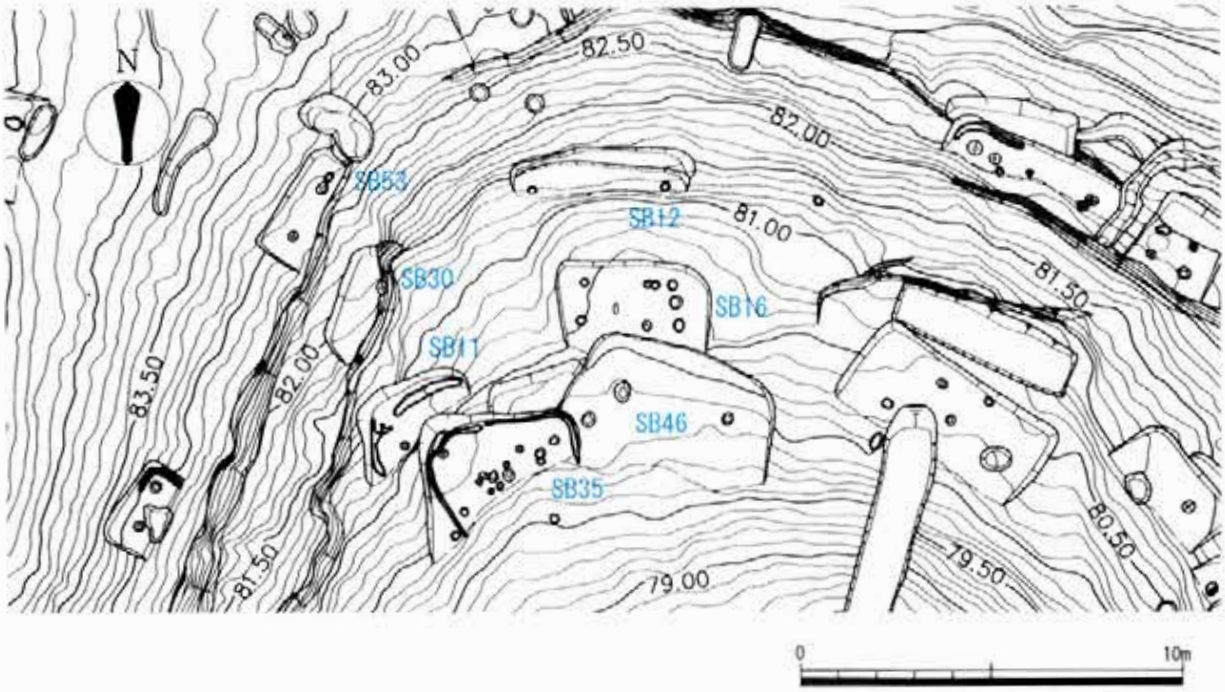
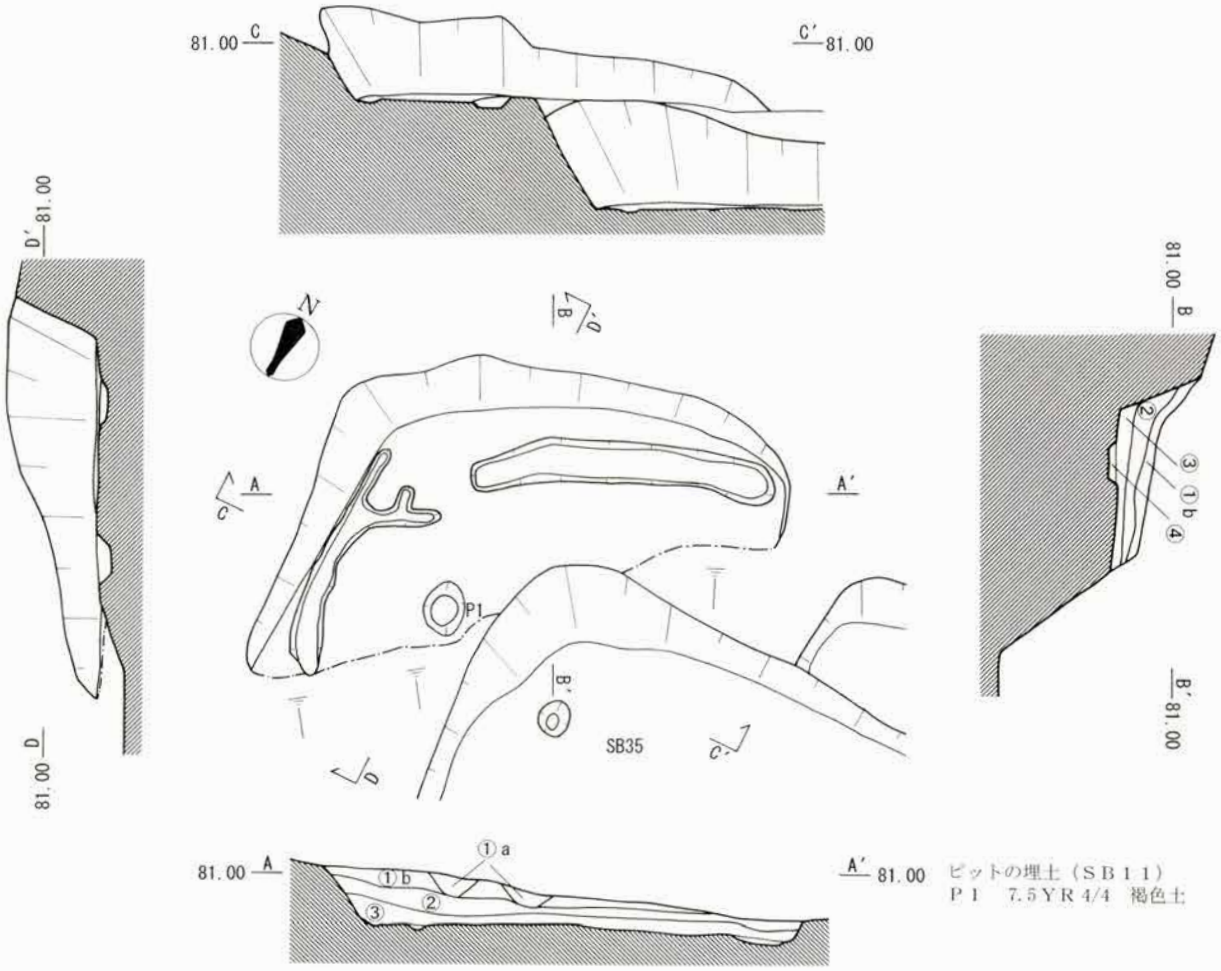


図27　ＳＢ11・12 周辺地形図（1/200）



ＳＢ１１の埋土
①ａ　10ＹＲ 3/2　黒褐色土（0.5cm～1cmの角砂岩礫を少量含む。しまり無し）
①ｂ　10ＹＲ 4/3　にぶい黄褐色土（2～3cmの角砂岩礫を多く含む。しまり無し）
②　10ＹＲ 4/3　にぶい黄褐色土（炭化物を少量含む。しまり無し）
③　10ＹＲ 4/6　褐色土（しまり無し）
④　7.5ＹＲ 3/3　暗褐色土（壁溝）

0　2m

図28　ＳＢ11 実測図

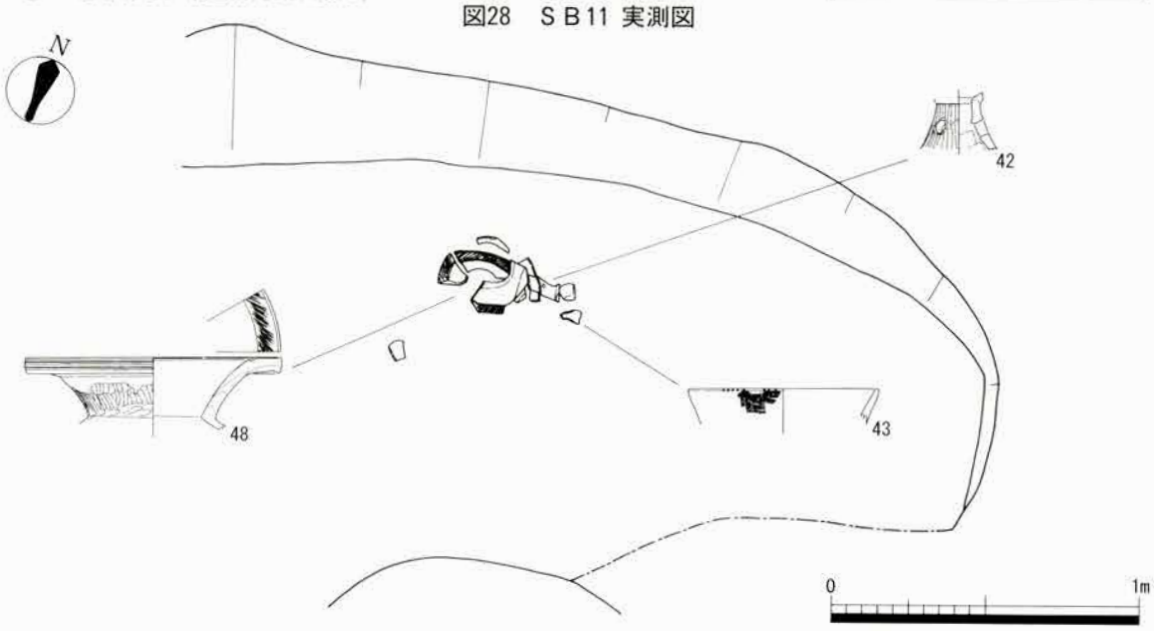


図29　ＳＢ11 遺物出土状況図

遺物（図29・134・135、図版３・22・24・34）

土器は、８点を図示した。41・42は器台Ｂ類で、41は口縁端部をわずかに拡張し、擬凹線を施している。43～46は甕で、44がＣ類、他はＤ類である。43は口縁端部外面に刻みを施している。47は台付甕を模したものと考えられるミニチュア土器の台部である。

48は壺Ｂ1類で、口縁内面に平坦面を形成し外面を垂下拡張して加飾するもので、平坦面にはヘラ描き沈線文と擬凹線1条、端部外面には擬凹線を施している。口径26.7cm の大型品である。

以上のうち41・42・43・48は①層、45、46は②層からの出土であり、斜面上部に存在する遺構（ＳＢ30、ＳＢ53など）からの流れ込みである可能性がある。

ＳＢ１２

遺構（図30）

ｒ11グリッドにあり、南谷の、南西に向かってくだるきわめて急な傾斜（傾斜度38.7%）地に立地する。北にはＳＢ62が、南にはＳＢ16が存在する（周辺地形図は、図27）。山側にテラス状の張り出し部が付属する。隅角は北西、北東隅角が残存し、いずれも丸くおさめられている。幅4.86m、残存部の奥行き1.20mを測る。平面形は、正方形であったか長方形であったかは不明であるが、この傾斜地に幅と同じ長さの奥行きを確保することは困難ではある。壁面及び床面は地山を掘り抜いて形成されており、壁面の最大深さは、山側テラス部で32cm を確認できるものの、急斜面に立地するため谷側は著しく流出しており、残存状況はよくない。住居内の埋没は、壁際から進行しており、自然埋没と判断される。

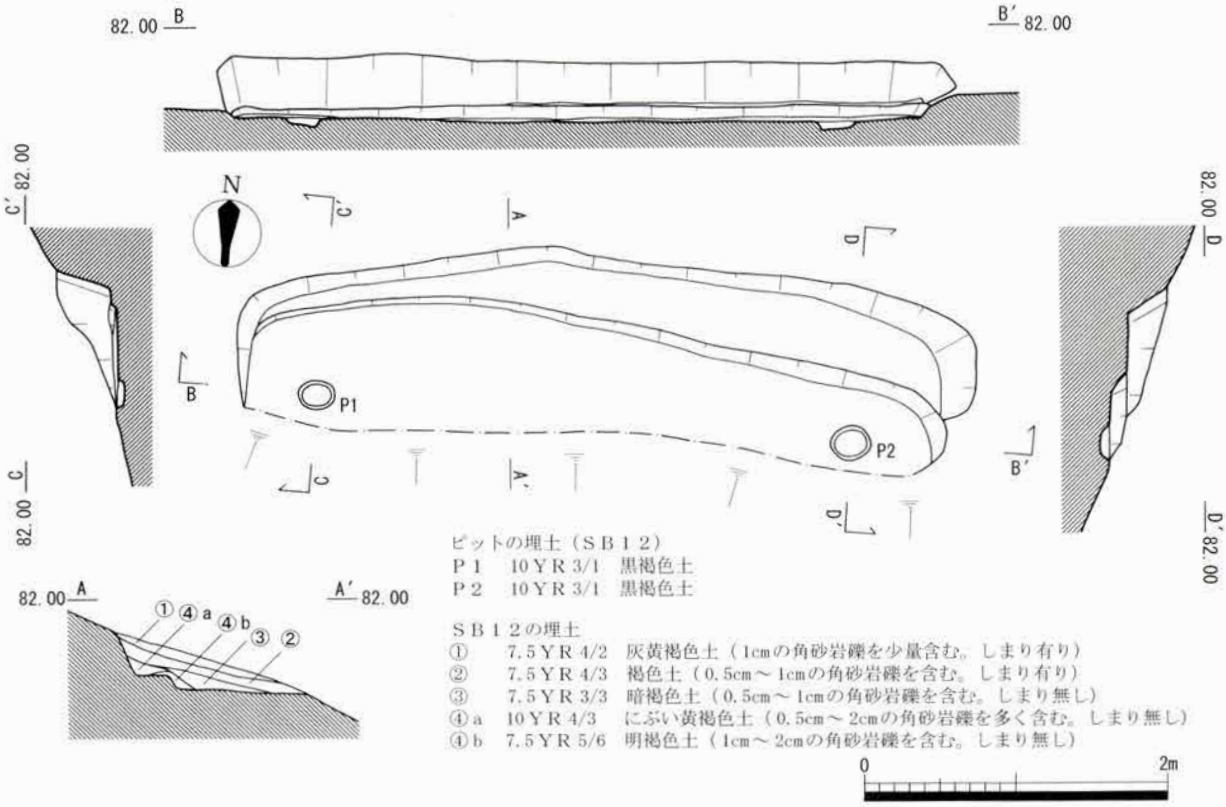


図30　ＳＢ12 実測図

主柱穴はＰ１・Ｐ２を検出したが、浅く不明瞭ではある。

壁溝、地床炉は、検出した床面には認められなかった。

遺物（図135、図版34）

土器は、小片ばかり109点が出土したが、図示し得るのは１点（49）のみで、平底甕の底部である。①層からの出土であり、斜面上部からの流れ込みである可能性が高い。

ＳＢ１３

遺構（図32、図版４）

ｑ12グリッドにあり、北尾根の南に向かってくだる急な傾斜(傾斜度28.6%)地に立地する。ＳＢ40の南西側を切って掘削されている。隅角は北西・北東隅角が残存し、いずれも丸くおさめられている。

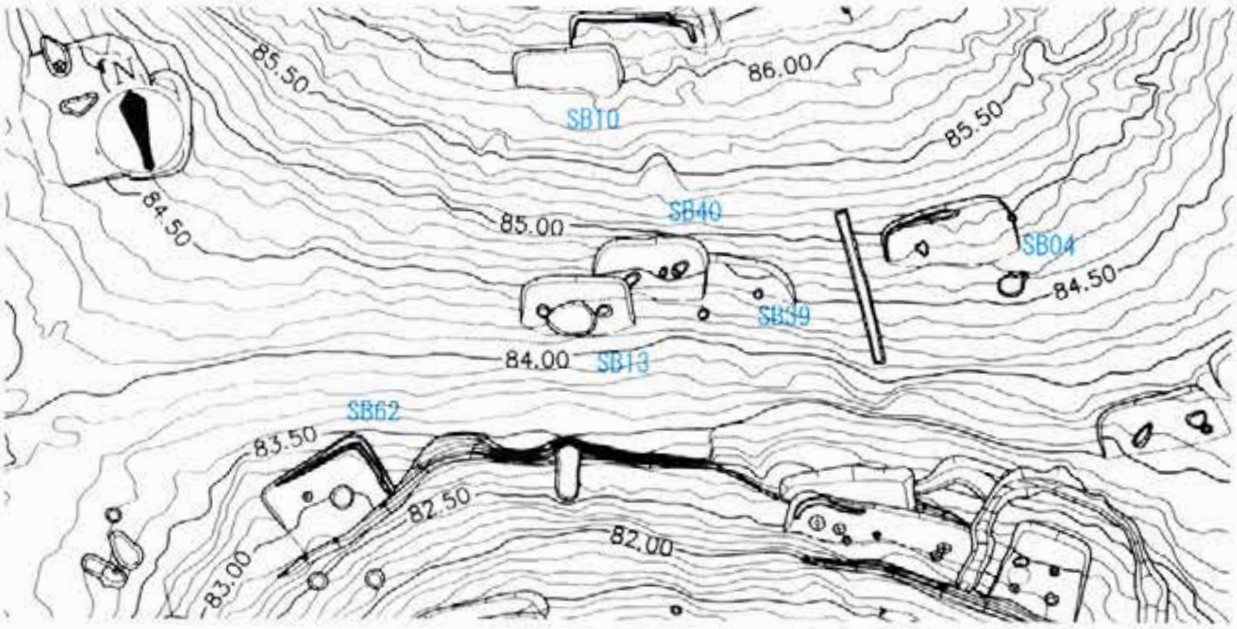


図31　ＳＢ13 周辺地形図（1/200）

幅2.96m、残存部の奥行き1.50mを測る。平面形は、正方形であったか長方形であったかは判断できない。壁面及び床面は地山を掘り抜いて形成されている。壁面は山側で最大20cm の深さを確認できるものの、急斜面に立地するため流出が著しく、残存状況はよくない。住居内の埋没は、壁際から進行しており、自然埋没と判断される。

壁溝は認められなかった。

主柱穴はＰ２・Ｐ３を検出したが、いずれも浅く不明瞭である。

地床炉は、それに該当すると考えられるものとして、最大深さ10cm の浅い土坑（ＳＫ１）を検出した。この埋土には多量の炭の小片および土器の小片が含まれていたが、支柱石は認められなかった。

遺物（図135、図版24・34）

土器は、床面およびＳＫ１から合計378点の小片が出土した。このうち図化できたのは９点である。50は高坏Ｅ類の可能性がある。51は高坏の脚部であるが、低脚で裾部を内彎させる。高坏Ｃ類の脚部

である可能性が高いと思われる。53は鉢Ｃ類の口縁部で緩やかに内彎し、端部外面に刻み目を施す。52、54、55は甕であるが、52、55はＣ類、54はＤ類である。いずれも残存部分に装飾は見られない。56、57は台付甕の台部である。58は壺Ｄ２類の口縁部で、緩やかに内彎し、端部外面に刻み目、外面には横線を施す。

以上のうち53、57は、①層または②層からの出土であり、他の遺構からの流れ込みである可能性が高い。

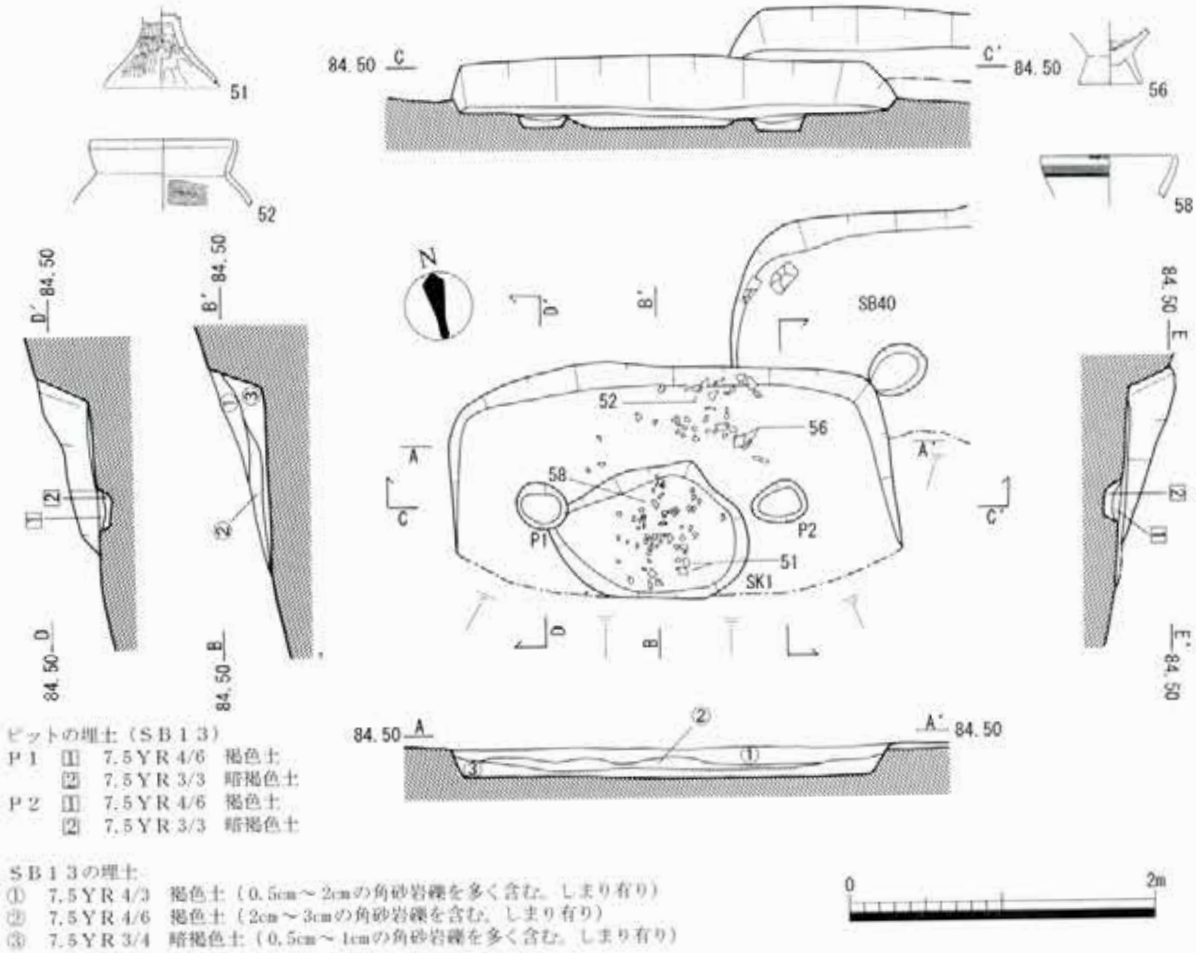


図32　ＳＢ13 実測図

ＳＢ１４

遺構（図34、図版４）

ｐ16グリッドにあり、北尾根の、東に向かって下る極めて急な傾斜(傾斜度34.2%)地に単独で立地する。隅角は北西・南西隅角が残存し、前者は丸くおさめられ、後者は角張っている。幅3.10m、残存部の奥行き2.26mを測る。平面形は、正方形であったか長方形であったかは判断できない。山側の壁面及び床面の一部は岩盤・他は地山を掘り抜いて形成されている。壁面は山側で最大35cm の深さを確認できるが、急斜面に立地することと岩盤の風化のため崩壊が著しく、残存状況はよくない。住居内の埋没は、壁際から進行しており、自然埋没と判断される。

主柱穴はＰ１・Ｐ３を検出した。

壁溝、地床炉は、認められなかった。

遺物（図135）

土器は、小片ばかり21点が出土したが、図化できたのは、平底甕の底部の１点（59）のみである。①層からの出土であるが、単独で立地する住居であり、また住居の壁面に密着して出土しているため、当住居に帰属するものと考えてよいだろう。

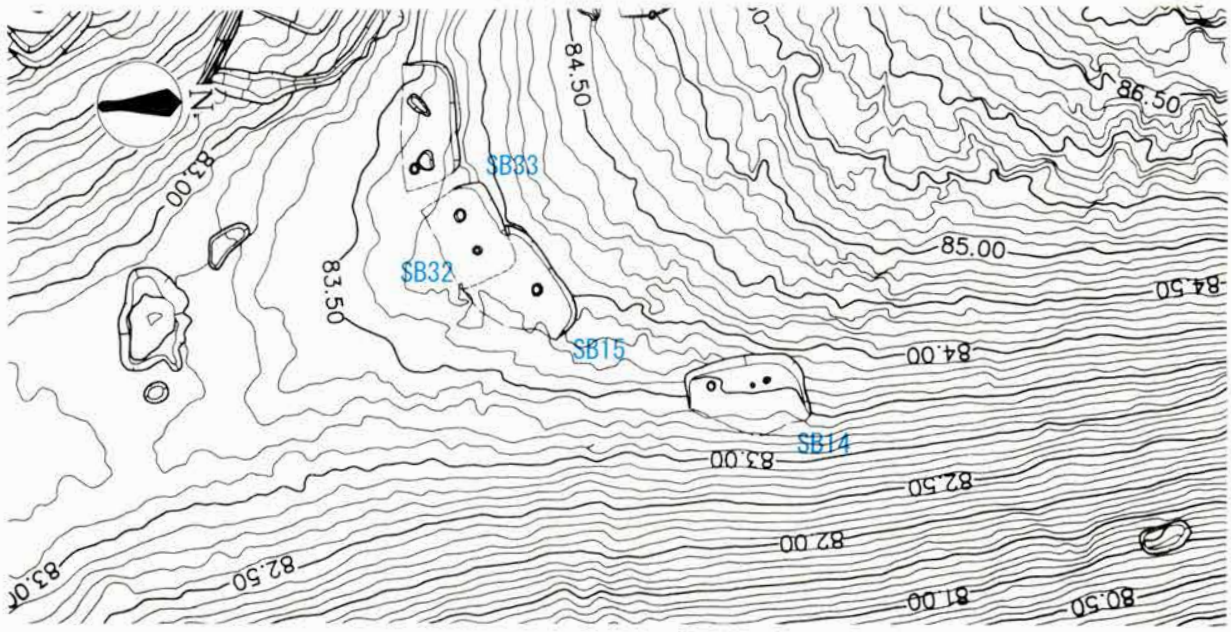
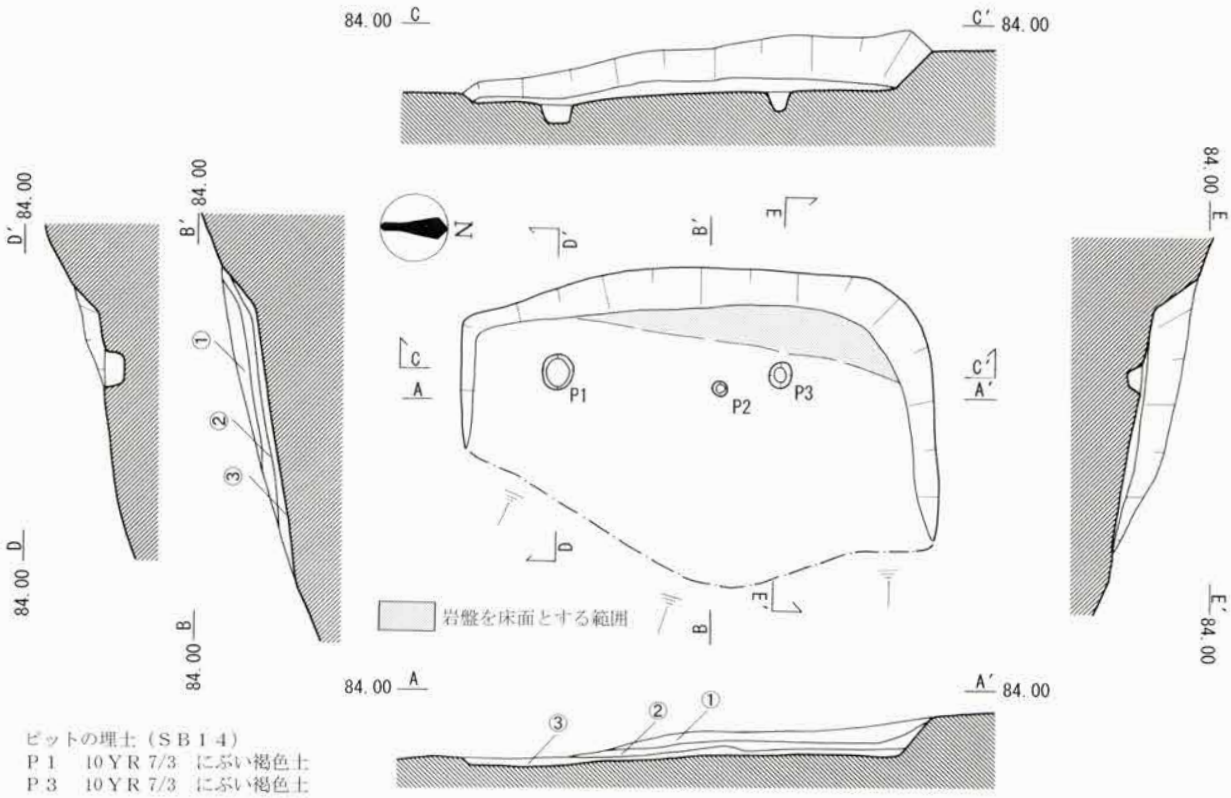


図33　ＳＢ14・15 周辺地形図（1/200）



ピットの埋土（ＳＢ１４）
Ｐ１　10ＹＲ 7/3　にぶい褐色土
Ｐ３　10ＹＲ 7/3　にぶい褐色土

ＳＢ１４の埋土
①　7.5ＹＲ 3/3　暗褐色土（0.5cm～2cmの角砂岩礫を多く含む。しまり有り）
②　10ＹＲ 4/4　褐色土（0.5cm～2cmの角砂岩礫を含む。しまり有り）
③　7.5ＹＲ 5/8　明褐色土（0.5cm～2cmの角砂岩礫を少量含む。しまり有り）

図34　ＳＢ14 実測図

ＳＢ１５

遺構（図35、図版４）

ｑ16グリッドにあり、北尾根から東南方向に派生する尾根に向かう鞍部のゆるやかな傾斜(傾斜度14.3%)地に立地する（周辺地形図は、図33)。南西側をＳＢ32に切られている。隅角は北西隅角の一部および北東隅角が残存し、いずれも丸くおさめられていることが分かる。幅3.40m、残存部の奥行き2.30mを測る。平面形は、正方形であったか長方形であったかは判断できない。壁面及び床面は地山を掘り抜いて形成されている。壁面は山側で最大24cm の深さを確認できるが、流出が著しく残存状況はよくない。住居内の埋没は、壁際から進行しており、自然埋没と判断される。

主柱穴はＰ１を検出したが、やや中央に寄り過ぎているきらいがあり、浅く不明瞭でもある。

壁溝、地床炉は、認められなかった。

遺物（図135、図版34）

土器は、小片ばかり30点が出土したが、図化できたのは、器台受け部の１点（60）のみである。口縁端部を拡張し、やや垂下させて面を形成しているが、無文である。床面に接して出土している。

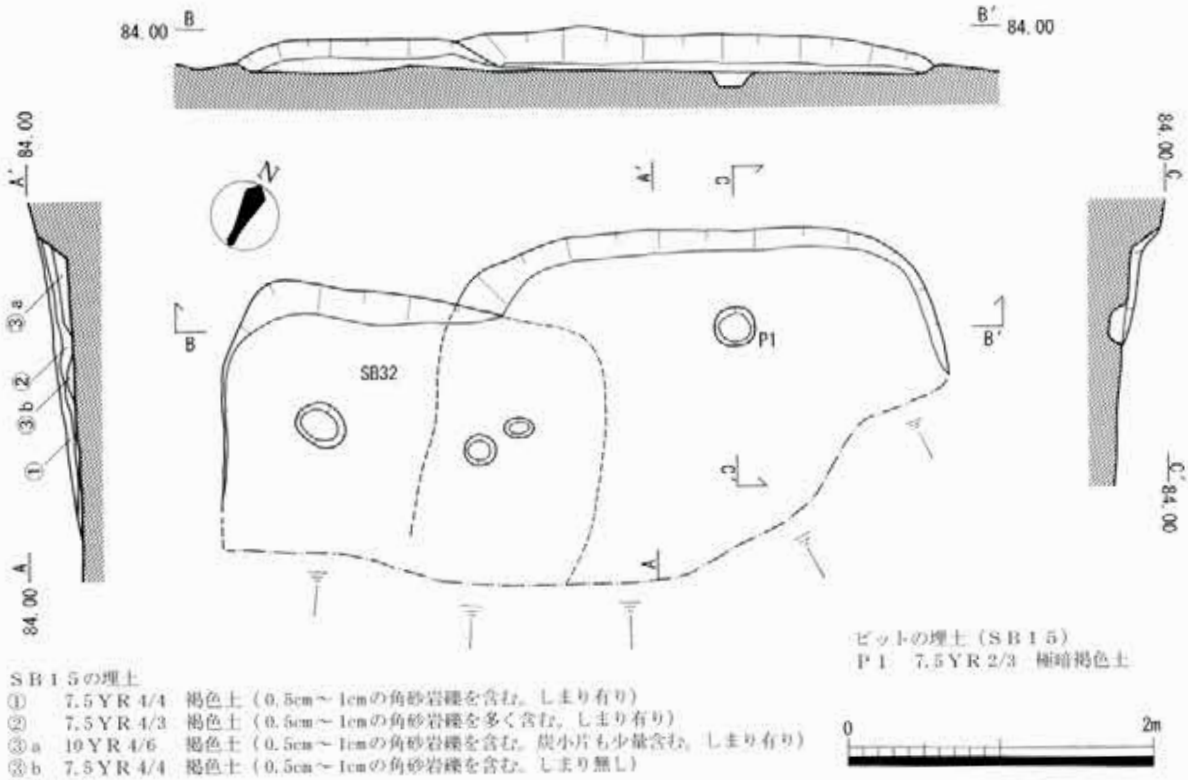


図35　ＳＢ15 実測図

ＳＢ１６

遺構（図37、図版４）

ｓ11グリッドにあり、南谷の、南に向かってくだる緩やかな傾斜(傾斜度14.5%)地に立地する。ＳＢ46に南側を切られている。北にはＳＢ12が、南西にはＳＢ28、35が存在する。隅角は北西・北東隅

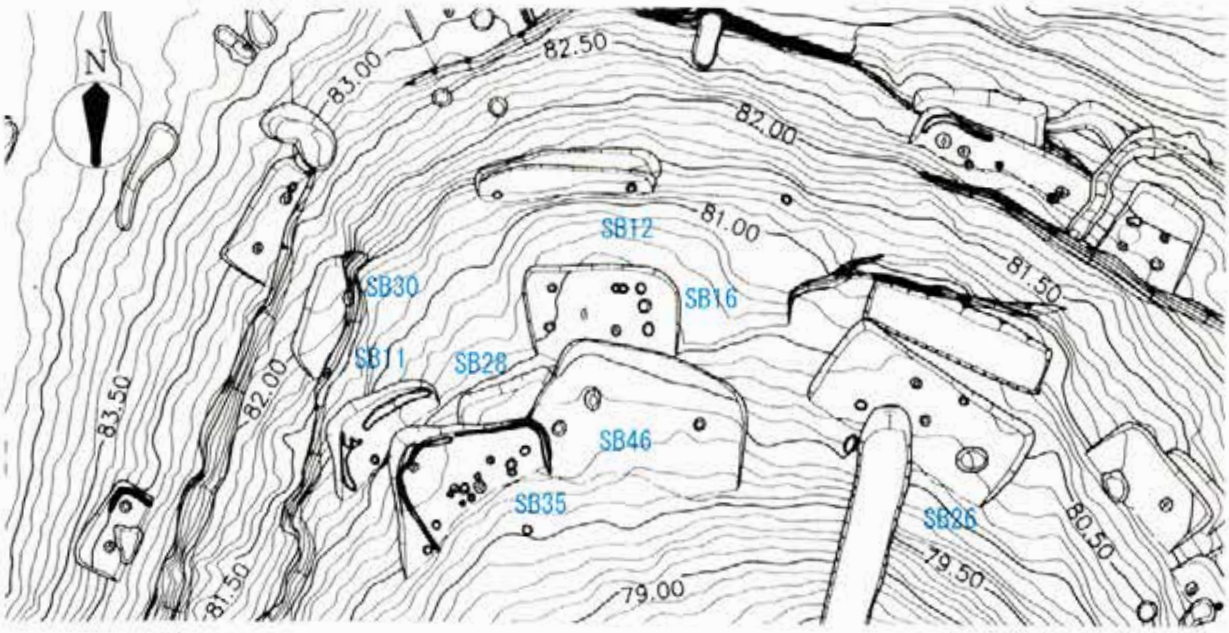


図36　ＳＢ16 周辺地形図（1/200）　0　10m

角が残存し、いずれも丸くおさめられている。幅4.15m、残存部の奥行き2.40mを測る。平面形は、全体の形状および主柱穴（後述）の位置から長方形であった可能性が高い。壁面及び床面は第Ⅳ層と地山を掘り抜いて形成されている。壁面は最大24cm の深さを確認できる。住居内の埋没は、壁際から進行しており、自然埋没と判断される。壁溝は認められなかった。

ピットは８基検出したが、主柱穴はＰ１・Ｐ２、Ｐ６・Ｐ８と考えられる。いずれも浅くやや不明瞭である。

地床炉は、それに該当すると考えられる土坑は検出できなかったが、支柱石と思われる長楕円形の川原石（長軸31cm）を住居中央左寄りに検出した。壁溝は認められなかった。

遺物（図136・137、図版24・34・35）

土器は、合計713点が出土した。このうち図化できたのは30点である。61・63は高坏Ｃ類の坏部と脚部である。62は高坏Ｆ類の脚部であろう。小型の低脚で透かし孔付近から屈曲して大きく広がる。64は器台Ｂ類受け部。65・66は器台または高坏の脚部で、いずれも裾部で外反して広がるが、65は屈曲して広がる。

67は鉢の体部片、68は鉢Ａ類で、当遺跡では唯一確認できた条痕文系の鉢である。屈曲して強く立ち上がる有段の受口状口縁を持つ。体部最大径がやや口径を上回る。調整は、内外面ともにハケ調整を施した後に、特に口縁部を丁寧に横ナデし、その後は縦方向に櫛条痕による調整を二段に施し、最後は底部から上方にミガキ調整を施している。施文は口縁端部外面にヘラ状工具による刻み目を施し、口縁部外面の段にも同様な工具による列点文を巡らせいる。口縁部には櫛条痕は認められない。頸部には11条の櫛による横線文を、その直下に同様な工具による列点文を巡らせる。

69～75は甕であるが、70はＣ類、その他はＤ類である。69は無文の甕で内外面ハケ調整の後、頸部は細かくケズリ調整で整えられている。74は頸部に横線を施していたことが知れる。76は平底甕の底部、77～81は台付甕の台部であるが、このうち、77は甕Ｆ類の台部片である。

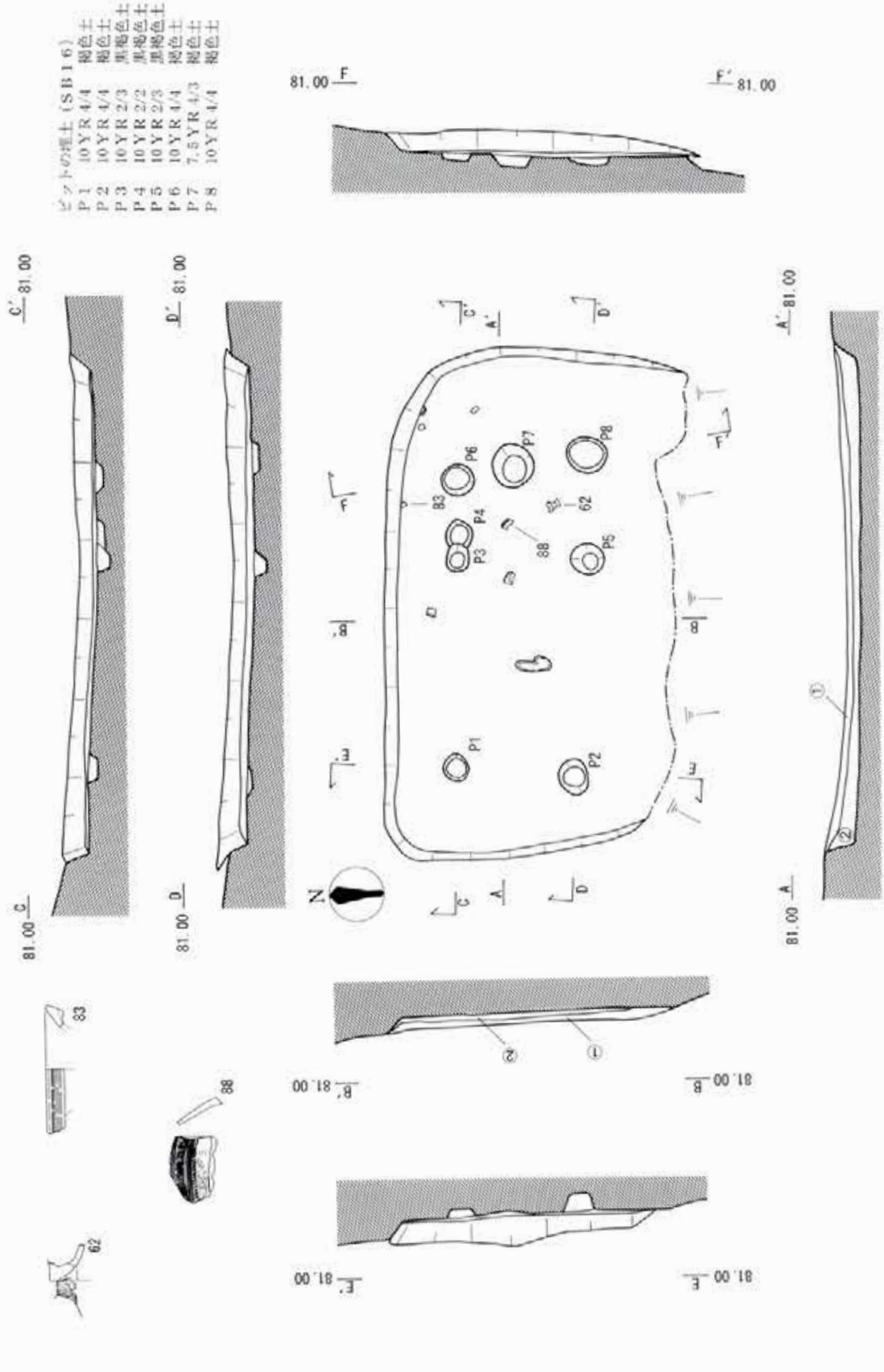

ピットの埋土（ＳＢ１６）
Ｐ１　10ＹＲ 4/4　褐色土
Ｐ２　10ＹＲ 4/4　褐色土
Ｐ３　10ＹＲ 2/3　黒褐色土
Ｐ４　10ＹＲ 2/2　黒褐色土
Ｐ５　10ＹＲ 2/3　黒褐色土
Ｐ６　10ＹＲ 4/4　褐色土
Ｐ７　7.5ＹＲ 4/3　褐色土
Ｐ８　10ＹＲ 4/4　褐色土
ＳＢ１６の埋土
① 10ＹＲ 2/1　黒褐色土（0.5cm～3cmの砂岩礫を含む，しまり無し）
② 10ＹＲ 4/3　にぶい黄褐色土（1cm～3cmの砂岩礫を含む，しまり無し）
81.00 F
F' 81.00
C' 81.00
D' 81.00
81.00 C
81.00 D
A' 81.00
81.00 A
B' 81.00
81.00 B
E' 81.00
81.00 E
P1
P2
P3
P4
P5
P6
P7
P8
83
88
62
N
0
2m

図37　ＳＢ16 実測図

82～90は壷である。82～84は壷Ｂ1類でいずれも口縁端部外面に擬凹線を巡らすが、84には、口縁端部の拡張は見られない。85ａ、85ｂ、85ｃは同一個体で、壷Ｂ類の体部で最大径は下位に位置する。頸部から肩部にかけて横線を二段、列点文を三段に施している。また、いずれの破片にも弧線や直線による線刻が認められる。86は、壷Ｄ2類で口縁部が緩やかに内彎し、端部外面に横線を施す。87～89は壷Ｂ類の体部片で、横線と不連続の波状文（89）横線と弧帯文及び列点文（88）、横線と列点文（89）と様々なバリエーションが見られる。90は壷Ｄ類の底部と考えられるが、焼成前に空けられた穿孔がある。

以上のうち61、63～69、71、72、74、75、79～81、84、90の17点は、①層からの出土であり、斜面上部の遺構からの流れ込みである可能性がある。床面直上から出土したＳ字状口縁台付甕台部（77）は胎土分析の結果からも、Ａ類であることが裏付けられており、この住居の上限を示すものと考えられる。

ＳＢ１７

遺構（図39、図版４）

ｔ14グリッドにあり、南谷の、南西に向かってくだる極めて急な傾斜(傾斜度32.1%)地に立地する。ＳＢ48に南側を大きく切られ、残存部分はごくわずかである。南には、ＳＢ18、19が近接する。隅角は北西・北東隅角が残存し、いずれも丸くおさめられている。幅2.40m、残存部の奥行き0.90mを測る。平面形は、正方形であったか長方形であったかは判断できない。壁面及び床面は地山を掘り抜いて形成されている。壁面は最大26cm の深さを確認できるが、急斜面に立地するため、谷側の流出が著しく、残存状況はよくない。住居内の埋没は、壁際から進行しており、自然埋没と判断される。

壁溝、主柱穴、地床炉は、検出した床面には認められなかった。

遺物

土器は、小片ばかり38点が出土したが、図化できるものはなかった。

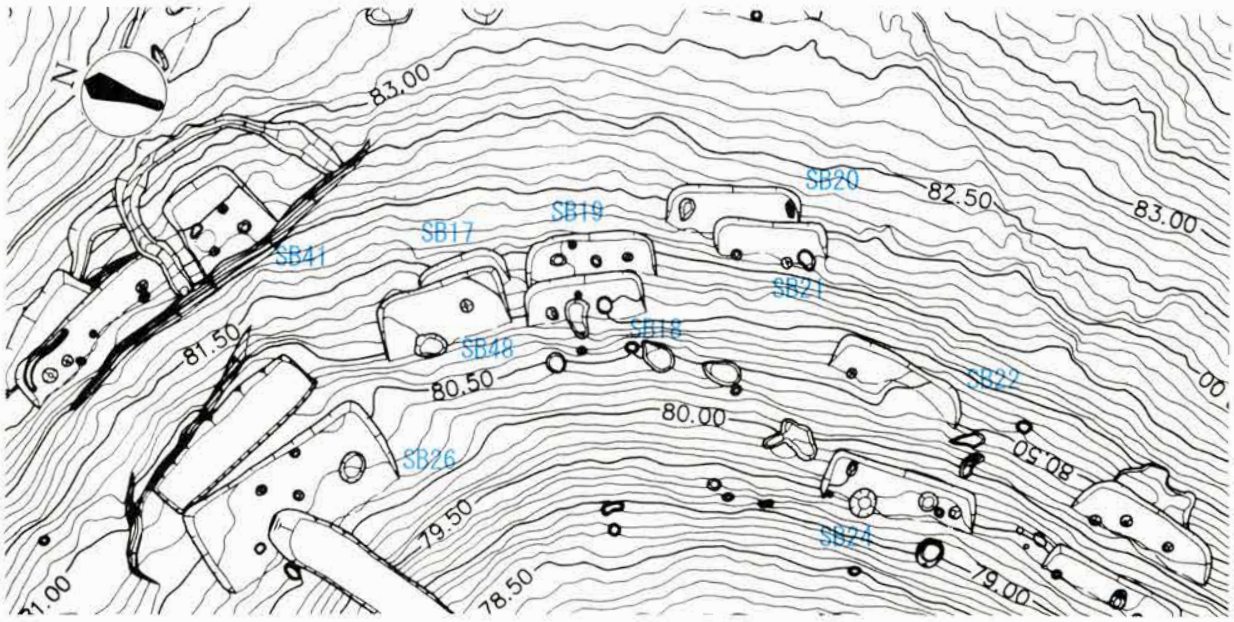
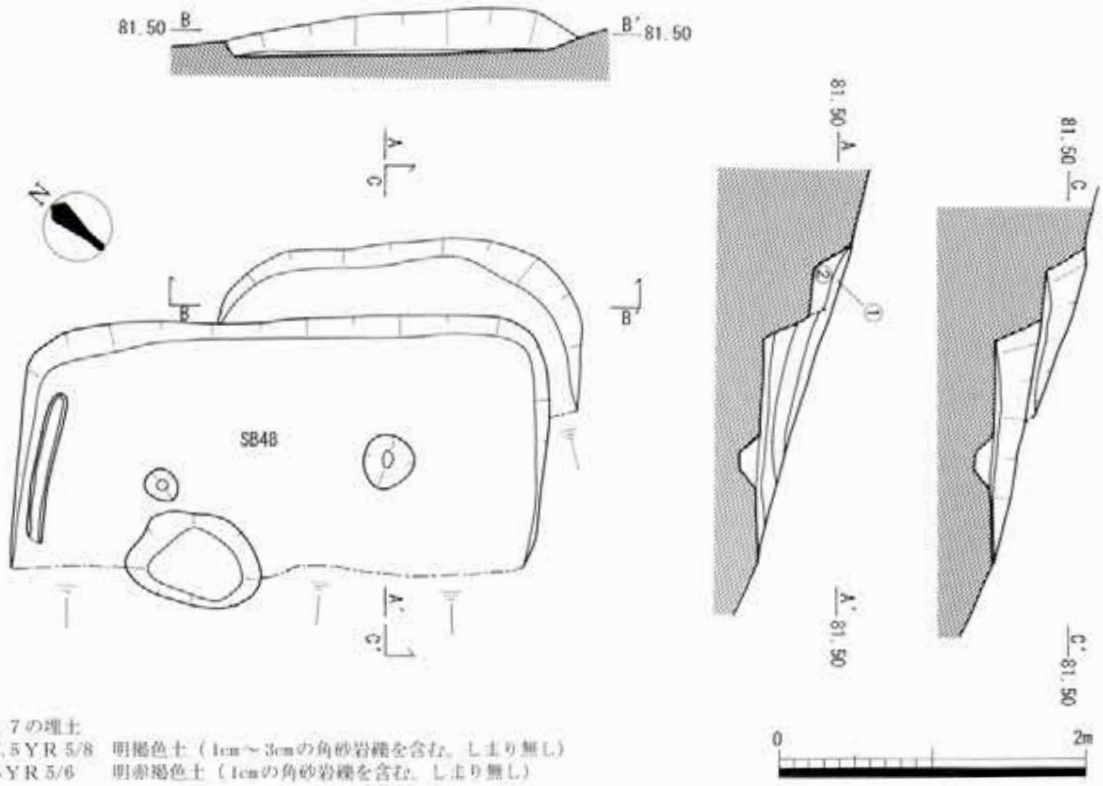


図38　ＳＢ17～22 周辺地形図（1/200）

0　10m



ＳＢ１７の埋土
① 7.5ＹＲ 5/8　明褐色土（1cm～3cmの角砂岩礫を含む。しまり無し）
② 5ＹＲ 5/6　明赤褐色土（1cmの角砂岩礫を含む。しまり無し）

図39　ＳＢ17 実測図

ＳＢ１８

遺構（図40、図版４）

ｕ14グリッドにあり、南谷の、南西に向かってくだる極めて急な傾斜（傾斜度30.3%）地に立地する。ＳＢ19を切って掘削されている。北にＳＢ17が、南東にＳＢ20・21が近接する（周辺地形図は、図38）。隅角は山側の北東隅角、南東隅角が残存し、いずれも丸くおさめられている。幅3.20m、残存部の奥行き1.33mを測る。平面形は、正方形であったか長方形であったかは不明である。壁面及び床面は地山を掘り抜いて形成されており、壁面の深さは、山側で最大30cmを確認できるものの、急斜面に立地するため谷側は著しく流出しており、残存状況はよくない。主柱穴はＰ１・Ｐ４を検出した。Ｐ１は浅く不明瞭ではあるが、Ｐ４は直径10cmの小さい穴ながら、深さは40センチに及ぶ。平面図では住居外に存在するＰ13・16が、Ｐ1・Ｐ4に対応する位置にあるが、高低差が大きくその可能性は低いと考えられる。急傾斜地の住居が床面を確保するために谷側に板張りで床を架設していたとすれば、それを支える柱の位置としてはその可能性を考え得るのかもしれないが、板張りの床を谷側に張り出していたことをうかがわせる形跡は、本調査では確認できていない。

地床炉は、それに該当する可能性が考えられるものとして、最大深さ13cmの浅い土坑（ＳＫ１）を検出したが、支柱石は認められなかった。

壁溝は、検出した床面には認められなかった。

ピットの埋土（SB18）
P1　7.5YR 4/4　褐色土
P3　7.5YR 4/3　褐色土
P4　7.5YR 4/6　褐色土

SK1の埋土（SB18）
7.5YR 4/4　褐色土

ピット埋土（SB19）
P1　1　7.5YR 3/3　暗褐色土
　　2　7.5YR 4/3　褐色土
P3　　7.5YR 3/3　暗褐色土
P4　　7.5YR 3/3　暗褐色土

SB18の埋土
①　7.5YR 3/3　暗褐色土（7.5YR 3/2黒褐色土を斑状に含む。1cm～2cmの角砂岩礫を多く含む。しまり有り）

SB19の埋土
①　7.5YR 3/3　暗褐色土（0.5cm～3cmの角砂岩礫を多く含む。しまり無し）

P13の埋土
1　7.5YR 3/4　暗褐色土
2　7.5YR 4/4　褐色土

P16の埋土
1　7.5YR 3/3　暗褐色土
2　7.5YR 3/6　褐色土

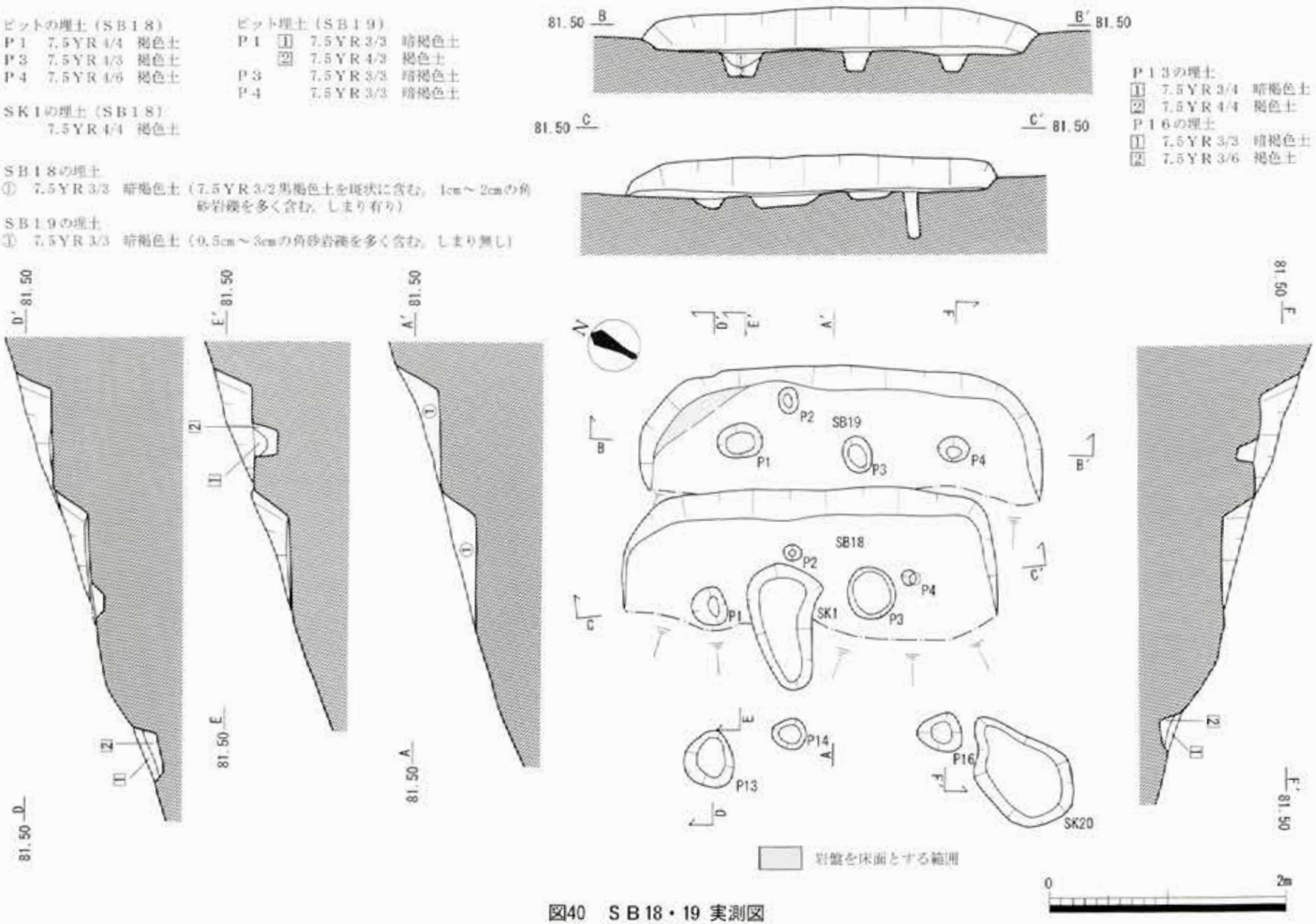


図40　SB18・19 実測図

遺物（図137）

土器は小片ばかり94点が出土したが、 3点を図化した。91は高坏または器台の脚部で、裾部は外反して開く。92は平底甕の底部、93は台付甕の台部である。下層からの出土である。

ＳＢ１９

遺構（図40、図版４）

ｕ15グリッドにあり、南谷の、南西に向かってくだる極めて急な傾斜(傾斜度30.3%)地に立地する。南西側をＳＢ18が切っている。北にＳＢ17・48が、南東にＳＢ20・21が近接する（周辺地形図は、図38)。隅角は山側の北東隅角、南東隅角が残存し、いずれも丸くおさめられている。幅3.44m、残存部の奥行き1.08mを測る。平面形は、正方形であったか長方形であったかは不明である。山側の壁面及び床面の一部は岩盤を掘り抜いて形成されており、壁面の深さは、山側で最大30cm を確認できるものの、急斜面に立地するため谷側は著しく流出しており、残存状況はよくない。

主柱穴はＰ１・Ｐ４を検出した。

壁溝、地床炉は、検出した床面には認められなかった。

遺物（図137、図版35）

土器は、小片ばかり67点が出土したが、図化できたのは２点である。94は鉢Ｂ類の口縁部で、緩やかに内彎しつつ長く外傾する。95は高坏Ｃ類の基部である。床面に接した位置からの出土である。

ＳＢ２０

遺構（図41、図版５）

ｕ15グリッドにあり、南谷の、西南西に向かってくだる極めて急な傾斜（傾斜度33.7%）地に立地する。ＳＢ21を切って造られている。北西にＳＢ18・19が近接する（周辺地形図は、図38)。隅角は山

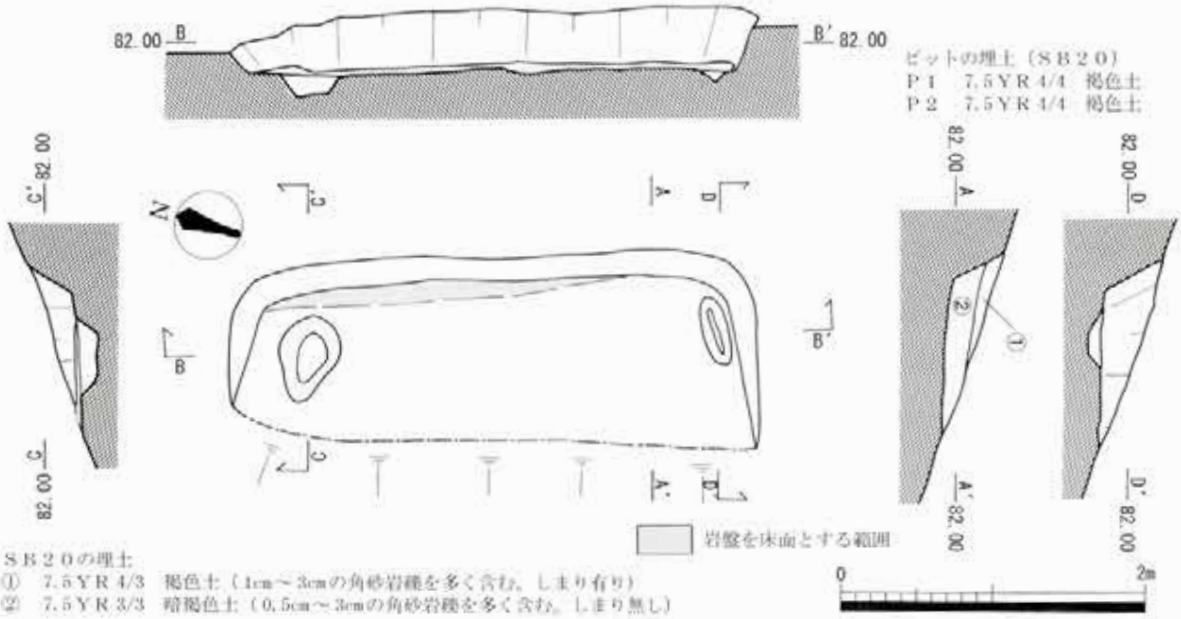


図41　ＳＢ20 実測図

側の北東隅角、南東隅角が残存し、いずれも丸くおさめられている。幅3.48m、残存部の奥行き1.30mを測る。平面形は、不明である。壁面及び床面は岩盤や地山を掘り抜いて形成されており、壁面の深さは、山側で最大26cmを確認できるものの、急斜面に立地するため谷側は著しく流出しており、残存状況はよくない。住居内の埋没は壁際から進行しており、自然埋没と判断される。

主柱穴はＰ１を検出したが、壁際に寄った位置である。

壁溝、地床炉は、検出した床面には認められなかった。

遺物（図137、図版25）

土器は、小片ばかり73点が出土したが、図化できたのは１点である。96は甕Ｄ類で、長く外傾したくの字状口縁部を持つ。端部は平坦面を造る。床面に接して出土している。

ＳＢ２１

遺構（図42、図版５）

ｕ15グリッドにあり、南谷の、西南西に向かってくだる極めて急な傾斜（傾斜度36.8%）地に立地する。ＳＢ20に北東側を切られている。北西にＳＢ18・19が、南西にＳＢ22が近接する（周辺地形図は、図38）。隅角は山側の北東隅角、南東隅角が残存し、いずれも丸くおさめられている。幅2.94m、残存部の奥行き1.06mを測る。平面形は不明である。壁面及び床面の一部は砂岩の岩盤を掘り抜いて形成されており、壁面の深さは山側で最大30cmを確認できるものの、急斜面に立地するため谷側は著しく流出しており、残存状況はよくない。住居内の埋没は壁際から進行している。

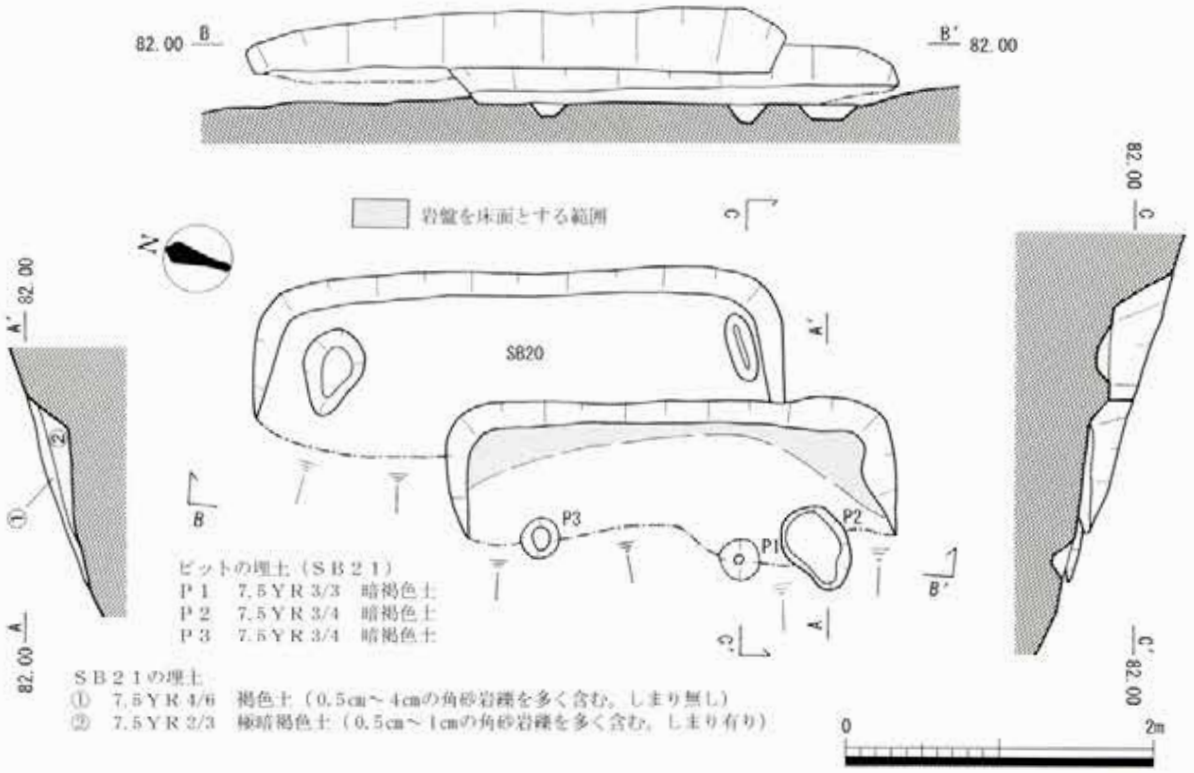


図42　ＳＢ21 実測図

主柱穴はＰ１・Ｐ２を検出した。

地床炉は、最大深さ10cm の浅い土坑（ＳＫ１）が、それに該当する可能性があるが、他の住居と比較して壁側に著しく寄った位置である。

壁溝は検出した床面には認められなかった。

遺物

土器は、小片ばかり33点が出土したが、図化できるものはなかった。

ＳＢ２２

遺構（図43、図版５）

ｖ15グリッドにあり、南谷の、南西に向かってくだる極めて急な傾斜（傾斜度33.8%）地に立地する。北東にＳＢ20・21が、南西にＳＢ24が近接する（周辺地形図は、図38）。隅角は山側の北東隅角、南東隅角が残存し、いずれも丸くおさめられている。幅3.74m、残存部の奥行き1.34mを測る。平面形は不明である。山側の壁面及び床面は砂岩の岩盤を掘り抜いており、壁面の深さは、山側で最大32cm を確認できるが、急斜面に立地するため谷側は著しく流出しており、残存状況はよくない。

主柱穴はＰ１を検出した。やや小ぶりながら深く掘り込んでいる。

壁溝、地床炉は、検出した床面には認められなかった。

遺物

土器は、１点も出土しなかった。

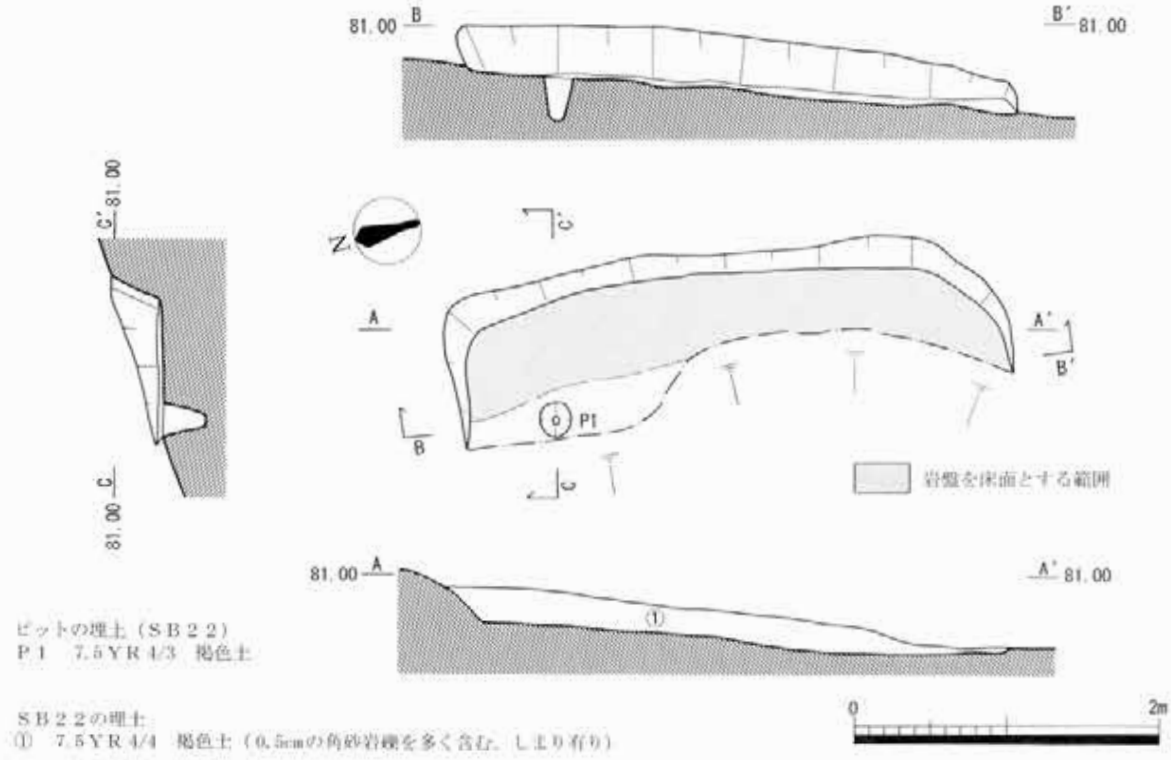


図43　ＳＢ22 実測図

ＳＢ２３

遺構（図45、図版５）

ｕ12グリッドにあり、南谷の、南東に向かってくだる急な傾斜（傾斜度18.9%）地に単独で立地する。隅角は北西、北東隅角が残存し、いずれも丸くおさめられている。幅3.24m、残存部の奥行き2.76mを測る。平面形は、正方形であったと考えられる。壁面及び床面はⅣ層および地山を深く掘り抜いて形成されており、壁面の深さは、山側で最大56cmを確認できる。残存状況は良好な部類に入る。住居内の埋没は、壁際から進行しており、自然埋没と判断される。

主柱穴はＰ１・Ｐ２を検出したが、Ｐ１はやや壁に寄った位置である。

地床炉は、中央南寄りに検出した。最大深さ10cmの浅い土坑（ＳＫ１）に、長さ40cmの長楕円形の河原石を支柱石として土坑の南寄りに横位に置いている。土坑の埋土には、炭小片が多く含まれていた。

壁溝は認められなかった。

遺物（図46・138、図版25・35）

土器は427点が出土し、このうち14点を図示した。97・98は鉢の頸部付近の体部片で、頸部に横線を巡らしその直下に列点文を施している。99～102は甕の口縁部であるが、102がＣ類、他はＤ類である。102は頸部に横線を巡らしている。99・100は外反し、101はやや内彎する。103・104は平底甕の底部である。105・106は台付甕の台部である。107・109は壷Ｂ１類で、107は端部を拡張しているが、端部外面には加飾は見られない。口縁内面にはヘラ描き羽状文を施している。109は口縁の端部をわずかに上下に拡張し稜をなすが、無文である。108は壷Ａ2類で、口縁内面に平坦面を形成し、ヘラ描き羽状文を施している。口縁の端部は上下に拡張し稜をなす。端部外面には擬凹線を施す。また、外面には赤彩が残る。110は壷Ａ類の底部で、外面には赤彩が施されている。

このうち98・102・105・108が床面直上の出土であり、この住居の上限を示す資料である。

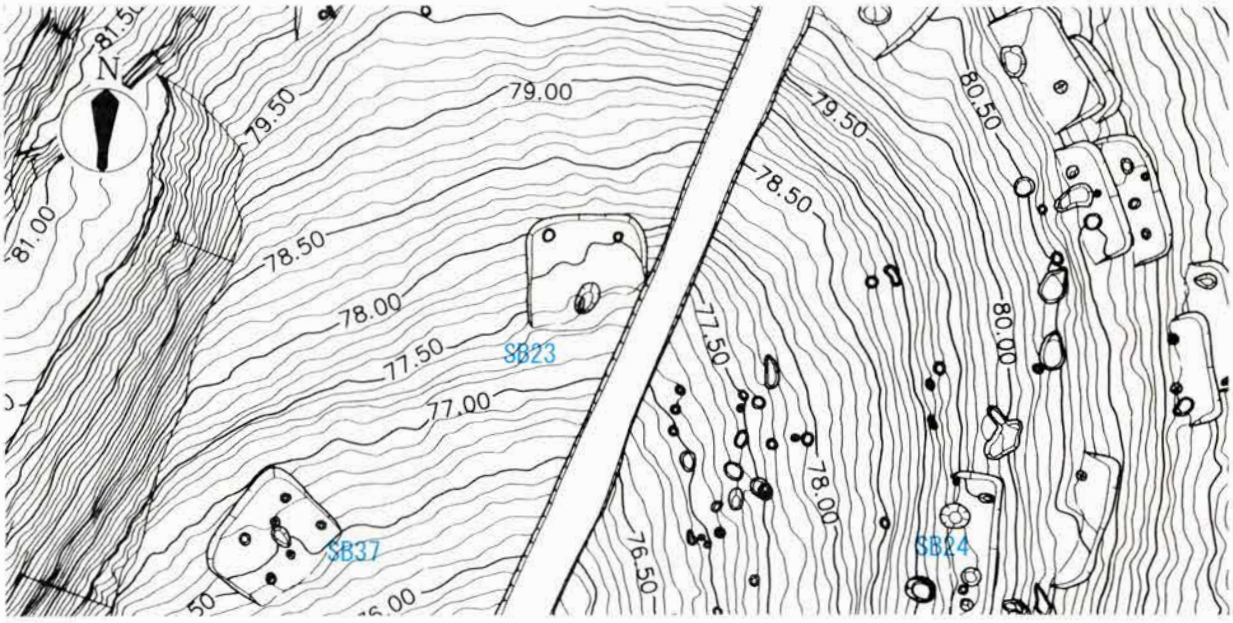
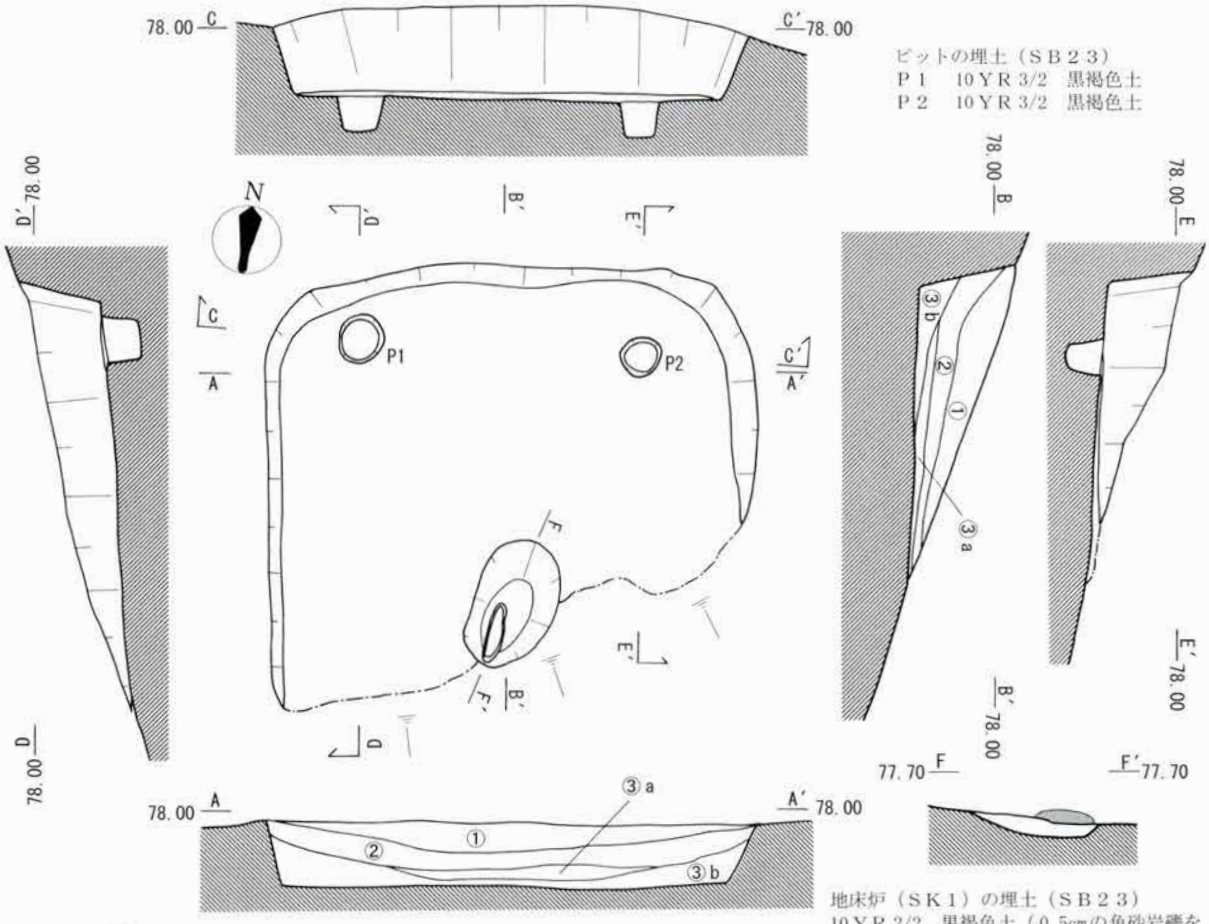


図44　ＳＢ23 周辺地形図（1/200）



ＳＢ２３の埋土
①　7.5ＹＲ 1.7/1　黒色土（1cmの角砂岩礫を多く含む。しまり無し）
②　7.5ＹＲ 3/3　暗褐色土（1cm～3cmの角砂岩礫を含む。しまり無し）
③a　7.5ＹＲ 3/2　黒褐色土（1cm～3cmの角砂岩礫を少量含む。しまり無し）
③b　7.5ＹＲ 2/1　黒色土（しまり無し）

地床炉（ＳＫ１）の埋土（ＳＢ２３）
10ＹＲ 2/2　黒褐色土（0.5cmの角砂岩礫を少量含む。炭小片を多く含む。しまり有り）

0　2m

図45　ＳＢ23 実測図

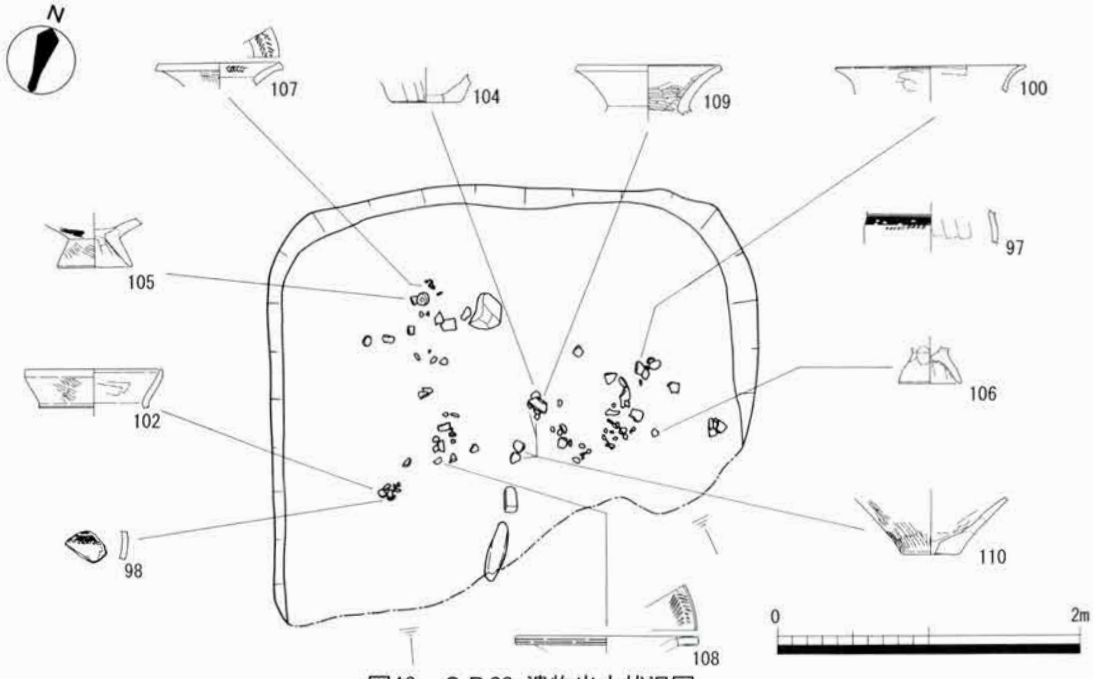


図46　ＳＢ23 遺物出土状況図

ＳＢ２４

遺構（図47、図版５）

ｖ14グリッドにあり、南谷の南西に向かってくだるきわめて急な傾斜（傾斜度39.2%）地に立地する（周辺地形図は、図48）。東にはＳＢ22が、南にはＳＢ25・27が近接する。隅角は北東、南東隅角が残存し、いずれも丸くおさめられている。幅4.10m、残存部の奥行き1.38mを測る。平面形は正方形であったか長方形であったかは不明であるが、この傾斜地に幅と同じ長さの奥行きを確保することは困難ではある。山側壁面及び床面の一部は岩盤を他は地山を掘り抜いて形成されており、壁面の最大深さは40cm を確認できるものの、急斜面に立地するためは著しく流出しており、残存状況はよくない。住居内の埋没は、壁際から進行しており、自然埋没と判断される。

主柱穴はＰ２・Ｐ６を検出したが、やや壁に寄った位置である。Ｐ２はやや浅く不明瞭である。

地床炉は、最大深さ８cm の浅い土坑（Ｐ３）が、それに該当する可能性がある。支柱石は認められなかった。

壁溝は、検出した床面には認められなかった。

遺物

土器は、１点も出土しなかった。

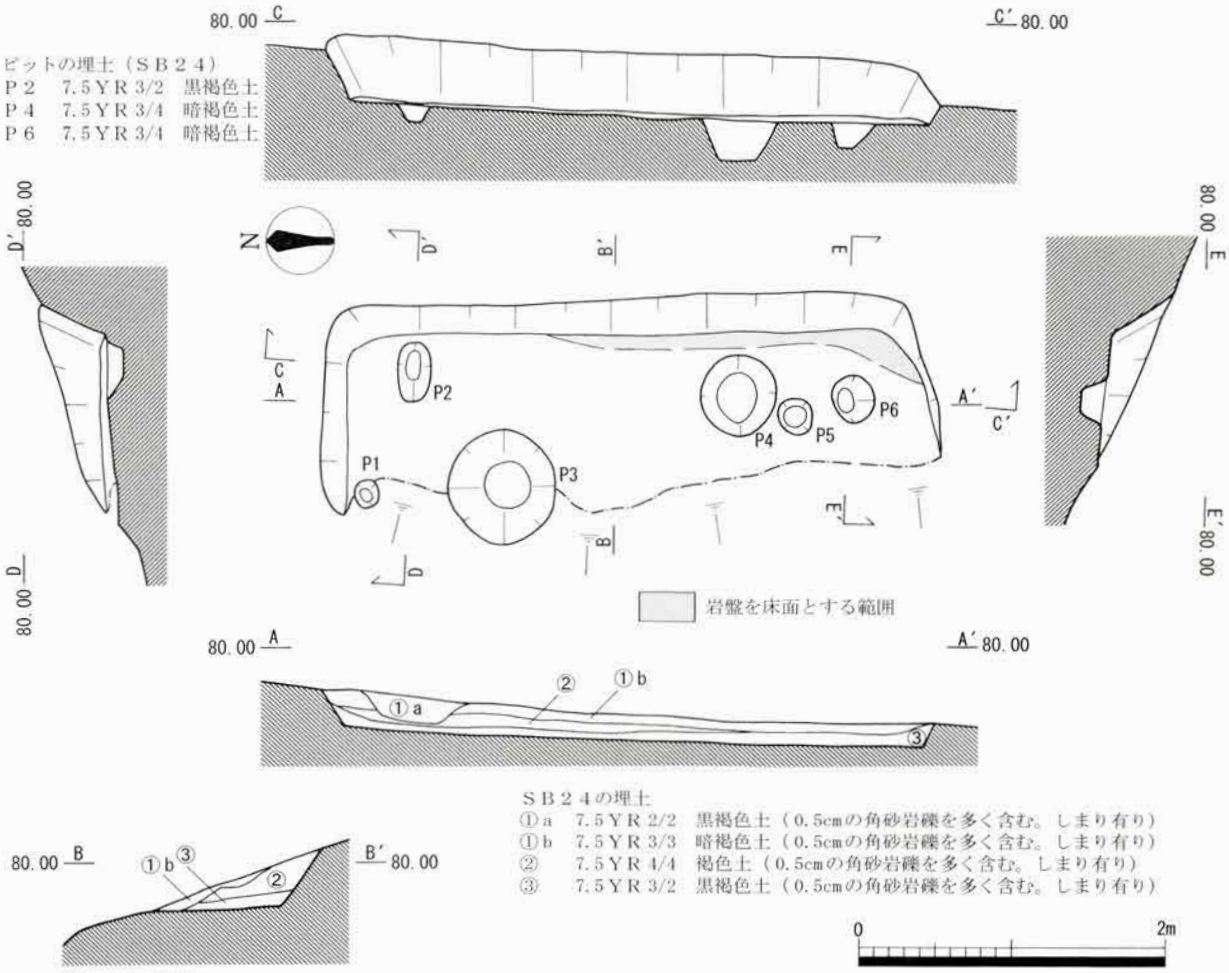


図47　ＳＢ24 実測図

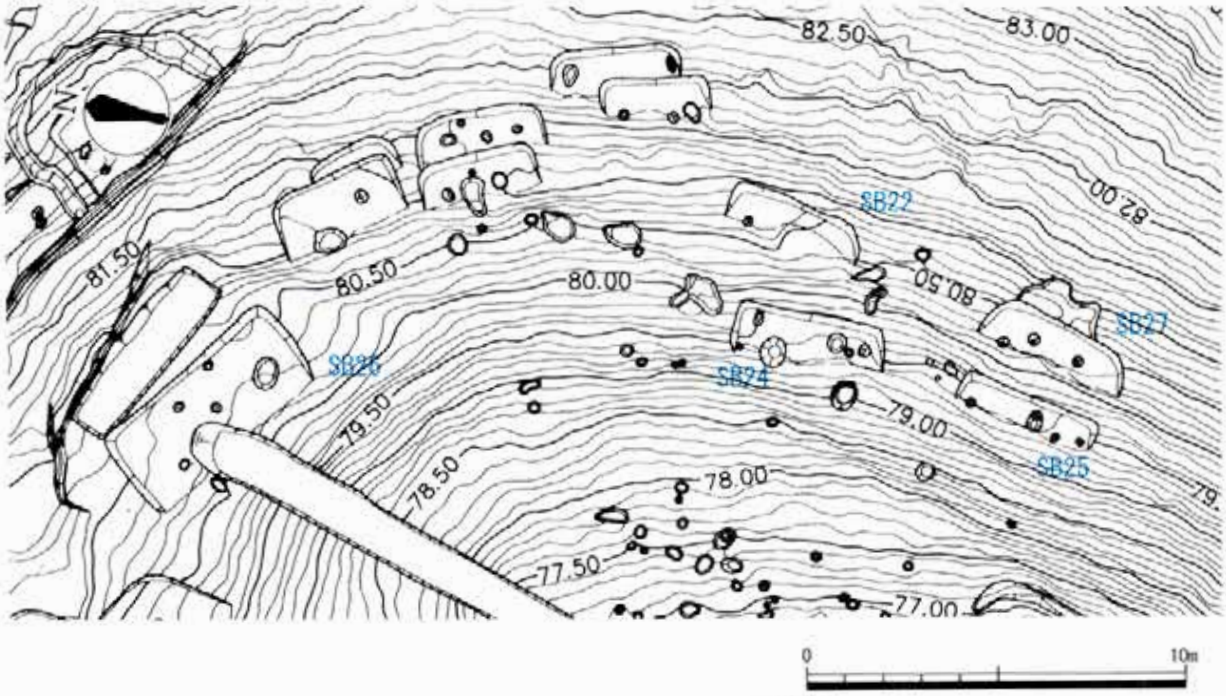


図48　ＳＢ24～27 周辺地形図（1/200）

ＳＢ２５

遺構（図49、図版５）

ｘ14グリッドにあり、南谷の、南西に向かってくだる極めて急な傾斜(傾斜度43.9%)地に立地する(周辺地形図は、図48)。当遺跡の住居跡の中でも、ＳＢ27と並んで最も傾斜の強い場所に位置する住居である。この辺りの斜面は上る際も手を着かないと登りづらく、立っているのがやっとという状況

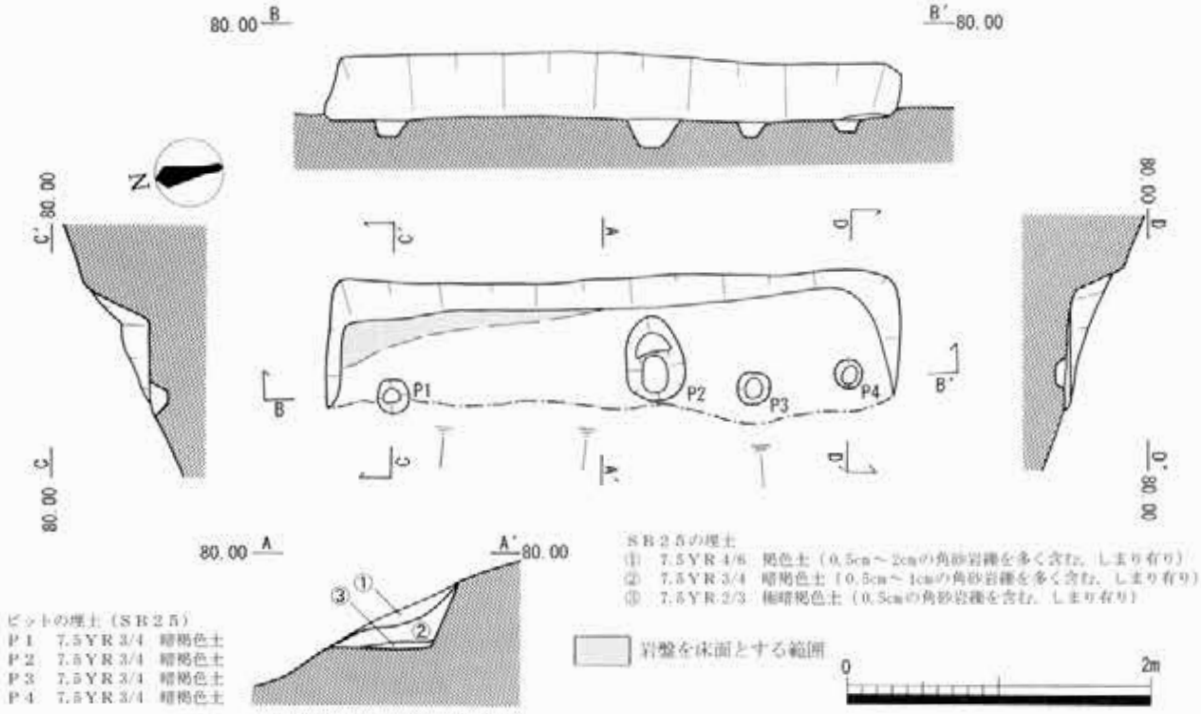


図49　ＳＢ25 実測図

である。東にはＳＢ27が、北にはＳＢ22・24が近接する。隅角は北東・南東隅角が残存し、前者は角張り、後者は丸くおさめられている。幅3.76m、残存部の奥行き0.96mを測る。平面形は、正方形であったか長方形であったかは判断できないが、この傾斜地に幅と同じ長さの奥行きを確保することは困難ではある。山側の壁面及び床面の一部は岩盤、他は地山を掘り抜いて形成されている。壁面は山側で最大40cmの深さを確認できるものの、急斜面に立地するため流出が著しく、残存状況はよくない。住居内の埋没は、壁際から進行しており、自然埋没と判断される。

主柱穴はＰ１・Ｐ４と思われるが、やや壁に寄った位置であり、やや浅く不明瞭である。

壁溝、地床炉は、認められなかった。

遺物

土器は、１点も出土しなかった。

ＳＢ２６

遺構（図50、図版５）

ｔ13グリッドにあり、南谷の、西南西に向かってくだるやや急な傾斜（傾斜度24.5%）地に立地する。南側の床面の一部を試掘トレンチによって破壊されている。西には、ＳＢ16・46が、東にはＳＢ48、35が近接する（周辺地形図は、図48）。隅角は北西・北東隅角が残存し、いずれも丸くおさめられている。幅5.60m、残存部の奥行き2.50mを測り、当遺跡の住居跡中第３位の幅を持つ。平面形は、正方形であったか長方形であったかは判断できない。壁面及び床面は第Ⅳ層と地山を掘り抜いて形成されている。壁面は最大24cmの深さを確認できる。住居内の埋没は、壁際から進行しており、自然埋没と判断される。 壁溝は認められなかった。

ピットは４基検出したが、不規則な配置であり、主柱穴に当たるものを特定できないが、Ｐ１はそのうちの一つである可能性が高いと考えられる。

地床炉は、それに該当すると考えられる土坑として最大深さ12cmのＳＫ１を検出したが、やや壁に寄った位置である。支柱石は認められなかった。

壁溝は認められなかった。

遺物（図138、図版25・35）

土器は、合計400点が出土した。このうち図化できたのは８点である。111は高坏Ｃ類で、緩やかに内彎しつつ長く外傾する口縁の端部外面に横線を巡らす。112は鉢Ｃ類で、緩やかに内彎しつつ長く外傾する口縁を持ち、端部外面に横線を巡らす、外面にはミガキ調整が施されている。小型品である。113・114は甕Ｄ類で、前者は長く直線的に外傾する口縁を持ち、端部には平坦面を持つ。後者の口縁は厚く短く外反する。115は甕Ｇ１類で、有段口縁の外面に擬凹線を巡らし、法仏・月影式の甕と考えられる。116は、甕の体部片で横線と列点文を施す。117はミニチュア土器で、台付甕を模したものだろう。118は壺Ｂ類の底部である。

床面直上から出土した111・112が、この住居の時期を示すものといえる。

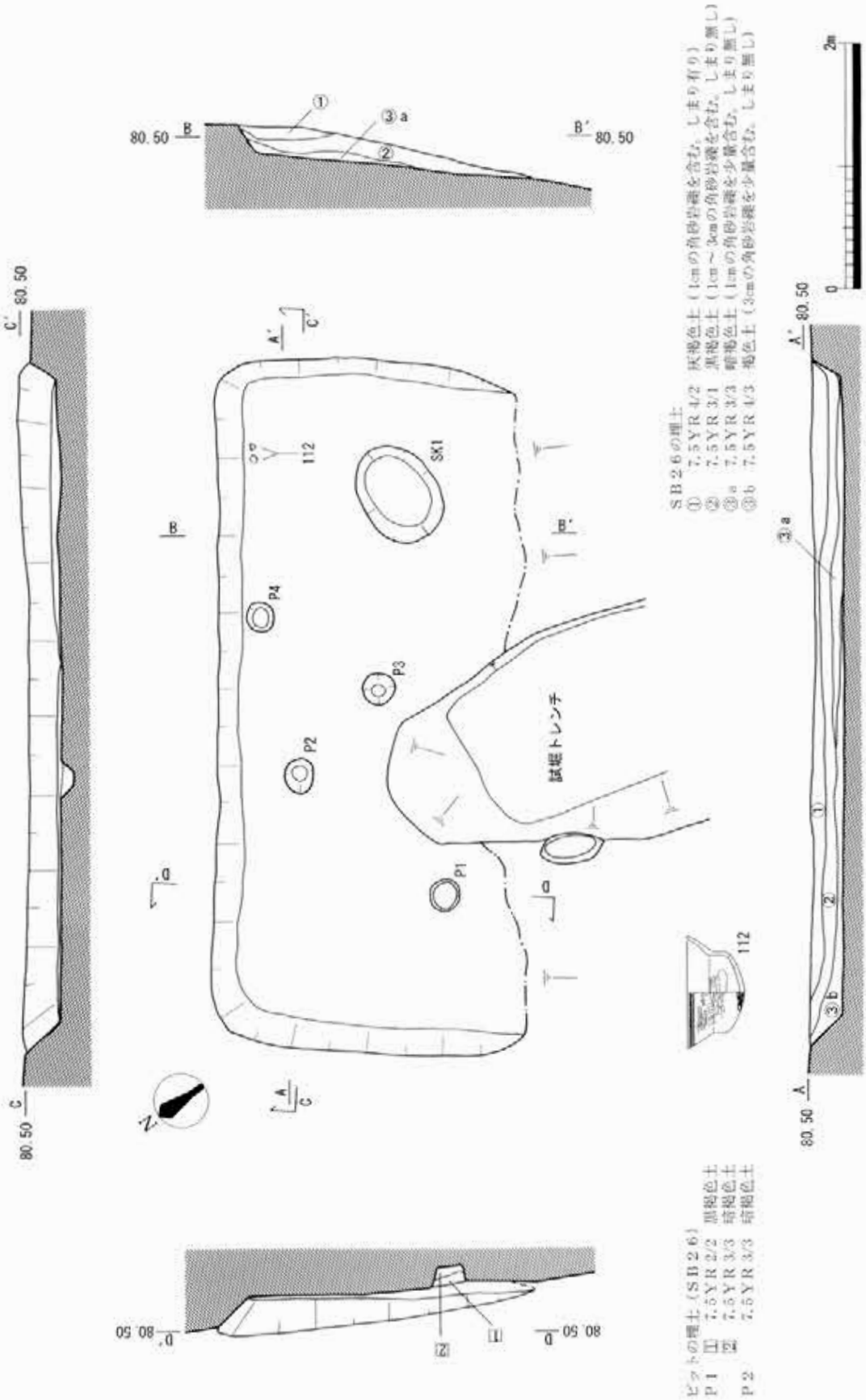

SB26の埋土
① 7.5YR 4/2 灰褐色土（1cmの角砂岩礫を含む、しまり有り）
② 7.5YR 3/1 黒褐色土（1cm～3cmの角砂岩礫を含む、しまり無し）
③a 7.5YR 3/3 暗褐色土（1cmの角砂岩礫を少量含む、しまり無し）
③b 7.5YR 4/3 褐色土（3cmの角砂岩礫を少量含む、しまり無し）
ピットの埋土（SB26）
P1 Ⅰ層 7.5YR 2/2 黒褐色土
Ⅱ層 7.5YR 3/3 暗褐色土
P2 7.5YR 3/3 暗褐色土
80.50
A
A'
B
B'
C
C'
D
D'
112
SK1
P1
P2
P3
P4
試掘トレンチ
2m
0

図50　ＳＢ26 実測図

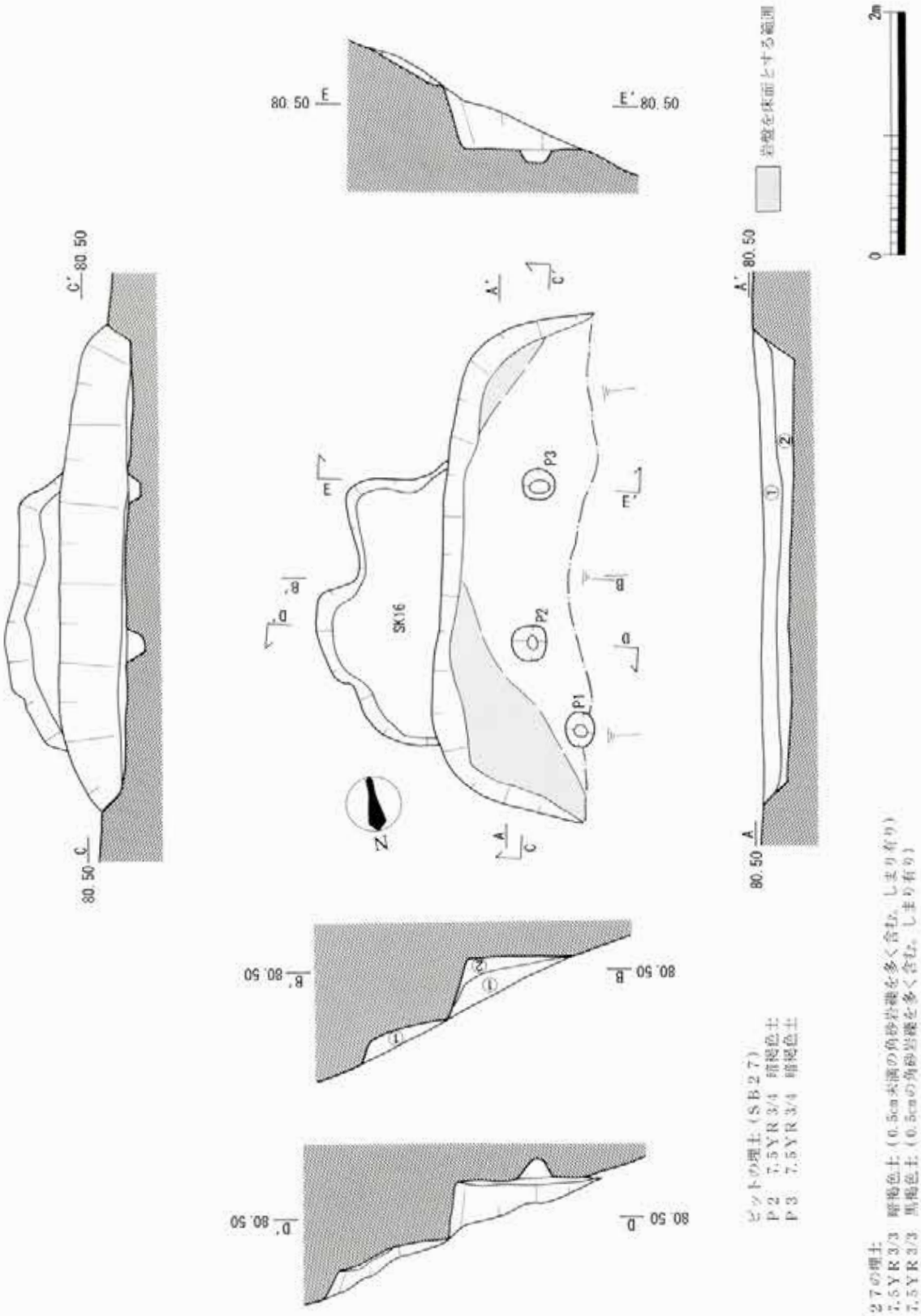

80.50 C
C' 80.50
80.50 D
D' 80.50
80.50 B
B' 80.50
80.50 E
E' 80.50
80.50 A
A' 80.50
SK16
P1
P2
P3
N
岩盤を床面とする範囲
0
2m
ピットの埋土（SB27）
P2　7.5YR 3/4　暗褐色土
P3　7.5YR 3/4　暗褐色土
SB27の埋土
①　7.5YR 3/3　暗褐色土（0.5cm未満の角砂岩礫を多く含む。しまり有り）
②　7.5YR 3/3　黒褐色土（0.5cmの角砂岩礫を多く含む。しまり有り）

図51　SB27 実測図

ＳＢ２７

遺構（図51、図版５）

ｘ14グリッドにあり、南谷の、南西に向かってくだる極めて急な傾斜(傾斜度43.9%)地に立地する（周辺地形図は、図48)。ＳＢ25とともに、当遺跡の住居跡の中で最も傾斜の強い場所に位置する住居である。東にはＳＫ16が隣接し、西にはＳＢ25が、北にはＳＢ22・24が近接する。隅角は北東・南東隅角が残存し、いずれも丸くおさめられている。幅3.96m、残存部の奥行き1.34mを測る。平面形は、正方形であったか長方形であったかは判断できないが、この傾斜地に幅と同じ長さの奥行きを確保することは困難ではある。山側の壁面及び床面の一部は砂岩の岩盤、他は地山を掘り抜いて形成されている。壁面は山側で最大46cm の深さを確認できるものの、急斜面に立地するため流出が著しく、残存状況はよくない。住居内の埋没は、壁際から進行しており、自然埋没と判断される。

主柱穴はＰ２・Ｐ３を検出したが、いずれも浅く不明瞭である。

壁溝、地床炉は、認められなかった。

調査時には、ＳＫ16は不整形であることから、ＳＢ27の付属施設とは考えず別遺構とし、当住居はＳＫ16を切って造られたものと考えた。しかし、土層観察ではそれを明確に裏付ける結果は得られなかった。むしろ、両遺構の連続性を断面図で確認すると、不整形ながらもＳＢ03やＳＢ12に見られるようなテラス状の付属施設と考える方が自然かもしれない。、

遺物（図139）

土器は、小片ばかり36点が出土したが、図化できたのは、台付甕の台部１点（119）のみである。床面に近い位置からの出土である。

ＳＢ２８

遺構（図53、図版５）

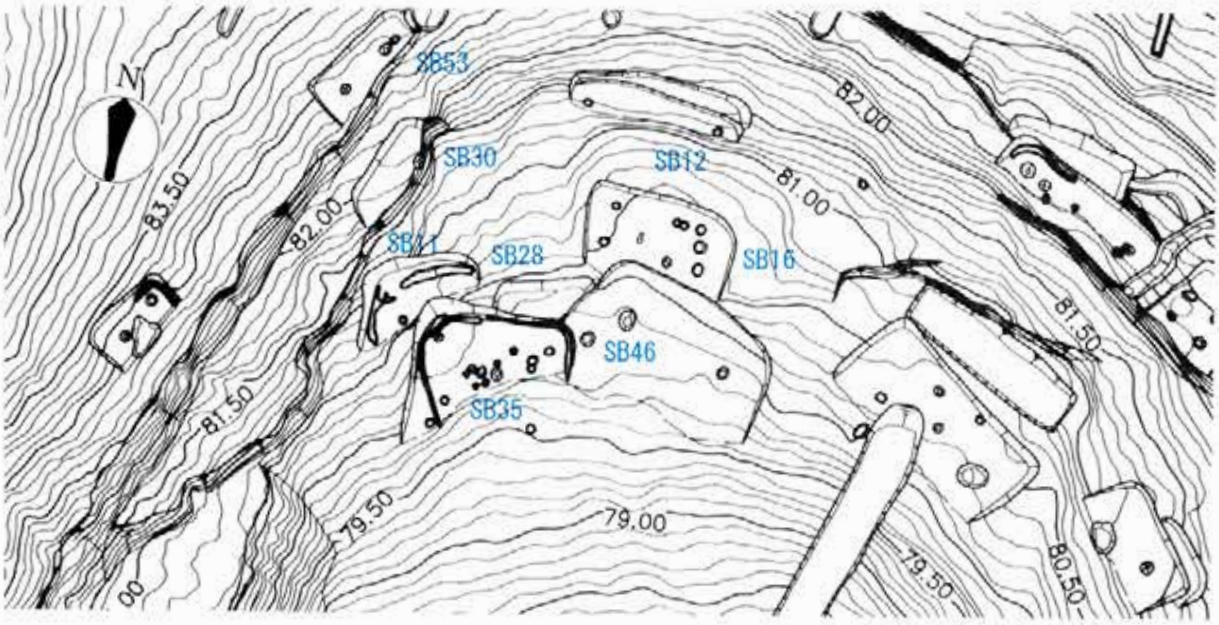


図52　ＳＢ28・30 周辺地形図（1/200）

0　10m

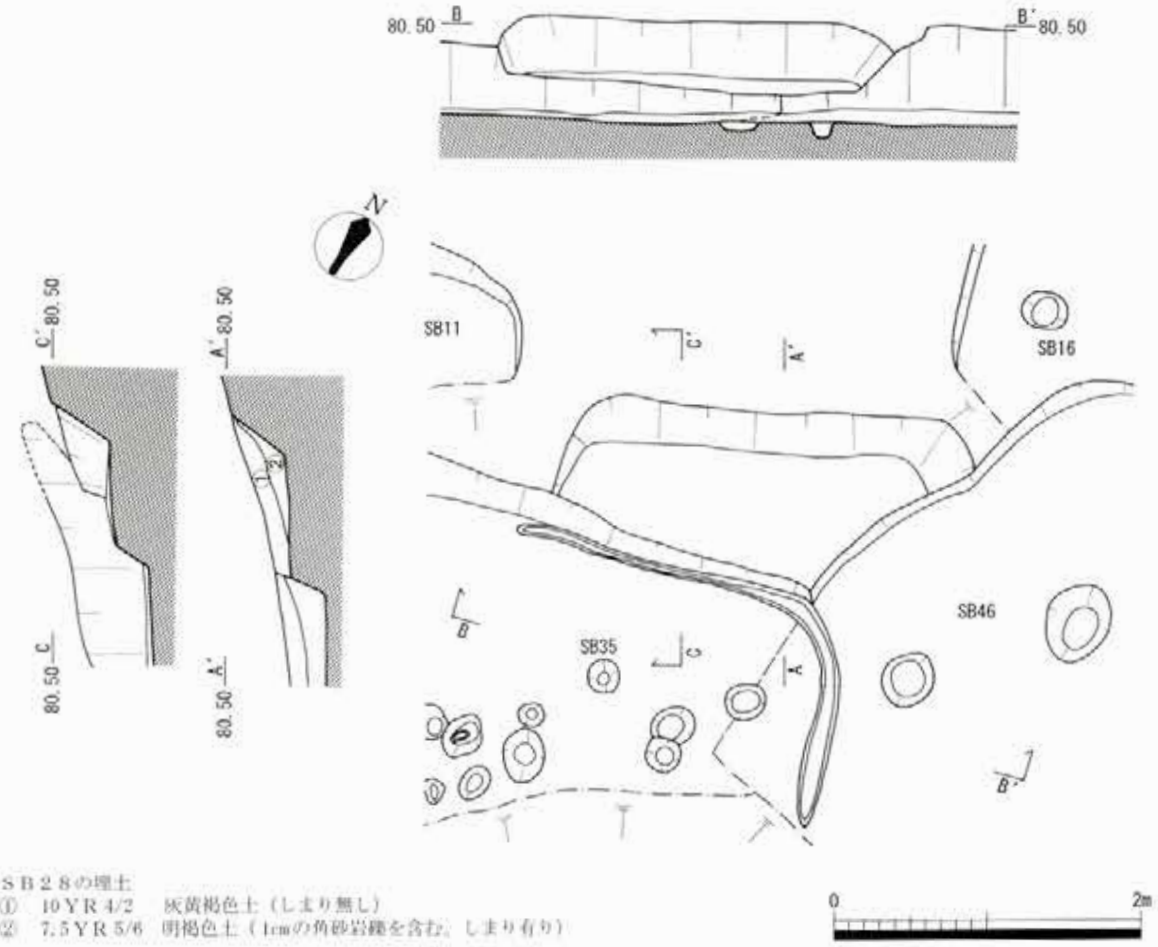
ｓ11グリッドにあり、南谷の、南に向かってくだるやや急な傾斜(傾斜度22.1%)地に立地する。ＳＢ35・46に南側を大きく切られ、残存部分はごくわずかである。北東にはＳＢ16が、西にはＳＢ11が隣接する。隅角は北西・北東隅角が残存し、いずれも丸くおさめられている。幅2.70m、残存部の奥行き1.06mを測る。平面形は、正方形であったか長方形であったかは判断できない。壁面及び床面は地山を掘り抜いて形成されている。壁面は最大36cmの深さを確認できる。住居内の埋没は、壁際から進行しており、自然埋没と判断される。

壁溝、主柱穴、地床炉は、検出した床面には認められなかった。

遺物（図139、図版35）

土器は、小片ばかり33点が出土したが、図化できたのは、甕Ｇ１類の１点（120）のみである。頸部は緩やかに屈曲し、口縁部は段を持ち内傾しつつ立ち上がる。有段口縁の外面は無文である。北陸系の法仏式・月影式の影響下にある土器であろう。

床面に近い位置からの出土であり、当住居に帰属するものと考えられる。



ＳＢ２８の埋土
① 10ＹＲ4/2　灰黄褐色土（しまり無し）
② 7.5ＹＲ5/6　明褐色土（1cmの角砂岩礫を含む、しまり有り）

図53　ＳＢ28 実測図

ＳＢ２９

遺構（図55、図版５）

ｏ１グリッドにあり、南尾根から北西に派生する尾根の鞍部から西に向かってくだる緩やかな傾斜

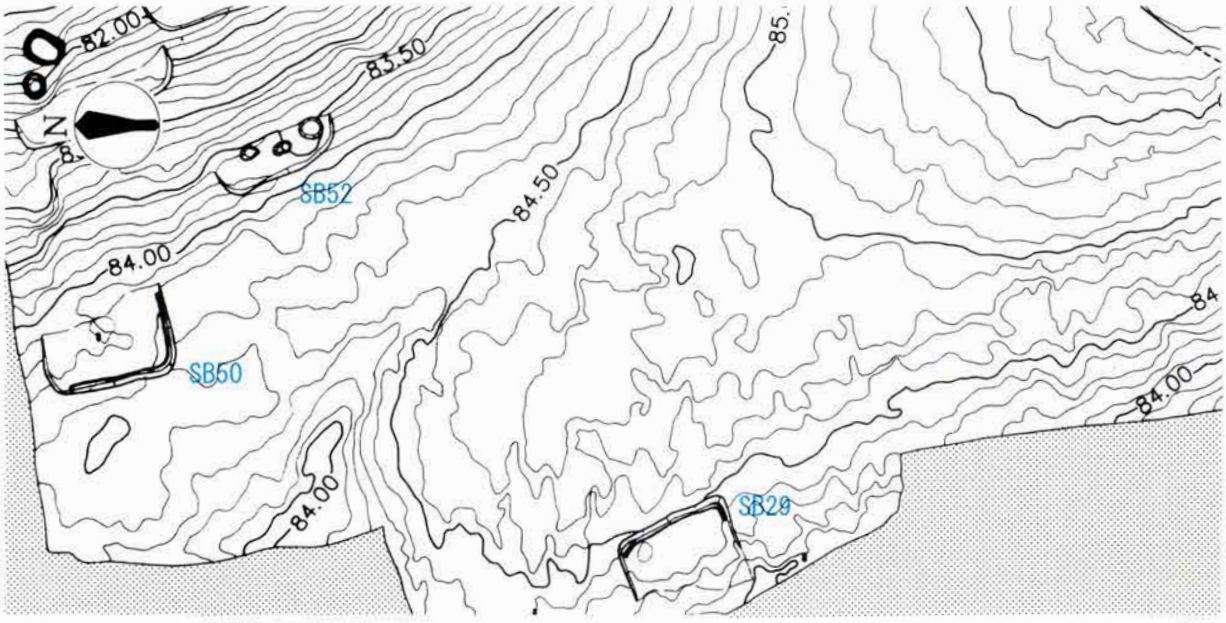


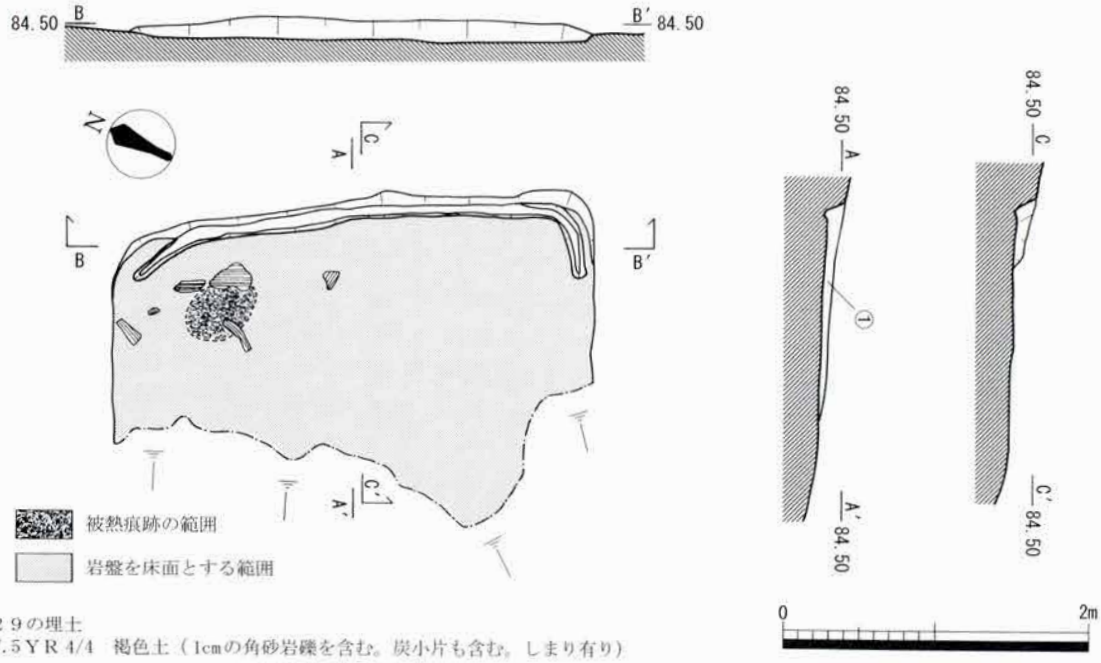
図54　ＳＢ29 周辺地形図（1/200）

（傾斜度14.0%）地に単独で立地する。隅角は北東・南東隅角がかろうじて残存し、いずれも丸くおさめられていることがわかる。幅3.16m、残存部の奥行き2.16mを測る。平面形は、正方形であったか長方形であったかは判断できない。壁面及び床面は全面岩盤を掘り抜いて形成されている。壁面は山側で最大14cm の深さを確認できるが、岩盤の風化・崩壊が著しく、残存状況は極めてよくない。

主柱穴は検出した床面には認められなかった。

壁溝は山側壁面に沿って巡り、隅角を過ぎる辺りで確認できなくなる。

地床炉は、それに該当すると考えられる土坑は検出できなかったが、北東隅角寄りに、長軸55cm の楕円形の被熱痕跡および炭化材を検出した。支柱石は認められなかったが、地床炉として使用した浅



ＳＢ２９の埋土
①　7.5ＹＲ 4/4　褐色土（1cmの角砂岩礫を含む。炭小片も含む。しまり有り）

図55　ＳＢ29 実測図

い土坑の底面のみが残存したものと考えられよう。

遺物（図139）

土器は、小片ばかり11点が出土したが、図化できたのは、１点（121）のみである。鉢Ｃ類で、口縁端部外面に横線を巡らせている。単独で立地する住居であり、当住居に帰属する遺物と考えられる。

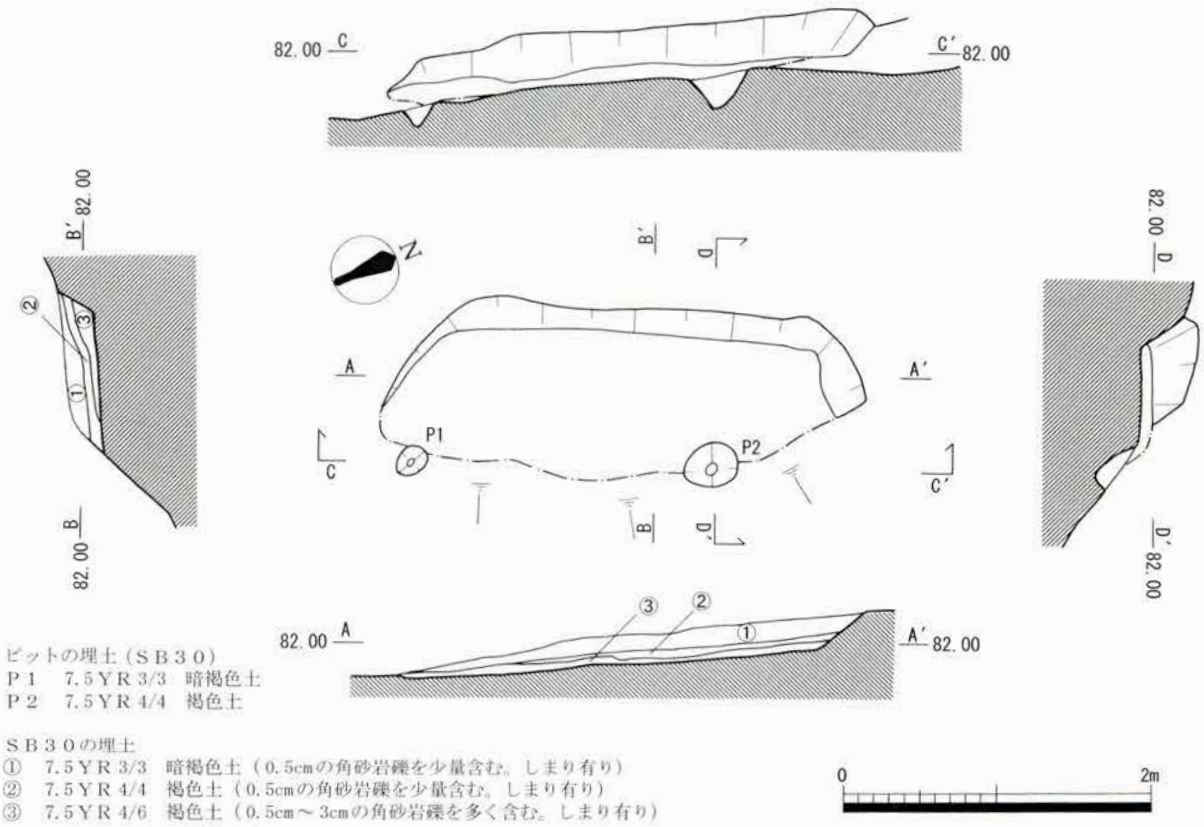
ＳＢ３０

遺構（図56、図版６）

ｓ10グリッドにあり、南谷の、南東にくだる急な傾斜(傾斜度28.5%)地に立地する。北西にはＳＢ53が、南にはＳＢ11が隣接する（周辺地形図は、図52)。東側を昭和50年代の重機による山土採取によって大きく破壊されており、残存状況はよくない。隅角は北西隅角の一部および南西隅角が残存し、いずれも丸くおさめられていたことが分かる。幅3.04m、残存部の奥行き1.12mを測る。平面形は不明である。壁面及び床面は地山を掘り抜いて形成されている。壁面は山側で最大28cm の深さを確認できる。住居内の埋没は、壁際から進行しており、自然埋没と判断される。

主柱穴はＰ１・２を検出したが、Ｐ１は浅く不明瞭である。

壁溝、地床炉は、検出した床面には認められなかった。



ピットの埋土（ＳＢ３０）
Ｐ１　7.5ＹＲ 3/3　暗褐色土
Ｐ２　7.5ＹＲ 4/4　褐色土

ＳＢ３０の埋土
①　7.5ＹＲ 3/3　暗褐色土（0.5cmの角砂岩礫を少量含む。しまり有り）
②　7.5ＹＲ 4/4　褐色土（0.5cmの角砂岩礫を少量含む。しまり有り）
③　7.5ＹＲ 4/6　褐色土（0.5cm～3cmの角砂岩礫を多く含む。しまり有り）

図56　ＳＢ30 実測図

遺物（図139）

土器は小片ばかり29点が出土したが、図化できたのは２点のみである。122は高坏の坏部片で、口縁端部は内彎気味で、端部外面に横線を施す。123は甕の頸部付近の体部片で、摩耗が激しいが横線と列点文を施していることがわかる。いずれも①層からの出土であり、流れ込みと考えられる。

ＳＢ３１

遺構（図58、図版６）

ｎ７グリッドにあり、北谷の、北西に向かってくだる緩やかな傾斜（傾斜度17.3%）地に立地する。

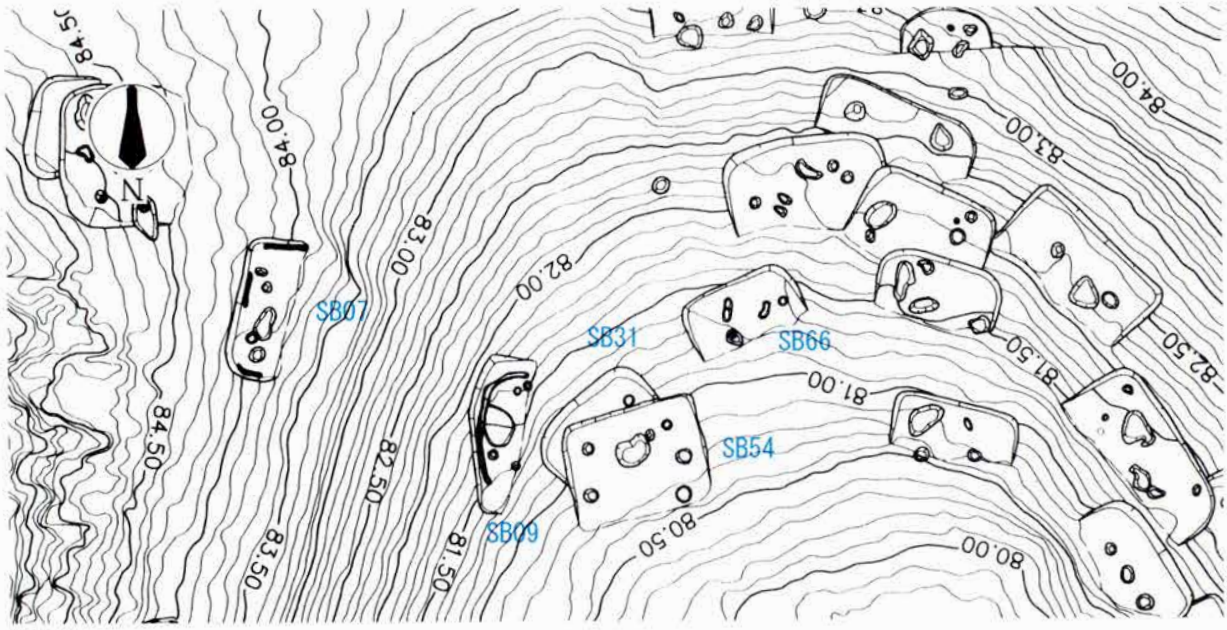


図57　ＳＢ31 周辺地形図（1/200）

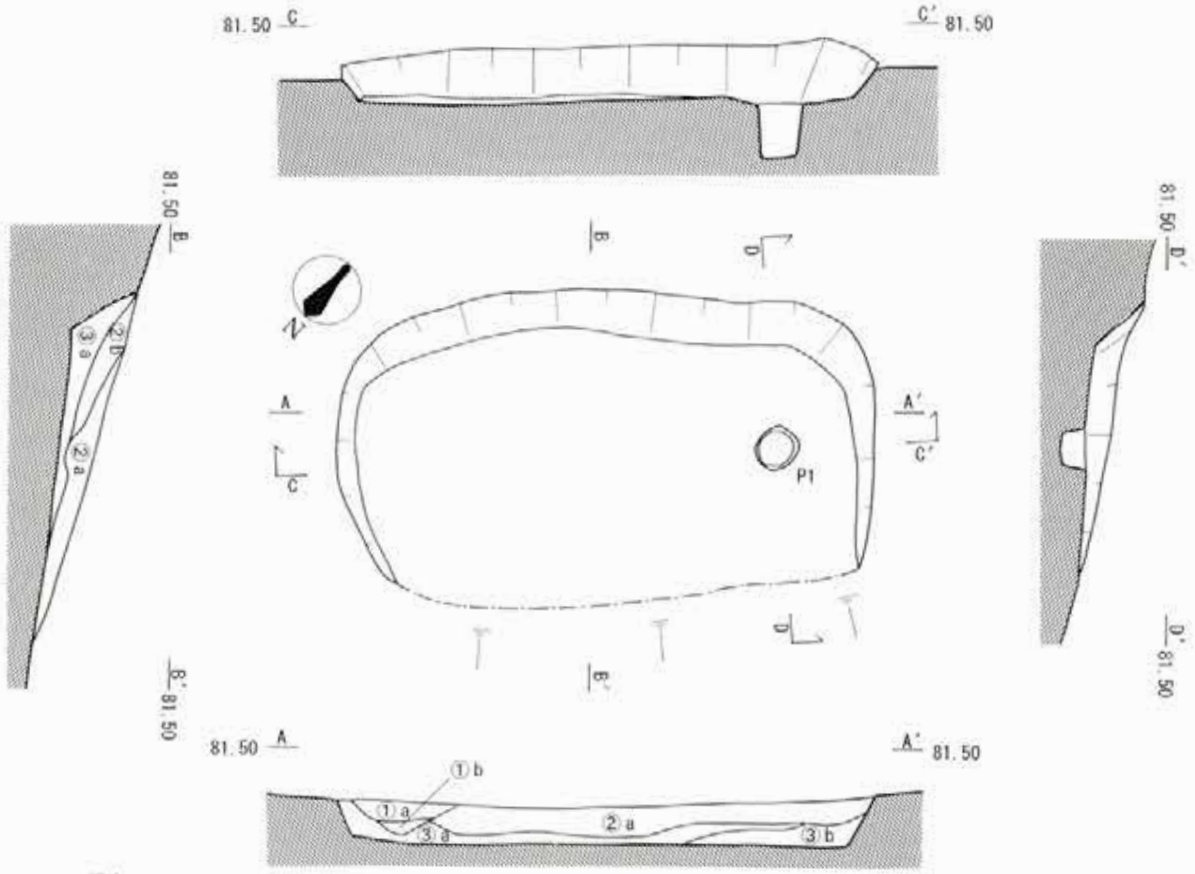
ＳＢ54を切って造られている。東にＳＢ09が、南西にＳＢ66が隣接する。隅角は山側の南西隅角、南東隅角が残存し、いずれも丸くおさめられている。幅3.54m、残存部の奥行き1.26mを測る。平面形は、正方形であったか長方形であったかは不明である。山側の壁面及び床面は第Ⅳ層と地山を掘り抜いて形成されており、壁面の深さは、山側で最大40cm を確認できる。

主柱穴はＰ１を検出した。

壁溝、地床炉は、検出した床面には認められなかった。

遺物（図139、図版35）

土器は326点が出土したが、小片が多く接合率は極めて低かった。このうち図化できたのは、６点である。124・125は器台Ｂ類の受け部で、本遺跡としては標準的なサイズの大型品と小型品である。127は平底甕の底部、126は、壷Ｂ類の体部片で横線２段と列点文を施している。128・129は、壷Ｂ類の底部である。いずれも②層からの出土であり、斜面上部の遺構からの流れ込みの可能性がある。



ＳＢ３１の埋土
①a　7.5ＹＲ3/1　黒色土（0.5cm～5cmの角砂岩礫を含む、しまり有り）
①b　7.5ＹＲ3/3　黒色土（0.5cm～3cmの角砂岩礫を含む、しまり有り）
②a　7.5ＹＲ2/2　褐色土（0.5cm～3cmの角砂岩礫を含む、しまり有り）
②b　7.5ＹＲ3/2　褐色土（0.5cm～3cmの角砂岩礫を含む、しまり有り）
③a　7.5ＹＲ2/4　褐色土（0.5cm～3cmの角砂岩礫を含む、しまり有り）
③b　7.5ＹＲ4/4　褐色土（0.5cm～3cmの角砂岩礫を含む、しまり有り）

ピットの埋土（ＳＢ３１）
Ｐ１　7.5ＹＲ3/4　暗褐色土

0　2m

図58　ＳＢ31 実測図

ＳＢ３２

遺構（図60、図版４）

ｒ15グリッドにあり、北尾根から東南方向に派生する尾根に向かう鞍部の、南東に向かってくだる緩やかな傾斜（傾斜度12.7%）地に立地する。ＳＢ15を切り、ＳＢ33が西に隣接する。当初はＳＢ15とともに一軒の住居と考え調査を進めたが、調査の進展に従い２軒が切り合うことが判明した。土砂の流出が著しく残存状況がよくない（壁面の深さは、山側で最大12cm を確認できるのみ）こともあって、北東隅角と東壁は検出できなかった。北西隅角は丸くおさめられており、また、床面の残存状況から北東隅角もおそらく同様に隅丸形であったと判断できる。幅2.52m、残存部の奥行き1.78mを測る。平面形は、正方形であったか長方形であったかは不明である。壁面及び床面は地山を掘り抜いて形成している。住居内の埋没は、壁際から進行しており、自然埋没と判断される。

主柱穴はＰ１・２と考えられるが、Ｐ１は浅く不明瞭である。

壁溝、地床炉は、検出した床面には認められなかった。

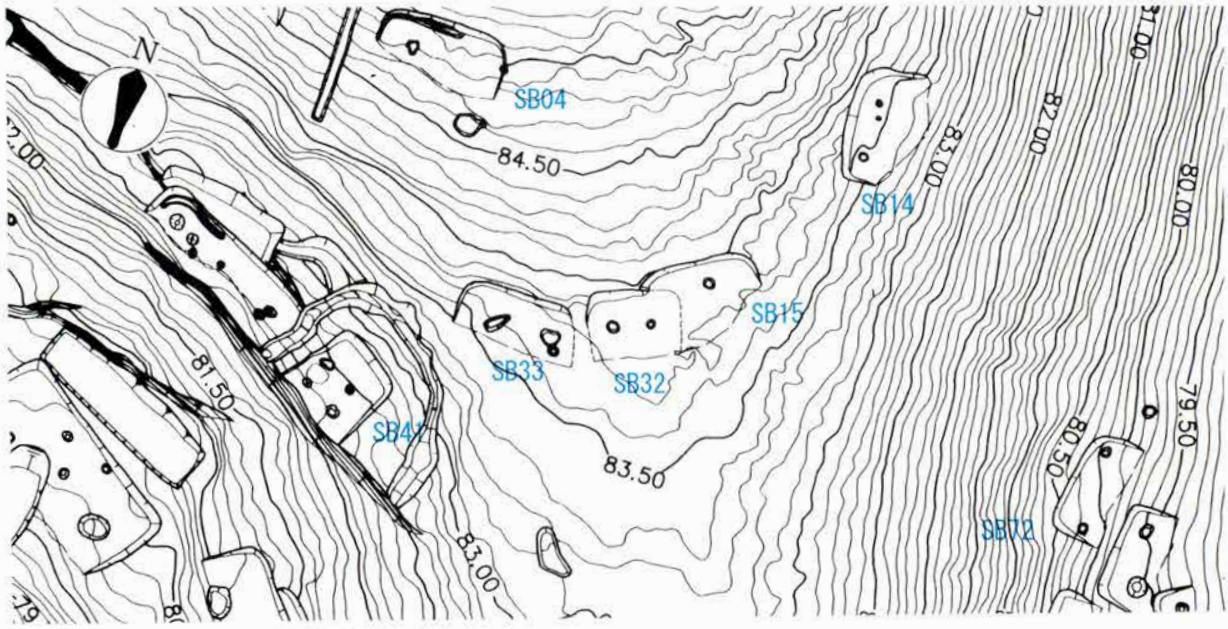


図59　ＳＢ32・33 周辺地形図（1/200）

遺物（図139、図版25）

土器は33点が出土したが、小片ばかりで、図化できたのは台付甕の台部（130）の１点のみである。床面に接した位置からの出土であり、この住居に帰属するものと考えられる。

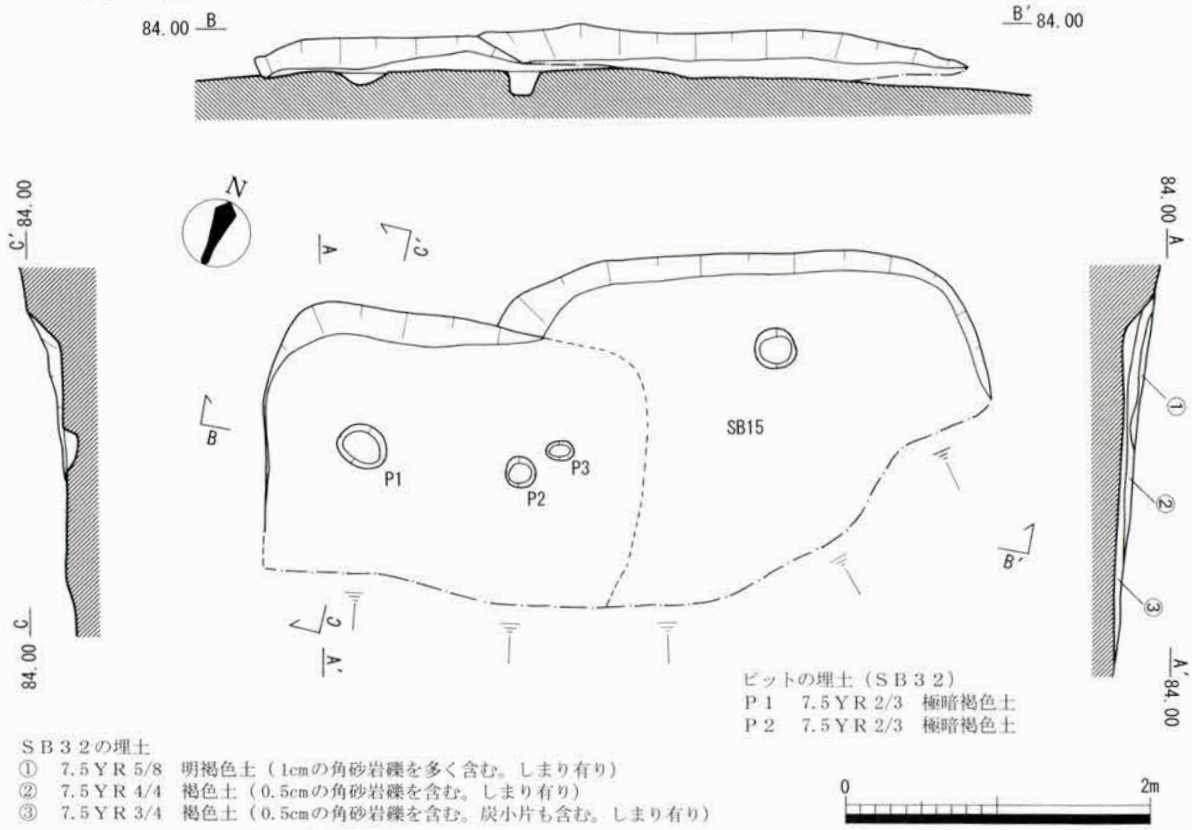


図60　ＳＢ32 実測図

ＳＢ３３

遺構（図61、図版６）

ｒ15グリッドにあり、北尾根から東南に派生する尾根に向かう鞍部の、南東に向かってくだる緩やかな傾斜（傾斜度15.7%）地に立地する。ＳＢ32が東に、ＳＢ41が南に隣接する（周辺地形図は、図59）。北西隅角は残存するものの、北東隅角と東壁は検出できなかった。北西隅角は丸くおさめられており、床面の残存状況から北東隅角もおそらく同様に隅丸形であったと判断できる。幅3.34m、残存部の奥行き1.50mを測る。平面形は、正方形であったか長方形であったかは不明である。北西隅角付近の壁面及び床面は砂岩の岩盤を掘り込み、他は地山を掘り抜いて形成している。住居内の埋没は壁際から進行しており、自然埋没と判断される。

主柱穴はＰ３を検出した。Ｐ１は長楕円形だが南側が深く掘り込まれており、主柱穴であった可能性が高いと考えられる。

地床炉は、最大深さ10cm の浅いピット（Ｐ２）にその可能性を認め得るが、Ｐ２に寄り過ぎてはいる。支柱石は検出されなかった。

壁溝は、検出した床面には認められなかった。

遺物

土器は小片ばかり22点が出土したが、図化できるものはなかった。

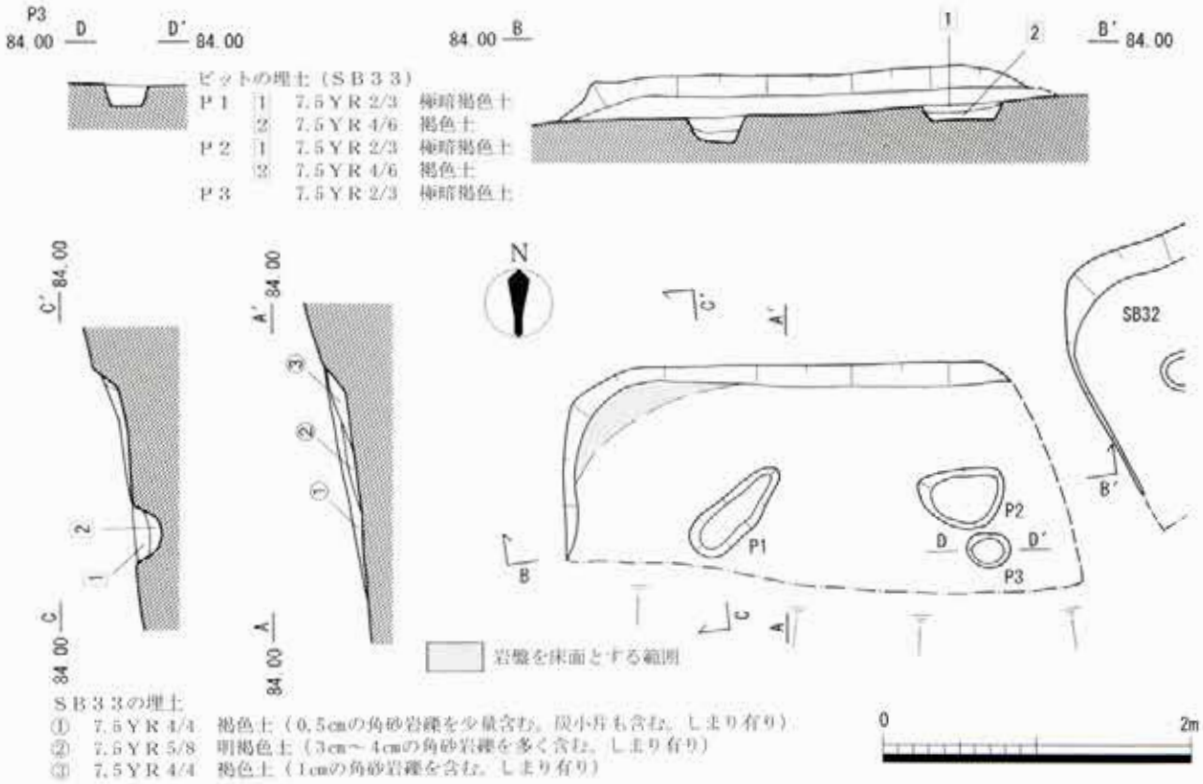


図61　ＳＢ33 実測図

ＳＢ３４

遺構（図63、図版６）

ｐ７グリッドにあり、北谷の、北に向かってくだる極めて急な傾斜（傾斜度38.5%）地に立地する。

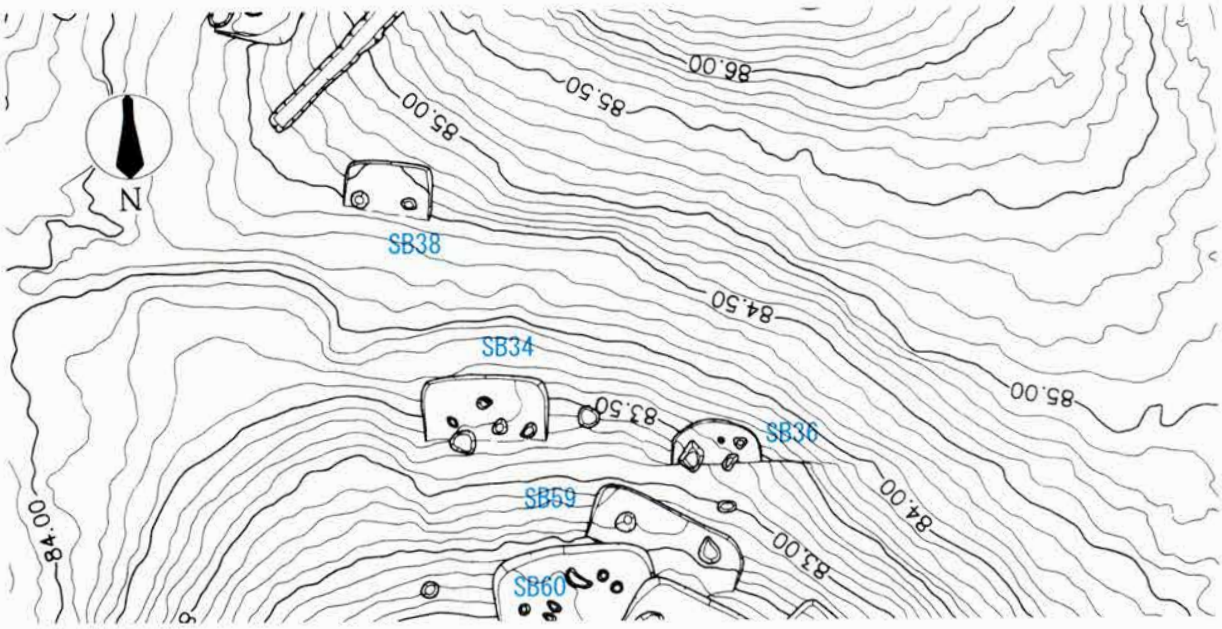


図62　ＳＢ34・36・38 周辺地形図（1/200）

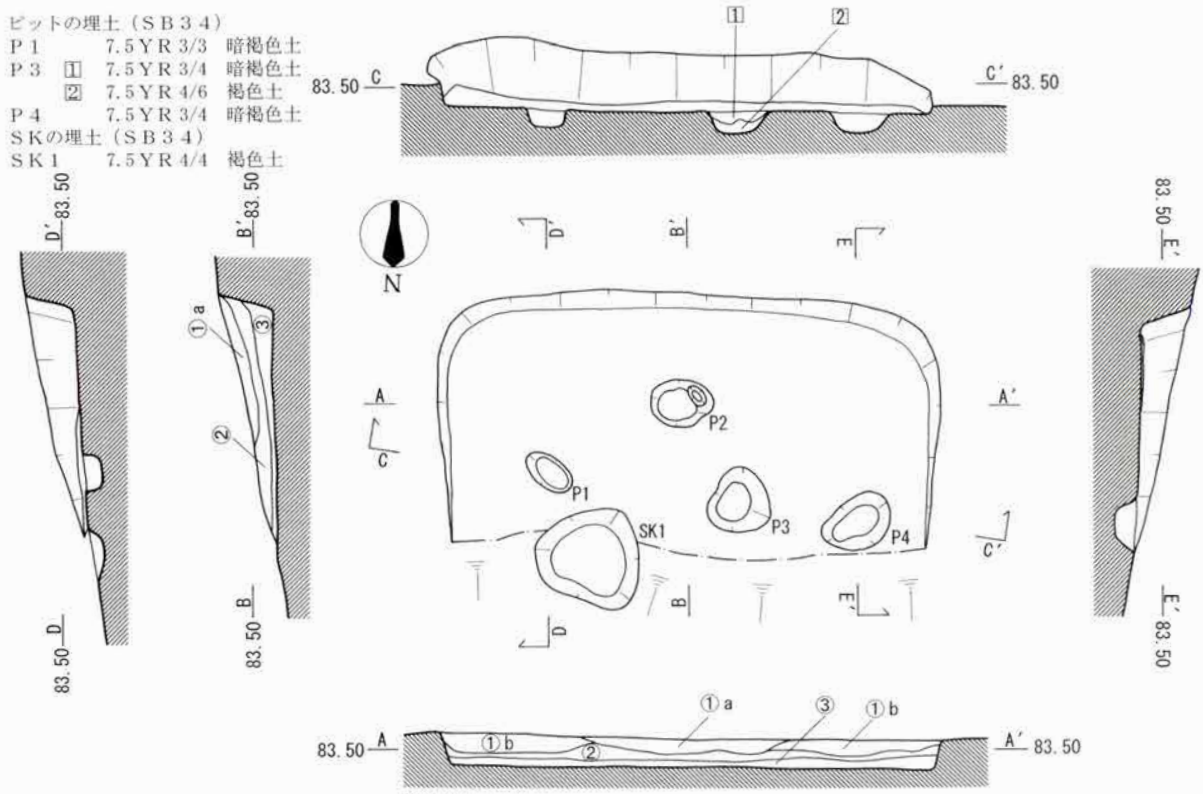


図63　ＳＢ34 実測図

北東にＳＢ59・60が近接する。隅角は山側の南西隅角、南東隅角が残存し、いずれも丸くおさめられている。幅3.24m、残存部の奥行き1.70mを測る。平面形は、正方形であったか長方形であったかは不明である。山側の壁面及び床面は第Ⅳ層と地山を掘り抜いて形成されており、壁面の深さは、山側で最大38cmを確認できる。

主柱穴はＰ１・Ｐ４を検出したが、やや対称の位置からずれている。

地床炉は、それに該当すると考えられるものとして、最大深さ９cmの浅い土坑（ＳＫ１）を検出したが、この埋土には炭の小片および土器の小片が含まれていた。支柱石は認められなかった。

壁溝は、検出した床面には認められなかった。

遺物（図139、図版６）

土器は31点が出土した。図化できたのは２点である。131は高坏Ｃ類の坏部片で、内外面ともに縦方向のミガキを施している。132は甕の体部片で、頸部から下へ横線文と列点文を巡らしている。前者は①層からの出土であり、他からの混入である可能性が高い。後者は③層からの出土であり、この住居に帰属するものと考えられる。

ＳＢ３５

遺構（図65、図版６）

ｔ10グリッドにあり、南谷の、南東に向かってくだる緩やかな傾斜（傾斜度14.5%）地に立地する。

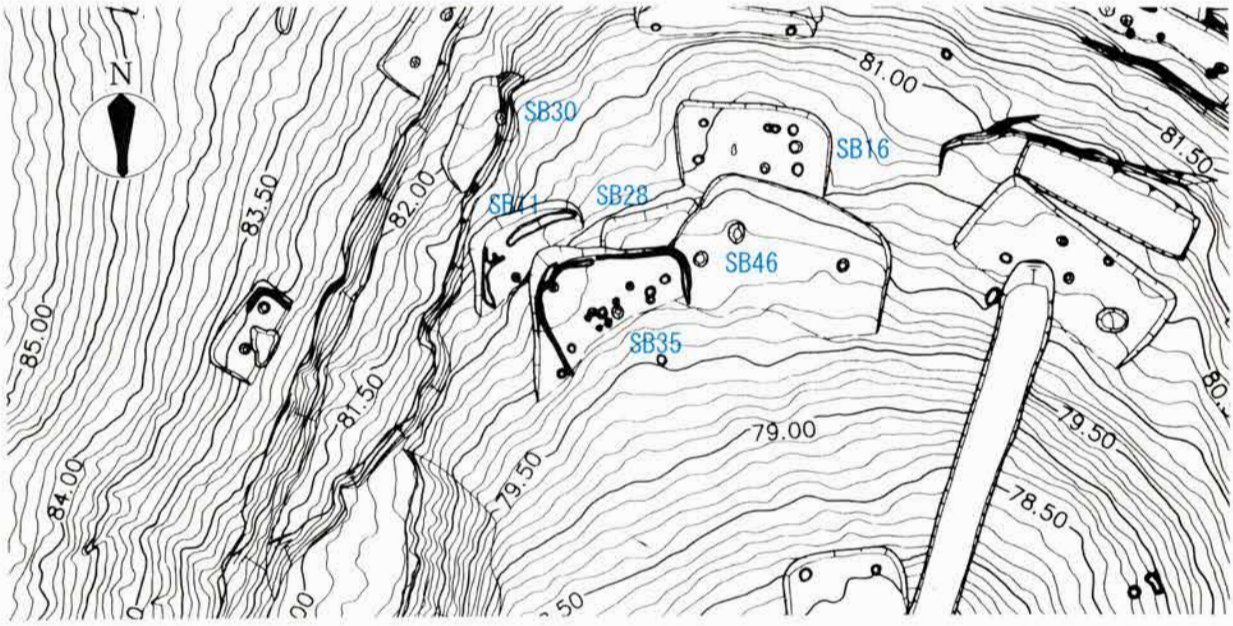


図64　ＳＢ35 周辺地形図（1/200）

ＳＢ11・ＳＢ28・ＳＢ46を切って造られている。隅角は北西・北東隅角が残存し、いずれも丸くおさめられている。幅4.28m、残存部の奥行き3.60mを測る。平面形は、残存部全体の形状および主柱穴（後述）の位置から正方形であった可能性が高い。壁面及び床面は第Ⅳ層及び地山を掘り抜いて形成されている。壁面は最大73cmの深さを確認できる。住居内の埋没は、壁際から進行しており、自然埋没と判断される。

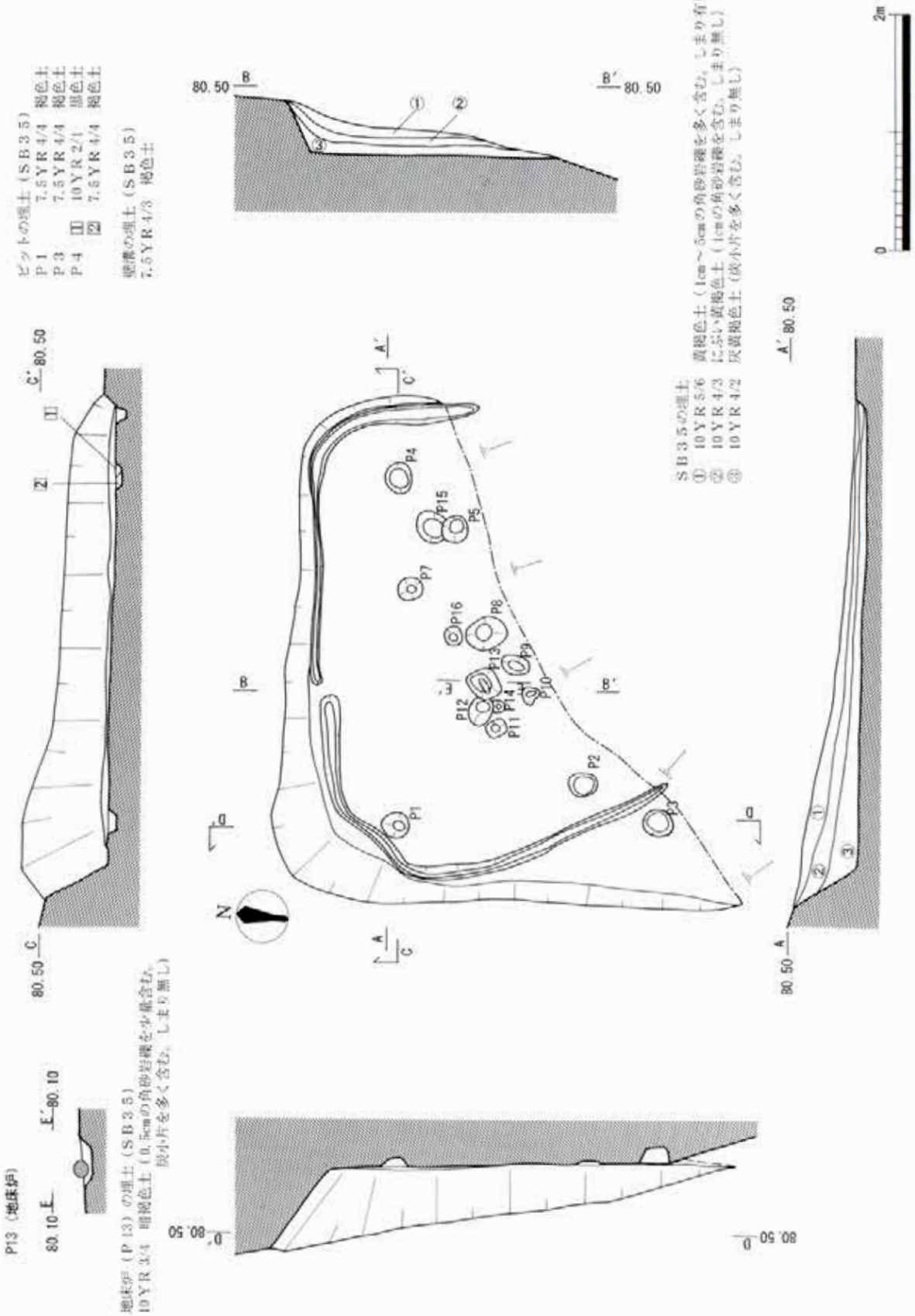

ピットの埋土（ＳＢ３５）
Ｐ１　7.5ＹＲ4/4　褐色土
Ｐ３　7.5ＹＲ4/4　褐色土
Ｐ４　1 10ＹＲ2/1　黒色土
2 7.5ＹＲ4/4　褐色土
焼構の埋土（ＳＢ３５）
7.5ＹＲ4/3　褐色土
ＳＢ３５の埋土
① 10ＹＲ5/6　黄褐色土（1cm～5cmの角砂岩礫を多く含む、しまり有り）
② 10ＹＲ4/3　にぶい黄褐色土（1cmの角砂岩礫を含む、しまり無し）
③ 10ＹＲ4/2　灰黄褐色土（炭小片を多く含む、しまり無し）
P13（地床炉）
地床炉（Ｐ13）の埋土（ＳＢ３５）
10ＹＲ3/4　暗褐色土（0.5cmの角砂岩礫を少量含む、炭小片を多く含む、しまり無し）
80.50
80.10
2m
0

図65　ＳＢ35 実測図

壁溝は山側はおおむね壁面に沿って巡るが、西壁の途中から内部へと方向を変えている。

ピットは15基検出したが、主柱穴はＰ１、Ｐ３、Ｐ４であろう。いずれも浅くやや不明瞭である。

地床炉は、中央やや左寄りに検出した支柱石をともなうＰ13がそれに該当する。長軸が33㎝とやや小ぶりで、最大深さは9㎝と浅い。支柱石は、長さ15㎝の長楕円形の川原石を横位に据えつけている。地床炉の周囲に多くのピットを検出したが、その性格は不明である。

住居の床面には、多くの炭化材が放射状に検出され、焼失家屋であると考えられる。炭化材や炭小片主体の土の下から、完形に近い土器４点を含む多くの土器が良好な状態で出土した（図66）。

遺物（図66・139～142、図版25・26・35・36）

土器は合計655点が出土し、このうち41点を図示した。このうち、142・143・149・153・165・166・169・171の８点は、①層または②層の出土であり、他の遺構からの混入である可能性が高い。当遺跡の１軒の住居で使用された土器組成を考える上で良好な資料である。

133～136は高坏である。133はＣ類で、坏部の段から強く内彎しながら長く立ち上がる口縁部を持ち、口縁端部は内傾する面を作り、浅い沈線を４条巡らせている。134もＣ類で、口縁端部付近で緩やかに内彎する。135は高坏の基部。136は残存する坏部の下部の形態からＥ類と考えたが、脚台付きの壷かもしれない。

137～139は器台である。138は内彎する脚を持つＢ２類で、受け部は外反して長くラッパ状に立ち上がる。推定口径20.1㎝を測り、当遺跡では大型品である。また、脚部の高さを受け部の高さが凌駕する個性的な形態である。139も内彎する脚を持つＢ２類であるが、口径11.4㎝の小型品である。受け部は口縁端部に向けて外反気味に伸び、端部はわずかに垂下させ面を形成している。脚部に穿孔はない。141はＢ類の基部。142は高坏または器台の脚部で、裾端部に向けて緩やかに内彎する円錐形の高い脚である。143～146は高坏または器台の脚裾部である。144はやや内彎するが、他は外反して広がる。

147は鉢Ｂ類で、頸部の屈曲が甘く、口縁部は内彎して立ち上がる。口縁端部外面に刻み目を施す。148～150は鉢Ｃ類で、148は頸部の屈曲がさらに甘く、口縁部はやや内彎して立ち上がる。口縁端部外面にはやはり刻み目を施す。内外面ともに丁寧にハケ調整を施している。147・148ともに底部は凹み底である。149は内彎しつつ大きく広がる長い口縁部で、端部外面に横線を巡らしている。内外面ともに丁寧にミガキ調整を施す。150は小型の無文の鉢で頸部の屈曲が甘く、口縁部は内彎して立ち上がる。151は鉢Ｂ類の口縁部片で端部外面に刻み目を施す。152は凹み底で鉢の底部としたが、小型の壷の底部の可能性もある。

154～160は甕である。口縁部の残存する154～159はいずれもＤ類である。154はやや外反しつつ長く外傾する口縁の端部に面を作り、端部外面に刻み目を施す。頸部の屈曲部直下には列点文を施している。155～157・159の口縁部はより強く外反するが、156・157は頸部の屈曲が甘い。157の肩部には横線を施している。158は口縁部片で端部外面に刻み目を施す。159は口縁の端部に面を作っている。160は体部片で頸部に横線と列点文を施している。161・162は平底甕の底部。

163～173は壷である。163～165はＢ１類で、163は口縁部内面に平坦面を作り、口縁端部を上下に拡張し稜をなす。口縁端部外面には擬凹線を巡らし、内面の平坦面にはヘラ描きの羽状文を施してい

る。164・165は口縁端部に平坦面を形成しているが、いずれも無文である。167はＡ２類で、口縁内面に平坦面を有するが、水平ではなく斜めの面を形成する。端部外面は大きく垂下拡張させ、凸面に仕上げ、３本１組の棒状浮文を貼り付ける。棒状浮文を持つ壷は、当遺跡ではこの個体のみである。平坦面には擬凹線４条と櫛描き列点文を施す。また、口縁部内面にはわずかに赤彩が残存する。166・168は壷Ｂ類、169は壷Ａ類の体部片で、166は横線と竹管列点文、168は横線と波状文・169は横線と櫛描き列点文及びヘラ描き列点文が施されている。169の外面には赤彩が残存する。170は壷Ｃ２類の口縁部で、緩やかに内彎し端部外面に横線を巡らす。171～173は壷の底部である。

なお、この住居からは、床面に接する位置から2001の鉄鏃（図158、図版39）が出土している。圭頭斧箭鏃で完形品である。

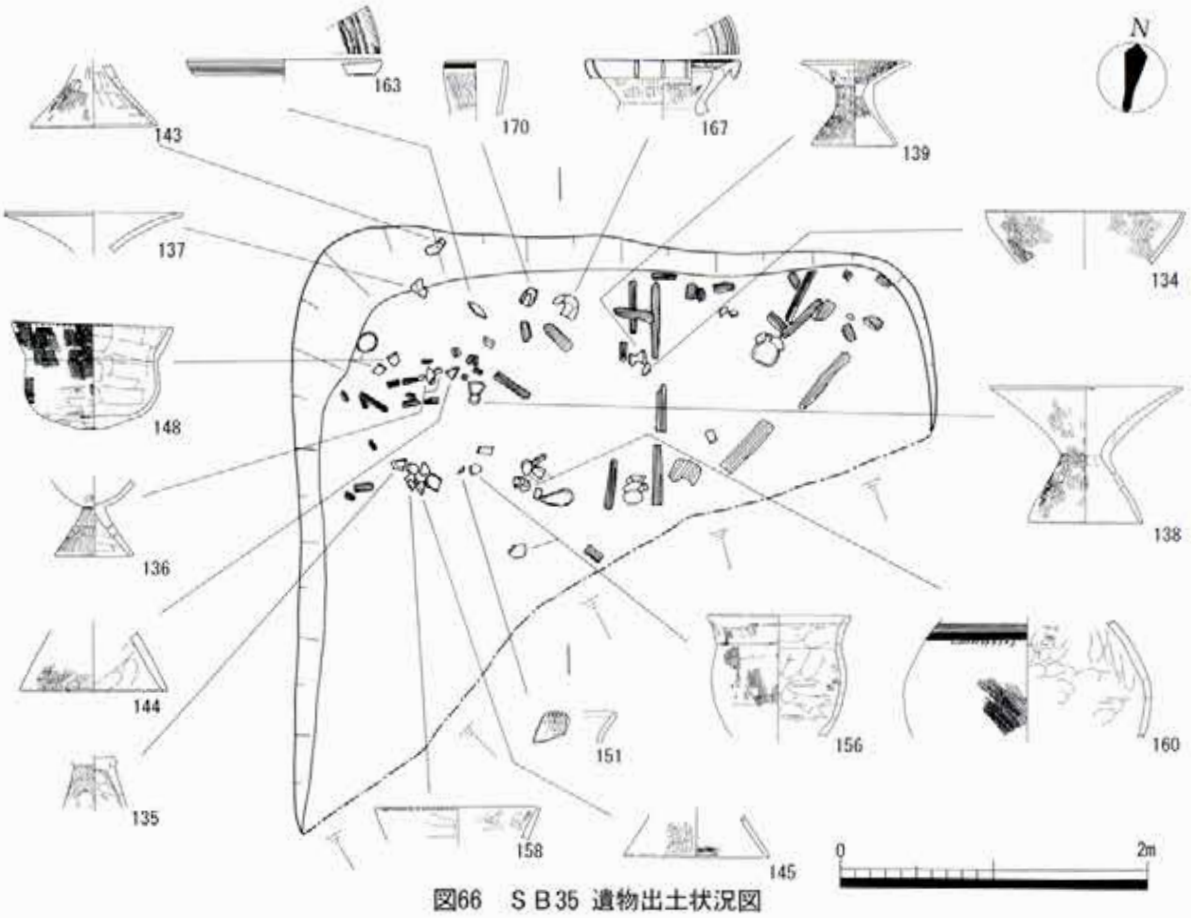


図66　ＳＢ35 遺物出土状況図

ＳＢ３６

遺構（図67、図版７）

ｐ５グリッドにあり、北谷の、北に向かってくだる極めて急な傾斜（傾斜度36．8%）地に立地する。北にＳＢ59が隣接する（周辺地形図は、図62）。隅角は山側の南西隅角、南東隅角が残存し、丸くおさめられている。幅2.50ｍ、残存部の奥行き1.10ｍを測る。他の住居と異なり山側の壁面が弧を描く。平面形は不明である。床面もやや傾斜が強く、竪穴状遺構とすべきかもしれない。山側の壁面及び床面は第Ⅳ層と地山を掘り抜いて形成されており、壁面の深さは、山側で最大24cm を確認できる。

主柱穴はＰ２にその可能性を認め得るが、浅く不明瞭である。ＳＫ１は長軸92cm、最大深さ20cm で

住居の規模からすると大きい土坑だが、その性格は不明である。

地床炉、壁溝は、検出した床面には認められなかった。

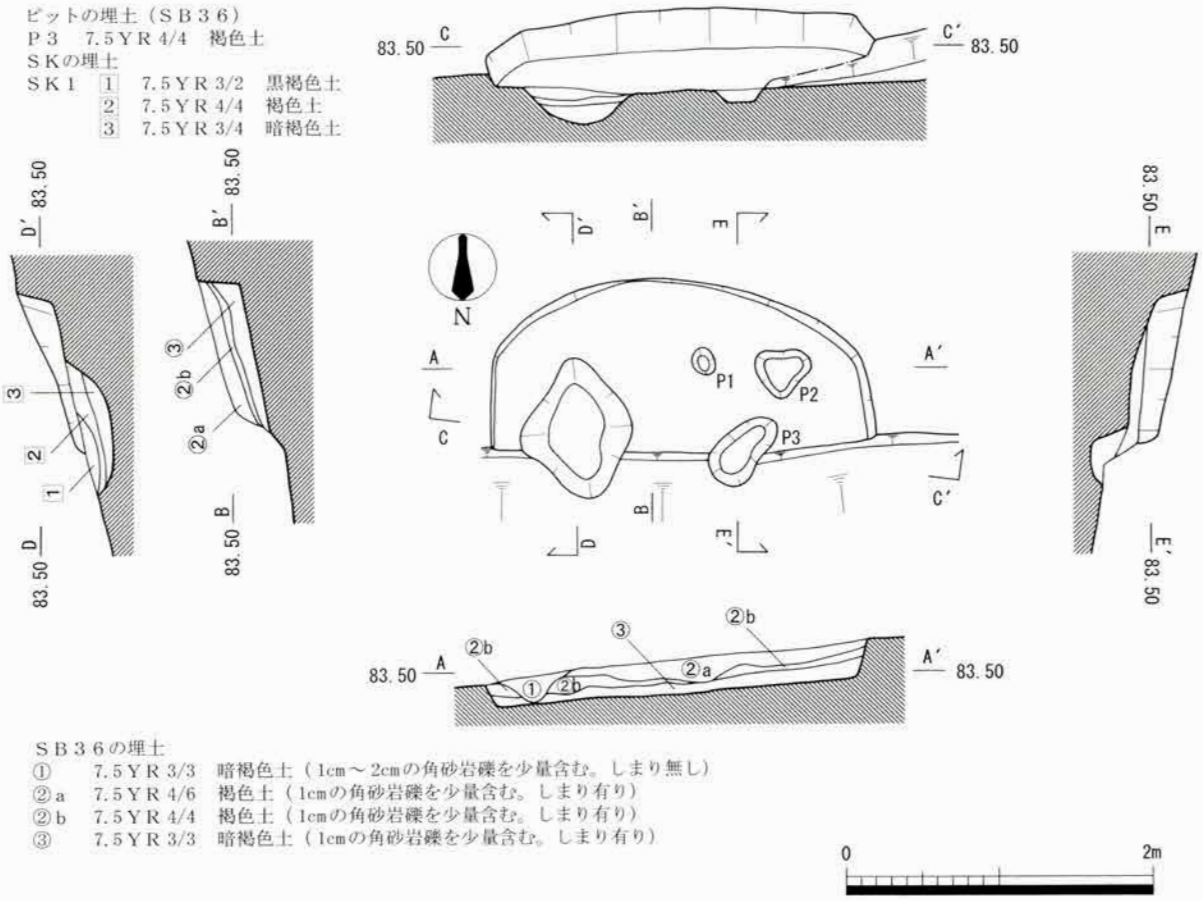


図67　ＳＢ36 実測図

遺物

土器は小片ばかり52点が出土したが、図化できるものはなかった。

ＳＢ３７

遺構（図69、図版７）

w10グリッドにあり、南谷の、南東に向かってくだる緩やかな傾斜(傾斜度19.2%)地に単独で立地する。隅角は北西・南西隅角が残存し、いずれも丸くおさめられている。幅3.30m、残存部の奥行き2.70mを測る。平面形は、残存部全体の形状および主柱穴（後述）の位置から正方形であった可能性が高い。壁面及び床面は地山を掘り抜いて形成されている。壁面は最大38cm の深さを確認できる。住居内の埋没は、壁際から進行しており、自然埋没と判断される。

ピットは６基検出したが、主柱穴はＰ１、Ｐ２、Ｐ４、Ｐ６と考えられるが、住居の主軸よりやや右にずれている。

地床炉は、中央やや北寄りに検出したＳＫ１である。埋土には炭小片が多く含まれていた。支柱石

は３つに割れた状態で検出した(接合状態での長軸25cm)。長楕円形の川原石を横位に据えつけていたとみられる。地床炉の脇に検出したＰ３・Ｐ５のうち、Ｐ５は45cm の深さに掘り込まれている（Ｐ３は21cm)。その性格は不明であるが、地床炉との関連が考えられるかもしれない。

壁溝は認められなかった。

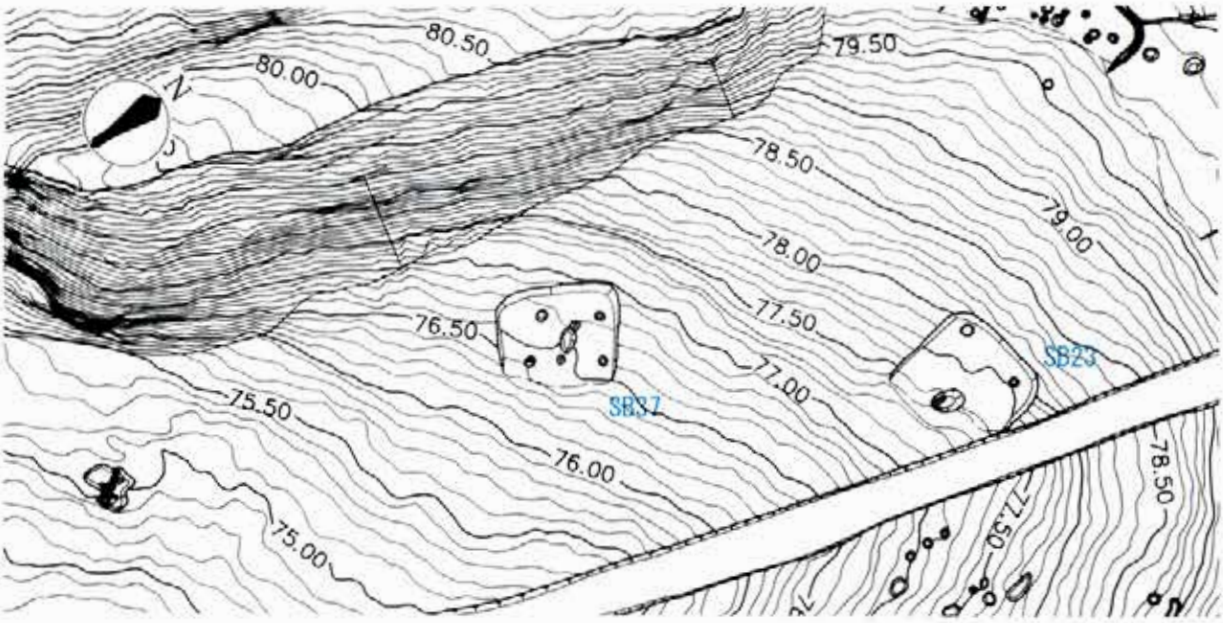


図68　ＳＢ37 周辺地形図（1/200）

遺物（図70・142、図版26・36）

土器は合計339点が出土し、このうち９点を図示した。174は鉢Ｂ類で長く外傾した口縁の端部付近に段を持つ。端部外面には一条の横線を巡らしている。175も鉢Ｂ類の口縁部片で外面に列点文を巡らせる。176～181は甕であるが、176は肩部の体部片で横線と列点文を確認できる。177～179は平底甕の底部、180・181は台付甕の台部である。

182は脚台付の壺の底部および脚台であろう。体部外面、脚台内外面ともに丁寧にミガキ調整が施されている。

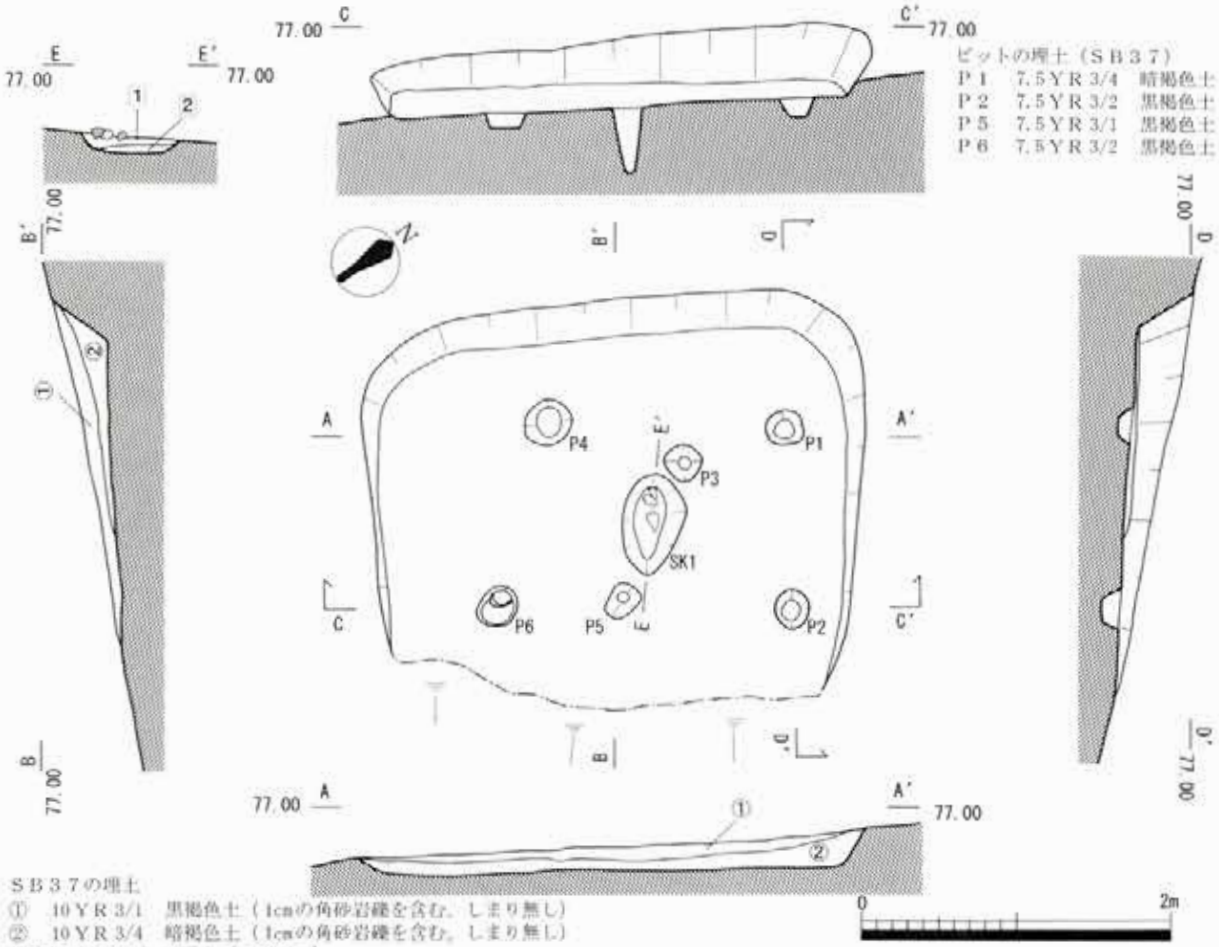
またこの住居跡からは、1051の砥石が出土している。砂岩を石材とし、表・裏・側面を研磨により整形している。表面に極細の線条痕を確認できる。

以上のうち175、176、178の３点は、①層からの出土であるが、地形から考えると斜面上部の遺構からの流れ込みの可能性は低いと思われる。

ＳＢ３８

遺構（図71、図版７）

ｑ７グリッドにあり、北谷の、北に向かってくだるやや急な傾斜（傾斜度20.0%）地に単独で立地する（周辺地形図は、図62)。隅角は山側の南西隅角、南東隅角が残存し、いずれも丸くおさめられている。幅2.30m、残存部の奥行き1.38mを測る。当遺跡の住居跡の中では最小幅の住居である。平面形は、正方形であったか長方形であったかは不明である。山側の壁面及び床面は第Ⅳ層と地山を掘り



ピットの埋土（ＳＢ３７）
Ｐ１　7.5ＹＲ 3/4　暗褐色土
Ｐ２　7.5ＹＲ 3/2　黒褐色土
Ｐ５　7.5ＹＲ 3/1　黒褐色土
Ｐ６　7.5ＹＲ 3/2　黒褐色土

ＳＢ３７の埋土
①　10ＹＲ 3/1　黒褐色土（1cmの角砂岩礫を含む。しまり無し）
②　10ＹＲ 3/4　暗褐色土（1cmの角砂岩礫を含む。しまり無し）
地床炉（ＳＫ１）の埋土（ＳＢ３７）
1　7.5ＹＲ 3/2　黒褐色土（0.5cmの角砂岩礫を少量含む。炭小片を多く含む。しまり有り）
2　7.5ＹＲ 3/4　暗褐色土（0.5cmの角砂岩礫を少量含む。炭小片を含む。しまり有り）

図69　ＳＢ37 実測図

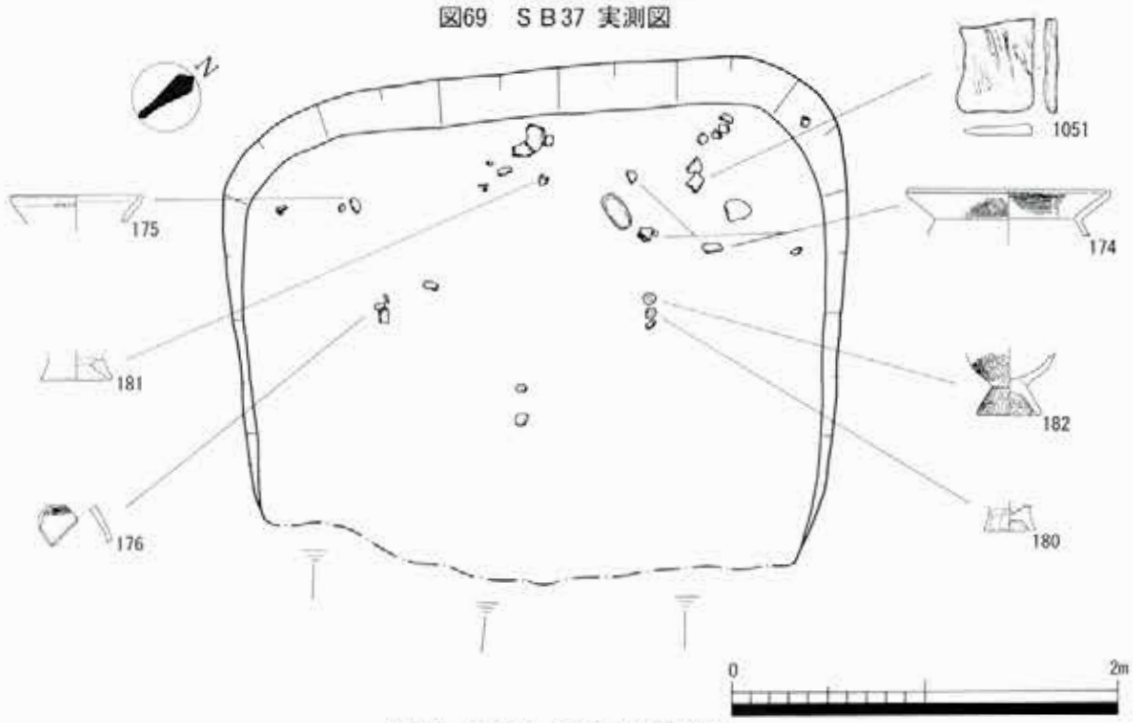


図70　ＳＢ37 遺物出土状況図

抜いて形成されており、壁面の深さは、山側で最大24cm を確認できる。

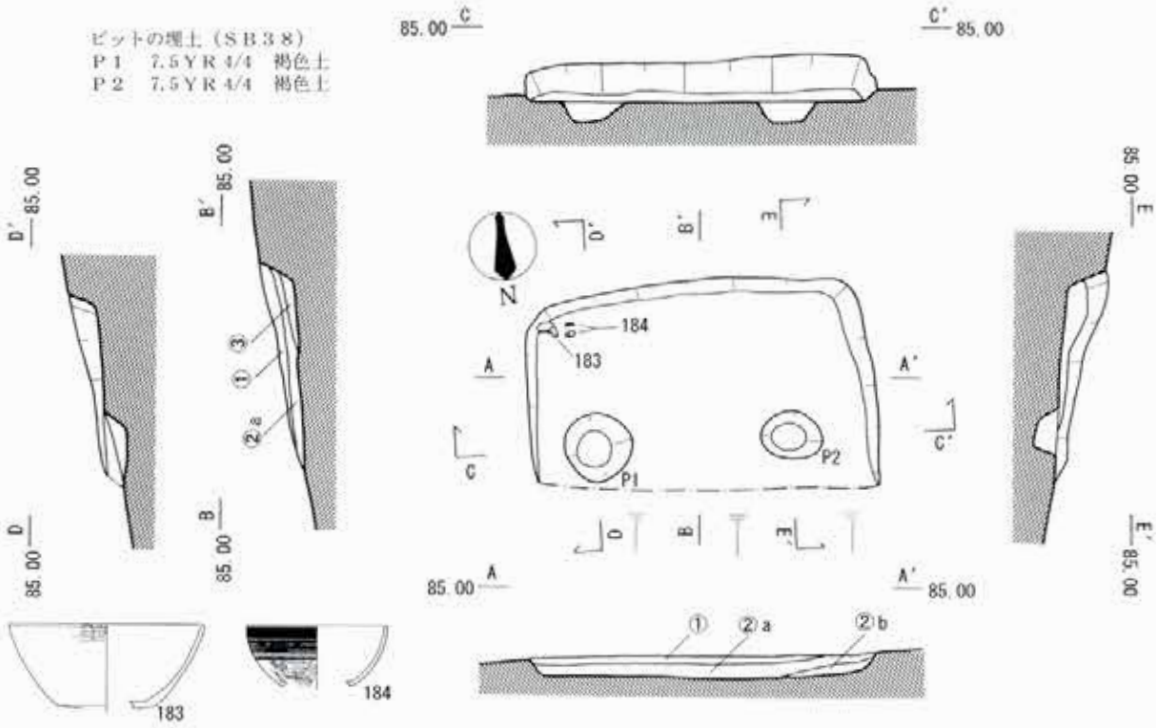
主柱穴はＰ１・Ｐ２にその可能性を認め得るが、谷側に寄りすぎている印象が強く、仮にこの住居が正方形であったと考えた場合、ほぼ中央に位置することになり、２本柱で屋根を支えていたということになる。小規模な住居の場合、２本柱であった可能性を示唆する事例である。

地床炉、壁溝は、検出した床面には認められなかった。

遺物（図142、図版26・27）

土器は74点が出土したが、図化できたのは３点である。183は高坏Ｃ類で、内彎しながら立ち上がる口縁部を持つ。184は高坏Ｆ類で、口縁部は弧状に内彎して立ち上がり、外面に横線を三段、列点文を二段に施している。185は甕Ｄ類の口縁部で口縁端部は面を持つ。

185は①層からの出土で混入の可能性があるが、183・184は床面直上からの出土であり、この住居に帰属する土器である。



ＳＢ３８の埋土
① 7.5ＹＲ 4/4　褐色土（1cmの角砂岩礫を含む。しまり無し）
②a 7.5ＹＲ 3/3　暗褐色土（0.5cmの角砂岩礫を含む。しまり有り）
②b 7.5ＹＲ 3/4　暗褐色土（1cmの角砂岩礫を多く含む。7.5Y4/4褐色砂も多く含む。しまり有り）
③ 7.5ＹＲ 4/6　褐色土（0.5～3cmの角砂岩礫を少量含む。しまり有り）

0　2m

図71　ＳＢ38 実測図

ＳＢ３９

遺構（図73、図版７）

ｑ13グリッドにあり、南谷の、南に向かってくだる急な傾斜(傾斜度33.0%)地に立地する。ＳＢ40によって西側を切られている。隅角は北東隅角が残存し、丸くおさめられている。幅2.40m、残存部の奥行き0.80mを測る。平面形は、正方形であったか長方形であったかは判断できない。壁面及び床

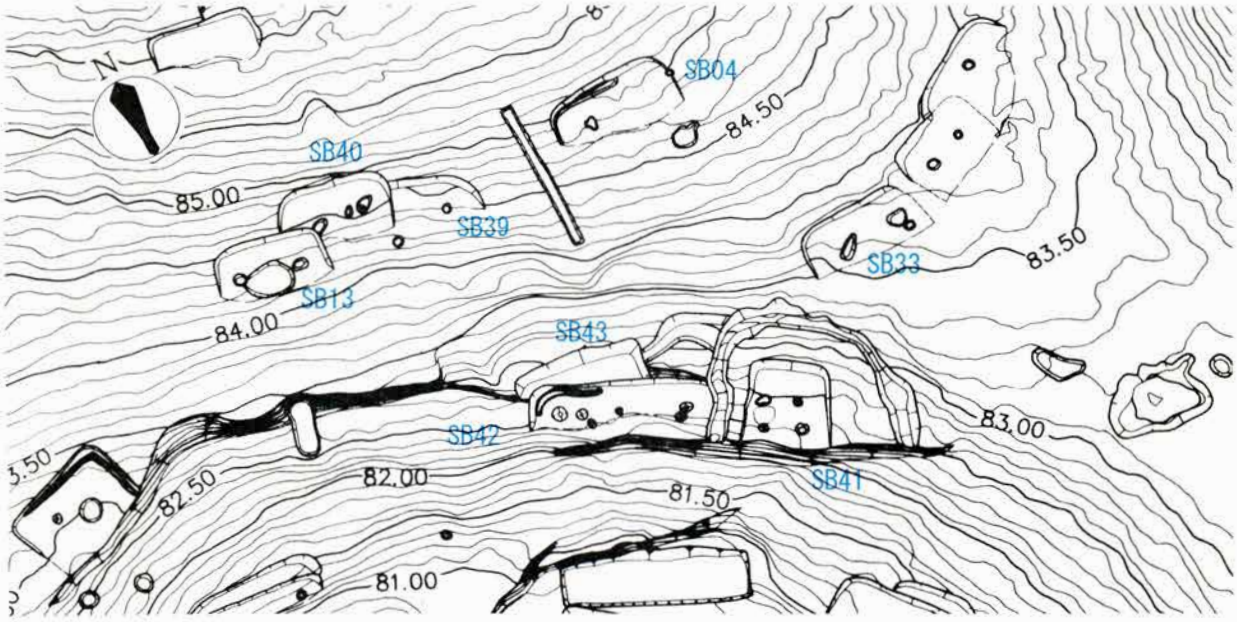


図72　ＳＢ39～43 周辺地形図（1/200）

0　10m

面は、隅角付近の一部は砂岩の岩盤を、他は地山を掘り抜いて形成されている。壁面は山側で最大36cmの深さを確認できるものの、ＳＢ40の掘削によって西側を破壊されており、また急斜面に立地することから土砂の流出が著しく、残存状況はきわめてよくない。

主柱穴はＰ１を検出したが、浅く不明瞭である。

壁溝、地床炉は、検出した床面には認められなかった。

遺物

土器は、小片ばかり11点が出土したが、図化できるものはなかった。

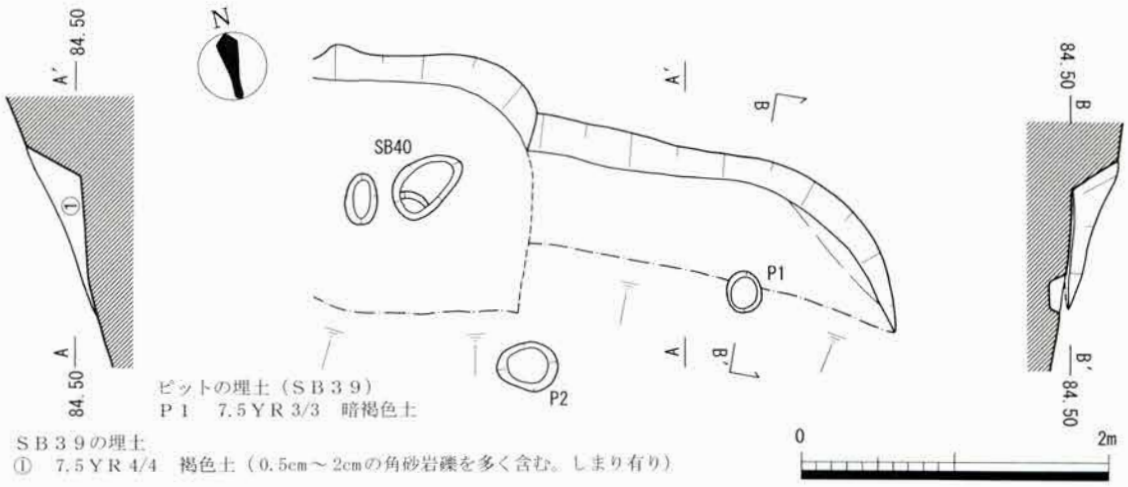


図73　ＳＢ39 実測図

ＳＢ４０

遺構（図74、図版７）

ｑ13グリッドにあり、南谷の、南に向かってくだる急な傾斜（傾斜度35.0%）地に立地する（周辺

地形図は、図72)。ＳＢ39の西側を切り、ＳＢ13に南西側を切られている。隅角は北西・北東隅角が残存し、いずれも丸くおさめられている。幅3.04m、残存部の奥行き1.72mを測る。平面形は、正方形か長方形かは判断できない。壁面及び床面は地山を掘り抜いて形成されている。壁面は山側で最大30cmの深さを確認できるものの、急斜面に立地するため流出が著しく、残存状況はよくない。住居内の埋没は、壁際から進行しており、自然埋没と判断される。

主柱穴はＰ１・Ｐ２と思われるが、中央に寄り過ぎているきらいがある。

地床炉は、長軸50cmで最大深さが11cmと浅いＰ３にその可能性が考えられるが、壁に寄った位置ではある。ただし、支柱石は認められなかった。

壁溝は、検出した床面には認められなかった。

遺物（図142、図版36）

土器は、合計85点が出土したが、小片が多く、図化できたのは１点のみである。186は小型の高坏の坏部片で、口縁部を欠くため定かではないが、Ｆ類の可能性がある。床面直上からの出土であり、この住居に帰属する土器と考えられる。

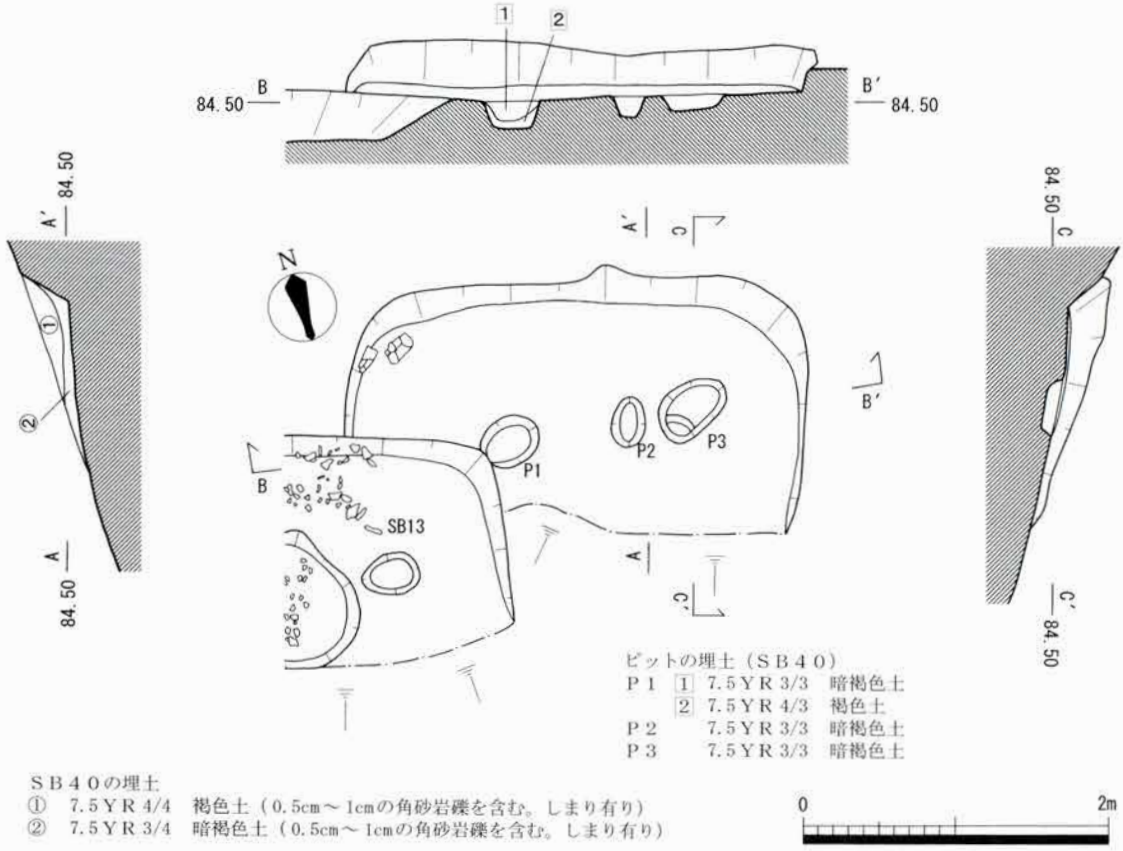
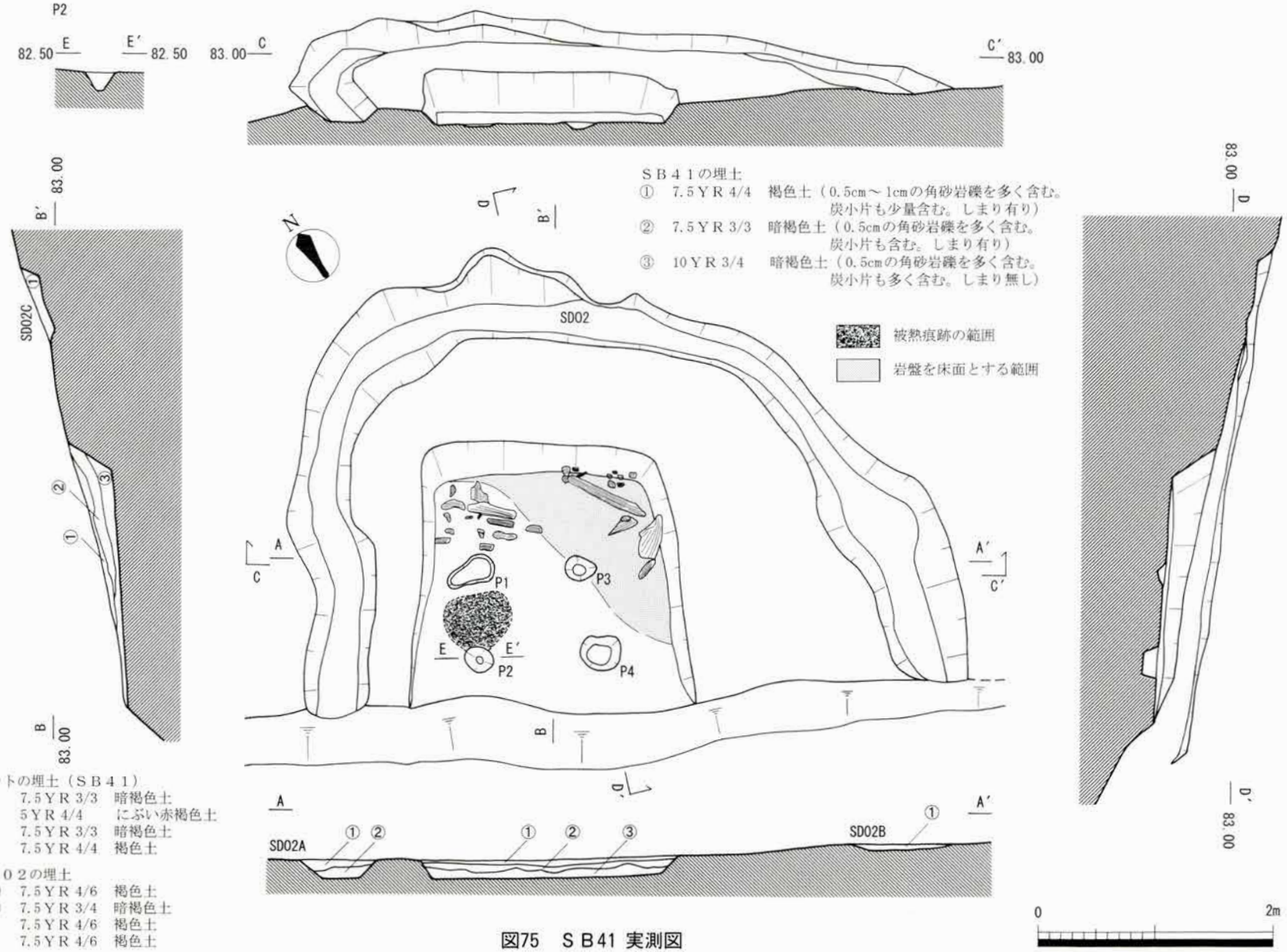


図74　ＳＢ40 実測図

ＳＢ４１

遺構（図75、図版８）

ｓ14グリッドにあり、南谷の、南西に向かってくだるやや急な傾斜（傾斜度22.2%）地に立地する。西にＳＢ42・43が、北東にＳＢ33が隣接する（周辺地形図は、図72)。南側を昭和50年代の山土採取に



ＳＢ４１の埋土
① 7.5ＹＲ 4/4　褐色土（0.5cm～1cmの角砂岩礫を多く含む。炭小片も少量含む。しまり有り）
② 7.5ＹＲ 3/3　暗褐色土（0.5cmの角砂岩礫を多く含む。炭小片も含む。しまり有り）
③ 10ＹＲ 3/4　暗褐色土（0.5cmの角砂岩礫を多く含む。炭小片も多く含む。しまり無し）

被熱痕跡の範囲
岩盤を床面とする範囲

ピットの埋土（ＳＢ４１）
Ｐ１　7.5ＹＲ 3/3　暗褐色土
Ｐ２　5ＹＲ 4/4　にぶい赤褐色土
Ｐ３　7.5ＹＲ 3/3　暗褐色土
Ｐ４　7.5ＹＲ 4/4　褐色土

ＳＤ０２の埋土
Ａ①　7.5ＹＲ 4/6　褐色土
　②　7.5ＹＲ 3/4　暗褐色土
Ｂ　7.5ＹＲ 4/6　褐色土
Ｃ　7.5ＹＲ 4/6　褐色土

図75　ＳＢ41 実測図

よって破壊されているが、遺存状況は良好である。隅角は山側の北西隅角、北東隅角が残存し、いずれも角張ばっている。幅2.36m、残存部の奥行き2.26mを測る。平面形は、正方形であった可能性が高い。山側の北東隅角を中心とする壁面及び床面は岩盤を、他は地山を掘り抜いて形成されており、壁面の深さは、山側で最大36cm を確認できる。

この住居を取り囲むように存在するＳＤ02はこの住居の山側周溝で、ＳＢ42の東側とＳＢ42の山側周溝を切って掘られている。当遺跡では82軒中３軒にのみ確認できた山側周溝を持つ住居の一つである。急斜面に掘られているため、住居側の掘り方の立ち上がりは流出が著しい。現存の溝幅は最大で90cm、深さは最大で29cm である。

主柱穴はＰ１～Ｐ４の４基を検出したが、Ｐ１は浅く不明瞭である。

地床炉は、それに該当する土坑を検出できなかったが、Ｐ１とＰ２の間に長軸58cm の被熱痕跡が認められ、ここに存在した可能性がある。支柱石は検出されなかった。

壁溝は認められなかった。

この住居の床面からは、多くの炭化材が方向性を持つて検出され、焼失家屋と考えられる。

遺物（図143、図版27）

土器は、44点が出土したが小片が多く、図化できたのは２点である。187は、鉢Ｂ類の口縁部片で、内彎して立ち上がり端部にわずかな段を持つ。外面には横線を巡らせている。188は鉢Ｃ類で、頸部の屈曲が甘く、緩やかに内彎して立ち上がる口縁を持つ。内外面ともに丁寧にハケ調整を施すが、器壁が厚くぼってりとした素朴な雰囲気を持つ鉢である。いずれも床面に接した位置からの出土であり、この住居に帰属するものと考えられる。

ＳＢ４２

遺構（図76、図版８）

ｒ14グリッドにあり、南谷の、南西に向かってくだるやや急な傾斜(傾斜度23.1%)地に立地する(周辺地形図は、図72)。ＳＢ43の調査を進める中で、その下層に検出された住居である。ＳＢ41の山側周溝に東側を、ＳＢ43に北側を切られている。南側を昭和50年代の山土採取によって破壊されている。隅角は山側の北西隅角が残存し、丸くおさめられている。残存部の幅4.82m、奥行き1.18mを測る。平面形は、正方形であったか長方形であったかは不明である。壁面及び床面は、地山を掘り抜いて形成されており、壁面の深さは、山側で最大26cm を確認できる。

この住居の北側に存在するＳＤ03は、この住居の山側周溝と考えられる。本来はこの住居の山側を囲むように存在したと思われるが、ＳＢ41の山側周溝とＳＢ43によって切られ、かろうじてその一部が残存した形となっている。当遺跡では82軒中３軒にのみ確認できた山側周溝を持つ住居の一つである。急斜面に掘られているため、住居側の掘り方の立ち上がりは流出が著しい。現存の溝幅は最大で97cm、深さは最大で25cm である。

柱穴は６基検出したが、このうち主柱穴は、Ｐ１またはＰ２のいずれかと、Ｐ５またはＰ６のいずれかの組み合わせと思われるが、いずれも浅くやや不明瞭で判断は難しい。

地床炉は、検出した床面には認められなかった。

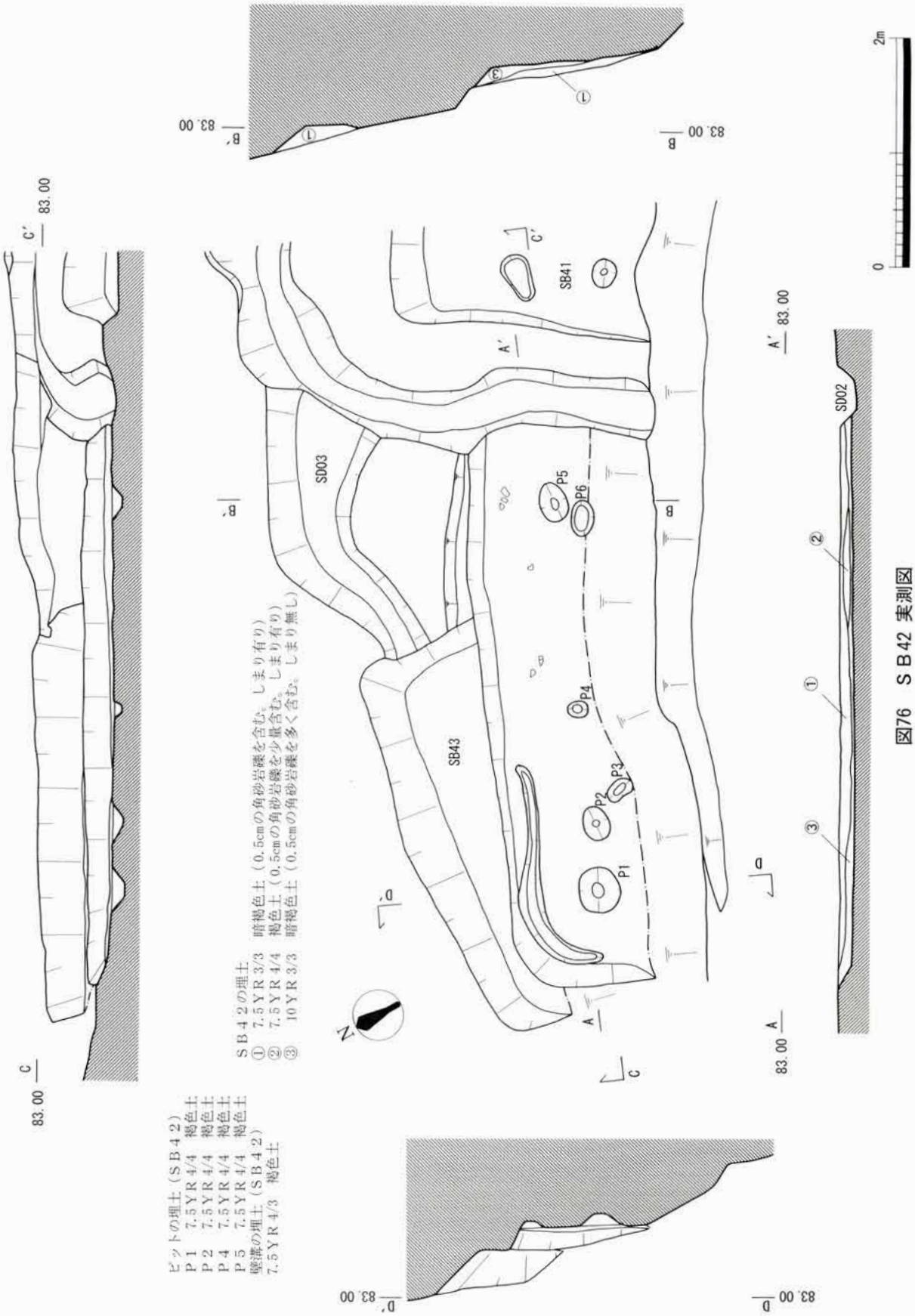

SB42の埋土
① 7.5YR 3/3 暗褐色土（0.5cmの角砂岩礫を含む。しまり有り）
② 7.5YR 4/4 褐色土（0.5cmの角砂岩礫を少量含む。しまり有り）
③ 10YR 3/3 暗褐色土（0.5cmの角砂岩礫を多く含む。しまり無し）
ピットの埋土（SB42）
P1 7.5YR 4/4 褐色土
P2 7.5YR 4/4 褐色土
P4 7.5YR 4/4 褐色土
P5 7.5YR 4/4 褐色土
壁溝の埋土（SB42）
7.5YR 4/3 褐色土
SB43
SD03
SB41
SD02
P1
P2
P3
P4
P5
P6
A
A'
B
B'
C
C'
D
D'
83.00
0
2m

図76　ＳＢ42 実測図

壁溝は、北西隅角付近の壁面に沿って部分的に認められる。

遺物

土器は、小片ばかり50点が出土したが、図化できるものはなかった。

ＳＢ４３

遺構（図77、図版８）

ｒ13グリッドにあり、南谷の、南西に向かってくだるやや急な傾斜(傾斜度23.1%)地に立地する(周辺地形図は、図72)。ＳＢ42の北側とＳＢ42の山側周溝を切って造られている。東にＳＢ41が隣接する。南側を昭和50年代の山土採取によって破壊されており、遺存状況はよくない。隅角は山側の北西隅角、北東隅角が残存し、前者は丸くおさめられ、後者は角張っている。幅3.44m、残存部の奥行き1.10mを測る。平面形は、正方形であったか長方形であったかは不明である。壁面及び床面は地山を掘り抜いて形成されており、壁面の深さは、山側で最大36cm を確認できる。

主柱穴はＰ１を検出したが、やや中央に寄った位置である。壁溝、地床炉は、認められなかった。

遺物（図143、図版36）

土器は44点が出土したが、小片が多く、図化できたのは４点である。189は高坏Ｃ類の坏部。190は鉢Ｄ類で、頸部の屈曲が甘く、口縁端部には面を作り外面に刻み目を施している。191は壷Ｂ類の底部、192は平底甕の底部である。

以上４点はいずれも床面に近い位置からの出土で、この住居に帰属する可能性が高いと考えられる。

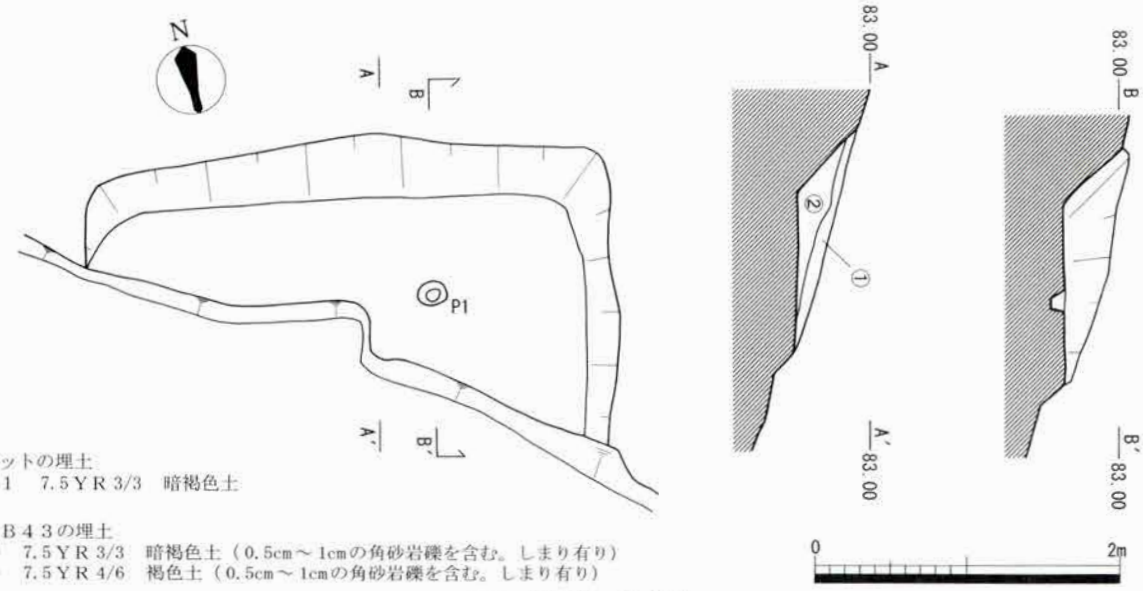


図77　ＳＢ43 実測図

ＳＢ４４

遺構（図79、図版８）

ｕ16グリッドにあり、北尾根から東谷の南の尾根に続く鞍部の平坦地（傾斜度2.5%）に単独で立

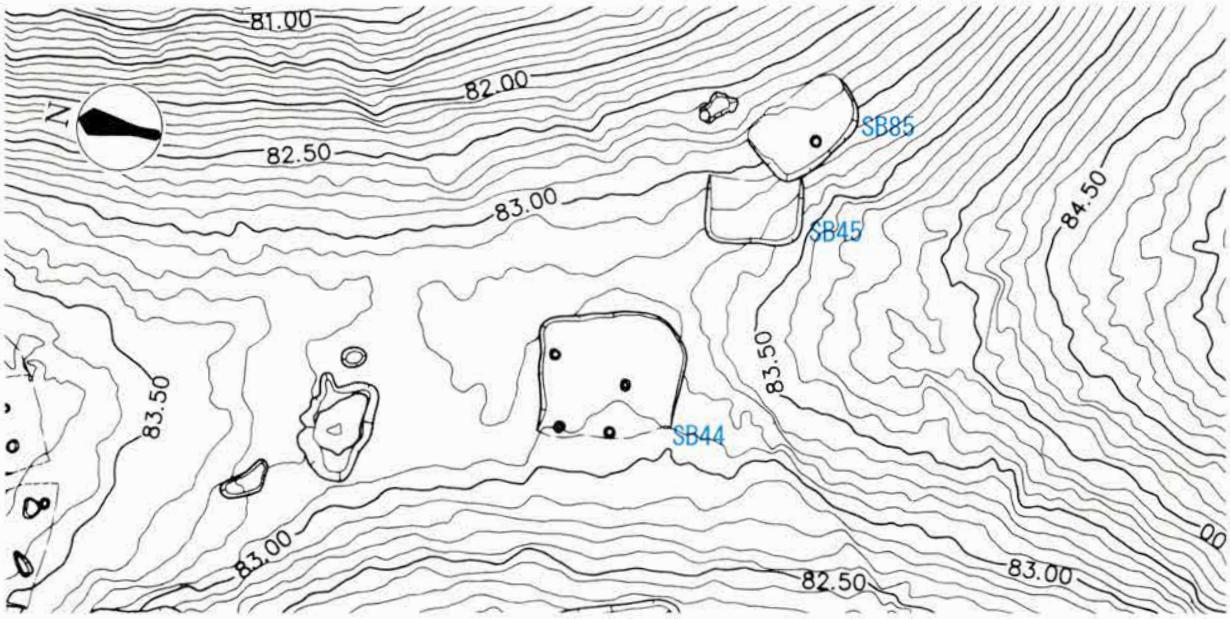


図78　ＳＢ44・45 周辺地形図（1/200）

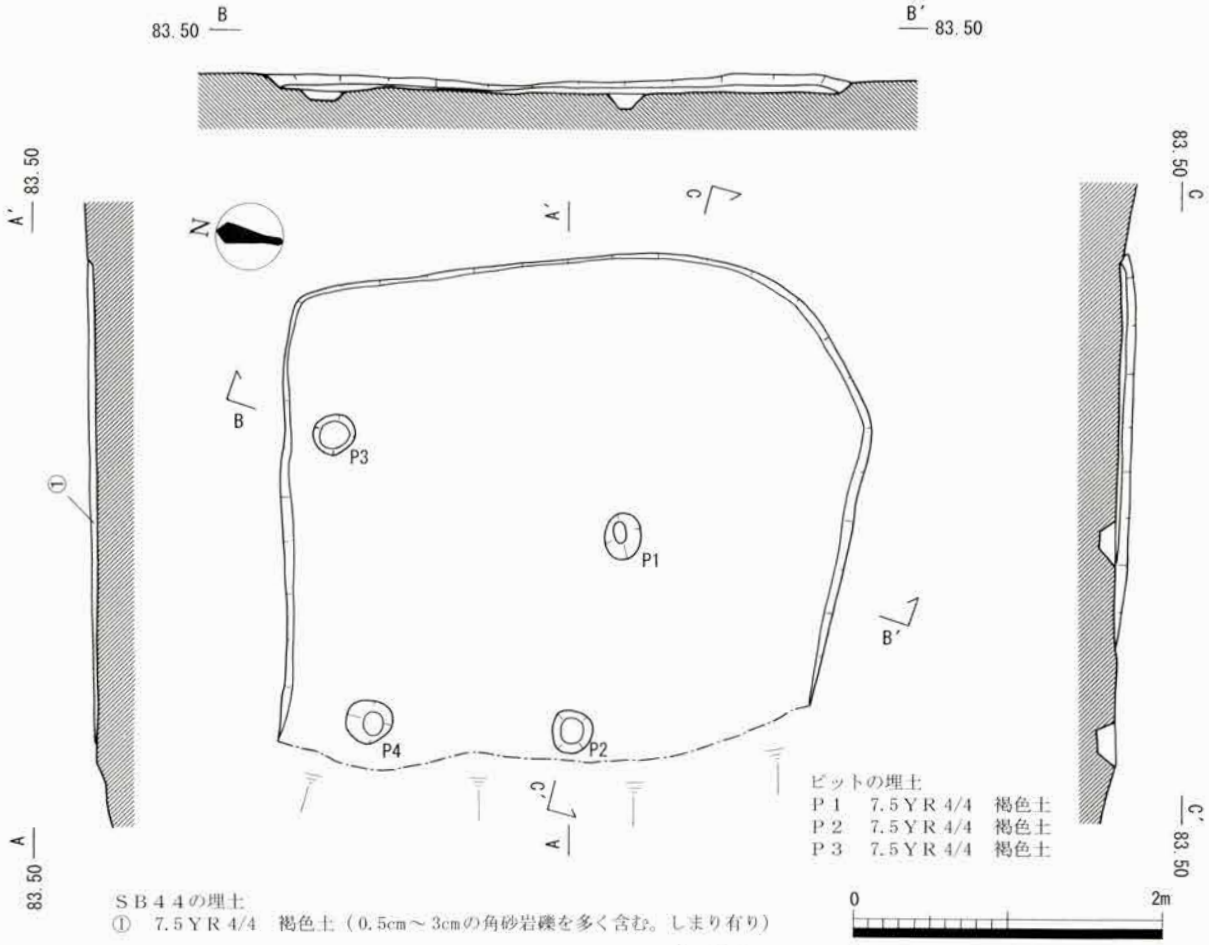


図79　ＳＢ44 実測図

地する。隅角は山側の北東隅角、南東隅角が残存し、前者は角張っており、後者は丸くおさめられている。幅3.80m、残存部の奥行き3.40mを測る。平面形は正方形に近いものであったと思われるが、

南東隅角は大きく弧を描き、いびつな形状を呈している。壁面及び床面は地山を掘り抜いて形成されているが、壁面の深さは山側で最大６㎝を確認できるのみで、風化と流出で残存状態は極めてよくない。

柱穴は４基を検出したが、対象の位置には並ばず、主柱穴と言えるものは見当らない。

壁溝、地床炉は、認められなかった。

遺物

土器は34点が出土したが、小片ばかりで、図化できるものはなかった。

ＳＢ４５

遺構（図80）

ｖ17グリッドにあり、北尾根から東谷の南の尾根に続く鞍部の緩やかな傾斜（傾斜度12.5%）地にで立地する。ＳＢ85に南東側を切られている（周辺地形図は、図78）。隅角は山側の北西隅角、南西隅角が残存し、いずれも丸くおさめられている。幅2.58m、残存部の奥行き1.86mを測る。平面形は正方形であったか長方形であったかは不明である。山側の壁面及び床面は砂岩の岩盤を、その他は地山を掘り抜いて形成されている。壁面の深さは山側で最大14㎝を確認できるのみで、風化と流出で残存状態はよくない。

主柱穴、壁溝、地床炉は、認められなかった。

遺物

土器は小片ばかり５点が出土したが、図化できるものはなかった。

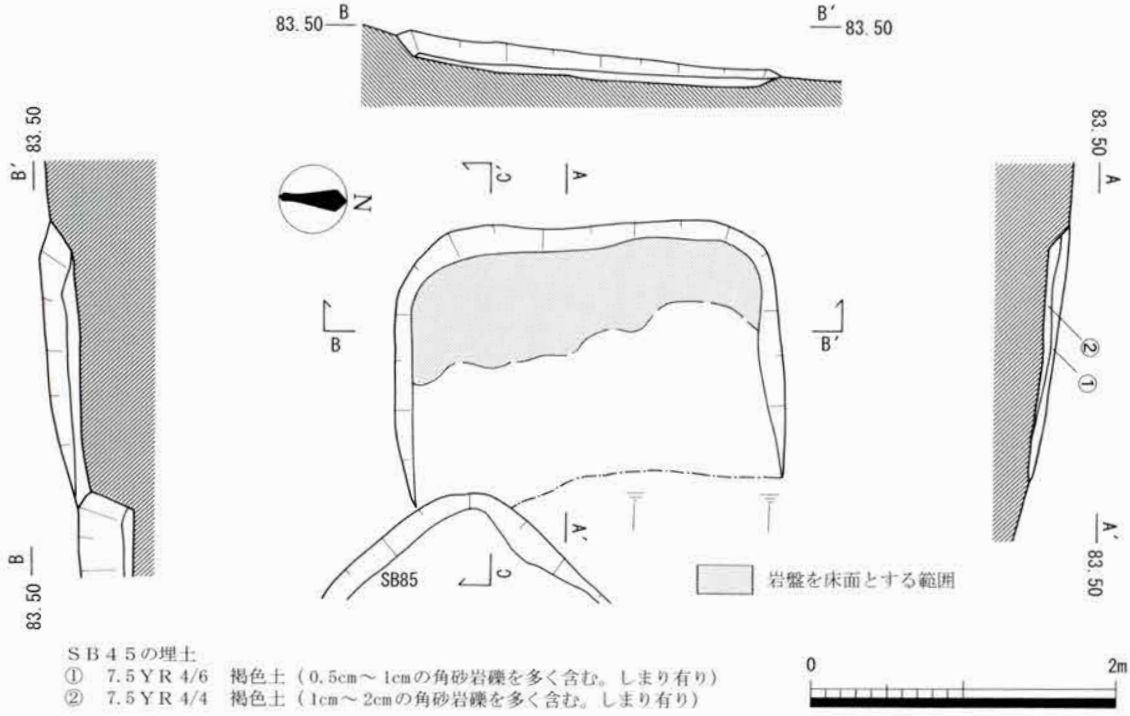


図80　ＳＢ45 実測図

ＳＢ４６

遺構（図82・図版６）

ｓ11グリッドにあり、南谷の、南南西に向かってくだる緩やかな傾斜(傾斜度14.5%)地に立地する。ＳＢ16の南側、ＳＢ28の東南側を切り、ＳＢ35に西側を切られている。東側にはＳＢ26が隣接する。隅角は北西・北東隅角が残存し、いずれも丸くおさめられている。幅5.80m、残存部の奥行き3.80mを測る。住居跡の幅で見た場合、その規模は当遺跡中第２位に相当する。平面形は、正方形であったか長方形であったかは不明である。壁面及び床面は第Ⅳ層の一部及び地山を掘り抜いて形成されている。壁面は最大53cm の深さを確認できる。住居内の埋没は、壁際から進行しており、自然埋没と判断される。 主柱穴はＰ１・Ｐ３を検出した。壁溝、地床炉は、認められなかった。

住居の床面には、炭化材が方向性を持って検出されたが少量である。その性格は不明である。

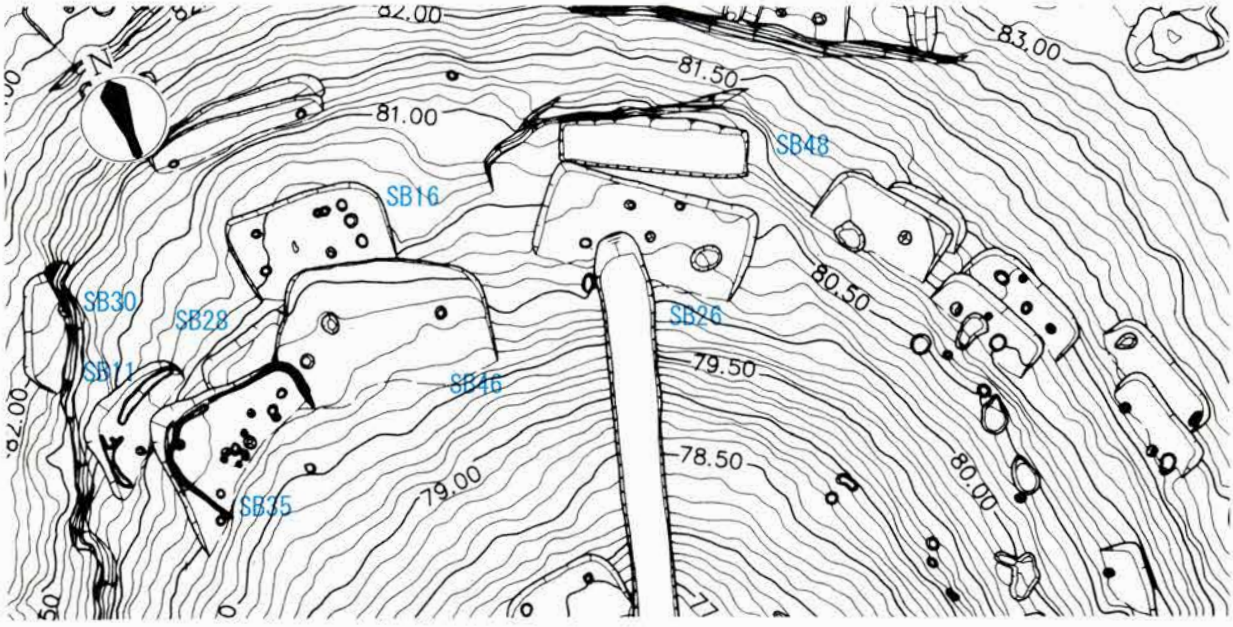


図81　ＳＢ46・48 周辺地形図（1/200）

遺物（図143、図版27・36）

土器は合計204点が出土し、このうち11点を図示した。193・194は器台Ｂ類の受け部で、193は口縁端部に面を形成するが無文である。194は口縁端部をわずかに垂下させ面を形成し、端部外面には擬凹線を巡らしている。195・196は高坏または器台の脚部である。いずれも裾部は内彎し大きく広がる。196は低脚である。欠損部が大きく、穿孔は１穴を確認できたが詳細は不明である。

197は鉢Ａ類の口縁部片で、外面に列点文を施す。198は鉢の体部片で頸部から肩部にかけて横線と列点文を施している。

199～202は甕である。199はＣ類で、頸部は強く屈曲し、外傾しつつ長く伸びた口縁の端部に段を作り、外面に横線を巡らしている。頸部から肩部にかけて横線を巡らす。200もＣ類で、外反する口縁の端部にわずかに段を作る。施文は見られない。201は平底甕の底部、202は台付甕の台部である。

203は壷Ｂ類の体部で、頸部から肩部にかけて横線と列点文を交互に施している。

以上のうち193・199・202以外は、①層または②層からの出土であり、混入である可能性が高い。

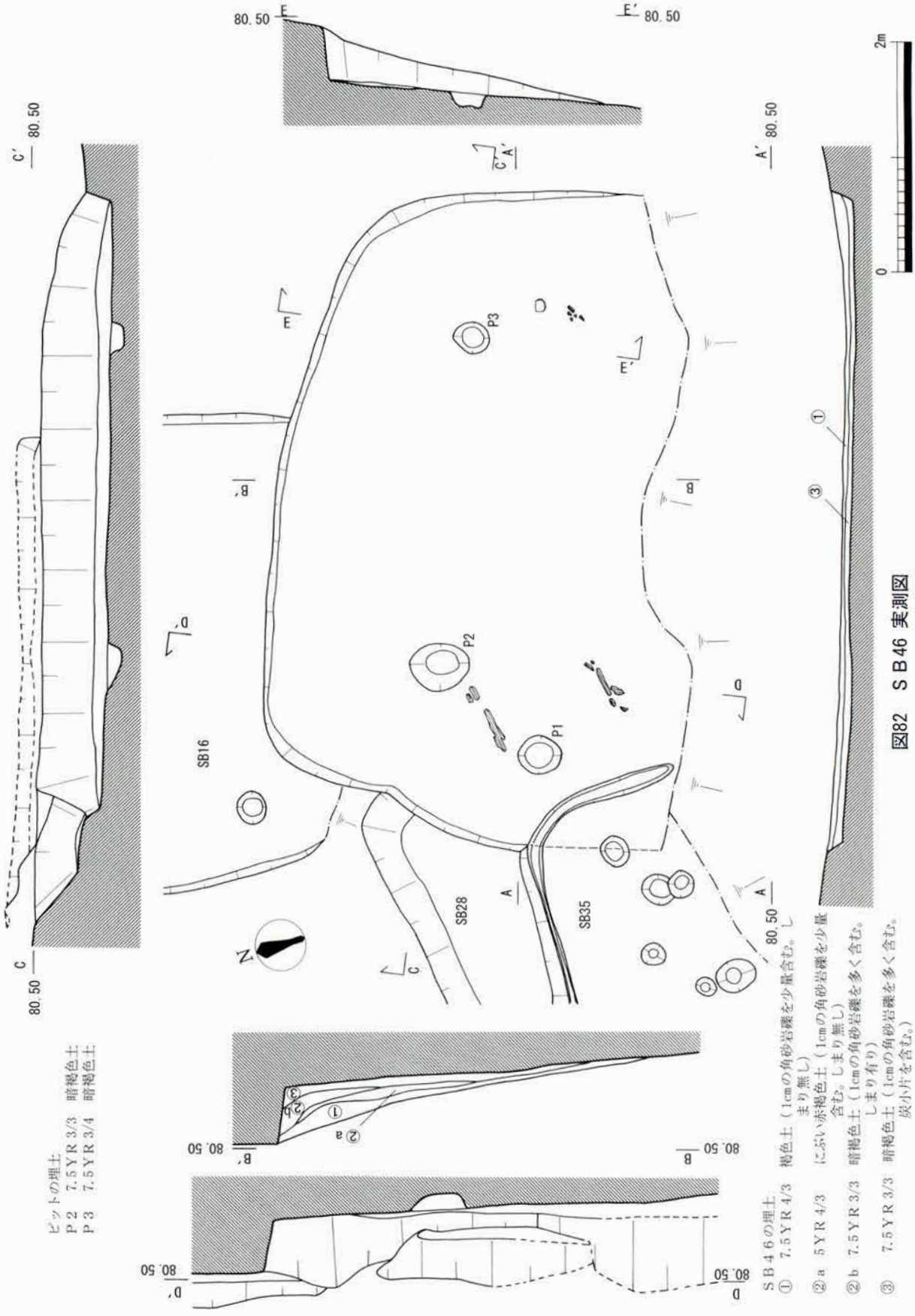

80.50
C
C′
80.50
E
E′
80.50
A
A′
80.50
B
B′
80.50
D
D′
80.50
SB16
SB28
SB35
P1
P2
P3
N
0
2m
ピットの埋土
P2　7.5YR 3/3　暗褐色土
P3　7.5YR 3/4　暗褐色土
SB46の埋土
① 7.5YR 4/3　褐色土（1cmの角砂岩礫を少量含む。しまり無し）
②a 5YR 4/3　にぶい赤褐色土（1cmの角砂岩礫を少量含む。しまり無し）
②b 7.5YR 3/3　暗褐色土（1cmの角砂岩礫を多く含む。しまり有り）
③ 7.5YR 3/3　暗褐色土（1cmの角砂岩礫を多く含む。炭小片を含む。）

図82　ＳＢ46 実測図

ＳＢ４７

遺構（図84、図版８）

ｘ13グリッドにあり、南谷の、西に向かってくだる極めて急な傾斜（傾斜度39.3%）地に単独で立地する。隅角は北東隅角が完存し、南東隅角も辛うじてその一部が残る。北東隅角はやや角張り、南東隅角は丸くおさめられている。幅6.12m、残存部の奥行き2.08mを測り、住居跡の幅で見た場合、その規模は当遺跡中最大である。平面形は、正方形であったか長方形であったかは不明であるが、この急斜面に一辺6.12mの正方形の床面を確保することは困難であり、長方形のプランであった可能性が高いと思われる。壁面及び床面は第Ⅳ層の一部及び地山を掘り抜いて形成されている。壁面は最大52cm の深さを確認できるが、急斜面に立地するため、谷側は著しく流出し残存状況はよくない。住居内の埋没は、壁際から進行しており、自然埋没と判断される。

壁溝は、ほぼ壁面に沿って残存部を全周する。

ピットは３基検出したが、主柱穴はＰ２、Ｐ３と考えられる。いずれも明瞭で、Ｐ１は38cm の深さで掘り込んでいる。

地床炉は、北東隅角寄りに検出したＳＫ１がそれに該当する可能性を持つ。長軸は75cm で最大深さは13cm と浅い。埋土には炭の小片が多く含まれていた。支柱石は認められなかった。

この住居の山側に存在するＳＤ06は、この住居の山側周溝である。当遺跡では82軒中３軒にのみ確認できた山側周溝を持つ住居の一つである。急斜面に掘られているため、住居側の掘り方の立ち上がりは流出が著しい。現存の溝幅は最大で47cm、深さは最大で20cm である。

遺物（図144、図版27・36）

土器は、合計248点が出土し、このうち７点を図示した。204は高坏の脚部で、裾部は内彎し広がる低脚である。205は鉢Ｃ類で、口縁端部外面に横線と列点文を施す。206は鉢Ａ類で、口縁部は短く外傾し明瞭な段を形成する。端部外面に列点文を施す。207は甕Ｄ類で、口縁部は長く直線的に伸び、端

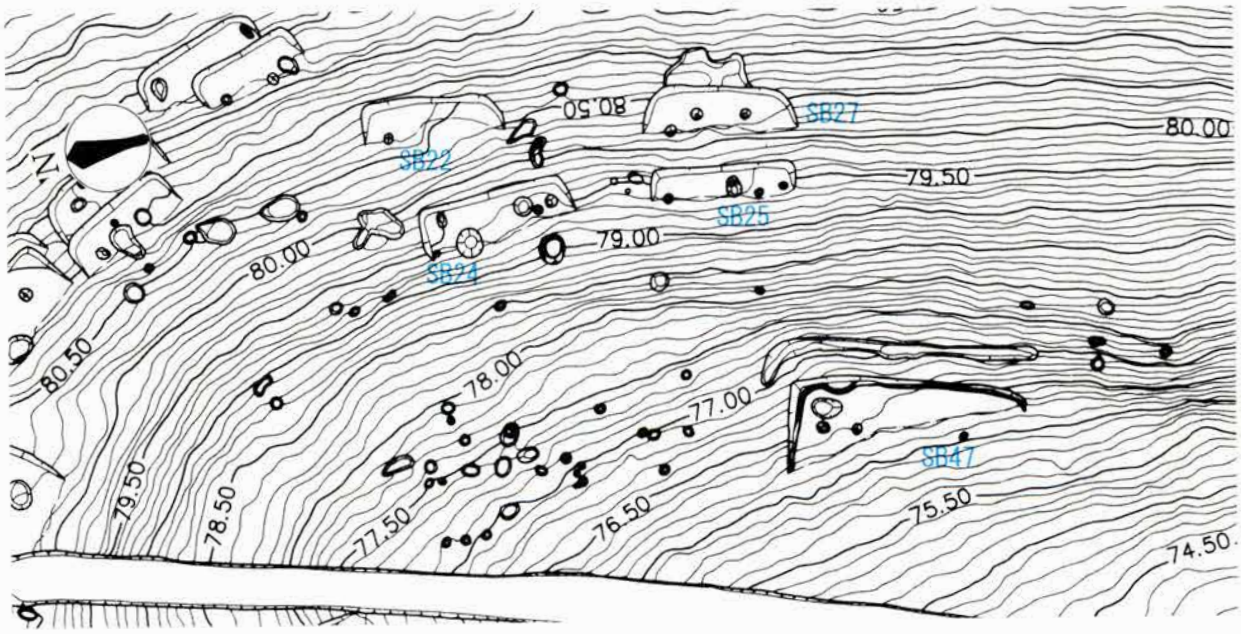


図83　ＳＢ47 周辺地形図（1/200）

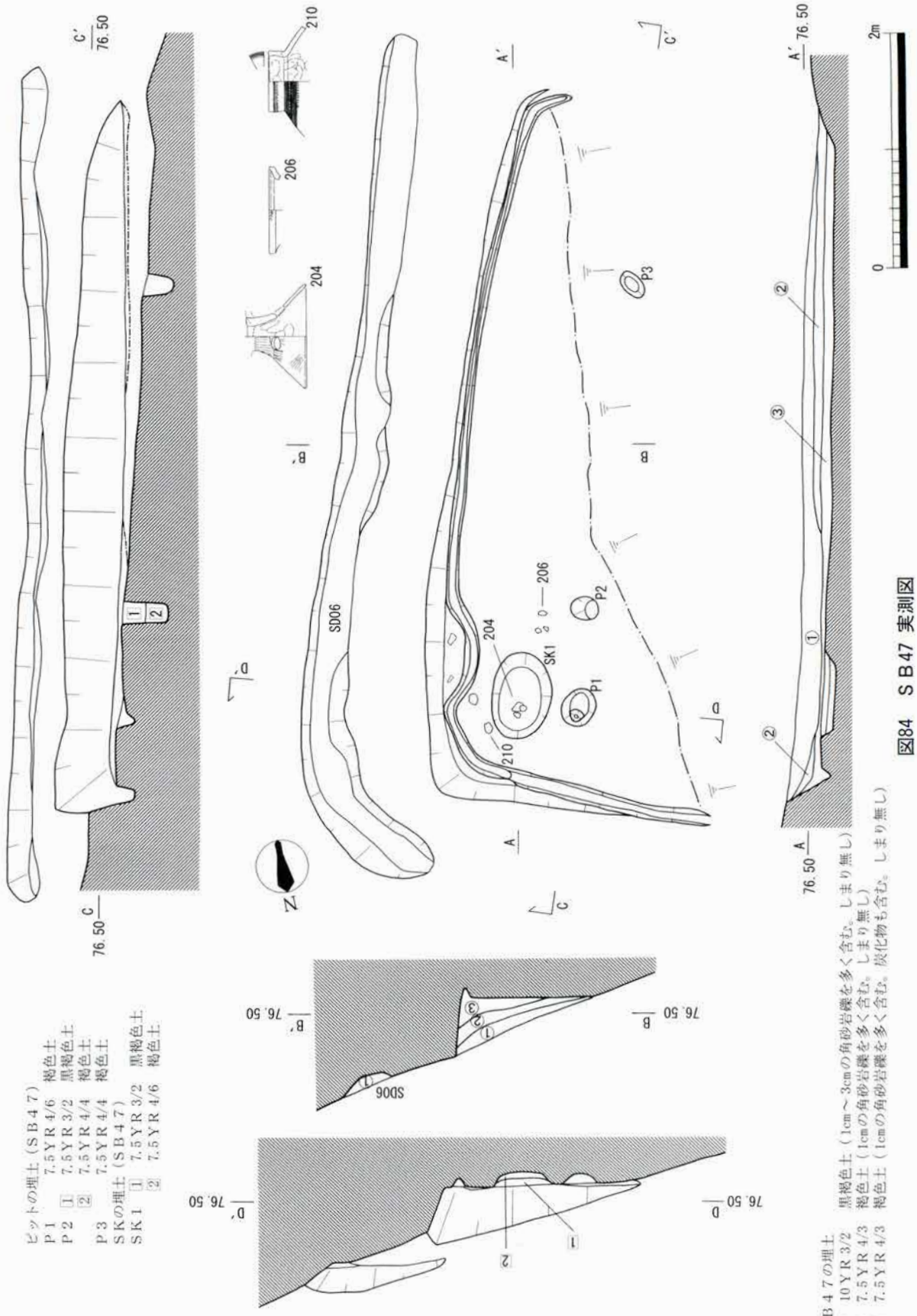

ピットの埋土（ＳＢ４７）
Ｐ１　7.5ＹＲ 4/6　褐色土
Ｐ２　1　7.5ＹＲ 3/2　黒褐色土
　　2　7.5ＹＲ 4/4　褐色土
Ｐ３　7.5ＹＲ 4/4　褐色土
ＳＫの埋土（ＳＢ４７）
ＳＫ１　1　7.5ＹＲ 3/2　黒褐色土
　　2　7.5ＹＲ 4/6　褐色土
ＳＢ４７の埋土
① 10ＹＲ 3/2　黒褐色土（1cm～3cmの角砂岩礫を多く含む。しまり無し）
② 7.5ＹＲ 4/3　褐色土（1cmの角砂岩礫を多く含む。しまり無し）
③ 7.5ＹＲ 4/3　褐色土（1cmの角砂岩礫を多く含む。炭化物も含む。しまり無し）
76.50
C
C'
D
D'
B
B'
A
A'
SD06
SK1
P1
P2
P3
204
206
210
N
0
2m

図84　ＳＢ47 実測図

部に面を作っている。209は甕Ｃ類、208は平底甕の底部である。210は壺Ｄ２類で、口縁部は内彎しつつ短く直立する。口縁端部はわずかに拡張して面を形成し、端部上面には擬凹線を巡らしている。口縁部外面及び頸部から肩部にかけて横線と列点文を施す。外面には赤彩が施される装飾性の高い土器である。

以上の土器は、204・206・210以外は①層または②層からの出土であり、斜面上部の他の遺構からの流れ込みである可能性が高い。また210は③層からの出土であるが、山側周溝（ＳＤ06）出土の破片と接合しており、これも混入の可能性がある。

ＳＢ４８

遺構（図85、図版８）

ｓ14グリッドにあり、南谷の、南西に向かってくだる極めて急な傾斜（傾斜度32.1%）地に立地する。ＳＢ17の南側を切ってつくられている（周辺地形図は、図81）。隅角は北西・南西隅角が残存し、いずれも丸くおさめられている。幅3.56m、残存部の奥行き1.70mを測る。平面形は、正方形であったか長方形であったかは不明である。壁面及び床面は地山を掘り抜いて形成されている。壁面は最大30cmの深さを確認できるが、急斜面に立地するため、谷側は流出し、残存状況はよくない。住居内の埋没は、壁際から進行しており、自然埋没と判断される。

壁溝は、北西側壁面に沿って一部に認められる。

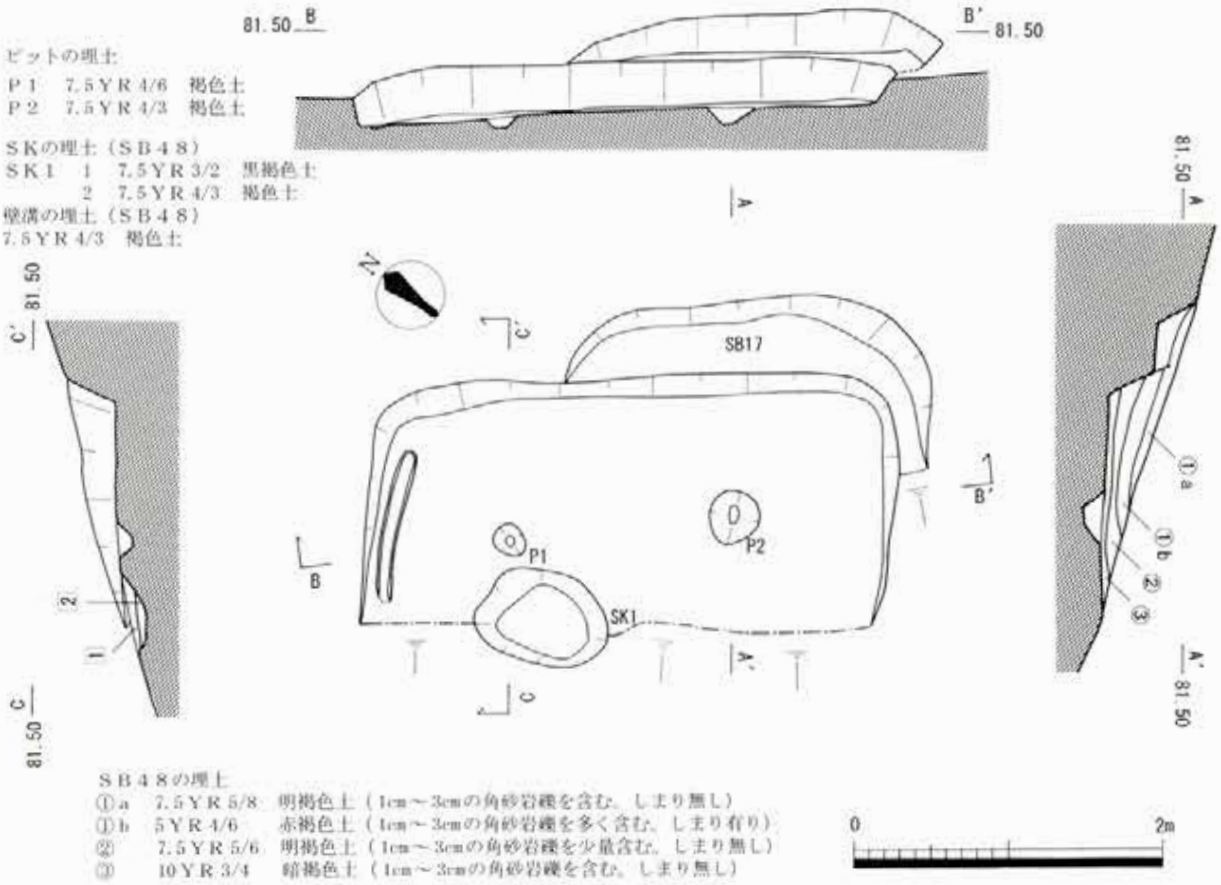


図85　ＳＢ48 実測図

主柱穴はＰ１、Ｐ２を検出した。いずれも浅く不明瞭である。

地床炉は、長軸90cm で最大深さ12cm の浅い土坑（ＳＫ１）が、それに該当する可能性を持つ。埋土には炭の小片が多く含まれていた。支柱石は認められなかった。

遺物（図144、図版36）

土器は、合計50点が出土し、このうち５点を図示した。211は器台Ｂ類の脚部。212は高坏Ｆ類の脚部と思われるが、極めて小型で脚裾部は屈折して広がる低脚である。213は鉢Ｂ類またはＣ類で、頸部から肩部にかけての破片で、横線と列点文を施す。214は甕Ｄ類で外反する口縁の端部外面に刻み目を施す。215も甕Ｄ類である。

以上のうち214・215の2点は、①層または②層からの出土であり、斜面上部の他の遺構からの流れ込みである可能性が高い。

ＳＢ５０

遺構（図87、図版９）

１2グリッドにあり、南尾根から北西に向かって派生する尾根の鞍部の端に単独で立地する。北谷にむかって東北東にくだる緩やかな傾斜地で、傾斜度は13.3%である。東にＳＢ56、南東にＳＢ52が近接する。隅角は北西・南西隅角が残存し、いずれも丸くおさめられている。幅3.44m、残存部の奥行き2.40mを測る。平面形は、正方形であったか長方形であったかは不明である。壁面及び床面は全面にわたって砂岩の岩盤を掘り抜いて形成されている。壁面は最大22cm の深さを確認できるが、岩盤の風化、流出により、本来の高さをとどめていないと考えられる。住居内の埋没は、壁際から進行しており、自然埋没と判断される。

壁溝は、西側壁面から南側壁面に沿って認められる。

主柱穴は検出されなかった。

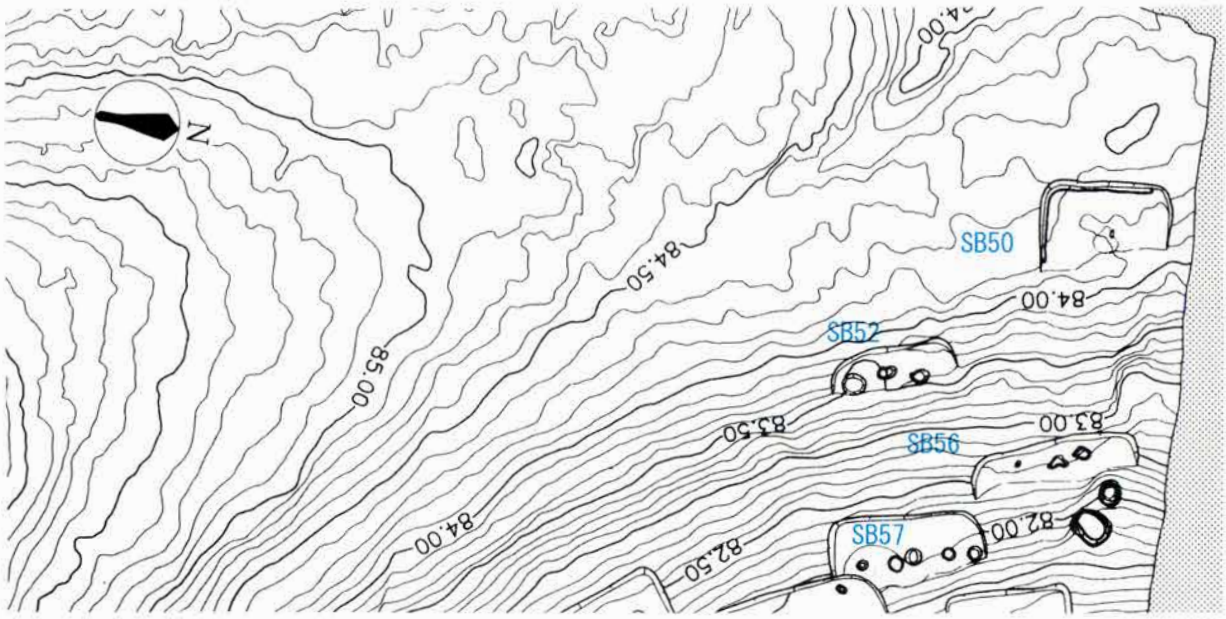


図86　ＳＢ50・52 周辺地形図（1/200）

0　10m

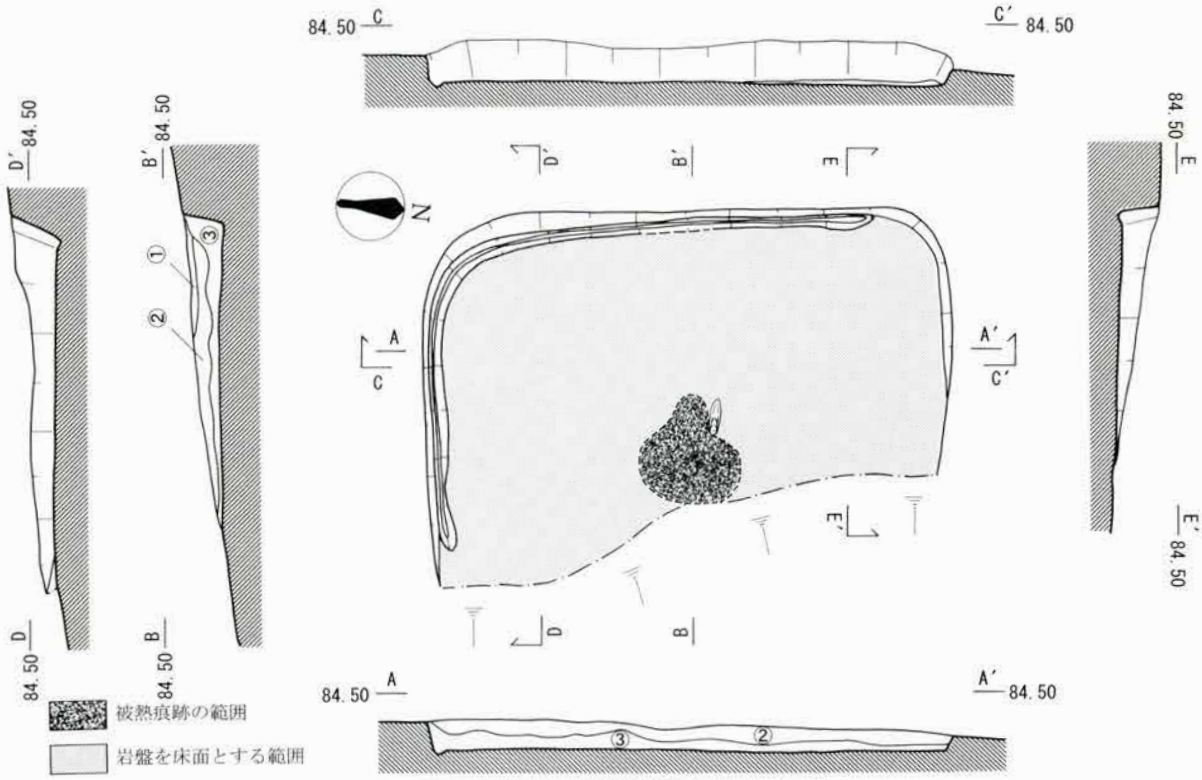
地床炉は、中央谷寄りの長軸70cmの不整形の被熱痕跡がそれに該当する。長軸25cmの長楕円形の支柱石が、下部を岩盤に埋め込む形で横位に据えつけられていた。他の住居に見られるような浅い土坑はともなわない。

遺物（図144、図版27・36）

土器は合計219点が出土したが、小片が多く、図化できたのは８点である。216・217は甕Ｇ２類で、216は、頸部の屈曲が甘く、口縁部外面に弱い段を作り平坦面を形成する。口縁部外面への施文は見られない。217の口縁部も同様である。218は甕の頸部付近の体部片で、横線と列点文を施す。219は平底甕の底部。

220～223は壷である。220は壷Ｂ１類の口縁部で、口縁端部を拡張し、端部外面には擬凹線を巡らす。221・222は壷Ｂ類の体部片で、前者は波状文と横線、後者は不連続の波状文と列点文を施す。223は壷Ｂ類の底部である。

以上の土器はいずれも②層からの出土であるが、斜面上部や付近に他の遺構が存在せず、混入は考えられない。この住居に帰属するものと判断してよいかと思われる。



ＳＢ５０の埋土
① 7.5ＹＲ 5/6　明褐色土（2cm～5cmの角砂岩礫を多く含む。しまり無し）
② 7.5ＹＲ 5/6　明褐色土（2cm～5cmの角砂岩礫を含む。しまり有り）
③ 7.5ＹＲ 4/6　褐色土（1cm～3cmの角砂岩礫を含む。炭小片も多く含む。しまり有り）

図87　ＳＢ50 実測図

ＳＢ５２

遺構（図88、図版９）

ｍ３グリッドにあり、北谷の、東北東に向かってくだる極めて急な傾斜（傾斜度35.7%）地に単独

で立地する。西北にＳＢ50が、北東にＳＢ56が存在する（周辺地形図は、図86）。隅角は山側の北西隅角、南西隅角が残存し、いずれも丸くおさめられている。幅3.30m、残存部の奥行き1.14mを測る。平面形は不明である。壁面及び床面は地山を掘り抜いて形成されており、壁面の深さは、山側で最大32cmを確認できる。住居内の埋没は、壁際から進行しており、自然埋没と判断される。

主柱穴はＰ１・Ｐ３と思われるが、柱穴にしてはやや大きい。

地床炉は、長軸50cmで最大深さが９cmと浅いＰ２にその可能性がある。

壁溝は、認められなかった。

遺物（図145、図版28）

土器は42点が出土したが、小片が多く、図化できたのは１点のみ（224）である。甕Ａ２類で、頸部は曲線的にくびれ、口縁は長く外反する。器壁外面は摩耗しているが、縦方向の櫛条痕による調整が認められる。Ａ類の甕に多く見受けられる口縁端部内外面の施文は見られない。当遺跡で出土した甕Ａ類の中では最も遺存状態が良好な個体である。床面直上から出土しており、この住居に帰属する土器と考えられる。

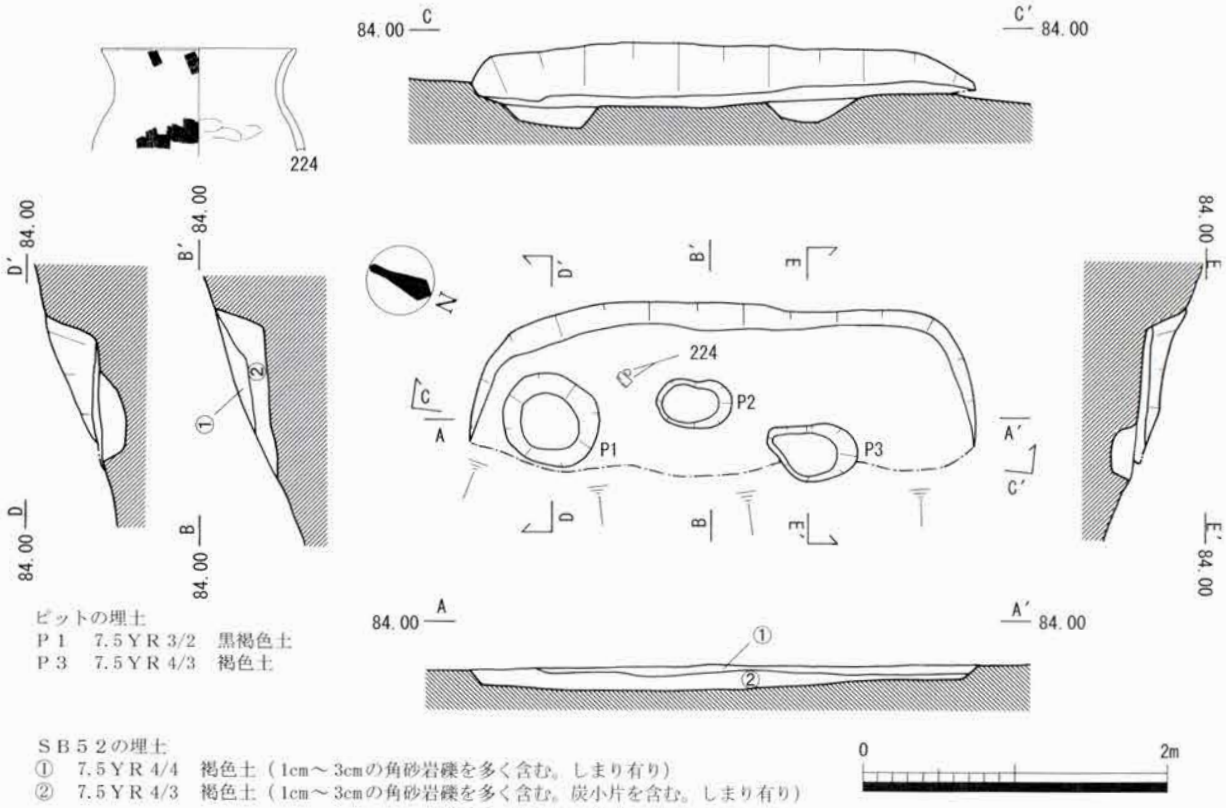


図88　ＳＢ52 実測図

ＳＢ５３

遺構（図90、図版９）

ｒ９グリッドにあり、南谷の、南西に向かってくだる急な傾斜（傾斜度28.6%）地に立地する。南東にＳＢ30が近接する。東側を昭和50年代の山土採取によって破壊されている。隅角は山側の北西隅角と南西隅角が残存し、前者は丸く、後者は角張っている。残存部の幅3.18m、奥行き1.48mを測る。

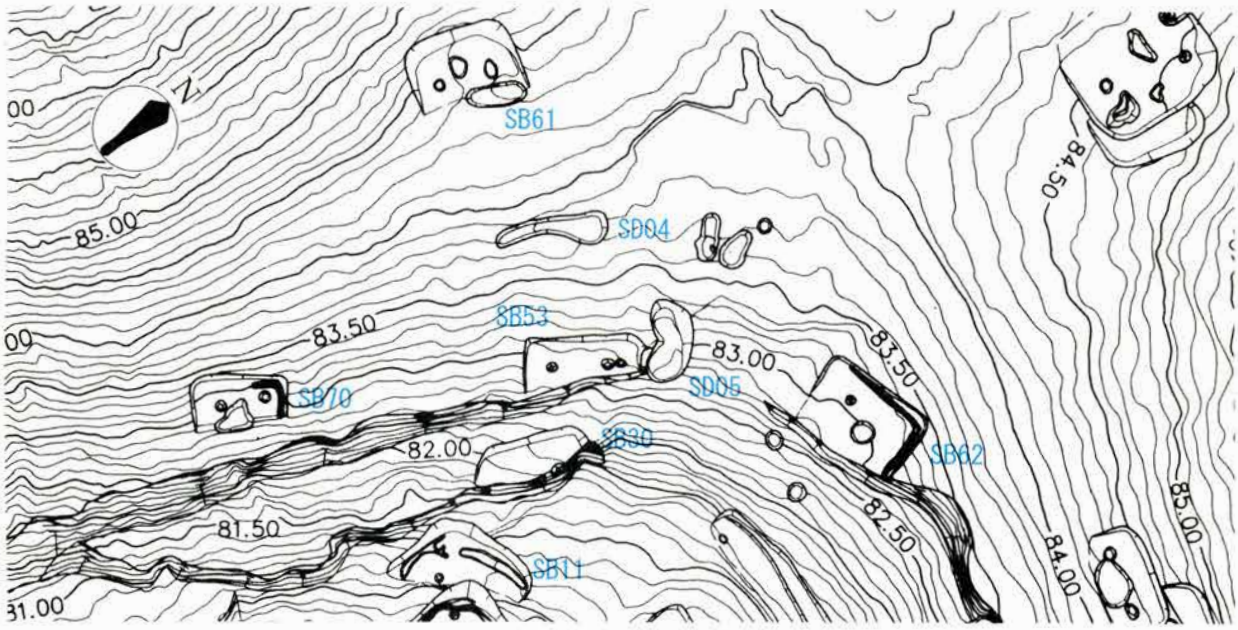
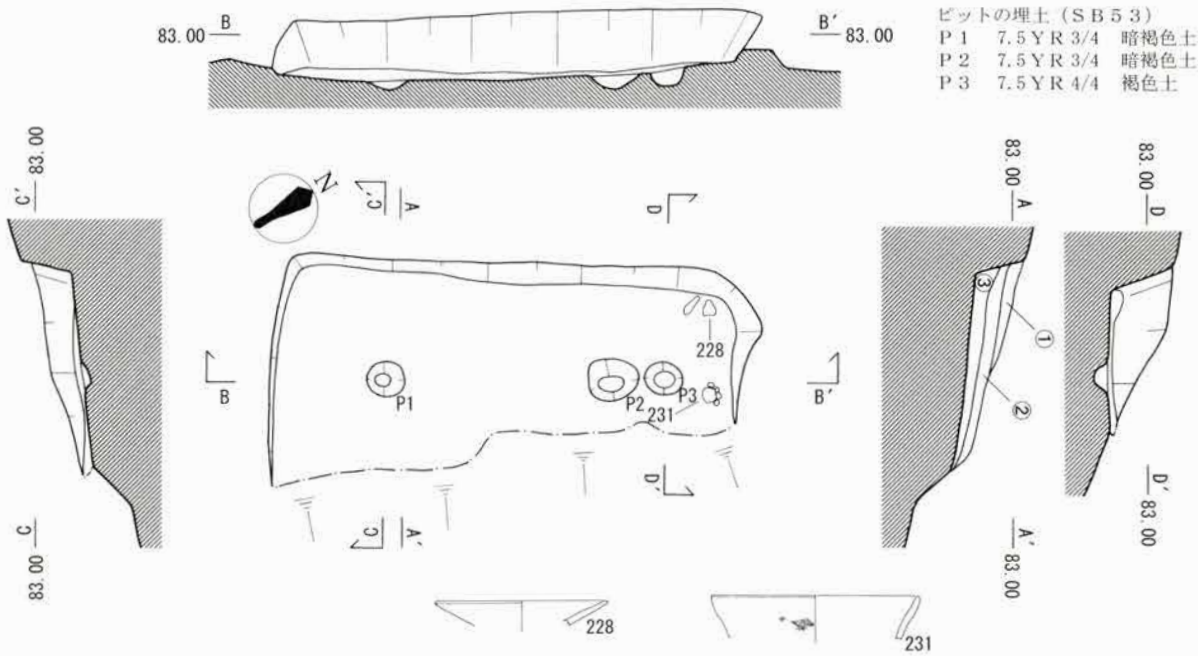


図89　ＳＢ53・61・62・70 周辺地形図（1/200）

平面形は、正方形であったか長方形であったかは不明である。壁面及び床面は、地山を掘り抜いて形成されており、壁面の深さは、山側で最大40cm を確認できる。住居内の埋没は、壁際から進行しており、自然埋没と判断される。

住居の西2.5mに存在するＳＤ04と北側に隣接するＳＤ05は、本来は連続していたと想定した場合、この住居の山側周溝であったという見方も可能かもしれない。

柱穴は３基検出したが、このうち主柱穴は、Ｐ１とＰ２またはＰ３のいずれかであろう。



ＳＢ５３の埋土
① 7.5ＹＲ 4/6　褐色土（1cm～5cmの角砂岩礫を多く含む。しまり有り）
② 7.5ＹＲ 4/4　褐色土（1cm～5cmの角砂岩礫を多く含む。炭小片を少量含む。しまり有り）
③ 7.5ＹＲ 4/3　褐色土（1cmの角砂岩礫を含む。炭小片を含む。しまり有り）

図90　ＳＢ53 実測図

壁溝、地床炉は、検出した床面には認められなかった。

遺物（図145、図版36）

土器は267点が出土したが、小片が多く、図化できたのは10点である。225・226は、高坏Ｃ類の口縁部片で、内彎して立ち上がり端部外面には横線を巡らせている。227は器台Ｃ類とした。受け部の口縁端部外面に段を作って平坦面を形成し、擬凹線を巡らしている。北陸系の影響を受けた器台を想定し復元実測を試みたが、小片であるため誤認である可能性もある。228は器台Ｂ類である。229は鉢Ｃ類で、緩やかに内彎して立ち上がる口縁の端部外面に横線を巡らす。230・231は甕Ｄ類で、前者は、口縁の端部に内傾する面を持つ。232～234は平底甕の底部である。

以上の土器はいずれも①層または②層からの出土であり、斜面上部からの流れ込みの可能性が高い。

ＳＢ５４

遺構（図92、図版９）

ｎ７グリッドにあり、北谷の、北北東にくだる緩やかな傾斜（17.3%）地に立地する。南側をＳＢ31に切られている。東にＳＢ09、南西にＳＢ66が近接する。隅角は南西・南東隅角が残存し、前者はやや角張り、後者は丸くおさめられている。幅3.70m、残存部の奥行き2.80mを測る。平面形は、正方形であったか長方形であったかは不明である。壁面及び床面は第Ⅵ層と地山を掘り抜いて形成されている。壁面は最大33cm の深さを確認できるが、ＳＢ31によって南側の壁面の上部を広い範囲に渡り破壊されている。住居内の埋没は、壁際から進行しており、自然埋没と判断される。

柱穴は６基検出したが、主柱穴はＰ１・Ｐ２・Ｐ４・Ｐ６と考えられる。

地床炉は、それに該当するものとして、中央の山寄りに長軸95cm、最大深さ13cm の浅い土坑（ＳＫ

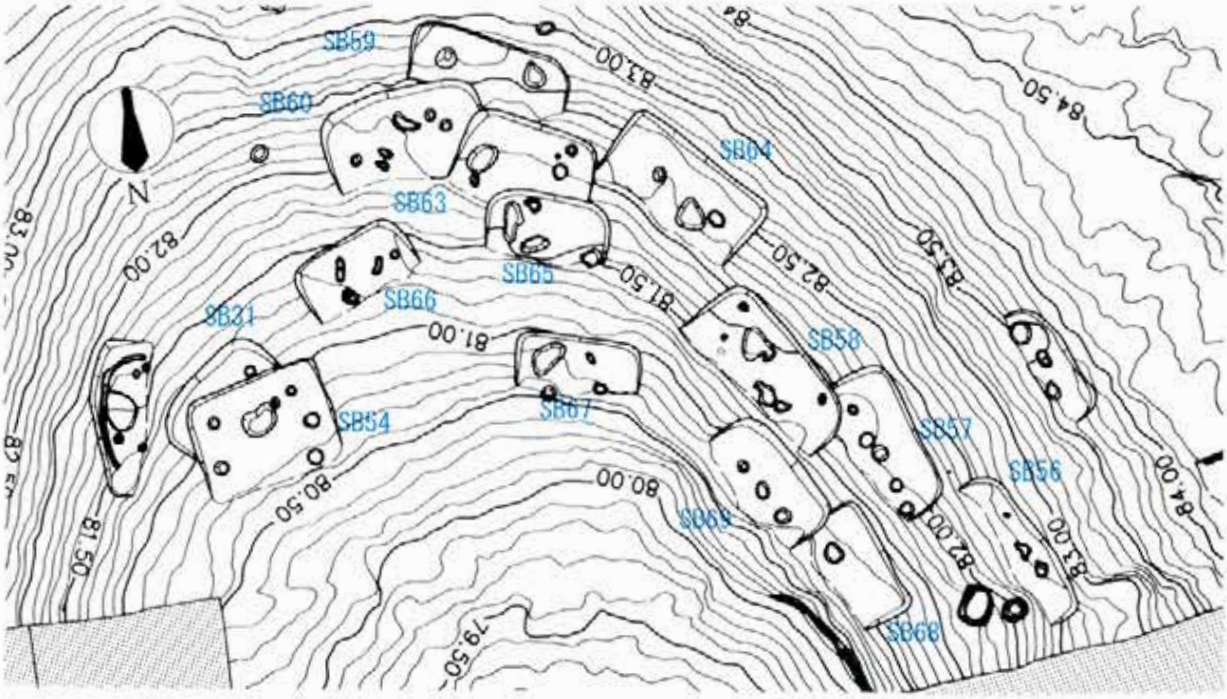
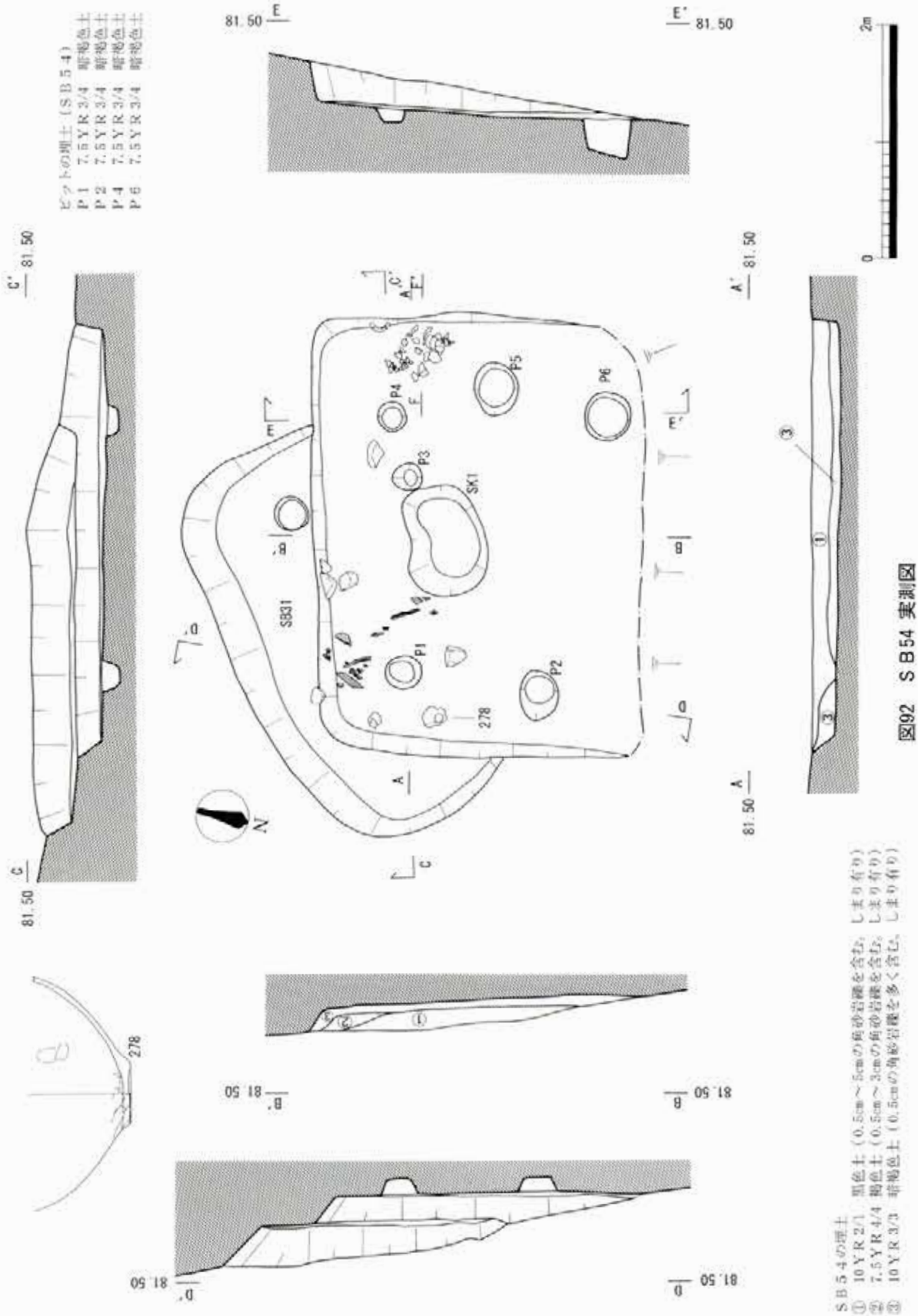


図91　ＳＢ54～69 周辺地形図（1/200）

0　10m



ＳＢ５４の埋土
① 10ＹＲ 2/1　黒色土（0.5cm～5cmの角砂岩礫を含む。しまり有り）
② 7.5ＹＲ 4/4　褐色土（0.5cm～3cmの角砂岩礫を含む。しまり有り）
③ 10ＹＲ 3/3　暗褐色土（0.5cmの角砂岩礫を多く含む。しまり有り）

図92　ＳＢ54 実測図

１）を検出した。埋土には炭が多く含まれていたが、支柱石は認められなかった。

また、ＳＫ１から南東隅角の間の床面に接して炭化材を検出した。量的には多くはないが、方向性をもって並んでいた。

遺物（図93・145～148、図版28・29・36・37）

合計1344点という大量の土器が出土した。完形となるものは無かったが、接合率も比較的よく、48点を図化し得た。

235～237は高坏である。235はＣ類の口縁部で、わずかに内彎気味だが口縁端部までほぼ直線的に伸びる。坏底部との接続部で口縁部がはずれているため、坏部の深さを知ることができるが、当遺跡のＣ類としては比較的浅い部類に入る。236はＣ類の口縁部片で、端部内面を肥厚し、肥厚した部分には沈線を施していたと思われるが、摩耗のためか確認できない。237は小型の低脚で、裾部が内彎し、透かし孔はない。小型の高坏Ｅ類またはＦ類の脚部であろう。

238～242は器台である。このうち238はＢ類、他は不明である。238・240は端部をわずかに拡張し面を形成する。239は端部を垂下拡張し面を形成するが、無文である。241・242はＢ２類の脚部で、いずれも裾部は開き内彎する。

243～249は鉢である。243は鉢Ｄ類とした。頸部はくの字状に屈曲し、口縁部は短く直線的に伸びる。頸部から肩部にかけて横線と列点文を施している。口径を体部径が上回る鉢は、当遺跡ではこの個体のみである。底部をはじめとして外面には煤が厚く付着する。また、底部の中心から少し外れた

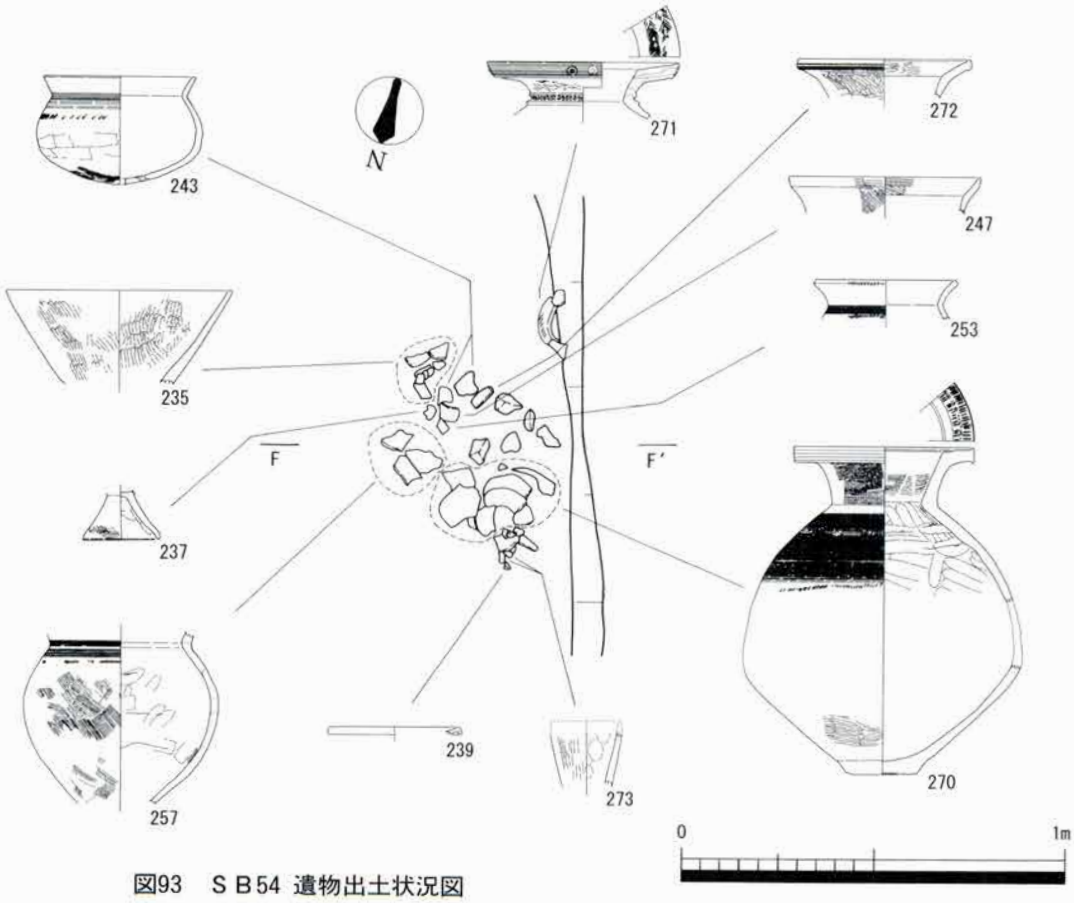


図93　ＳＢ54 遺物出土状況図

位置に、使用後にあけられた直径６㎜の穿孔がある。244～246は、鉢Ｂ類である。長く外傾する口縁の端部に段を持ち、端部外面に横線と列点文（244）、列点文のみ（245）、横線のみ（246）をそれぞれ施している。247～249は鉢Ｃ類で、248・249は、内彎する口縁の端部外面に横線を施している。250は鉢の頸部付近の体部片で、横線と列点文を施す。

251～269は甕である。252は甕Ａ２類で、口縁は長く外反し端部には面を形成する。端部外面には刻み目を入れ、内面は無文である。器壁外面は縦方向の櫛条痕による調整が施されている。251・253～255は甕Ｄ類で長く外傾したくの字状の口縁を持つ。253は口縁端部に面を作り、外面に刻み目、頸部から肩部にかけて横線と列点文を施す。254は口縁端部外面に横線と列点文、255は口縁端部外面に刻み目を施している。255は推定口径25.6㎝の大型の甕である。256は甕Ｆ類で、口縁部外面に押し引き列点文を巡らし、Ｓ字状口縁台付甕Ａ類に属するものと考えられる。口縁部第２段が直立し、頸部内面には、横方向のハケ目を確認できる。257は甕の体部で全周する。頸部に横線と列点文を施す。258～260は、平底甕の底部である。261～265は甕の頸部付近の体部片で、いずれも横線と列点文を施す。266～269は台付甕の台部である。

270～282は壺である。270はＡ２類で、頸部は内面に稜をなして強く屈曲し、口縁部内面に平坦面を形成する。端部外面を上下に拡張し稜を形成する。体部最大径は下位にある。文様帯は、口縁内面の平坦面には、竹管列点文とそれを挟んでヘラ描き列点文が２段に施され、口縁外面には擬凹線、頸部から肩部にかけては、横線と列点文を数段にわたって繰り返している。口縁部内外面および体部の大半に赤彩が施されている。271もＡ２類で、頸部は内面に稜をなして強く屈曲し、口縁部内面に平坦面を形成する。端部外面を上下に拡張し稜を形成する。頸部外面には、２本の突帯を巡らしている。文様帯は、口縁内面の平坦面には、波状文を２段にわたって施し、口縁外面には擬凹線を巡らし、円形浮文を貼り付けている。頸部外面の２本の突帯の間に竹管列点文を巡らしている。残存部の外面には竹管列点文が巡る部分を除いて、赤彩が施されている。また、口縁部内面にも、わずかに赤彩が残る。

274はＡ１類の口縁部で、無文である。内面に赤彩が残存する。272はＢ１類の口縁部で、中程で屈曲し段を持つ。端部外面を上下に拡張し、稜を形成する。口縁外面には擬凹線を巡らす。273はＣ２類の緩やかに内彎する口縁部である。275はＡ類の体部で横線と列点文を交互に２段にわたって巡らし、体部の外面には赤彩が施される。276・277は壺Ｂ類の体部片で、前者は横線と櫛描き列点文、竹管列点文、後者は横線２段と波状文を施しているのが確認できる。278～282は壺の底部である。282はＡ類で、外面に赤彩が認められる。その他はＢ類であるが、280はＣ類の可能性もある。凹み底である。

以上の土器のうち、241・242・248・249・252・260・264・266～269・274・276・277・282の15点は、①層または②層からの出土であり、流れ込みの可能性がある。

ＳＢ５６

遺構（図94、図版９）

１３グリッドにあり、北谷の、東北東に向かってくだる極めて急な傾斜（傾斜度39.7%）地に単独で立地する。南東にＳＢ57が隣接する（周辺地形図は、図91）。隅角は山側の北西隅角、南西隅角が残存し、いずれも丸くおさめられている。幅4.44m、残存部の奥行き1.24mを測る。平面形は、正方形で

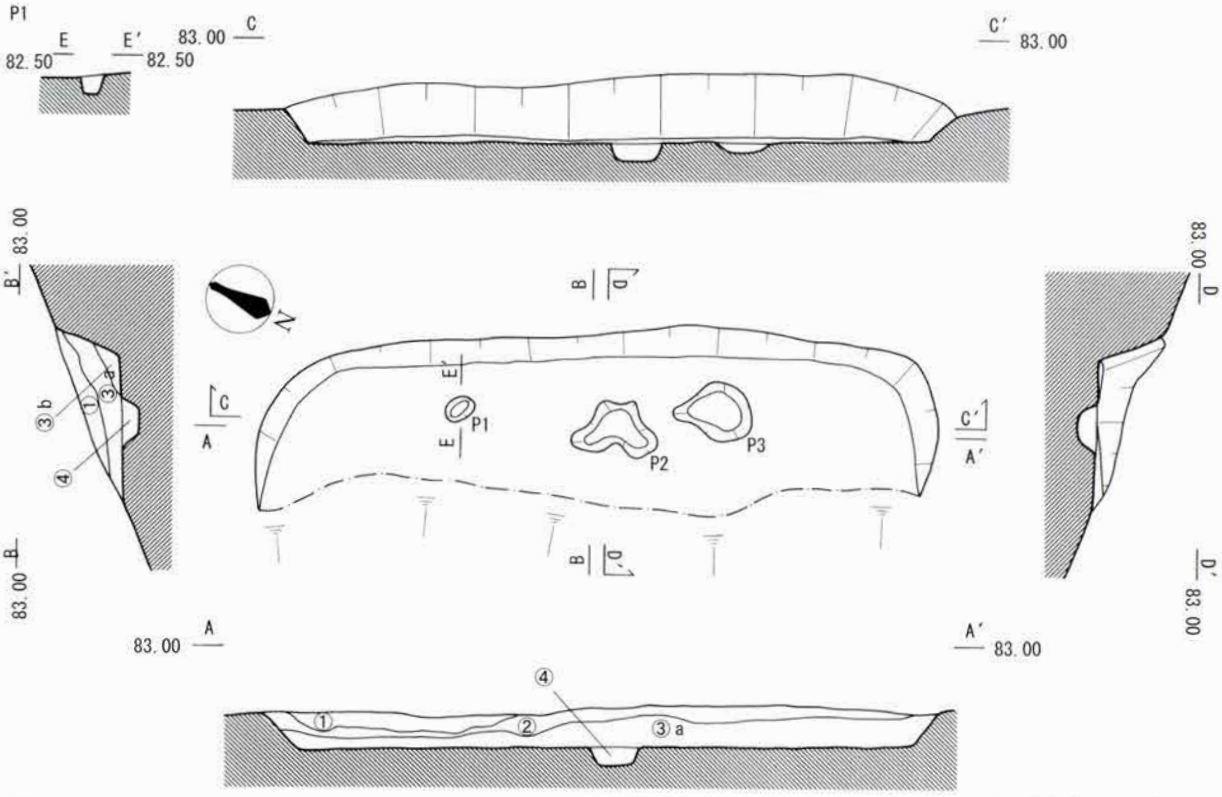
あったか長方形であったかは不明であるが、このような急斜面に正方形の床面を確保することは困難ではある。壁面及び床面は第Ⅳ層と地山を掘り抜いて形成されており、壁面の深さは、山側で最大44㎝を確認できる。住居内の埋没は、壁際から進行しており、自然埋没と判断される。

主柱穴はＰ１・Ｐ３と思われるが、Ｐ３は浅く不明瞭である。

壁溝は、検出した床面には認められなかった。

遺物（図148、図版37）

土器は、110点が出土したが小片が多く、図化できたのは２点のみである。283は鉢Ｃ類の口縁部で緩やかに内彎する。施文はない。287は鉢の底部で凹み底である。以上の土器は、それぞれ①、②層からの出土であり、流れ込みの可能性がある。



ＳＢ５６の土地
① 7.5ＹＲ 3/2 黒褐色土（1㎝～2㎝の角砂岩礫を多く含む。しまり無し）
② 7.5ＹＲ 3/4 暗褐色土（1㎝～2㎝の角砂岩礫を多く含む。7.5ＹＲ 4/4褐色砂も含む。しまり有り）
③a 7.5ＹＲ 3/3 暗褐色土（1㎝～2㎝の角砂岩礫を多く含む。しまり有り）
③b 7.5ＹＲ 4/3 褐色土（0.5㎝の角砂岩礫を少量含む。しまり有り）
④ 7.5ＹＲ 3/2 黒褐色土（Ｐ２埋土）

ピットの埋土（ＳＢ５６）
Ｐ１ 7.5ＹＲ 3/1 黒褐色土
Ｐ３ 7.5ＹＲ 3/1 黒褐色土

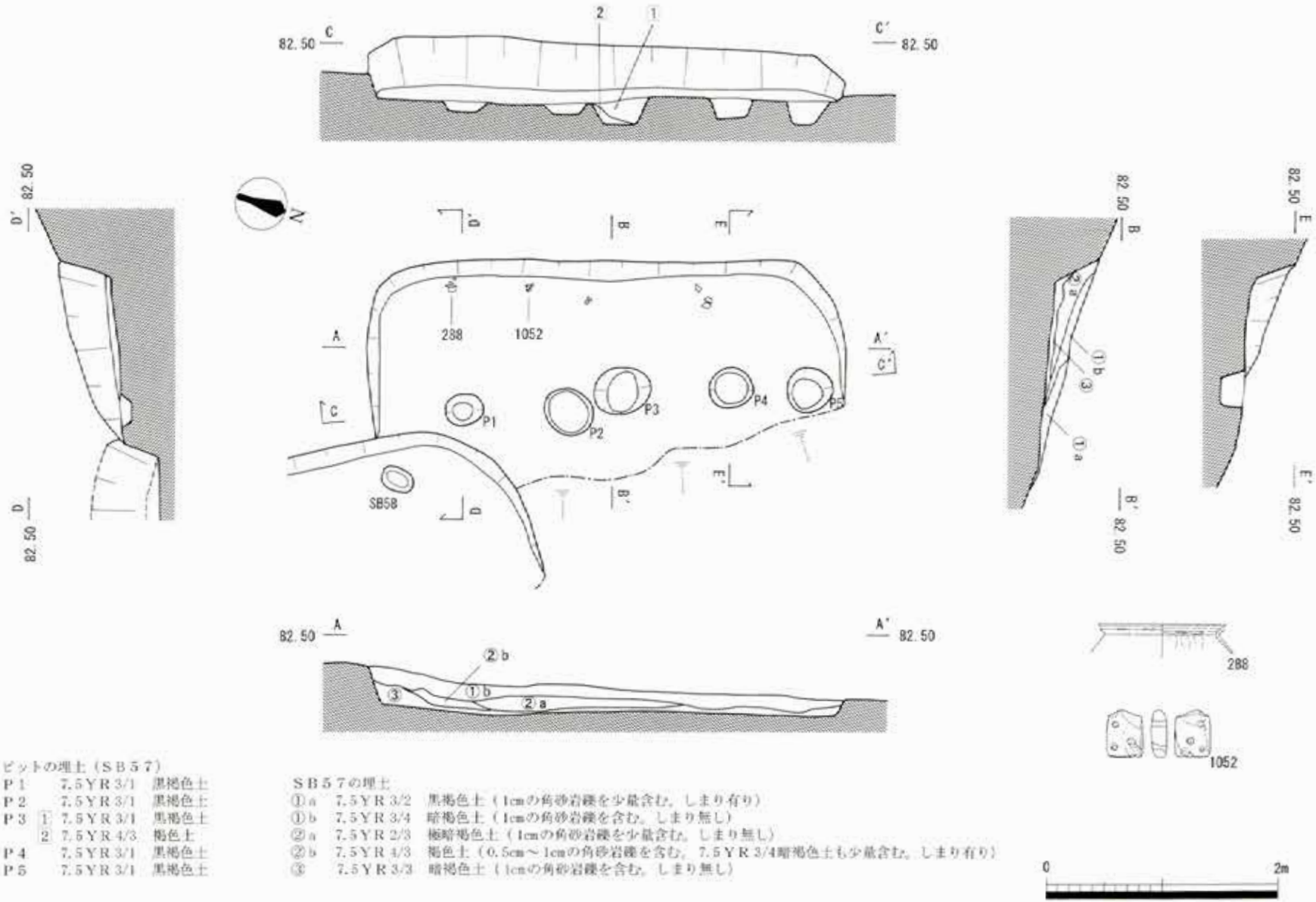
0　2m

図94　ＳＢ56 実測図

ＳＢ５７

遺構（図95）

ｍ４グリッドにあり、北谷の、東北東に向かってくだる極めて急な傾斜（傾斜度32.6%）地に立地する。南東をＳＢ58が切り、北西にＳＢ56、東にＳＢ68・ＳＢ69が隣接する（周辺地形図は、図91）。隅角は山側の北西隅角、南西隅角が残存し、いずれも丸くおさめられている。幅4.04ｍ、残存部の奥行き2.00ｍを測る。平面形は不明である。壁面及び床面は第Ⅵ層と地山を掘り抜いて形成されており、壁面の深さは、山側で最大44㎝を確認できる。住居内の埋没は自然埋没と判断される。



ピットの埋土（ＳＢ５７）

Ｐ１		7.5ＹＲ3/1	黒褐色土
Ｐ２		7.5ＹＲ3/1	黒褐色土
Ｐ３	1	7.5ＹＲ3/1	黒褐色土
	2	7.5ＹＲ4/3	褐色土
Ｐ４		7.5ＹＲ3/1	黒褐色土
Ｐ５		7.5ＹＲ3/1	黒褐色土

ＳＢ５７の埋土

①ａ	7.5ＹＲ3/2	黒褐色土（1cmの角砂岩礫を少量含む。しまり有り）
①ｂ	7.5ＹＲ3/4	暗褐色土（1cmの角砂岩礫を含む。しまり無し）
②ａ	7.5ＹＲ2/3	極暗褐色土（1cmの角砂岩礫を少量含む。しまり無し）
②ｂ	7.5ＹＲ4/3	褐色土（0.5cm～1cmの角砂岩礫を含む。7.5ＹＲ3/4暗褐色土も少量含む。しまり有り）
③	7.5ＹＲ3/3	暗褐色土（1cmの角砂岩礫を含む。しまり無し）

図95　ＳＢ57 実測図

柱穴は５基を検出したが、Ｐ１・Ｐ４が主柱穴と思われる。

壁溝、地床炉は、検出した床面には認められなかった。

遺物（図148、図版37）

土器は、291点が出土した。このうち図化できたのは５点である。285は鉢Ａ類の口縁部で、短く外傾し端部にわずかな段を持つ。286は甕Ｃ類の口縁部で長く外傾し端部にわずかな段を持つ。287は甕Ｂ類の口縁部で、短く外傾し強い段を持ち立ち上がる。以上３点とも口縁部の施文はない。288・289は甕Ｆ類で床面直上で出土した。摩耗が著しく外面のハケ目は失われているが、口縁部外面に押し引き列点文を巡らし、Ｓ字状口縁台付甕Ａ類に属するものと考えられる。口縁部第２段が直立し、頸部内面には、横方向のハケ目とハケ調整後に施された指押さえの跡を確認できる。289は台部の基部であるが、288に近接して出土しており、同一個体の可能性がある。屈曲部から下に向かって施されたハケ目を確認することができる。290は台付甕の基部である。

以上の土器のうち、285・286はいずれも②層からの出土であり、流れ込みの可能性がある。

なお、この住居の床面からは、不明石製品（1052）が出土している。砂岩を石材として用い、各面を研磨し、３カ所の穿孔を施している。

ＳＢ５８

遺構（図96、図版10）

ｍ４グリッドにあり、北谷の、北東に向かってくだる極めて急な傾斜（傾斜度32.7％）地に立地する。ＳＢ57の南東を切って造られている。南にＳＢ64、北にＳＢ68・ＳＢ69、東にＳＢ66が隣接する（周辺地形図は、図91）。隅角は山側の北西隅角、南西隅角が残存し、いずれも丸くおさめられている。幅4.82ｍ、残存部の奥行き2.14ｍを測る。平面形は不明である。壁面及び床面は第Ⅵ層と地山を掘り抜いて形成されており、壁面の深さは、山側で最大50㎝を確認できる。

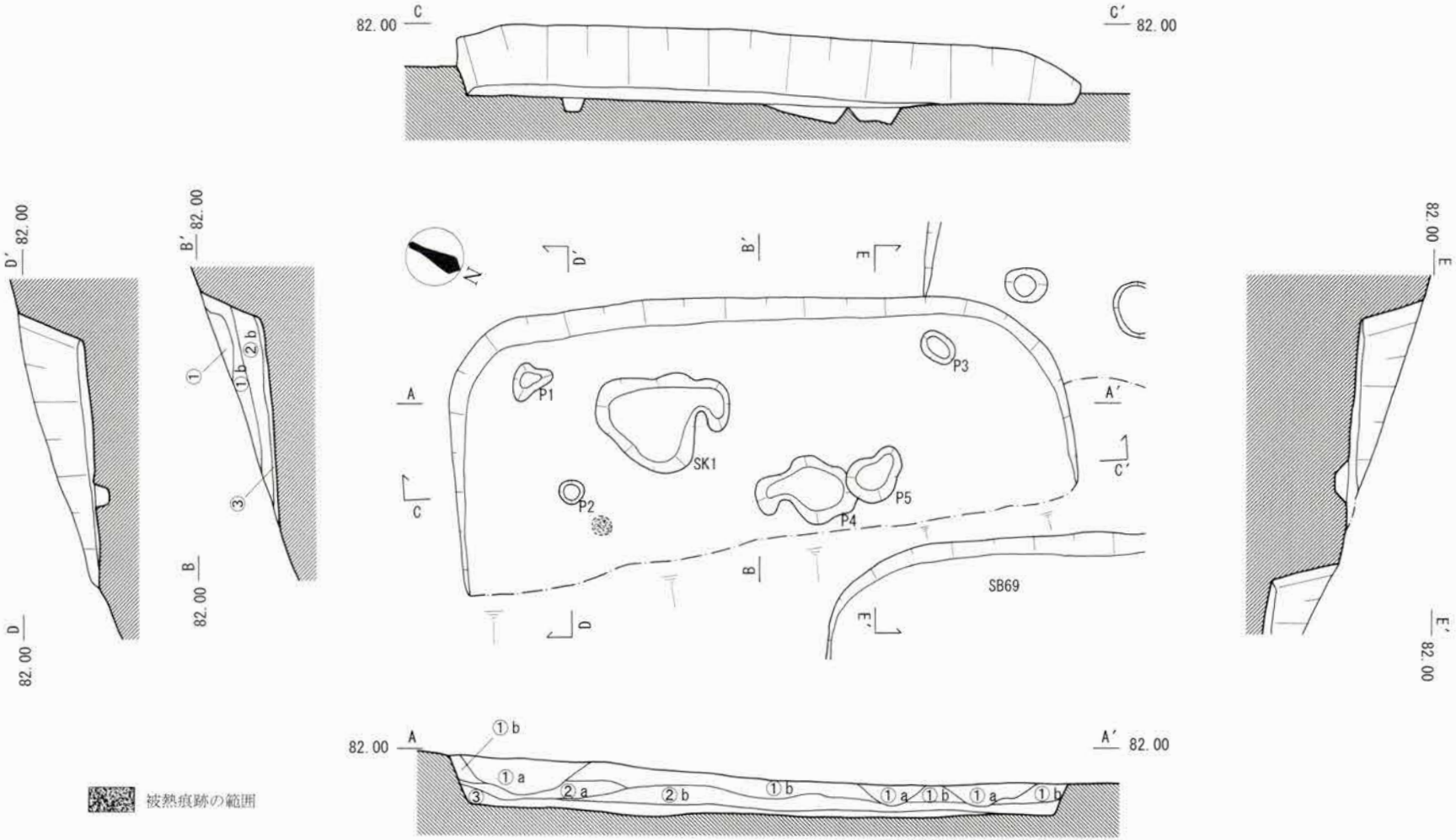
主柱穴は、Ｐ２・Ｐ５と判断した。Ｐ１・Ｐ３も対象の位置に並ぶが、極めて浅い。

壁溝、地床炉は、検出した床面には認められなかった。Ｐ２脇の被熱痕跡の性格は不明である。

遺物（図148・149、図版29・37）

土器は529点が出土した。このうち図化できたのは14点である。291は小型の高坏の脚部で、穿孔付近から大きく外反して広がる低脚である。Ｆ類の脚部と考えられる。292は器台Ｂ類の基部。293・295は鉢Ｃ類の口縁部で、295の端部外面にはキザミ目を施している。294は鉢Ａ類の口縁部で、短く外傾し強い段を持ち立ち上がる。端部外面には横線を施している。296は甕Ｃ類の口縁部。297は甕Ｄ類の口縁部で、端部はやや強く外反する。298も甕Ｄ類であるが、頸部の屈曲は弱く、口縁部は直立気味に立ち上がる。299は甕Ｆ類である。口縁部外面に押し引き列点文を巡らし、Ｓ字状口縁台付甕Ａ類に属するものと考えられる。口縁部先端部を欠くが、第２段が直立することが知れる。頸部内面には横方向のハケ目を確認できる。300・301は平底甕の底部。302は壷Ｄ類の底部で、外面には全面に赤彩が施されている。303・304は壷Ｂ類の底部である。

以上のうち292、295以外は①層または②層の出土であり、流れ込みの可能性が強い。



ピットの埋土（ＳＢ５８）
Ｐ２　7.5ＹＲ 3/1　黒褐色土
Ｐ４　7.5ＹＲ 2/2　黒褐色土
Ｐ５　7.5ＹＲ 3/1　黒褐色土

ＳＢ５８の埋土
①ａ　7.5ＹＲ 2/3　極暗褐色土（1cm～3cmの角砂岩礫を多く含む。しまり無し）
①ｂ　7.5ＹＲ 3/4　暗褐色土（0.5cm～1cmの角砂岩礫を多く含む。しまり有り）
②ａ　7.5ＹＲ 4/3　褐色土（1cmの角砂岩礫を含む。しまり有り）
②ｂ　7.5ＹＲ 3/4　暗褐色土（1cmの角砂岩礫を含む。しまり有り）
③　7.5ＹＲ 4/4　褐色土（0.5cm～1cmの角砂岩礫を少量含む。しまり有り）

図96　ＳＢ58　実測図

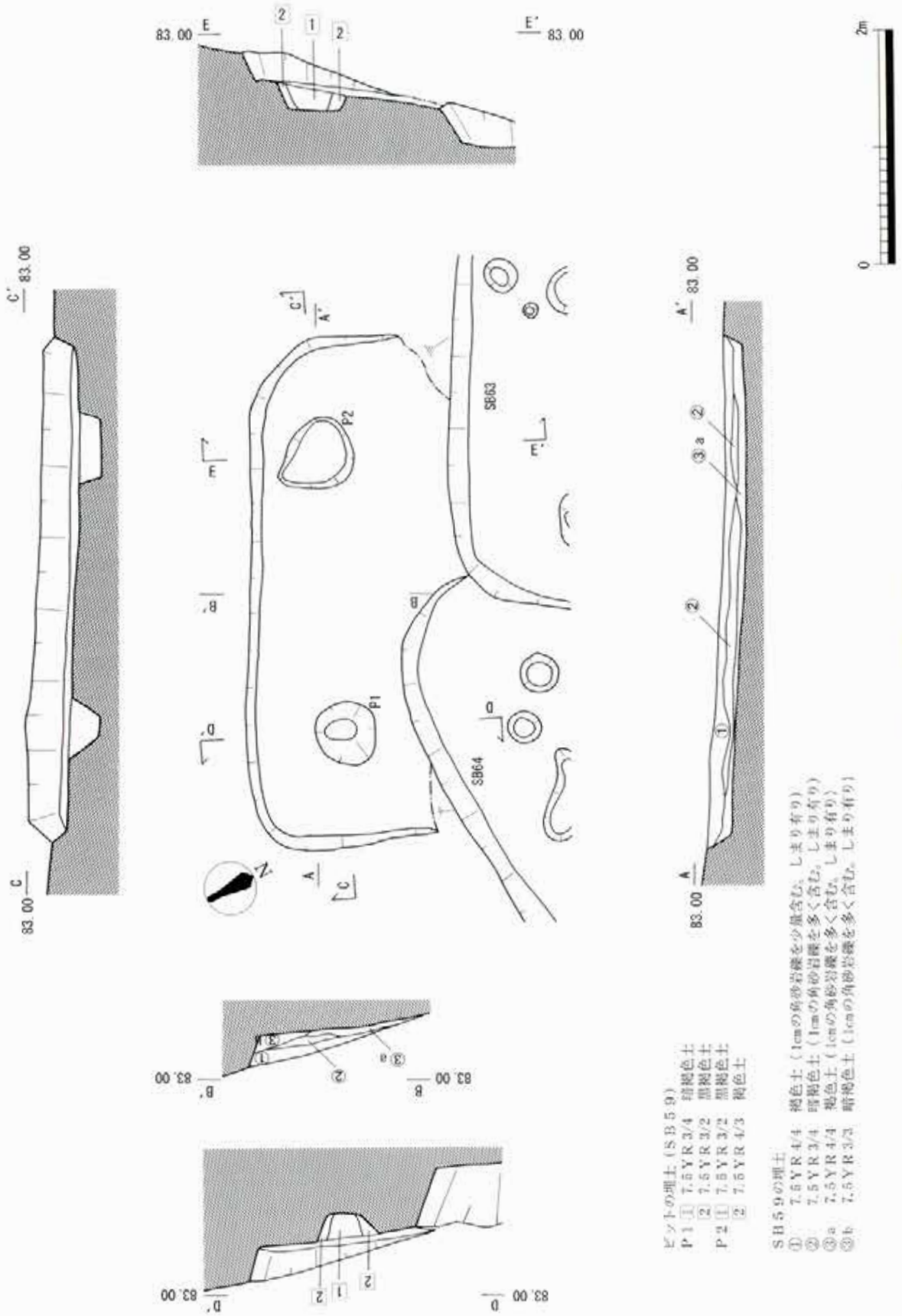

83.00 E
E' 83.00
2
1
2
C' 83.00
83.00 C
C'
A'
E
E'
B'
B
D'
D
P1
P2
SB63
SB64
A
C
A' 83.00
83.00 A
③a
②
①
B' 83.00
83.00 B
③a
②
①
D' 83.00
83.00 D
2
1
2
0
2m
ピットの埋土（SB59）
P1 1 7.5YR 3/4 暗褐色土
2 7.5YR 3/2 黒褐色土
P2 1 7.5YR 3/2 黒褐色土
2 7.5YR 4/3 褐色土
SB59の埋土
① 7.5YR 4/4 褐色土（1cmの砂岩礫を少量含む。しまり有り）
② 7.5YR 3/4 暗褐色土（1cmの角砂岩礫を多く含む。しまり有り）
③a 7.5YR 4/4 褐色土（1cmの角砂岩礫を多く含む。しまり有り）
③b 7.5YR 3/3 暗褐色土（1cmの角砂岩礫を多く含む。しまり有り）

図97　ＳＢ59 実測図

ＳＢ５９

遺構（図97、図版10）

ｏ６グリッドにあり、北谷の、北東に向かってくだるやや急な傾斜（傾斜度24.7%）地に立地する。北側の床面の一部をＳＢ60に切られている。北にＳＢ63、西北にＳＢ64が隣接する（周辺地形図は、図91）。隅角は山側の南西隅角、南東隅角が残存し、いずれも丸くおさめられている。幅4.34m、残存部の奥行き1.90mを測る。平面形は、正方形であったか長方形であったかは不明である。壁面及び床面は第Ⅵ層と地山を掘り抜いて形成されており、壁面の深さは、山側で最大30cm を確認できる。 主柱穴は、Ｐ１・Ｐ２を検出した。

地床炉、壁溝は、検出した床面には認められなかった。

遺物（図149）

土器は235点が出土したが、小片が多く、図化できたのは２点である。305は高坏または器台の脚裾部で、外反気味に広がる。306は甕Ｄ類の口縁部である。いずれも②層の出土であり、流れ込みの可能性がある。

ＳＢ６０

遺構（図98、図版10）

ｏ６グリッドにあり、北谷の、北東に向かってくだるやや急な傾斜（傾斜度23.4%）地に立地する。ＳＢ59の北側を切り、西側の一部をＳＢ63に切られている。北にＳＢ66が近接する。（周辺地形図は、図91）。隅角は山側の南西隅角、南東隅角が残存し、いずれも丸くおさめられている。幅4.30m、残存部の奥行き2.20mを測る。平面形は、正方形であったか長方形であったかは不明である。壁面及び床面は第Ⅵ層と地山を掘り抜いて形成されており、壁面の深さは、山側で最大50cm を確認できる。住居内の埋没は、壁際から進行しており、自然埋没と判断される。

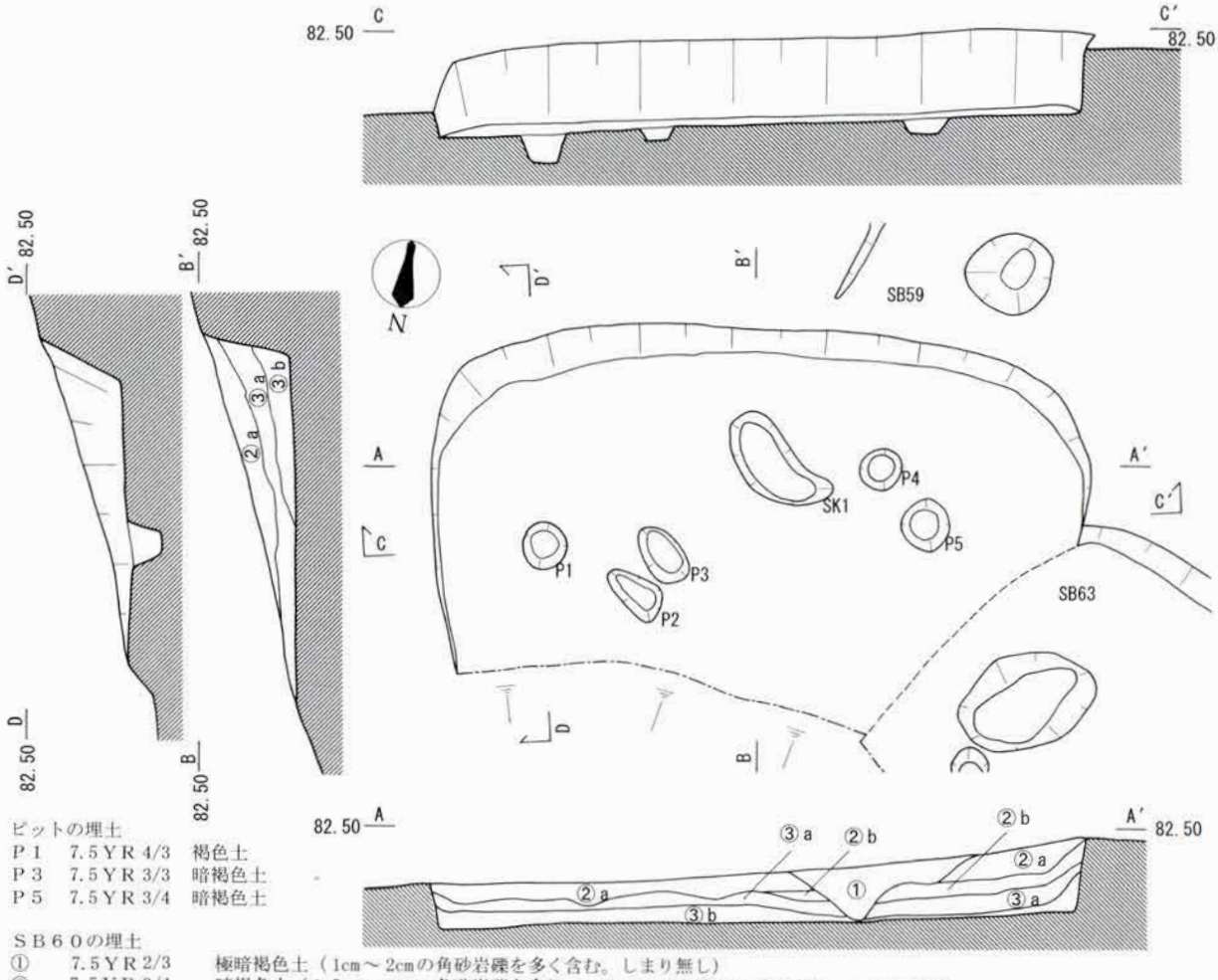
主柱穴は、Ｐ１・Ｐ５と考えられる。

地床炉は、長軸80cm で最大深さ10cm の浅い土坑（ＳＫ１）にその可能性がある。

壁溝は、検出した床面には認められなかった。

遺物（図99・149・150、図版29・37）

土器は、379点が出土した。このうち図化できたのは13点である。307は高坏Ｃ類の坏部片で、口縁部は内彎し、端部には内傾する面をつくっている。308は鉢Ｃ類で、口縁部は緩やかに内彎し、頸部外面には横線を施す。309・310は甕Ｃ類で、前者は段を持つ口縁の端部外面に横線を施し、後者の口縁部は内彎して立ち上がる。311は甕Ｄ類口縁部で、端部外面にキザミ目を施す。312は甕の体部で、横線と列点文を施している。313・314は平底甕の底部。315は壷Ｂ１類で、外反する短い口縁部を持つ。頸部から肩部にかけて横線と櫛描き列点文を交互に巡らしている。316も壷Ｂ１類である。317・318は壷の体部で、それぞれ横線と櫛描き列点文、横線と竹管列点文を施している。318の外面には赤彩が残存する。319は壷Ｂ類の底部。以上の土器は比較的同一レベルにまとまって出土したため、出土状況図を残したが、いずれも②層の出土であり、流れ込みの可能性が高い。



ピットの埋土

P１	7.5ＹＲ 4/3	褐色土
P３	7.5ＹＲ 3/3	暗褐色土
P５	7.5ＹＲ 3/4	暗褐色土

ＳＢ６０の埋土

①	7.5ＹＲ 2/3	極暗褐色土（1cm～2cmの角砂岩礫を多く含む。しまり無し）
②a	7.5ＹＲ 3/4	暗褐色土（0.5cm～1cmの角砂岩礫を含む。7.5ＹＲ 4/4褐色砂も多く含む。しまり有り）
②b	7.5ＹＲ 3/2	黒褐色土（0.5cmの角砂岩礫を含む。しまり有り）
③a	7.5ＹＲ 3/4	暗褐色土（0.5cm～1cmの角砂岩礫を含む。7.5ＹＲ 3/2 黒褐色土も斑状に含む。しまり有り）
③b	7.5ＹＲ 3/4	暗褐色土（0.5cmの角砂岩礫を少量含む。しまり有り）

0　2m

図98　ＳＢ60 実測図

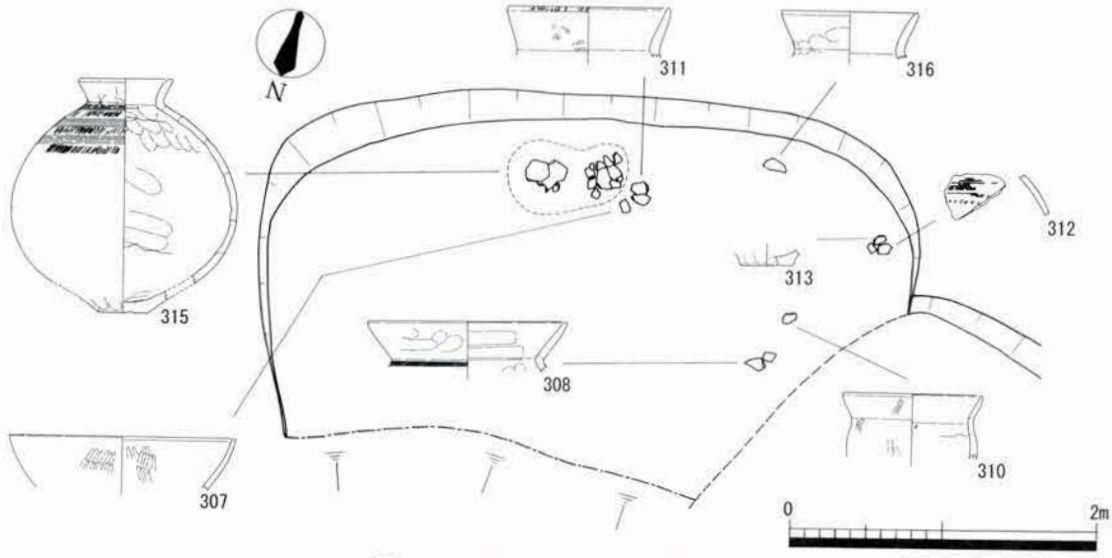


図99　ＳＢ60 遺物出土状況図

ＳＢ６１

遺構（図100、図版10）

ｒ８グリッドにあり、南谷の、東に向かってくだる緩やかな傾斜（傾斜度17.4%）地に単独で立地する。西北にＳＢ38が存在する（周辺地形図は、図89）。隅角は山側の北西・南西隅角が残存し、いずれも丸くおさめられている。幅2.88m、残存部の奥行き1.80mを測る。平面形は不明である。山側の壁面及び床面は砂岩の岩盤を、他は第Ⅳ層と地山を掘り抜いて形成されており、壁面の深さは、山側で最大24cm を確認できる。住居内の埋没は、壁際から進行しており、自然埋没と判断される。

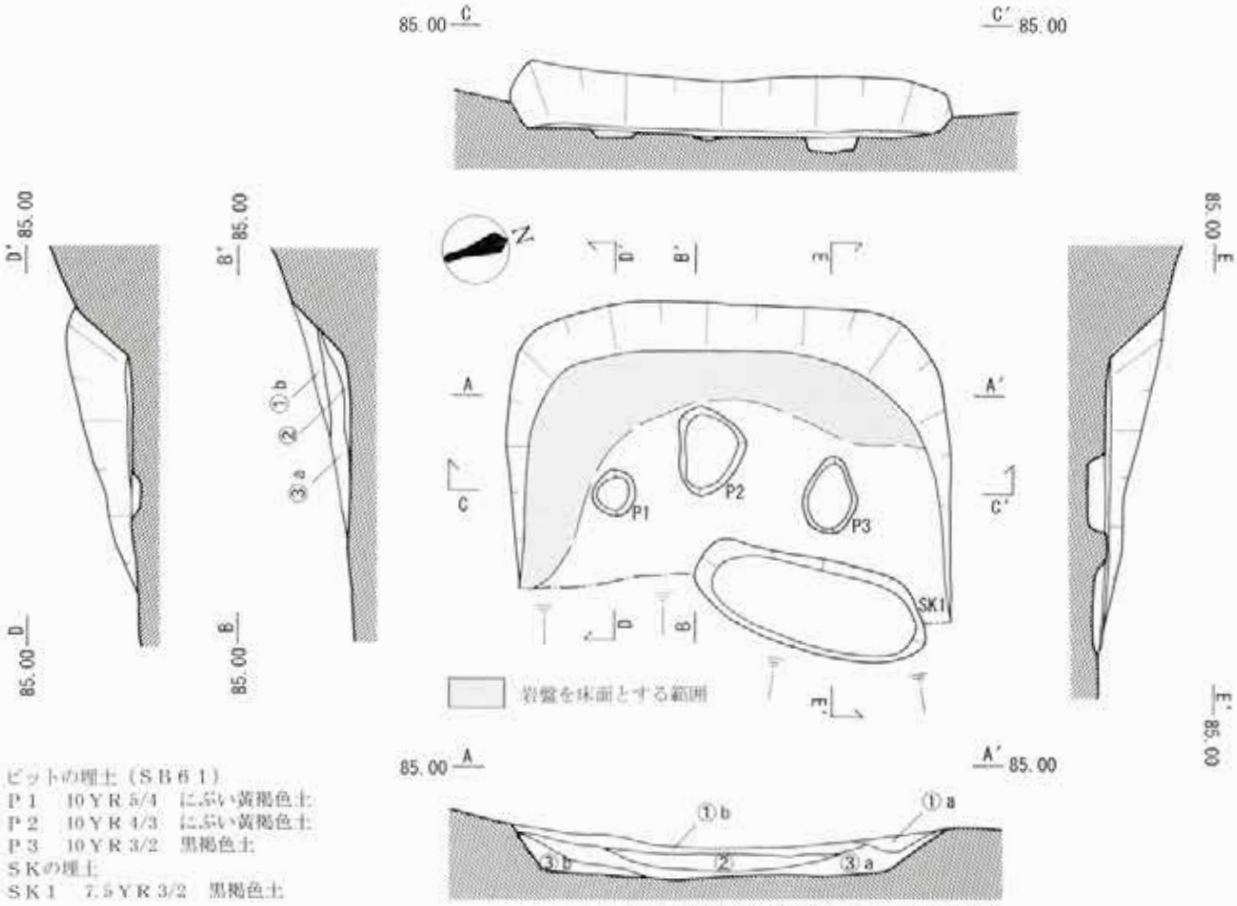
主柱穴はＰ１・Ｐ３と思われるが、浅く不明瞭である。

地床炉は、埋土に炭小片を含むＳＫ１（長軸1.55m、最大深さ７cm）にその可能性がある。

壁溝は、認められなかったが、上述のＳＫ１は排水溝の残存の可能性もある。

遺物（図150、図版37）

土器は、50点が出土したが小片が多く、図化できたのは２点のみである。320は高坏Ｃ類の坏部片。321は器台Ｂ類の受け部で、口縁端部には平坦面を持つ。いずれも床面直上から出土している。



ピットの埋土（ＳＢ６１）
Ｐ１　10ＹＲ5/4　にぶい黄褐色土
Ｐ２　10ＹＲ4/3　にぶい黄褐色土
Ｐ３　10ＹＲ3/2　黒褐色土
ＳＫの埋土
ＳＫ１　7.5ＹＲ3/2　黒褐色土

ＳＢ６１の埋土
①ａ　7.5ＹＲ4/4　褐色土（1cm～3cmの角砂岩礫を多く含む。しまり有り）
①ｂ　7.5ＹＲ3/3　暗褐色土（0.5cmの角砂岩礫を含む。しまり有り）
②　7.5ＹＲ2/3　極暗褐色土（0.5cm～1cmの角砂岩礫を多く含む。しまり有り）
③ａ　7.5ＹＲ3/4　褐色土（0.5cm～1cmの角砂岩礫を多く含む。しまり有り）
③ｂ　7.5ＹＲ4/3　褐色土（0.5cm～1cmの角砂岩礫を多く含む。しまり有り）

0　2m

図100　ＳＢ61 実測図

ＳＢ６２

遺構（図101、図版10）

ｑ11グリッドにあり、南谷の、南東に向かってくだる急な傾斜（傾斜度26.5%）地に単独で立地する。南東にＳＢ12が存在する（周辺地形図は、図89）。南側を昭和50年代の山土採取によって破壊されている。隅角は山側の北西隅角と北東隅角が残存し、いずれも丸くおさめられている。残存部の幅3.16m、奥行き2.10mを測る。平面形は、正方形であったか長方形であったかは不明である。壁面及び床面は、地山を掘り抜いて形成されており、壁面の深さは、山側で最大33cm を確認できる。

主柱穴は、Ｐ１を検出した。壁溝は、山側壁面と東側の壁に沿ってやや床面に入った位置を巡る。

地床炉は、ほぼ中央に検出した長軸60cm、最大深さ12cm の浅い土坑（ＳＫ１）である。埋土には炭が多く含まれ、この土坑をはみ出す形で被熱痕跡も検出した。支柱石は３つに割れた状態（接合後の長さ31cm）で残存していた。最も大きなものは元の位置をとどめていると考えられるが、河原石を横位に置いている。地床炉から北東隅角にかけて、炭化材の小片を検出したが、その性格は不明である。

遺物（図150）

土器は122点出土したが図化できたのは１点のみ（322）。壺Ｄ類の底部で、床面での出土である。

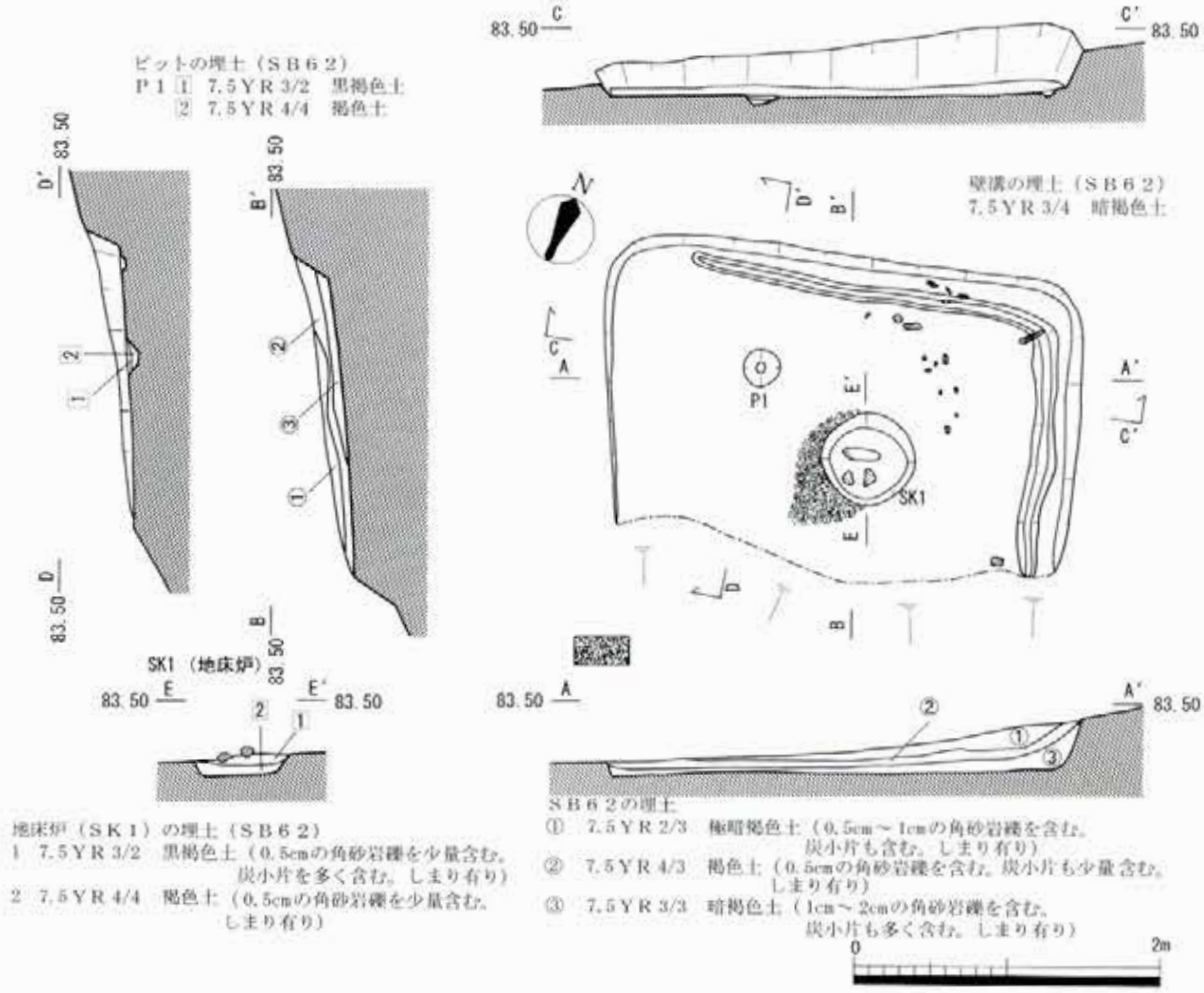


図101　ＳＢ62 実測図

ＳＢ６３

遺構（図103、図版10）

ｏ６グリッドにあり、北谷の、北北東にくだるやや急な傾斜（24.7%）地に立地する。ＳＢ60の西側の一部を切り、北側をＳＢ65に切られている。西にＳＢ64、南にＳＢ59が隣接する（周辺地形図は、図91）。隅角は南西・南東隅角が残存し、いずれも丸くおさめられている。幅3.76m、残存部の奥行き2.42mを測る。平面形は不明である。壁面及び床面は第Ⅵ層と地山を掘り抜いて形成されている。壁面は最大40cm の深さを確認できる。住居内の埋没は壁際から進行しており、自然埋没と判断される。

柱穴は４基検出した。このうちＰ２・３は浅く、主柱穴の可能性があるのは、Ｐ１とＰ４であるが対象の位置に並ばない。ＳＫ１は比較的深く掘り込まれているが、その性格は不明である。

壁溝、地床炉は検出した床面には認められなかった。

遺物（図102・150、図版29・30・37）

土器は、460点が出土した。このうち図化できたのは12点である。323は高坏Ｃ類の坏部で口縁部が緩やかに内彎する。324は高坏の脚部。325は器台の基部である。326・327は高坏または器台の脚裾部で、前者は外反気味に広がり、後者は内彎する低脚である。328は甕Ｃ類で口縁の端部にわずかな段を持ち、端部外面に刻み目を施す。329は甕Ｄ類で、長く外傾したくの字状の口縁である。330は甕Ｂ類の口縁部片で、短く外傾し強い段を持ち立ち上がる。口縁の端部に内傾する面を持つ。近江系の受け口状口縁甕で搬入品と考えられる。331・332は平底甕の底部である。333は壷Ｃ2類の口縁部で緩やかに内彎する。334は壷Ｃ・Ｄ類の底部。以上の土器は比較的同一レベルにまとまって出土したため、出土状況図を残したが、330を除いていずれも②層の出土であり、流れ込みの可能性が高い。

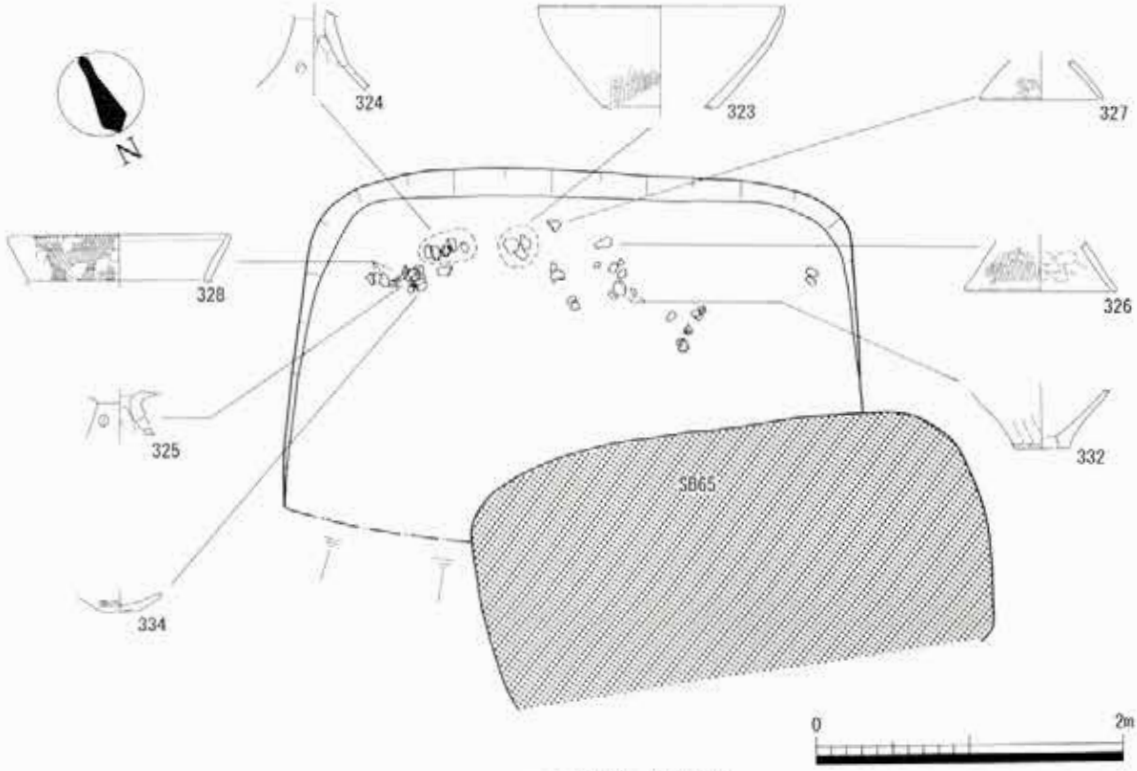


図102　ＳＢ63 遺物出土状況図

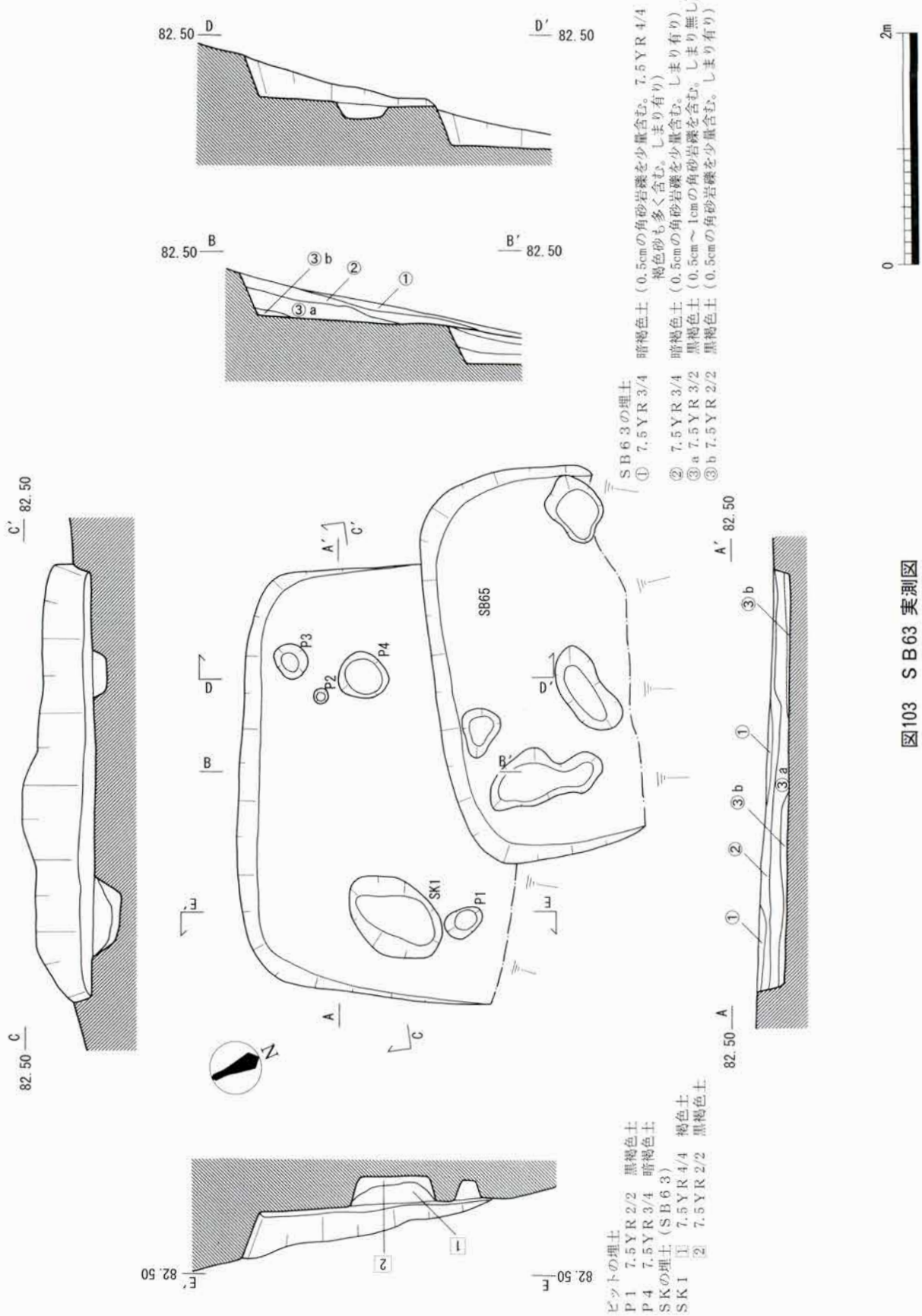


図103　ＳＢ63 実測図

ＳＢ６４

遺構（図104、図版11）

ｎ５グリッドにあり、北谷の、東北東に向かってくだる極めて急な傾斜（傾斜度31.0％）地に立地する。東にＳＢ63・65、北西にＳＢ58が隣接する（周辺地形図は、図91）。隅角は山側の北西隅角、南東隅角が残存し、前者は丸くおさめられ後者は角張っている。幅4.46ｍ、残存部の奥行き2.30ｍを測る。平面形は、正方形であったか長方形であったかは不明である。壁面及び床面は第Ⅳ層及び地山を掘り抜いて形成されており、壁面の深さは、山側で最大52㎝を確認できる。住居内の埋没は、壁際から進行しており、自然埋没と判断される。

主柱穴は、Ｐ１・Ｐ２を検出した。

地床炉は、埋土に炭小片を含むＳＫ１にその可能性が認められる。ＳＫ１は長軸78㎝、最大深さは南側の一部で20㎝だが、平均的には８㎝前後と浅い。

壁溝は、検出した床面には認められなかった。

遺物（図150・151、図版30・37）

土器は406点が出土した。図化できたのはこのうち11点である。335・336は器台Ｂ類の受け部片で、後者は器壁が厚く、口縁の端部に平坦面を持つ。337は器台の脚基部。338は、高坏または器台の脚裾部で外反気味に広がる。339は鉢Ｄ類で頸部の屈曲は甘く、口縁部は短く外傾する。340は鉢Ｂ類の口縁部片で、外反して広がり端部に明瞭な段を持つ。口縁部外面には列点文を巡らし、頸部には横線を施す。341・342は台付甕の台部。343は壷Ｂ類の口縁部片で、端部内面に平坦面を形成し、端部は垂下拡張する。344は摩耗が激しいが、壷Ｂ類の体部片で、横線と櫛描き羽状文を交互に２段にわたって巡らしていることがわかる。345は壷の底部である。

以上のうち339・342は②層からの出土であり、流れ込みの可能性がある。

ＳＢ６５

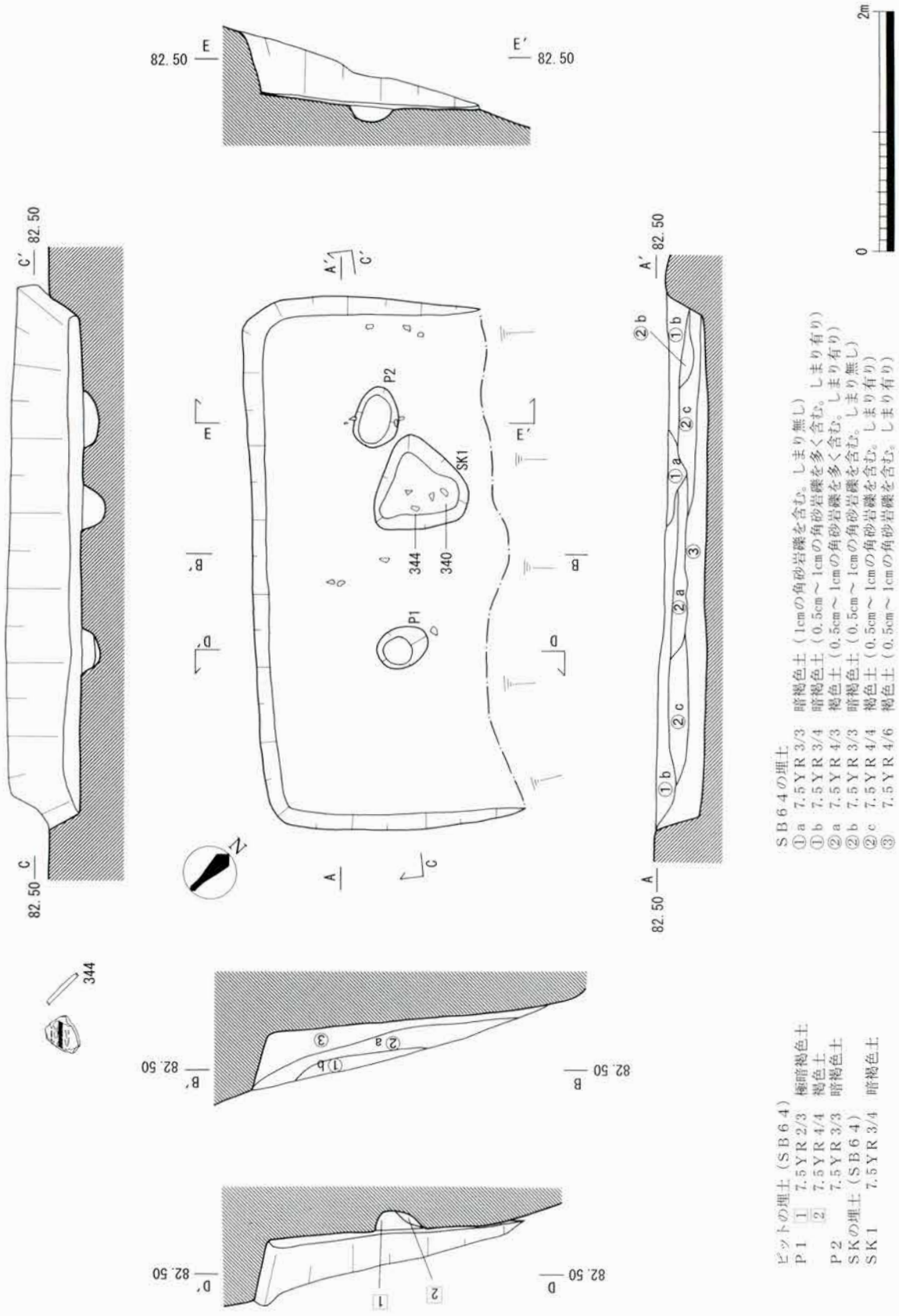
遺構（図105、図版11）

ｎ６グリッドにあり、北谷の、北に向かってくだる急な傾斜（傾斜度28.4％）地に立地する。南に隣接するＳＢ63の北側を切って造られている。南西にはＳＢ64、東にはＳＢ66、北にはＳＢ67が近接する（周辺地形図は、図91）。隅角は山側の北西隅角、南西隅角が残存し、いずれも丸くおさめられている。幅3.34ｍ、残存部の奥行き1.76ｍを測る。平面形は、正方形であったか長方形であったかは不明である。壁面及び床面は第Ⅵ層と地山を掘り抜いて形成されている。壁面の深さは、山側で最大30㎝を確認できる。住居内の埋没は、壁際から進行しており、自然埋没と判断される。

ピット３基を検出したが、対称の位置に並ばない。このうちＰ２の東側は深く掘り込まれており、主柱穴として機能した可能性がある。

土坑１基（ＳＫ１）は最大深さ９㎝と浅いが、地床炉の可能性を考えるには、あまりに隅に寄り過ぎている。

壁溝は、検出した床面には認められなかった。



ＳＢ６４の埋土
①ａ　7.5ＹＲ 3/3　暗褐色土（1cmの角砂岩礫を含む。しまり無し）
①ｂ　7.5ＹＲ 3/4　暗褐色土（0.5cm～1cmの角砂岩礫を多く含む。しまり有り）
②ａ　7.5ＹＲ 4/3　褐色土（0.5cm～1cmの角砂岩礫を多く含む。しまり有り）
②ｂ　7.5ＹＲ 3/3　暗褐色土（0.5cm～1cmの角砂岩礫を含む。しまり無し）
②ｃ　7.5ＹＲ 4/4　褐色土（0.5cm～1cmの角砂岩礫を含む。しまり有り）
③　7.5ＹＲ 4/6　褐色土（0.5cm～1cmの角砂岩礫を含む。しまり有り）

ピットの埋土（ＳＢ６４）
Ｐ１　1　7.5ＹＲ 2/3　極暗褐色土
　　2　7.5ＹＲ 4/4　褐色土
Ｐ２　7.5ＹＲ 3/3　暗褐色土
ＳＫの埋土（ＳＢ６４）
ＳＫ１　7.5ＹＲ 3/4　暗褐色土

図104　ＳＢ64 実測図

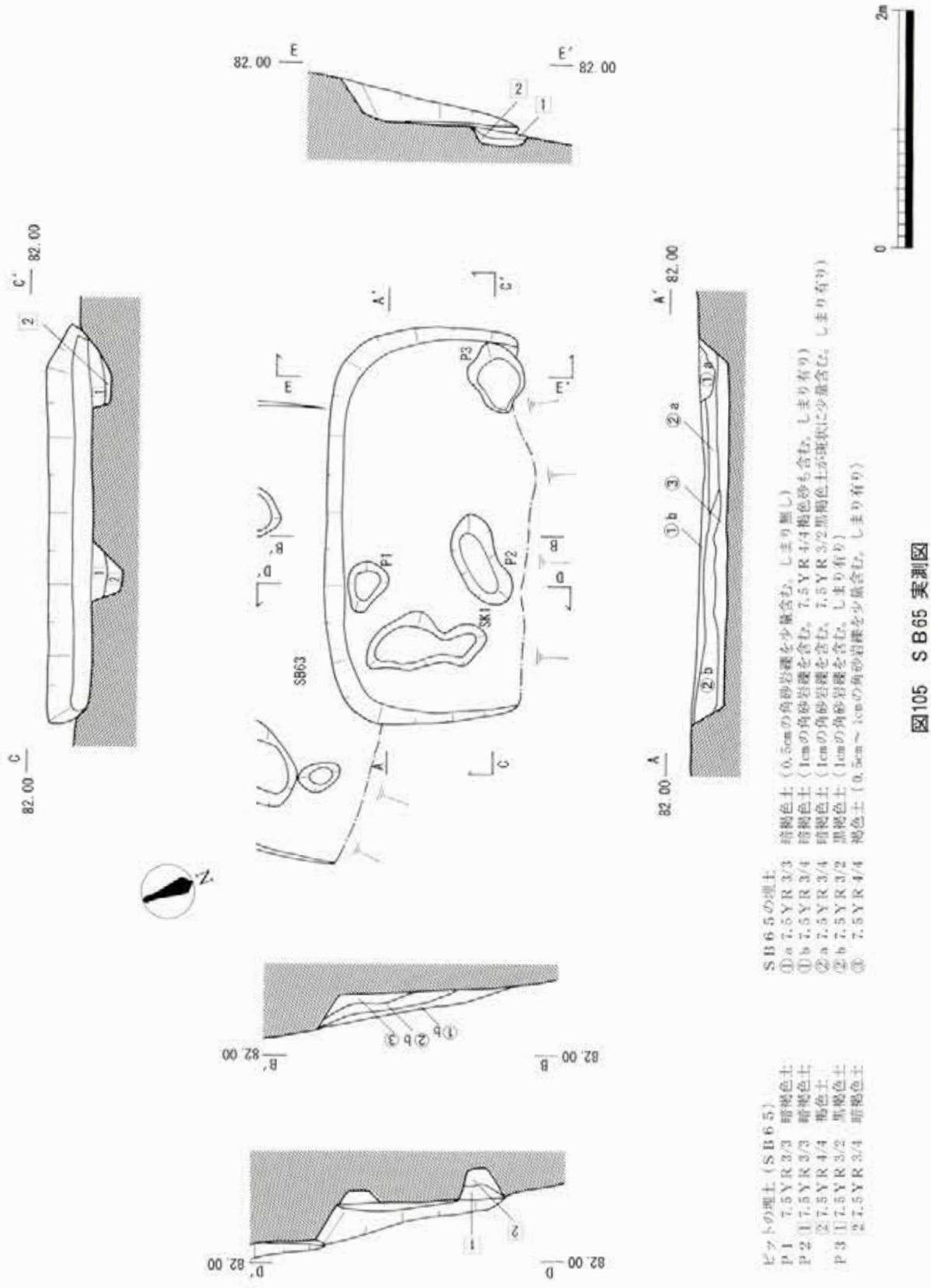


図105　ＳＢ65 実測図

遺物（図151、図版30・37）

土器は、207点が出土した。このうち図化できたのは６点である。346は高坏の脚部で裾部を欠くが外反して広がると見られる。Ｆ類の脚部であろう。347は甕Ｄ類の口縁部。348・349は平底甕の底部。350は台付甕の台部。351は壺Ｂ１類の口縁部片で、中程で屈曲し外反する。端部外面を上下に拡張し稜を形成し、口縁外面には一条の擬凹線を巡らす。以上のうち346以外は、①層または②層からの出土であり、斜面上部の遺構からの流れ込みである可能性が高い。

ＳＢ６６

遺構（図106、図版11）

ｎ７グリッドにあり、北谷の、北北西に向かってくだるやや急な傾斜（傾斜度20.0％）地に立地する。南にＳＢ60、北東にＳＢ31・ＳＢ54、西にＳＢ65が近接する（周辺地形図は、図91）。隅角は山側の南西隅角、南東隅角が残存し、いずれも丸くおさめられている。幅3.38ｍ、残存部の奥行き1.74ｍを測る。平面形は、正方形であったか長方形であったかは不明である。壁面及び床面は第Ⅵ層と地山を掘り抜いて形成されており、谷側の床面は第Ｖ層も掘り込んでいる。壁面の深さは、山側で最大30㎝を確認できる。住居内の埋没は、壁際から進行しており、自然埋没と判断される。

主柱穴は、Ｐ２・Ｐ３と判断したが、Ｐ４もその可能性がある。

壁溝、地床炉は、検出した床面には認められなかった。

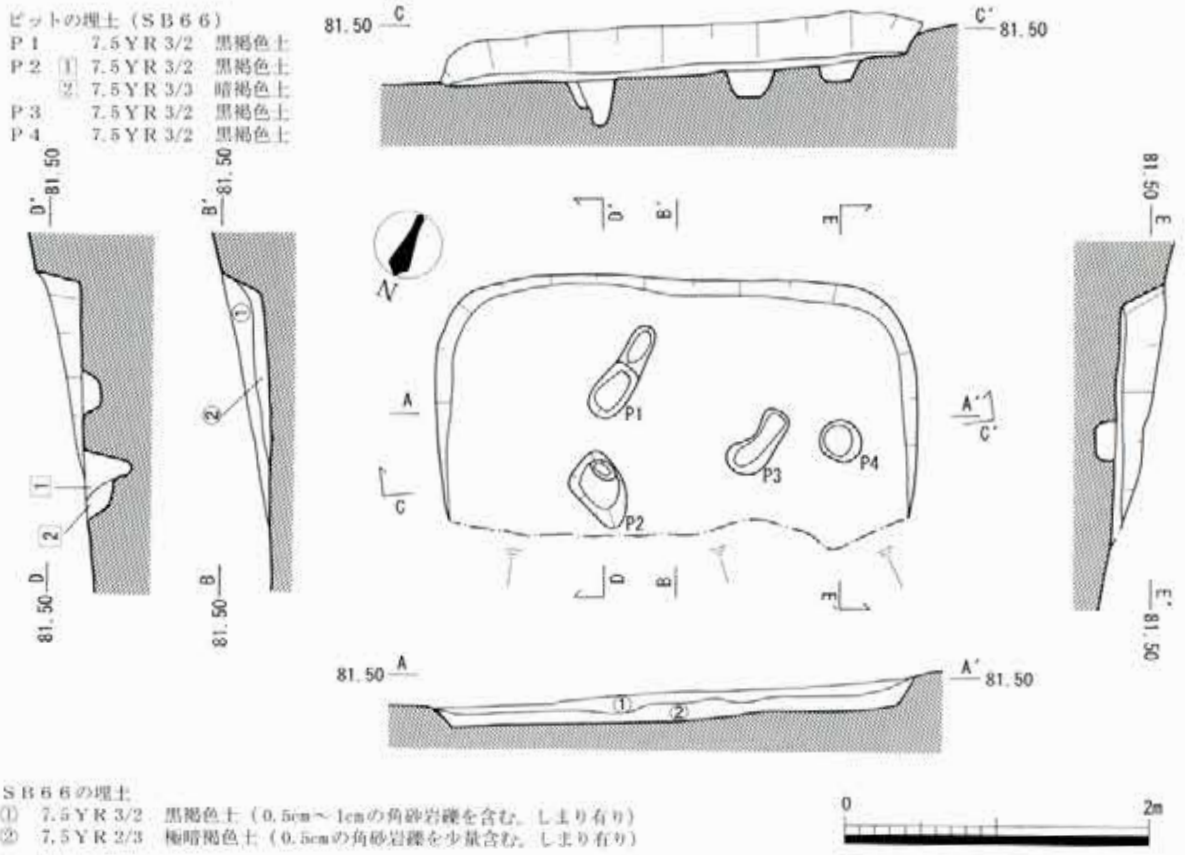


図106　ＳＢ66 実測図

遺物（図151、図版37）

土器は、139点が出土した。小片が多く、このうち図化できたのは5点である。352は高坏Ｃ類の坏部片で、端部を欠くが緩やかに内彎するものと見られる。353は甕Ａ類の体部片で外面には櫛描き条痕、内面にはハケ目調整を施していることがわかる。354は台付甕の台部。355は壷Ｂ類の体部片で、横線と列点文を交互に巡らしている。356は壷Ｂ類の底部である。

以上の土器のうち、352・356は①層からの出土であり、流れ込みの可能性がある。

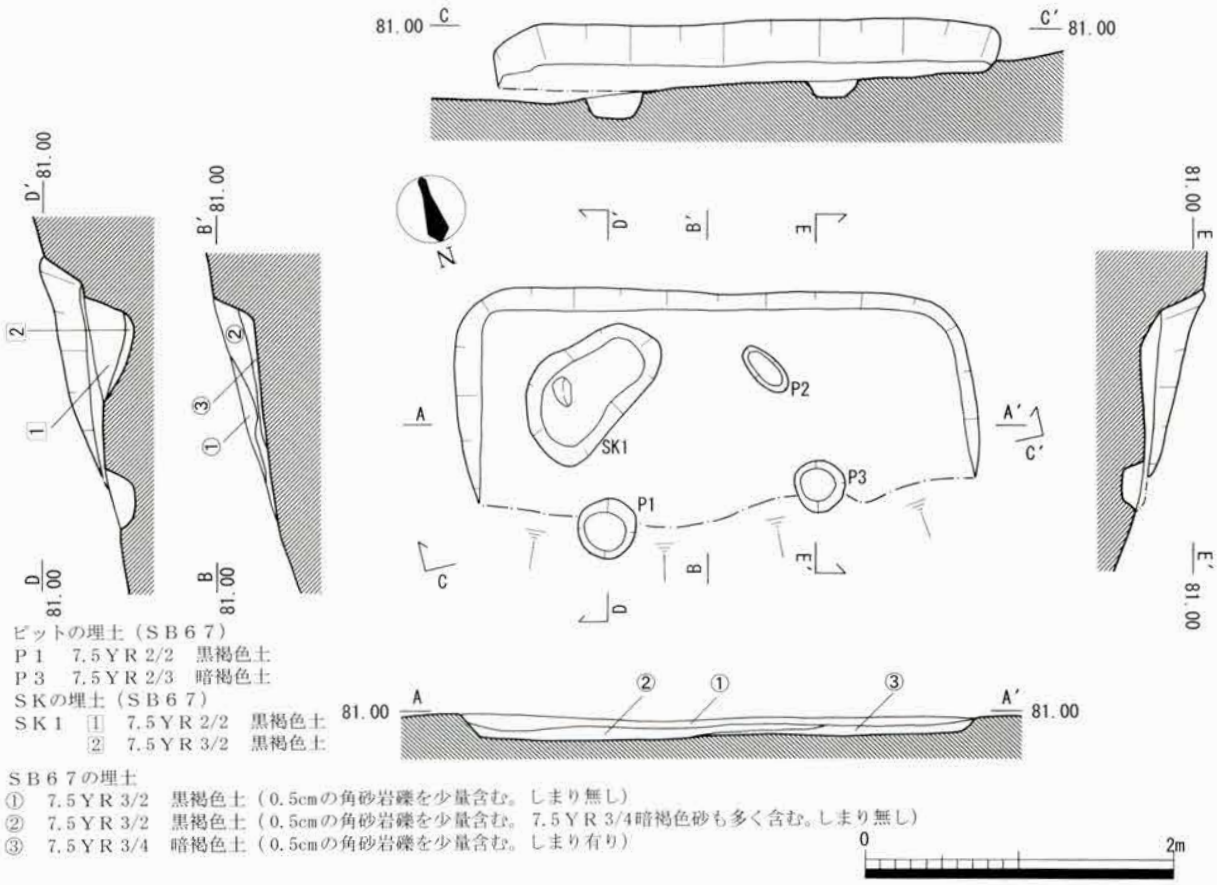
ＳＢ６７

遺構（図107、図版11）

ｍ５グリッドにあり、北谷の、北北東に向かってくだる急な傾斜（傾斜度25.5%）地に立地する。西北にＳＢ58・69、南にＳＢ65が近接する（周辺地形図は、図91）。隅角は山側の南西隅角、南東隅角が残存し、前者は丸くおさめられ、後者は角張っている。幅3.40ｍ、残存部の奥行き1.54ｍを測る。平面形は、正方形であったか長方形であったかは不明である。壁面及び床面は第Ⅵ層と地山を掘り抜いて形成されている。壁面の深さは、山側で最大28ｃｍを確認できる。住居内の埋没は、壁際から進行しており、自然埋没と判断される。

主柱穴は、Ｐ１・Ｐ３を検出した。

ＳＫ１からは、長軸25cm の長楕円形の河原石が斜位の状態で、上面を５cm ほどＳＫ１検出面から突



ピットの埋土（ＳＢ６７）
Ｐ１　7.5ＹＲ 2/2　黒褐色土
Ｐ３　7.5ＹＲ 2/3　暗褐色土
ＳＫの埋土（ＳＢ６７）
ＳＫ１　1　7.5ＹＲ 2/2　黒褐色土
　　2　7.5ＹＲ 3/2　黒褐色土

ＳＢ６７の埋土
①　7.5ＹＲ 3/2　黒褐色土（0.5cmの角砂岩礫を少量含む。しまり無し）
②　7.5ＹＲ 3/2　黒褐色土（0.5cmの角砂岩礫を少量含む。7.5ＹＲ 3/4暗褐色砂も多く含む。しまり無し）
③　7.5ＹＲ 3/4　暗褐色土（0.5cmの角砂岩礫を少量含む。しまり有り）

図107　ＳＢ67 実測図

き出す形で出土した。支柱石を伴う地床炉とも考えられるが、他の住居の地床炉に比べ著しく深く、河原石の検出状況も異なる。また、著しく隅に片寄った位置でもある。
壁溝は、検出した床面には認められなかった。

遺物（図151、図版37）

土器は、227点が出土した。このうち図化できたのは10点である。357は甕Ｄ類、358は甕Ｃ類の口縁部。359は甕の頸部で横線と列点文を巡らす。361・363は平底甕の底部。362は壺Ｂ類の頸部で、横線と羽状文を巡らしている。364は壺Ｂ類の底部。

以上の土器のうち、361・364は①層からの出土であり、流れ込みの可能性が高い。他は②層からの出土であるが、ＳＫ１の上面に近い位置からの出土であり、この住居に帰属する可能性がある。

ＳＢ６８

遺構（図108、図版11）

Ｉ４グリッドにあり、北谷の、北北東に向かってくだる極めて急な傾斜（傾斜度39.4%）地に立地

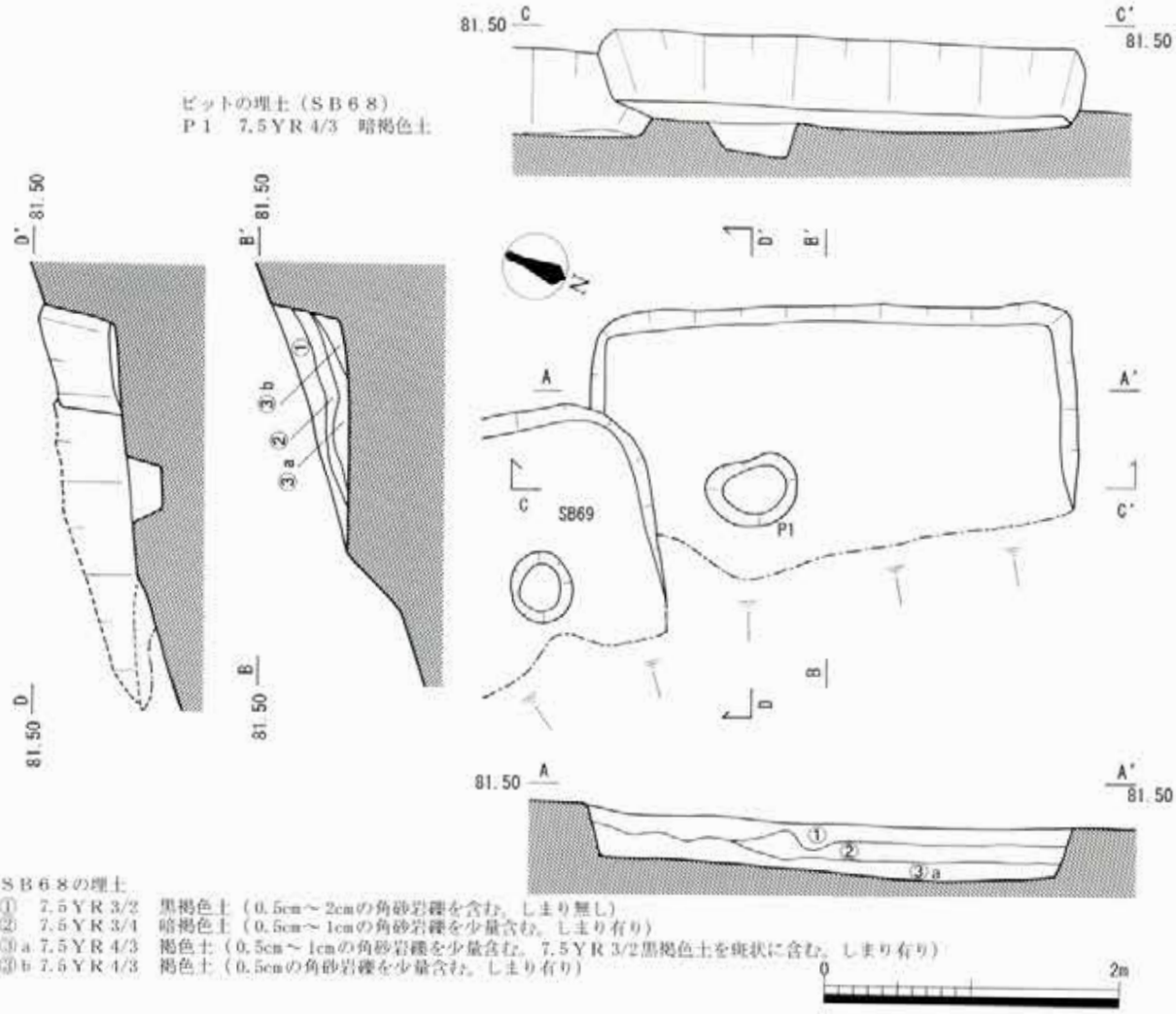


図108　ＳＢ68 実測図

する。南東側の一部をＳＢ69に切られている。南西にＳＢ57が隣接し、西にＳＢ56が近接する（周辺地形図は、図91）。隅角は山側の北西隅角、南西隅角が残存し、いずれも角張っている。幅3.30m、残存部の奥行き1.82mを測る。平面形は、正方形であったか長方形であったかは不明である。壁面及び床面は第Ⅵ層と地山を掘り抜いて形成されており、壁面の深さは、山側で最大46cm を確認できる。住居内の埋没は、壁際から進行しており、自然埋没と判断される。

主柱穴は、Ｐ１を検出した。

壁溝、地床炉は、検出した床面には認められなかった。

遺物（図152、図版30・38）

土器は65点が出土したが、小片ばかりで、図化できたのは２点のみである。365は器台の基部である。366は甕の体部片で、横線と列点文を巡らす。366は①層からの出土であり、流れ込みの可能性が高い。

ＳＢ６９

遺構（図109、図版11）

ｍ４グリッドにあり、北谷の、北北東に向かってくだる極めて急な傾斜（傾斜度35.6%）地に立地する。ＳＢ69の南東側の一部を切っている。南西にＳＢ58が隣接し、西にＳＢ57、南東にＳＢ67が近接する（周辺地形図は、図91）。隅角は山側の北西隅角、南西隅角が残存し、いずれも丸くおさめられている。幅3.66m、残存部の奥行き1.92mを測る。平面形は、正方形であったか長方形であったかは不明である。壁面及び床面は第Ⅵ層と地山を掘り抜いて形成されており、壁面の深さは、山側で最大56cm を確認できる。

住居内の埋没は、壁際から進行しており、自然埋没と判断される。

主柱穴は、Ｐ１・Ｐ３を検出した。

壁溝、地床炉は、検出した床面には認められなかった。

遺物（図152、図版38）

土器は251点が出土した。このうち図化できたのは５点である。367は高坏または器台の脚部でやや内彎気味に広がる。368は鉢Ｂ類の口縁部で、端部にわずかな段を持ち、外面に横線と列点文を施す。370は鉢Ａ類の口縁部で、短く外傾し端部にわずかな段を持つ。369は甕Ｄ類の口縁部。371・372は平底甕の底部である。

以上の土器は、いずれも②層からの出土であり、流れ込みの可能性がある。

この住居跡からは、床面直上から2002の鉄製の鉈（図158、図版39）が出土している。先端を欠損しているが、刃部の遺存状態は良好である。残存部の長さ７cm、刃部の最大幅1.3cm を測る。この時期の鉈は全長が20cm、幅は１cm 強のものが平均であるので、３分の１程度残存していると考えられる。刃部は緩やかに反り、上面には稜が形成されている。

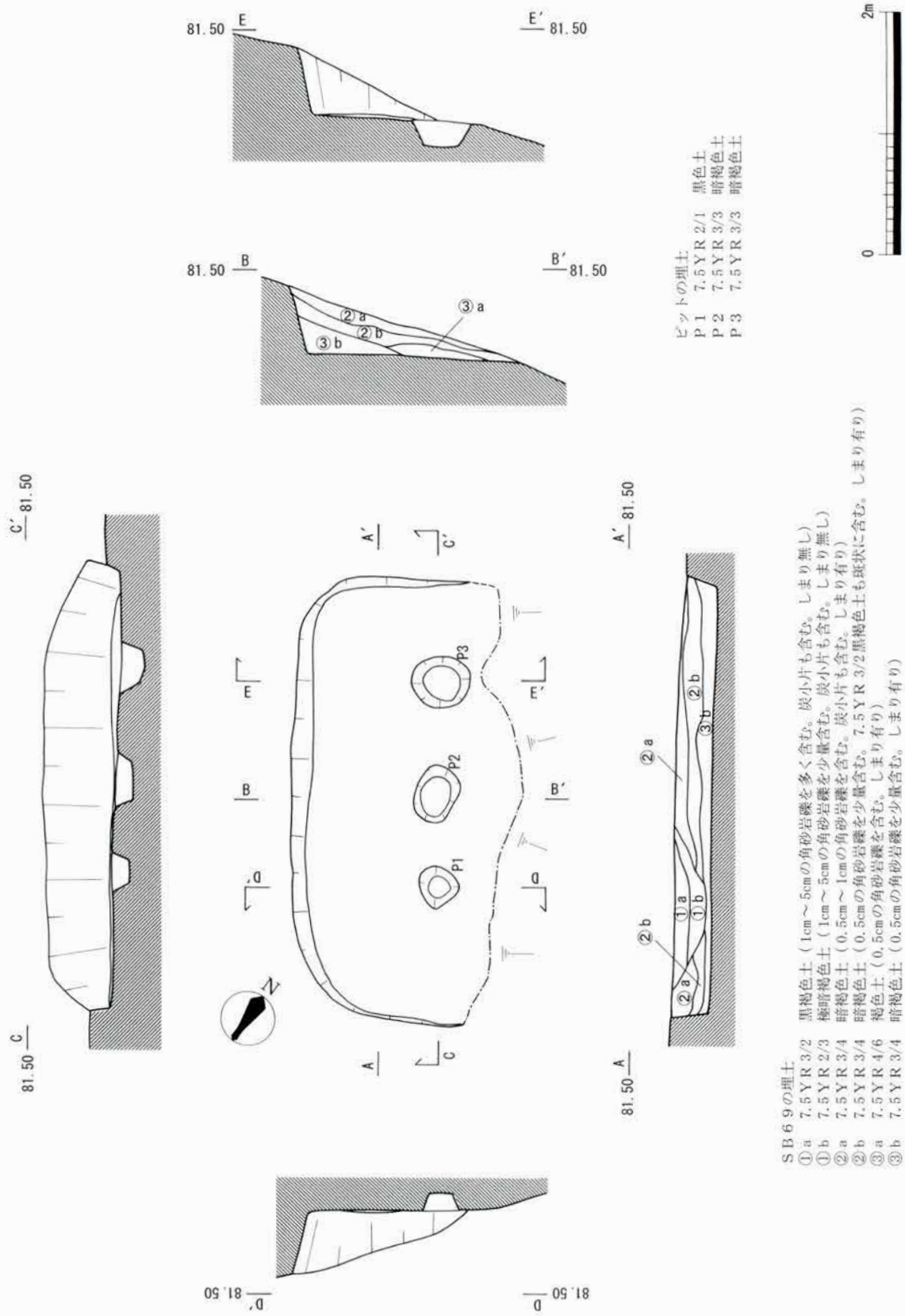


図109　ＳＢ69 実測図

ＳＢ７０

遺構（図110）

ｔ９グリッドにあり、南谷の、南東に向かってくだる極めて急な傾斜（傾斜度38.3%）地に単独で立地する（周辺地形図は、図89）。隅角は山側の北西隅角、南西隅角が残存し、前者は角張っており、後者は丸くおさめられている。幅2.56m、残存部の奥行き1.38mを測る。平面形は、正方形であったか長方形であったかは不明である。南西隅角付近の壁面及び床面は砂岩の岩盤を、その他は地山を掘り抜いて形成されており、壁面の深さは、山側で最大38cm を確認できる。住居内の埋没は、壁際から進行しており、自然埋没と判断される。

主柱穴はＰ１・Ｐ２を検出したが、Ｐ２は浅く不明瞭である。

地床炉は、埋土に炭小片を含むＳＫ１（長軸1.03m、最大深さ15cm）にその可能性を認められる。

壁溝は、北西隅角から北側壁面に沿って巡る。

遺物（図152、図版38）

土器は、38点が出土したが小片ばかりで、図化できたのは１点のみ（373）である。甕Ｄ類口縁部で直線的に外反して広がる。

③層からの出土で、この住居に帰属する土器と考えられる。

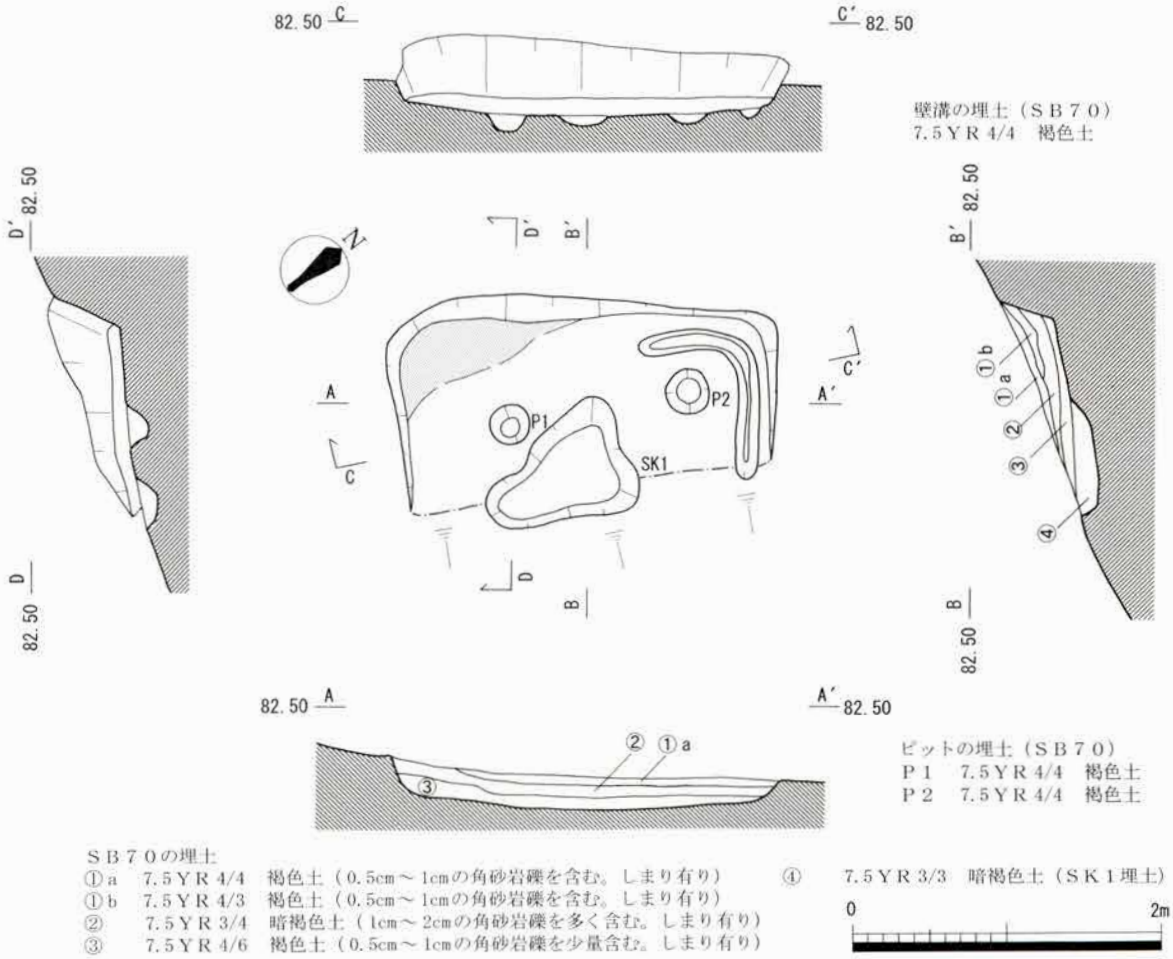


図110　ＳＢ70 実測図

ＳＢ７１

遺構（図112、図版12）

ｓ18グリッドにあり、東谷の、東に向かってくだる極めて急な傾斜（傾斜度38.4%）地に単独で立地する。南側の一部をＳＢ74に切られている。北にＳＢ72・76が隣接する。隅角は山側の北西、南西隅角が残存し、いずれも丸くおさめられている。幅3.50m、残存部の奥行き1.54mを測る。平面形は、正方形であったか長方形であったかは不明である。山側の壁面及び床面は砂岩の岩盤を、その他は地

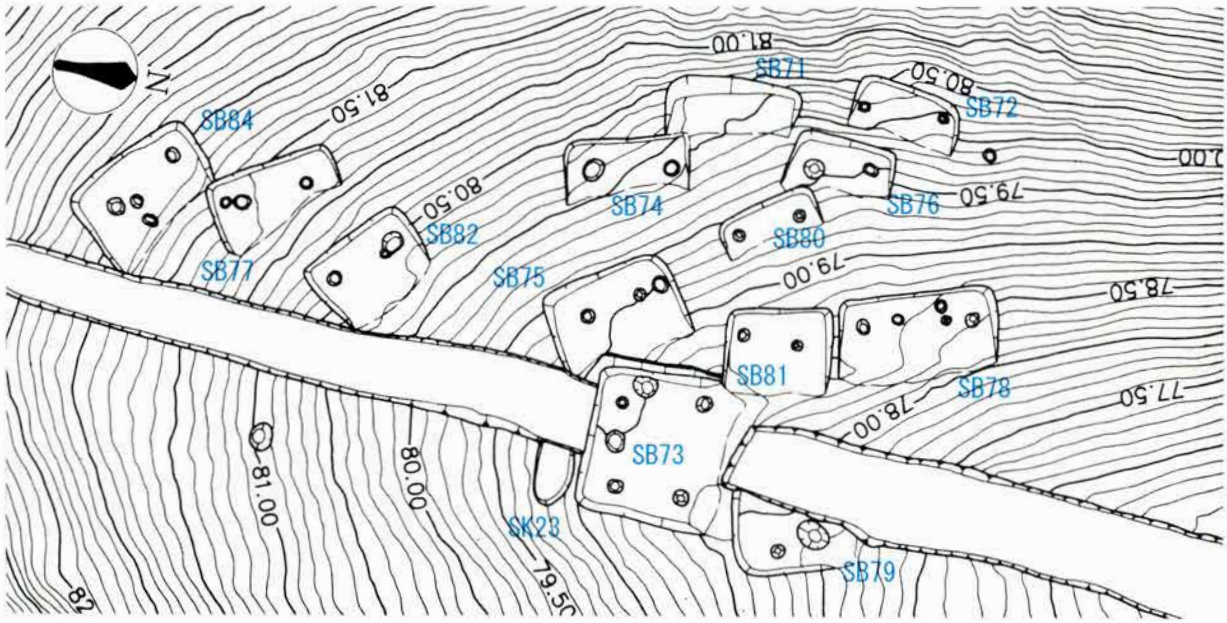
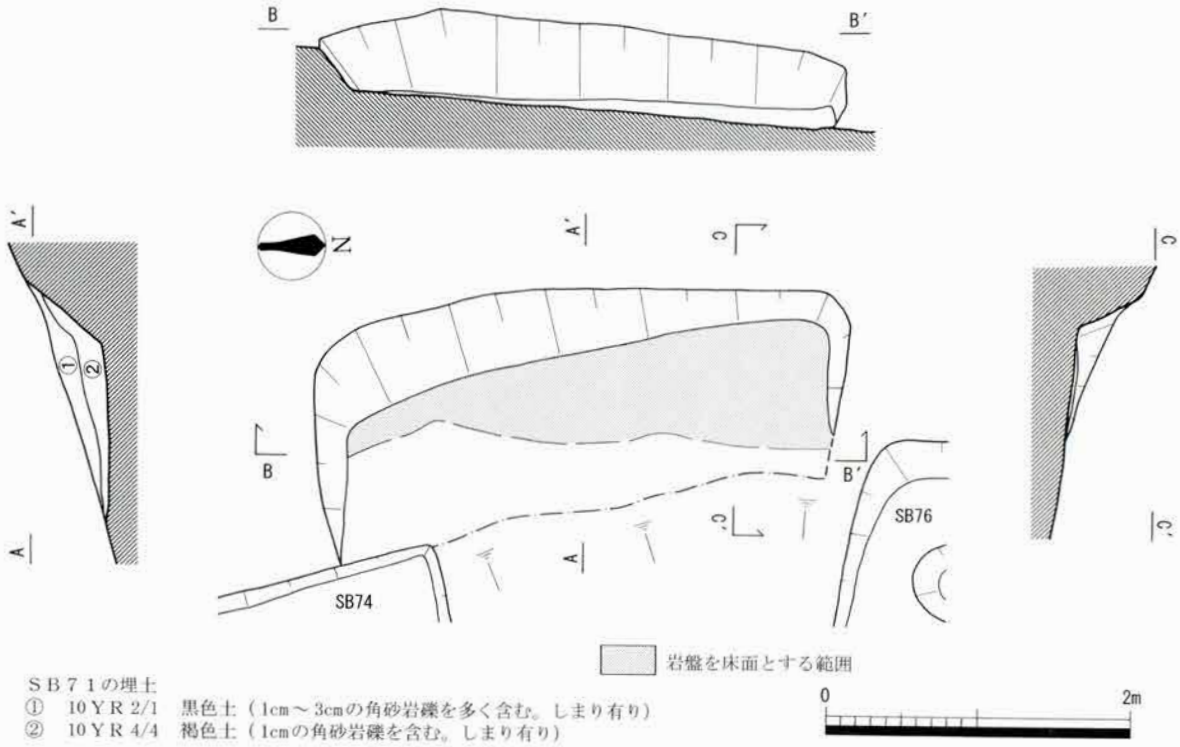


図111　ＳＢ71～81 周辺地形図（1/200）



ＳＢ７１の埋土
① 10ＹＲ 2/1　黒色土（1cm～3cmの角砂岩礫を多く含む。しまり有り）
② 10ＹＲ 4/4　褐色土（1cmの角砂岩礫を含む。しまり有り）

図112　ＳＢ71 実測図

山を掘り抜いて形成されており、壁面の深さは、山側で最大55cm を確認できる。住居内の埋没は、壁際から進行しており、自然埋没と判断される。

主柱穴、壁溝、地床炉は、検出した床面には認められなかった。

遺物

土器は39点が出土したが、小片ばかりで図化できるものはなかった。

ＳＢ７２

遺構（図113）

ｒ18グリッドにあり、東谷の、東に向かってくだる極めて急な傾斜(傾斜度31.6%)地に立地する(周辺地形図は、図111)。南東にＳＢ76、南にＳＢ71が隣接する。隅角は山側の北西隅角と南西隅角が残存し、いずれも丸くおさめられている。残存部の幅2.86m、残存部の奥行き1.36mを測る。平面形は、正方形であったか長方形であったかは不明である。山側の壁面及び床面は砂岩の岩盤を、その他は地山を掘り抜いて形成されており、壁面の深さは、山側で最大40cm を確認できる。住居内の埋没は、壁際から進行しており、自然埋没と判断される。

主柱穴は、Ｐ１・Ｐ２を検出したが、Ｐ１はやや浅く（深さ13cm）不明瞭である。

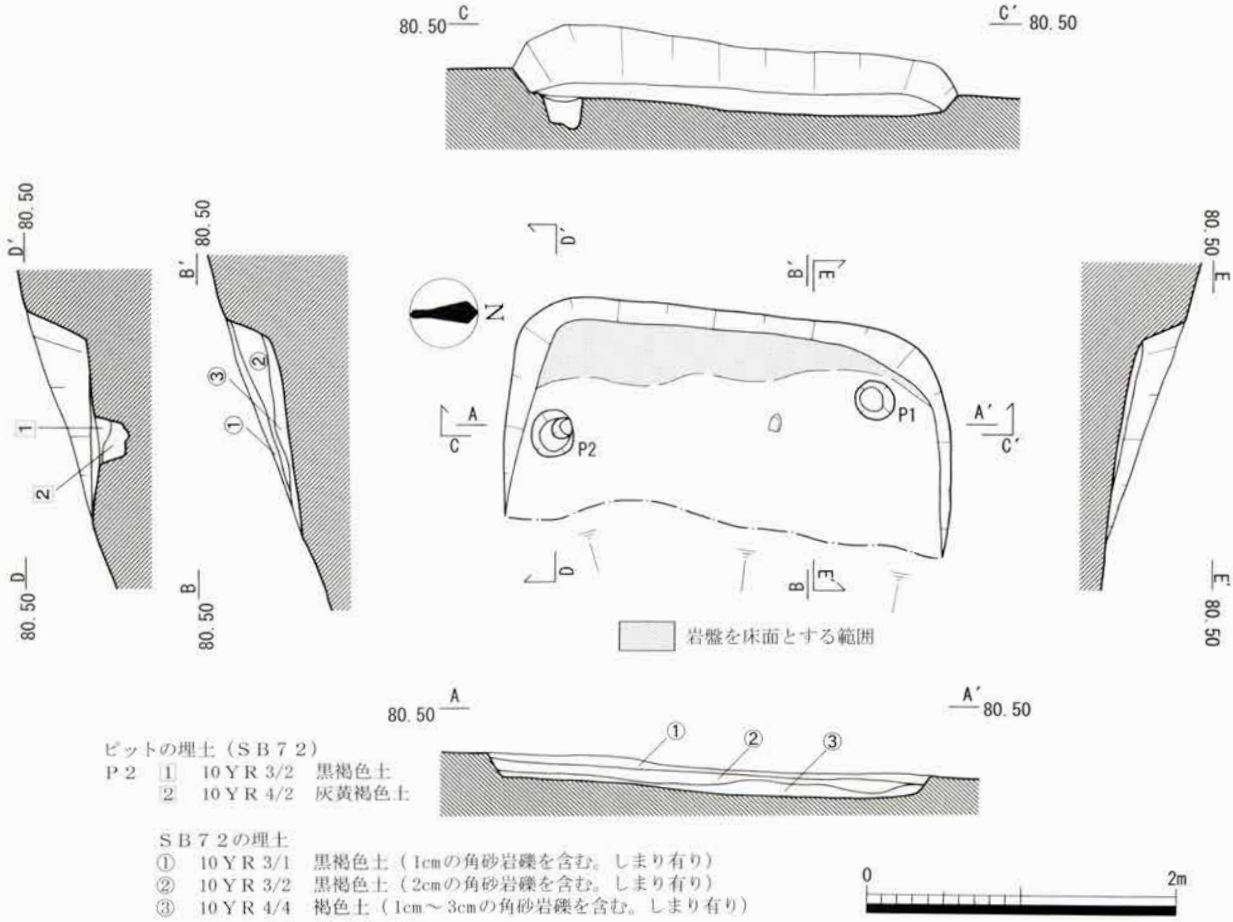


図113　ＳＢ72 実測図

地床炉は、それに該当する土坑は認められなかったが、中央北寄りに横位で下半分が床面に埋った状況で河原石を検出した。途中で折れており、欠損部は見当たらなかったが、支柱石であった可能性がある。

壁溝は、検出した床面には認められなかった。

遺物（図152、図版38）

土器は38点が出土したが、小片ばかりで、図化できたのは２点のみである。374は甕Ａ１類で、本遺跡では唯一の出土例である。長く外反する口縁の端部内面には櫛描き列点文を、外面にはキザミ目を施している。375は台付甕の台部である。

ＳＢ７３

遺構（図114、図版12）

ｓ20グリッドにあり、東谷の、北にくだるやや急な傾斜（傾斜度20.7%）地に立地する（周辺地形図は、図111）。試掘トレンチ掘削時にすでに住居跡のプランの一部が確認されたため、破壊をまぬがれた。南西にＳＢ75、北西にＳＢ81、北にＳＢ79が隣接する。隅角は山側の南西・南東隅角が残存し、いずれも角張っている。幅4.02m、残存部の奥行き3.98mを測り、東谷ではひときわ大規模な住居である。平面形は、主柱穴（後述）の位置から正方形であったと考えられる。壁面及び床面は第Ⅵ層と地山を掘り抜いて形成されている。壁面は最大51cm の深さを確認できる。住居内の埋没は、壁際から進行しており、自然埋没と判断される。

柱穴は６基検出したが、このうち主柱穴と考えられるのはＰ１・Ｐ２・Ｐ４・Ｐ５であるが、Ｐ１は55cm、Ｐ５は90cm と深く掘り込んでいる。

壁溝、地床炉は検出した床面には認められなかった。

なお、この住居の南には、平行する位置にＳＫ23が検出されている。試掘トレンチによって西側が破壊されているため、その性格を論じにくいが、この住居が谷の中心に位置し、しかもこれより南は傾斜度が25%を越える急斜面であることを考えると、斜面上部からの雨水の侵入を防ぐための山側周溝の必要性は高く、ＳＫ23がその残存である可能性は十分に考え得る。

遺物（図152・153、図版30・38）

土器は、469点が出土した。このうち図化できたのは17点である。

376～378は高坏Ｃ類の坏部で、いずれも口縁部は緩やかに内彎する。377は口縁端部内面を約８ mm幅で肥厚し、沈線を巡らす。378は口縁端部を拡張し平坦面を作り、沈線を巡らす。379は高坏の脚部。

380は器台Ｂ類で受け部は内彎気味に広がる。381は廻間分類Ａ１類の器台口縁部片で、口縁端部を垂下拡張し、端部外面に擬凹線を巡らす。382は高坏または器台の脚部で、裾部はわずかに内彎する。

383・384は、鉢Ｃ類の口縁部片で、383は端部外面に横線と列点文を施す。385は鉢の体部片で、横線と列点文を施す。

386は甕Ｇ２類の口縁部片。外面は明瞭な段を持ち擬凹線を施す。387・388は平底甕の底部。

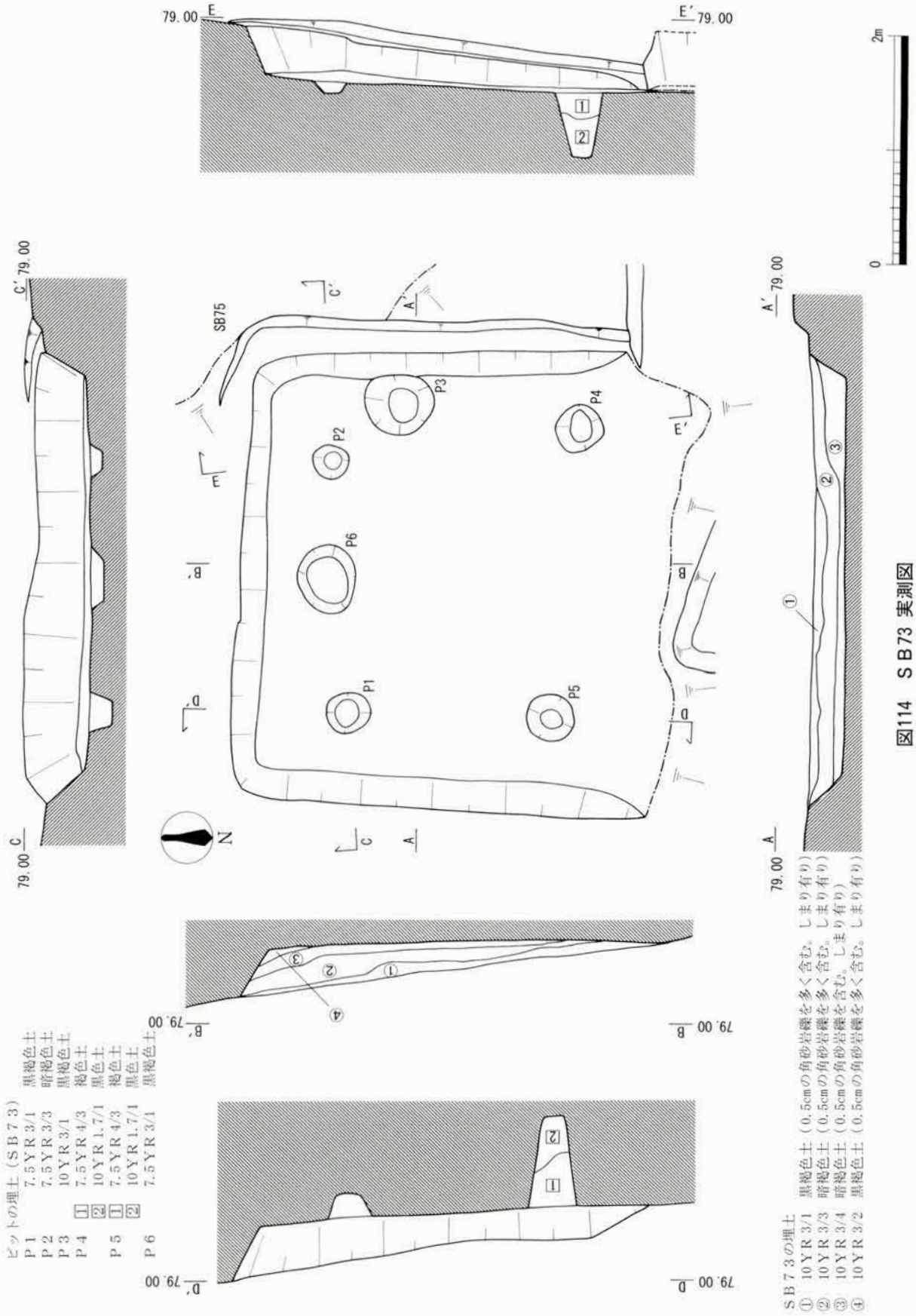


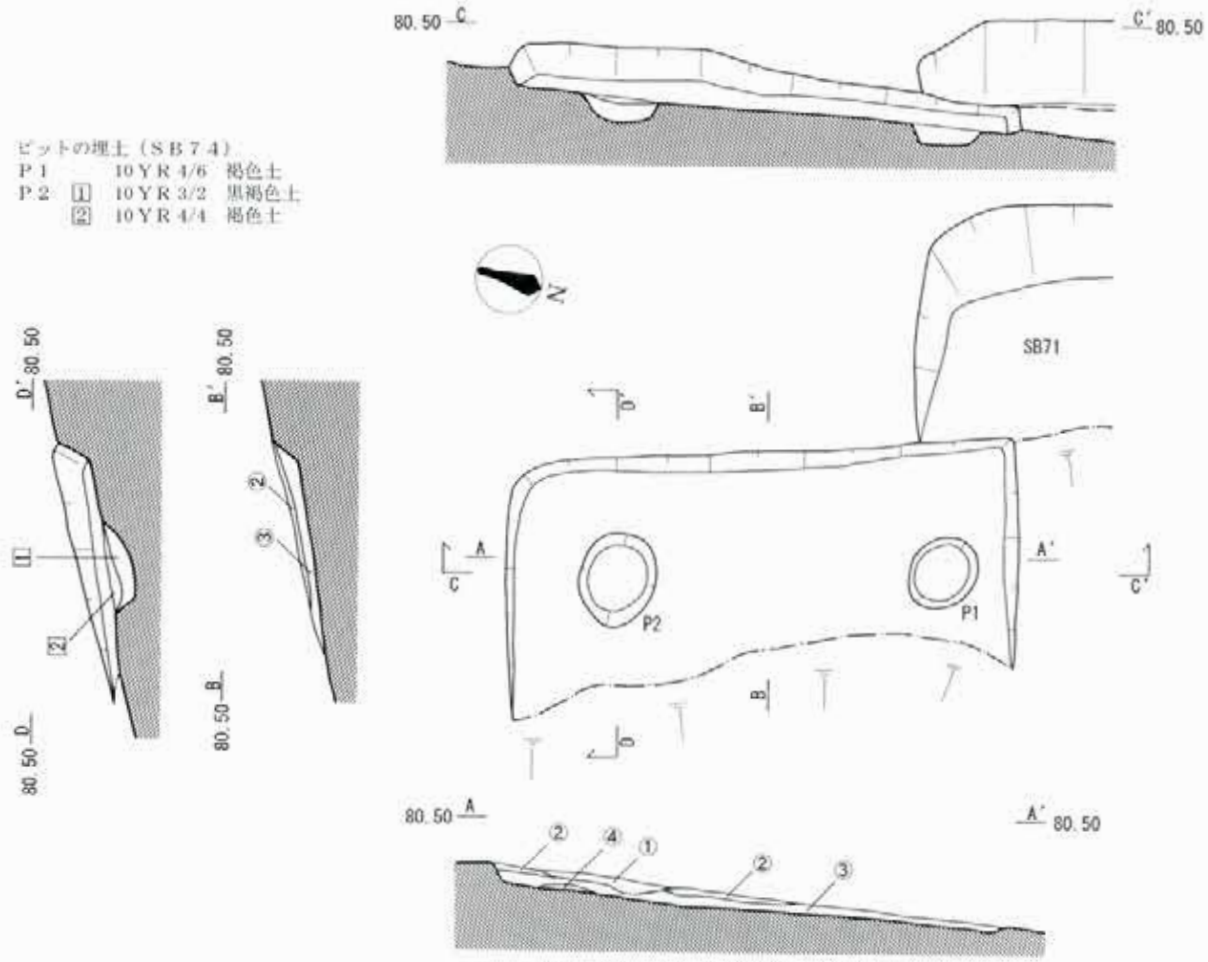
図114　ＳＢ73 実測図

389は壷Ｂ１類で、大型の広口壷の口縁部である。端部を上下に拡張し、端部外面に平坦面をつくるが、施文はみられない。頸部には重厚な突帯を形成している。この土器の胎土の色調は赤褐色を呈し、『砂行遺跡』（注３）の報告者が、条痕文系として抽出した土器群の色調と共通する。390は壷Ａ１類の口縁部で内外面に赤彩が施されている。391は壷Ｄ２類で、口縁部はわずかに内彎する。392は脚台を持つ壷の脚部と考えたが、高坏または器台の脚部の可能性もある。

ＳＢ７４

遺構（図115、図版12）

ｓ19グリッドにあり、東谷の、北東に向かってくだる急な傾斜（傾斜度26.7%）地に立地する。ＳＢ71の東側の一部を切っている。東にＳＢ75、北にＳＢ80が近接する（周辺地形図は、図111）。隅角は山側の北西隅角、南西隅角が残存し、前者は角張り後者は丸くおさめられている。幅3.40m、残存部の奥行き1.62mを測る。平面形は、正方形であったか長方形であったかは不明である。壁面及び床



ＳＢ７４の埋土
① 7.5ＹＲ 2/1　黒色土（0.5cmの角砂岩礫を含む。しまり有り）
② 7.5ＹＲ 3/1　黒褐色土（0.5cmの角砂岩礫を含む。しまり有り）
③ 10ＹＲ 5/8　黄褐色土（0.5cmの角砂岩礫を少量含む。）
④ 7.5ＹＲ 4/6　褐色土（0.5cmの角砂岩礫を少量含む。）

図115　ＳＢ74 実測図

面は地山を掘り抜いて形成されており、壁面の深さは、山側で最大22cmを確認できる。住居内の埋没は、壁際から進行しており、自然埋没と判断される。

主柱穴は、Ｐ１・Ｐ２を検出したが、いずれも浅い。

壁溝、地床炉は、検出した床面には認められなかった。

遺物（図153、図版38）

土器は168点が出土したが、小片ばかりで、図化できたのは１点のみ（393）である。壺Ｂ類の底部である。

ＳＢ７５

遺構（図116、図版12）

ｓ19グリッドにあり、東谷の、北東に向かってくだる急な傾斜（傾斜度27.3%）地に立地する。東側の床面の一部を試掘トレンチで破壊されているが、残存状況は良好である。東にＳＢ73、北にＳＢ80・81が隣接し、西にＳＢ74が近接する（周辺地形図は、図111）。隅角は山側の北西隅角、南西隅角が残存し、いずれも丸くおさめられている。幅3.68m、残存部の奥行き2.50mを測る。平面形は、正方形であったか長方形であったかは不明である。壁面及び床面は第Ⅵ層と地山を掘り抜いて形成されている。壁面の深さは、山側で最大55cmを確認できる。住居内の埋没は、壁際から進行しており、自然埋没と判断される。

主柱穴は、Ｐ１・Ｐ２を検出した。このうちＰ２は33cmの深さに掘り込まれている。、

地床炉は検出されなかったが、試掘時にトレンチ掘削によって破壊された谷側の床面部分から、長さ27cmの長楕円形の河原石が出土しており、ここに存在した地床炉の支柱石であった可能性がある。

壁溝は、認められなかった。

遺物（図153・154、図版30・38）

土器は、280点が出土した。このうち図化できたのは13点である。

394～396は高坏の脚部で、394は裾部が外反する低脚である。395の裾部は内彎する長脚である。

397・398は器台Ｂ類の受け部である。398は口縁の端部を垂下拡張し、面を形成するが、施文は見られない。

399～402は鉢の口縁部片である。399・401・402はＣ類である。401は外反して広がり、402は内彎する。399・402は端部外面に横線を巡らしている。400はＡ類で、短く外傾する口縁にわずかな段を形成する。

403は甕の体部片で、横線と列点文を施す。404は台付甕の台部である。

405は壺Ｄ２類の口縁部で、内彎して立ち上がり、端部には内傾する面を持つ。外面には横線を施している。

406は高坏Ｉ類とした。北陸系（月影式）の高坏を想定し復元実測を試みた。坏部上半は屈曲して広がり、屈曲部の外面には突帯を形成し、稜をなす。当遺跡では唯一の出土例である。

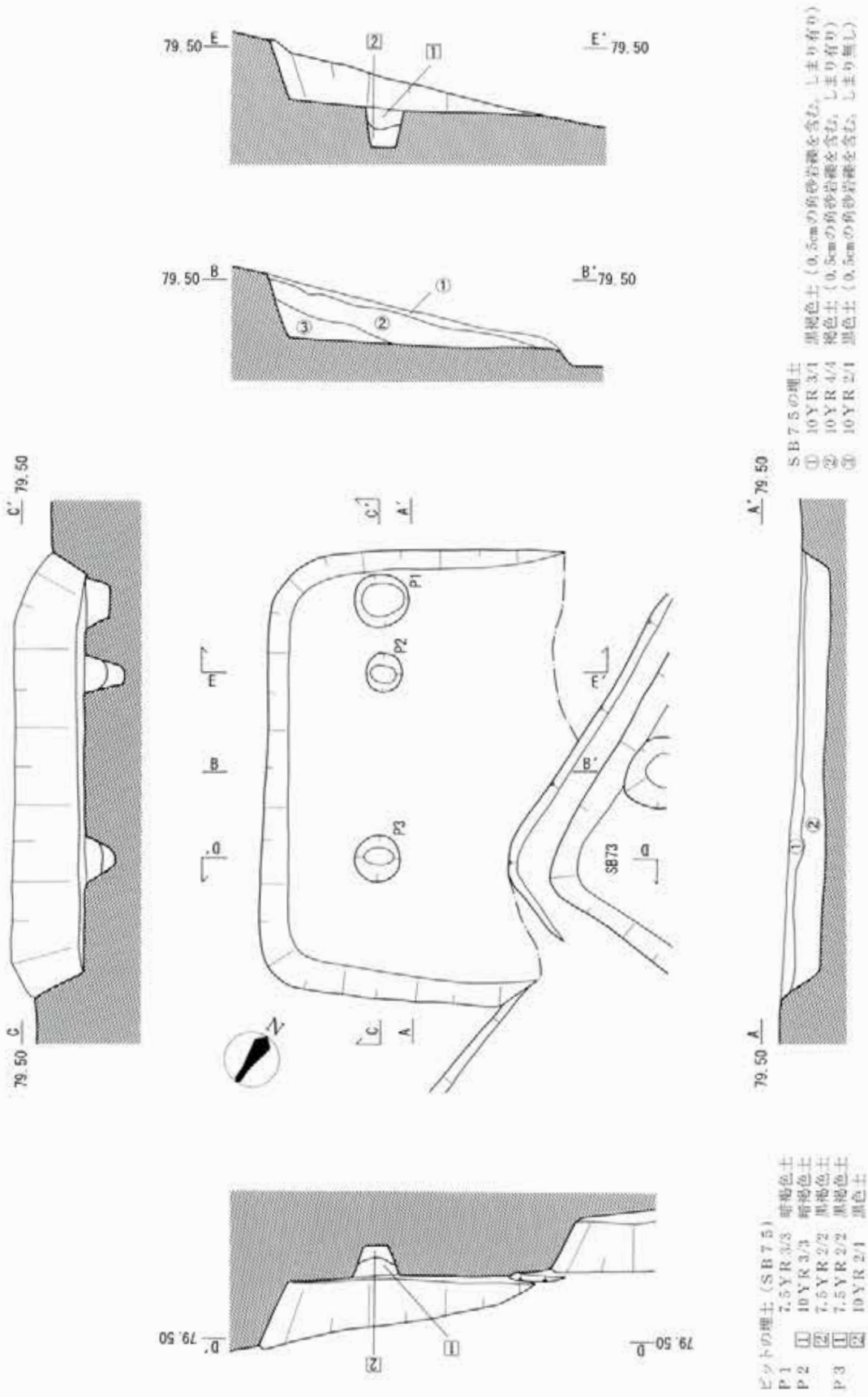


図116　ＳＢ75 実測図

ＳＢ７６

遺構（図117、図版12）

Ｒ18グリッドにあり、東谷の、東に向かってくだる急な傾斜（傾斜度30.2%）地に立地する。東側の床面の一部をＳＢ80に切られている。西にＳＢ72、南にＳＢ71が隣接する（周辺地形図は、図111）。隅角は山側の北西隅角、南西隅角が残存し、前者は角張り、後者は丸くおさめられている。幅2.86m、残存部の奥行き1.50mを測る。平面形は不明である。壁面及び床面は地山を掘り抜いて形成されている。壁面の深さは、山側で最大32cm を確認できる。住居内の埋没は壁際から進行しており、自然埋没と判断される。

主柱穴は、Ｐ１・Ｐ２を検出した。

壁溝、地床炉は、検出した床面には認められなかった。

遺物（図154、図版38）

土器は33点が出土したが、小片ばかりで、図化できたのは２点である。407は器台Ｂ類の受け部片で、厚い器壁の端部をやや拡張し、平坦面を形成している。408は壺Ｂ・Ｄ類の底部である。いずれも床面直上からの出土であり、この住居に帰属する土器と考えられる。

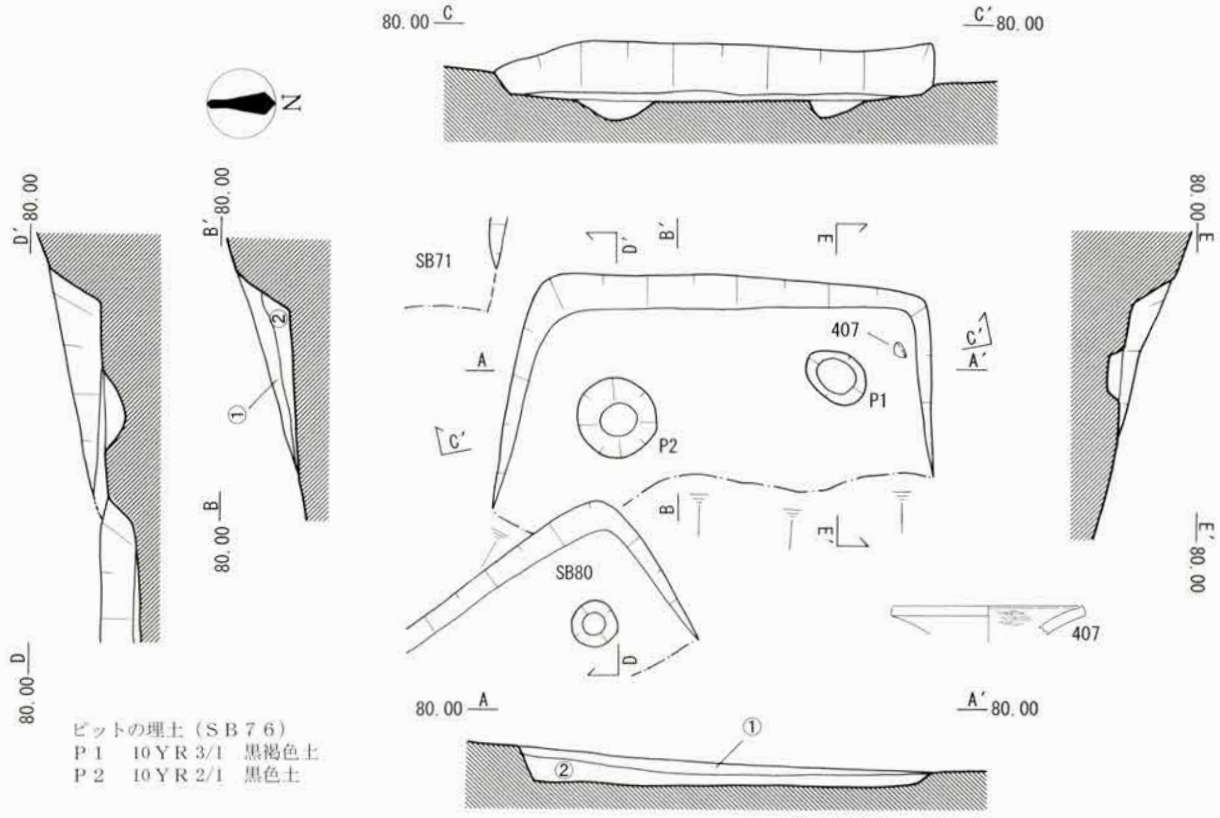


図117　ＳＢ76 実測図

ＳＢ７７

遺構（図118）

ｕ19グリッドにあり、東谷の、北北東に向かってくだる急な傾斜（傾斜度25.8%）地に立地する。

ＳＢ84の北西側の一部を切って造られている。北にＳＢ82が近接する（周辺地形図は、図111）。隅角は山側の南西隅角、南東隅角が残存し、いずれもやや角張っている。幅3.50ｍ、残存部の奥行き2.02ｍを測る。平面形は、正方形であったか長方形であったかは不明である。壁面及び床面は地山を掘り抜いて形成されている。壁面の深さは、山側で最大42cm を確認できる。住居内の埋没は、壁際から進行しており、自然埋没と判断される。

主柱穴は、Ｐ１・Ｐ２を検出した。

壁溝、地床炉は、検出した床面には認められなかった。

遺物（図154、図版38）

土器は133点が出土した。このうち図化できたのは６点である。409は器台Ｂ類の受け部片で、端部を拡張し平坦面を形成している。410は壷Ｂ類の体部片で、横線と列点文を施し、外面には赤彩が認められる。411は甕Ｄ類の口縁部で、頸部外面は曲線的にくびれものと見られる。細密なハケ目調整を施すが、器壁が厚く素朴な雰囲気の甕である。412・413は平底甕の底部。414は壷ＣまたはＤ類の底部。

上記の土器はいずれも①層の出土であり、流れ込みの可能性が高い。

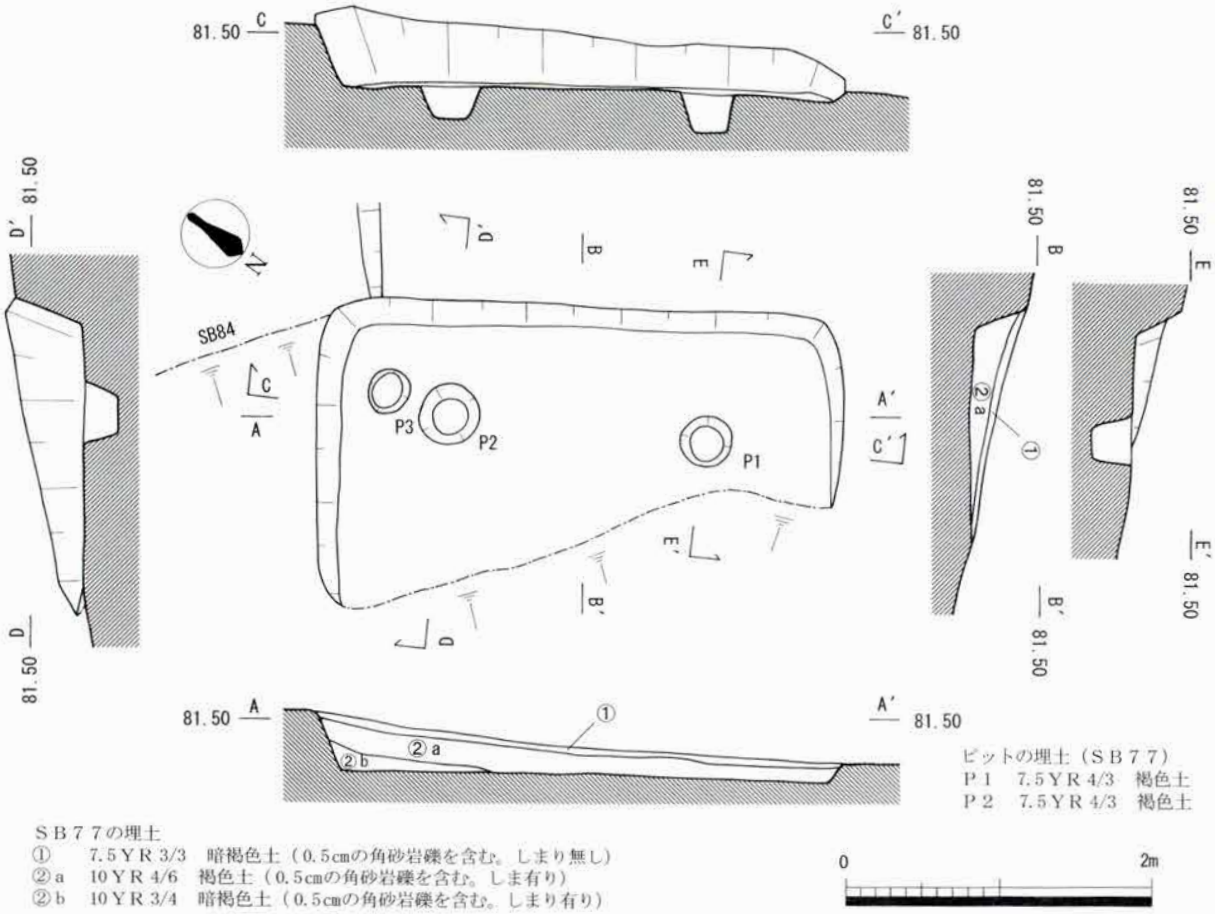


図118　ＳＢ77 実測図

ＳＢ７８

遺構（図119）

ｒ19グリッドにあり、東谷の、北北東に向かってくだるやや急な傾斜（傾斜度23.8%）地に立地す

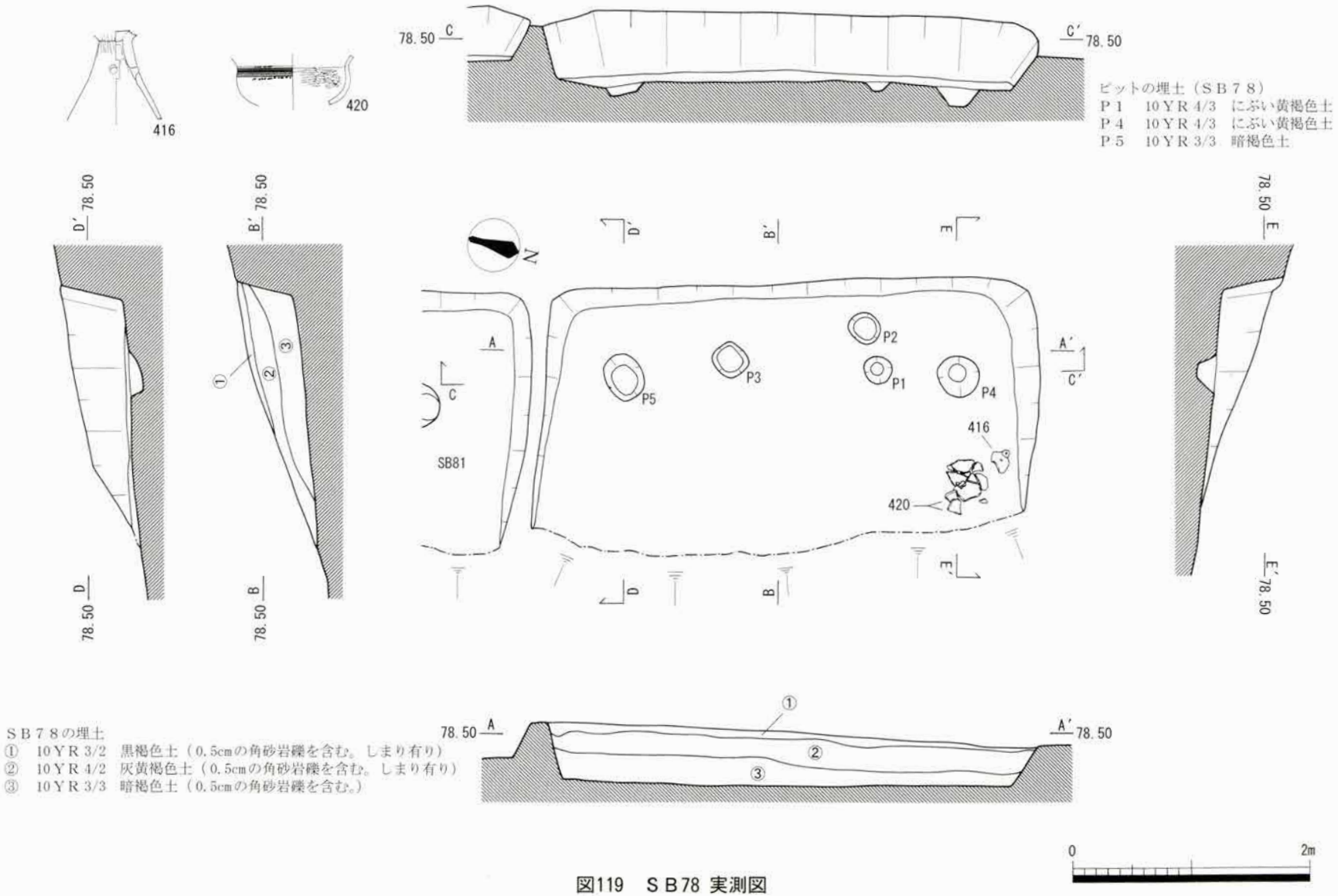


図119　ＳＢ78 実測図

る。南にＳＢ81が隣接し、南西にＳＢ76・80が近接する（周辺地形図は、図111）。隅角は山側の北西隅角、南西隅角が残存し、いずれも角張っている。幅4.16m、残存部の奥行き2.30mを測る。平面形は、正方形であったか長方形であったかは不明である。壁面及び床面は第Ⅵ層と地山を掘り抜いて形成されており、壁面の深さは、山側で最大52cmを確認できる。住居内の埋没は、壁際から進行しており、自然埋没と判断される。

柱穴は５基検出したが、主柱穴は、Ｐ４・Ｐ５と考えられる。

壁溝、地床炉は、検出した床面には認められなかった。

遺物（図154・155、図版30・38）

土器は、102点が出土した。このうち図化できたのは９点である。416は高坏の脚部である。415は器台Ｂ類の受け部片で、端部をわずかに拡張している。417～422は鉢で、417・419はＣ類の口縁部片である。419は緩やかに内彎し、端部外面には横線と列点文を巡らす。418はＢ類の口縁部片で、端部外面には横線を巡らす。420～422は体部片で、横線と列点文を巡らすが、420は頸部のくびれ部にも列点文が部分的に施される。いずれも外面には煤が付着している。423は甕Ａ類の頸部付近の体部片で、外面には縦位の櫛条痕による調整が認められ、内面は丁寧なハケ調整が施される。

以上のうち、416・417・420は床面に接した位置からの出土であり、この住居に帰属する土器と考えられる。

ＳＢ７９

遺構（図120、図版12）

ｒ20グリッドにあり、東谷の、北に向かってくだるやや急な傾斜（傾斜度22.6%）地に立地する。試掘トレンチによって西側を大きく破壊されており、残存状況はよくない。南にＳＢ73が隣接し、西にＳＢ78・81が近接する（周辺地形図は、図111）。隅角は山側の南東隅角が残存し、丸くおさめられている。幅3.20m、残存部の奥行き2.30mを測る。平面形は、正方形であったと推定される。壁面及び床面は第Ⅵ層と地山を掘り抜いて形成されており、壁面の深さは、山側で最大56cmを確認できる。住居内の埋没は、壁際から進行しており、自然埋没と判断される。

主柱穴は、Ｐ１を検出した。35cmの深さに掘り込んでいる。

地床炉は、埋土に炭小片を含むＳＫ１（長軸85cm、最大深さ15cm）に、その可能性を認められるが、壁に寄った位置ではある。

壁溝は、検出した床面には認められなかった。

遺物（図155、図版38）

土器は77点が出土した。このうち図化できたのは５点である。424～426は、甕の口縁部である。424はＣ類で、端部には明瞭な段を持つ。425・426はＤ類である。427は平底甕の底部。428は壺の底部で、凹み底である。

以上の土器うち、424・425が③層からの出土であり、この住居に帰属する可能性が高い。

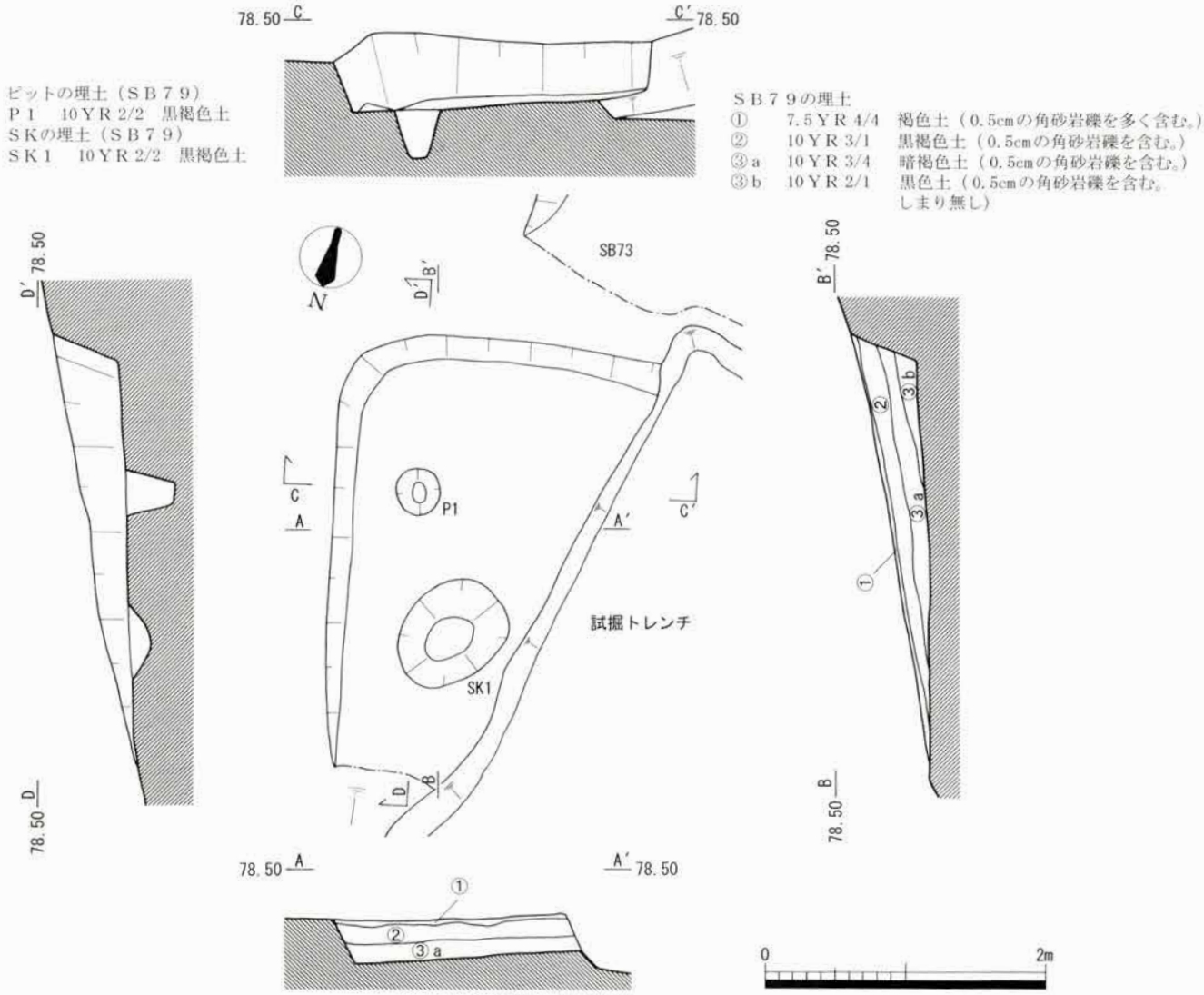


図120　ＳＢ79 実測図

ＳＢ８０

遺構（図121、図版12）

ｓ19グリッドにあり、東谷の、北東に向かってくだるやや急な傾斜（傾斜度23.8％）地に立地する（周辺地形図は、図111）。ＳＢ76の南西側の床面の一部を切っている。南西にＳＢ74、南西にＳＢ75、東にＳＢ81が近接する。隅角は山側の北西隅角、南西隅角が残存し、いずれもは丸くおさめられている。幅2.70m、残存部の奥行き1.16mを測る。平面形は、正方形であったか長方形であったかは不明である。南西隅角付近の壁面及び床面は地山を掘り抜いて形成されており、壁面の深さは、山側で最大20cmを確認できる。住居内の埋没は、壁際から進行しており、自然埋没と判断される。

主柱穴はＰ１・Ｐ２を検出したが、いずれも浅い。

壁溝、地床炉は、検出した床面には認められなかった。

遺物（図155、図版38）

土器は、160点が出土したが、小片ばかりで、図化できたのは４点である。429は鉢Ｃ類の口縁部。

430は甕Ｇ１類の口縁部と考えられる。431は甕の頸部付近の体部片で、横線と列点文を施す。432は壷Ｂ類の底部である。

以上の土器は、いずれも①層からの出土であり、斜面上部の遺構からの流れ込みの可能性が高い。

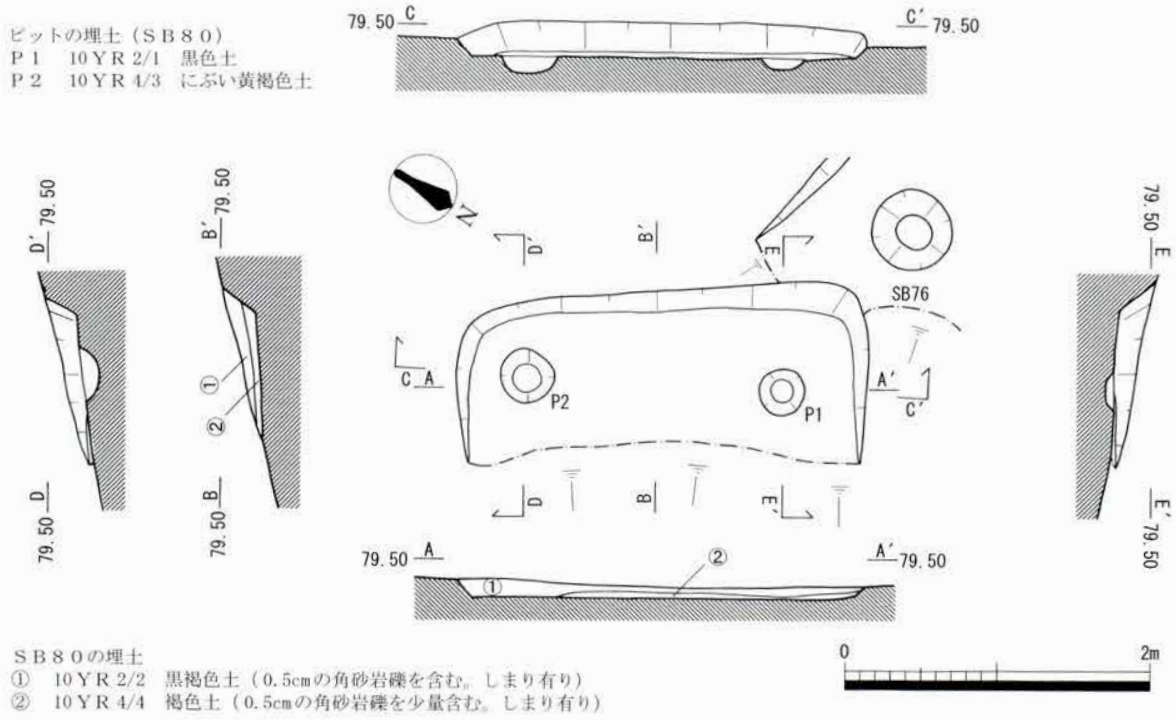


図121　ＳＢ80 実測図

ＳＢ８１

遺構（図122、図版13）

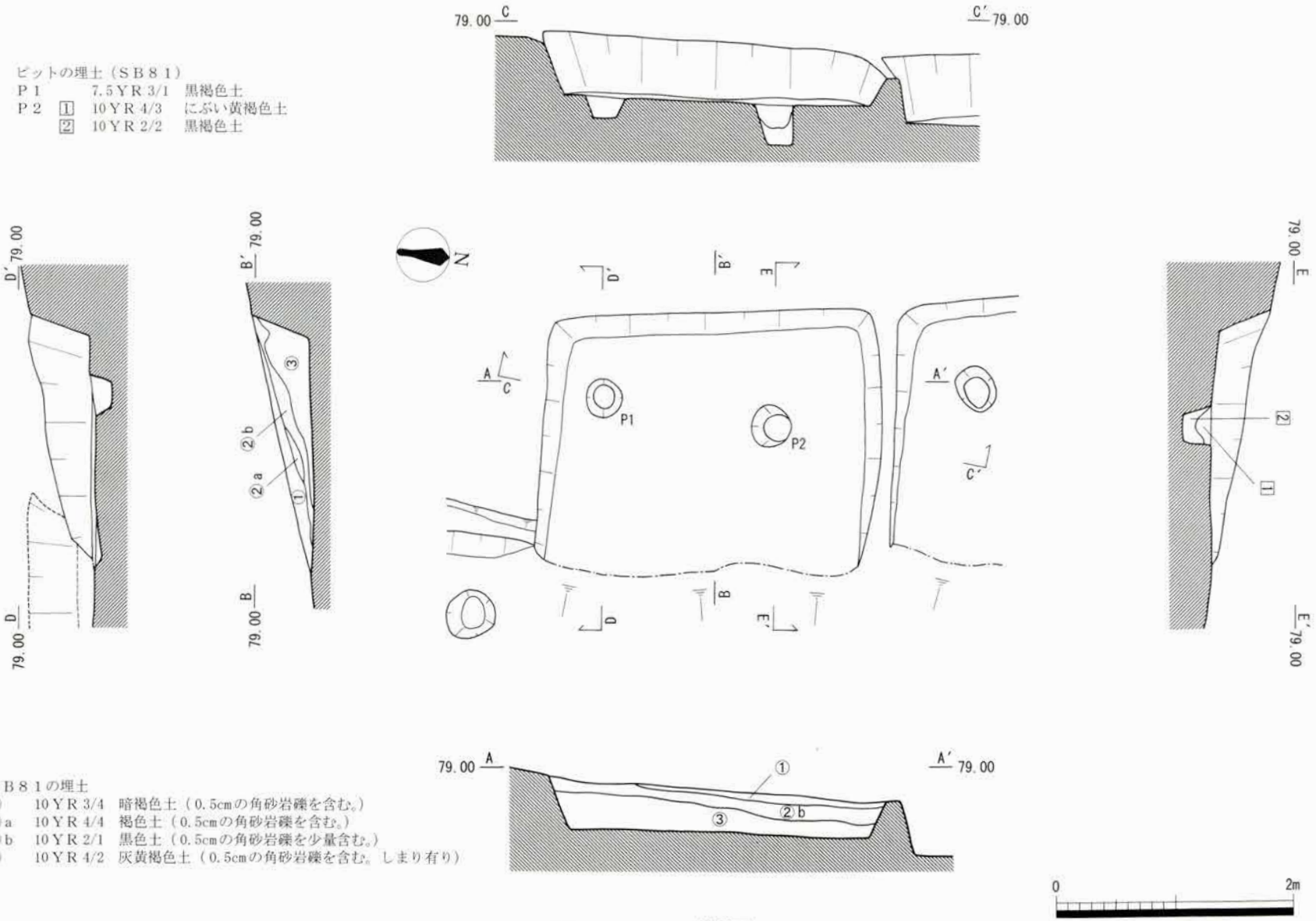
ｒ19グリッドにあり、東谷の、北東に向かってくだるやや急な傾斜（傾斜度21.9%）地に立地する（周辺地形図は、図111）。北にＳＢ78、南西にＳＢ73が隣接し、南にＳＢ75、西にＳＢ80が近接する。隅角は、山側の北西隅角、南西隅角が残存し、いずれも角張っている。幅2.84m、残存部の奥行き2.20mを測る。平面形は、正方形であったと推定される。壁面及び床面は第Ⅵ層と地山を掘り抜いて形成されており、壁面の深さは、山側で最大50cm を確認できる。住居内の埋没は、壁際から進行しており、自然埋没と判断される。

主柱穴はＰ１・Ｐ２を検出した。Ｐ２は33cm の深さに掘り込んでいる。

壁溝、地床炉は、検出した床面には認められなかった。

遺物（図155・156、図版31・38）

土器は、81点が出土した。このうち図化できたのは７点である。433は高坏Ｃ類の坏部で、内彎して深く立ち上がる。坏部の底中央に焼成後にあけられた直径８㎜の穿孔があり、脚部折損後、有孔鉢の代用として用いられたものとも考えられる。434は器台Ｂ類で、裾部を欠くが、大型品の器台では本遺跡出土の中でも良好な遺存状況である。435は器台の脚部。436は鉢Ｄ類の口縁部で、くの字状に直線的に短く外傾して広がる。437は壷Ｂ１類で、長く外反して立ち上がる口縁部を持つ。外面は、ハケ調整後、指ナデで整えられている。438は壷Ｄ類であるが、底部に水平方向に貫通する穿孔が認めら



ピットの埋土（ＳＢ８１）
Ｐ１　　7.5ＹＲ 3/1　黒褐色土
Ｐ２　1　10ＹＲ 4/3　にぶい黄褐色土
　　2　10ＹＲ 2/2　黒褐色土

ＳＢ８１の埋土
①　　10ＹＲ 3/4　暗褐色土（0.5cmの角砂岩礫を含む。）
②ａ　10ＹＲ 4/4　褐色土（0.5cmの角砂岩礫を含む。）
②ｂ　10ＹＲ 2/1　黒色土（0.5cmの角砂岩礫を少量含む。）
③　　10ＹＲ 4/2　灰黄褐色土（0.5cmの角砂岩礫を含む。しまり有り）

図122　ＳＢ81 実測図

れる。焼成前の穿孔である。当遺跡の包含層出土の壷Ｄ類底部（687）や砂行遺跡ＳＢ33出土の同じく壷Ｄ類底部にも同様の穿孔がある。その用途・機能は不明である。439は壷Ａ類の体部大破片で、頸部から肩部にかけて、横線と列点文を２段に交互に巡らす。文様帯の下方には赤彩が施されている。

上記のうち436～438は、胎土の色調が赤褐色で、隣接する砂行遺跡の報告書において、条痕文系として抽出された土器群の色調と共通する。また、433・437は③層からの出土で、この住居に帰属する可能性が高い。

ＳＢ８２

遺構（図124、図版13）

ｕ19グリッドにあり、東谷の、北東に向かってくだる急な傾斜（傾斜度25.2%）地に立地する。南にＳＢ77が近接する。隅角は山側の南西隅角、南東隅角が残存し、いずれも角張っている。幅3.10m、残存部の奥行き2.14mを測る。平面形は、正方形であったか長方形であったかは不明である。壁面及び床面は地山を掘り抜いて形成されており、壁面の深さは、山側で最大64cm を確認できる。住居内の埋没は、壁際から進行しており、自然埋没と判断される。

主柱穴はＰ１・Ｐ３を検出した。Ｐ３は33cm の深さに掘り込んでいる。

壁溝、地床炉は、検出した床面には認められなかった。

遺物（図156、図版38）

土器は59点が出土した。このうち図化できたのは４点である。440は鉢Ｃ類の口縁部で、端部外面にキザミ目を施す。441は平底甕の底部。442は甕Ｄ類の口縁部であるが、頸部は曲線的にくびれるものと見られる。器壁が厚く素朴な雰囲気の甕である。ＳＢ77出土の甕（411）とよく似た雰囲気を持つが、やや小振りである。443は甕Ｇ２類の口縁部で、口縁外面に段を有するが、その形成は不十分であり、北陸系の影響のもとに在地で作られたものと考えられる。

以上のうち、441以外は①層または②層の出土であり、流れ込みの可能性が高い。

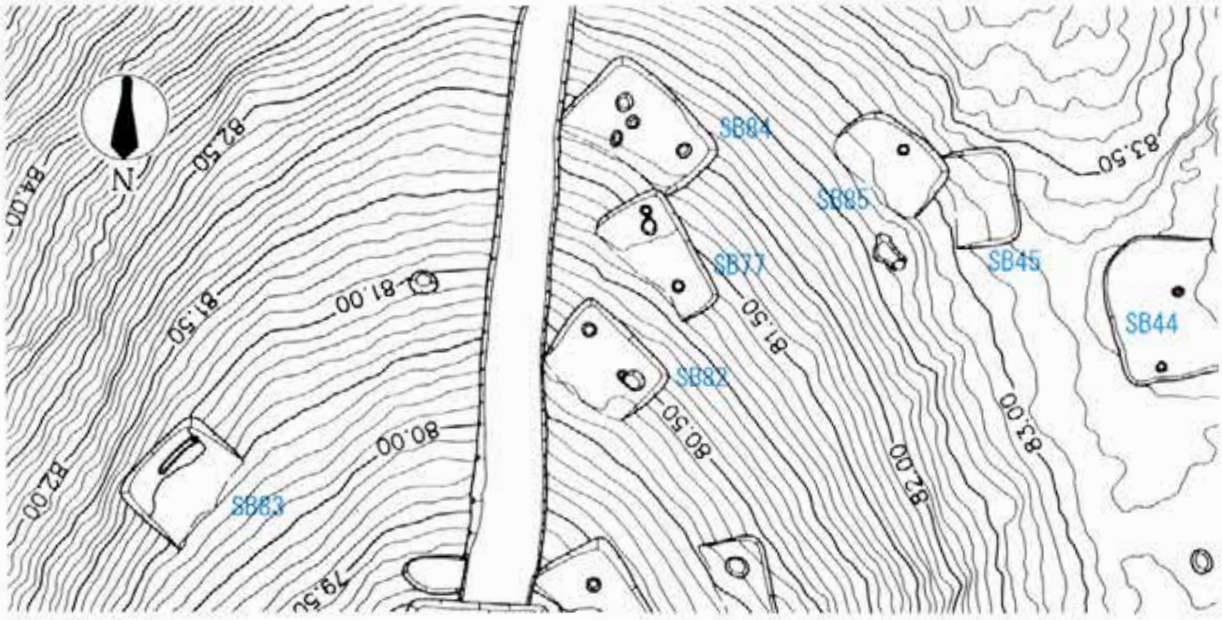


図123　ＳＢ82～85 周辺地形図

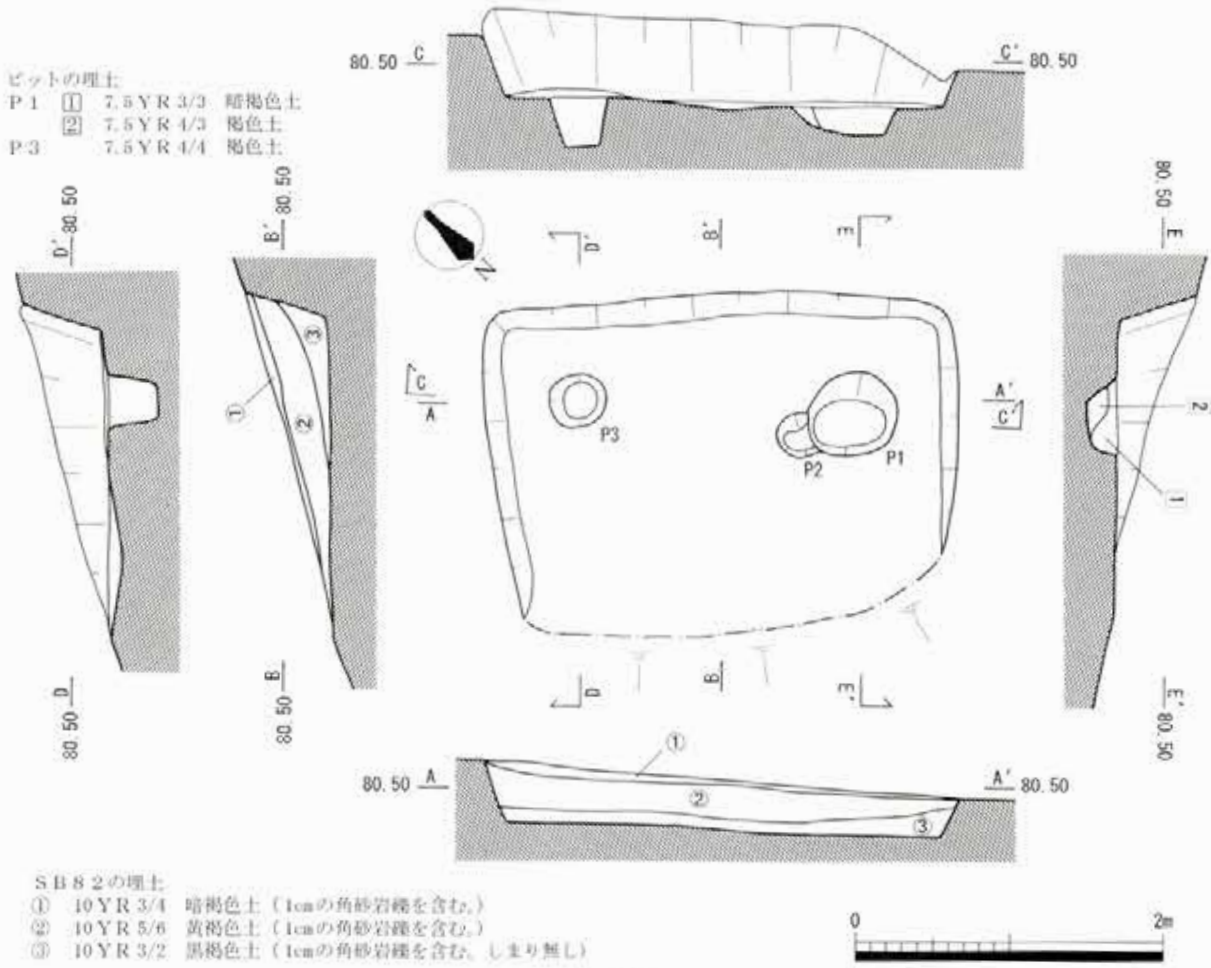


図124　ＳＢ82 実測図

ＳＢ８３

遺構（図125、図版13）

ｔ22グリッドにあり、東谷の、北西に向かってくだる極めて急な傾斜（傾斜度31.7%）地に単独で立地する（周辺地形図は、図123）。隅角は山側の北東隅角、南西隅角が残存し、いずれも丸くおさめられている。幅2.92m、残存部の奥行き2.20mを測る。平面形は、正方形であったと推定される。南東隅角付近の壁面及び床面は砂岩の岩盤を、その他は地山を掘り抜いて形成されており、壁面の深さは、山側で最大66cm を確認できる。住居内の埋没は、壁際から進行しており、自然埋没と判断される。

壁溝は山側の壁面に沿って、やや内側に入った位置に一部が残存する。

東谷の最も東に位置し、北西に向かう斜面では、唯一の住居である。

主柱穴、地床炉は、検出されなかった。

遺物

土器は全く出土しなかった。

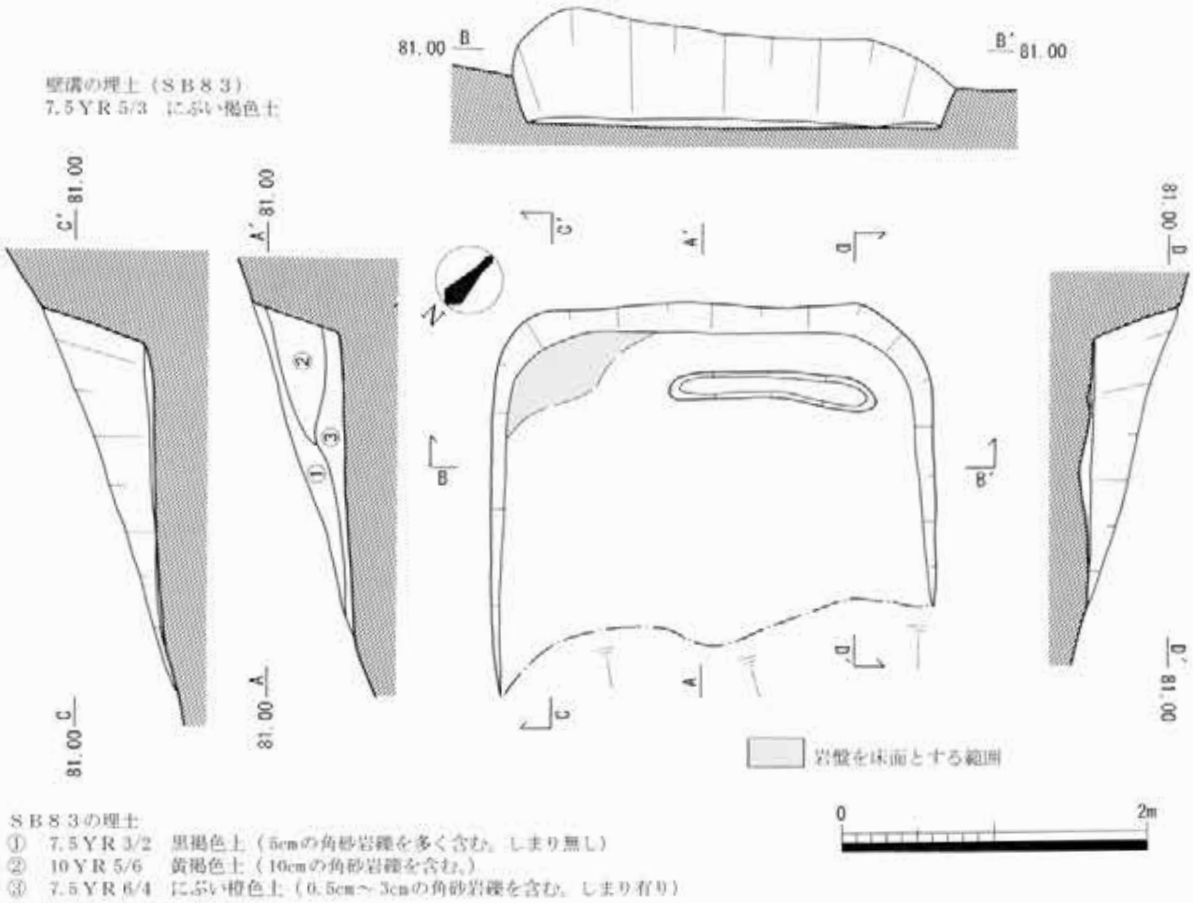


図125　ＳＢ83　実測図

ＳＢ８４

遺構（図126）

ｖ19グリッドにあり、東谷の、北東に向かってくだる急な傾斜（傾斜度26.8%）地に立地する。北側の一部をＳＢ77に切られている。西方にＳＢ85が存在する（周辺地形図は、図123）。隅角は山側の南西隅角、南東隅角が残存し、いずれも丸くおさめられている。幅3.64m、残存部の奥行き2.62mを測る。平面形は、正方形であったか長方形であったかは不明である。壁面及び床面は地山を掘り抜いて形成されており、壁面の深さは、山側で最大54cm を確認できる。住居内の埋没は、壁際から進行しており、自然埋没と判断される。

柱穴は４基を検出したが、主柱穴はＰ１・Ｐ２と考えられる。

壁溝、地床炉は、検出した床面には認められなかった。

遺物（図156）

土器は66点が出土した。このうち図化できたのは、平底甕の底部１点のみである（444）。

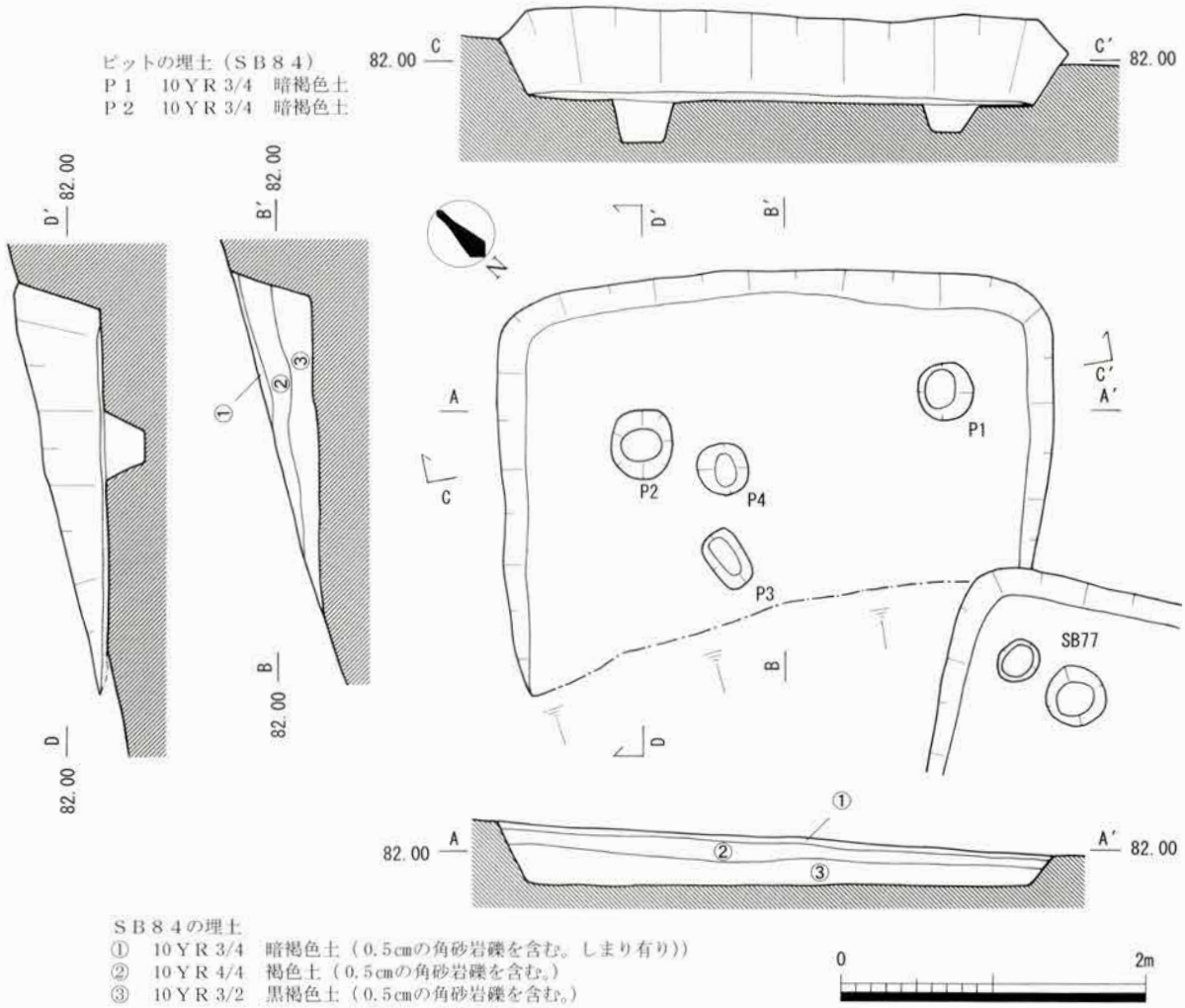


図126　ＳＢ84 実測図

ＳＢ８５

遺構（図127、図版13）

ｖ18グリッドにあり、東谷の、北東に向かってくだるやや急な傾斜（傾斜度21.9%）地に立地する。ＳＢ45の南側の一部を切って造られている。東方にＳＢ84が存在する（周辺地形図は、図123）。隅角は山側の南西隅角、南東隅角が残存し、いずれもは丸くおさめられている。幅2.92m、残存部の奥行き2.00mを測る。平面形は、正方形であったか長方形であったかは不明である。山側の壁面及び床面の一部は砂岩の岩盤を、その他は地山を掘り抜いて形成されており、壁面の深さは、山側で最大28㎝を確認できる。住居内の埋没は、壁際から進行しており、自然埋没と判断される。

柱穴は山側壁面寄りの中央に１基を検出した。その性格は不明である。

主柱穴、壁溝、地床炉は、検出されなかった。

遺物

土器は12点が出土したが、小片ばかりで、図化できるものはなかった。

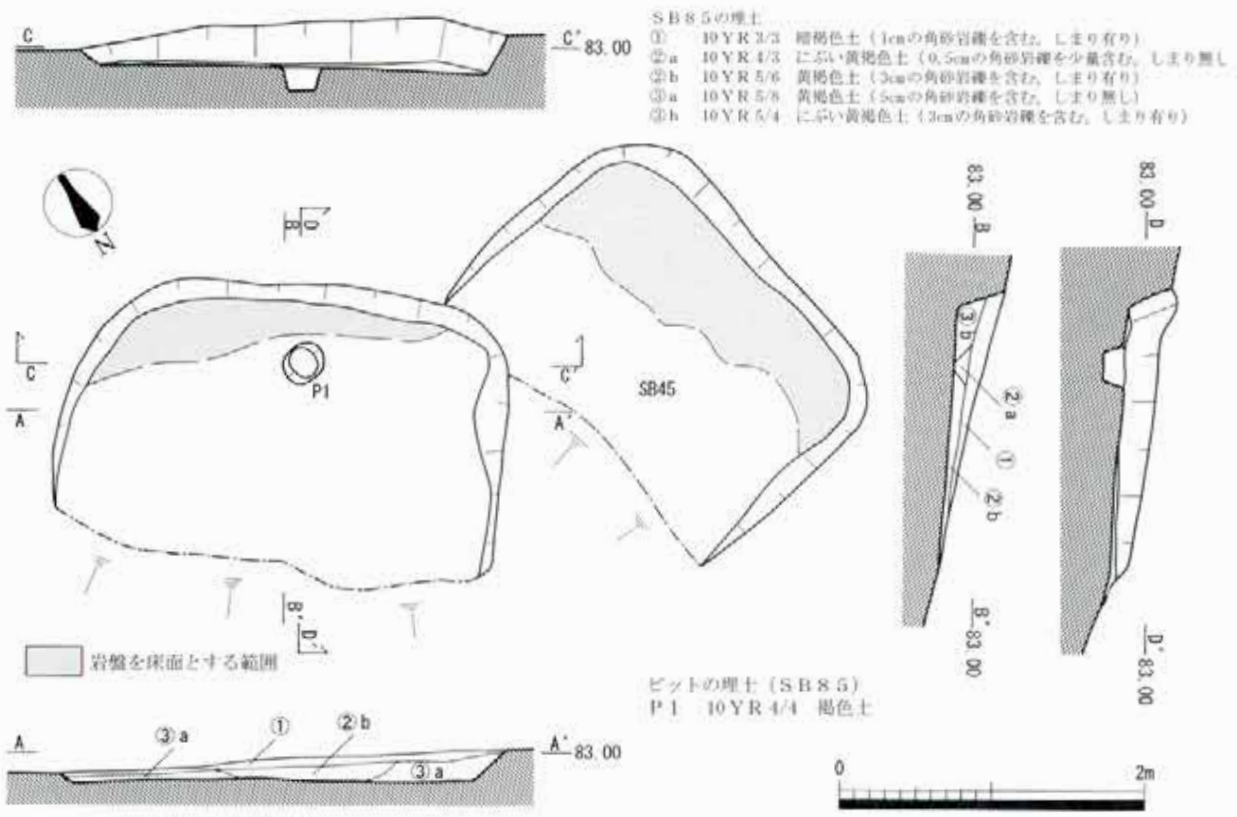


図127　ＳＢ85　実測図

ＳＵ０１

遺構（図128～130、図版13）

ｑ13グリッドで検出した土器集積である。北尾根の、南に向かってくだる極めて急な傾斜（傾斜度28.1%）地に位置する。すぐ北の斜面上部にはＳＢ39・ＳＢ40が近接しており、そこから流れたものである可能性も否定しきれないが、約２ｍ×１．３ｍの範囲に多くの土器片が重なって散乱した状態で出土したことから、土器廃棄による集積と考える方が妥当であろう。

遺物（図156・157、図版31・32・39）

土器は、489点が出土した。接合率はよく、全体の形状の知れるもの３個体を含む11点を図示した。

445～450は高坏Ｃ類である。445は緩やかに内彎しつつやや大きく広がる坏部を持ち、脚部は円錐状に広がり、裾部は内彎する。穿孔は２孔を一組として３方向に穿たれている。当遺跡出土土器の中では、高坏Ｃ類の全体の形状が知れるものとしてはＳＢ09出土の高坏（23）があるが、それと比較して坏部、脚部の広がりは大きく、内彎傾向が強い。また脚基部の径が小さい。外面は縦位、内面は横位のミガキ調整が施されている。446は坏部の底径がやや小さく、口縁部は長く外傾して伸び、深い坏部を形成する。端部は内彎させている。447の口縁部片も同様の傾向を持つ。449の坏部片は内彎傾向が一層強く、深く立ち上がると見られる。内外面のミガキ調整は縦位、横位の両方が見られるが、外面は縦位が、内面は横位がやや優位か。

451は高坏または器台の脚部。452は器台Ｂ１類の脚部である。裾部は外反する。

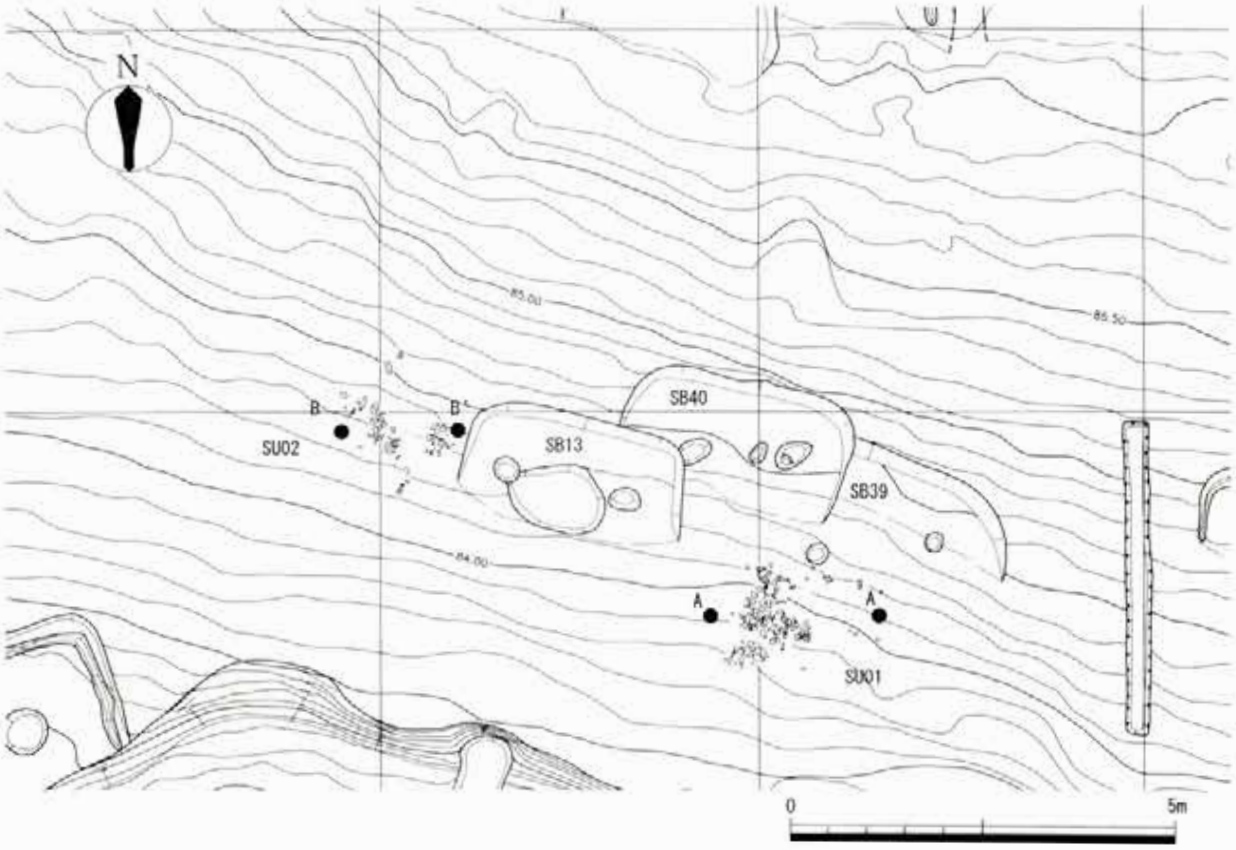


図128　ＳＵ01・02 周辺地形図（1/100）

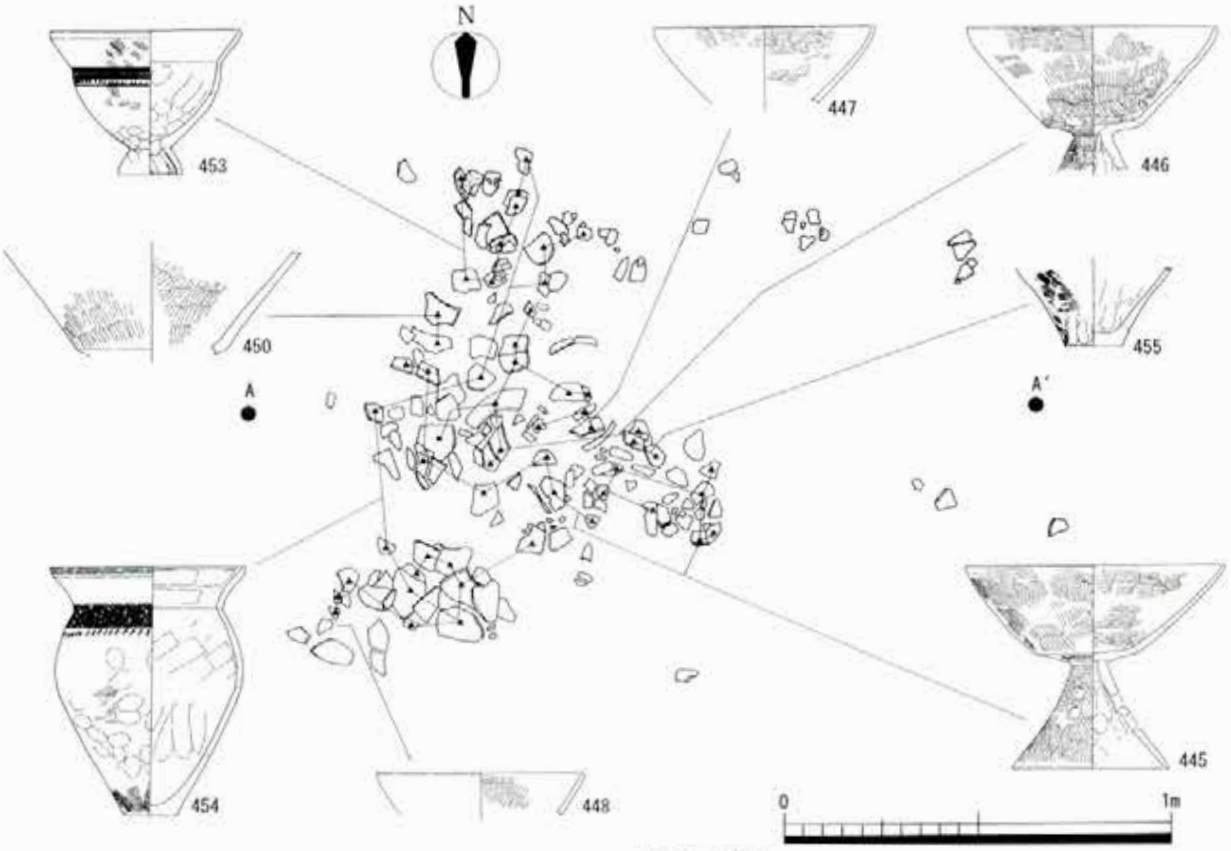


図129　ＳＵ01 上層検出状況

453は長く外傾する口縁部の先端にわずかな段を持つことから、鉢Ｂ類としたが、台を有する鉢である。頸部に横線と列点文を施す。当遺跡出土の土器のうち台付甕の台部としたものの中のいくつかは、鉢に接続するものであった可能性を示唆する個体である。

454は甕Ｃ類で長く外傾する口縁部にわずかな段を持つ。端部外面に横線を施し、頸部には横線と列点文を施しているが、横線は浅く不明瞭である。甕Ｃ類の全体の形状の知れる唯一の個体である。455は平底甕の底部である。

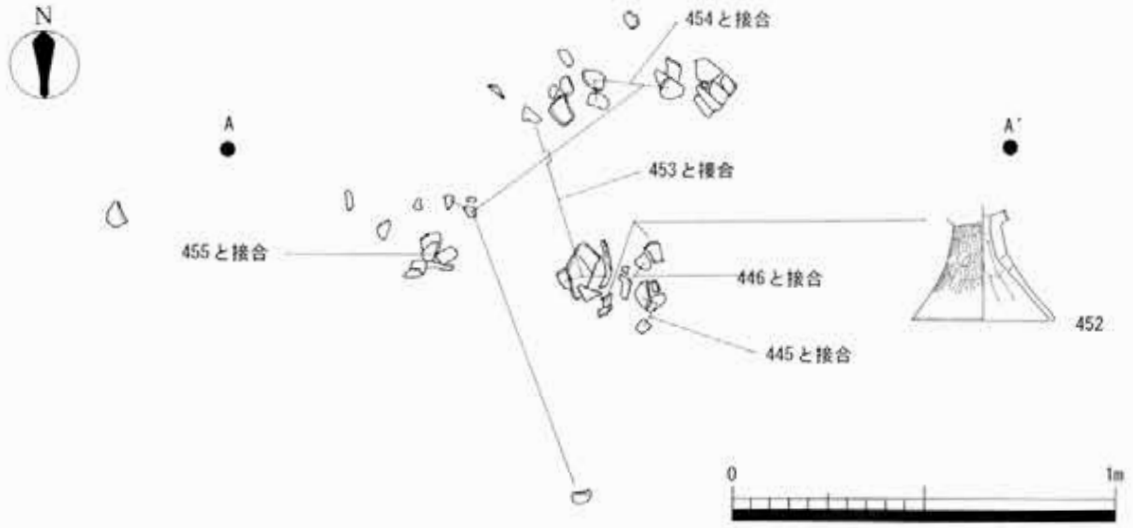


図130　ＳＵ01 下層検出状況

ＳＵ０２

遺構（図131、図版13）

ｑ12グリッドで検出した土器集積である。北尾根の、南に向かってくだる極めて急な傾斜（傾斜度28.6%）地に位置する。ＳＢ13が東に隣接する。約1.5m×1.8mの範囲に多くの土器片が重なって散乱した状態で出土したことから、土器廃棄による集積と考えられる。

遺物（図157・158、図版32・39）

土器は、261点が出土した。接合率はＳＵ01ほど高くはないが、14点を図示し得た。

456は小型の鉢で、体部の全体の形状を知ることができる。ＳＢ26出土の鉢Ｃ類（112）のように長く外傾する口縁部が接続すると考えられる。底部は凹み底である。外面はミガキ調整で仕上げられている。457は鉢の頸部付近の体部片で、横線と列点文を施している。461は鉢の底部で凹み底である。

459・460は甕Ｇ１類である。459の頸部は強く屈曲し、口縁部外面に明瞭な段を形成する。端部外面には擬凹線を巡す。月影式の特徴をよく備えており、搬入品と考えられる。460は頸部の屈曲は甘く、口縁部外面の段も不明瞭である。また、端部外面の擬凹線も浅く不明瞭で、北陸系の影響の元に在地で成立したものであろう。458は甕Ｄ類で長く直線的に立ち上がるくの字状の口縁を持つ。口縁端部はわずかに拡張し、面を作る。頸部には横線を施す。462は平底甕の底部、463は台付甕の台部である。　464は、壺Ｄ類でわずかに内彎気味に伸びる口縁部の端部外面に横線を巡らしている。465・

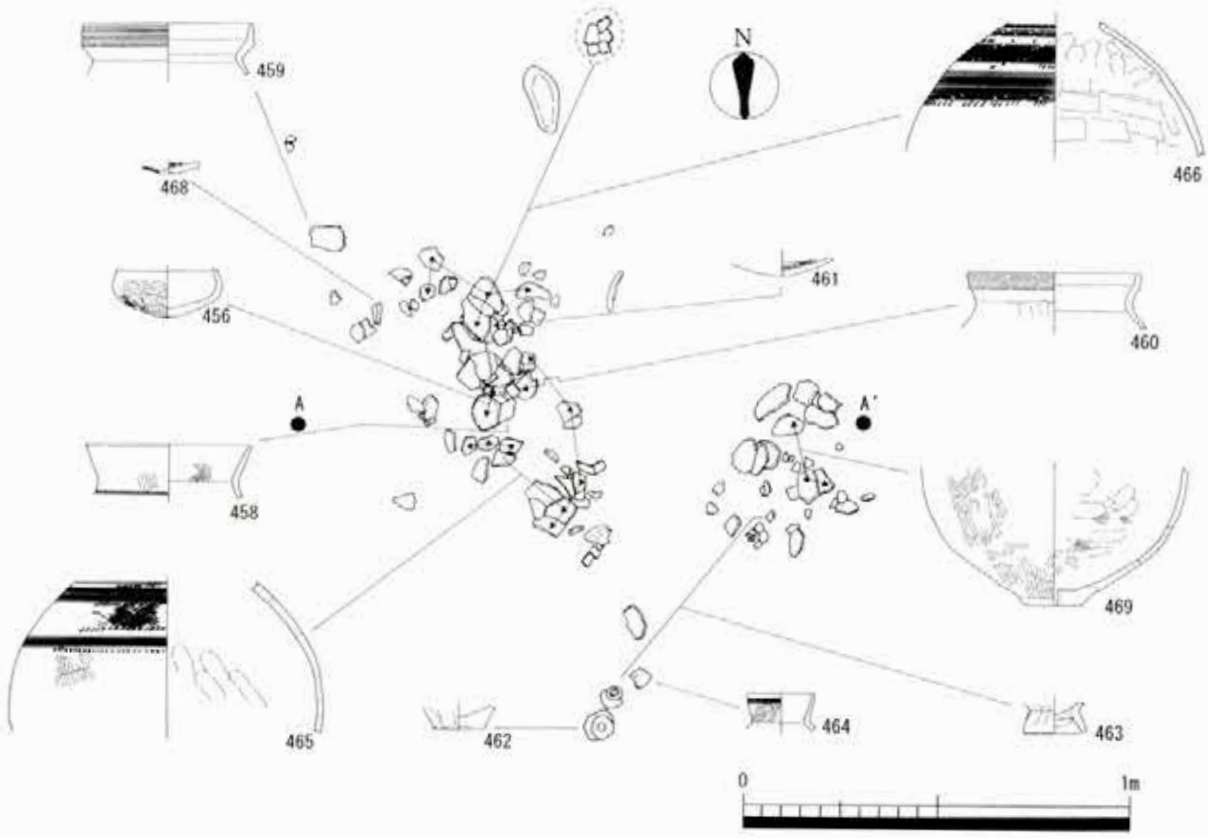


図131　ＳＵ02 検出状況

466は、壺Ａ類の大破片で、465は、横線と列点文を交互に繰り返し、それに挟まれる位置に弧帯文を施している。466は横線と列点文を3段にわたって交互に繰り返す。ともに外面には赤彩が認められる。467は壺Ｂ類の体部片で、波状文（？）と列点文、横線を施す。468は壺Ｂ類の底部。469は壺Ａ類の体部下半部で、外面には鮮やかに赤彩が残存する。

注（第２章第１節～第４節１項まで）

3　成瀬正勝編 2000『砂行遺跡』 岐阜県文化財保護センター調査報告書第65集 財団法人岐阜県文化財保護センター

4　赤塚次郎 1992「山中式土器について」『山中遺跡』 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第40集 財団法人愛知県埋蔵文化財センター

赤塚次郎 1990「廻間式土器」『廻間遺跡』 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第10集 財団法人愛知県埋蔵文化財センター

赤塚次郎 1994「松河戸様式の設定」『松河戸遺跡』 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第48集 財団法人愛知県埋蔵文化財センター

5　南青柳遺跡の東方500メートルの同一丘陵上に存在する。平成10・11年度に財団法人岐阜県文化財保護センターが調査。南青柳遺跡と同時期の集落跡、後期古墳１基、奈良～平安時代の火葬墓６基、灰釉陶器窯跡などを検出している（松岡千年・安田正枝 1999「深橋前遺跡発掘調査概要」『99　岐阜県新発見考古速報－平成11年度岐阜県発掘調査報告会－』 岐阜県教育委員会）

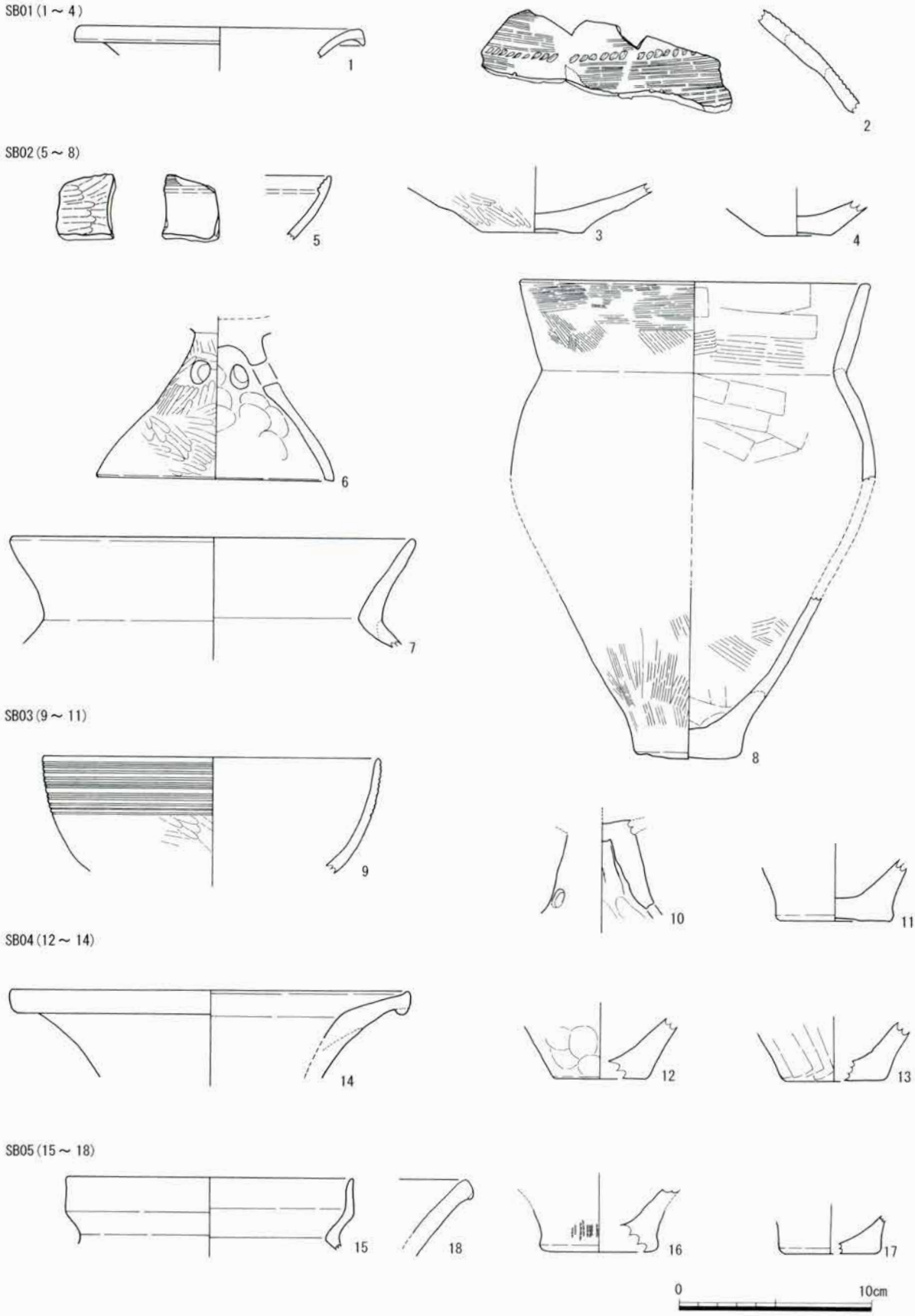


図132　住居跡出土土器（１）

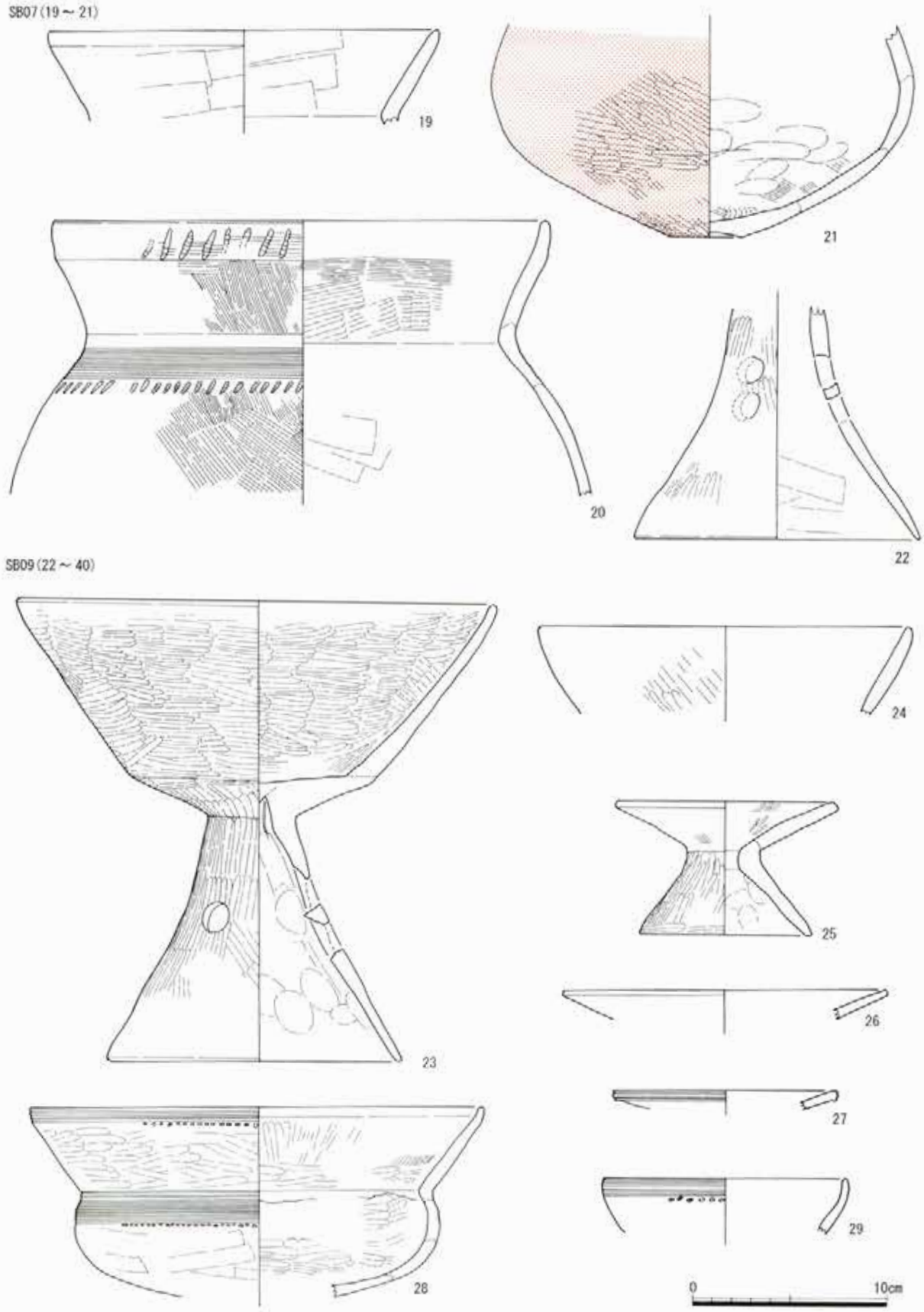


図133　住居跡出土土器（2）

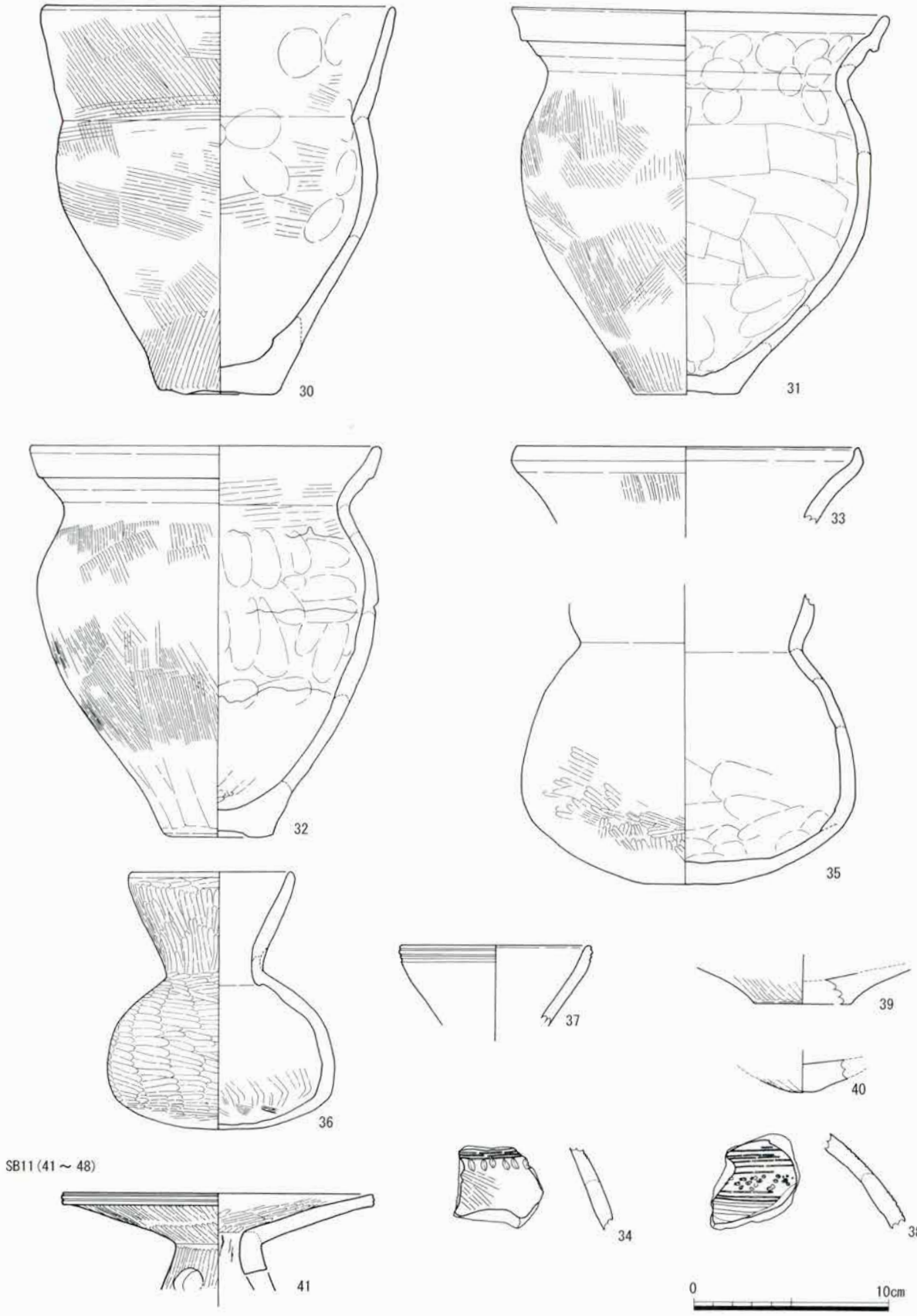


図134　住居跡出土土器（３）

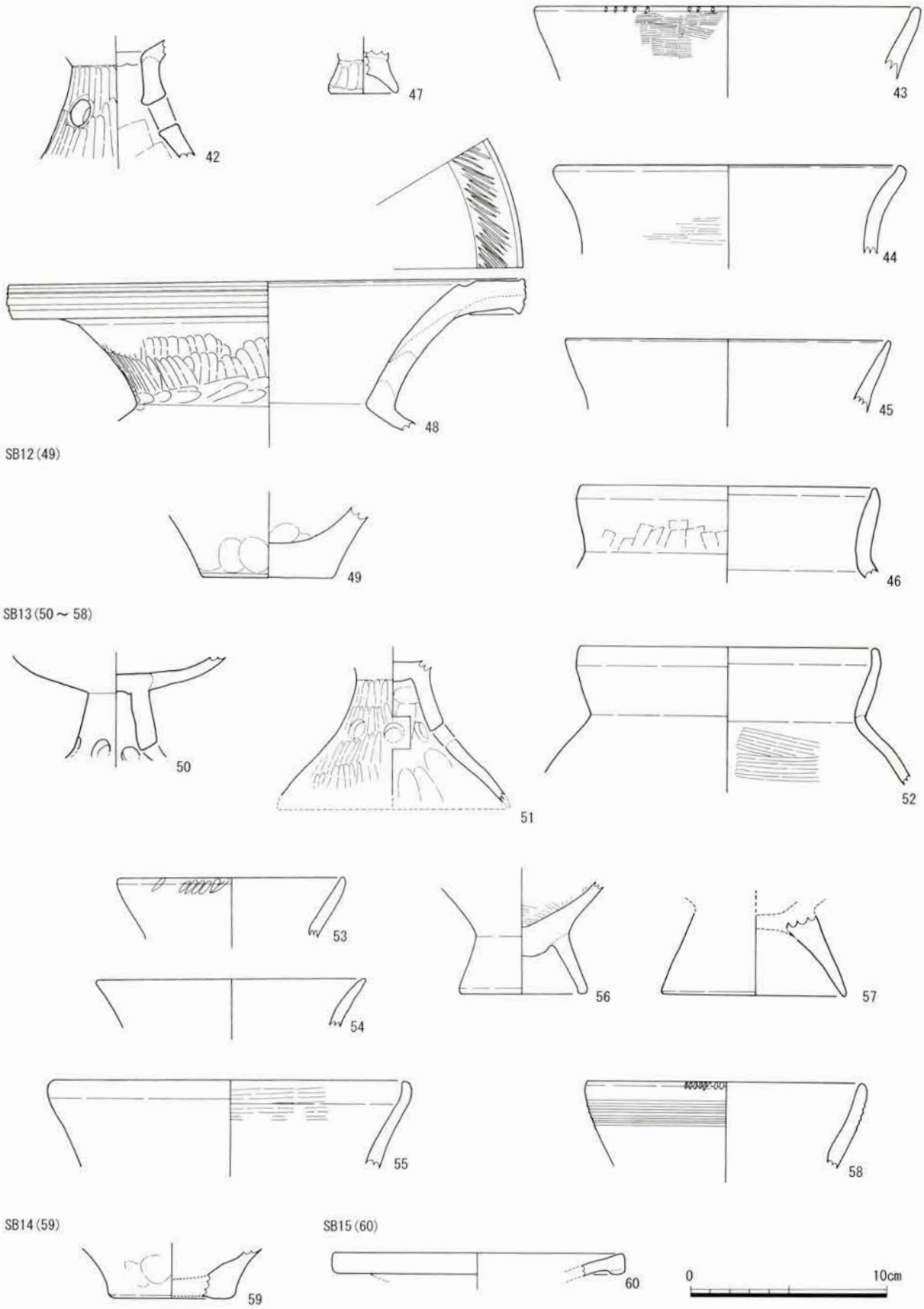


図135　住居跡出土土器（４）

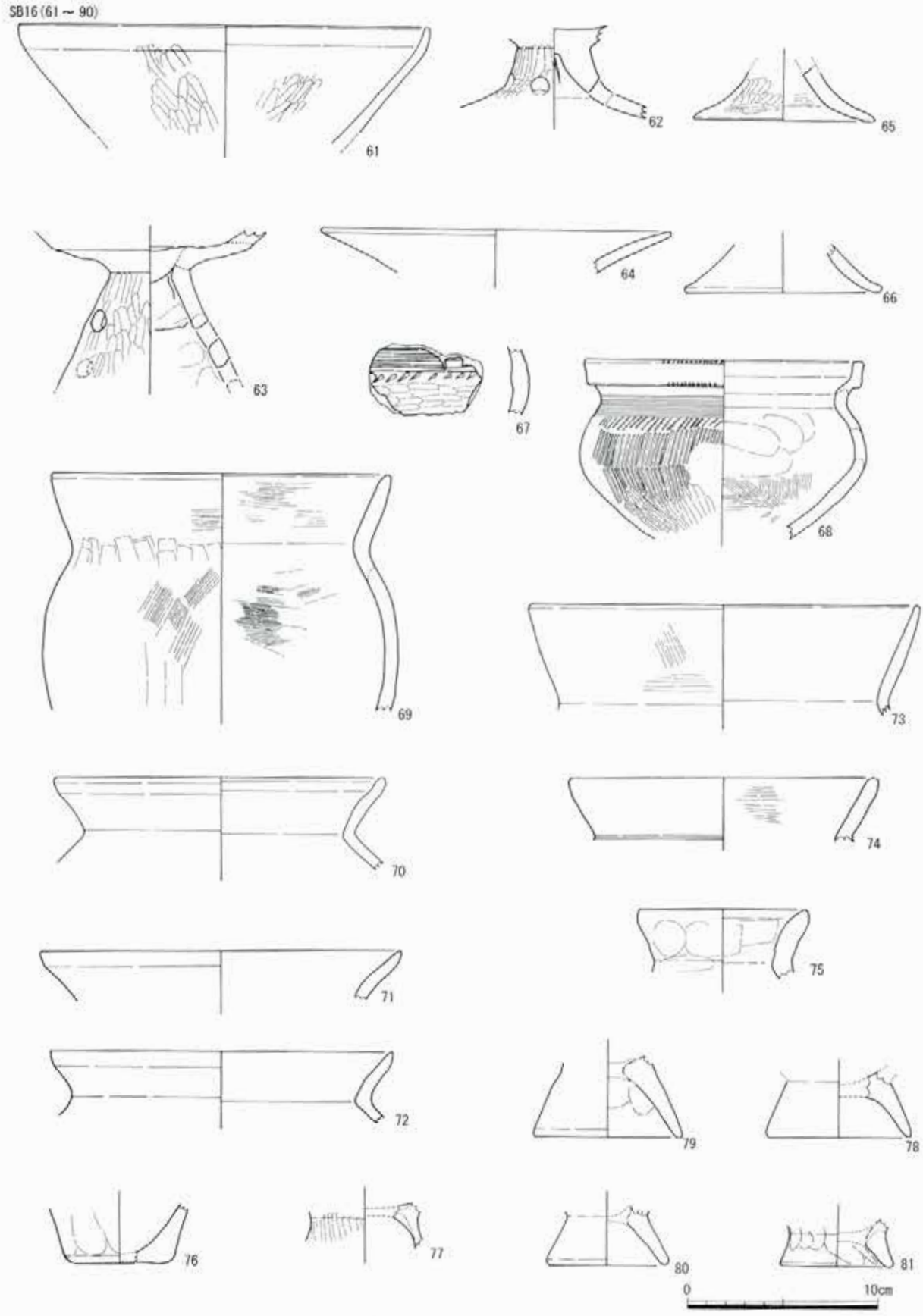


図136　住居跡出土土器（５）

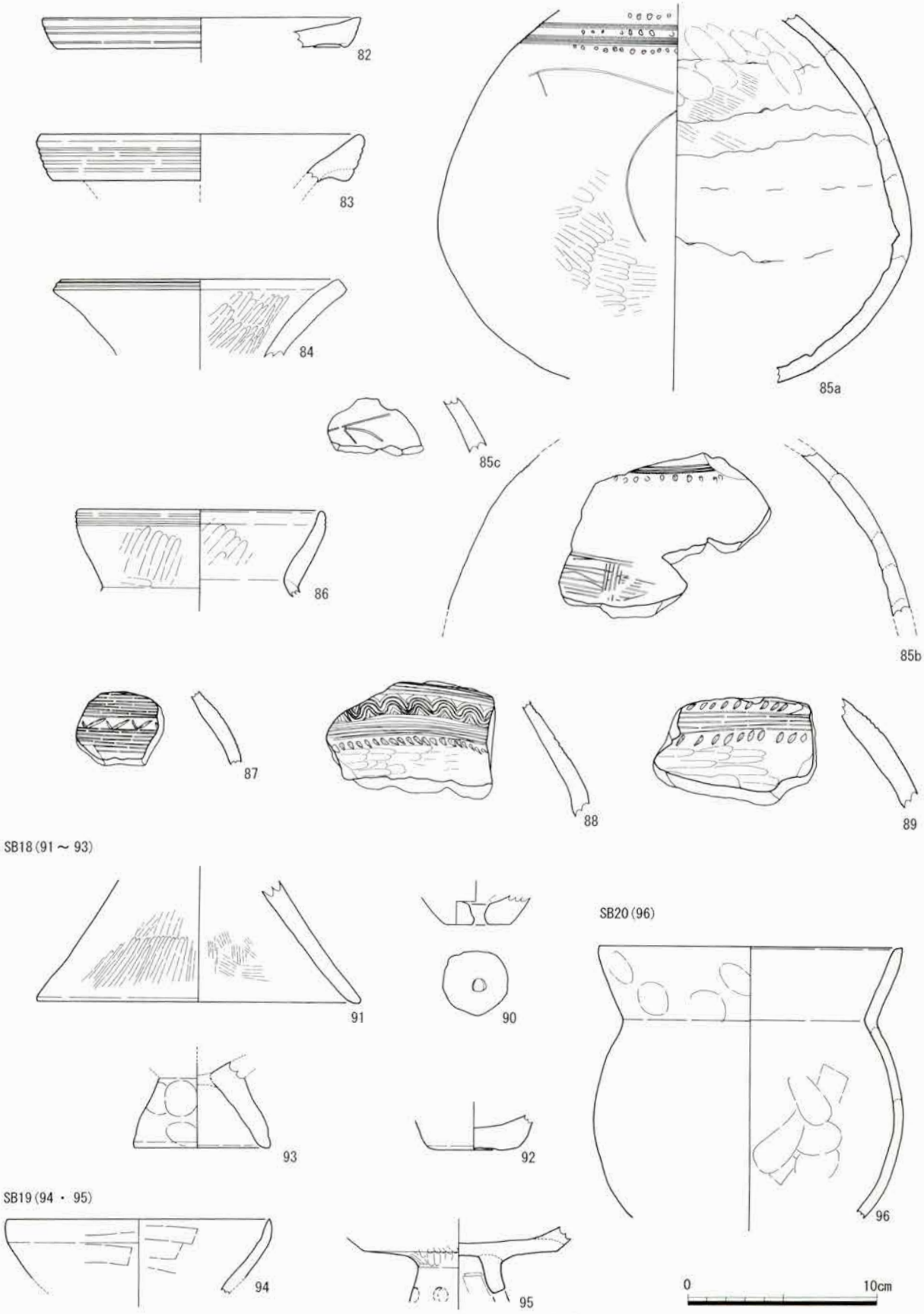


図137　住居跡出土土器（６）

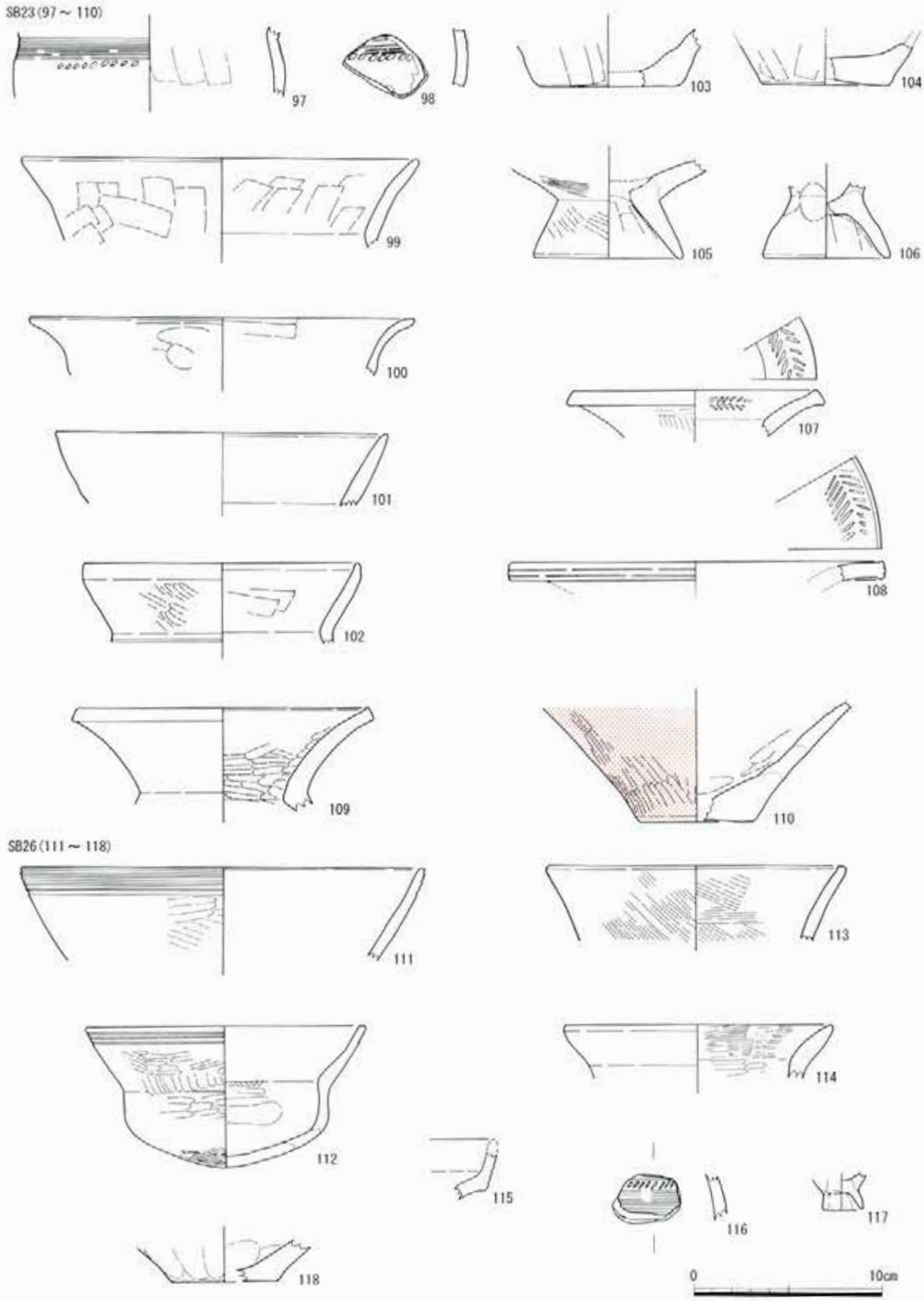


図138　住居跡出土土器（７）

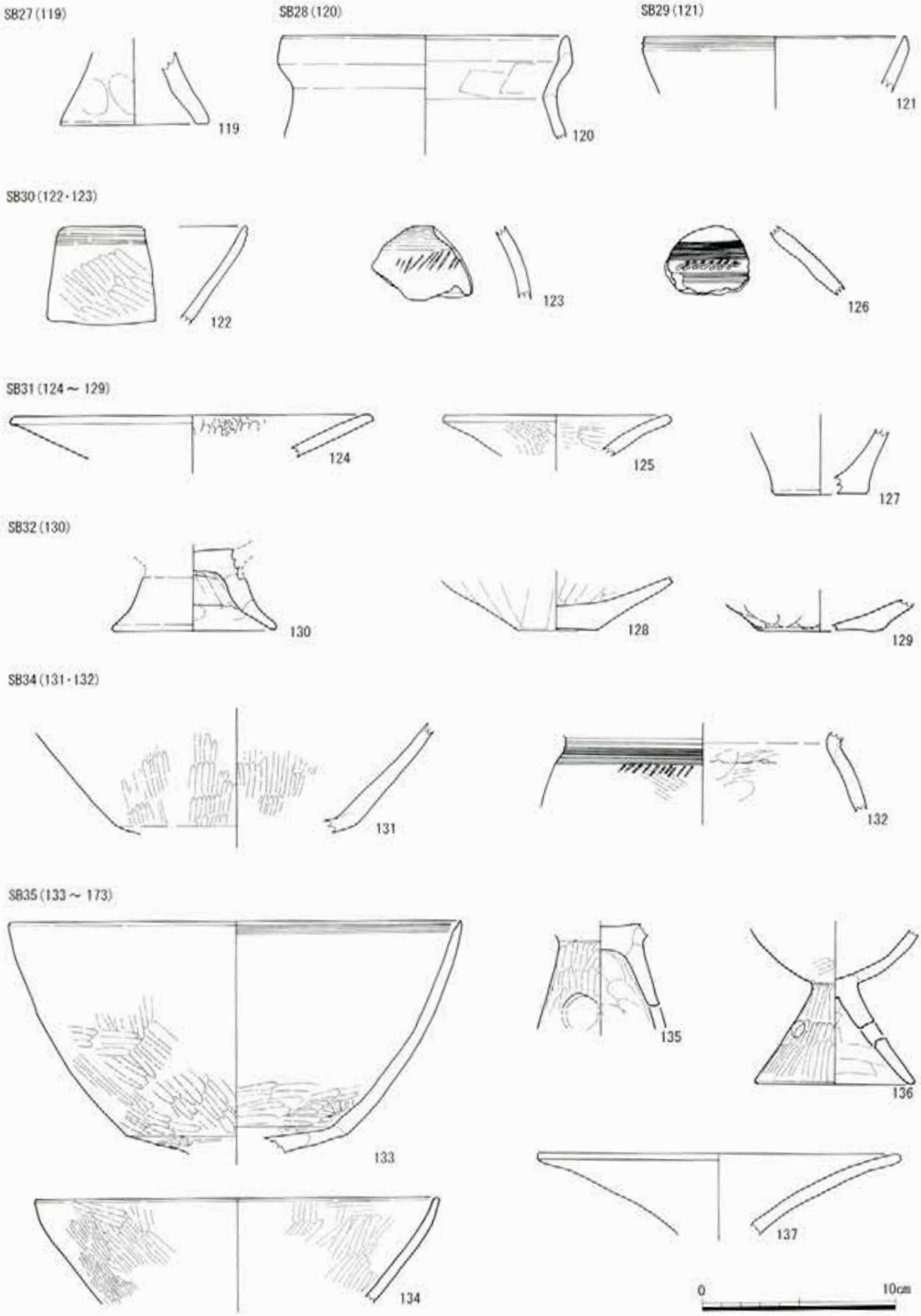


図139　住居跡出土土器（８）

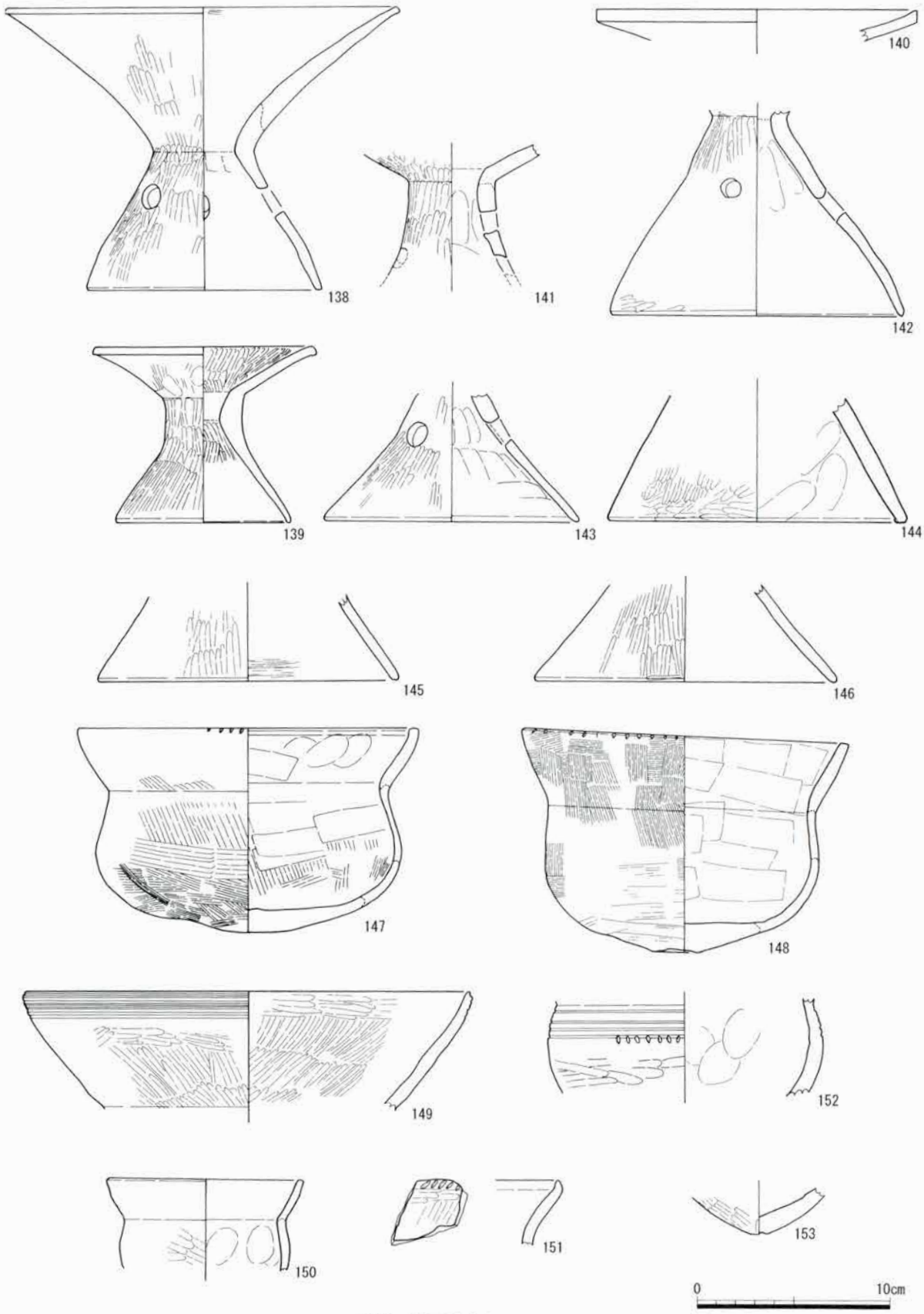


図140　住居跡出土土器（９）

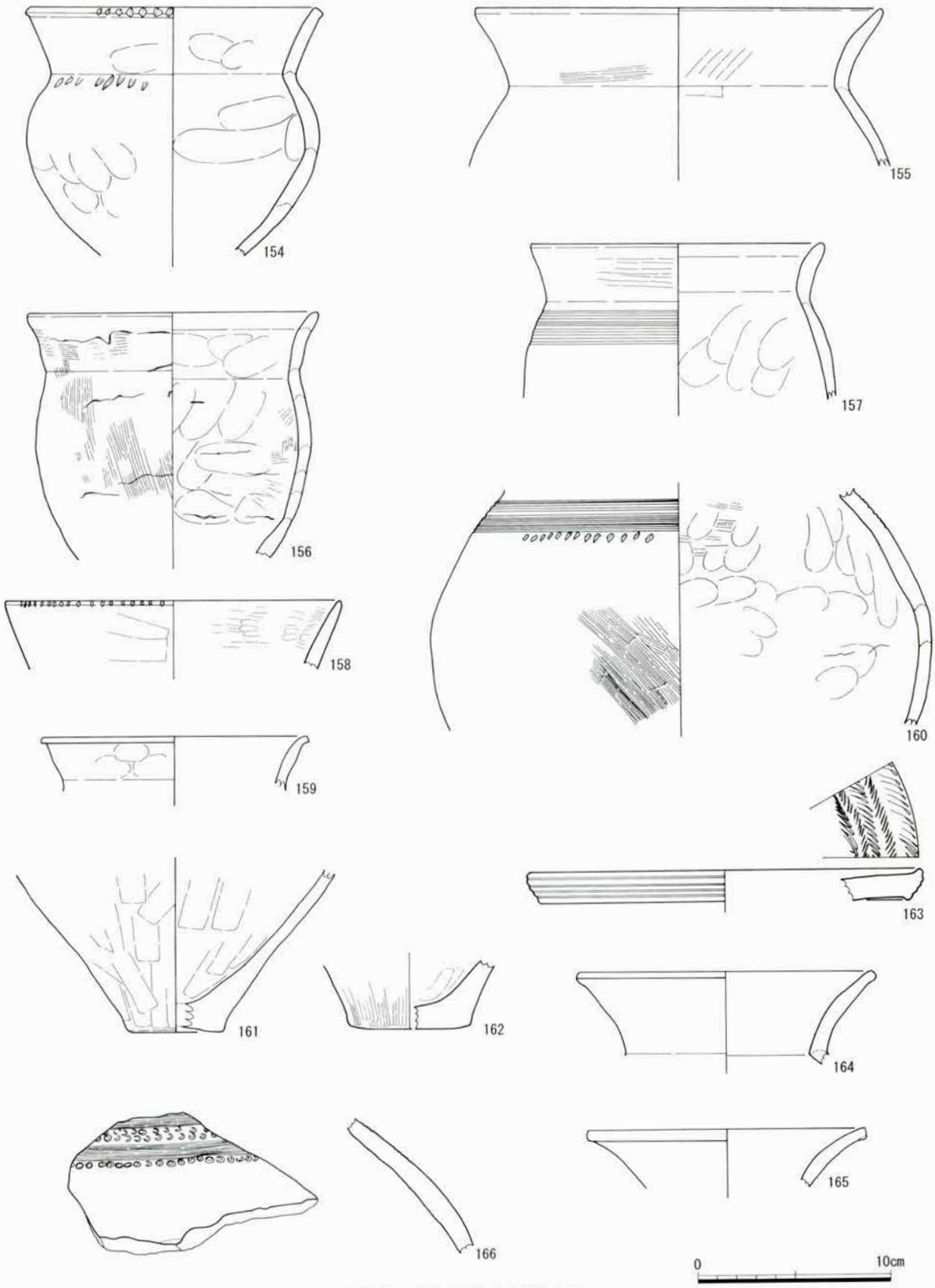


図141　住居跡出土土器（10）

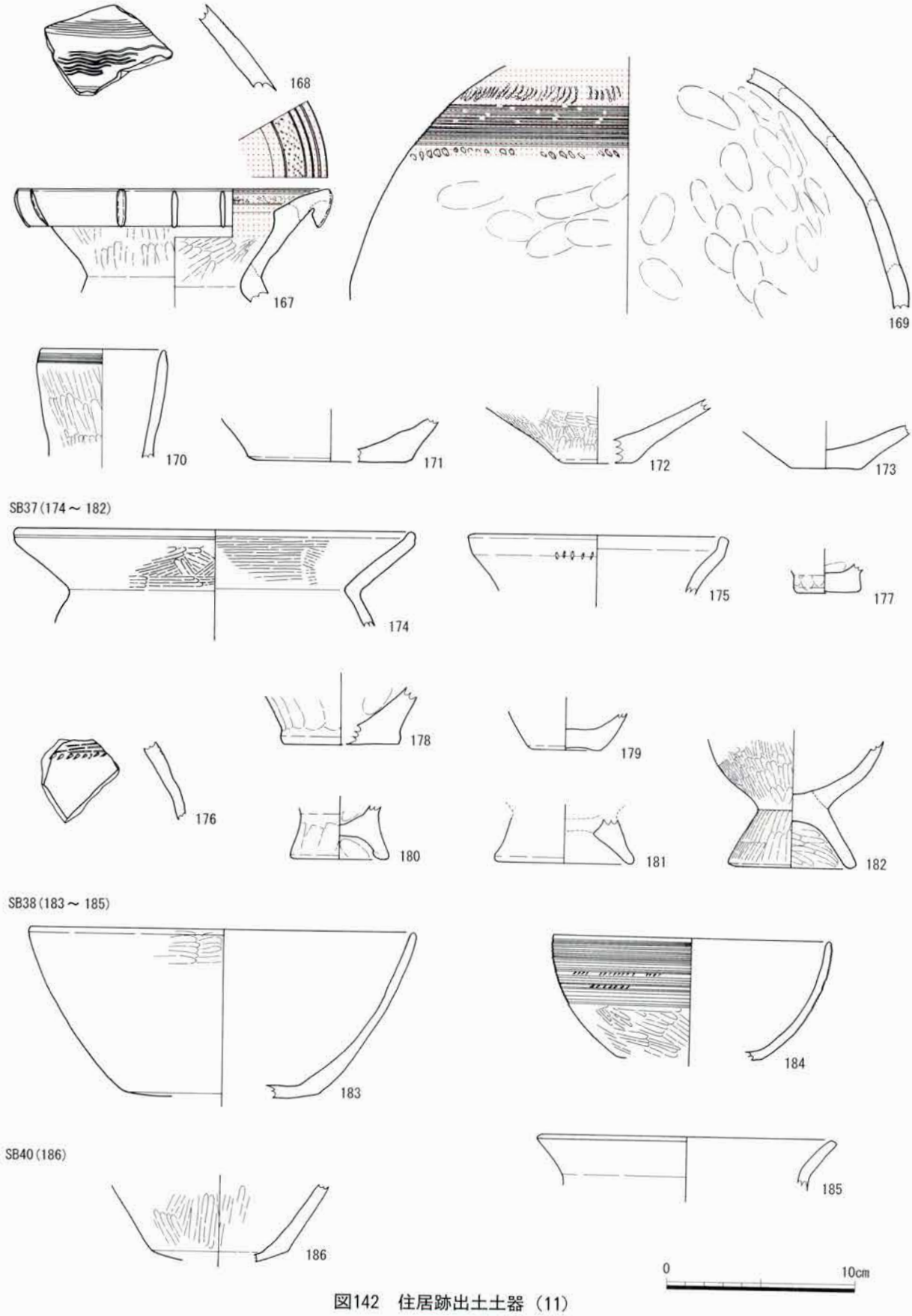


図142　住居跡出土土器（11）

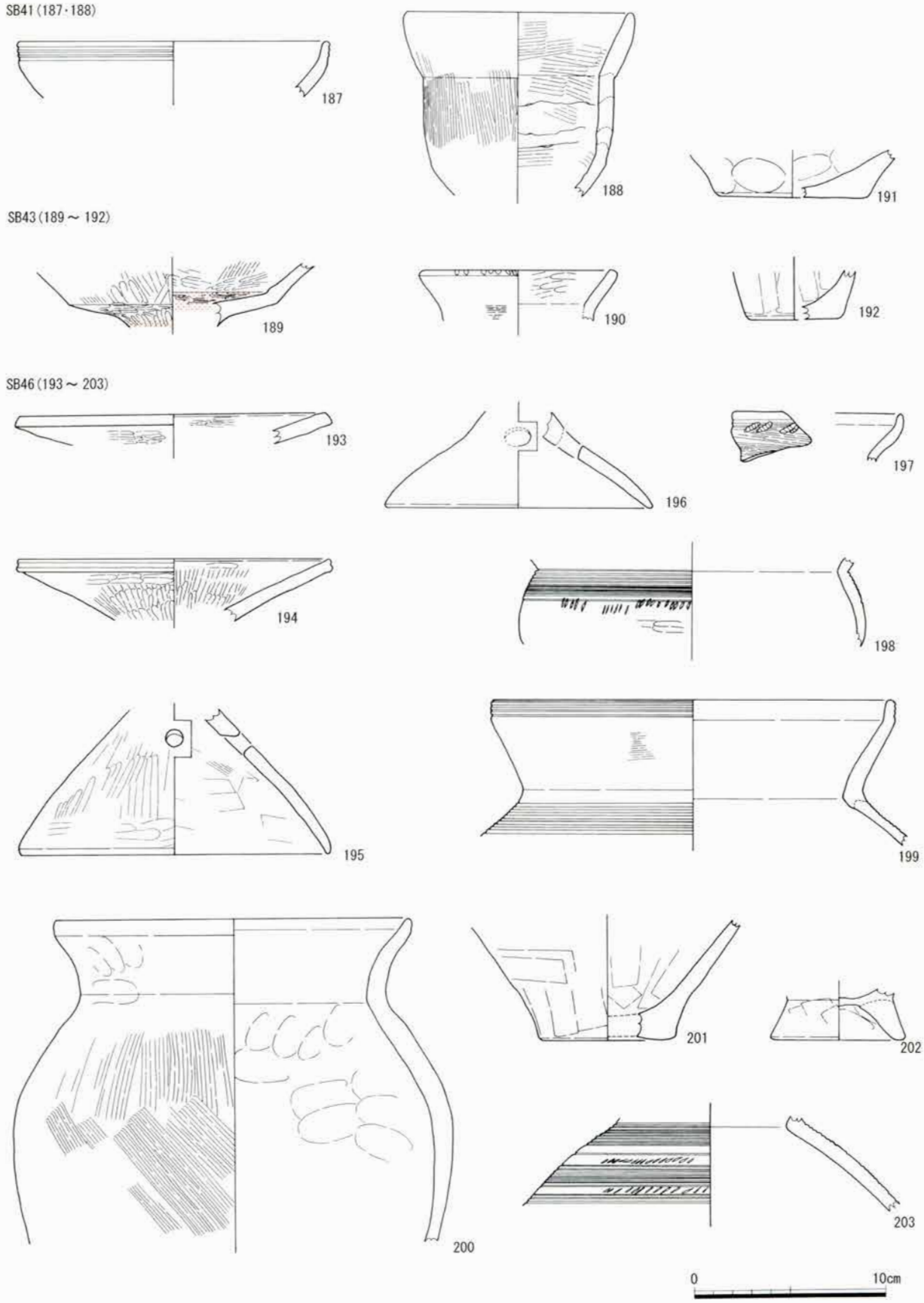
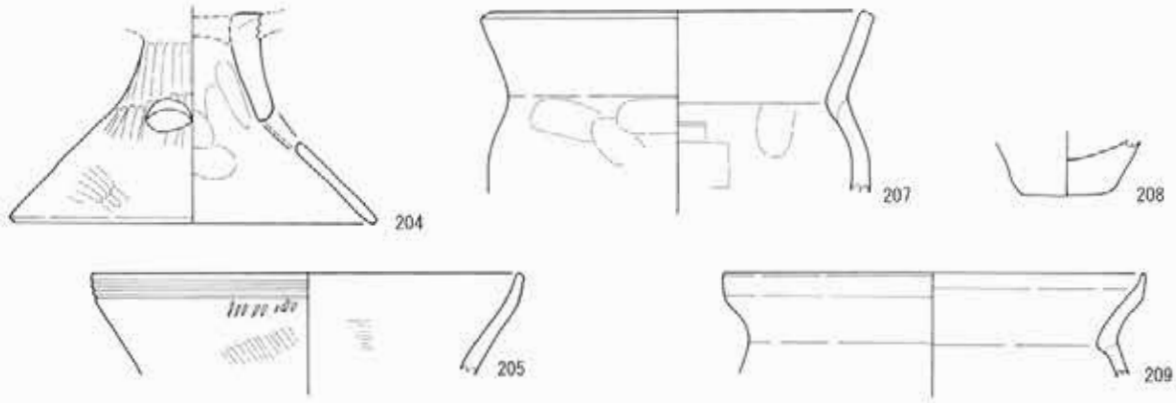
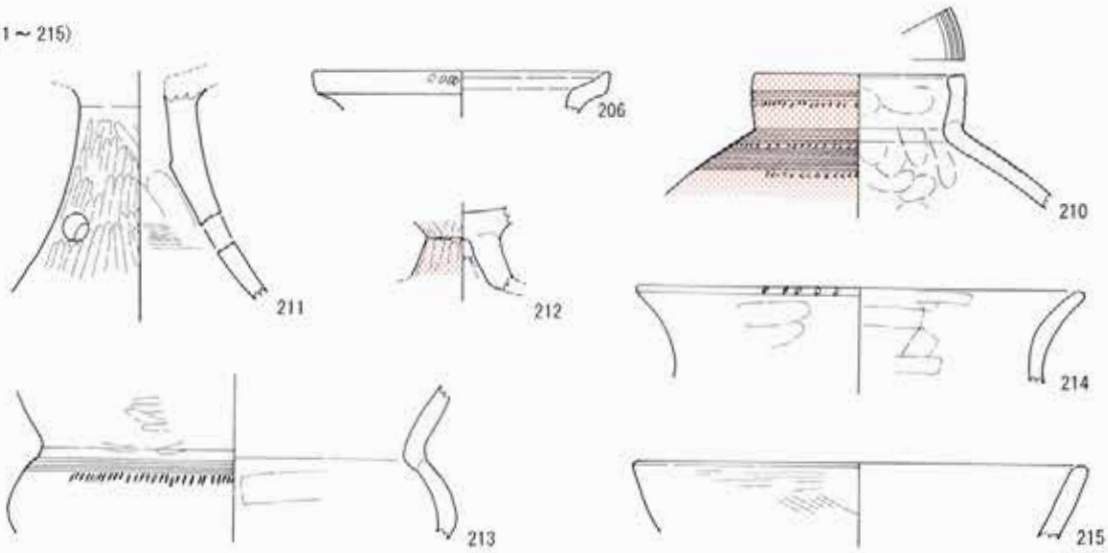


図143　住居跡出土土器（12）

SB47 (204 ～ 210)



SB48 (211 ～ 215)



SB50 (216 ～ 223)

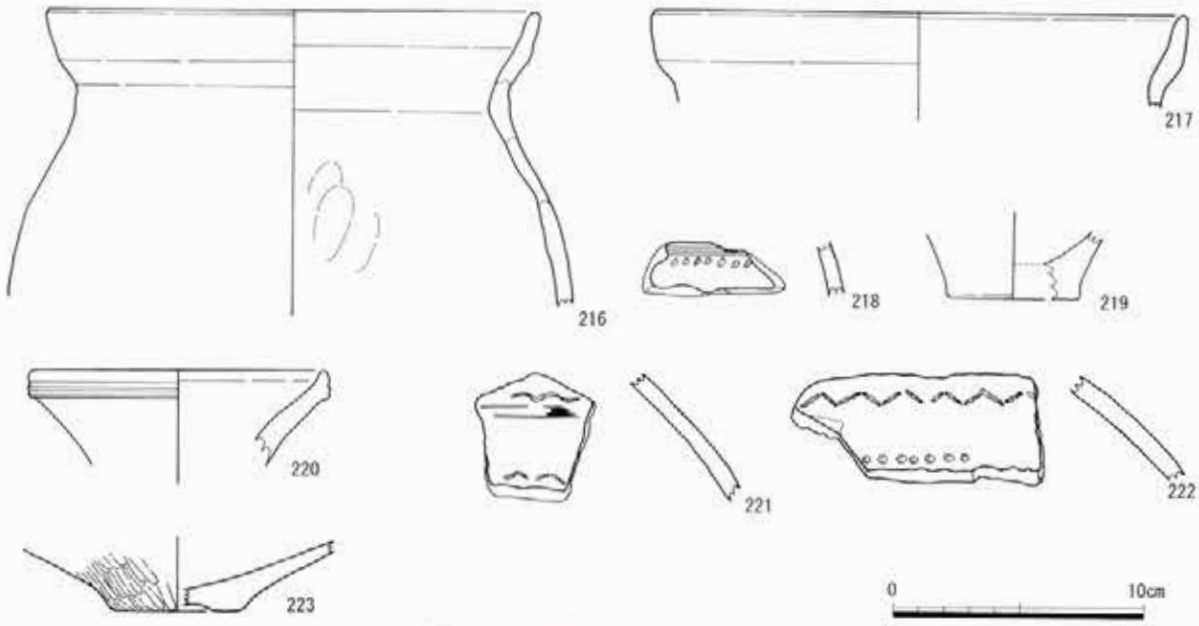


図144　住居跡出土土器（13）

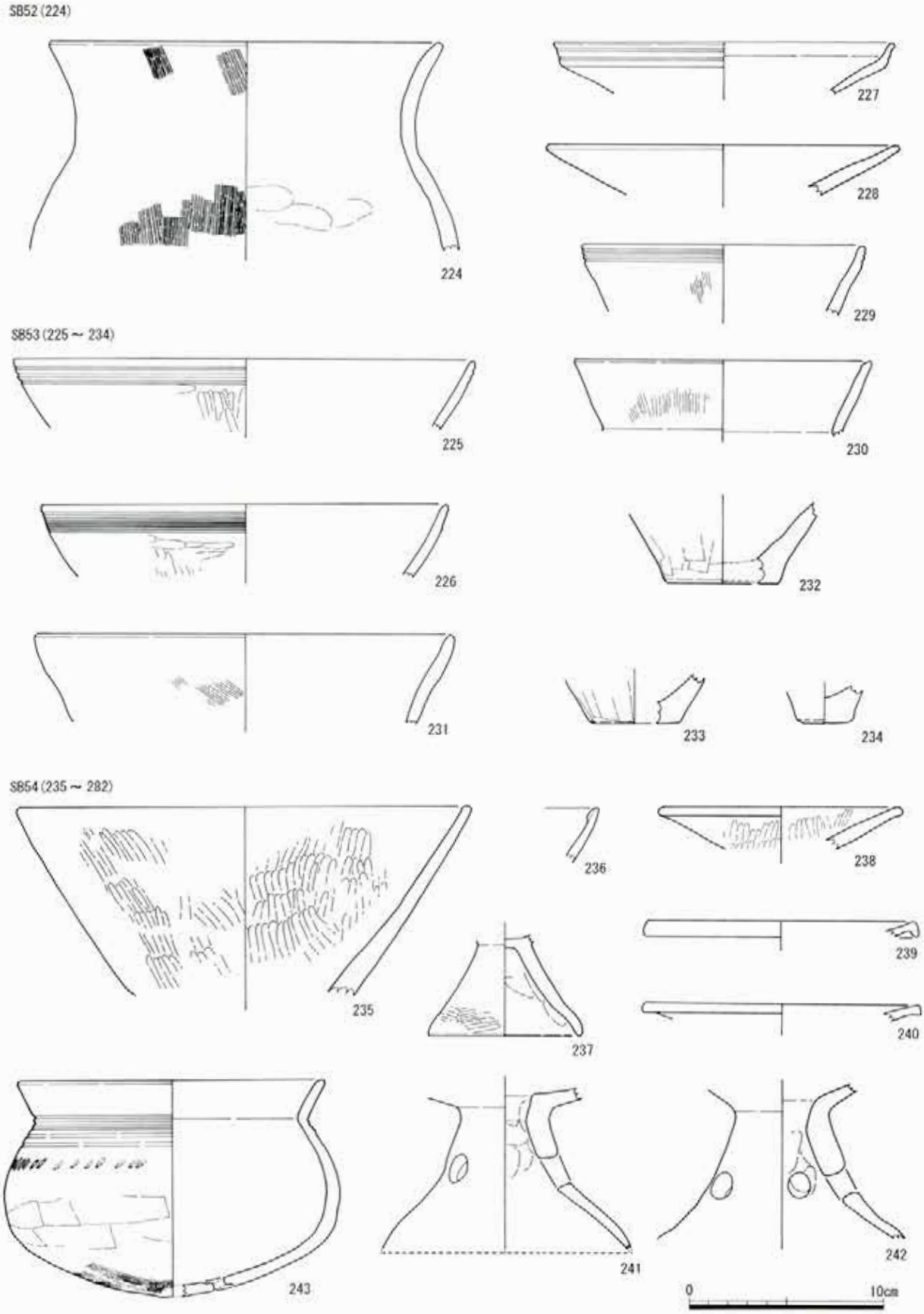


図145　住居跡出土土器（14）

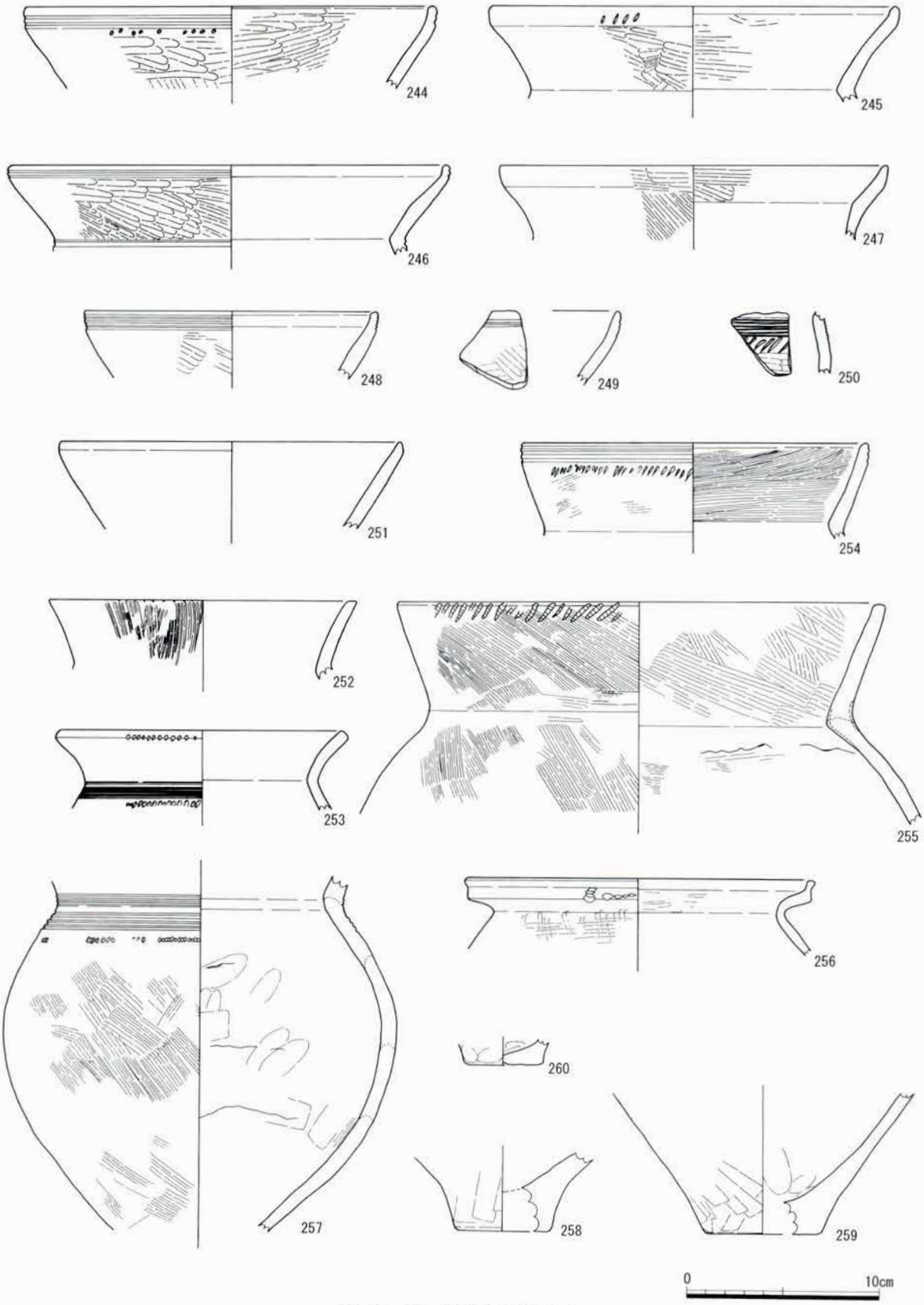


図146　住居跡出土土器（15）

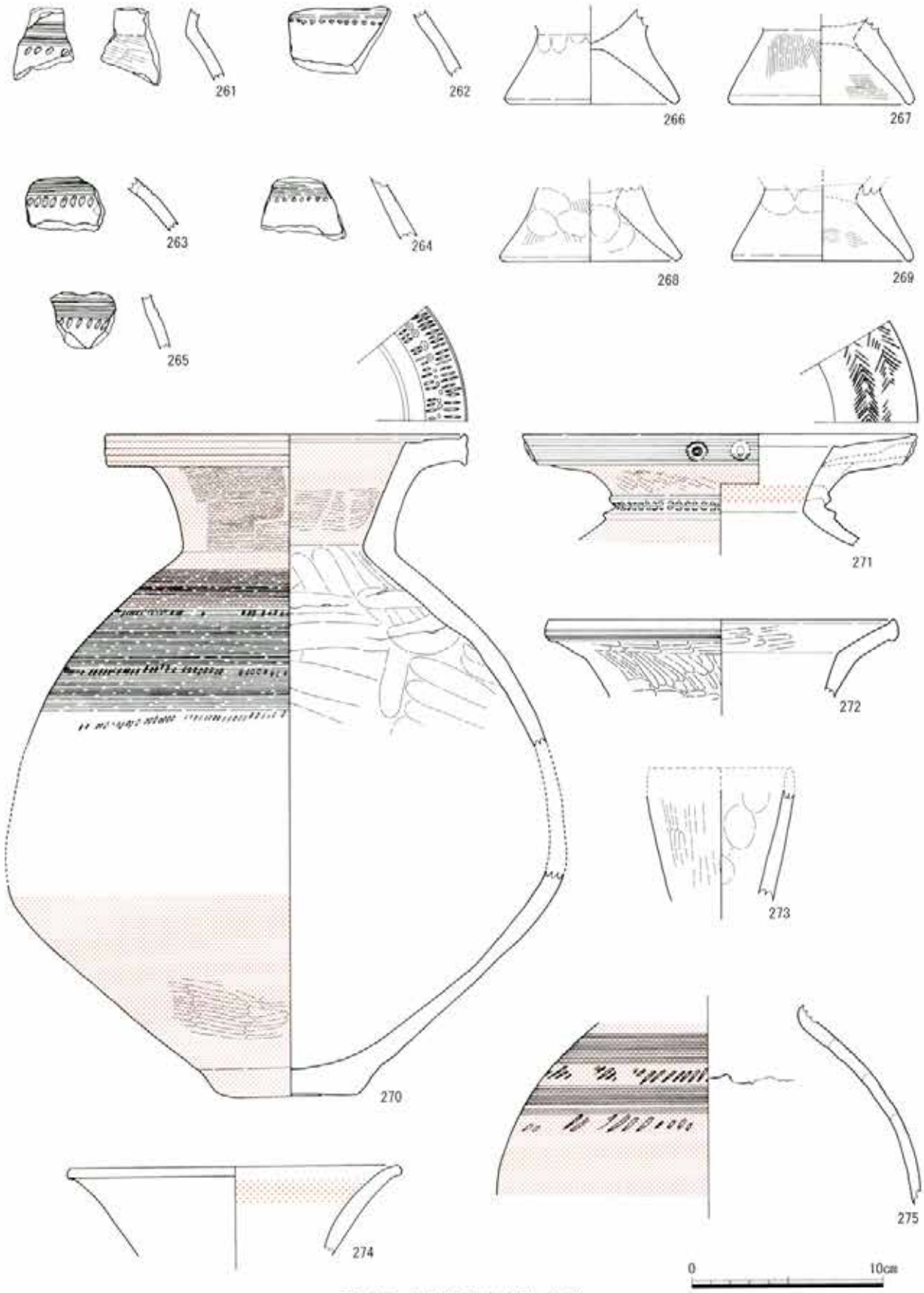


図147　住居跡出土土器（16）

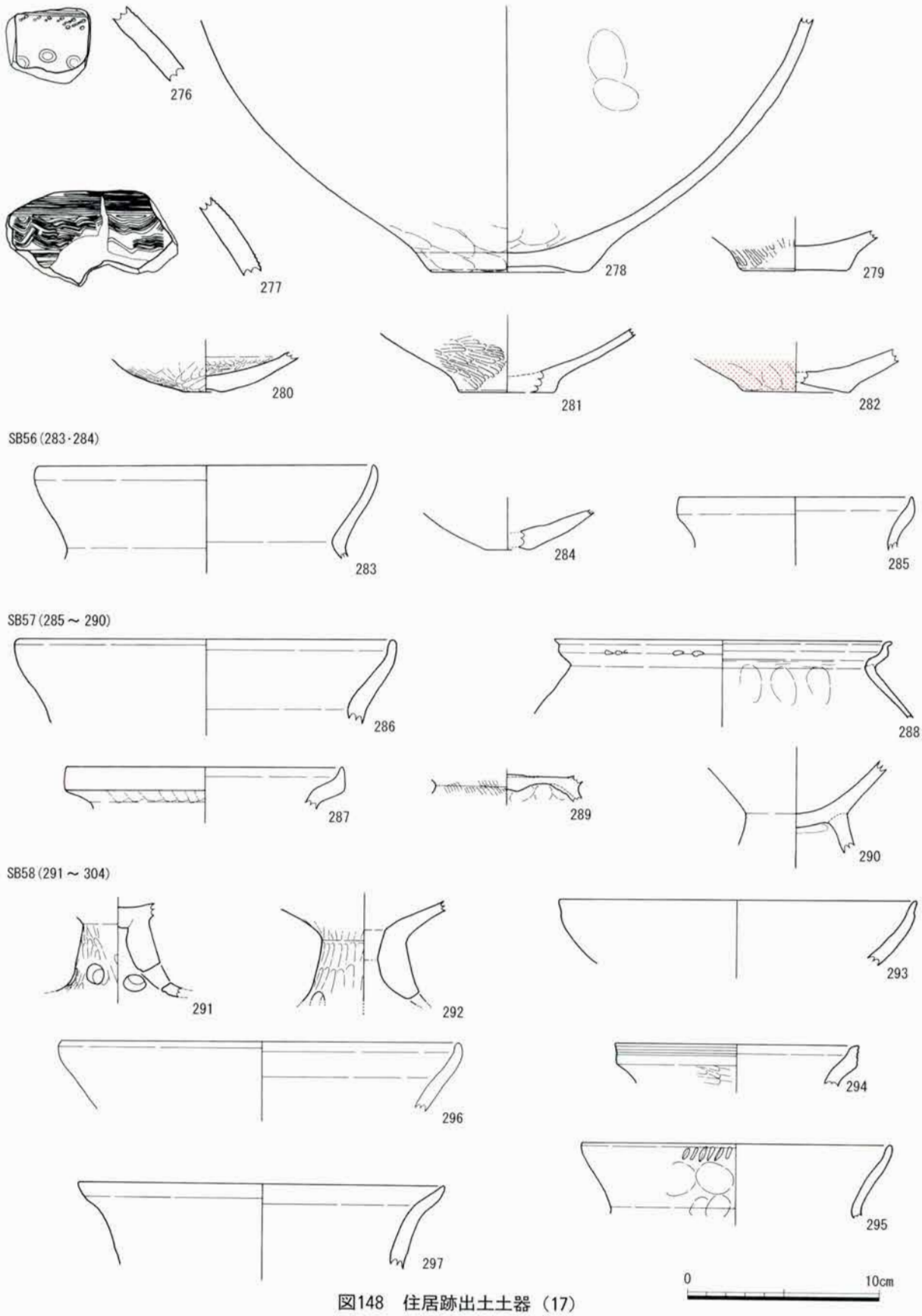


図148　住居跡出土土器（17）

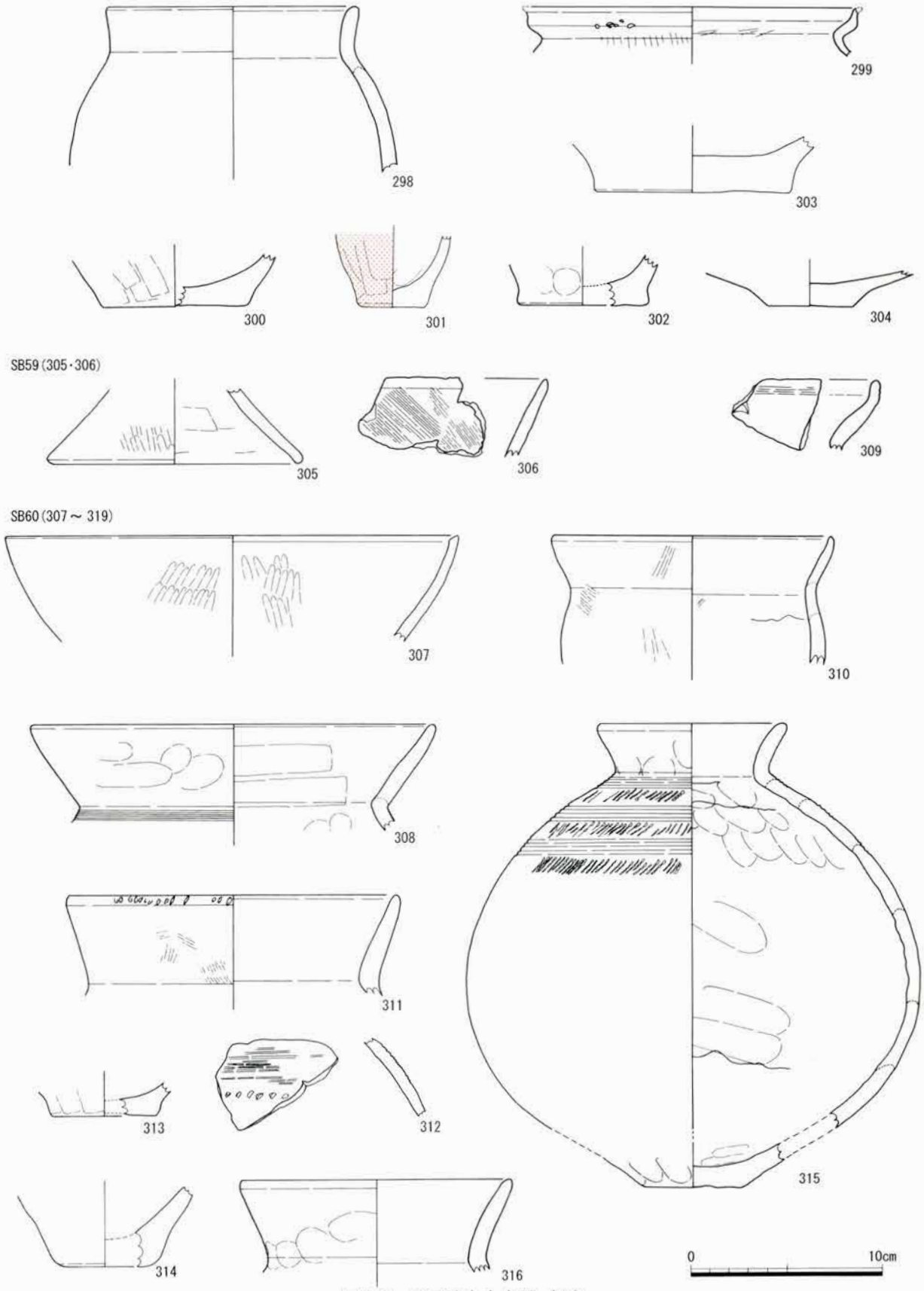


図149　住居跡出土土器（18）

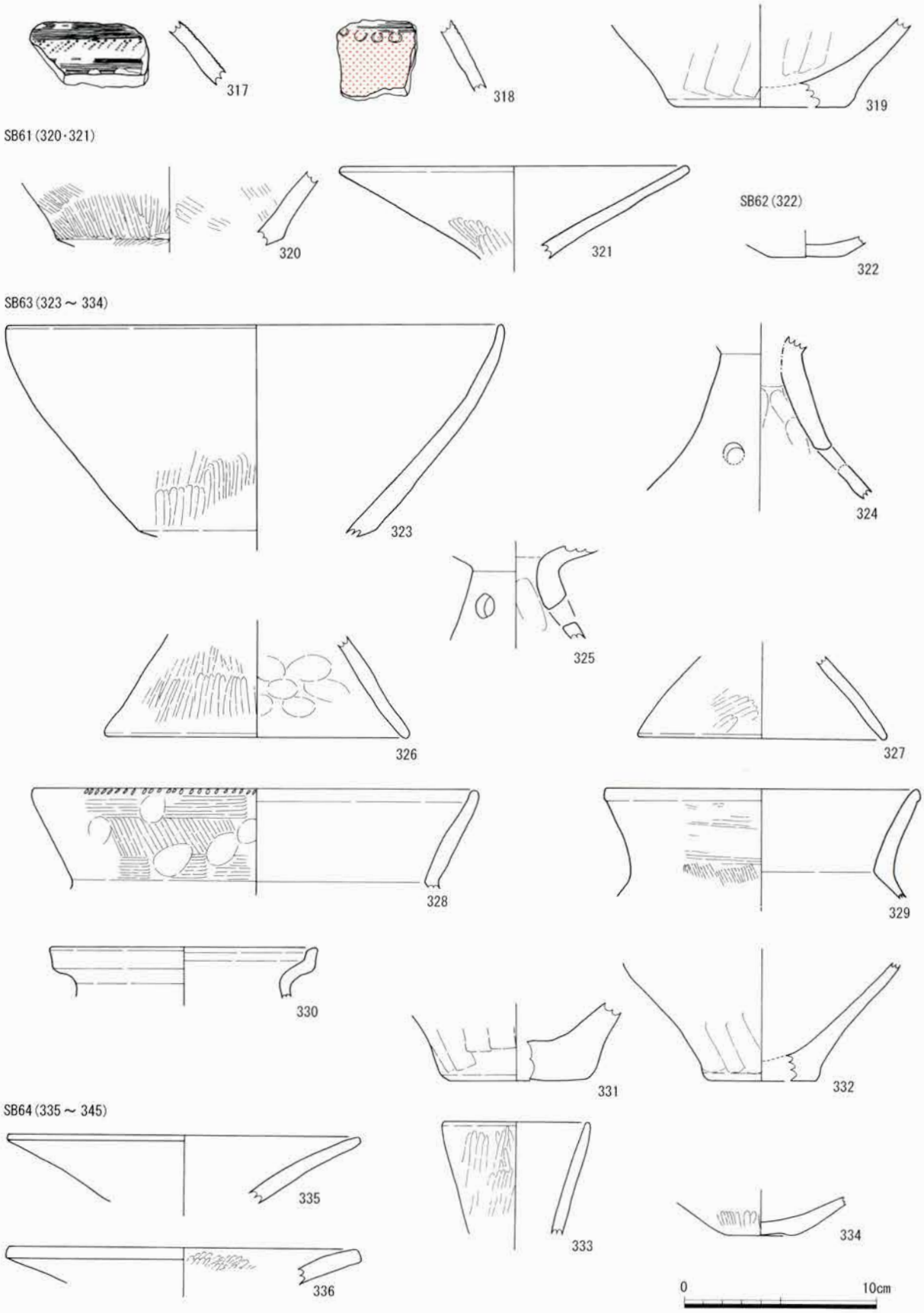


図150　住居跡出土土器（19）

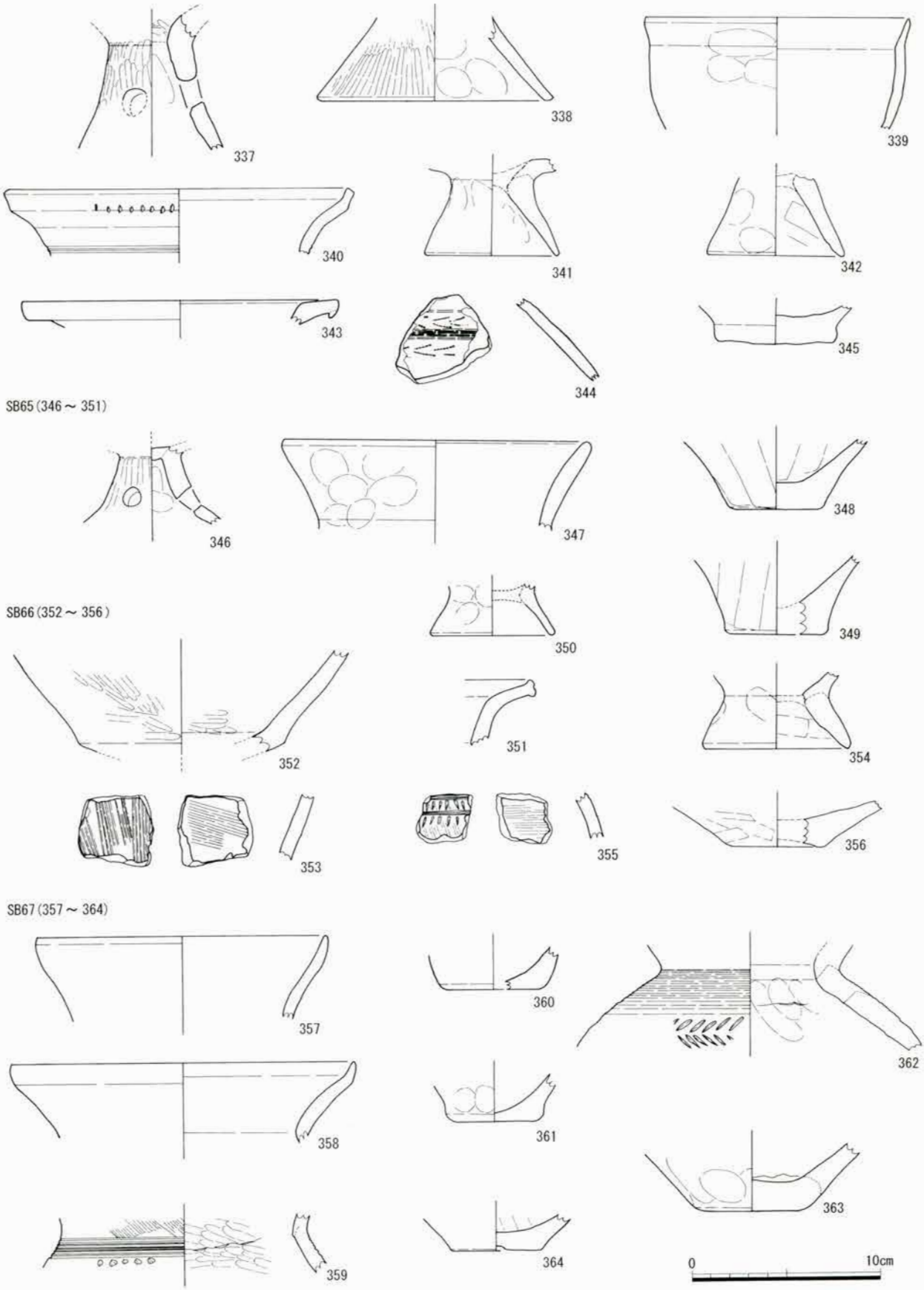


図151　住居跡出土土器（20）

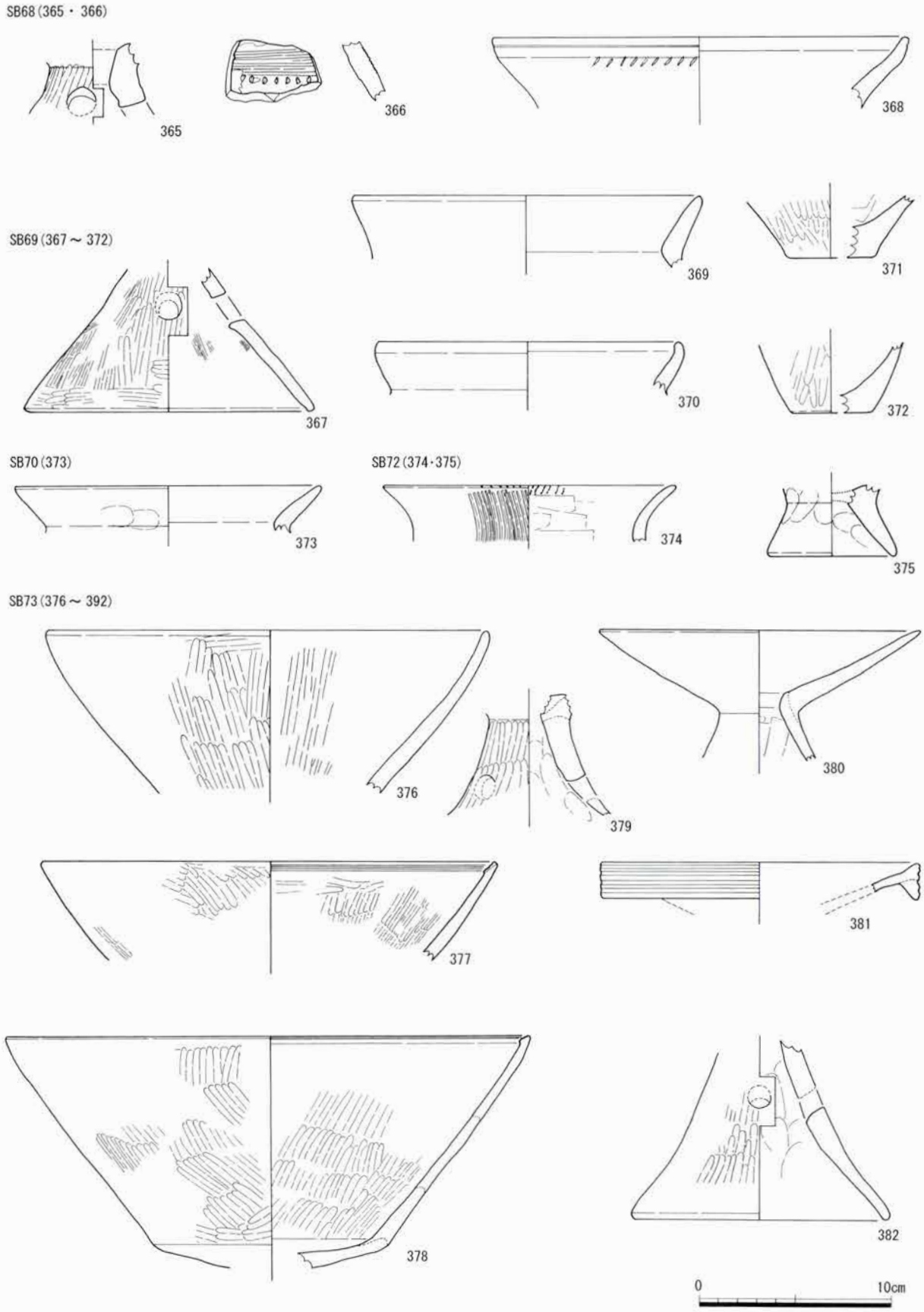


図152　住居跡出土土器（21）

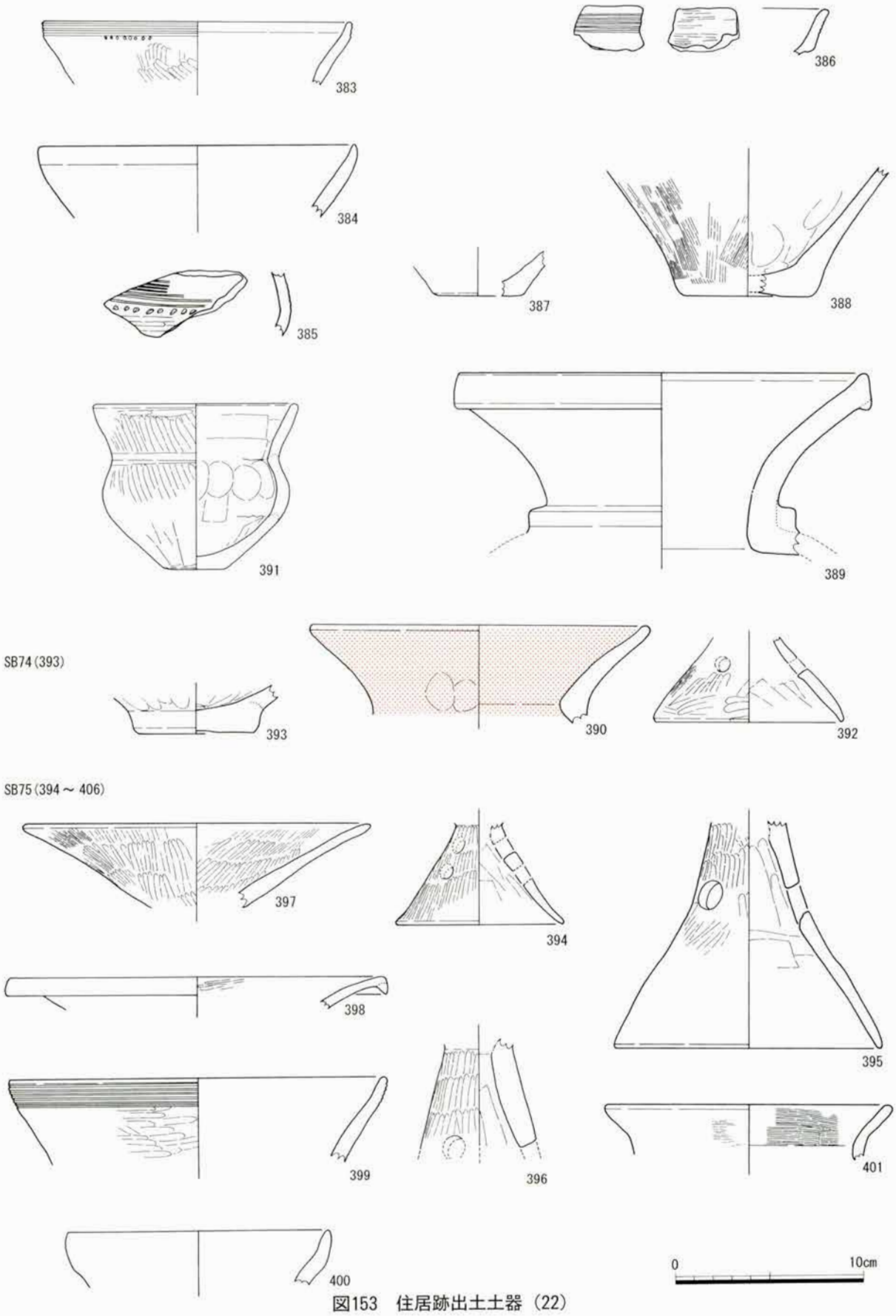


図153　住居跡出土土器（22）

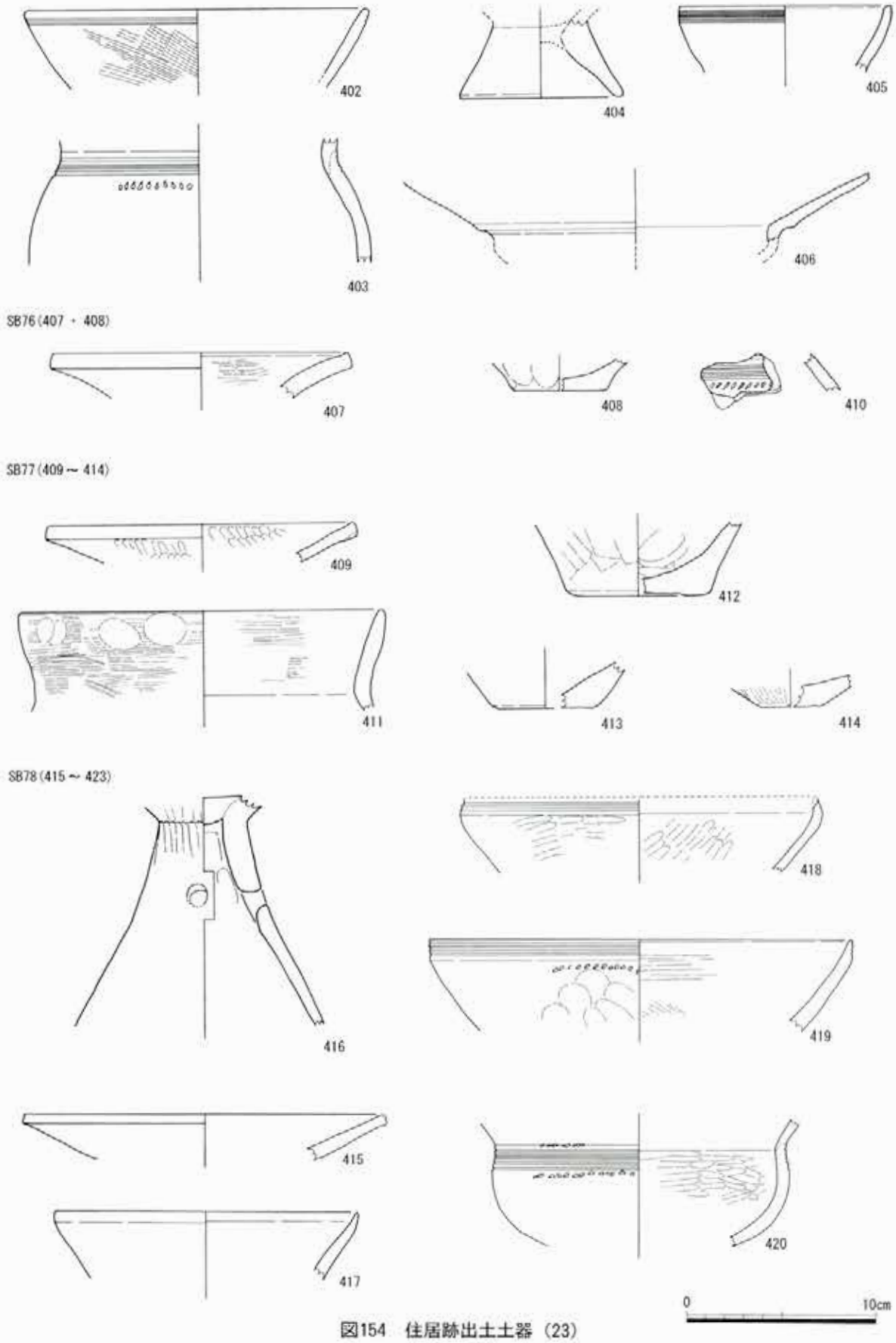


図154　住居跡出土土器（23）

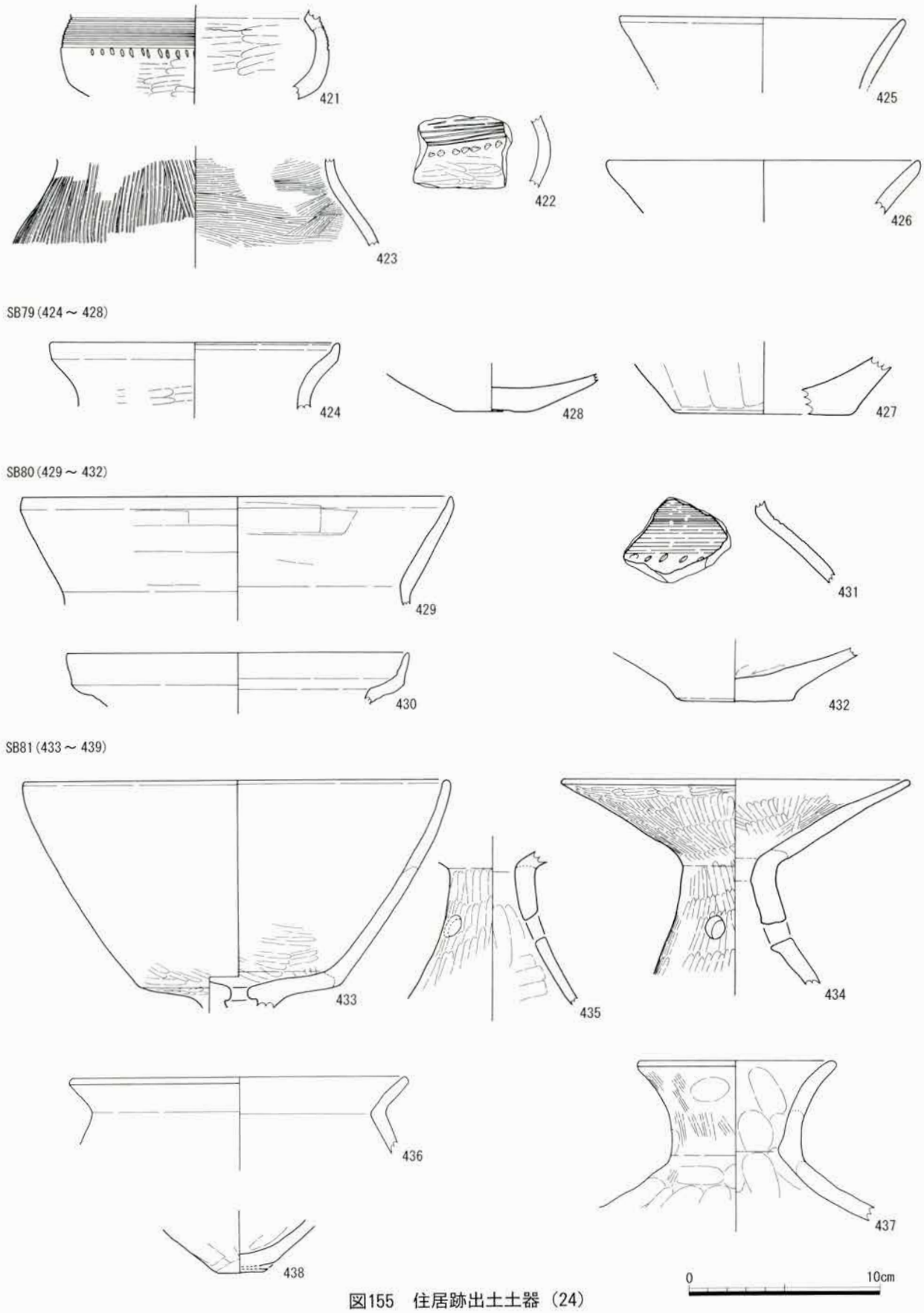


図155　住居跡出土土器（24）

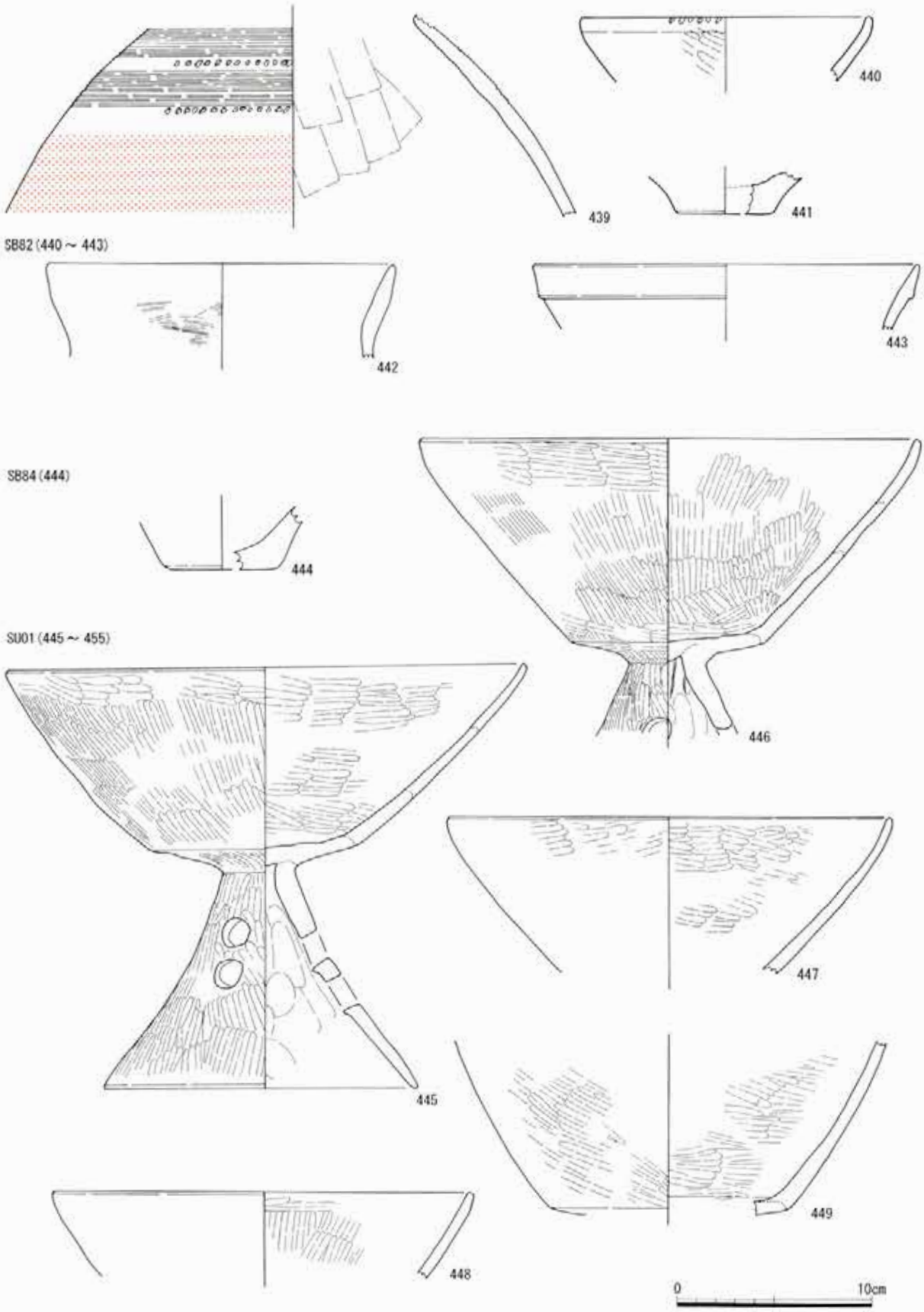


図156　住居跡出土土器（25）・ＳＵ出土土器（1）

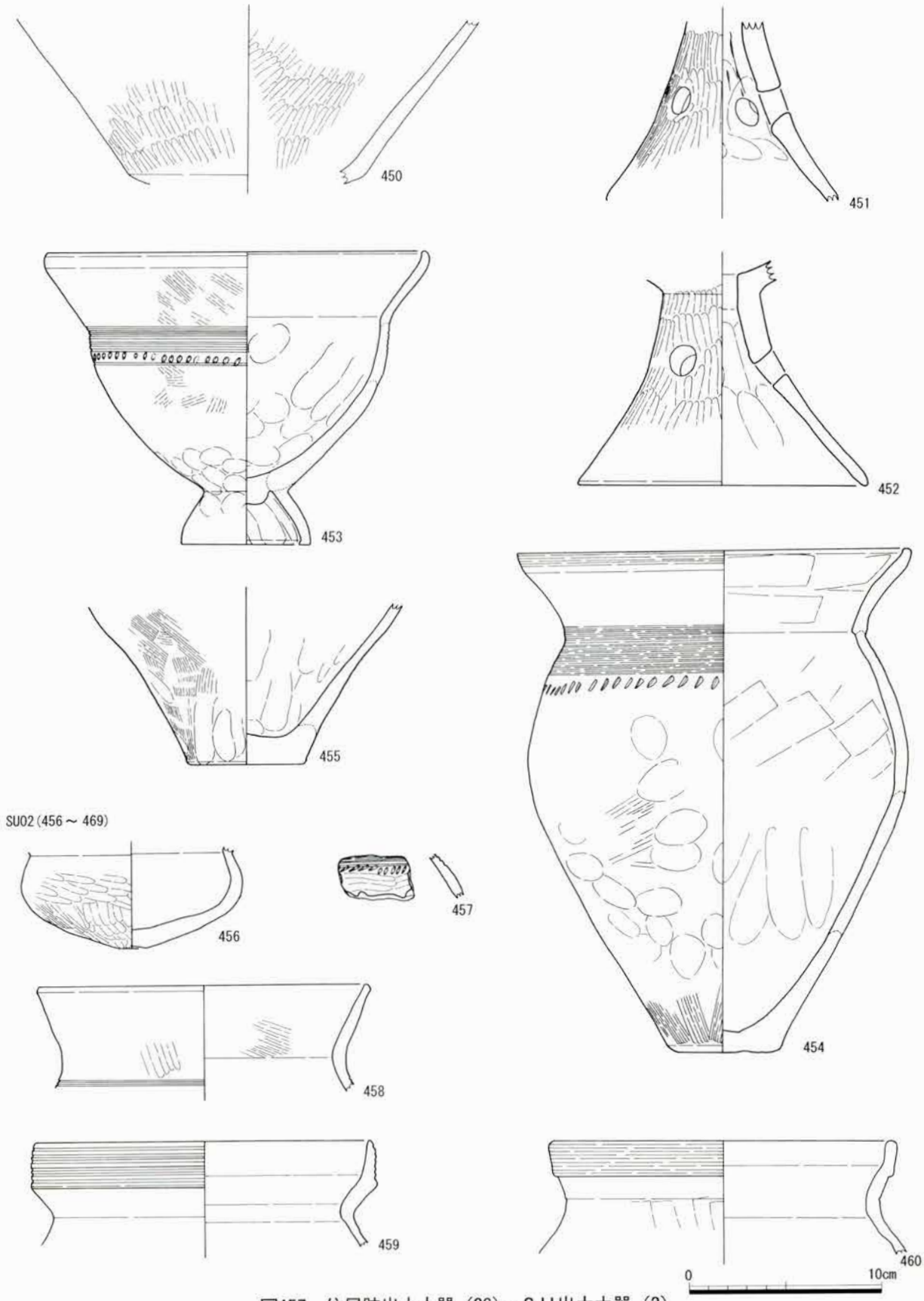


図157　住居跡出土土器（26）・ＳＵ出土土器（2）

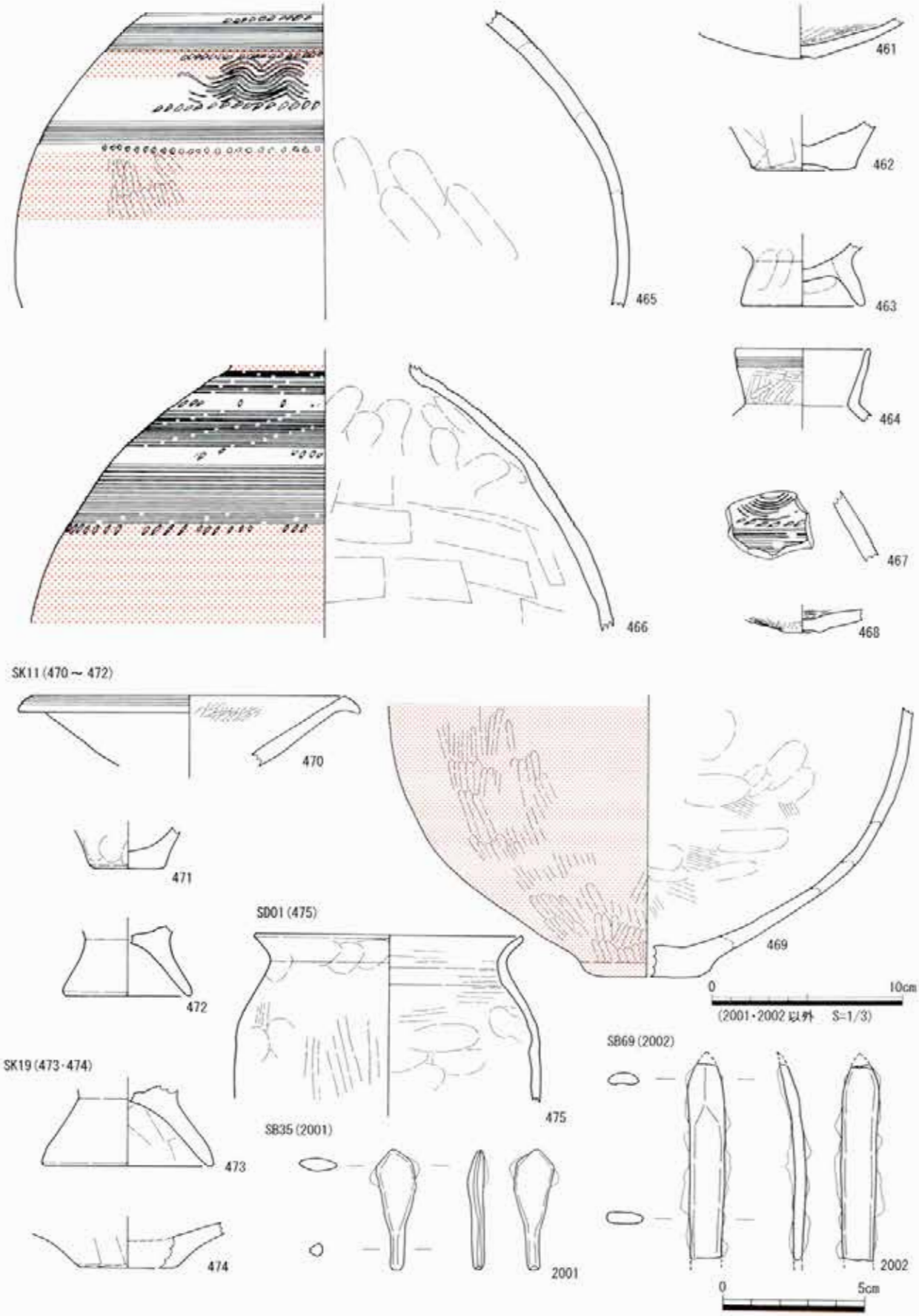


図158　ＳＵ出土土器（3）・ＳＫ及びＳＤ出土土器住居跡出土鉄製品

第2項　南青柳古墳と遺物

(1) 調査の経緯

当古墳は、平成7・8年度に行った試掘確認調査によってその存在が確認された。それ以前は、この地が、古墳あるいは遺跡であることを伺わせるような伝承や記録は一切無く、全くの新発見の古墳となった。試掘調査に先立って行われた平成6年度の分布調査では、眺望の優れた尾根頂部に低いものの円丘状の高まりが確認できることから、古墳の可能性が指摘された。それをうけて前述の試掘確認調査では、頂上部に十字トレンチを設定して盛土の有無の観察を行った。その結果、他の尾根頂部の試掘地点の、遺跡の存在しない箇所については、表土（腐葉土層）の直下は砂岩の岩盤であるのに対し、この場所には砂岩礫を含む黄褐色土が厚く存在し、それを主体としつつも、古式土師器片を包含する暗褐色土がブロック状に各所に認められた。このことから人為的に盛られたものであると判断した。また、試掘確認トレンチの墳頂部付近からは鉄板小片（後に盗掘坑埋土に残された短甲片と判明）が出土し、これも古墳であるという判断を補強するものとなった。古墳であることを想定し、主体部の検出も慎重に行なわれたが、後述のようにその検出は困難を極め、結局試掘確認調査時には主体部に関する情報は得られないまま、本発掘調査に委ねられることになった。ただ、トレンチからは一切石材は出土しなかったことから、おそらく主体部は石材を用いないものであると推定された。

発掘調査では、古墳の範囲が開発区域にすべて含まれるため、全面調査を行った。調査に際しては、試掘確認調査や調査に先立って行った地形測量によって得られた情報に基づき、周溝・前方部または造り出し部の有無の確認を行った。主体部は、石室でないことから検出が困難になることが予想され、多くの方々からの指導を得て、調査を進めることにした。尾根頂部に存在する遺構で、土砂の流出が激しく表土直下に遺構面が存在することから、調査は全て人力で行うことにした。

(2) 調査前の状況及び古墳の残存状況

分布調査の際の墳丘とその周辺は、松を主体とする雑木林と北谷から伸びる竹林に覆われ、伐採前は見通しの利かない状況であった。

調査に先立って調査範囲全体の伐採を行い、地形測量を行った（図159）。作成された地形測量図では、尾根の北側では海抜86.0mまでの等高線が尾根頂上部で弧を描いて収束し、それ以下の等高線は高度を下げるのにしたがって、北東方面や北西方面に大きく広がって行く様子が確認された。一方、南側は北側とは異なり、86.0m～86.75m間の等高線が、左右対称に近い形で方形の形状に巡る様子を確認できた。以上のことからこの古墳は恐らく86.0m～86.25mの等高線付近に墳丘の裾が存在し、南側には前方部あるいは造り出し部が存在する可能性が高いと推定した。

古墳の北側および東側はマウンドの傾斜角度も比較的高く、墳丘の残存状況が、相対的によいことが予想された。しかし、南側及び西側は盛土の流出が激しく、86.25mの等高線以下は表土直下に砂岩の岩盤が存在する箇所が多い状況であり、前方部または造り出し部が存在したとしても、盛土は全て流出してしまっている可能性が考えられた。

また、86.75mの等高線付近に約1m幅ほどのやや平坦な面が円丘を全周して巡り、それより上は傾斜角が大きくなる状況が観察できたことから、二段築成の可能性があると考えた。

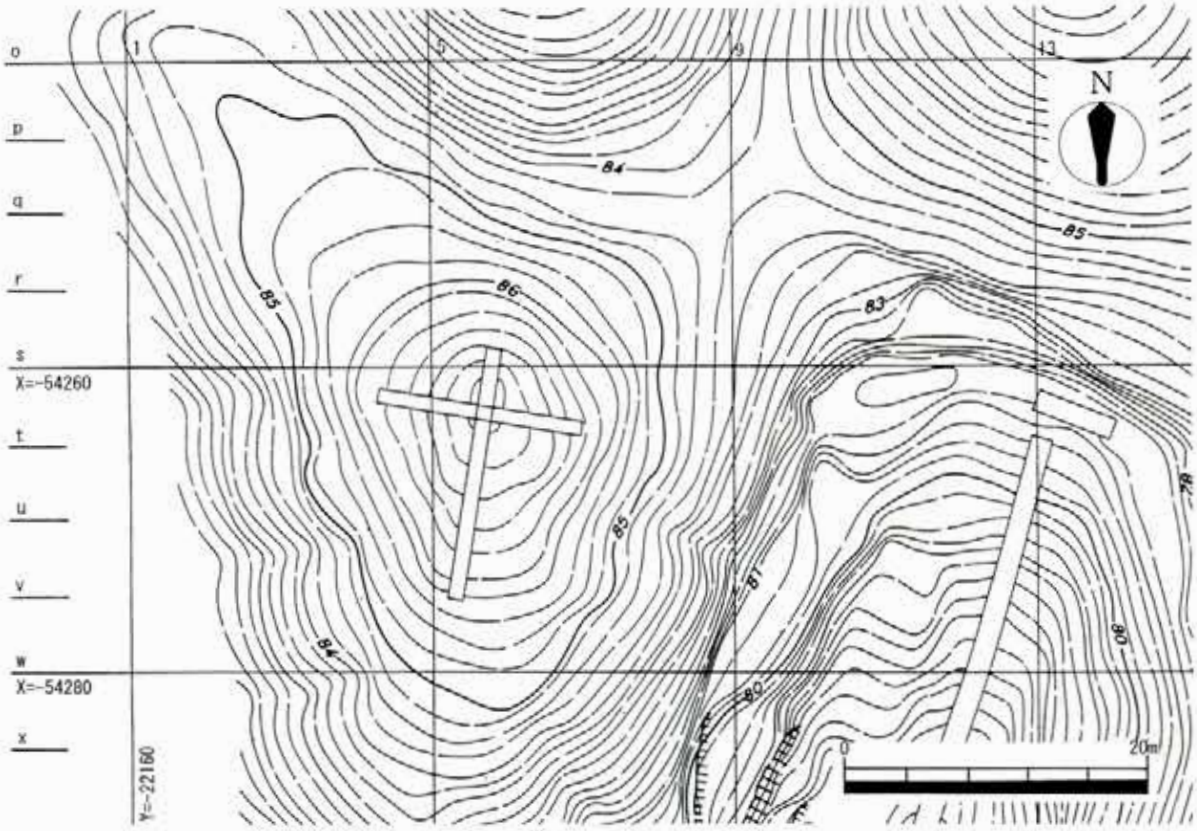


図159　南青柳古墳調査前地形測量図（1/500）

③ 古墳の立地（図159、図版14・15）

当古墳は、南青柳遺跡の南尾根頂上部に位置する。検出時の墳頂部の海抜は87.50mであり、当遺跡では北尾根頂上部（88.50m）に次ぐ高所である。西あるいは西南に広がる、下有知の水田や集落の展開する平野部とは、約20m～25mの比高差がある。立地する南尾根は、関市市街地が形成される平野部の北縁に東西に展開する丘陵地の西端部に突き出た尾根である。北々西に伸びる尾根と北々東に伸びる「北尾根」の分岐点に位置し、もともと自然に形成された円丘状の高まりがある地点を選地している。この両尾根にむかう鞍部を除けば周囲は急斜面で下り、尾根の南から西の端は、下有知の平野部の端と接している。低丘陵に立地しながらも南西側あるいは西側の平野部からは、明瞭にその位置を確認できたものと思われる。一方、古墳からの西あるいは西南方面への眺望を遮るものは何もない。西側は長良川まで続く下有知の平野部を見下ろし、西南方向には、弥勒寺（関市小瀬）の対岸にそびえる山王山（向山）の神南備型の山容を前立てとして、長良川の両岸に展開する丘陵部を見通すことができる。北には北尾根を経て、同様な立地にある砂行１号古墳を望むことができる。古墳の東側は尾根に連続して眺望が閉塞的である。

④ 墳丘の形状と規模（図160、図版15・16）

墳丘面を覆う表土・流土を全面に渡って除去した結果、円墳で、南側に造り出し部を伴う、造り出し付き円墳であることを確認した（図160・161）。

円丘部は、直径19.6mの正円形に近いものであったと考えられる。円丘部の北側及び東南側から造り出し部との接続部にかけて、墳丘の裾に沿って帯状の平坦部が確認できる。円丘の北西側では幅

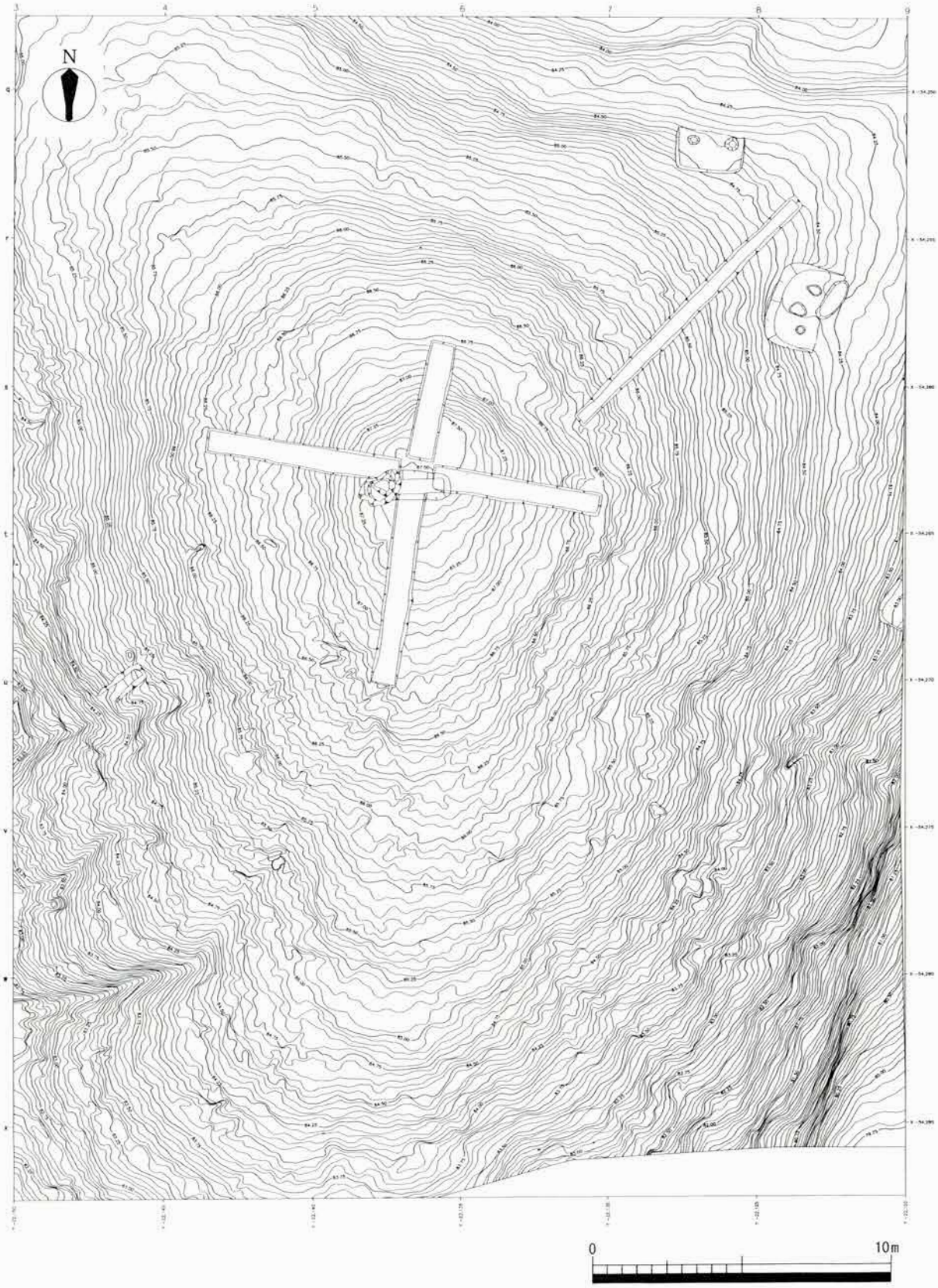


図160　南青柳古墳墳丘測量図（1/200）

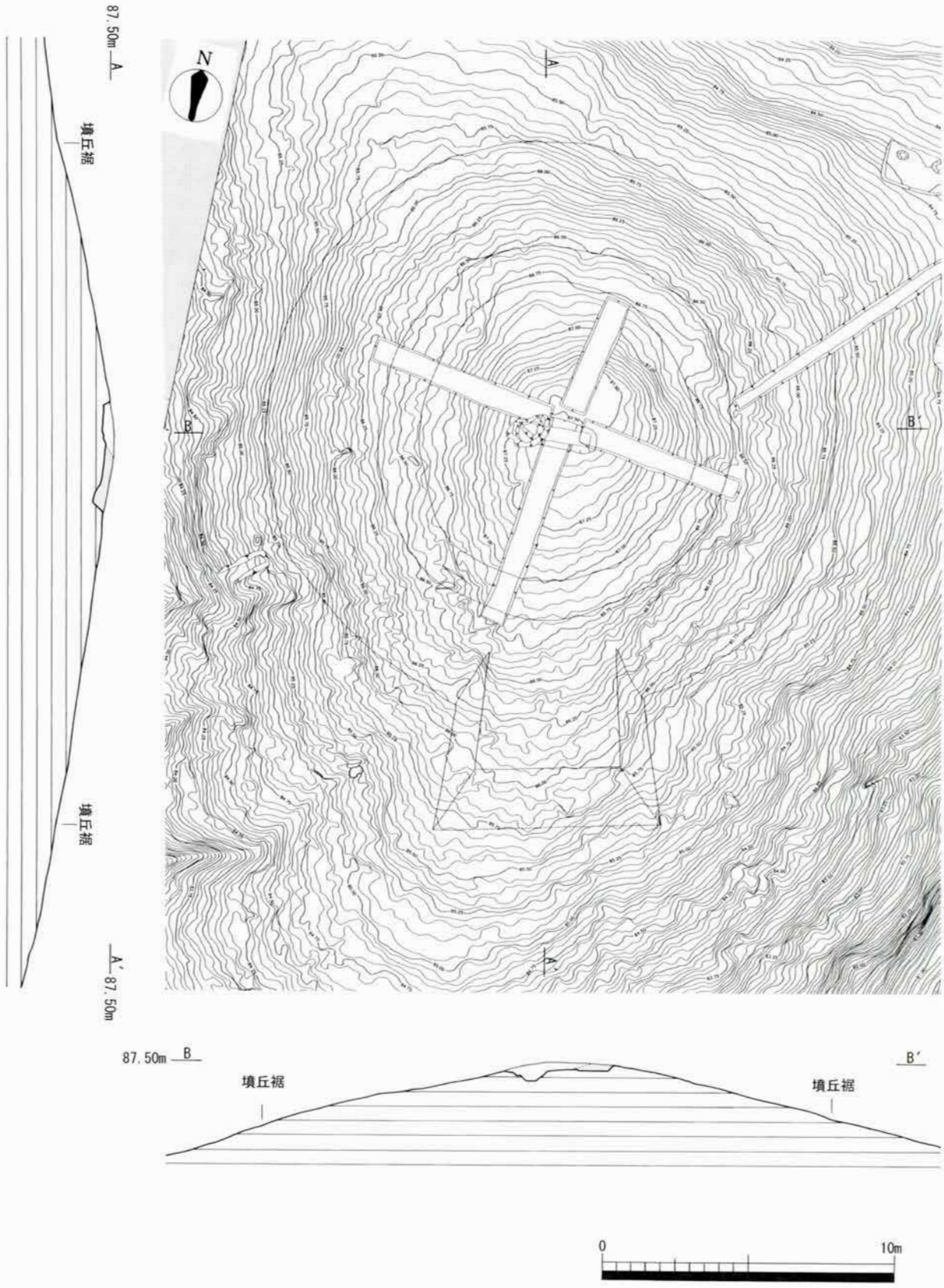


図161　南青柳古墳墳丘推定復元図（1/200）

1.4mほど、東側では80cm ほどの幅で巡り、墳丘の端部を明瞭にしている。恐らく流出の著しい西側や西南側でも本来は同様の平坦部が帯状に巡っていたものと思われる。

また、円丘の半径のおよそ1/2の位置には、東側の一部や南側造り出し部に連続する箇所がやや不明瞭なものの、幅1.2m前後の平坦部が円丘を全周する様子を確認できることから、この古墳は二段築成の墳丘であったと考えて間違いないと思われる。

墳丘裾を帯状に巡る平坦部のうち、北側の平坦部から測る墳丘の高さは、最大約２ｍとなる。しかしこの高さは盛土の流失後のもので、墳丘裾部の傾斜角が墳頂部まで変化しないと仮定して復元すると、墳丘高はさらに60cm ほど高いものと推定され、復元高約2.6mとなる。ただし、当古墳は二段築成の古墳であるため、第２段はより高く盛られていたことも考えられ、墳丘高はさらに高いものであった可能性がある。

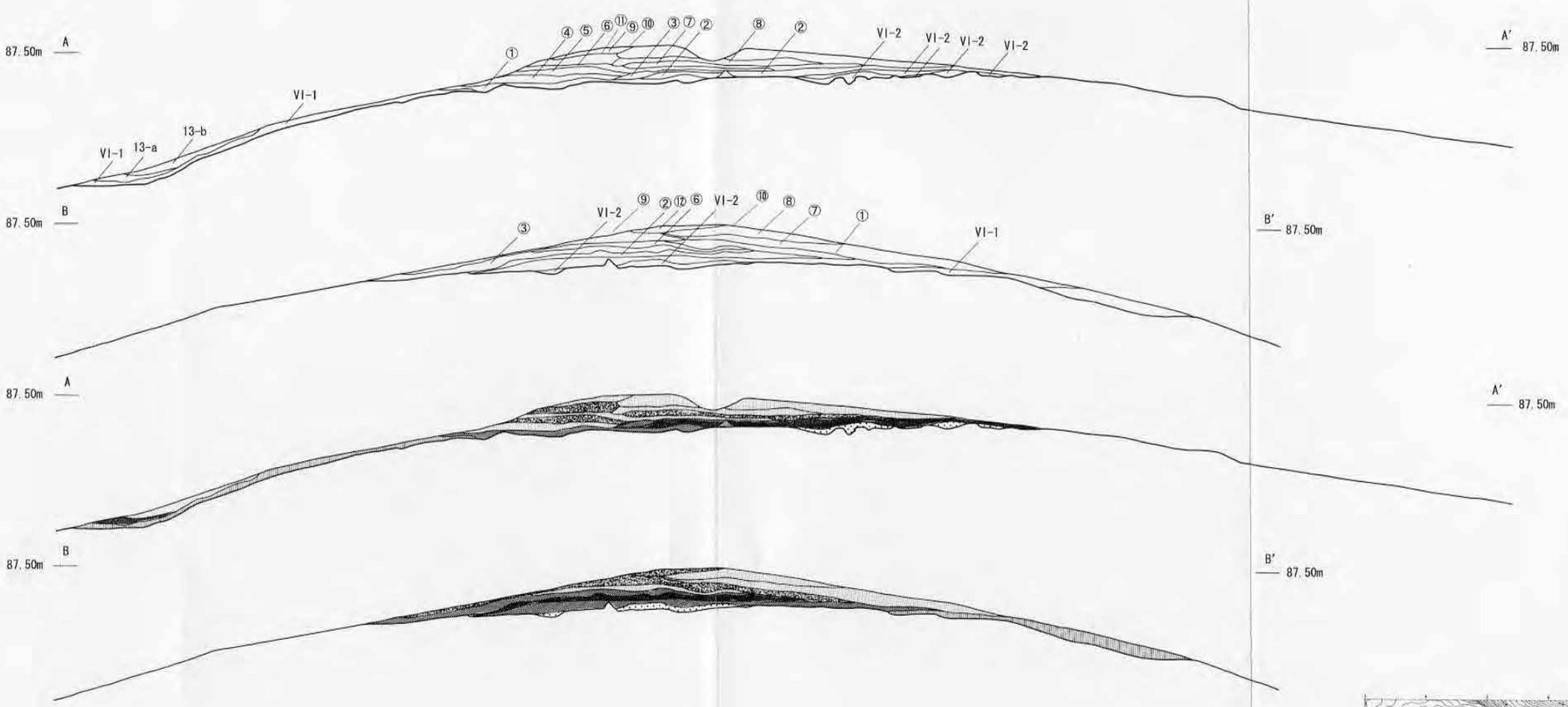
墳頂部は平坦面が形成されたものと考えられるが、盛土の流失によって斜面との境が不明瞭である。しかし、主体部が墳頂部平坦部内に収まると仮定したうえで、現況を考慮して墳頂部の大きさを復元すると、直径約５ｍとなり墳丘径の約1/4、２段目円丘径の約1/2となる。

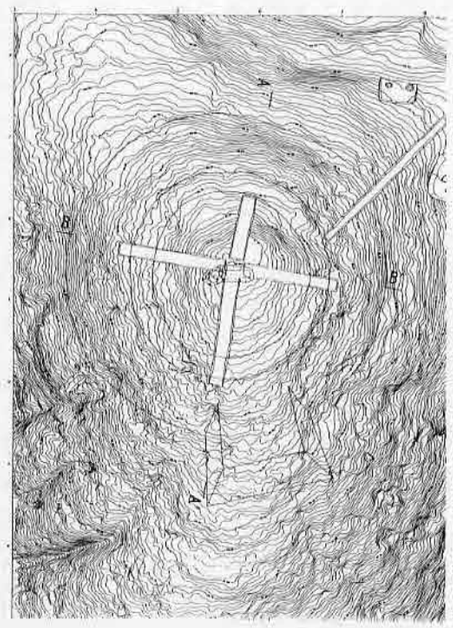
円丘を巡る帯状の平坦部の外側は、北西側では平坦な地形が連続し、南西側はゆるやかな傾斜、その他は比較的急な傾斜でくだる。周溝の有無を確認するため全て人力での掘削・検出を進めたが、尾根を断ち切るような周溝は、まったく認められなかった。

造り出し部は、墳丘裾部の南南東側に接続する。造り出し部の盛土は完全に流失し、全面に砂岩の岩盤が露出するが、幅約５ｍ、長さ約４ｍほどの方形を呈する平坦面の高まりが認められた。また、前述の墳丘の東南側の裾に沿って巡る帯状の平坦部（この平坦部は全面岩盤を削り出してたものである）は、そのまま弧を描いて西方に続かず、この方形の平坦面の接続部で屈曲し、方向を南に変えて伸びる様子を明瞭に確認できたことから、造り出し部が存在し、方形の平坦面はその基底部が残存したものと判断した。この造り出し部が接続する円丘南側は、特に盛土の流出が著しく岩盤が露出している。造り出し部と円丘部との接続状況は判然としないが、もし二段目テラスに接続するとすれば、検出した造り出し部に１ｍ20～30cm の盛土が必要となり、強度や祭祀の場としての機能面で問題が生じることになる。したがって、方形な平坦部の削り出しの痕跡（傾斜角の変換点）を観察しながら、図161のように１段目の中位に接続するものと推定した。造り出し部の最終的な復元値は、円丘部との接続部の幅6.5m、南西に向かってやや開いた端部の幅は8.0m，長さ6.0mほどであり、台形を呈していたものと推定した。高さは東側接続部で平坦部から45cm を測るが端部では不明である。造り出し部の調査では、埋葬施設や祭祀の痕跡の検出につとめたが、認められなかった。なお、円丘部との連接に隆起斜道が存在したかどうかについては、造り出し部から主体部にかけて、等高線が南に張り出して巡ることから、その可能性がまったくないとは言えないが、判然としない。

⑸ 墳丘の築成（図162、図版17）

墳丘の断ち割り調査によって、円丘部の盛土は主として二段目平坦部以上に残存し、それより以下は、墳丘の北側裾部付近にわずかに確認できるのみであることが判明した。西側から南にかけてはほぼ全てが流出し、砂岩の岩盤が露出している。残存する盛土の土層観察から、墳丘の築成は、以下の手順で行われたものと推定される。





墳丘盛土の層序

① 7.5ＹＲ4/6　褐色土（7.5ＹＲ3/3暗褐色土を帯状に含む。1cm前後の砂岩礫を多く含む。しまり有り）
② 5ＹＲ4/6　赤褐色土（10ＹＲ5/6黄褐色土を多く含む。粘性やや有り。しまり強。1～2cmの砂岩礫を多く含む）
③ 7.5ＹＲ4/3　褐色土（3～4cmの角砂岩礫を多く含む。粘性やや有り。しまり強。炭小片を少量含む）
④ 10ＹＲ5/6　黄褐色土（7.5ＹＲ4/4褐色土を斑に少量含む。1～6cmの砂岩礫を多く含む。粘性やや有り。しまり強。炭小片を含む）
⑤ 7.5ＹＲ4/4　褐色土（10ＹＲ5/6黄褐色土を斑に少量含む。1～3cmの角砂岩礫を多く含む。粘性やや有り。しまり強。炭小片を多く含む。土師器小片を含む）
⑥ 10ＹＲ5/6　黄褐色土（3cm～4cmの角砂岩礫を多く含む。粘性やや有り。しまり強。炭小片を含む）
⑦ 7.5ＹＲ5/4　にぶい褐色土（3～4cmの砂岩礫を多く含む。しまりなし。炭小片を多く含む）
⑧ 7.5ＹＲ4/2　灰褐色土（10ＹＲ7/8黄橙色土を斑に含む。3～4cmの砂岩礫を多く含む。粘性なし。しまり有り炭は少ない。小片を含む。土師器小片を含む）
⑨ 7.5ＹＲ5/4　にぶい褐色土（1～3cmの砂岩礫を多く含む。粘性なし。しまり強。炭小片を多く含む）
⑩ 10ＹＲ6/6　黄橙色土（7.5ＹＲ4/2にぶい褐色土を斑に含む。1～5cmの砂岩礫を多く含む。粘性やや有り。しまり有り。炭小片を含む。土師器小片を含む）
⑪ 7.5ＹＲ4/2　灰褐色土（7.5ＹＲ7/8黄橙色土を斑に含む。1～4cmの砂岩礫を多く含む。粘性なし。しまり有り。炭小片を含む。土師器小片を含む）
⑫ 7.5ＹＲ5/4　にぶい褐色土（1～4cmの砂岩礫を多く含む。粘性なし。しまりなし。炭小片を多く含む。土師器小片を含む）
⑬a 7.5ＹＲ4/2灰褐色土（1～3cmの砂岩礫を多く含む。粘性強。しまり強。炭小片を多く含む）
⑬b 7.5ＹＲ4/6褐色土（7.5ＹＲ7/8明褐色土を斑に含む。粘性強。しまりなし）

Ⅵ－1　黄褐色粘質土（10ＹＲ5/6）
Ⅵ－2　明赤褐色粘質土（5ＹＲ5/8）

砂岩岩盤（5ＹＲ5/8明赤褐色を基調とする）＝a
地山（10ＹＲ5/6黄褐色を基調とする）＝b
地表起源（7.5ＹＲ4/3褐色土を基調とする）＝c
bとcの混和土（7.5ＹＲ4/2灰褐色ないしは10ＹＲ5/6黄褐色～6/6黄橙色）＝d
aとcの混和土（7.5ＹＲ4/4褐色ないしは7.5ＹＲ5/4にぶい褐色土）＝e
aとbの混和土（7.5ＹＲ4/6褐色ないしは5ＹＲ4/6赤褐色）＝f

図162　南青柳古墳墳丘断面図

1．野焼き

第一段階として盛土前には野焼きが行われたと考えられる。これは、盛土中に炭の小片が多く含まれていることから、そのように判断したが、炭を多く含むのは墳丘中位以上の盛土であり、基底部の盛土はむしろ炭を含まない。これについての解釈は後で述べる。

2．墳丘基底面・墳丘裾部の削り出し

野焼き後、墳丘基底面とそれに連続する二段目平坦面の削平と墳丘裾部の削り出しが行われたものと考えられる。造り出し部や墳丘の外側を帯状に巡る平坦部の形成もこの工程に含まれる。この作業により生じた土は、採取地点別に大別され、いったん墳丘築成予定範囲外へ運び出されたものと思われる。

3．墳丘基底面の整地

次に盛土作業が行われるが、これに用いられる土は、採取される地点の違いにより大きく以下の6種類に区分できる（図162）

a：砂岩の岩盤を起源とする明赤褐色（5YR5/8）砂岩礫混じり土

b：地山を起源とする黄褐色（10YR5/6）粘質土

c：旧表土を起源とする褐色（7.5YR4/3）土

d：bとcの混和土で灰褐色（7.5YR4/2）土ないしは黄橙色（10YR6/6）～5/6黄褐色土

e：aとcの混和土で褐色（7.5YR4/4）土ないしはにぶい褐色（7.5YR5/4）土

f：aとbの混和土で褐色（7.5YR4/6）土ないしは赤褐色（5YR4/6）土

まず、墳丘基底面とそれに連続する二段目平坦面に、cの旧表土を起源とする褐色土を用いて、薄く盛土（①）をし平坦に整える。この土には炭の小片は含まれておらず、野焼き後、炭を含む表層は削り取って別にし、ここでは炭を含まない表土の下層の土を用いて整地したと考えられる。

4．盛土作業

その後、まず西側に②③を、続いて北側に④⑤をほぼ水平に盛っている。これは前の工程終了後、西側や北側がやや低かったためであると思われる。②はf（aとbの混和土）の土で、色調は明るく、③はcの土で色調は暗い。④はdの土、⑤はeの土でいずれも混和土だが、a（砂岩の岩盤起源）とb（地山起源）のどちらを混和するかにより色調は異なり、前者を混入する場合色調は暗く、褐色を基調とし、後者を混入する場合は明るく、黄から赤色を帯びる。したがって、明るい色調の層と暗い色調の層が交互に盛られていることになる。また、前者は粘性が強い傾向にある。

⑥～⑫は、墳丘やや北よりの中央部付近を境に、dの土（bとcの混和土）とeの土（aとcの混和土）が交互に盛られている。いずれも炭小片を多く含み、野焼き後の炭を含む表層を多く混和する。また、⑥以上の土にⅡ期の土師器の混入が見られた。断ち割りトレンチ内のみの確認であるが、表層近くは、Ⅱ期の生活面であったことを物語る。なお、上層ほど色調の明暗が明瞭ではなく、土の混合が進んでいる。

墳丘二段目平坦面以下は、前述のように盛土がほとんど流出しており、その状況は判然としない。ただ、北側裾部には薄く盛られた盛土を確認できるが、これは盛土というより墳丘裾の整地といった性格のものである可能性が高いと思われる。この作業が行われたのは、⑬－aの土がfの土（aとbの混和土）で、盛土内では墳丘基底部近くにしか見られないことから、墳丘基底面の整地の前後であ

ろうと推測される。

墳丘全面に最終的に化粧土が薄く施された可能性は十分考えられるが、円丘部の盛土については、二段目平坦面、すなわち墳丘第２段のみに行われたと考える方が自然であるかもしれない。

⑥ 主体部（図163、図版17）

墳頂部のほぼ中央に主体部（木棺の痕跡）を検出した。西側を盗掘坑、東側及び南側の一部を試掘調査の際の東トレンチによって破壊され、残存状況はよくない。造り出し部の中央から円丘部の中心を結ぶ線を主軸とすると、主体部は主軸に直交する方向を長辺としているが、完全には直交せず、わずかに時計回りに南にふっている。

木棺直葬の場合、通常は長方形ないしは長楕円形の木棺より一回り以上大きい土坑を掘り、その中に木棺を埋設する。当古墳の場合、こうした土坑の掘り方は検出されなかった。これは土砂の流出が激しく、土坑掘り方を含む盛土部分は流失してしまったことによると考えられる。土坑底面は平坦であるものと、棺の安定を図るために、木棺を置く部分を木棺の形状に合わせて掘りくぼめているものとがあるが、おそらくこの古墳の場合は後者のタイプで、検出された木棺痕跡の外側は墳丘盛土であり、土坑埋土はごくわずかに木棺痕跡に沿って存在するにすぎない。

木棺の痕跡は、長辺の全長は不明であるが、残存部の長辺は最大で1.98mを確認できる。短辺は最大で1.02mである。ただ、木棺の底面の痕跡が西側では盗掘坑の西端近くに、また東側もトレンチ底面にかろうじて一部残存していたことから、長辺の全長はおおよそ推定でき、2.7m前後であったと考えられる。

主体部の検出は、墳丘盛土と主体部埋土との違いを土色では区分できず、困難を極めたが、包含する砂岩礫の大きさは、盛土内が５～10cmの砂岩礫を多く含むのに対し、主体部埋土は３cm角以内にとどまり、木棺を埋める際に大きな礫の排除がなされた可能性がある。また、砂質土の混入が認められた。しまりも主体部埋土の方がやや劣っており、これらの点から判断した。木棺痕跡の検出面からの深さは最大で22cmで、底面は平坦ではなく丸みをもち、割竹形あるいは舟形の木棺であった可能性が高い。出土遺物（後述）から、被葬者の頭位は東であったと判断できる。

盗掘は１度行われており、盗掘杭は、長径1.58m、短径0.96mの不整楕円形で、深さは40cmである。底部は墳丘盛土まで及んでいる。この盗掘の際に埋葬部分の西側が大きく破壊された。盗掘坑内の埋土からは、副葬品と考えられる鉄製品の破片が多数出土したが、盗掘の時期を知りうるような物は全く検出できなかった。

(7) 付属施設－造り出し部の両脇に検出された小穴－（図164、図版16・18）

造り出し部の両脇のほぼ対称となる位置に、一基ずつの小穴が検出された。現地調査では、遺跡範囲内のピットは通しで番号を付したため、西側の小穴にはＰ01、東側の小穴にはＰ08という遺構略号が与えられている。Ｐ01は長軸51cm、短軸40cmで、深さは最大で32cmである。砂岩の岩盤を垂直に掘り込んでおり、壁面には鑿の痕跡が明瞭に残る。底面は平らに仕上げられている。少し位置をずらして２回掘られたと考えられ、平面形は繭形を呈する。この小穴には、南西側に直径12cm、北東側に直径10cmの柱痕跡が認められた。細い柱か竿を立てたものと思われる。Ｐ08は長軸60cm、短軸50cmで、

盗掘坑の埋土
1　10YR 5/4　にぶい黄褐色土（1cm～3cmの角砂岩礫を多く含む。7.5YR 4/4　褐色土を斑状に少量含む。しまり有り）
2　10YR 4/6　褐色土（1～3cmの角砂岩礫を多く含む。7.5YR 4/4　褐色土を斑状に少量含む。しまり無し）
3　7.5YR 4/3　褐色土（1～5cmの角砂岩礫を多く含む。炭小片を含む。しまり無し）
4　7.5YR 3/3　暗褐色土（1～3cmの角砂岩礫を多く含む。10YR 4/6褐色土を斑状に少量含む。炭小片を含む。しまり無し）

主体部の埋土
①　7.5YR 6/5　明褐色土（1～5cmの砂岩礫を多く含む。しまり有り。木棺痕跡埋土）
②　7.5YR 4/4　褐色土（1～3cmの角砂岩礫を多く含む。しまり有り。木棺痕跡埋土）
③　7.5YR 4/6　褐色土（1～3cmの角砂岩礫を多く含む。しまり有り。木棺痕跡埋土）
④　7.5YR 5/4　にぶい褐色土（礫をほとんど含まない。砂質土。しまり有り。掘り方埋土）

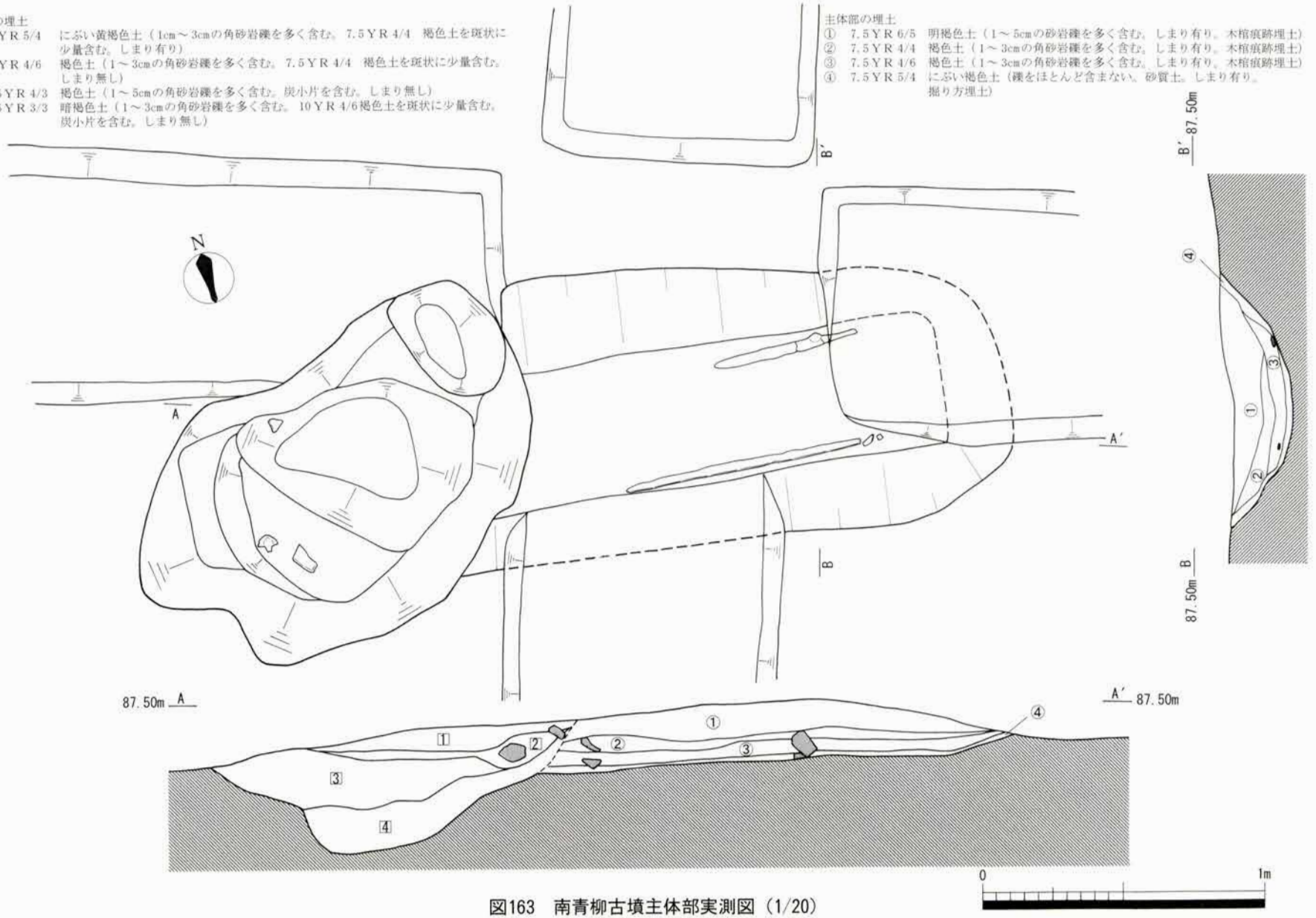


図163　南青柳古墳主体部実測図（1/20）

深さは最大で30cm である。平面形は不定形だが長軸が長く、P01と同じく少し位置をずらして２回掘られた可能性がある。やはり砂岩の岩盤を掘り込んでいるが、岩盤の風化が激しく、また太い木の根が入り込んでいたため残存状況は不良で、柱痕跡は検出できなかった。

埋土はともに粘性の非常に強い粘質土で、竿や柱の根元を固めるためにこの土が選ばれたものと思われる。土質は、当遺跡の第Ⅵ層（地山）のうち、尾根の中腹から斜面裾部にかけて存在する黄褐色粘質土に極めてよく似ている。ただ色調は、P01はやや灰色を帯びており、この土の採取地点を物語っているかもしれない。第Ⅵ層は低地部にあっては水の影響を受けて還元し、灰色ないしは青灰色に変化するからである。P01の埋土は古墳からやや離れた低地部で採取され運ばれた可能性が考えられなくはない。しかし、P08の埋土の色調は、黄褐色である。P01は砂岩の岩盤が安定しており、底部及び壁面はほとんど崩落が見られないため、調査中も雨水により、滞水することがしばしばであった。元は黄褐色であったものが滞水により、色調が変化したと見る方が自然かもしれない。

この２基の小穴の性格については、ややずれてはいるものの造り出し部の両脇のほぼ対称となる位置に掘られていること、また、P01には柱痕跡も確認できたことから、造り出し部を中心にした墓前祭祀にかかわる遺構であると推定される。また、P01は少し位置をずらして２回掘られていることが明瞭で、この穴に立てられた竿ないし細い柱は、少なくとも一度は立て替えられていると考えられる。類例については調査できていないが、きわめて珍しい検出例と考えられる。

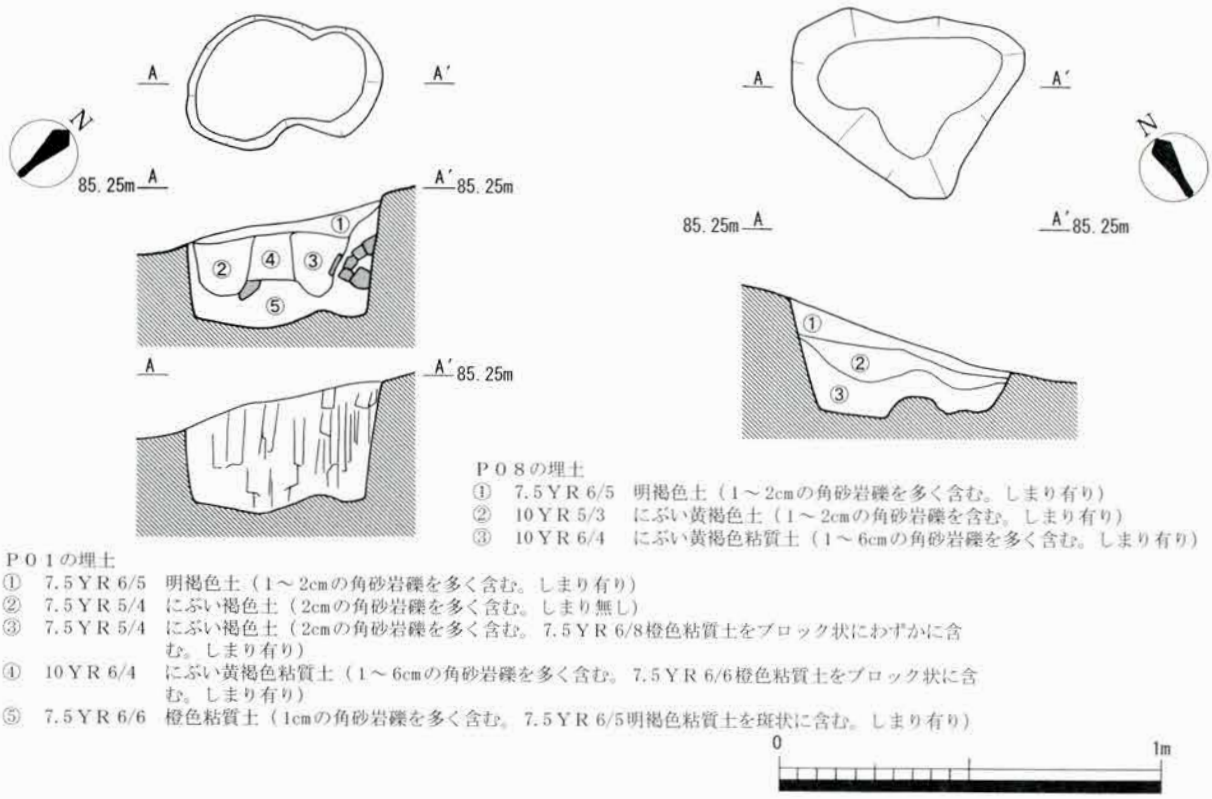


図164　P01・P08 実測図

⑧ 遺物の出土状況（図165・166、図版17）

主体部の木棺痕跡からは、鉄刀（2004）・鉄剣（2003）各１点がほぼ完形の状態で出土し、他に鉄製品１点が出土した。鉄刀・鉄剣は木棺痕跡の底面東寄りの、両端に沿う位置から出土した。鉄剣が

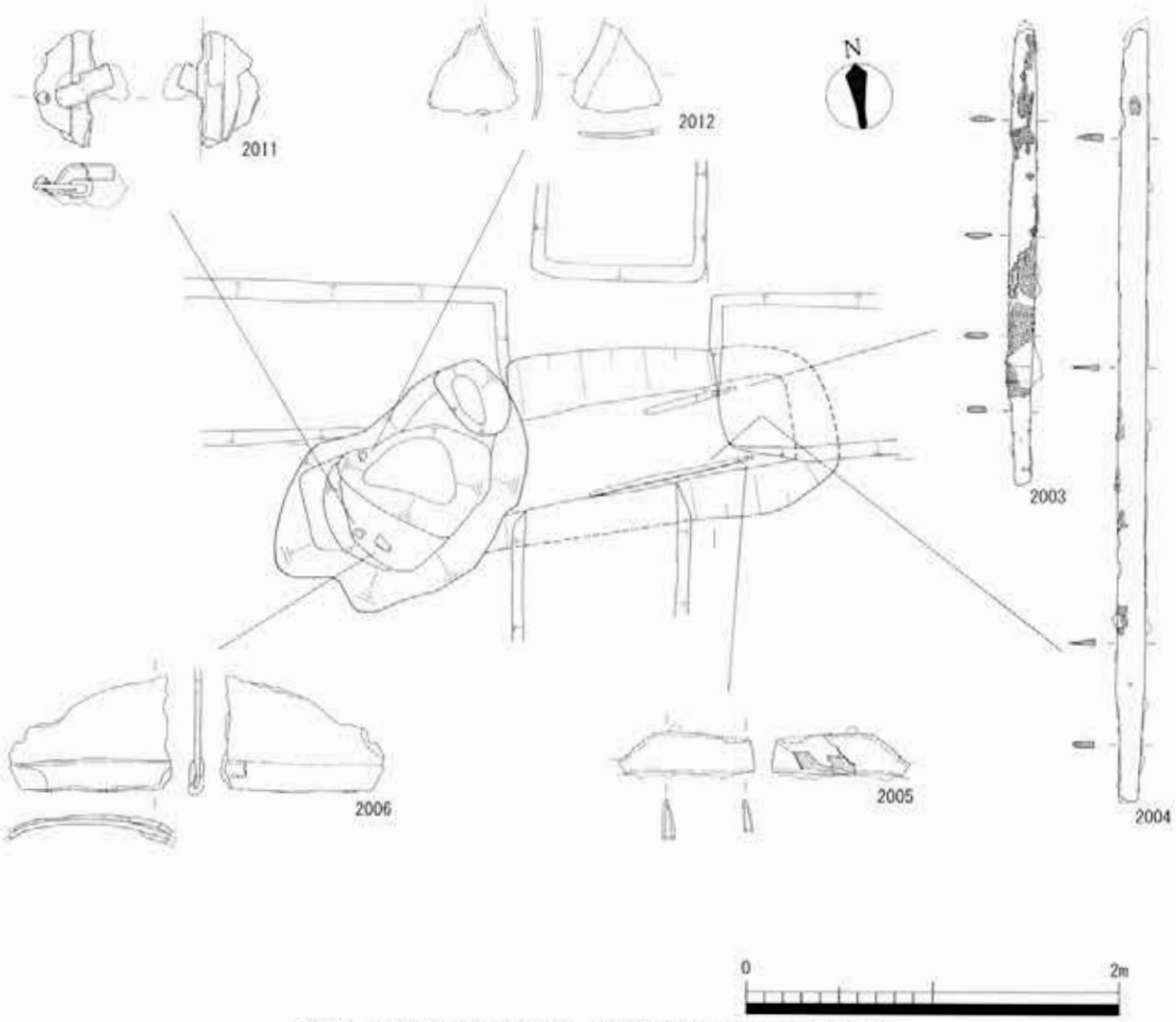


図165　南青柳古墳主体部・盗掘坑遺物出土状況（1/20）

北側、鉄刀が南側である。ともに切っ先は西に向けられており、このことから被葬者の頭位は東であったと判断でき、鉄刀・鉄剣は被葬者の両脇におさめられたことがわかる。鉄刀の刃部は内側に向けられていた。ともに柄の先端の位置は、そろえられていたとみられる。鉄刀のすぐ東には、鉄刀とやや方向をずらして不明鉄製品（2005）が出土した。

盗掘坑からは、鉄製品の破片が小片を含め80数点出土した。盗掘坑内の埋め戻し土の様々な層位から出土している。本来の副葬位置を保つものはなく、盗掘によって完全に撹乱された状況である。出土状況図に示した3点は、いずれも短甲の破片であるが、そのほか馬具（杏葉）の破片等が確認でき、木棺の西側、すなわち被葬者の足元には、短甲や馬具などがまとめて置かれていたことが明らかになった。被葬者の両脇に鉄刀・鉄剣、足元に短甲や馬具を副葬するのは、前・中期古墳の主体部の副葬方法としは、常軌に沿ったものである。

古墳の墳頂部からも鉄製品の小破片が多く出土しているが、いずれも盗掘坑上面とその付近のⅡ層（盛土流出層）の出土である。短甲や心葉形杏葉の破片であり、盗掘坑の埋土のものと共通する。

墳丘面と墳丘裾部からは、小片ばかり40数点の須恵器片が出土した。墳丘の東南側の二段目テラス

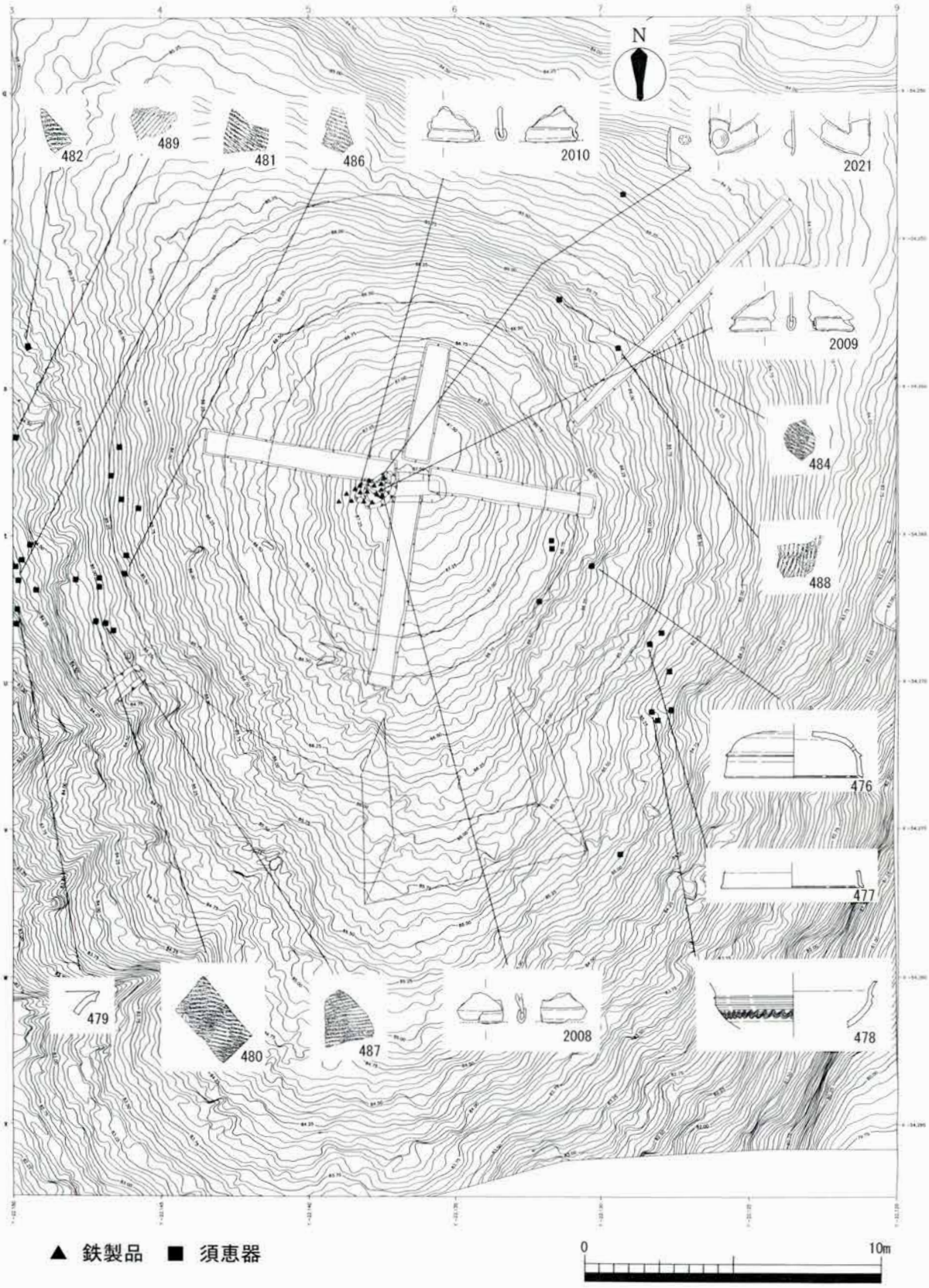


図166　南青柳古墳墳丘上面・裾部周辺遺物出土状況（1/200）

から墳丘裾部にかけてと、西側裾部から斜面下部にかけて、また北側裾部から斜面下部にかけて、斜面上部から流れ出るようにいずれも集中して分布する。前二者はⅡ層（盛土流出層）の出土、後者はⅢ層の下層からの出土である。ほとんどが一辺3～4㎝の小破片で、図示した甕の破片の多くに見られるように、器壁の厚さも確認できないほどに破損が激しい。こうした出土状況から、これらの須恵器は古墳の墳頂部に据えておさめられたものとは考えられず、主体部への供献祭祀後、破砕し古墳の周囲に向けて投棄、散布されたものと推測される。476の坏蓋は、図に示した地点出土の破片と、北々東に28m離れたｎ８グリッドの、Ⅲ層の下層からある程度まとまって出土した破片と接合した。このことから、その散布はかなり広範囲に及ぶものであったことが推測される。これらの須恵器は後述のようにいずれも５世紀後半代のものと考えられる。

⑼ 主体部出土遺物（図167、図版40）

主体部から出土したのはいずれも鉄製品ばかりで、玉類・土器類・銅製品などは出土しなかった。2003は鉄製の剣で、先端部をわずかに欠損するが、ほぼ完形に近い。現存の長さは49.6㎝、刃部の幅は2.8㎝、柄部の幅は1.8～２㎝である。刃部の厚さは、最大で６㎜である。両面に鞘の木質が付着する。刃部と柄部の境には、鎺の装着痕が残存する。柄部には目釘孔が２穴存在する。関は明瞭ではない。2004は鉄製の直刀で、これも先端部をわずかに欠損するが、ほぼ完形に近い。現存の長さは86.0㎝、刃部の幅は3.0㎝、柄部の幅は２～2.4㎝である。刃部の厚さは、背面で６㎜～８㎜である。両面に鞘の木質がわずかに付着する。目釘が１カ所残存するが、比較的刃部に寄った位置である。関は明瞭ではなく、ゆるやかにくびれ、茎は刃部とくらべさほど細くはない。大きさ、関、茎の状況から鉄剣・鉄刀ともに、５世紀代までの製品の特徴を有していると言える。2005は鉄刀の柄部のすぐ東側から出土した。短辺の一方の端は完結しているのか、折損しているのか判然としない。一方は上辺が緩やかに屈曲し下辺に向かって伸び、先端部は欠損するが、閉じずにわずかに広がって伸びるようである。鉄板の剥離した部分から、内側に木質が残存していることが確認でき、木心鉄板張りであることが知れる。類例が見当たらず、不明鉄製品としたが、出土位置から柄頭飾り金具の可能性が考えられる。

(10) 盗掘坑等出土鉄製品（図167・168、図版41・42）

2006～2015は短甲の胴部の破片である。2008～2010・2015は盗掘坑上面とその付近のⅡ層（盛土流出層）からの出土である。2013は、平成７年度の試掘調査時に西トレンチ南壁面の東端から70㎝の位置から出土したものである。盗掘坑の範囲に該当するため、盗掘坑の埋土に含まれていたものと考えられる。他はすべて盗掘坑の埋土から出土した。2006～2010は覆輪が残存し、短甲の端部の破片であることがわかる。覆輪の幅が大きい2006は裾部の、他は胴部上部の破片と考えられる。覆輪を締める際の押圧により鉄板の端部が薄くなったり、やや曲がったりしている様子を観察できる。また覆輪の先端と覆輪が密着するものと隙間が残るものとが見られる。2006や2008の覆輪のはずれた箇所には覆輪を締める際の押圧により、鉄板がへこんだ痕跡を明瞭に確認できる。2011は蝶番金具と考えられる。錆が厚く付着するため、鉄板との接続状況は不明であるが、鋲が残存し、鋲留めであることを確認できる。2012～2015は覆輪を欠くものの、2015を除いていずれも鉄板の端部が薄くなっており、覆輪の

痕跡と考えられる。2012・2013・2015は、端部が緩やかに曲線を描くことから、短甲の胴部上部の脇部付近の破片と考えられる。2014の部位は不明だが、やはり覆輪の痕跡を確認できる。2016～2020は、短甲の覆輪の残欠で、2006に見られるように、覆輪の屈曲部が押圧により疲労し、腐食後ははがれ落ちやすくなる例が多かったものと思われる。以上の短甲の破片は、残存する大きさと厚さ及び2011に見られるように鋲を伴うこと、鉄板の端部に穿孔が見られないこと等から、横矧板鋲留短甲の可能性がある。2006～2015は２㎜～３㎜のほぼ同じ厚さの鉄板で、同一の短甲の一部と考えられる。美濃地域における短甲の出土例としては、５例目の発見である（注６）。

2021～2025はいずれも小片ばかりであるが、杏葉の縁金具片と考えられる。2021～2023は盗掘坑の上面から、他は盗掘坑の埋土から出土した。2021はその中でも最も残存状況がよく、心葉形杏葉の縁金具の下端部の破片である。鋲が残存する。昼飯車塚古墳（岐阜県大垣市）出土の心葉形杏葉の縁金具に類似した形状である（注７）。2022～2025は小片であり、判然としないが、2021と同じく心葉形杏葉の縁金具片の可能性が高い（注８）。

2026は、主体部より南75㎝のⅡ層から出土したもので、錆による腐食は少ない。鉄剣の刃部の破片と考えられるが、刃部と考えられる両端ともに鋭さにやや欠け、わずかに彎曲する。他の鉄製品の破片である可能性もある。

2027・2028はいずれも端部が強く曲線を描く。辻金具の端部の可能性も考えられなくはないが、あまりにも小片であり、ここでは判断を保留する。

2029は鉄製有孔三角形鏃の破片である可能性を考え、経ヶ峰１号古墳（愛知県岡崎市、注９）出土例を参考に復元実測を試みたが、やや薄すぎるきらいがあり、誤認であるかもしれない。

2030は緩やかな曲線を描く端部をもつ小片だが、いかなる製品のものかは不明である（注10）。

（11）墳丘・墳丘裾部周辺出土須恵器（図版169、図版43）

小片ばかりであったが、墳丘面および墳丘裾部周辺から出土した須恵器14点を図示した。476・477は坏蓋で、476の天井部は丸く張りがあり、口縁部の高さは器高の1/2程度である。稜は明瞭で鋭く、口縁部と天井部を明確に区画する。口縁部はわずかに外傾し、口縁端部は内面に沈線を入れて段を形成し、外傾させる。器壁の調整は、天井部外面を回転ヘラケズリで、内面と稜を挟んでそれ以下を回転ナデで行う。477は坏蓋の口縁部片で、端部は内面に沈線を入れて段を形成し外傾させ、さらに外反させている。476・477ともに色調は暗青灰色で、砂粒をわずかに含み、焼成は良好である。478は無蓋高坏の坏部片で、体部はやや張りをもって緩やかに内彎し、口縁部との境に２段の突帯を設ける。突帯は鋭い稜を持つ。上段の突帯から強く外反して立ち上がると見られるが、口縁部先端部は欠損する。体部には櫛描き波状文を施す。残存部の器壁の調整は内外面ともに回転ナデを確認できる。色調は暗青灰色で、砂粒をわずかに含む。焼成は良好である。479は極めて小片だが、壺の口縁部片と思われる。

480～489は甕の体部片で、すべて小片であり、器厚も不明なほどに破損しているものが多い。480～482は同一個体の可能性があり、器厚は1.5㎝前後、色調は灰白色系で緻密な胎土である。焼成はいずれもやや不良である。483～485は、暗青灰色で緻密な胎土である。タタキの状況からも同一個体の可能性がある。焼成はいずれも良好である。486～489はいずれも内面が剥離しており、器厚は不明で

ある。色調は灰白色系で胎土には砂粒を含む。焼成はやや不良である。同一個体の可能性がある。以上の甕体部片の外面にはいずれも平行タタキが施され、内面のあて具痕は、内面の状況が確認できる480～482・483では、いずれも指ナデ調整によって消されている。

坏蓋、無蓋高坏はいずれも猿投編年の城山２号窯期から東山11号窯期のものと考えられ、壺と甕は小片で情報量に欠けるが、ほぼ同時期のものと考えてよいと思われる（注11）。

（12）墳丘盛土内出土土師器（図版169、図版39）

墳丘の断ち割りトレンチ内からは、28点の土師器片が出土した。いずれも小片で摩耗が激しく、図化できたのは、５点のみである。490は小型の鉢Ｃ類の口縁部片と考えられるが、内外面はハケ調整である。491は甕Ｄ類の口縁部片か。492は平底甕の底部。493は壺Ｂ１類の口縁部で、端部をわずかに垂下拡張し、擬凹線を施す。494は壺Ｂ類の底部である。

いずれも住居跡出土の土器と同じく、Ⅱ期に属するものばかりである。古墳造営に当たって、Ⅱ期の集落域の土を盛土として利用していることが、これらの土器の出土によって判明する。

注（第２章第４節第２項のみ）

6　船来山98号古墳出土の方形板革綴短甲が４世紀（吉田2000）、龍門寺１号古墳出土の長方板革綴短甲が５世紀初頭（楢崎1962）、中八幡古墳出土の三角板鋲留短甲が５世紀後半（池田町教育委員会1985）と推定される。北に隣接する砂行１号古墳（平成９年度に［財］岐阜県文化財保護センターが調査）出土の短甲片は、長方板革綴短甲で、５世紀前半代と推定されている。

7　『日本馬具大観』日本中央競馬会

8　馬具の名称・分類は、澤村雄一郎　1996『愛知県・岐阜県内古墳出土馬具の研究』南山大学大学院考古学教室を参考にした。

9　鉄鏃の名称・分類・編年観は、杉山秀宏「古墳時代の鉄鏃について」1988『橿原考古学研究所論集第８』創立50周年記念　吉川弘文館による。

10　以上古墳出土鉄製品の実測、観察については、澤村雄一郎氏（［財］岐阜県文化財保護センター）の協力を得た。

11　猿投窯の編年は、斎藤孝正　1989［古墳時代の猿投窯」『断夫山古墳とその時代』（第６回東海埋蔵文化財研究会実行委員会）による。

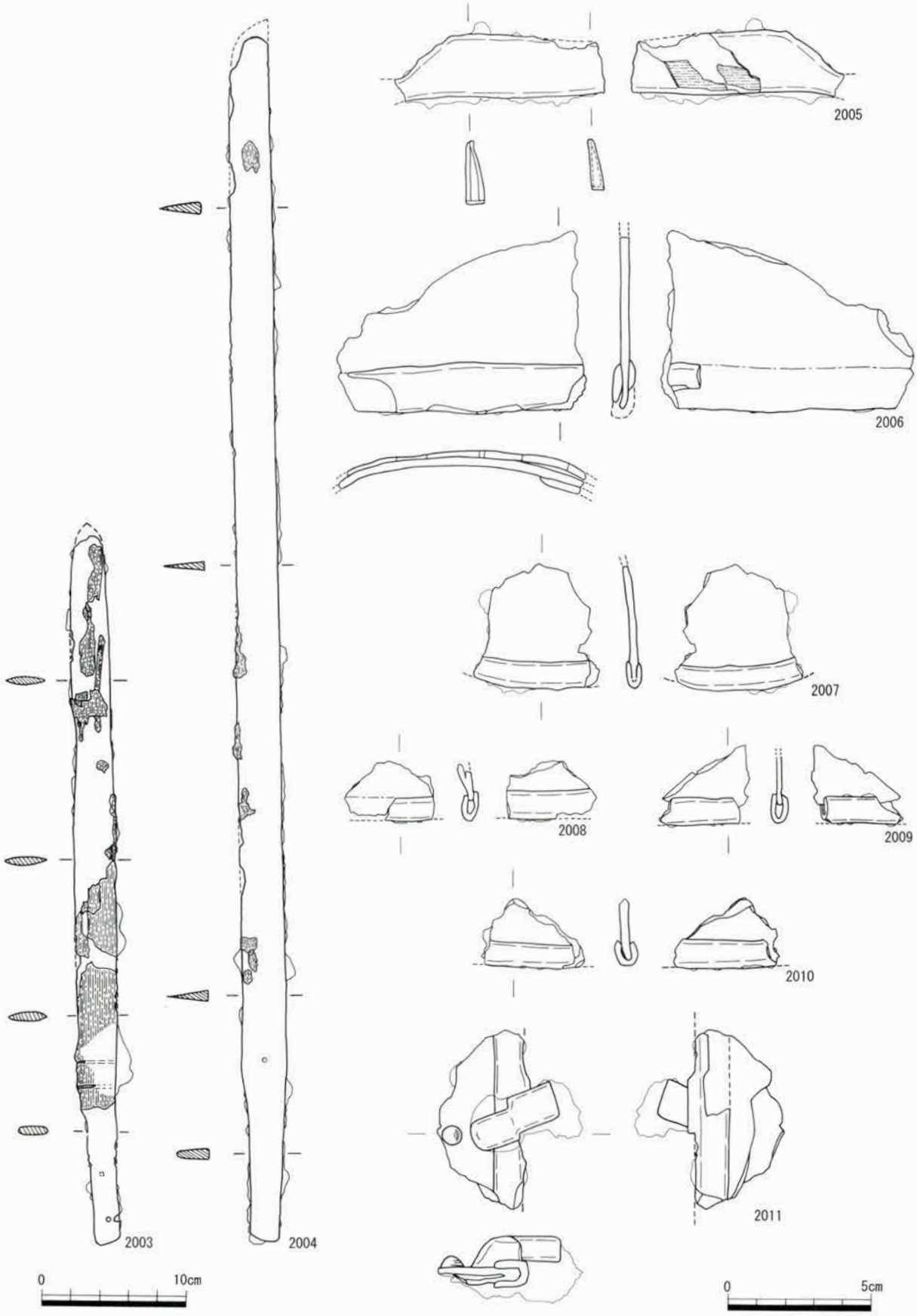


図167　南青柳古墳主体部・盗掘坑出土鉄製品（１）

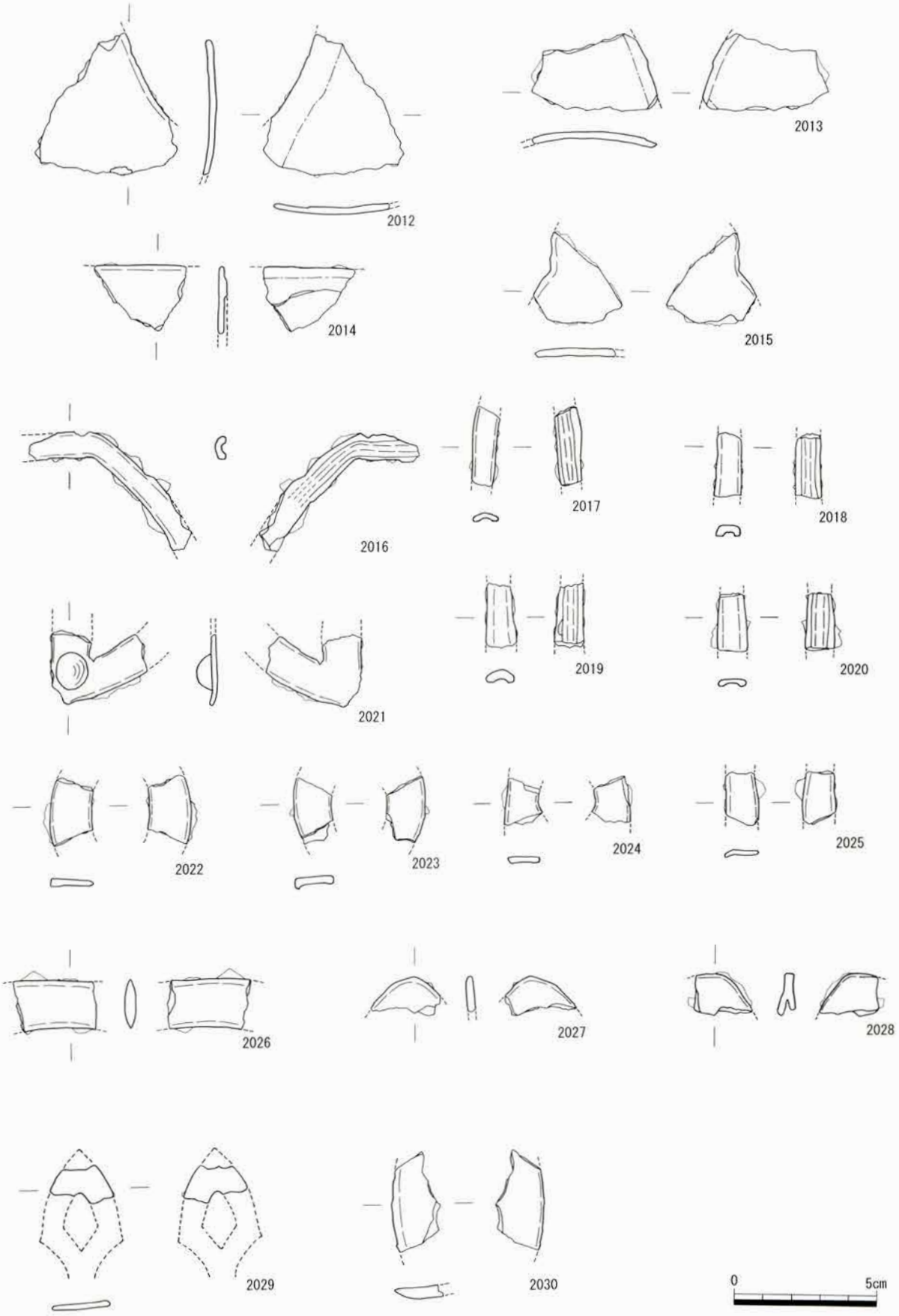


図168　南青柳古墳盗掘坑出土鉄製品（２）

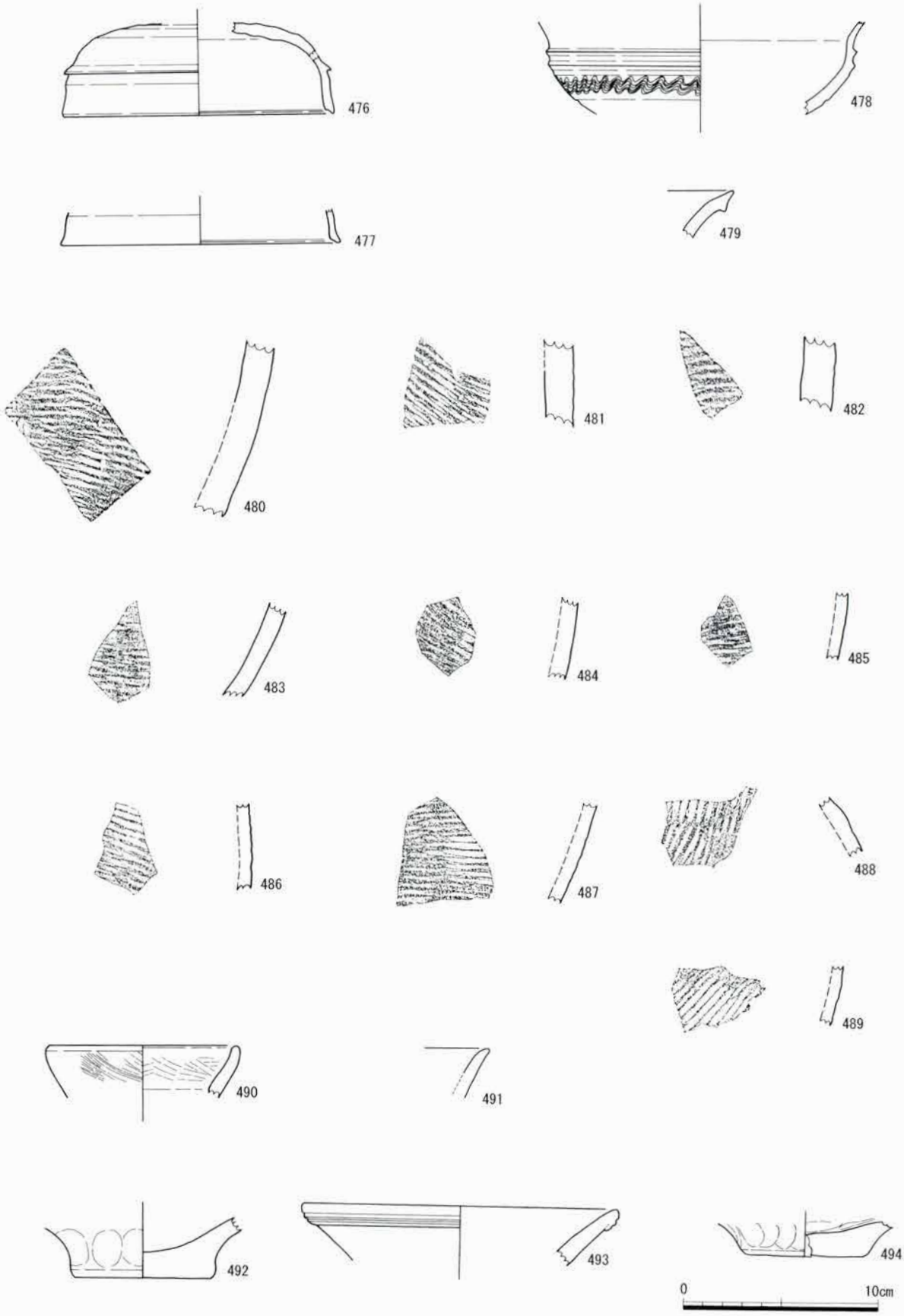


図169　南青柳古墳墳丘・裾部周辺出土土器
南青柳古墳墳丘盛土内出土土器

第３項　その他の遺構

当遺跡では、以上に述べた遺構のほかに、溝６条、ピット59基、土坑25基を検出している。これらの遺構は、一部を除いて遺物の出土がほとんどなく、時期や性格を推定できるものはきわめて少ない。以下遺構種別ごとに、その概略を述べたい。

１　溝（遺構－図170、図版18　遺物－図158、図版32）

調査時に溝と判断したものは６条だが、そのうちＳＤ02はＳＢ41の、ＳＤ03はＳＢ42の、ＳＤ06はＳＢ47の山側周溝であり、それぞれの竪穴住居跡の項で述べた。

ＳＤ01は、ｌ12、13グリッドから検出された。不明遺構（ＳＸ）とすべきであったかもしれないが、現地調査では、その形状から「ＳＤ01」としたため本報告書でもそれを踏襲した。南にはＳＢ01が、北にはＳＫ01がそれぞれ切り合うことなく隣接する。全長は9.8m、最大幅2.2m。最大深さは85cmである。尾根頂上部付近が最も深く斜面を下るにつれて浅くなる。中央部の比較的深さを有する箇所では、溝の立ち上がりが急で場所によっては垂直に近い。溝の底面は滑らかに仕上げられており、一部に鑿の痕跡も確認できた。埋土は本遺跡のⅡ層（近世以降に堆積した流土）と類似するが、粘性が強くしまりもよい。平面形や位置関係からはＳＢ01の山側周溝といっても不思議ではないが、両者は同一平坦面に存在し、高低差はない。また、後述のように出土遺物からは、ＳＢ01の時期（Ⅱ期）には併行しない可能性が高く、両者の関連性は低いと見るのが妥当と思われる。

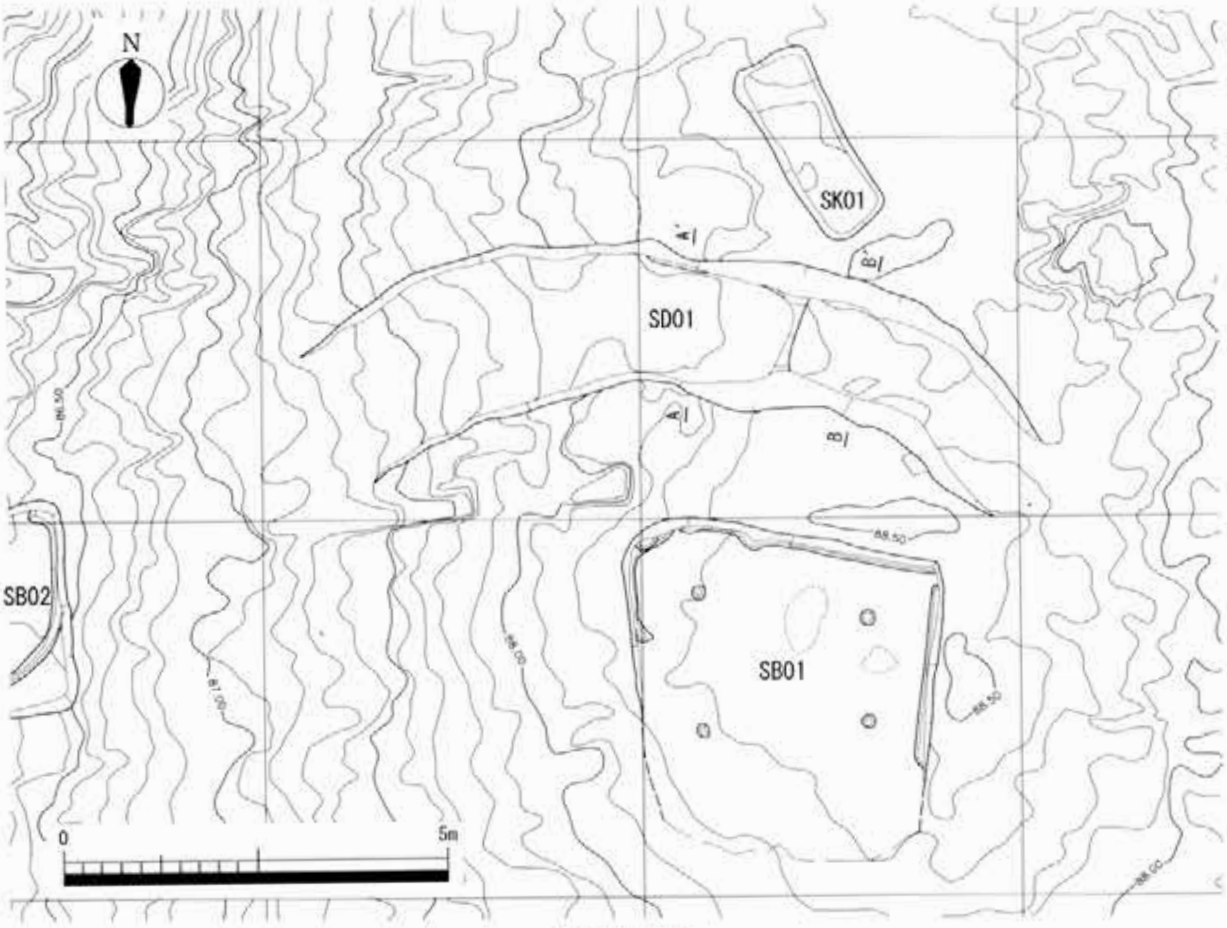
遺物は、中央部の②層から土師器片が35点出土した。図化できたのは１点である。475は甕Ｊ類で、口縁部は、外反して短く伸び端部を上方へつまみあげている。内外面ともにハケ調整の後、指ナデを施しているが、ハケ目は残存する。肩から胴部にかけての張りは見られない。出土した土師器片には、Ⅱ期の小片も少量含まれるが、この個体の破片が大部分を占める。１点のみの出土であり時期判断は難しいが、器形からはⅡ期のものとは考えにくい。隣接する被熱痕跡の認められるＳＫ01は、熱残留磁化測定によって、焼成年代は670（＋70、－80）年と推定されているが（第７節第１項参照）、むしろそれに併行する時期の甕の特徴に近いものを感じさせる。

ＳＤ04・05は、それぞれｒ９、ｒ10グリッドから検出されたが、当初は両者がつながるように暗褐色土が帯状に検出された。ＳＢ53を囲むようにめぐることから、同住居の山側周溝と想定して調査を進めたが、両者間の暗褐色土の堆積はきわめて浅く、接続は認められなかった。ただこの辺りは昭和50年代の土砂採取によって削平されており、検出面は本来の高さではない。両者が本来は接続しており、ＳＢ53の山側周溝として機能していた可能性は十分に考えられる。遺物はＳＤ05から、土師器の小片が17点出土したが、図化できるものはなかった。竪穴住居跡と同じⅡ期のものばかりである。

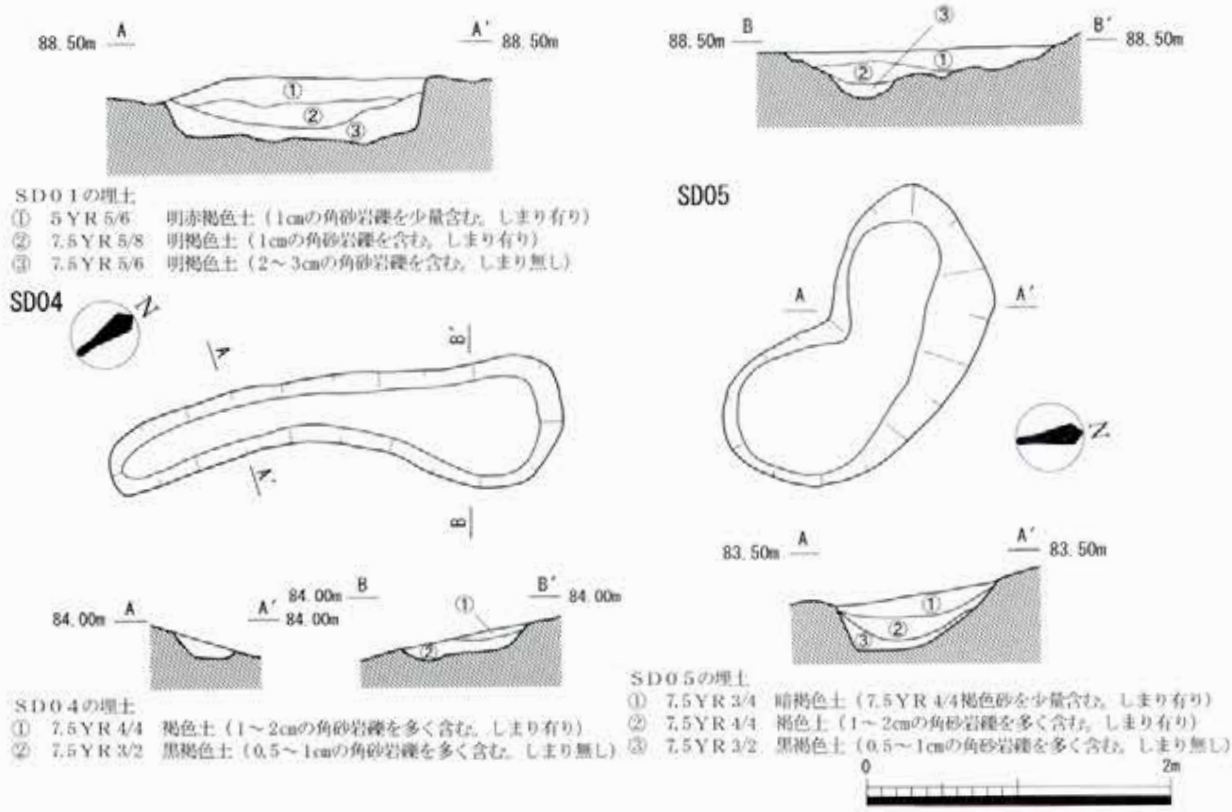
２　土坑（遺構－図171、図版18・19、遺物－図158、図版39）

ここでは主だったもののみを記し、それ以外は遺構一覧表への掲載にとどめたい。

ＳＫ01は、北尾根頂上部のｋ13、ｌ13グリッドから検出された。南にはＳＤ01・ＳＢ01が、それぞれ切り合うことなく隣接する。平面形は隅丸長方形で、長軸2.65m、短軸1.12m、最大深さは９cmと浅い。平成７年度の試掘確認調査時に南東のコーナー部分が検出されていた。埋土は炭小片を大量に



ＳＤ01 測量図

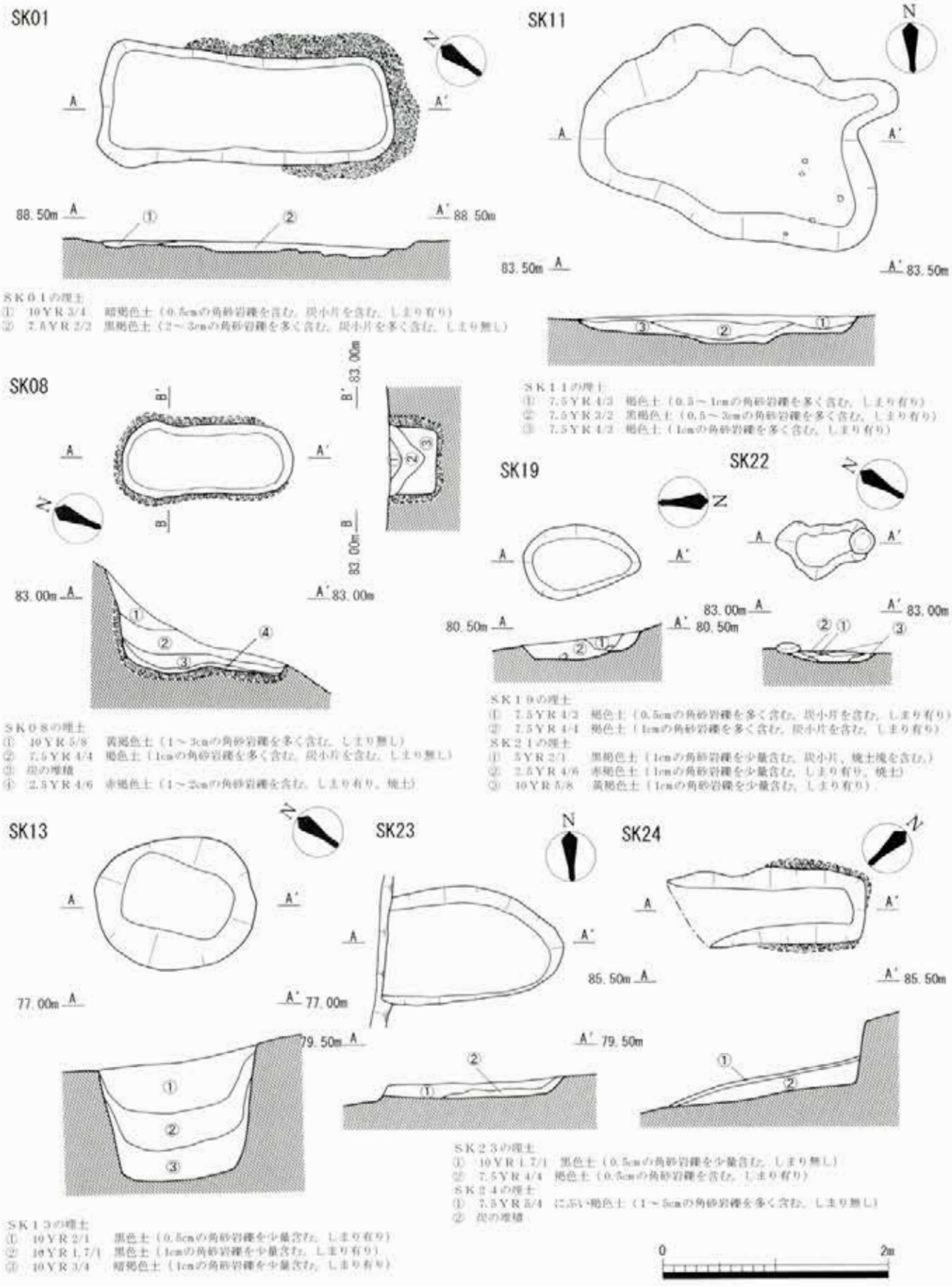


ＳＤ０１の埋土
① 5ＹＲ 5/6　明赤褐色土（1cmの角砂岩礫を少量含む。しまり有り）
② 7.5ＹＲ 5/8　明褐色土（1cmの角砂岩礫を含む。しまり有り）
③ 7.5ＹＲ 5/6　明褐色土（2～3cmの角砂岩礫を含む。しまり無し）

ＳＤ０４の埋土
① 7.5ＹＲ 4/4　褐色土（1～2cmの角砂岩礫を多く含む。しまり有り）
② 7.5ＹＲ 3/2　黒褐色土（0.5～1cmの角砂岩礫を多く含む。しまり無し）

ＳＤ０５の埋土
① 7.5ＹＲ 3/4　暗褐色土（7.5ＹＲ 4/4褐色砂を少量含む。しまり有り）
② 7.5ＹＲ 4/4　褐色土（1～2cmの角砂岩礫を多く含む。しまり有り）
③ 7.5ＹＲ 3/2　黒褐色土（0.5～1cmの角砂岩礫を多く含む。しまり無し）

図170　ＳＤ 実測図



ＳＫ０１の埋土
① 10ＹＲ 3/4　暗褐色土（0.5cmの角砂岩礫を含む。炭小片を含む。しまり有り）
② 7.5ＹＲ 2/2　黒褐色土（2～3cmの角砂岩礫を多く含む。炭小片を多く含む。しまり無し）

ＳＫ１１の埋土
① 7.5ＹＲ 4/3　褐色土（0.5～1cmの角砂岩礫を多く含む。しまり有り）
② 7.5ＹＲ 3/2　黒褐色土（0.5～3cmの角砂岩礫を多く含む。しまり有り）
③ 7.5ＹＲ 4/3　褐色土（1cmの角砂岩礫を多く含む。しまり有り）

ＳＫ０８の埋土
① 10ＹＲ 5/8　黄褐色土（1～3cmの角砂岩礫を多く含む。しまり無し）
② 7.5ＹＲ 4/4　褐色土（1cmの角砂岩礫を多く含む。炭小片を含む。しまり無し）
③ 炭の堆積
④ 2.5ＹＲ 4/6　赤褐色土（1～2cmの角砂岩礫を含む。しまり有り。焼土）

ＳＫ１９の埋土
① 7.5ＹＲ 4/3　褐色土（0.5cmの角砂岩礫を多く含む。炭小片を含む。しまり有り）
② 7.5ＹＲ 4/4　褐色土（1cmの角砂岩礫を多く含む。炭小片を含む。しまり有り）
ＳＫ２１の埋土
① 5ＹＲ 2/1　黒褐色土（1cmの角砂岩礫を少量含む。炭小片，焼土塊を含む。）
② 2.5ＹＲ 4/6　赤褐色土（1cmの角砂岩礫を少量含む。しまり有り。焼土）
③ 10ＹＲ 5/8　黄褐色土（1cmの角砂岩礫を少量含む。しまり有り）

ＳＫ１３の埋土
① 10ＹＲ 2/1　黒色土（0.5cmの角砂岩礫を少量含む。しまり有り）
② 10ＹＲ 1.7/1　黒色土（1cmの角砂岩礫を少量含む。しまり有り）
③ 10ＹＲ 3/4　暗褐色土（1cmの角砂岩礫を少量含む。しまり有り）

ＳＫ２３の埋土
① 10ＹＲ 1.7/1　黒色土（0.5cmの角砂岩礫を少量含む。しまり無し）
② 7.5ＹＲ 4/4　褐色土（0.5cmの角砂岩礫を含む。しまり有り）
ＳＫ２４の埋土
① 7.5ＹＲ 5/4　にぶい褐色土（1～5cmの角砂岩礫を多く含む。しまり無し）
② 炭の堆積

図171　ＳＫ 実測図

含む暗褐色粘質土である。全面に被熱痕跡を確認できるが、おおむね土坑のプランに沿う形であることから、この土坑の形状にあわせて、土塁や板枠などで上部を囲んでいた可能性も考えられる。遺物は出土しなかったが、焼土の残留磁化測定の結果、焼成年代は、670(＋70、－80）年と推定されている（第７節第１項参照)。ＳＫ01からは、ＳＢ01の項で述べたように、南西から西方面に向けて眺望がよい。下有知地内の長良川左岸一帯を、南は弥勒寺（関市小瀬）の対岸にそびえる山王山（向山、海抜約150m）まで見渡すことができ、北にはひときわ高くそびえる松鞍山（海抜316m）を望むことができる。こうした立地を重く見れば、この遺構に軍事的性格（狼煙跡）を想定し得ることも可能かもしれない。前述のように、この土坑の焼成年代と隣接するＳＤ01出土の甕の年代観とに併行関係を認めることが可能であるとすれば、ＳＤ01はＳＫ01との関係で考察すべきであろう。仮にＳＫ01が狼煙跡であるとすれば、ＳＤ01はそこで燃やす薪等の収納施設として機能したといった推測も可能かもしれない。今後の検討課題とし、現段階ではその性格は不明としておきたい。

ＳＫ08(ｑ12グリッド）は、長軸1.50m、短軸71cm、最大深さは60cm、ＳＫ24（ｔ３・ｕ３グリッド）は、長軸1.75m、短軸71cm、最大深さは65cm である。前者は上部が土砂採取で削平されていたが、本来は急傾斜地に水平にトンネル状に掘り込んだもので、天井部を有していたものと見られる。内部は全面が被熱により赤褐色に変色し硬化している。底面には数cm にわたり炭の堆積層を確認でき、埋土には炭小片が大量に含まれていた。後者は、砂岩の岩盤を方形に掘り込んだもので、底部は平坦に仕上げられている。天井部を有していたかどうかは不明である。やはり全面に被熱痕跡を確認できる。埋土の多くは流出していたが、底部にはやはり炭の堆積が見られた。いずれも簡易式の炭焼き土坑と考えられる。ＳＫ04、ＳＫ06（いずれもｑ９グリッド）は上部の大半が土砂採取で削平されているものの、被熱痕跡、炭の堆積を確認でき、同様の遺構の痕跡と考えられる。どの遺構も遺物が全く出土せず、時期の特定はできない。

ＳＫ13（ｏ22グリッド）は、長軸1.45m、短軸1.24m、最大深さは1.06mで、本遺跡のピットや土坑のほとんどが浅いものであるのに対し、相当深くしかも急角度で掘り込まれている。底面は平坦である。東谷の入り口付近の緩やかな斜面に存在する。簡易式の井戸のようなものであろうか。遺物は全く出土せず、時期は不明である。

ＳＫ11からは土師器小片が44点出土し、ＳＫ19からは、砥石1点と土師器小片40点が出土したことから図示した（同じく遺物の出土が見られたＳＫ16については、ＳＢ27の項参照）。　ＳＫ11（ｓ16グリッド）は不定形の大型の土坑で、長軸2.5m、短軸1.85m、最大深さは25cm である。土師器小片は②・③層から出土し、Ⅱ期の土器片ばかりである。470は器台Ｂ類で口縁端部は垂下拡張し、端部外面には擬凹線を施している。471は平底甕の底部、472は台付甕の台部である。

ＳＫ19（ｕ14グリッド）は、長軸1.05m、短軸66cm、最大深さは18cm である。底面に接して台付甕の台部（473）と砥石（1049）が出土した。ほかに壷Ｂ類の底部（474）が出土している。

ＳＫ22(ｕ18グリッド）は、長軸82.5cm、短軸65cm、最大深さは10cm である。直径22cm の円形の河原石を土坑の隅に据えている。埋土には炭小片が含まれる。遺物は出土せずその性格は不明である。

ＳＫ23(ｓ20グリッド）は、ＳＢ73が南側に隣接する。試掘確認トレンチによって西側が破壊されているが、残存部の長軸1.58m、短軸1.04m、最大深さは13cm である。遺物は出土せず、性格・時期ともに不明だが、ＳＢ73の項で述べたように、同住居の山側周溝である可能性がある。

ＳＫ25（ｙ９・10グリッド）は、調査区南端近くの緩やかな斜面に存在する。重機による表土掘削時に上部が削平され、残存状況は不良である。残存部の長軸1.37m、短軸1.12m、最大深さは６㎝である。偏平な円形ないしは楕円形の河原石を主体とする集石が土坑中央部に認められるが、表土掘削で原位置を動いた石はこの約３倍ほどであり、本来は土坑全面に敷き詰められていた可能性がある。遺物は出土せずその性格は不明である。

３　ピット

南谷の東側斜面や東谷入り口付近の西側急斜面にピット群を検出したが、明確な並びを確認できるものはなく、また、遺物の出土が認められるのはわずかに１基（Ｐ59）のみである。いずれもその性格や時期を明らかにすることはできないため、遺構一覧表への掲載にとどめることにする。

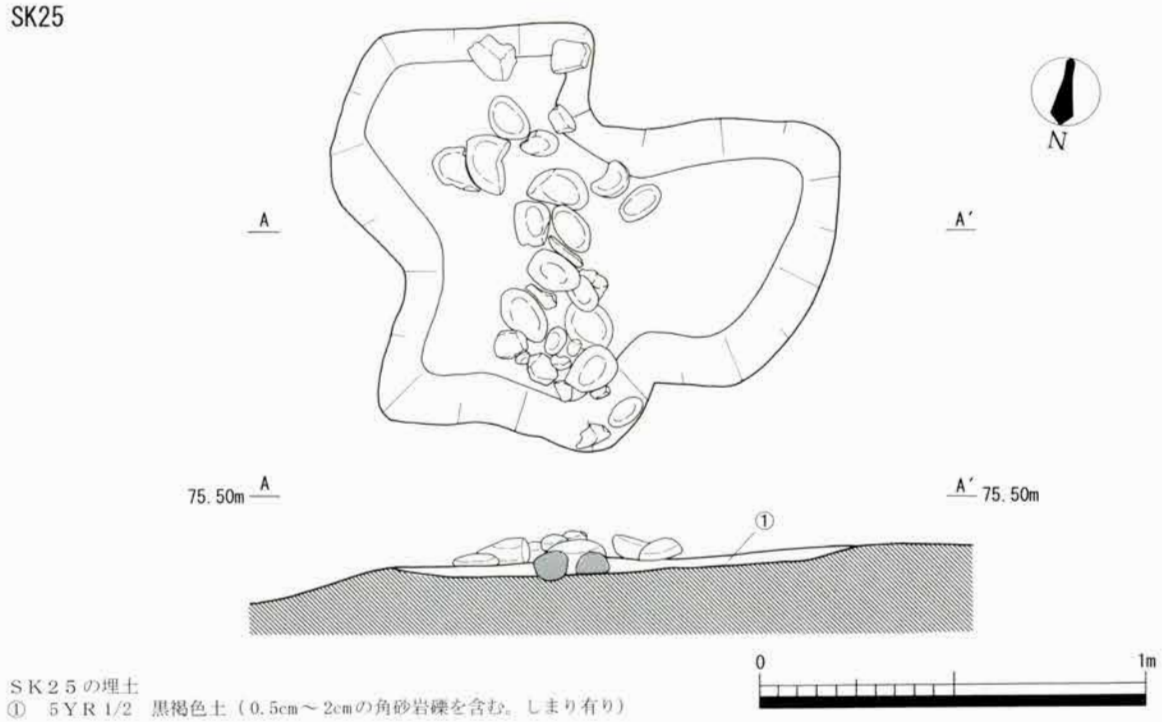


図171　ＳＫ実測図（２）

第５節　包含層出土の遺物

第１項　Ⅱ期の土器

急斜面の集落周辺から出土した土器で、竪穴住居跡などの遺構に絡まないものを一括して以下に報告する。急斜面であるがために竪穴住居跡の谷側床面が流失したものが多いが、それに伴って遺構外に流れ出した遺物がその大半と考えられる。82軒の竪穴住居跡の全てはⅡ期に属するものと考えられ、包含層出土の土器もⅡ期に属するものが圧倒的に多い。

以下では、Ⅱ期の土器を、土器の器種分類の順に記すことにする。なお、出土した土器の内、各部位の直径及び形状が復元できる個体を極力実測して図示した。

(1) 高坏

①高坏Ａ類（図172、図版43）

坏部の破片２個体（495・497・498）をＡ類に分類した。当遺跡の住居跡からは一点も出土しておらず、包含層出土を含めても、Ａ類の高坏はわずかにこの３個体のみである。隣接する砂行遺跡では多くの個体が出土しており、当遺跡との決定的な差となっている。

495は口縁部径と段の径の差が小さく、坏部は浅く、段で強く屈曲させて外反する。端部はわずかに面を形成し、器壁も厚い。497は口縁部の先端部を欠くが、坏部の形状は、口縁部径と稜の径の差が大きく坏部が495に比べ深く、端部にかけて緩やかに外反するものと推定される。498も口縁部の先端部を欠くが、坏部の段がやや強く屈曲し広がることから、深みのある高坏Ａ類で、端部にかけて緩やかに外反するものと推定したが、高坏Ｃ類の可能性もある。497・498のいずれも器壁の最終調整は、縦方向のミガキである。

②高坏Ｂ類（図172、図版43）

496がＢ類と考えられる。坏部の段で強く屈曲し、口縁部がわずかに外反し、上外方にのびる。器壁の最終調整は、縦方向のミガキである。高坏Ｂ類も当遺跡の住居跡からは一点も出土しておらず、包含層出土を含めても、わずかにこの１個体のみである。隣接する砂行遺跡では多くの個体が出土しており、これもまた当遺跡との決定的な差となっている。

③高坏Ｃ類（図172、図版43）

499～502の坏部の破片４個体を実測した。いずれも499のように、段から上外方に長く内彎してのびる口縁部をもつ深い坏部と考えられる。口縁端部は住居跡出土のものの多くがそうであるように、丸くおさめるものが基本であろうが、501のように平坦に仕上げるものも見受けられる。器壁の最終調整は縦方向のミガキが基本であるが、500のように横方向のミガキを加えるものもある。

④高坏Ｅ類（図172）

１個体（503）のみを確認した。ＳＢ13およびＳＢ35出土土器の中にＥ類の可能性を持つものが存在するが、いずれも坏底部しか残存せず、口縁部が明らかなものはこの個体のみである。

⑤高坏Ｆ類（図172、図版32・43）

Ｆ類（有稜高坏）は504～510の７個体を実測した。いずれも内彎する坏部を持ち、口縁端部は丸く

おさめるものが基本である。507～509は、端部外面に横線を巡らしている。509は唯一脚部が連接する例で、円錐形に広がる脚の形状を知ることができる。最終調整は、縦方向あるいは斜方向のミガキを基本とするが、506のように口縁端部は内外面とも横方向のミガキを加えるものもある。

⑥高坏口縁部片（図173、図版43）

口縁端部に施文の見られる個体３点（511～513）を実測した。端部外面に横線を巡らすもの、端部を肥厚し沈線を施すものである。いずれもＣ類の口縁部片であると考えられる。

⑦高坏Ａ～Ｆ類脚部（図173、図版32・33・43）

比較的残存状態が良好な514～522までの９個体を図示した。514～516・518は基部が円筒形で、長脚と推定され、高坏Ａ類またはＢ類に連接する可能性が高い。517・520・521は基部の径が大きく高坏Ｃ類に連接するものであろう。小型の脚部である522は、高坏Ｆ類に接続するものと思われる。

⑵ 器台（図173、図版43）

包含層から認められた器台はすべて受け部の破片であり、脚部との接続状況や全体の形状を知ることのできる個体は皆無であり、細分はできなかった。口縁部が外反気味に伸びるもの、直線的に伸びるもの、また内彎気味に伸びるものが見られ、端部は丸く納めるもの、平坦に仕上げるもの、上下に拡張するものが見られる。端部を上下に拡張するものの中には、外面に擬凹線を巡らせるものもある。535・536は廻間分類Ａ１類の器台で、端部を大きく垂下させて面を形成し外面に擬凹線を巡らせる。

器壁の最終調整は、内外面共に縦方向のミガキを基本とするが、横方向のミガキが加わる例もある。

⑶ 高坏または器台脚部（図174、図版43）

５点（537～541）を図示した。内彎するものと外反するものが見られる。低脚の539・541は高坏Ｆ類に、540は高坏Ｆ類か小型の器台に接続するものと思われる。

⑷ 鉢

①鉢Ａ類（図174、図版44）

口縁部片の３個体(542・543・549）を実測した。口縁部が短く外傾して、明瞭な段を形成するように上方に端部をつまみ上げている。端部外面に、542・543は横線文、549はヘラ描き列点文を施している。

②鉢Ｂ類（図174、図版44）

口縁部が長く外傾して端部付近に段を持つもので、544～548、550～552・558の９個体を実測した。文様帯は、口縁端部の刻み目、端部外面の列点文または横線文と列点文、頸部の横線文からなり、それらの組み合わせで多様である。このうち口縁外面の横線文は住居跡出土資料では、Ⅱ－３期の遺構の住居に限られ、鉢の文様要素としては新しいものといえる。

器壁の最終調整は、縦方向または横方向のミガキが認められる。外面に煤が付着する個体も見受けられる。

③鉢Ｃ類（図174・175、図版44）

口縁部が長く外傾して、端部に段を持たない鉢である。553～557・559の6個体を実測した。ただし、

554・555のように、B類との区別の微妙なものもある。文様の構成は鉢B類と共通する。

器壁の最終調整は、縦方向または斜方向のミガキが見受けられる。外面に煤が認められる個体は見いだし得なかった。

④鉢体部片・底部（図175、図版44）

施文の見られる体部片3点（560～562）と体部から底部にかけての破片2点（563・564）を実測した。体部片はいずれも頸部付近の破片で、横線と列点文、横線と櫛描き列点文、竹管列点文をそれぞれ巡らしている。体部から底部にかけての破片は、いずれも小型の鉢である。

⑤ 甕

①甕A類（図175、図版44）

体部小破片2点（565・566）と底部片2点（567・568）を図示した。565・566は外面の最終調整に細密な櫛条痕を用いている。567・568は外面最終調整に条痕が認められないが、ともに当遺跡や砂行遺跡出土の条痕文系土器に特有の赤褐色を呈することから、A類とした。このうち567は、底部直上に擬口縁の痕跡を残し、底部外面には布目圧痕が認められる。

②甕B類（図175、図版44）

短く外傾した口縁部の端部に段をもつもので、1個体（569）を図示した。無文の甕で系譜は不明である。

③甕C類（図175、図版44）

長く外傾した口縁部の端部に段をもつもので、3個体（570・571・572）を図示した。いずれも段を形成するように上方に端部をつまみ上げているが、段は明瞭ではない。住居跡出土資料や砂行遺跡出土の甕C類は、口縁部端部に刻み目、口縁部及び頸部外面に横線文や列点文を施すことが多いが、上記の3個体に施文は見られない。

口縁部のみで体部から底部に接合する資料は得られなかったが、平底に接続するものと推定され、在地色の強いものといえる。

④甕D類（図175・176、図版33・44）

長く外傾した口縁部に段を形成しないもので、573・574～584の12個体を図示した。口縁部は直線的に伸びるもの、外反するもの、やや内彎気味のものが見受けられる。端部は丸くおさめるものと面を形成するものが見られるが、584の端部は大きく拡張する。無文のものが多く、加飾をしない傾向が強いが、574は口縁部端部に刻み目、頸部外面に横線文と列点文、582は頸部に横線文を施している。574は比較的良好な遺存状況である。

底部まで接合する資料は得られなかったが、C類と同様平底に接続するものと推定される。

⑤甕体部片（図176、図版44）

585～588の4個体を図示した。585は甕の体部大破片で、頸部に横線と列点文を施す。器壁外面はハケ、内面はケズリのち指ナデによる調整が認められる。586～588は頸部付近の破片で、いずれも横線と列点文を施す。

⑥甕底部（図176・177、図版33・44）

甕平底19個体（589～607）と台付甕台部18個体（608～625）を図示した。住居跡及び土器集積出土

の実測遺物のうち、甕底部の形状を確認できる個体は、平底54に対し台付（台部のみの出土が多い）は31である。実測可能な個体を極力図化したため、両者を合計した６：４の比率が当遺跡における、平底と台付の本来の比率を反映しているといえる。隣接する砂行遺跡の大溝出土資料では９：１の比率であることが報告されているが、それと比較すると、当遺跡では平底の圧倒的優位は見られず、むしろ拮抗しているというべき状況である。

ここに示した平底は、ＳＵ01出土の甕Ｃ類（454）やＳＢ09出土の甕Ｄ類（30）、同じくＳＢ09出土の甕Ｇ類（31・32）に見られるように、Ｃ・Ｄ類および在地系のＧ類に伴うもので、「在地系の甕」の底部であるといえる。台部は外来系の甕Ｂ類に伴うことは間違いないだろうが、Ｂ類の出土は住居跡・包含層ともにごくわずかであり、上記の台付がすべてＢ類に接続すると考えるには無理がある。砂行遺跡では、小型の台部は甕Ｄ類の小型品に接続する例が報告されており、当遺跡でも甕Ｄ類に接続した可能性は高い。また、ＳＵ01出土資料の中には、ほぼ完形に近い台付の鉢Ｂ類が出土しており、ここで取り上げた台部のうちいくつかは鉢に接続していたものである可能性も考えられる。鉢Ｂ類の口縁部の形態は甕Ｃ類と全く同一であり、ともに在地色の強い土器であることをふまえると、甕Ｃ類に接続した可能性も示唆する資料と思われる。基本的に在地系のものと考えられる鉢や甕が、台部を伴うのは周辺地域の台付甕と折衷した結果と考えられる。

平底甕はいずれも体部外面はハケ調整の跡を明瞭に残すが、底部は内外面ともにケズリ、指ナデあるいは指オサエで仕上げられている。底の外面は、整形の最終段階で粘土紐を輪郭に沿って輪状に貼り付け、平らに仕上げる方法をとるものが多く、その結果、底の中心部に凹みが残る個体が多い。591、593、604はその凹みが顕著な個体である。

台付甕台部は、基部と底径の差が大きく、はの字状に大きく広がるものが多いが、基部と底径の差が小さく、広がりの小さいものも存在する。裾部にかけて内彎するもの、外反するもの、直線的にのびるものがそれぞれ見られ、端部は丸くおさめるもの多いが、面を作るものも認められる。内外面ともにケズリ、指ナデあるいは指オサエで仕上げられているものが大半で、ハケ調整の跡を明瞭に残すものは１個体のみである。

⑦甕Ｆ類（図177、図版44）

Ｓ字状口縁台付甕で、包含層からは626と627の２個体のみが出土している。前者はＳＢ54の一部、後者はＳＢ57の一部を含むグリッドの第Ⅳ層から出土している。いずれの住居でもＳ字状口縁台付甕が出土しているが、形状や残存状況から別個体と判断される。当遺跡では住居跡出土の５点と合わせ７点が出土している。626の口縁部は、外面に押し引き列点文を施し、頸部の内外面に横ハケを持つもので、Ｓ字状口縁台付甕Ａ類に属するものである。627は基部の破片である。

当遺跡出土のＦ類のうち口縁部片の４点は、すべてＳ字状口縁台付甕Ａ類に属するものである。砂行遺跡では３点が出土しているのみだが、すべてＳ字状口縁台付甕Ａ類に属するものと報告されている。当遺跡は若干出土数が多いが、甕全体に占める割合は極めて低く、客体としてわずかに搬入されたという状況に変わりはない。

⑧甕Ｇ類（図177・178、図版44）

北陸系（法仏・月影式）の甕口縁部片で、18点（628～642）を実測した。住居跡及び土器集積出土のＧ類は完形２点を含む12点で、合計30点にのぼり、Ｃ・Ｄ類に次いで出土数は多い。砂行遺跡では

大溝と包含層あわせて５個体が確認されているが、それに比べて当遺跡の出土数の多さは注目される。

口縁部外面の段が強いもの（629～633）は、内面の段も明瞭である傾向が強い。いずれも頸部から体部への接続状況は不明だが、629・631の折損部の状況から頸部は強く屈曲するものと推定される。630が口縁部外面に不明瞭な擬凹線を施す以外はいずれも無文だが、北陸系の要素が強く、搬入品である可能性を持つ一群と思われる。

634～641は口縁部外面の段が甘く、内面の段も不明瞭である。頸部の屈曲も緩やかな傾向が強い。口縁部外面に不明瞭な擬凹線を施すものと無文のものがある。643～645は口縁部外面の段はさらに不明瞭でむしろ曲線を描いて立ち上がるが、内面の段は不明瞭ながら残存する。やはり、不明瞭な擬凹線を施すものと無文のものがある。

642は、口縁部外面の段を器壁に粘土を貼り付け肥厚させることで形成する。内面の段は、きわめて不明瞭である。これと同じ形態・形成方法の口縁を持つ甕が、当遺跡ではＳＢ09（31・32）、ＳＢ82（443）、ＳＵ02（460）から出土し、砂行遺跡の大溝からも1点（1626）が出土している。やはり、不明瞭な擬凹線を施すものと無文のものの両方が存在する。体部から底部の形態はＳＢ09出土例から甕Ｃ・Ｄ類に近いものと考えられる。

634以下の個体は、北陸系の影響を受けて在地で生産されたものである可能性が高いと考えられる。

⑥ 壷

①壷Ａ類（図178・179、図版33・45）

赤彩・加飾の認められる、いわゆるパレススタイルの広口壷で、646・648～650の４個体を図示した。646はＡ１類で口縁部は外反し、途中で緩やかに屈曲して広がる。端部は上下にわずかに拡張する。体部最大径は中位に位置する。文様帯は、口縁端部外面に擬凹線、口縁内面に羽状文、頸部近くに横線と弧帯文及び列点文を施す。648はＡ２類の口縁部で、内面に平坦面を形成する。端部の拡張は見られないが、端部外面には擬凹線を施し、円形浮文を貼り付けている。649・650は、外面に赤彩が認められることからＡ類としたが、中型品であるため、壷Ｄ類の可能性もある。649は底部の大破片で、体部最大径は下位に位置する。

②壷Ｂ類（図179、図版33・45）

パレススタイルの範疇に入らない広口壷で、647・651～661の12個体を図示した。647は口縁部小破片で、端部はわずかに垂下する。651～656は外反する口縁部内面に平坦面を持たないものである。651は外反する口縁部の途中で屈曲し、直線的に外方に伸びる。内面に平坦面を形成しようとする意識を見ることができる。口縁端部は垂下拡張する。652～656の口縁端部は、上下に拡張するものやわずかに垂下するものが見られる。施文は、651は口縁端部外面に１条の擬凹線と刻み目、653・657・659は擬凹線を施す。656は口縁部内面に沈線3条を巡らしている。657～659は口縁部内面に平坦面を形成する個体であるが、657・658は平坦面との境に強い段を作る。659は口縁端部をわずかに垂下する。660は頸部付近の破片、661は体部の大破片で、文様体は前者が横線と波状文、後者は横線と波状文、竹管列点文を施す。

③壷Ｃ類　（図179）

口縁部が内彎するＣ２類を１個体（662）実測した。体部に比べ口縁部は長く外傾し、端部外面に横

線を巡らせ、丁寧な縦方向のミガキを外面に施す。口縁部に比べ体部が小さいことが推測され、脚台を伴うものである可能性がある。

④壷Ｄ類（図179・180、図版33・45）

口縁部が直口または外反するＤ類を３個体（663・664・666）、口縁部が内彎するＤ２類を１個体（665）、底部（667）を１個体実測した。口縁部端部は664以外は、いずれも平坦面を形成している。665の口縁部端部外面に横線文を施すほかは、施文は認められない。いずれも小型品である。なお、667は、壷Ｄ類の底部であるが、出土状況・胎土の観察から、666と同一個体である可能性が高い。668は有段口縁を持つ短頸壷で、Ｄ３類とした。施文は認められず、体部最大径は下位に位置する。

⑤壷体部片（図180、図版45）

頸部付近の施文が認められる体部片を５点図示した。横線、列点文、竹管列点文、櫛描き列点文、羽状列点文を単独、あるいは複数組み合わせて、文様を構成している。673はやや雑然としているが複雑な構成である。

⑥壷底部（図180、図版34・45）

壷Ｂ・Ｃ・Ｄ類の底部を674～687の14個体、あわせて壷の脚台と思われる１個体（688）を図示した。674～683の多くはＢ類の底部と推測されるが、小型のものはＤ類のものも含まれるかもしれない。凹み底であるもの（674・675）、底部直上に明瞭なくびれを持つもの（676～678）、くびれが曖昧でむしろ単純な平底に近いもの（679～683）が存在する。677の底外面には、ハケ調整の跡が明瞭に残る。684～687は壷Ｄ類のものであろうが、下膨れが顕著な685はＣ類である可能性がある。687の底部には、ＳＢ81出土の壷Ｄ類底部と同様の水平方向に貫通する穿孔が認められるが、その機能については不明である。688は大きさや折損箇所の状況から、壷の脚台の可能性が高いと判断した。

⑺ 土製品（図180、図版45）

689は、直径1.2cm、厚さ７㎜の土製の円盤で、中ほどに直径２㎜程の穿孔がある。穴は両側とも面取りされている。円盤は薄くて軽く、穿孔位置もやや中心をずれているが、土製紡錘車として用いられた可能性を考えることができる。製品の上面底面ともに指オサエの跡が明瞭に残る。

第２項　Ⅰ・Ⅲ期の土器

ここでは、当遺跡から出土したⅠ期およびⅢ期の土器について報告する。Ⅰ期の土器は２点が出土している。いずれも住居跡内から出土しているが、住居跡に帰属するものではないため包含層遺物として扱うことにした。Ⅲ期の土器は、第Ⅲ層から出土した。

⑴ Ⅰ期の土器（図181、図版45）

当遺跡出土の土器のうち、Ⅰ期の所産と考えられるものは２点（690・691）のみである。前者はＳＢ16内のＰ４の埋土に、後者はＳＢ58の埋土に包含されていた。690は深鉢の口縁部小片と考えられ、肥厚した端部外面に口縁ラインに沿って横位の沈線を施す。刺突も認められる。縄文時代後期前葉の北白川上層式の土器片と考えられる。691は甕の口縁部小片で、端部外面に突帯を貼り付け、棒状工具による押圧を施している。縄文時代晩期～弥生時代初頭の五貫森～樫王式のいずれかに位置するもの

と思われるが、小片で摩耗も著しく、詳細は不明である。(注12)

⑵ Ⅲ期の土器

Ⅲ期の土器は、692～701の土師器と702～703の須恵器が該当する。前者は南谷の第Ⅲ層の下層から出土した。出土地点は、南谷の南西に下る斜面の裾近くに位置するＹ12グリッドの北東隅に集中する。谷の中心近くではあるが傾斜地であるため、一カ所に集中する出土状況はやはり不自然で、本来は何らかの遺構が存在したものと想定し精査を繰り返したが、付近から遺構は検出されなかった。後者の須恵器のうち、703は北尾根から南尾根に向かうの鞍部付近（ｏ10グリッド）に位置するＳＢ05・06を覆うⅡ層の最下位部から、小破片が散乱する状況でまとまって出土した。接合率は比較的高かったが、接合できなかった破片も、形状や胎土の状況から同一個体と考えられるものばかりであった。こうした出土状況から、この場合も本来は何らかの遺構が存在したものと想定し調査を進めたが、付近から遺構は検出されなかった。702は小片で、ｑ10グリッドのⅡ層から単独で出土した。

いずれの土器も後述のように５世紀の半ばから後半に属する。この時期の遺構は、当遺跡では南青柳古墳のみであり、古墳祭祀との関連が想定される土器群である。(注13)

①高坏（図181、図版34・45）

692は高坏Ｇ類で、坏体部は内彎気味に上外方に伸び、段で屈折した後、口縁部は強く外反して端部は丸くおさめている。段部はわずかに垂下し、稜を形成する。器壁の調整は、指オサエ、ハケ調整のを行った後、ナデで最終調整をしている。松河戸Ⅱ式～宇田式に属するものと考えられる。693は高坏Ｈ類で、坏部は椀形を呈する。器壁の調整は、指オサエとハケ調整の痕跡を確認できる。宇田式に属するものと考えられる。脚部は５点を実測した。比較的残存状況のよい695・698は、いずれも低脚で、基部から脚端部にかけて円錐形に大きく広がる。裾部はすべて強く屈折し、屈折部内面の高さはわずかである。松河戸Ⅱ式以降の脚の特徴をよく備えていると言える。

②甕（図181、図版34）

699は甕Ｉ類の口縁部付近及び体部で、口縁端部の凹みは見られず、平坦に仕上げられている。体部には、下半部に下から上へ、その後上半部に上から下へと粗いハケにより施した鋭い刻み痕が明瞭に残存し、外面は煤が付着する。器壁の調整は、内面の頸部付近は指オサエ、体部にはケズリと指オサエの痕跡を確認できる。700は甕Ｉ類の台部で、大きくハの字状に開き、外面はケズリと指オサエ、内面は指オサエによって整えられている。１個体分と想定される多数の小片が、散乱集積して出土したという検出時の所見から、699と700は同一個体と考えられる。上記の高坏と同時期のものであろう。

③壷（図181、図版34）

701は壷Ｅ類で、いわゆる二重口縁の小型丸底壷である。松河戸Ⅱ式～宇田式に属すると考えられる。

④須恵器坏蓋・高坏（図181、図版34・45）

702は須恵器坏蓋の口縁部片で、わずかに外傾し、端部は内面に沈線を入れて段を形成する。703は有蓋高坏の坏部で、受け部は体部から大きく突出し、細く鋭い。体部は丸く張りを持たせて内彎し、受け部・口縁部に接続する。口縁は大きく内傾し外反しつつ立ち上がり、端部は内面に沈線を巡らせて段を形成し、外傾させ、さらに外反させて端部を尖らせている。器壁の調整は、体部は坏底部を回転ヘラケズリで、他は回転ナデで行っている。

702・703ともに猿投編年の城山2号窯期を中心とする時期のものと思われる。

第3項　Ⅳ期以降の土器

Ⅳ期以降、当遺跡における人の営みは希薄となり、遺物の出土数は激減する。しかも遺構に関係する遺物はなく、Ⅳ期の須恵器が小片ばかり36点、Ⅵ期以降では白瓷系陶器が小片も含めて20点、施釉陶磁器は4点が包含層より出土しているのみである。以下には、遺物包含層から出土したⅣ期以降の土器について報告する。なお、各部位の直径及び形状を復元できる個体を極力実測した。

(1) 須恵器（図181、図版45）

すべてⅣ期に属するもので、坏蓋2個体（704・705）、長頸壷1個体（706）を実測した。各個体の出土状況で特徴があるのは、北尾根から南谷に向かう南向き斜面のほぼ同一区域（q14・15・r14・15・s14）から、斜面を流れた状況で散乱して出土しており、接合率もよかったことである。斜面上部に何らかの遺構が存在していたことが予想される出土状況であった。これらの須恵器は、隣接する砂行遺跡や東方500mの同一丘陵状に所在する深橋前遺跡では、後期古墳群への副葬や供献、火葬墓への供献または蔵骨器そのものとして利用された例が多く、当遺跡の上記の須恵器もそうした性格のものであることが想定される。ただし、当遺跡の場合、範囲内に後期古墳は存在しないことから、むしろ遺構としては規模が小さく流出や破壊を受けやすい火葬墓が、かつては出土地点の斜面上部に存在していた可能性が考えられる。とすれば、長頸壷と坏蓋は蔵骨器とその蓋として、セットで用いられたものとも考えられる。なお、この区域やさらにその下の斜面からは上記とは別個体の須恵器の破片が数点出土しており、また、東谷でも十数点の小破片が出土している。さらに、平成8年度の試掘確認調査では、北尾根から南東方向に続く尾根の先端部（当遺跡から南東約100m、試掘確認調査54地点）から、この時期の須恵器坏蓋等の破片が数点出土しており、調査範囲を中心とする尾根や斜面上部に砂行遺跡で検出されたような火葬墓が存在していた可能性は十分に考えられ、上述の須恵器は、生活の場でなく墓域または祭祀の場に伴うものと考えられる。

704・705の坏蓋は、いずれも口縁端部を折り返しており、残存状態の比較的よい705は天井部を欠損するものの、おそらく天井部に平坦面を形成していたことが想像され、天井部の器壁も厚くしている。以上の点から8世紀前半から中葉におさまるものと考えられる。706の長頸壷は口頸部を欠損する。肥厚した底部から上外方へ伸びて肩部で内彎し、丸みのある張りの強いラインを形成し、頸部に接続する。体部最大径は、体部の2/3の高さにある。体部外面の最大径直上に、一条の沈線を巡らしている。台部はわずかに外反して短く開き、接地部は平らな面をなす。調整は、体部外面下位、及び肩部上位、内面、台部内外面に回転ナデ、体部外面中位に回転ヘラケズリを施す。体部外面と底部内面に自然釉がかかる。美濃須衛窯のⅣ期第1小期に併行するものと考えられる。（注14）

(2) 白瓷系陶器（図182、図版45）

碗を7個体（707～713）、皿を2個体（714・715）を実測した。すべて北部系のものであり、明和1号窯式から大洞東窯式におさまるものと考えられ、実年代では13世紀半ばから15世紀初頭までのものと思われる。707は底部を欠くが、高台径がやや小さく体部の器壁は薄い。明和1号窯式～大畑大洞

窯式に属するものと考えられる。712は高台径が小さく、体部の器壁は薄く、器高をやや低くする。707よりは新しく、大畑大洞窯式～大洞東窯式に属すると考えられる。他の個体は体部下半以下を欠くため、詳細な時期決定は難しいが、いずれも体部の器壁は薄く、707から712の前後の時期のものと考えられ、皿は、いずれも器形が偏平化し、底径を大きくするもので、大畑大洞窯式～大洞東窯式に属すると考えられ、碗との時期差は認められない。(注15)

(3) 施釉陶磁器（図182、図版45）

４個体を実測した。716は龍泉窯系の青磁小碗で、体部は内彎して立ち上がる。外面に鎬蓮華文を施している。底部外面、高台内面を除き、内外面ともに青磁釉が施されている。中世に帰属するものである。717は蓋で、外面に鉄釉が施される。718は土瓶あるいは土鍋の底部と思われる。内外面には錆釉が施され、調整は外面は回転ヘラ削り、内面は回転ナデ、底部外面は糸切り後に回転ナデを行っている。いずれも幕末以降のものであろう。(注16)

第４項　金属製品（図182、図版46）

包含層から出土した、金属製品のうち４点を図示した。出土層位から2031はＳＢ67の谷側の崩落部分近くのⅣ層からの出土で、この住居に帰属する可能性があり、Ⅱ期に属するものと考えられる。2034は北谷中央部のⅢ層の下層からの出土で、Ⅲ期に属すると推定される。2032は北谷斜面上部の薄く堆積するⅢ層からの出土であり、中世段階以前のものと思われるが、詳細な時期は不明である。2033は北尾根から南尾根に向かう鞍部のⅡ層からの出土であり、詳細な時期は不明である。

2031は、曲刃鎌の基部近くの破片と考えられ、下側の端は外方に緩やかに広がることを確認できる。上端部は上方から加えられた何らかの圧力により、つぶれている。2032も曲刃鎌で、緩やかに彎曲する。2033は先端部は欠損するが、釘と考えられる。頭部は折り曲げて形成しており、角頭である。2034は両端部を欠損するが、釘と考えられる。

第５項　ガラス製品（図182、図版43）

包含層から２点のガラス製品が出土している。3001は、ｕ５グリッドの第Ⅰ層（南青柳古墳の墳丘を覆う薄い腐葉土層）の最下層から出土した。3002は、ｒ４グリッドの第Ⅱ層（南青柳古墳の墳丘を覆う墳丘盛土流出層）から出土した。

3001は、算盤玉の形状をなし、胴部最大径に当たる箇所には溝が巡る。中心に穿孔があるが、孔の両縁は面取りが明瞭である。色調は鮮やかなコバルトブルーで、光沢を伴うことから、近代以降の遺物と考えたが、山林に位置する当遺跡では、他にはほとんど近代の遺物は出土しておらず、また出土位置もⅠ層ながら古墳の墳丘面であることから、念のため化学組成を検討するための蛍光Ｘ線分析を行った。その結果、当製品はソーダ石灰ガラス製で、古代ガラスの特徴的な化学組成を示すという報告がなされた（詳細は第７節４項「南青柳遺跡出土ガラス製品の成分分析」参照）。ただし、管見の限りでは、古代のガラス玉にこのような形状の製品が存在した例をいまだ見い出せず、また前述のようにあまりにも新しいものである印象が強いため、ここでは以上の報告にとどめ、評価は保留しておきたい。

3002は、極めて小片であるが、側面は円柱状に弧を描き、上面下面は平坦に仕上げられていることを観察でき、ガラス小玉の端部の小片と判断した。色調は緑色であるが白っぽくくすんでいる。これも化学組成を検討するための蛍光Ｘ線分析を行ったが、カリガラス製であるとの報告がなされた（前掲第７節４項参照）。日本では、カリガラスは紀元前２世紀ごろから流通し始め、３世紀後半からのソーダ石灰ガラスの流通によって主役の座を奪われるが、６世紀後半から７世紀初頭まで細々と流通を続けるようである（注17）。当遺跡の住居跡群も南青柳古墳もこの期間に包括され、また、南青柳古墳の墳丘面から出土しているものの、同古墳の造営に当たっては、集落跡を破壊して盛土としていることが予想されることからも、いずれの遺構に関連するものかは特定できない。

注（第２章第５節のみ）

12　増子康眞　1985『愛知県を中心とする縄文晩期後半土器型式と関連する土器群の研究』

13　Ⅲ期の土師器・須恵器の編年観については、それぞれ前掲注４の赤塚（1994）、斎藤（1989）による。

14　Ⅳ期の須恵器の編年観については、渡辺博人　1984『美濃須衛古窯跡群資料調査報告書』各務原市教育委員会による。

15　白瓷系陶器の編年観・実年代観については、藤澤良祐　1994「山茶碗研究の現状と課題」『研究紀要第３号』三重県埋蔵文化財センターによる。

16　中近世陶磁器については、瀬戸市史編纂委員会『瀬戸市史　陶磁史篇』瀬戸市を参考にした。

17　肥塚隆保「古代ガラスの材質」『古代に挑戦する自然科学』第９回「大学と科学」公開シンポジウム組織委員会クバプロ

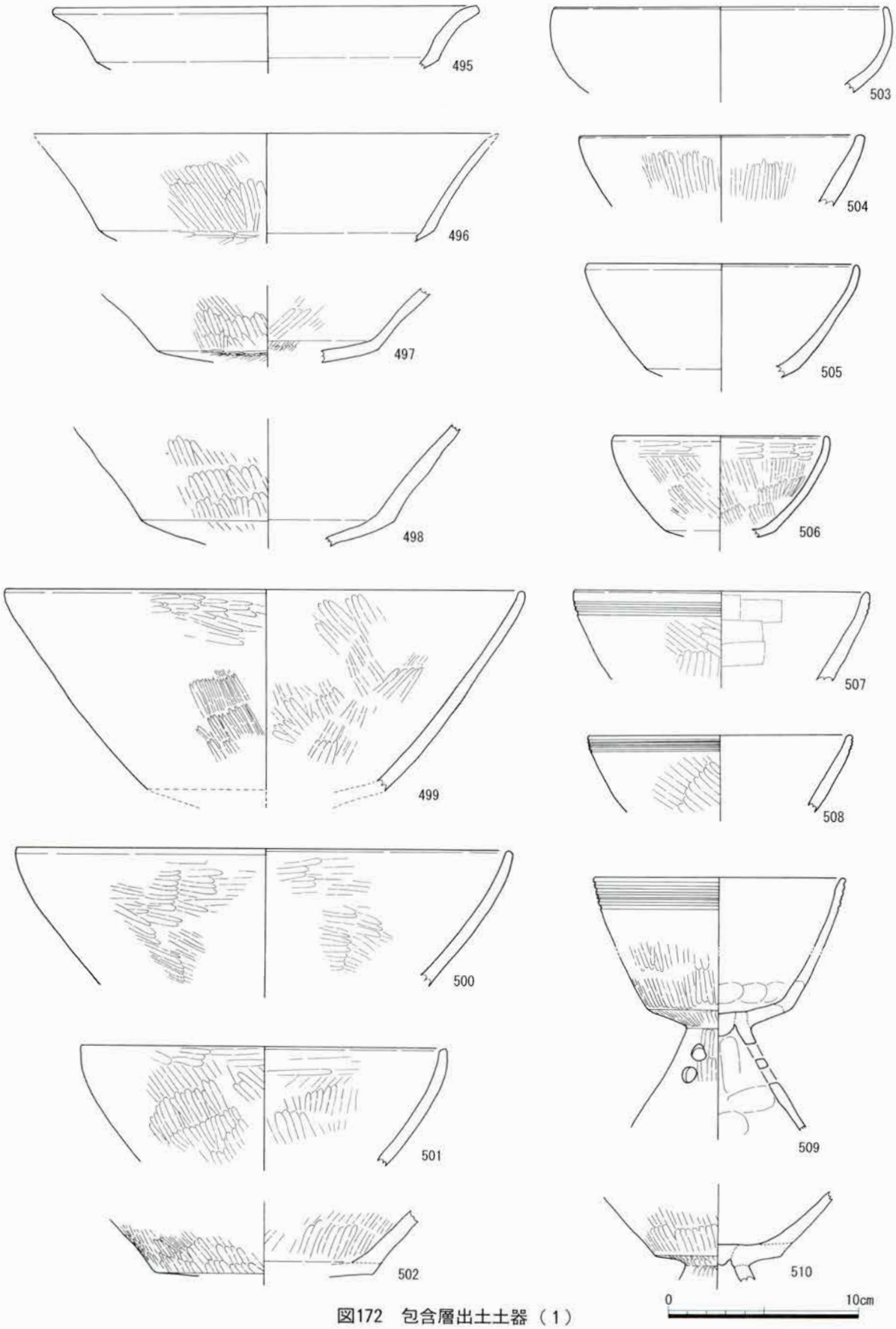


図172　包含層出土土器（１）

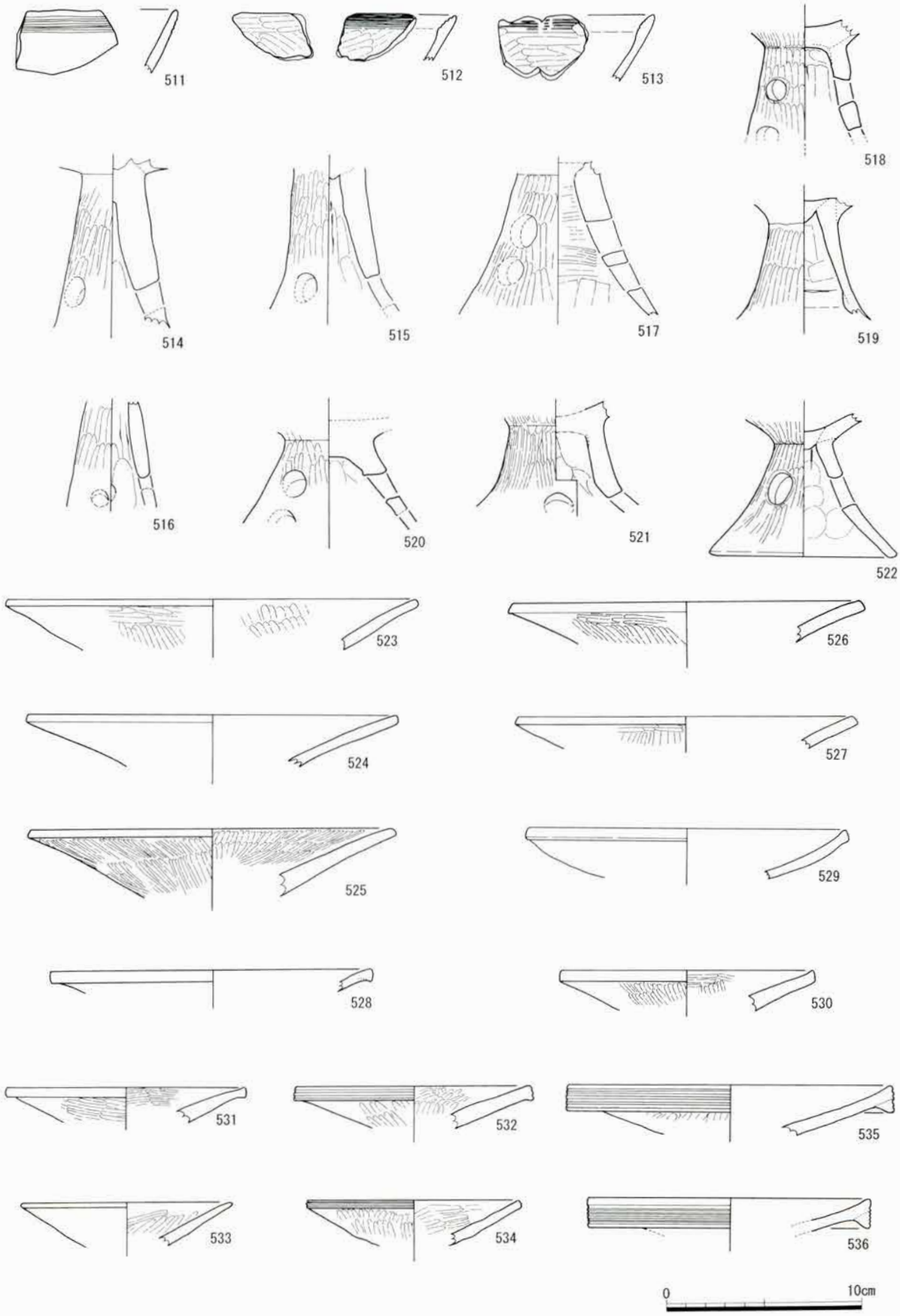


図173　包含層出土土器（２）

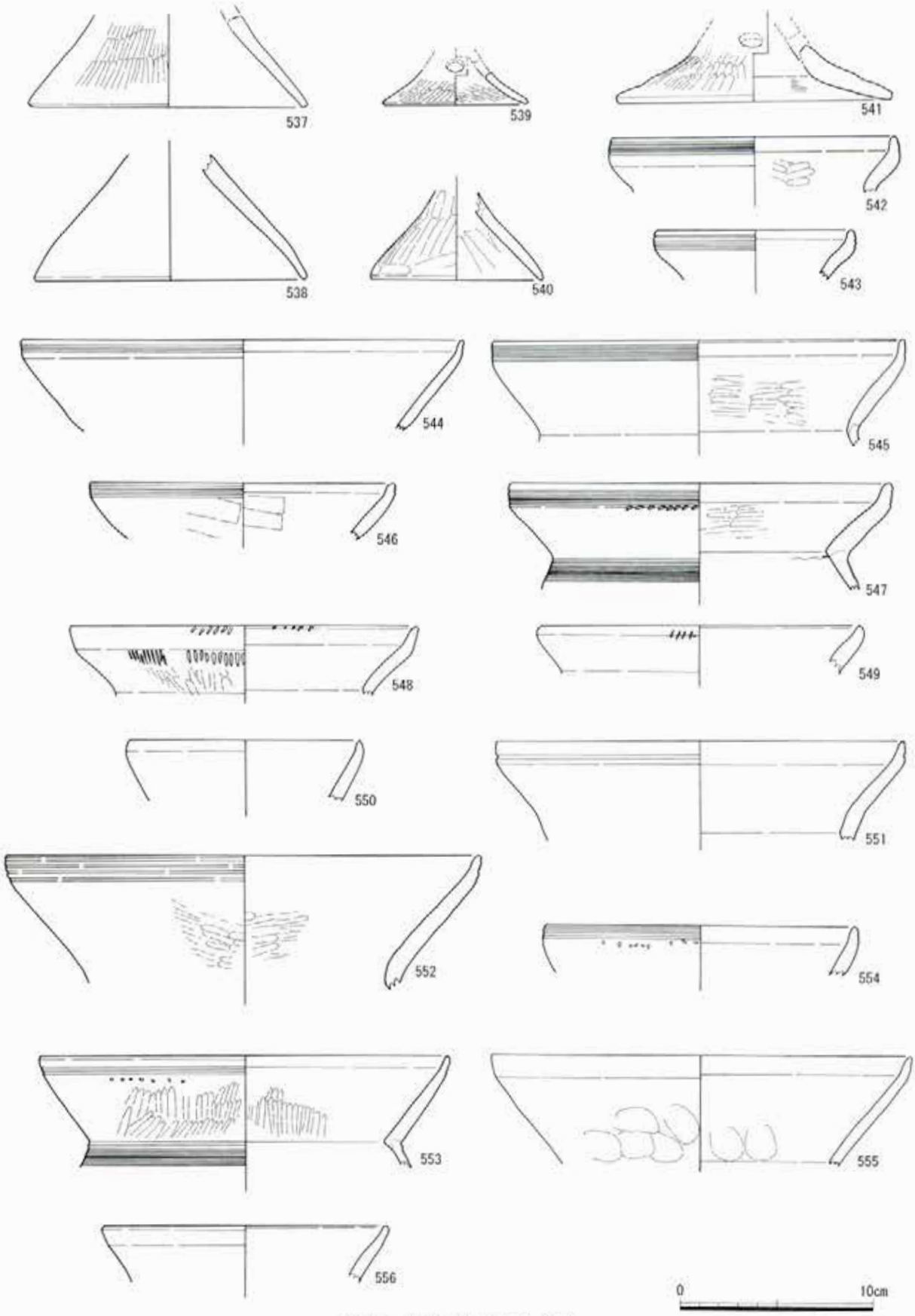


図174　包含層出土土器（３）

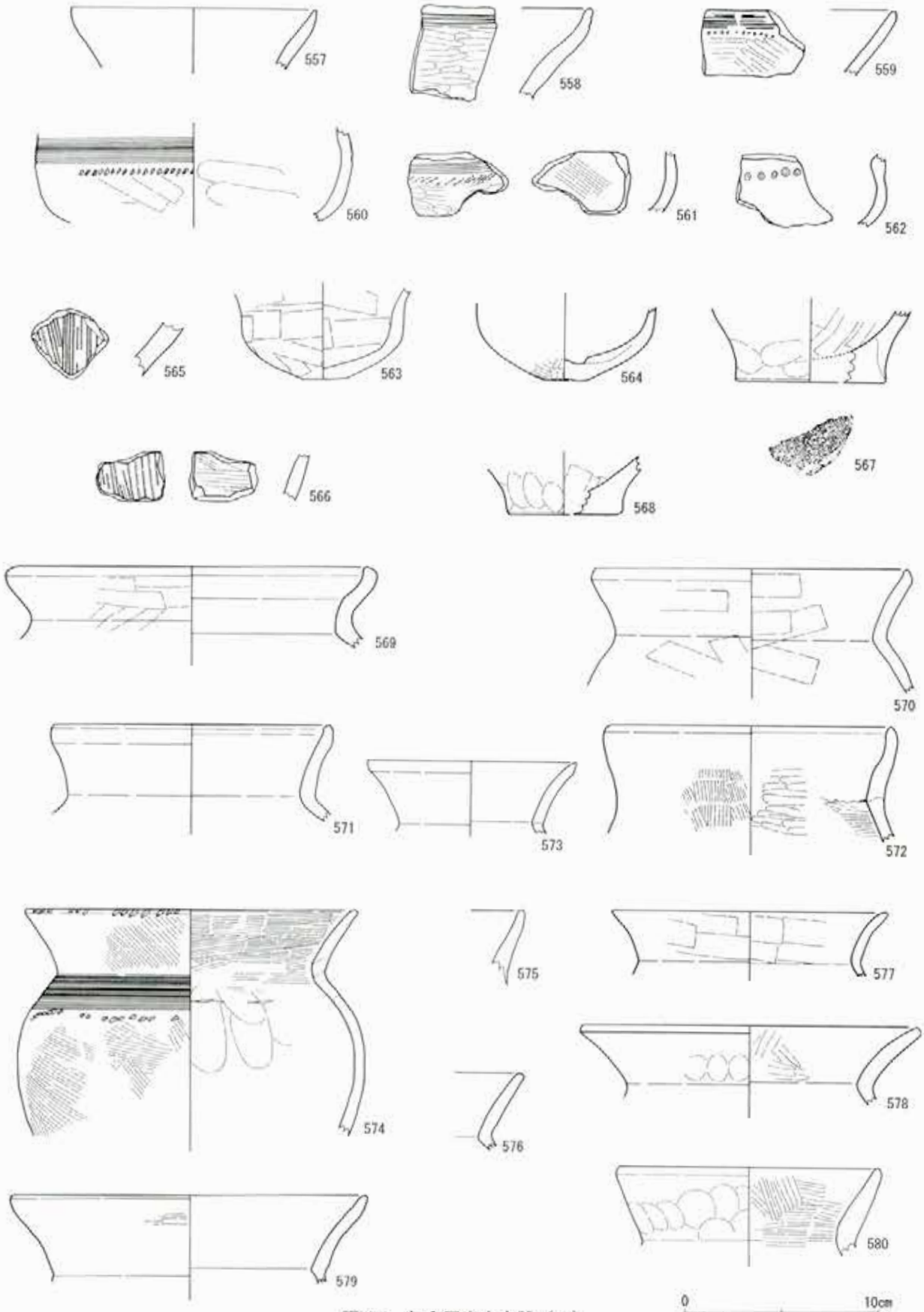


図175　包含層出土土器（4）

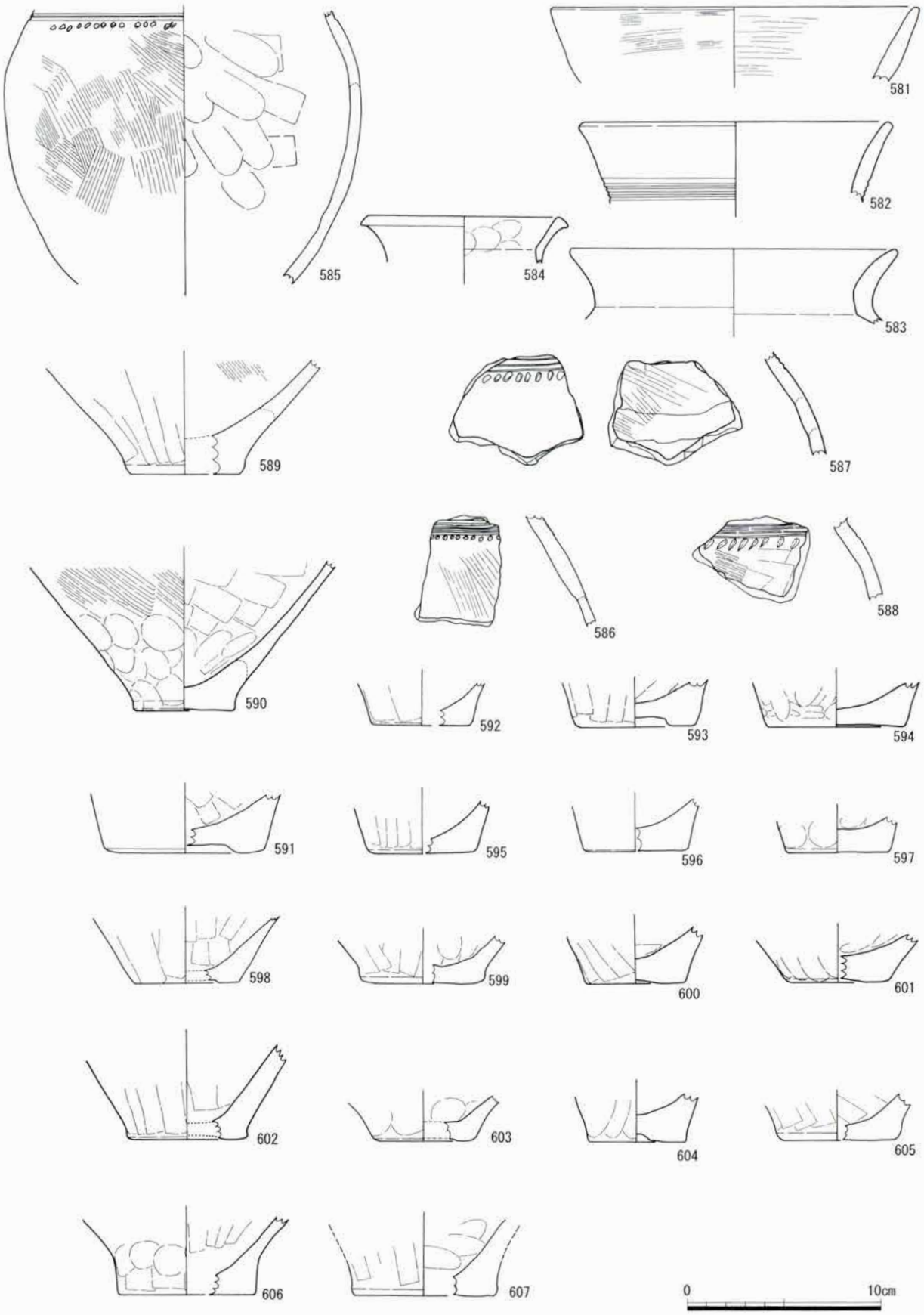


図176　包含層出土土器（５）

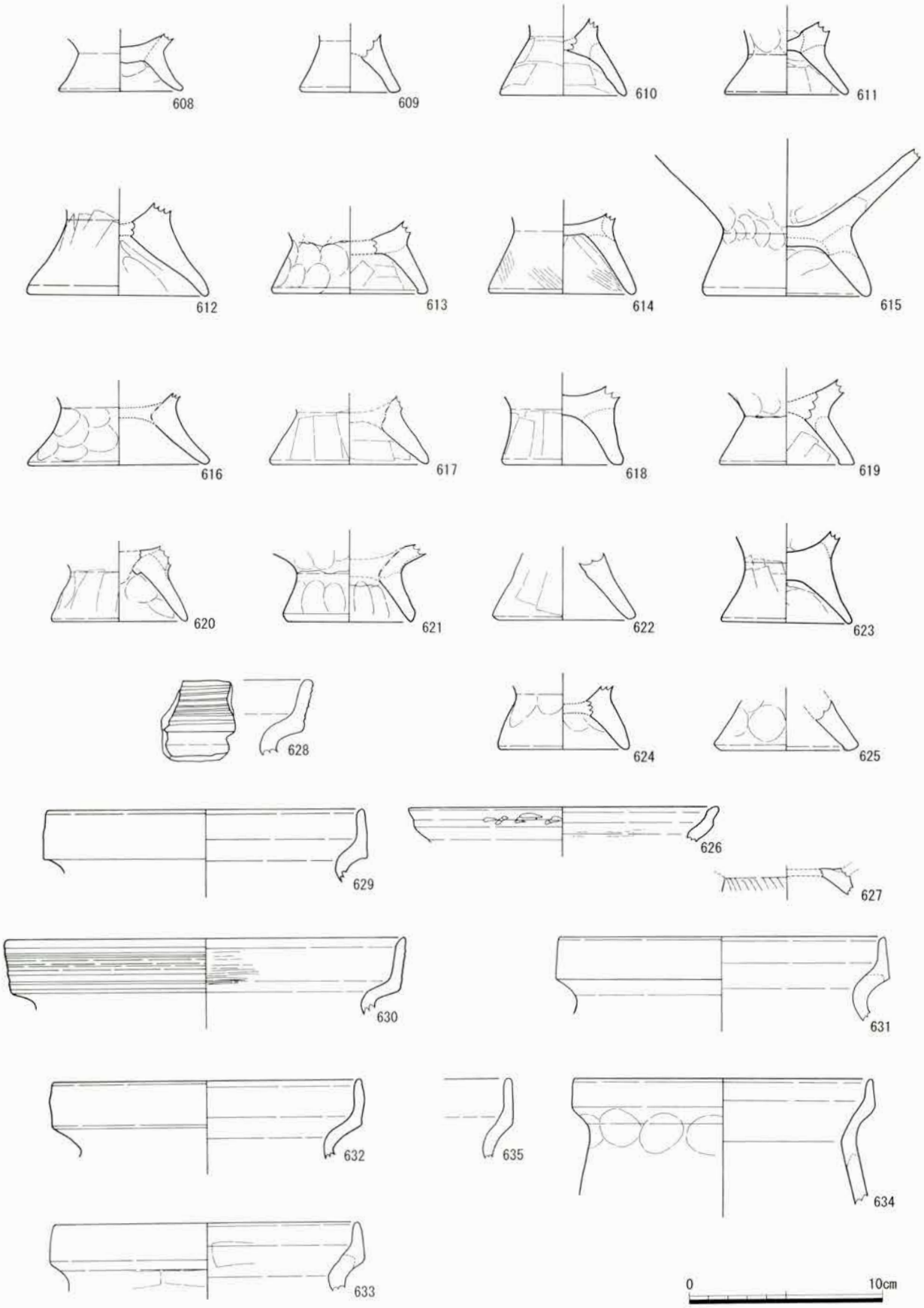


図177　包含層出土土器（６）

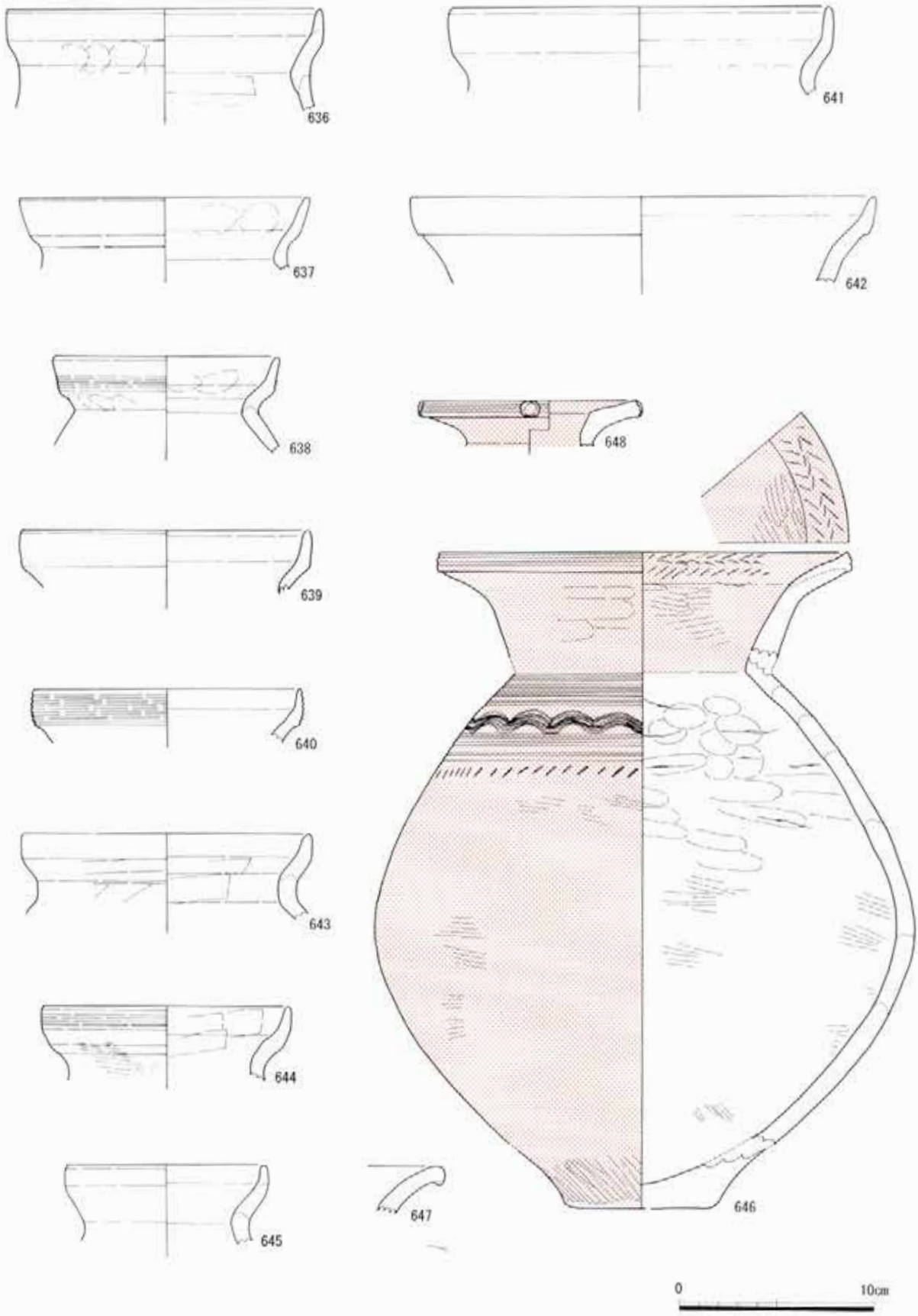


図178　包含層出土土器（７）

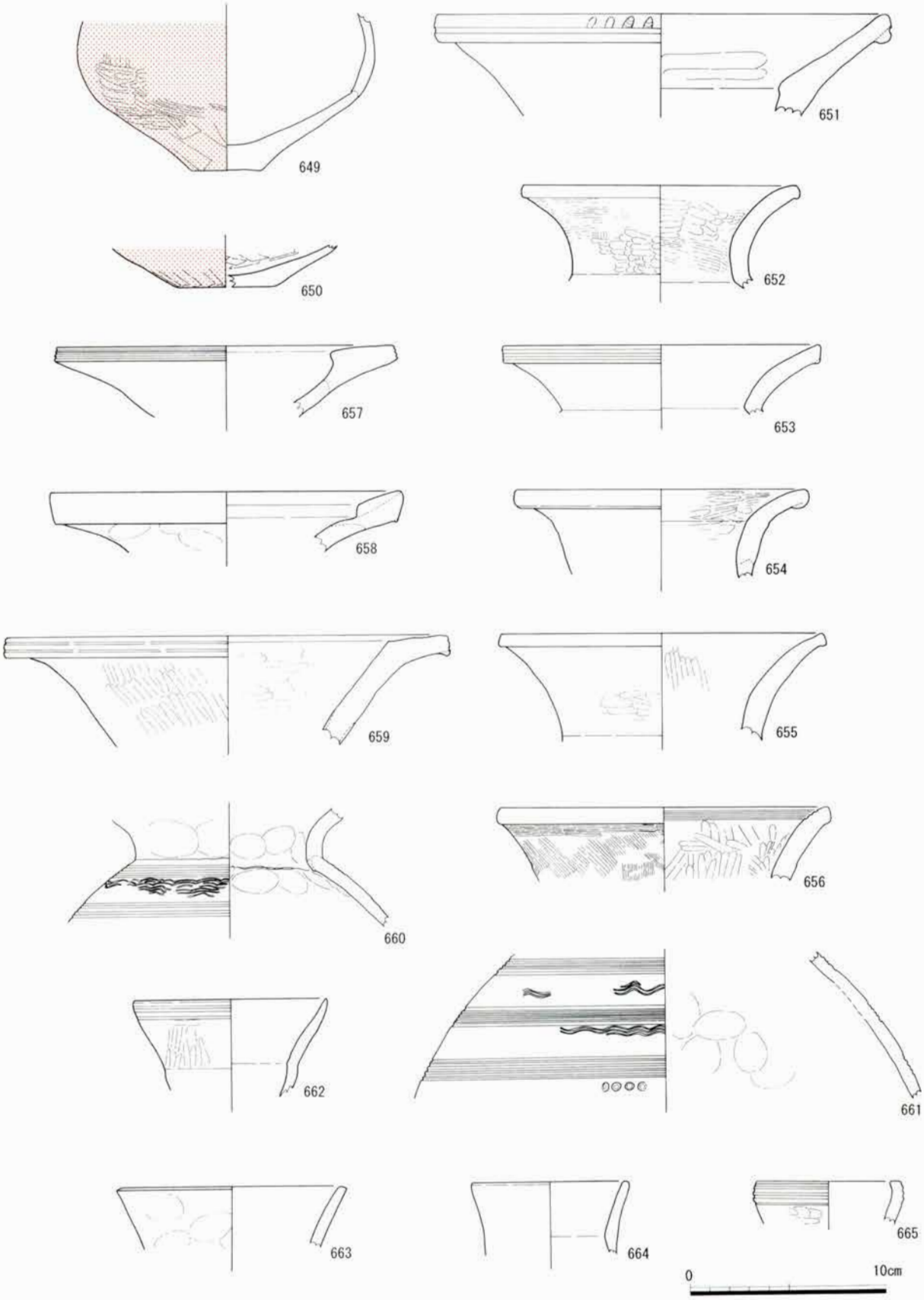


図179　包含層出土土器（８）

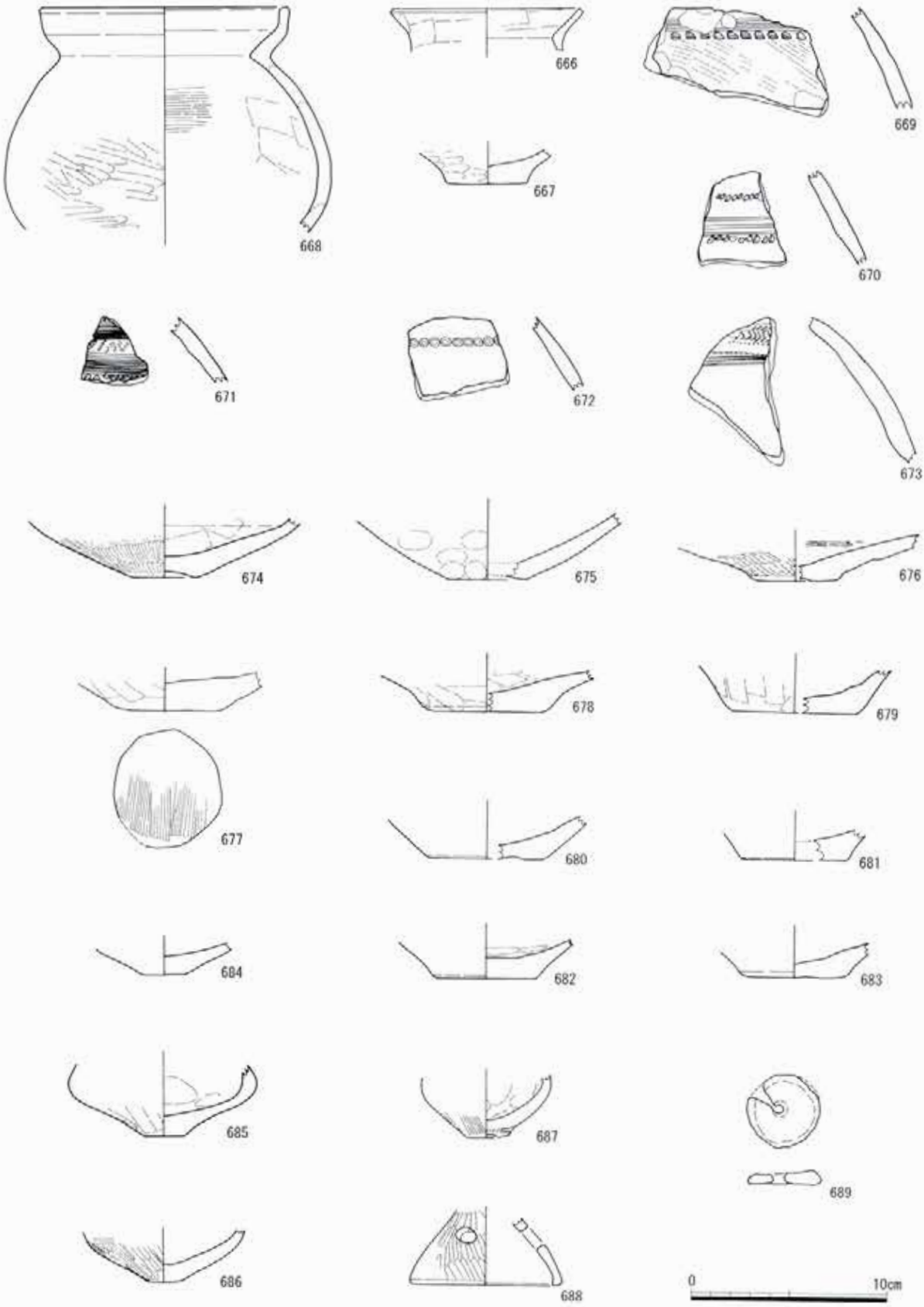


図180　包含層出土土器（９）・土製品

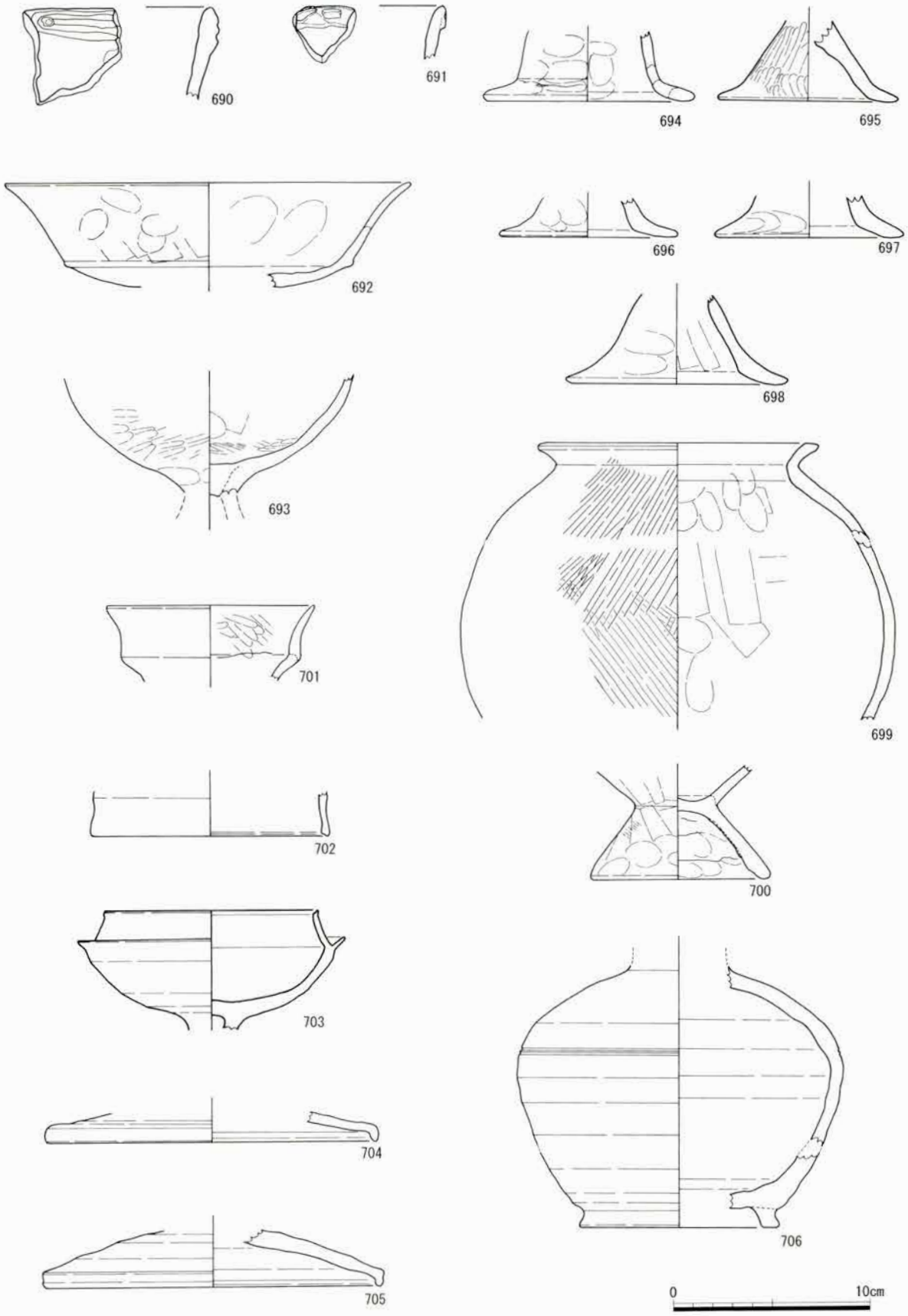


図181　包含層出土土器（10）

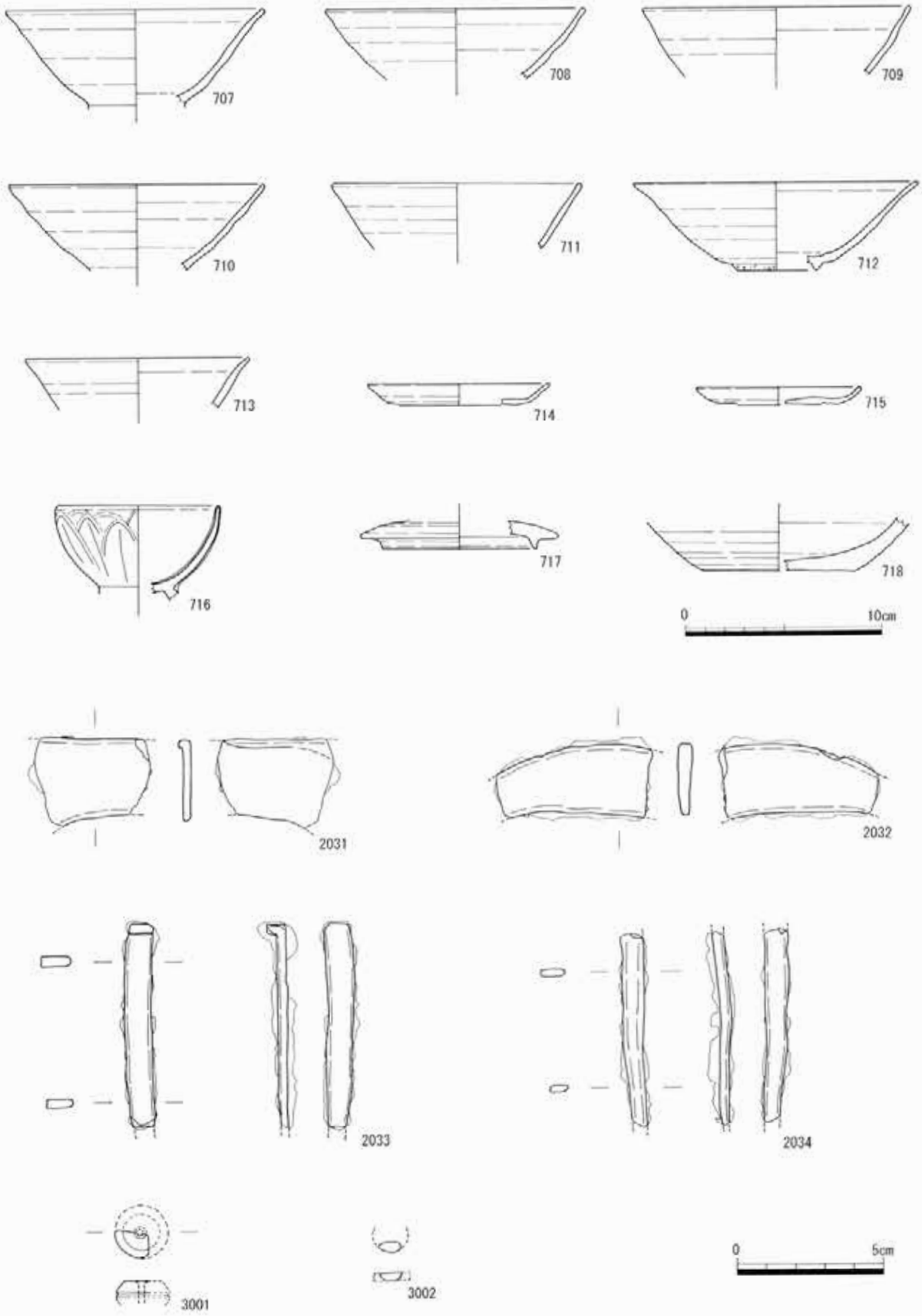


図182　包含層出土土器（11）・鉄製品・ガラス製品

第6節　南青柳遺跡出土の石器

南青柳遺跡からは、総数371点の石器が出土したが、製品は少なく、極力図化したが合計54点にとどまる（図183～188、図版47～49）。

1001～1005は旧石器時代に帰属すると考えられる。いずれも頁岩を石材とし、1001は削器、1002～1004は剥片、1005は石核である。

1006～1026の石鏃のうち、1006～1009の有茎石鏃は、関東以西で、縄文後期中葉から晩期にかけて出現するとされるが、1006・1007の下呂石製の有茎石鏃は、弥生時代までくだる可能性がある。凹基、平基鏃はいずれも縄文時代のものであろうが、1010、1011は縄文前期の可能性がある。

1027は石錐、1028・1029は石匙である。関東甲信越では、押圧剥離の石匙は縄文時代早期から出現し、前期に全盛を迎え、中期にはほとんど組成しないという。上記の2点はいずれも押圧剥離がなされており、前期までのものと考えられる。

1030～1032は打製石斧で、1030の裏面には若干研磨による摩耗が見られる。1033～1035は打欠石錘、1036～1044は敲石、1045・1046は磨石、1047は石皿の破片、1048は台石の破片。1053も台石で表面の凹みは自然のものであるが、凹みの底面に敲打痕が認められる。

1049～1051は砥石で、いずれも砂岩を用いており金属痕が明瞭に残る。1049はV字状のスジが各面に深く刻まれている。1050は、表面と右側辺にV字状のスジが数条刻まれている。1051は表面に磨面が形成され、極細の線状痕が見られる。

1052は特異な石製品で、砂岩を用い表裏側面を研磨して平坦に整形し、3箇所穿孔を施している。いずれの孔も中心部より両端が広くなっており、両側から穿孔されたものと見られる。その性格、用途は不明であるが、実用品とは考えられず、祭祀に関係するものであろうか。

以上のうち、遺構内出土の遺物は27点にのぼる。しかし1015・1040・1046・1049～1052の7点以外は、いずれも遺構の上層からの出土であり、斜面上部からの流れ込みと考えられる。遺構埋土の下層から出土した7点のうち、1049～1052の4点はいずれも床面に接した位置からの出土であり、1049～1051の砥石には金属痕が明瞭に残ることから、出土した遺構が営まれたⅡ期（弥生時代末～古墳時代初頭）に帰属するものと考えられる。1015・1040・1046の3点については、時期判断が難しいが、出土層位からは出土した住居跡に帰属する可能性がある。

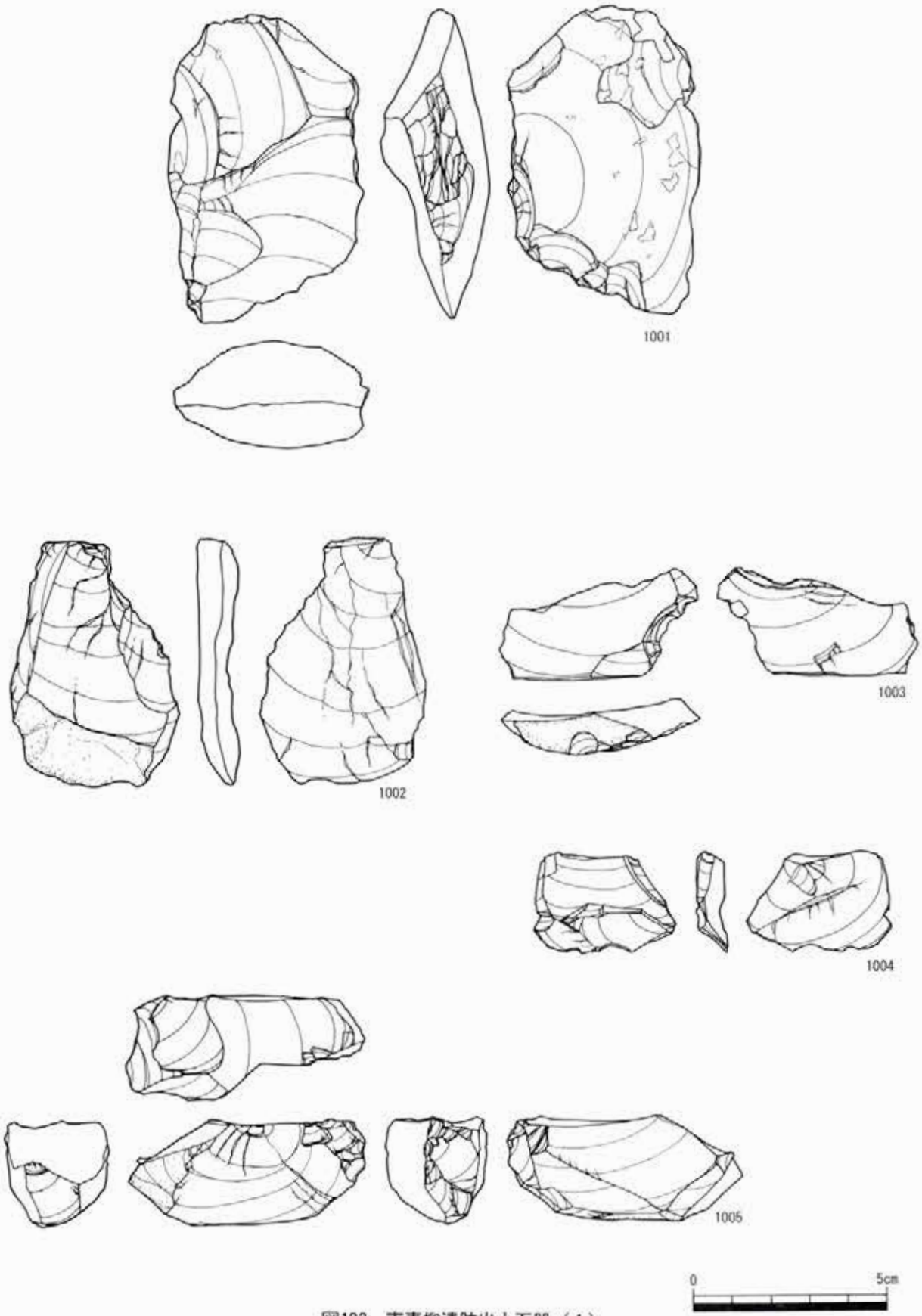


図183　南青柳遺跡出土石器（１）

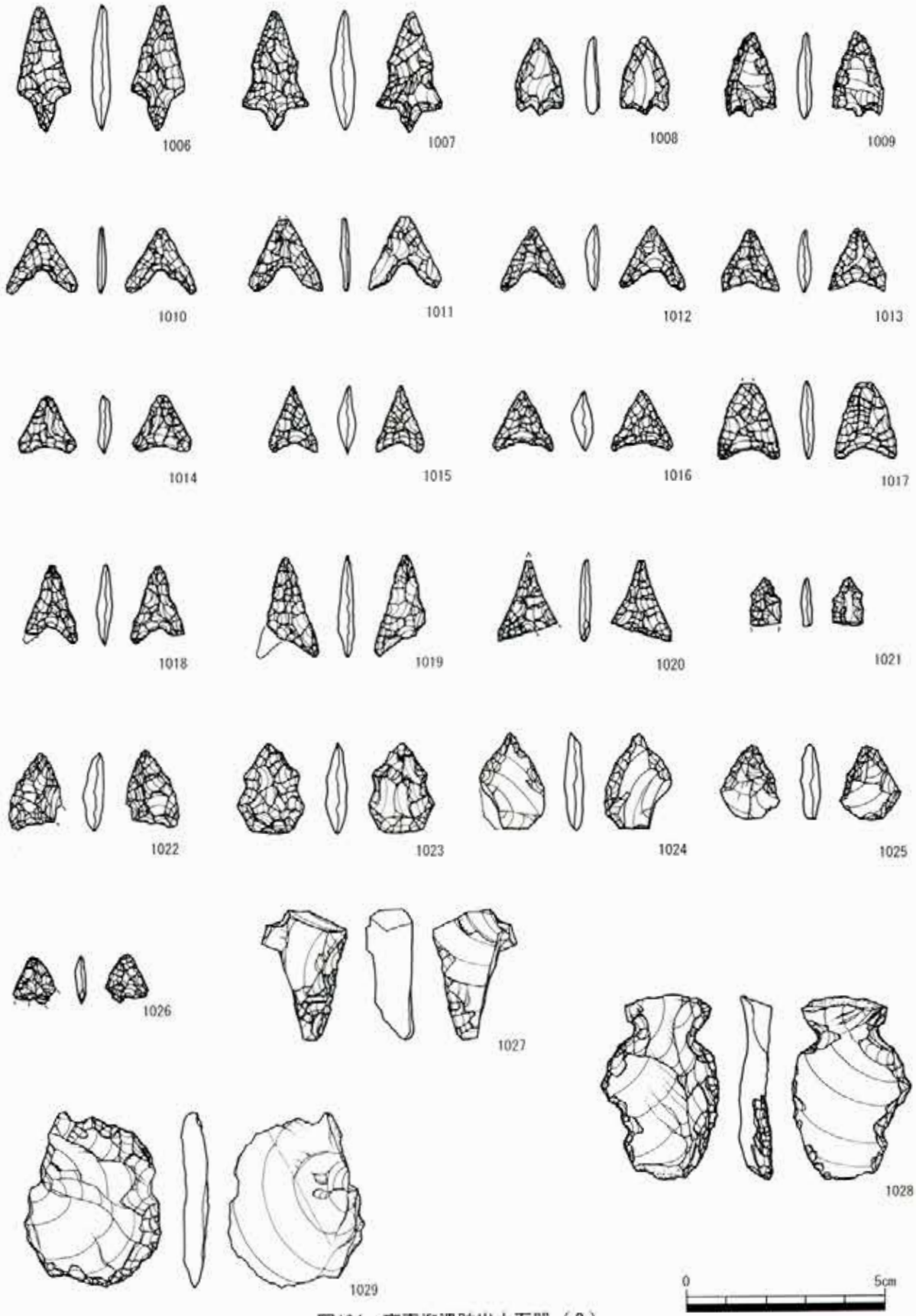


図184　南青柳遺跡出土石器（2）

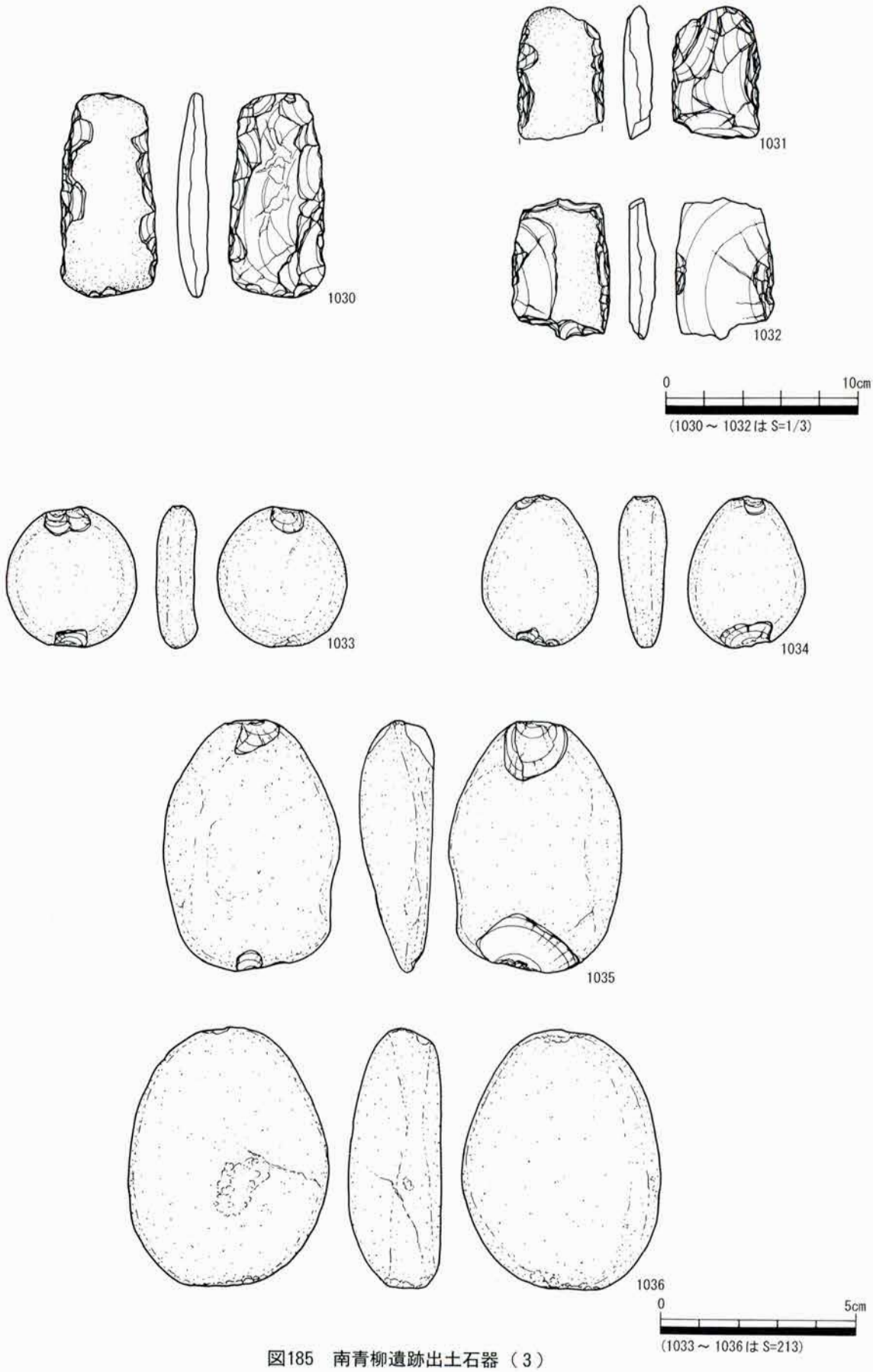


図185　南青柳遺跡出土石器（３）

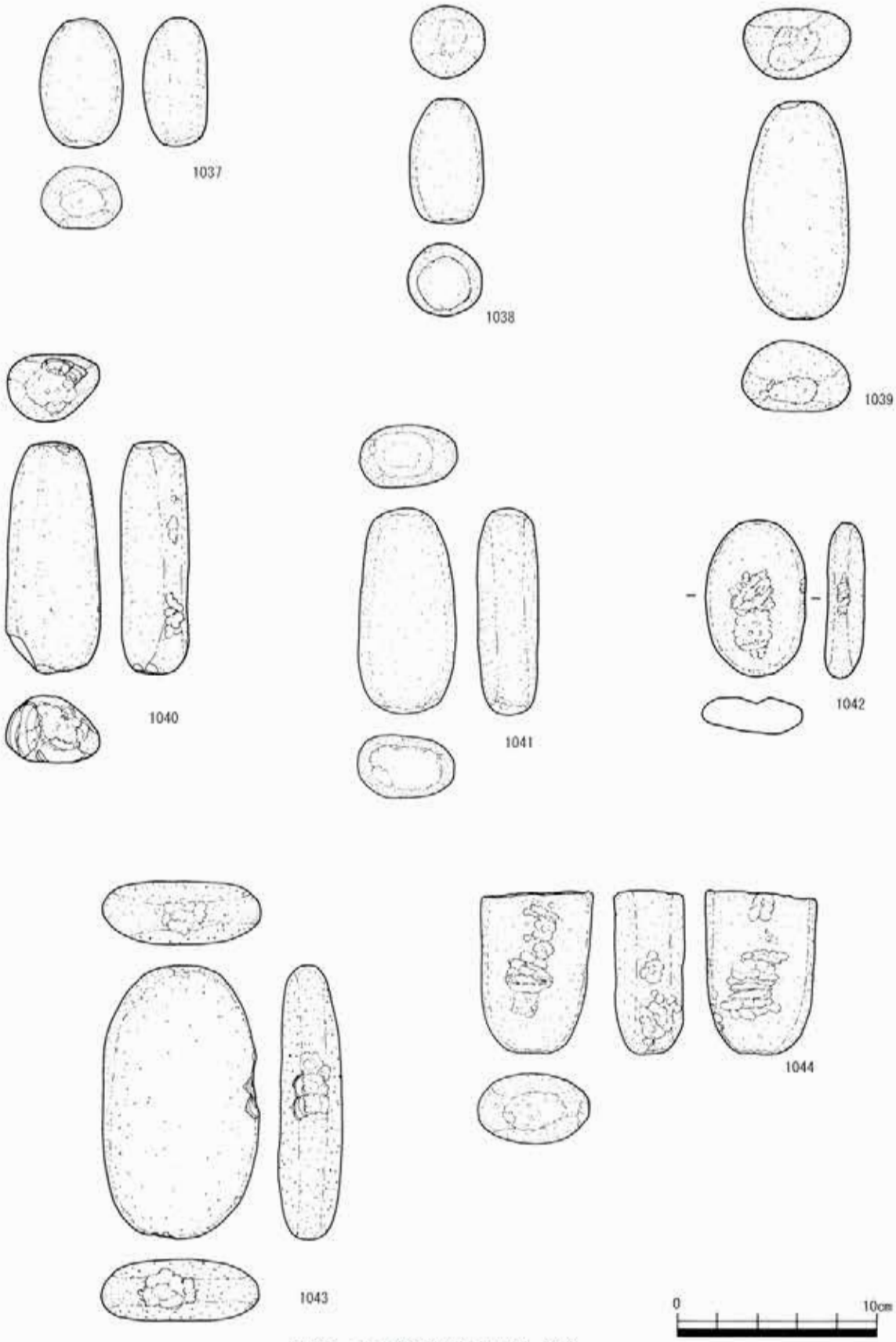


図186　南青柳遺跡出土石器（４）

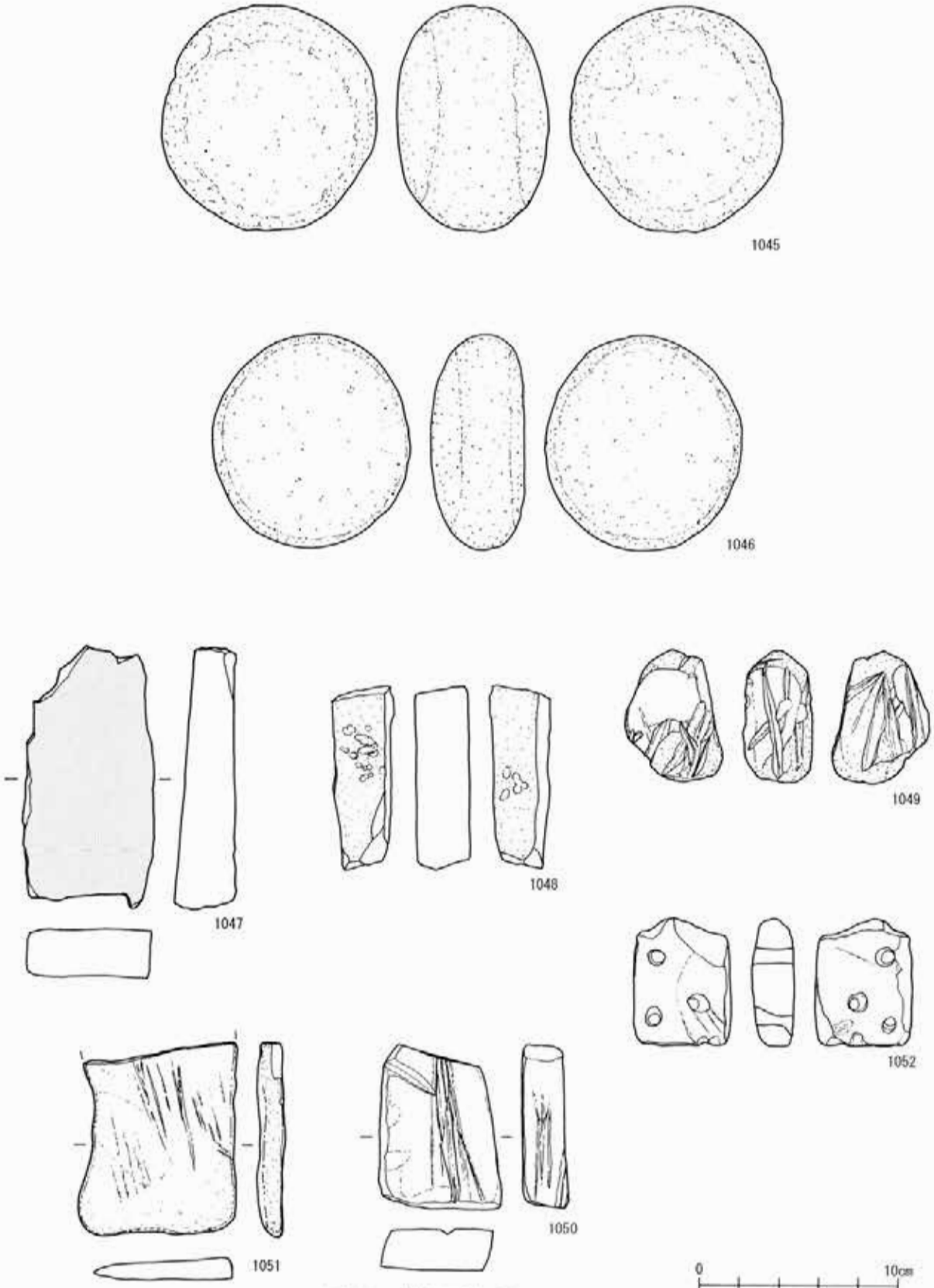


図187　南青柳遺跡出土石器（５）

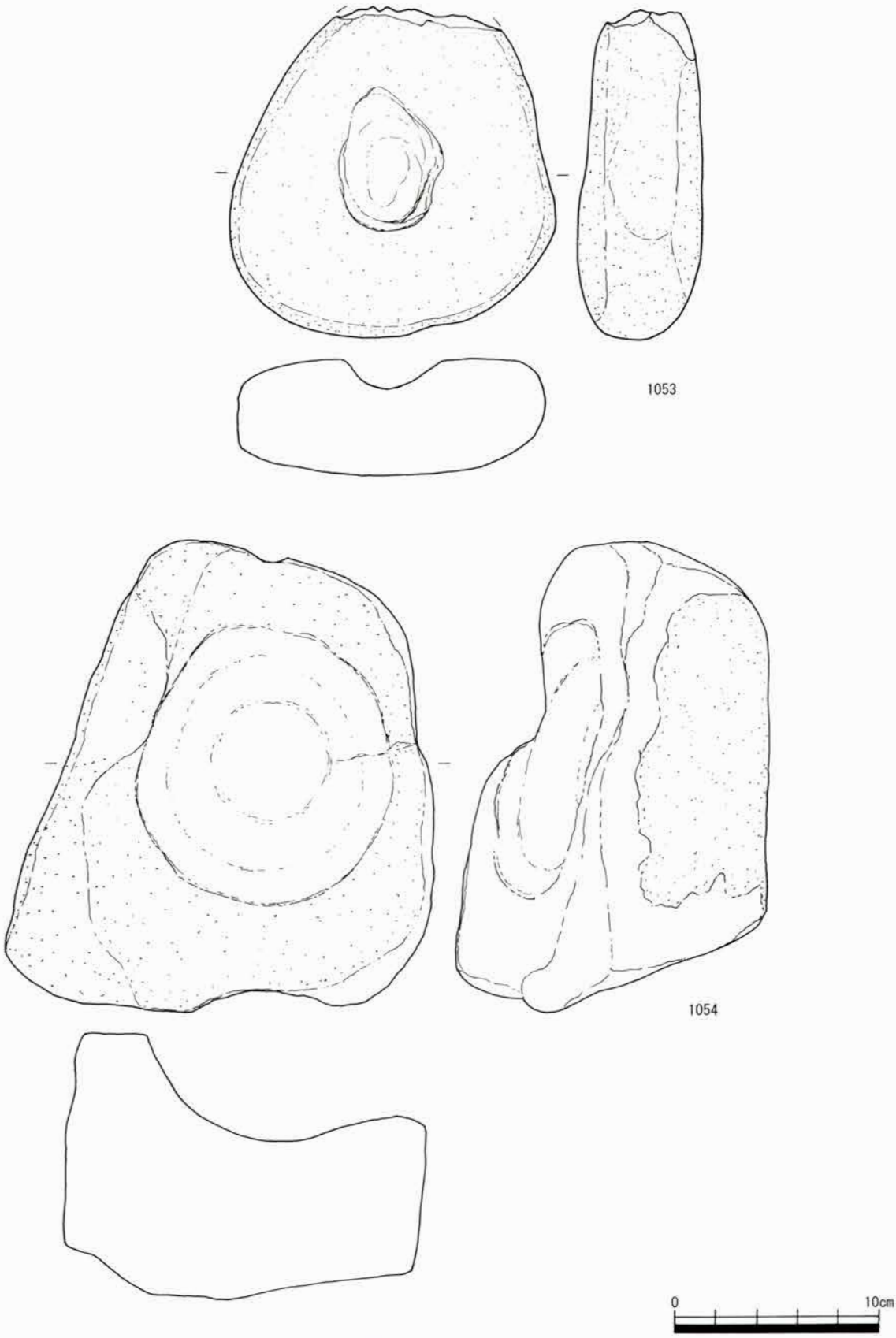


図188　南青柳遺跡出土石器（６）

第７節　自然科学分析

第１項　南青柳遺跡住居炉跡および土坑焼土の焼成年代

藤根 久・Lomtatize Zauri（パレオ・ラボ）

１　はじめに

南青柳遺跡は，関市下有知字南青柳・砂行に所在する遺跡である。調査では、複数の住居跡あるいは土坑において赤化した焼土が検出された。SB35(焼失家屋)・SB50の炉跡焼土、及び土坑SK01の焼土の熱残留磁化を測定し、その磁化方向から焼成年代を推定した。

２　考古地磁気年代推定の原理

地球上には地磁気が存在するために、磁石は北を指す。この地磁気は、その方向と強度（全磁力）によって表される。方向は、真北からの角度である偏角（Declination）と水平面からの角度である伏角（Inclination）によって表す。磁気コンパスが北として示す方向（磁北）は、真北からずれており、この間の角度が偏角である。また、磁針をその重心で支え磁南北と平行な鉛直面内で自由に回転できるようにすると、北半球では磁針のＮ極が水平面より下方を指す。この時の傾斜角が伏角である。現在、この付近の偏角は約6.98°、伏角は約48.87°、全磁力（水平分力）は約30721.7(nT)である（理科年表　1993；いずれも1990年値)。これら地磁気の三要素（偏角・伏角・全磁力）は、観測する地点によって異なった値になる。全世界の地磁気三要素の観測データ解析から、現在の地磁気の分布は、地球の中心に棒磁石を置いた時にできる磁場分布に近似される。また、こうした地磁気は時間の経過とともに変化し、ある地点で観測される偏角や伏角あるいは全磁力の値も時代とともに変化する。この地磁気の変動を地磁気永年変化と呼んでいる。

過去の地磁気の様子は、高温に焼かれた窯跡や炉跡などの焼土、地表近くで高温から固結した火山岩あるいは堆積物などの残留磁化測定から知ることができる。大半の物質は、ある磁場中に置かれると磁気を帯びるが、強磁性鉱物（磁鉄鉱など）はこの磁場が取り除かれた後でも磁気が残る。これが残留磁化である。考古地磁気では、焼土の残留磁化（熱残留磁化）が、焼かれた当時の地磁気の方向を記録していることを利用する。こうした地磁気の化石を調べた結果、地磁気の方向は少しづつではあるが変化しており、その変化は地域によって違っていることが分かっている。過去2,000年については、西南日本の窯跡や炉跡の焼土の熱残留磁化測定から、その変化が詳しく調べられている（広岡，1977；Shibuya, 1980；図189)。また、湖や浅海の堆積物の堆積残留磁化を測定し、過去11,500年間の地磁気変化曲線も求められている（Hyodo ほか, 1993)。

年代のよく分かっている窯跡焼土や火山岩の熱残留磁化測定あるいは堆積物の堆積残留磁化から地磁気永年変化曲線が得られると、逆に年代の確かでない遺跡焼土などの残留磁化測定を行い、先の地磁気永年変化曲線と比較することによって、その焼成時の年代が推定できる。また、年代が推定されている窯跡焼土などについても、土器とは違った方法で焼成時の年代を推定できることから、さらに科学的な裏付けを得ることができる。この年代推定法が考古地磁気による年代推定法である。ただし、

この方法は、^{14}C年代測定法など他の絶対年代測定法のように、測定結果単独で年代の決定を決定する方法ではない。すなわち、焼土の熱残留磁化測定から得られる偏角および伏角の値からは複数の年代値が推定されるが、いずれを採用するかは、焼き物等の年代が参考となる。

3　試料採取と残留磁化測定

考古地磁気による年代推定は、a) 測定用試料の採取および整形、b) 残留磁化測定および統計計算を行い、c) 地磁気永年変化曲線との比較を行い、焼成年代を推定する。なお、試料の磁化保持力や焼成以後の二次的な残留磁化の有無などを確認するために、段階交流消磁も行った。

a　測定用試料の採取および整形

試料は、焼土面において、①一辺約4cmの立方体試料を取り出すため、ヘラなどを用いて対象とする部分（良く焼けた部分）の周囲に溝を掘る。②薄く溶いた石膏を試料全体にかけ、試料表面を補強する。③やや硬め（練りハミガキ程度）の石膏を試料上面にかけ、すばやく一辺5cmの正方形のアルミ板を押し付け、石膏が固まるまで放置する。④石膏が固まった後、アルミ板を剥し、この面の最大傾斜の方位および傾斜角を磁気コンパス（考古地磁気用に改良したクリノメータ）で測定し、方位を記録すると同時に、この面に方位を示すマークと番号を記入する。⑤試料を掘り起こした後、試料の底面に石膏をつけて補強し持ち帰る。⑥持ち帰った試料は、ダイヤモンド・カッターを用いて一辺3.5cm・厚さ2 cm程度の立方体に切断する。この際切断面が崩れないように、一面ごとに石膏を塗って補強し、熱残留磁化測定用試料とする。採取した試料は、住居SB35が11試料、住居SB50が10試料、土坑SK01が13試料を採取した。

b　段階交流消磁，熱残留磁化測定および統計計算の結果

熱残留磁化測定は、リング・コア型スピナー磁力計（SMM-85：㈱夏原技研製）を用いて測定した。磁化保持力の様子や放棄された後の二次的な磁化の有無を確認するため、任意1試料（住居SB35№7、住居SB50№7、土坑SK01№1）について交流消磁装置（DEM-8601：㈱夏原技研製）を用いて段階的に消磁し、その都度スピナー磁力計を用いて残留磁化を測定した（図190；住居SB35№7)。その結果、試料の磁化強度は10^{-2}～10^{-3}emuと比較的強い。また、磁化保持力については、NRM（自然残留磁化）に対する相対強度は、75 Oe消磁において約82%と高い結果である（b．残留磁化の相対強度)。また、磁化方向は、中心に向かって直線的に変化し、安定した方向を記録している（c．ジダーベルト図)。

以上の理由から、75 Oeで消磁した際の残留磁化方向が焼成時の磁化方向であると判断した。そこで、これ以外の段階交流消磁を行っていない試料も、75 Oe消磁した後に残留磁化を測定した。

複数試料の測定から得た偏角（Di)、伏角（Ii）を用いて、Fisher（1953）の統計法により平均値（Dm, Im)を求めた。信頼度計数は、住居SB35が606.70と比較的大きく誤差も小さいが、住居SB50と土坑SK01は低く誤差も大きい（表5）。なお、住居SB50と土坑SK01については、バラツキが大きく偏角および伏角が平均より10度以上外れたデータは計算から除外した。

求めた熱残留磁化方向は、真北を基準とする座標に対する数値に補正する。偏角は、建設省国土地理院の1990.0年の磁気偏角近似式から計算した6.98°Wを使用した。その結果は、Shibuya（1980）に

よる地磁気変化曲線とともにプロットした。図中測定点に示した楕円は、フッシャー（1953）の95%信頼角より算定した偏角および伏角の各誤差から作成したものである。

c　焼成年代

図191には、Shibuya（1980）による地磁気永年変化曲線の一部とともに炉跡焼土の磁化方向を示した。この図を見ると、焼土の磁化方向は、100～400年間の永年変化曲線付近に位置する。
測定した磁化方向の中心を最も近い曲線上に移動した場合、住居SB35炉跡が210^{+30}_{-20}年、住居SB50炉跡が200^{+135}_{-60}年、土坑SK01焼土が670^{+70}_{-80}年と推定された（表４）。なお、住居SB35は誤差角が小さく信頼度も高いと考えられるが、住居SB50および土坑SK01は誤差角が大きく信頼度は低い。

表４　住居炉跡および土坑焼土の焼成年代推定結果

遺　構	遺物による年代	考古地磁気推定年代（A.D.）
住居SB35炉跡	廻間Ⅰ式	210^{+30}_{-20}年
住居SB50炉跡	〃	200^{+135}_{-60}年
土坑SK01焼土	不　明	670^{+70}_{-80}年

引用文献
Fisher, R.A. (1953) Disparsion on a sphere. Proc. Roy. Soc. London, A, 217, p.295-305.
Hyodo, M., C. Itota and K. Yaskawa (1993) Geomagnetic Secular Variation Reconstructed from Magnetizations of Wide-Diameter Cores of Holocene Sediments in Japan. J. Geomag. Geoelectr., 45, p.669-696.
理科年表（1993）国立天文台編，丸善，952p.
Shibuya, H. (1980) Geomagnetic secular variation in Southwest Japan for the past 2,000years by means of archaeomagnetism. 大阪大学基礎工学部修士論文，54p.

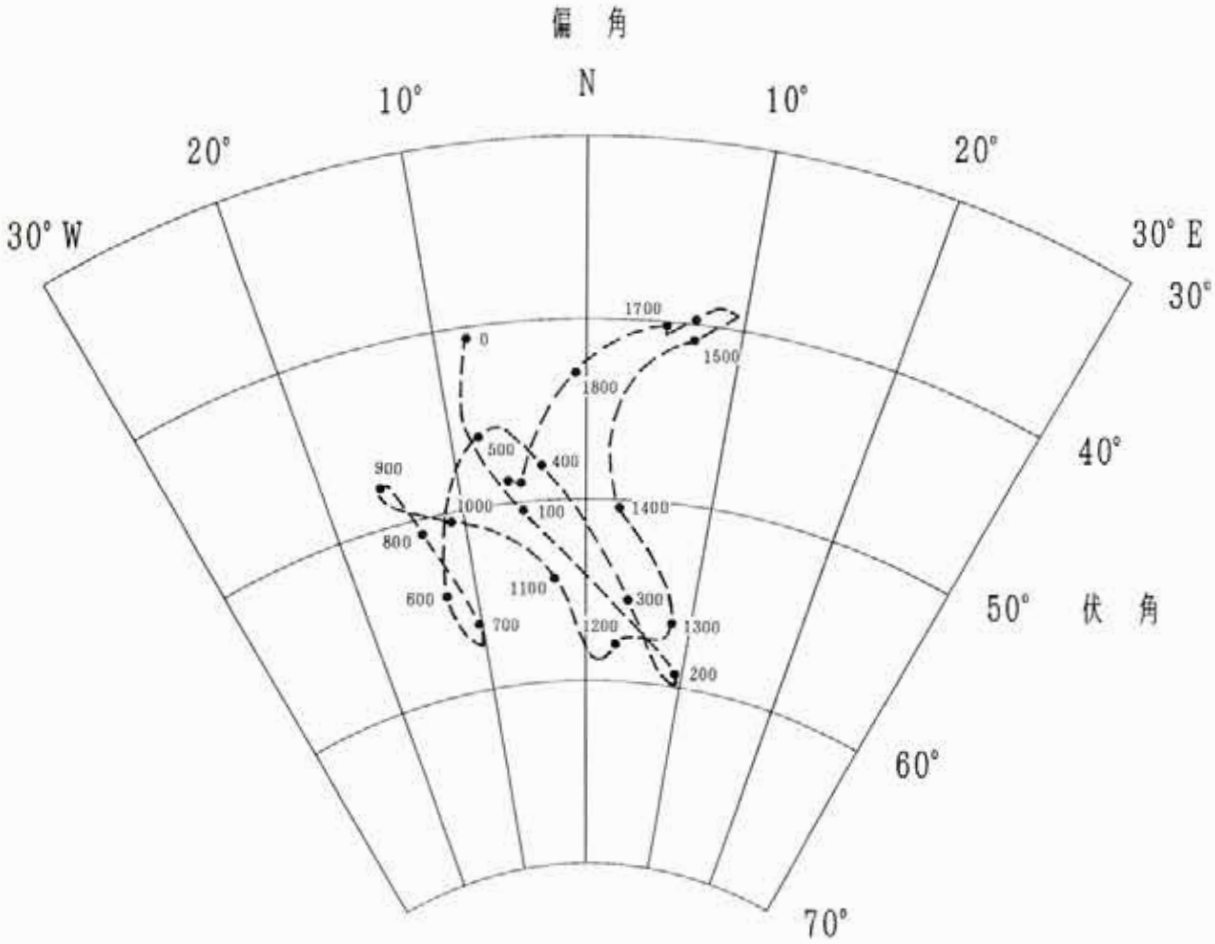


図189　Shibuya(1980)による地磁気永年変化曲線

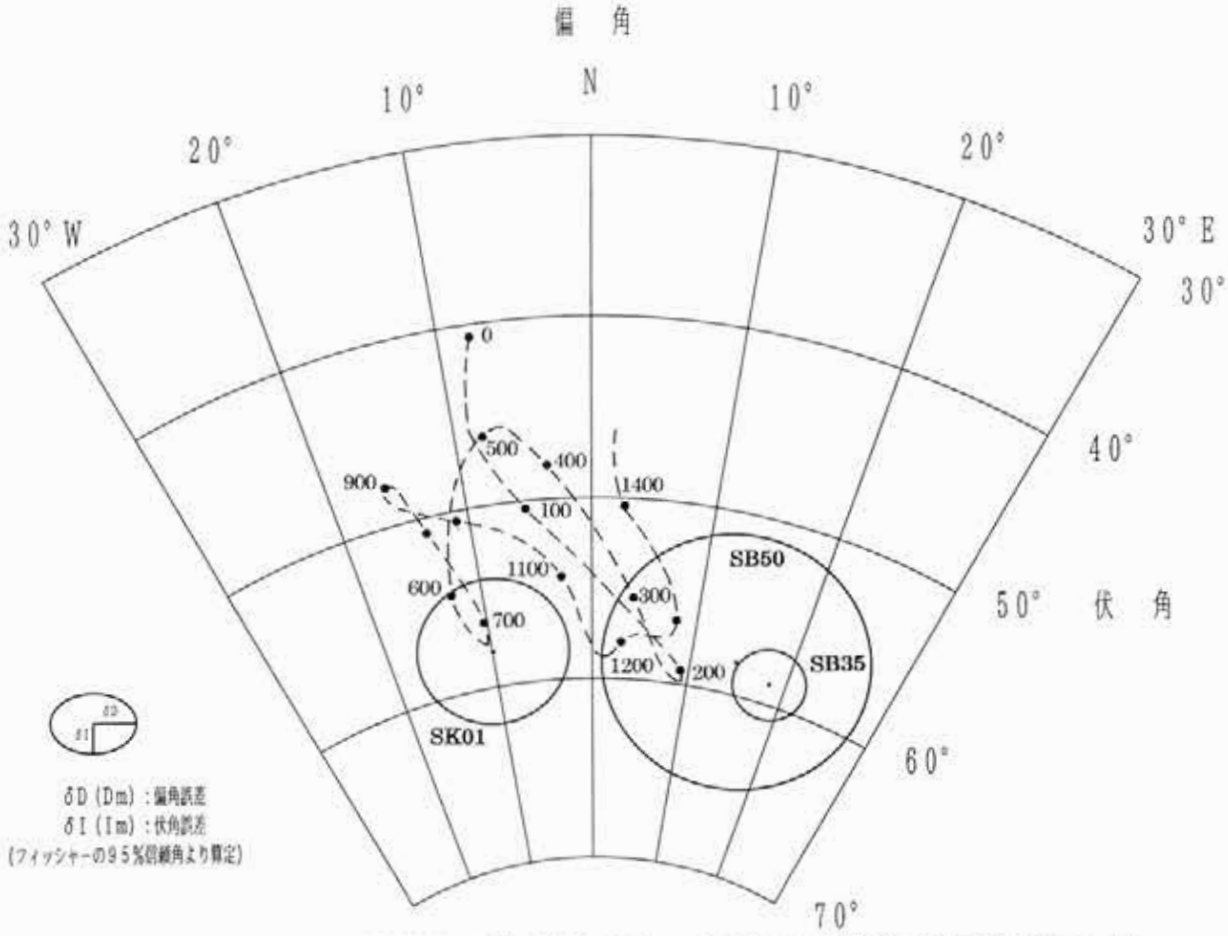


図191　住居炉跡および土坑焼土の磁化方向と Shibuya(1980)による地磁気永年変化曲線の一部

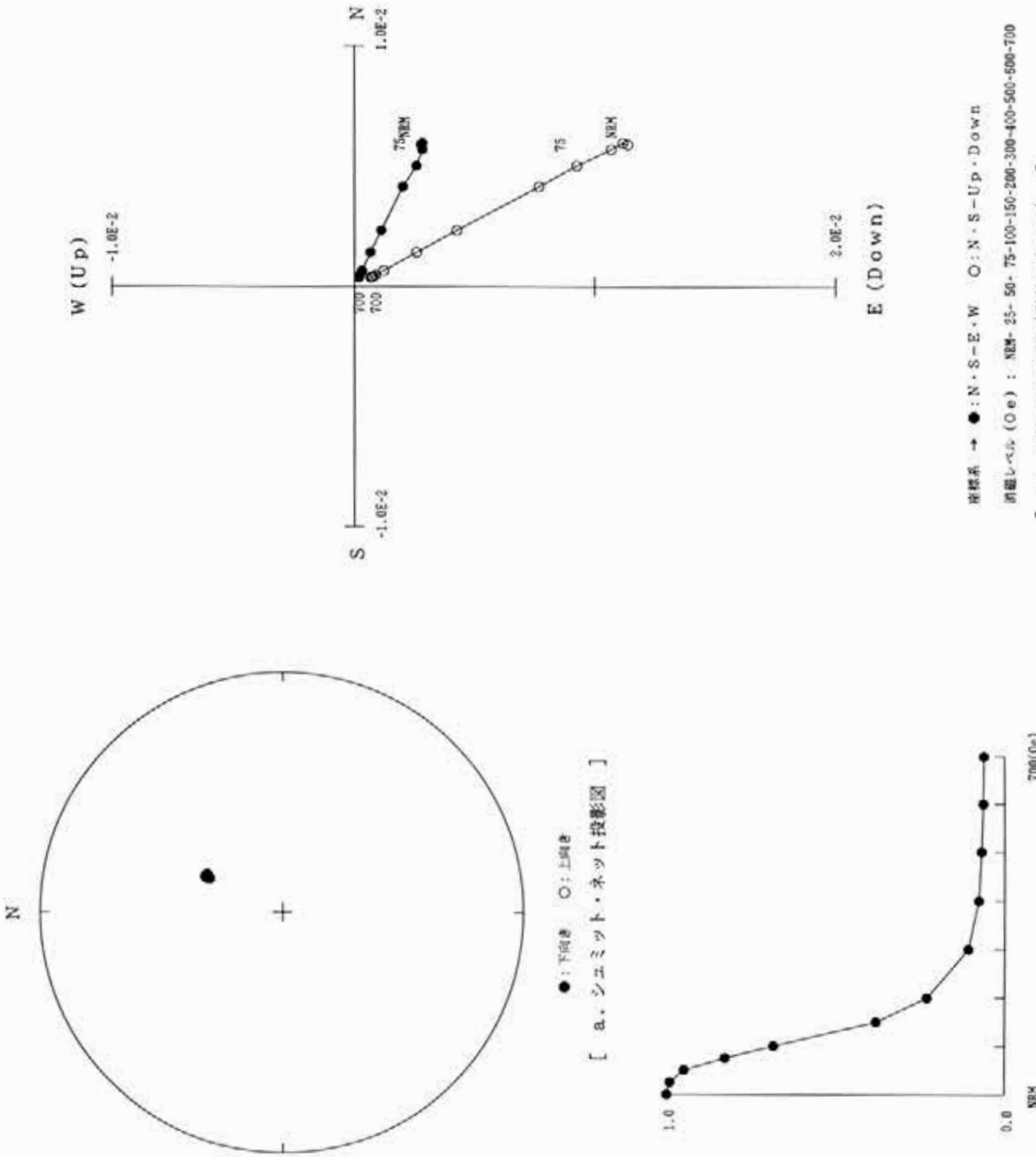


図190　住居炉跡ＳＢ35No.７の段階交流消磁測定結果

表5　住居炉跡および土坑焼土の残留磁化測定結果（偏角補正前）

遺構名	試料No.	偏角（°E）	伏角（°）	強度（x10⁻³ emu）	備考	統計処理項目	統計値
SB35（75 Oe 消磁）	1	24.1	54.9	2,330		試料数（n）	10
	2	16.8	70.7	6,580	計算から除外		
	3	29.7	64.6	12,900		平均偏角Im（°E）	25.31
	4	25.6	60.6	48,800			
	5	29.0	59.0	31,400		平均伏角Dm（°）	58.89
	6	19.9	58.0	8,170			
	7	27.0	58.7	10,800	段階交流消磁	誤差角δD（°）	3.79
	8	27.4	60.8	10,200			
	9	22.4	54.6	7,760		誤差角δI（°）	1.96
	10	25.2	57.7	2,570			
	11	24.3	59.7	1,460		信頼度計数（k）	606.70
	12						
	13					平均磁化強度（x10⁻³ emu）	13.64
	14						
SB50（75 Oe 消磁）	1	22.6	56.4	0.786		試料数（n）	4
	2	−14.3	11.9	0.044	計算から除外		
	3	−14.5	40.6	0.021	計算から除外	平均偏角Im（°E）	21.48
	4	18.2	50.7	0.057			
	5	−32.7	61.2	0.022	計算から除外	平均伏角Dm（°）	58.18
	6	37.6	58.5	0.121	計算から除外		
	7	26.1	64.5	0.659	段階交流消磁	誤差角δD（°）	13.41
	8	20.4	61.0	0.144			
	9	21.6	76.7	0.037	計算から除外	誤差角δI（°）	7.07
	10	1.0	39.3	0.076	計算から除外		
	11					信頼度計数（k）	169.81
	12						
	13					平均磁化強度（x10⁻³ emu）	0.41
	14						
SK01（75 Oe 消磁）	1	−1.4	53.0	8.540	段階交流消磁	試料数（n）	7
	2	−10.2	53.6	0.022			
	3	−9.3	37.2	0.022	計算から除外	平均偏角Im（°E）	−2.92
	4	−4.9	55.9	0.028			
	5	−3.2	58.4	0.362		平均伏角Dm（°）	58.02
	6	11.7	67.9	0.022	計算から除外		
	7	−23.5	56.7	0.073	計算から除外	誤差角δD（°）	7.57
	8	−5.6	58.9	0.251			
	9	−4.5	64.9	0.251		誤差角δI（°）	4.01
	10	10.8	60.5	0.296	計算から除外		
	11	3.2	54.9	1.311		信頼度計数（k）	227.07
	12	−7.3	44.1	0.039	計算から除外		
	13	−102.6	78.5	0.034	計算から除外	平均磁化強度（x10⁻³ emu）	1.39
	14						

第２項　南青柳遺跡出土弥生末～古墳中期土器の胎土材料

藤根　久・今村美智子（パレオ・ラボ）

１　はじめに

土器胎土は、粘土と砂粒などの混和材から構成されるが、その様子は肉眼観察によりある程度識別されるものの、粘土の種類やミクロ的な構成物は顕微鏡観察によらなければならない。最近では、胎土中に含まれる珪藻化石や骨針化石などの記載により、粘土の種類について知ることができ、混和材の種類も砂粒のほか火山灰や灰質物などが混入されていることが分かってきた（車崎ほか、1996）。こうした土器胎土の材料を調べることは、土器の形態や文様とともに土器の構成要素として重要な事柄と考えられ、土器材料の種類そのもののほか材料から見た製作技法や土器の製作地の情報などについても知ることができる。

南青柳遺跡は、関市下有知地内に所在する弥生末～古墳中期にかけての遺構・遺物が検出される遺跡である。調査では、廻間Ⅰ式の住居跡が多数検出され、住居跡内から土器が多数出土している。

ここでは、これら土器胎土について、胎土の粘土および砂粒の組成について調べ、この地域に見られる土器胎土の特徴について検討した。

２　方法と記載

ここでは、土器の薄片を作成し偏光顕微鏡による観察による方法を行った。土器試料は、廻間Ⅰ式に相当する甕21試料、壺11試料、高坏７試料、鉢６試料、器台５試料の合計50試料である（表６）。土器は、次の手順に従って偏光顕微鏡観察用の薄片（プレパラート）を作成した。なお、試料は、面積約６㎝^{2}程度（２ｘ３㎝）を使用した。

(1)試料は、始めに岩石カッターなどで整形し、恒温乾燥機により乾燥した。乾燥後、全体にエポキシ系樹脂を含浸させ固化処理を行った。これをスライドグラスに接着した後、精密岩石薄片作製機を用いて平面を作成し、同様にしてその平面の固化処理を行った。

(2)さらに、研磨機およびガラス板を用いて研磨し、平面を作成した後スライドグラスに接着した。

(3)その後、精密岩石薄片作製機を用いて切断し、ガラス板などを用いて研磨し、厚さ0.02ｍｍ前後の薄片を作成した。仕上げとして、研磨剤を含ませた布板上で琢磨し、コーティング剤を塗布した。

各薄片試料は、偏光顕微鏡下300倍で分類群ごとに同定・計数する。同定・計数は、100μｍ格子目盛を用いて任意の位置における約50μｍ（0.05㎜）以上の鉱物や複合鉱物類（岩石片）あるいは微化石類（50μｍ前後）を対象とし、微化石類と石英・長石類以外の粒子が約100個以上になるまで行った。また、この計数とは別に薄片全面について、微化石類（放散虫化石、珪藻化石、骨針化石、胞子化石）や大型粒子などの特徴についても観察・記載した。

３　分類群の記載

細礫～砂サイズ以下の粒子を偏光顕微鏡により同定する場合、粒子が細粒であるため同定が困難である場合が多い。特に、岩石片については、岩石片中に含まれる鉱物数がきわめて少ないため、岩石名を決定することが事実上不可能である場合が多い。ここでは岩石名を付けず、岩石片を構成する鉱物や構造的な特徴に基づいて分類した（菱田ほか、1993）。なお、胎土の特徴を抽出するために、鉱物や岩石片以外の生物起源の粒子（微化石類）も同時に計数した。ここで採用した各分類群の記載とその特徴などは以下の通りである。なお、各鉱物の光学的性質についてはその記述を省略する。

［放散虫化石］

放散虫は、放射仮足類に属する海生浮遊性原生動物で、その骨格は硫酸ストロンチウムまたは珪酸からなる。放散虫化石は、海生浮遊生珪藻化石とともに外洋性堆積物中によく見られる。

［骨針化石］

海綿動物の骨格を形成する小さな珪質、石灰質の骨片で、細い管状や針状などを呈する。海綿動物は、多くは海産であるが、淡水産としても日本において23種ほどが知られ、湖や池あるいは川の水底に横た

わる木や貝殻などに付着して生育する。

［珪藻化石］

珪酸質の殻をもつ微小な藻類で、その大きさは10～数百μm程度である。珪藻は海水域から淡水域に広く分布し、個々の種類によって特定の生息環境をもつ。最近では、小杉（1988）や安藤（1990）によって環境指標種群が設定され、具体的な環境復原が行われている。ここでは、種あるいは属が同定できるものについて珪藻化石（海水種）・珪藻化石（汽水種）・珪藻化石（淡水種）と分類し、同定できないものは珪藻化石（？）とした。なお、各胎土中の珪藻化石の詳細については、計数外の特徴とともに記載した。

［植物珪酸体化石］

植物の細胞組織を充填する非晶質含水珪酸体であり、大きさは種類によっても異なり、主に約10～50μm前後である。一般的にプラント・オパールとも呼ばれ、イネ科草本、スゲ、シダ、トクサ、コケ類などに存在することが知られている。ファン型や亜鈴型あるいは棒状などがあるが、ここでは大型のファン型と棒状を対象とした。

［胞子化石］

胞子状粒子は、珪酸質と思われる直径10～30μm程度の小型の無色透明の球状粒子である。これらは、水成堆積中で多く見られるが、土壌中にも含まれる。

［石英・長石類］

石英あるいは長石類は、いずれも無色透明の鉱物である。長石類のうち後述する双晶などのように光学的に特徴をもたないものは石英と区別するのが困難である場合が多く一括して扱う。なお、石英・長石類（雲母）は、黄色などの細粒雲母類が包含される石英または長石類である。

［長石類］

長石は大きく斜長石とカリ長石に分類される。斜長石は、双晶（主として平行な縞）を示すものと累帯構造（同心円状の縞）を示すものに細分される（これらの縞は組成の違いを反映している）。カリ長石は、細かい葉片状の結晶を含むもの（パーサイト構造）と格子状構造（微斜長石構造）を示すものに分類される。また、ミルメカイトは斜長石と虫食い状石英との連晶（微文象構造という）である。累帯構造を示す斜長石は、火山岩中の結晶（斑晶）の斜長石にみられることが多い。パーサイト構造を示すカリ長石はカコウ岩などのSiO_2％の多い深成岩や低温でできた泥質・砂質の変成岩などに産する。

ミルメカイトあるいは文象岩は火成岩が固結する過程の晩期に生じると考えられている。これら以外の斜長石は、火成岩、堆積岩、変成岩に普通に産する。

［雲母類］

一般的には黒雲母が多く、黒色から暗褐色で風化すると金色から白色になる。形は板状で、へき開（規則正しい割れ目）にそって板状には剥がれ易い。薄片上では長柱状や層状に見える場合が多い。カコウ岩などのSiO_2％の多い火成岩に普遍的に産し、泥質、砂質の変成岩および堆積岩にも含まれる。なお、雲母類のみが複合した粒子を複合雲母類とした。

［輝石類］

主として斜方輝石と単斜輝石とがある。斜方輝石（主に紫蘇輝石）は、肉眼的にビールびんのような淡褐色および淡緑色などの色を呈し、形は長柱状である。SiO_2％が少ない深成岩、SiO_2％が中間あるいは少ない火山岩、ホルンフェルスなどのような高温で生じた変成岩に産する。単斜輝石（主に普通輝石）は、肉眼的に緑色から淡緑色を呈し、柱状である。主としてSiO_2％が中間から少ない火山岩によく見られ、SiO_2％の最も少ない火成岩や変成岩中にも含まれる。

［角閃石類］

主として普通角閃石であり、色は黒色から黒緑色で、薄片上では黄色から緑褐色などである。形は細長く平たい長柱状である。閃緑岩のようなSiO_2％が中間的な深成岩をはじめ火成岩や変成岩などに産する。

［ガラス・軽石型ガラス］

透明の非結晶の物質で、電球のガラス破片のような薄くて湾曲したガラス（バブル・ウォール型）や

小さな泡をたくさんもつガラス（軽石型ガラス）などがある。主に火山の噴火により噴出された噴出物と考える。

［斑晶質・完晶質］

斑晶質は斑晶（鉱物の結晶）状の部分と石基状のガラス質の部分が明瞭に確認できるもの、完晶質は、ほとんどが結晶からなり石基の部分が見られないか、ごくわずかのものをいう。これらの斑晶質、完晶質の粒子は主として玄武岩、安山岩、デイサイト、流紋岩などの火山岩類を起源とする可能性が高い。

［凝灰岩質］

凝灰岩質は、ガラスや鉱物、火山岩片などの火山砕屑物などから構成され、非晶質でモザイックな文様構造を示す。起源となる火山により鉱物組成は変わる。

［複合鉱物類］

構成する鉱物が石英あるいは長石以外に重鉱物を伴う粒子で、雲母類を伴う粒子は複合鉱物類(含雲母類)、輝石類を伴う粒子を複合鉱物類（含輝石類）、角閃石類を伴う粒子を複合鉱物類（角閃石類）とした。

［複合石英類］

複合石英類は石英の集合している粒子で、基質（マトリックス）の部分をもたないものである。個々の石英粒子の粒径は粗粒から細粒まで様々である。ここでは、便宜的に個々の石英粒子の粒径が約0.01㎜未満のものを微細、0.01～0.05㎜のものを小型、0.05～0.1㎜のものを中型、0.1㎜以上のものを大型と分類した。また、等粒で小型の長石あるいは石英が複合した粒子は、複合石英類（等粒）として分類した。この複合石英類（等粒）は、ホルンフェルスなどで見られる粒子と考える。

［砂岩質・泥岩質］

石英、長石類、岩片類などの粒子が集合し、それらの間に基質の部分をもつもので、含まれる粒子の大きさが約0.06㎜以上のものを砂岩質とし、約0.06㎜未満のものを泥岩質とする。

［不透明・不明］

下方ポーラーのみ、直交ポーラーのいずれにおいても不透明なものや、変質して鉱物あるいは岩石片として同定不可能な粒子を不明とする。

4　各胎土の特徴および計数の結果

胎土中の粒子組成は、任意の位置での粒子を分類群別に計数した（表７・８）。また、計数されない微化石類や鉱物・岩石片を記載するために、プレパラート全面を精査・観察した。以下では、粒度分布や0.1㎜前後以上の鉱物・岩石片の砂粒組成あるいは計数も含めた微化石類などの記載を示す。なお、不等号は、概略の量比を示し、二重不等号は極端に多い場合を示す。

№１：100～400μｍが多い（最大粒径1.6㎜）。石英・長石類》凝灰岩類〉複合石英類（微細)〉斜長石（双晶）、カリ長石（パーサイト）、砂岩質、ガラス質、角閃石類、ジルコン、斜方輝石、カリ長石（微斜長石）、胞子化石、植物珪酸体化石、凝灰岩質胎土

№２：90～300μｍが多い（最大粒径700μｍ）。石英・長石類》凝灰岩質〉複合石英類（微細)〉斜長石（双晶）、砂岩質、ガラス質、斜方輝石、ジルコン、角閃石類、珪藻化石（淡水種 *Pinnularia* 属、*Eunotia* 属）、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石多産、凝灰岩質胎土

№３：80～300μｍが多い（最大粒径850μｍ）。石英・長石類》複合石英類（微細)〉凝灰岩質〉斜長石（双晶）、ガラス質、斜方輝石、角閃石類、ジルコン、胞子化石、植物珪酸体化石

№４：100～600μｍが多い（最大粒径1.9㎜）。石英・長石類〉複合石英類（微細)〉砂岩質、ガラス質、斜方輝石、ジルコン、珪藻化石（不明種）、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石

№５：100μｍ～1.5㎜が多い（最大粒径3.8㎜）。石英・長石類〉複合石英類（微細)〉凝灰岩質〉ガラス質、砂岩質、斜方輝石、角閃石類、カリ長石（パーサイト）、ジルコン、珪藻化石（海水種 *Coscinodiscus* 属／ *Thalassiosira* 属？、不明種）、植物珪酸体化石

№６：100～700μｍが多い（最大粒径3.0㎜）。石英・長石類〉複合石英類（微細)〉凝灰岩質、斜長石（双晶）、ガラス質、ジルコン、角閃石類、珪藻化石（海水種 *Coscinodiscus* 属／ *Thalassiosira* 属？）、

植物珪酸体化石

No.7：110μm～1．5mmが多い（最大粒径4.7mm）。複合石英類（微細）〉石英・長石類〉凝灰岩質、角閃石類、ガラス質、ジルコン、珪藻化石（沼沢湿地付着生指標種群 *Stauroneis phoenicenteron*、湖沼沼沢湿地指標種群 *Melosira ambigua*、淡水種 *Pinnularia* 属、*Surirella* 属、不明種）、胞子化石、植物珪酸体化石

No.8：80～500μm以下が多い（最大粒径500μm）。石英・長石類》複合石英類（微細）〉凝灰岩質〉角閃石類、ガラス質、斜方輝石、ジルコン、珪藻化石（淡水種 *Eunotia biareofera*、*Eunotia* 属）、骨針化石、植物珪酸体化石

No.9：90～750μmが多い（最大粒径1.7mm）。石英・長石類〉複合石英類（微細）〉砂岩質、ガラス質、雲母類、ジルコン、凝灰岩類、植物珪酸体化石

No.10：150～500μmが多い（最大粒径700μm）。石英・長石類》複合石英類（微細）〉斜方輝石、角閃石類、凝灰岩質、ガラス質、砂岩質、ジルコン、胞子化石、植物珪酸体化石

No.11：80～300μmが多い（最大粒径3.2mm）。石英・長石類》凝灰岩質〉複合石英類（微細）〉砂岩質、ガラス質、角閃石類、ジルコン、珪藻化石（淡水種 *Pinnularia* 属）、骨針化石、植物珪酸体化石、植物遺体

No.12：120μm～1.2mmが多い（最大粒径2.1mm）。石英・長石類〉斜長石（双晶）〉複合鉱物類（含輝石類）〉角閃石類、複合石英類、複合石英類（微細）、ジルコン、ザクロ石類、［ガラス質］、放散虫化石（1個体）、珪藻化石（海水種 *Stephanopyxis* 属）、骨針化石、植物珪酸体化石

No.13：50～300μmが多い（最大粒径3.1mm）。ガラス質》石英・長石類〉複合石英類（微細）〉砂岩質斜長石（双晶）、珪藻化石（湖沼浮遊生指標種群 *Melosira granulata* 多産、淡水種 *Eunotia biareofera*、*Rhopalodia gibberula*、*Eunotia praerupta*、*Melosira* 属多産、*Cymbella* 属、*Eunotia* 属、不明種多産）、骨針化石多産、胞子化石、植物珪酸体化石

No.14：100～900μmが多い（最大粒径2.0mm）。石英・長石類〉複合石英類（微細）〉凝灰岩質、砂岩質、ガラス質、ジルコン、胞子化石、植物珪酸体化石

No.15：70～300μmが多い（最大粒径800μm）。石英・長石類》複合石英類（微細）〉角閃石類、斜長石（双晶）、凝灰岩質、ジルコン、珪藻化石（淡水種 *Pinnularia* 属）、骨針化石、植物珪酸体化石

No.16：100～750μmが多い（最大粒径1.7mm）。石英・長石類〉凝灰岩質〉複合石英類（微細）〉斜長石（双晶）、ジルコン、ガラス質、［複合石英類］、珪藻化石（淡水種 *Synedra ulna*、不明種）、植物珪酸体化石

No.17：120～750μmが多い（最大粒径2.3mm）。石英・長石類〉複合石英類（微細）〉砂岩質、ジルコン、［複合石英類、凝灰岩質］

No.18：80～800μmが多い（最大粒径3.4mm）。石英・長石類〉複合石英類（微細）〉砂岩質、ジルコン、［凝灰岩質］、植物珪酸体化石

No.19：100～600μmが多い（最大粒径4.7mm）。石英・長石類〉複合石英類（微細）〉砂岩質、ジルコン、［凝灰岩質、ガラス質］、植物珪酸体化石、植物遺体多い

No.20：100～700μmが多い（最大粒径2.0mm）。石英・長石類》複合石英類（微細）〉ガラス質〉砂岩質、雲母類、角閃石類、ジルコン、［凝灰岩質］、骨針化石、植物珪酸体化石

No.21：120～900μmが多い（最大粒径3.2mm）。複合石英類（微細）〉石英・長石類〉砂岩質、凝灰岩質、ジルコン、角閃石類、珪藻化石（不明種）、植物珪酸体化石

No.22：100～600μmが多い（最大粒径4.3mm）。石英・長石類〉複合石英類（微細）〉カリ長石（パーサイト）、凝灰岩質、角閃石類、ジルコン、ガラス質、斜方輝石、骨針化石、植物珪酸体化石

No.23：100μm～1.0mmが多い（最大粒径5.0mm）。石英・長石類〉黒色砂岩質〉複合石英類（微細）〉斑晶質、ガラス質、凝灰岩質、雲母類、［褐色複合鉱物（含輝石類）］、珪藻化石（淡水種 *Eunotia* 属、*Surirella* 属、不明種）、骨針化石、植物珪酸体化石

No.24：110～900μmが多い（最大粒径4.0mm）。石英・長石類〉凝灰岩類〉複合石英類（微細）〉角閃石類、斜方輝石、ジルコン、雲母類、ガラス質、珪藻化石（不明種）、胞子化石、植物珪酸体化石、植物遺体

№25：100～750μmが多い（最大粒径3.9㎜）。石英・長石類〉複合石英類（微細）〉カリ長石（パーサイト）、角閃石類、斜方輝石、ガラス質、ジルコン、［凝灰岩質］、植物珪酸体化石
№26：100～800μmが多い（最大粒径3.5㎜）。石英・長石類〉砂岩質（黒色も）〉複合石英類（微細）〉ガラス質、斜方輝石、角閃石類、ジルコン、［褐色斑晶質、凝灰岩質］、珪藻化石（淡水種 *Cymbella* 属、不明種）、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石多産
№27：100μm～1.2mmが多い（最大粒径2.3㎜）。石英・長石類〉凝灰岩質〉複合石英類（微細）〉砂岩質（黒色も）、角閃石類、斜方輝石、ガラス質、ジルコン、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石
№28：90～900μm前後が多い（最大粒径1.7㎜）。石英・長石類〉複合石英類〉複合鉱物類（岩輝石類・雲母類）〉複合石英類（微細）、カリ長石（パーサイト）、雲母類、単斜輝石、角閃石類、ザクロ石類、ジルコン、［凝灰岩質］、放散虫化石（６個体）、珪藻化石（海水種 *Coscinodiscus* 属／ *Thalassiosira* 属）、骨針化石多い、胞子化石、植物珪酸体化石
№29：70～300μm前後が多い（最大粒径900μm）。ガラス質（軽石型含む）〉石英・長石類〉複合石英類（微細）、角閃石類、斜方輝石、珪藻化石（海水泥質干潟指標種群 *Nitzschia cocconeiformis*、*Nitzschia granaulata*、湖沼浮遊生指標種群 *Melosira granulata*、淡水種 Eunotia *biareofera*、*Melosira* 属、*Cymbella* 属、*Pinnularia* 属、*Eunotia* 属、*Surirella* 属、不明種多産）、骨針化石多産、胞子化石、植物珪酸体化石多産
№30：70～800μmが多い（最大粒径1.3㎜）。石英・長石類〉凝灰岩質〉複合石英類（微細）〉砂岩質、雲母類、ガラス質、ジルコン、角閃石類、珪藻化石（淡水種 *Surirella* 属）、植物珪酸体化石
№31：80～500μmが多い（最大粒径1.6㎜）。石英・長石類》複合石英類（微細）〉凝灰岩質、雲母類、斜方輝石、ガラス質、ジルコン、角閃石類、珪藻化石（淡水種 *Pinnularia* 属）、胞子化石、植物珪酸体化石
№32：200～900μm前後が多い（最大粒径1.4㎜）。複合石英類〉石英・長石類〉複合石英類（微細）〉複合鉱物類、砂岩質（黒色含む）、ジルコン、斜長石（双晶）、カリ長石（パーサイト）、雲母類、角閃石類、珪藻化石（不明種）、骨針化石、植物珪酸体化石
№33：100～800μm前後が多い（最大粒径3.3㎜）。石英・長石類〉複合石英類〉複合石英類（微細）〉砂岩質（黒色含む）、斜長石（双晶）、カリ長石（パーサイト）、複合鉱物類、ジルコン、斜方輝石、珪藻化石（海水種 *Coscinodiscus* 属／ *Thalassiosira* 属、淡水種 *Eunotia biareofera*、*Rhopalodia gibberula*、*Epithemia turgidula*、*Eunotia* 属、*Cymbella* 属、不明種）、胞子化石、骨針化石、植物珪酸体化石
№34：80～300μmが多い（最大粒径3.0㎜）。石英・長石類〉複合石英類（微細）〉砂岩質（黒色）〉斜長石（双晶）、凝灰岩質、ガラス質、雲母類、斜方輝石、角閃石類、ジルコン、［変質斑晶質］、珪藻化石（湖沼浮遊生指標種群 *Melosira granulata*、淡水種 *Melosira* 属、*Eunotia* 属、不明種）、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石
№35：80～300μmが多い（最大粒径650μm）。石英・長石類》複合石英類（微細）〉斜長石（双晶）、角閃石類、凝灰岩質、ガラス質、ジルコン、珪藻化石（淡水種 *Pinnularia* 属、*Eunotia* 属）、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石
№36：100μm～1.3mmが多い（最大粒径4.1㎜）。石英・長石類》複合石英類〉カリ長石（パーサイト）、雲母類、ジルコン、カリ長石（微斜長石）、斜長石（双晶）、［複合石英類（微細）、凝灰岩質］、骨針化石、植物珪酸体化石
№37：90μm～1.2mmが多い（最大粒径2.2㎜）。石英・長石類〉凝灰岩質〉複合石英類（微細）〉カリ長石（パーサイト）、砂岩質（黒色含む）、斜長石（双晶）、角閃石類、紋象質、ジルコン、斜方輝石、ガラス質、骨針化石、植物珪酸体化石
№38：90～2500μmが多い（最大粒径500μm）。石英・長石類〉複合石英類（微細）〉斜方輝石、凝灰岩質、ガラス質、ジルコン、雲母類、珪藻化石（*Eunotia* 属）、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石
№39：80～300μmが多い（最大粒径900μm）。石英・長石類》複合石英類（微細）〉角閃石類、斜長石（双晶）、ガラス質、凝灰岩質、ジルコン、［複合石英類］、珪藻化石（淡水種 *Pinnularia* 属）、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石

№40：80～200μｍが多い（最大粒径600μｍ）。石英・長石類》複合石英類（微細）〉砂岩質、単斜輝石、角閃石類、ガラス質、カリ長石（パーサイト）、凝灰岩質、珪藻化石（不明種）、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石

№41：70～500μｍが多い（最大粒径1.5㎜）。石英・長石類〉凝灰岩質〉複合石英類（微細）〉砂岩質、斜長石（双晶）、角閃石類、ジルコン、［ガラス質］、斜方輝石、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石、凝灰岩質胎土

№42：80～500μｍが多い（最大粒径3.2㎜）。石英・長石類〉複合石英類（微細）〉砂岩質、角閃石類、凝灰岩質、ガラス質、ジルコン、［褐色複合鉱物（雲母類）］、珪藻化石（淡水種 *Surirella* 属）、胞子化石、植物珪酸体化石

№43：100～800μｍが多い（最大粒径5.5㎜）。石英・長石類〉複合石英類（微細）〉砂岩質（黒色）、ガラス質、珪藻化石（淡水種Ｅｕｎｏｔｉａ属、不明種）、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石

№44：80～800μｍが多い（最大粒径750μｍ）。石英・長石類》凝灰岩質〉複合石英類（微細）〉角閃石類、斜方輝石、ガラス質、ジルコン、植物珪酸体化石

№45：60～500μｍが多い（最大粒径1.1㎜）。石英・長石類〉複合石英類（微細）〉雲母類、角閃石類、ジルコン、単斜輝石、凝灰岩質、珪藻化石（淡水種 *Eunotia biareofera*、不明種）、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石

№46：60～500μｍが多い（最大粒径800μｍ）。石英・長石類》黒褐色粒子〉複合石英類（微細）、斜長石（双晶）、ガラス質、角閃石類、ジルコン、［凝灰岩質］、骨針化石、植物珪酸体化石

№47：100～700μｍが多い（最大粒径1.4㎜）。石英・長石類〉雲母類》複合石英類（微細）、複合石英類、斜長石（双晶）、斜方輝石、ジルコン、角閃石類、ガラス質、ザクロ石類、［凝灰岩質］、骨針化石、植物珪酸体化石

№48：50～300μｍが多い（最大粒径５ｍｍ）。石英・長石類〉凝灰岩質〉複合石英類（微細）〉斜方輝石、角閃石類、斜長石（双晶）、ガラス質、ジルコン、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石

№49：70～600μｍが多い（最大粒径1.3㎜）。石英・長石類〉複合石英類（微細）〉凝灰岩質、雲母類、斜長石（双晶）、ジルコン、植物珪酸体化石

№50：50～200μｍが多い（最大粒径１㎜）。泥岩質〉石英・長石類〉ガラス〉雲母類〉複合石英類〉凝灰岩質、骨針化石、植物珪酸体化石

５　化石による材料粘土の分類

検討した胎土中には、その薄片全面の観察から、放散虫化石や珪藻化石あるいは骨針化石などが検出された（図版51）。これら微化石類の大きさは、珪藻化石が10～数100μｍ（実際観察される珪藻化石は大きいもので150μｍ程度）、放散虫化石が数百μｍ、骨針化石が10～100μｍ前後である（植物珪酸体化石が10～50μｍ前後）。一方、砕屑性堆積物の粒度は、粘土が約3.9μｍ以下、シルトが約3.9～62.5μｍ、砂が62.5μｍ～２ｍｍである（地学団体研究会・地学事典編集委員会編、1981）。このことから、植物珪酸体化石を除いた微化石類は輪胎土の材料となる粘土中に含まれるものと考えられ、その粘土の起源を知るのに有効な指標になると考える。なお、植物珪酸体化石は、堆積物中に含まれていること、製作場では灰質が多く混入する可能性が高いなど、他の微化石類のように粘土の起源を指標する可能性は低いと思われる。

ここで検討した胎土は、微化石類により、１）外洋成粘土を利用した胎土、２）干潟成粘土を利用した胎土、３）淡水成粘土を利用した胎土、４）水成粘土を利用した胎土、５）その他粘土を利用した胎土、であることが推定された（表11）。

(1) 外洋成粘土を利用した胎土（２胎土）

これら胎土中には、放散虫化石が特徴的に含まれ、その他海水種珪藻化石や骨針化石なども含まれていた。これらの土器は、いずれもＳ字状口縁台付甕Ａ類であるが、大垣市今宿遺跡から出土したＳ字状口縁台付甕Ａ類（甕Ｃ１）胎土中からも検出されている（藤根・古橋、1998）。

⑵ 干潟成粘土を利用した胎土（１胎土）

この胎土中には、海水干潟指標種群の *Nitzschia cocconeiformis* や *Nitzschia granaulata* が検出された。また、淡水種 Eunotia biareofera や Melosira 属なども検出され、骨針化石が多く含まれていた。この胎土はパレススタイル壺であるが、加飾壺などと共にこれら土器胎土の特徴的な材料の一つである（藤根、1998）。なお、これらの胎土中には、テフラ起源のガラスが特徴的に多く含まれている。

⑶ 淡水成粘土を利用した胎土（20 胎土）

これらの胎土中には、明らかな淡水種珪藻化石が含まれている。№7 や№33の胎土中には、沼沢湿地などで見られる沼沢湿地付着生指標種群の *Stauroneis phoenicenteron* や *Eunotia biareofera* や *Cymbella* 属などが含まれていた。また、水成を指標する骨針化石が含まれる胎土もある。

⑷ 水成粘土を利用した胎土（15 胎土）

これら胎土中には、不明種珪藻化石や骨針化石が含まれていた。骨針化石は、海成層中に特に多く含まれるが、淡水成層中においても含まれることから、具体的な環境については言及できない。

⑸ その他粘土を利用した胎土（12 胎土）

これら胎土中には、前述のような水成環境を指標するような微化石類が含まれていないため、粘土についての具体的な堆積環境については言及できない。

６　砂粒組成による分類

ここで設定した複合鉱物類は、構成する鉱物種や構造的特徴から設定した分類群であるが、地域を特徴づける源岩とは直接対比できない。このため、各胎土中の鉱物、岩石粒子の岩石学的特徴は、地質学的状況に一義的に対応しない。

ここでは、比較的大型の砂粒について起源岩石の推定を行った（表11）。岩石の推定は、複合石英類（微細）や砂岩質あるいは泥岩質が堆積岩類、複合石英類（大型）や複合鉱物類（含輝石類・含角閃石類・含雲母類）が深成岩類、凝灰岩質が凝灰岩類、斑晶質や完晶質が火山岩類、ガラスがテフラ（火山噴出物）である。さらに、表９に示す推定岩石の第１出現群および第２出現群の組み合わせにより分類を行なった。

その結果、堆積岩類を主体として凝灰岩類やテフラからなるＣｅ群（26胎土）、凝灰岩類を主体として堆積岩類やテフラからなるＥｃ群（11胎土）、堆積岩類を主体としたＣ群（４胎土）、深成岩類を主体とした堆積岩類やテフラなどからなるＢｃ群（５胎土）、テフラ起源のガラスを主体として堆積岩類からなるＦｃ群（３胎土）、堆積岩類を主体として深成岩類やテフラなどからなるＣｂ群（１胎土）である。

遺跡の周辺地域では、中生代ジュラ紀～白亜紀最前期の美濃帯那比ユニットの固結した砂岩泥岩層が分布している。この地域は、美濃須衛古窯が成立した地域であり、灰釉陶器や須恵器などが生産された地域でもある。この遺跡の東側に位置する深橋前などでは、谷部に粘土質の堆積物が見られることから、焼き物の粘土材料として利用したことが推定される。しかし、これらの堆積物は、ここで行なった土器薄片と同様に焼成した後薄片を作成し観察すると、砂岩起源の砂粒の他、これらを構成する石英粒から構成されている。このことから、胎土中に見られる凝灰岩質砂粒は、本遺跡の隣接地周辺部の砂粒組成ではないことが予想される。

一方、東側地域の美濃加茂市や可児市あるいは瑞浪市にかけての地域では、新第三紀中新世前―中期の瑞浪層群が分布するが、その下部層の蜂屋累層は、流紋岩・安山岩・玄武岩の火砕岩および溶岩が分布し、また、その主部においては砂岩・泥岩・礫岩および凝灰岩から構成されている（地質調査所、1990；図193の中新統）。こうした地質学的環境から、ここで分類された堆積岩類や凝灰岩類を主体としたＣｅ群やＥｃ群の砂粒組成は、こうした地域の砂粒組成であることが予想される。

７　考察

ここでは、廻間Ⅰ式に相当する甕・壺・高坏・鉢・器台について、これら胎土の粘土および砂粒組成について調べた。

材料粘土では、胎土中粘土部分に含まれる微化石類により、外洋成粘土を利用した胎土（２胎土）、干潟成粘土を利用した胎土（１胎土）、淡水成粘土を利用した胎土（20胎土）、水成粘土を利用した胎土（１５胎土）、その他粘土を利用した胎土（12胎土）、であることが判明した。

一方、砂粒組成では、堆積岩類を主体として凝灰岩類やテフラからなるＣｅ群（26胎土）、凝灰岩類を主体として堆積岩類やテフラからなるＥｃ群（11胎土）、堆積岩類を主体としたＣ群（４胎土）、深成岩類を主体とした堆積岩類やテフラなどからなるＢｃ群（５胎土）、テフラ起源のガラスを主体として堆積岩類からなるＦｃ群（３胎土）、堆積岩類を主体として深成岩類やテフラなどからなるＣｂ群（１胎土）が識別できた。

表10に、胎土材料の粘土と砂粒組み合わせの関係についてまとめた。これを見ると、珪藻化石の少ない淡水成（()は珪藻化石が少ないことを示す）や水成あるいはその他粘土では、堆積岩類を主体として凝灰岩類やテフラからなるＣｅ群や凝灰岩類を主体として堆積岩類やテフラからなるＥｃ群と高い相関が見られ、50試料中35試料に及ぶ。こうしたことから、微化石類の少ない粘土などは、堆積岩類や凝灰岩類が分布する地域に関係した粘土であることが予想される。なお、胎土中に凝灰岩類の砂粒か含まれる胎土は、偏光顕微鏡で直消光にした場合に全体的に暗いことから、凝灰岩類が粘土化した凝灰岩質胎土である。

前述したように、この地域では基盤岩類として中生代の砂岩泥岩層が広く分布していることから、これらの胎土は、本遺跡の隣接地で製作された土器でないことが予想される。なお、土器観察から在地系とされた甕９試料は（No.４、No.11、No.20、No.21、No.22、No.42、No.45、No.48、No.49）、いずれもＣｅ群あるいはＥｃ群であり、微化石類の少ない粘土を利用していることが分かる。

一方、Ａ類に分類されるＳ字状口縁台付甕の胎土（No.12、No.28、No.32、No.33、No.28）は、放散虫化石を含む外洋成や淡水成あるいは水成粘土を利用しているが、砂粒組成はいずれも深成岩類を主体として堆積岩類からなるＢｃ群に分類される。東海地域において放散虫化石を含む地層は、中央構造線沿いの新第三紀中新統の可能性が高い。矢作ほか（1997）は、これらＳ字状口縁台付甕の重鉱物組成を調べ、角閃石やザクロ石を特徴的に含むことから、三重県に流域をもつ雲出川下流地域で作られた土器である可能性を示唆している。なお、外洋成粘土を用いた胎土はいずれもザクロ石類を含んでいるが、中央構造線沿いに分布する領家変成岩類に特徴的に含まれる。こうしたＳ字状口縁台付甕Ａ類の特徴は、大垣市今宿遺跡から出土した多くのＳ字状口縁台付甕Ａ類今宿分類（甕Ｃ１類）においても見られる（藤根・古橋、1998）。

また、No.13の線刻土器やNo.29のパレス土器あるいはNo.43の甕Ｇ類は、テフラ起源のガラスを特徴的に多く含み堆積岩類から構成される胎土である。東海地域には、祭祀に利用したと考えられる赤彩を施したパレススタイル壺が知られているが、干潟成粘土を用いガラスを多量に含むものが約３分の１程度見られる（藤根、1998）。No.29のパレス土器は、干潟成粘土を用いガラスを多量に含んでいる点で共通した特徴を示す土器である。なお、これらの土器は、一般的な砂粒物が少なくガラスを多量に含むことから、混和材としてガラスを用いているものと考えられ、荒尾南遺跡から出土した線刻絵画加飾壺（山中式）や西上免古墳から出土した加飾壺（廻間Ⅱ式）においても見られる（藤根、1998）。

No.５やNo.６あるいはNo.23の甕は、土器観察から北陸系とされるが、No.23の甕を除いて、凝灰岩類を含むＣｅ群やＥｃ群からなる在地系胎土の特徴と類似していることから、この地域で整作された可能性が高い。

また、No.34の近江系とされる甕は、砂粒組成は、変質火成岩類を含むＣｅ群からなるが、湖沼型の珪藻化石や骨針化石を特徴的に含む胎土である。骨針化石の多産は、No.29のパレス土器のような干潟成粘土などでは多く含まれる場合が多いが、湖沼型の珪藻化石を含む淡水成粘土中では顕著な特徴と考えられる。骨針化石は、海綿動物の骨格の一部であるが、海綿は海産が一般的であるものの琵琶湖においては10種の海綿が知られ、過去に堆積した古琵琶湖層群中にも多産することが知られている（琵琶湖自然史

研究会編、1994)。こうしたことから、湖沼型の珪藻化石を特徴的に含み、骨針化石を多産するような粘土は、こうした琵琶湖周辺部堆積物の特徴である可能性がある。

№２や№29の胎土中には、イネ科植物の葉身に形成される植物珪酸体が多量に含まれている。この植物珪酸体化石（一般的にプラント・オパールと呼ばれ、稲作推定として土壌分析として利用される）は、イネ科植物を焼いた時にそのまま残ることから、焼いた時にできる灰質を除粘材として利用した可能性が考えられる（藤根、1998)。

８　考察

ここでは、廻間Ⅰの土器について胎土の粘土および砂粒について調べた。これまで、土器の胎土分析は、砂粒に注目して製作地の推定を目的として盛んに行なわれてきた。しかしながら、製作地のみならず土器作りの実体を知るためには、胎土の砂粒組成のみならず粘土の特徴についても知ることが必要である。特に考古学的に在地系とされる土器群は、隣接地で製作されたことを示唆することから、隣接地の地質学的状況と比較・検討することにより土器作りの実体あるいは製作地について有意義な情報が得られるものと考える。

引用文献

安藤一男（1990）淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用．東北地理，42，2，73－88.

琵琶湖自然史研究会編（1994）自然史双書５「琵琶湖の自然史」．八坂書房、340 p．

地学団体研究会・地学事典編集委員会編（1981）『増補改訂　地学事典』．平凡社，1612 p．

地質調査所（1990）20 万分の１地質図「飯田」、地質調査所

菱田　　量・車崎正彦・松本　　完・藤根　　久（1993）岩石学的方法に基づく胎土分析について－弥生時代後期の土器を例にして－．日本文化財科学会第 10 回大会研究発表要旨集，34－35.

藤根　　久（1998）東海地域（伊勢－三河湾周辺）の弥生および古墳土器の材料．第６回東海考古学フォーラム岐阜大会、土器・墓が語る、108－117.

藤根　　久・古橋美智子（1998）第４節　古墳時代甕・鉢の胎土材料．岐阜県文化財保護センター調査報告書第３７集「今宿遺跡（第２分冊）」．岐阜県土地開発公社・財団法人岐阜県文化財保護センター、p 38－70.

北村　　信・石井武政・寒川　　旭・中川久夫（1986）仙台地域の地質．地域地質研究報告（５万分の１図幅）．地質調査所，134 p．

小杉正人（1998）珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用．第四紀研究，27，1－20.

車崎正彦・松本　　完・藤根　　久・菱田　　量・古橋美智子（1996）(39) 土器胎土の材料－粘土の起源を心中に－．日本考古学協会第 62 回大会研究発表要旨、153－156.

矢作健二・服部俊之・赤塚次郎（1997）東海地域におけるＳ字状口縁台付甕の産地について－胎土分析による予察－．日本文化財科学会第 14 回大会研究発表要旨集、p．126－127.

表6　土器試料とその特徴

番号	出土遺構・出土区	遺物No.	器種	時期	分類・備考	色相 明度 / 彩度	色	混入粒子の特徴	中黒線の有無
1	9号住居跡	23	高坏	廻間Ⅰ	高坏C類	10YR7/4	にぶい黄橙	極細粒質	無
2	9号住居跡	25	器台	廻間Ⅰ	器台B2類	7.5YR7/6	橙	内部が網状になっている、赤色粒子	無
3	9号住居跡	28	鉢	廻間Ⅰ	鉢B類	7.5YR7/6	橙		無
4	9号住居跡	30	甕	廻間Ⅰ	甕D類（在地系）	2.5YR5/6	明赤褐	砂粒も多い	無
5	9号住居跡	31	甕	廻間Ⅰ	甕G1類（北陸系）	10YR6/4	にぶい黄橙	大型白色粒子目立つ	無
6	9号住居跡	32	甕	廻間Ⅰ	甕G2類（北陸系）	7.5YR6/6	橙	白色粒子目立つ	無
7	9号住居跡	35	壺	廻間Ⅰ	短頸壺（壺D2類）	10YR8/3	浅黄橙	白色粒子・黒色粒子目立つ	有
8	9号住居跡	36	壺	廻間Ⅰ	長頸壺（壺C2類）	10YR7/3	にぶい黄橙	細粒質	無
9	11号住居跡	48	壺	廻間Ⅰ	広口壺（壺B1類）	7.5YR8/4	浅黄橙	白色粒子・黒色粒子目立つ	無
10	11号住居跡	41	器台	廻間Ⅰ	器台B類	10YR8/4	浅黄橙	赤褐色粒子、黒色粒子目立つ	無
11	16号住居跡	69	甕	廻間Ⅰ	甕D類	10YR7/3	にぶい黄橙	黒色粒子	有
12	16号住居跡	77	甕	廻間Ⅰ	甕F類（S字甕A類）	10YR7/3	にぶい黄橙	白色・灰色粗粒子目立つ	有
13	16号住居跡	82	壺	廻間Ⅰ	壺B類（線刻土器）	10YR7/4	にぶい黄橙	黒色粒子	無
14	16号住居跡	68	鉢	廻間Ⅰ	鉢A類（条痕系）	7.5Y6/6	橙	微細黒色粒子目立つ	無
15	35号住居跡	133	高坏	廻間Ⅰ	高坏C類	10YR7/4	にぶい黄橙	黒色粒子散在	有
16	35号住居跡	139	器台	廻間Ⅰ	器台B2類	10YR4/1	褐灰	白色粒子目立つ	無
17	35号住居跡	138	器台	廻間Ⅰ	器台B2類	2.5YR7/1	灰白	白色粒子、黒色粒子が目立つ	無
18	35号住居跡	147	鉢	廻間Ⅰ	鉢C類	7.5YR5/2	褐灰		無
19	35号住居跡	148	鉢	廻間Ⅰ	鉢C類	10YR8/2	灰白	角張った白色粒子目立つ	無
20	35号住居跡	156	甕	廻間Ⅰ	甕D類（在地系）	10YR7/4	にぶい黄橙	黒色粒子	無
21	46号住居跡	200	甕	廻間Ⅰ	甕D類（在地系）	10YR7/4	にぶい黄橙	粗粒白色粒子	無
22	46号住居跡	199	甕	廻間Ⅰ	甕C類（在地系）	7.5YR7/6	橙	黒色粒子目立つ	無
23	50号住居跡	216	甕	廻間Ⅰ	甕G1類（北陸系）	10Y8/3	浅黄橙	粗粒子目立つ、黒色粒子	無
24	52号住居跡	224	甕	廻間Ⅰ	甕A2類（条痕系）	5YR5/8	明赤褐	白色粒子、赤褐色粒子目立つ	やや灰
25	54号住居跡	235	高坏	廻間Ⅰ	高坏C類	7.5YR7/6	橙	砂粒	無
26	54号住居跡	243	鉢	廻間Ⅰ	鉢D類	10YR8/3	浅黄橙	赤色粒子（チャート？）目立つ、	有
27	54号住居跡	252	甕	廻間Ⅰ	甕A2類（条痕系）	5YR7/8	橙	粗粒チャート質	無
28	54号住居跡	256	甕	廻間Ⅰ	甕F類（S字甕A類）	10YR6/4	にぶい黄橙	微小白色粒子、黒色粒子目立つ	有
29	54号住居跡	271	壺	廻間Ⅰ	壺A2類（パレス壺）	7.5YR7/6	橙	木目細かい	無
30	54号住居跡	270	壺	廻間Ⅰ	壺A2類（パレス壺）	7.5YR8/6	浅黄橙	雲母類かガラス？	無
31	54号住居跡	275	壺	廻間Ⅰ	壺A類（パレス壺）	10YR8/4	浅黄橙	微小黒色粒子	有
32	57号住居跡	287	甕	廻間Ⅰ	甕F類（S字甕A類）	7.5YR7/6	橙	黒色粒子目立つ	有
33	58号住居跡	299	甕	廻間Ⅰ	甕F類（S字甕A類）	10YR5/3	にぶい黄橙	黒色粒子目立つ	有
34	63号住居跡	330	甕	廻間Ⅰ	甕B類（近江系）	10YR7/3	にぶい黄橙	角張った砂粒見られる	有
35	73号住居跡	378	高坏	廻間Ⅰ	高坏C類	10YR7/3	にぶい黄橙	微小黒色粒子	無
36	73号住居跡	389	壺	廻間Ⅰ	壺B1類（条痕系？）	5YR5/8	明赤褐	石英、微小黒色粒子	有
37	81号住居跡	437	壺	廻間Ⅰ	壺B1類（条痕系）	5YR5/8	明赤褐	灰色粒子、白色粒子、微小赤褐色目立つ	有
38	81号住居跡	434	器台	廻間Ⅰ	器台B類	10YR7/4	にぶい黄橙	木目細かい	有
39	SU01（土器集積）	446	高坏	廻間Ⅰ	高坏C類	7.5YR6/7	橙	微小黒色粒子、赤褐色粒子目立つ	有
40	SU01（土器集積）	445	高坏	廻間Ⅰ	高坏C類	7.5YR7/6	橙	微小黒色粒子目立つ、木目細かい	無
41	SU01（土器集積）	453	鉢	廻間Ⅰ	鉢B類（台付鉢）	2.5YR6/6	橙	微小黒色粒子目立つ	有
42	SU01（土器集積）	454	甕	廻間Ⅰ	甕C類（在地系）	10YR7/4	にぶい黄橙	粗粒子	有
43	SU02（土器集積）	459	甕	廻間Ⅰ	甕G1類（北陸系・月影式）	2.5Y8/2	灰白	粗粒子目立つ	有
44	V13グリッド	646	壺	廻間Ⅰ	壺A1類（パレス壺）	7.5YR7/6	橙	赤彩、微小黒色粒子含む	有
45	V13グリッド	574	甕	廻間Ⅰ	甕D類（在地系）	10YR7/3	にぶい黄橙	微小白色粒子	無
46	V12グリッド	699	甕	宇田式	甕I類（宇田甕）	7.5YR6/6	橙	雲母類、白色粒子	無
47	V12グリッド	692	高坏	宇田式	高坏G類	5YR6/6	橙	やや薄い、黒色粒子	無
48	2号住居跡	8	甕	廻間Ⅰ	甕D類（在地系）	10YR4/1	褐灰	多少粗粒子含む、木目細かい	無
49	7号住居跡	20	甕	廻間Ⅰ	甕C類（在地系）	10YR7/4	にぶい黄橙	木目揃う	無
50	7号住居跡	19	壺	廻間Ⅰ	壺A類（パレス壺）	10YR8/3	浅黄橙	黒色粒子やや目立つ、表面滑らか	無

表7　胎土中の粒子計数一覧（その1）

分類群	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25
微化石類																									
放散虫化石	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
骨針化石	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	7	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
珪藻化石（海水種）	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
珪藻化石（淡水種）	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
珪藻化石（？）	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
胞子化石	2	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
植物珪酸体化石	41	145	11	6	10	20	12	34	9	57	29	21	7	3	102	17	-	1	3	41	1	50	31	20	13
鉱物類																									
石英・長石類	112	121	85	140	145	165	135	179	122	178	118	258	31	169	196	114	124	115	127	140	121	176	232	158	186
石英・長石類（含雲母類）	26	20	28	35	30	17	30	16	19	20	17	21	2	20	29	19	20	25	22	25	10	17	24	23	11
斜長石（双晶）	3	1	3	1	2	1	2	2	2	3	4	3	1	-	5	2	6	2	1	2	1	1	1	1	1
カリ長石（パーサイト）	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	1
カリ長石（微斜長石）	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-	1	-	1	-	-	-	-	-	-
ミルメカイト（微文象）	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
雲母類	7	6	3	1	3	3	16	2	18	16	9	32	1	4	4	3	11	6	8	17	7	8	21	5	12
単斜輝石	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	1	-	-	1	-	-	-
斜方輝石	-	-	1	-	1	-	-	-	-	-	2	2	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-
角閃石類	-	3	1	-	1	1	-	2	-	4	2	3	-	-	1	-	-	-	-	2	-	1	1	-	-
ざくろ石	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ジルコン	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-	-	-	-	-	-
ガラス質	23	28	20	5	-	4	14	34	2	11	15	1	107	20	16	2	-	-	1	28	-	13	10	1	15
濁ガラス	-	2	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	1	-	-	-
複合鉱物類																									
斑晶質	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
完晶質	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
凝灰岩質	2	-	-	-	-	-	-	4	-	-	1	-	-	2	-	5	-	-	-	1	2	1	-	1	-
複合雲母類	2	-	1	-	-	2	-	4	-	1	-	1	-	2	1	-	2	-	6	1	-	-	1	2	-
複合鉱物類（含雲母類）	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
複合鉱物類（含角閃石類）	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
複合石英類（大型）	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	3	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	1
複合石英類（中型）	2	-	-	-	1	1	-	1	2	1	-	5	1	-	6	1	3	1	1	3	1	-	5	1	4
複合石英類（小型）	31	24	23	42	42	65	25	40	54	52	43	26	1	43	43	28	39	23	44	23	32	50	30	24	45
複合石英類（微細）	5	-	5	-	-	3	3	3	2	1	1	2	-	4	4	2	2	10	4	-	8	4	1	4	2
片理複合石英類	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
砂岩質	10	7	16	17	16	3	12	2	5	5	5	8	1	7	-	19	8	11	11	11	21	10	10	14	13
泥岩質	7	8	12	13	20	12	16	6	8	8	13	17	2	8	7	29	18	35	22	7	32	15	11	39	15
その他																									
不透明	-	-	1	-	-	-	1	1	-	-	-	-	2	2	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
不　明	4	3	1	-	-	2	-	1	-	1	-	1	-	-	-	-	1	-	-	-	2	2	1	2	1
総ポイント数	277	372	213	260	272	299	266	333	243	360	260	409	172	286	417	246	236	230	253	302	238	350	380	296	320

表8　胎土中の粒子計数一覧（その2）

分類群	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50
微化石類																									
放散虫化石	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
骨針化石	-	-	9	36	-	-	1	-	34	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
珪藻化石（海水種）	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
珪藻化石（淡水種）	-	-	-	2	-	-	-	4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
珪藻化石（？）	1	-	-	13	-	-	-	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
胞子化石	2	-	1	35	-	-	-	1	1	1	-	-	2	-	1	-	-	1	1	-	-	-	1	-	-
植物珪酸体化石	79	17	9	466	29	8	23	39	61	26	10	25	161	109	137	37	67	44	75	31	15	7	31	1	36
鉱物類																									
石英・長石類	209	136	192	96	188	318	151	210	104	126	266	100	96	231	126	167	147	74	119	67	157	219	93	118	128
石英・長石類（含雲母類）	18	25	17	4	15	13	27	19	8	15	20	22	8	23	22	15	12	-	23	30	27	28	20	21	24
斜長石（双晶）	10	2	11	6	-	5	10	7	3	1	4	3	3	5	3	11	3	-	4	-	9	7	6	4	1
カリ長石（パーサイト）	2	-	-	-	-	-	-	5	-	-	-	-	-	2	1	1	-	-	1	1	-	-	1	-	1
カリ長石（微斜長石）	1	-	-	-	-	-	1	-	1	-	-	-	2	-	1	2	-	-	-	-	-	-	1	1	2
ミルメカイト（微文象）	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
雲母類	9	2	7	4	13	16	20	17	2	4	71	3	3	11	3	4	2	4	9	5	10	36	3	10	7
単斜輝石	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-
斜方輝石	-	2	3	-	-	-	-	2	-	1	1	3	-	-	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	3
角閃石類	1	6	2	3	1	1	1	1	1	3	1	1	-	4	4	1	8	-	-	-	1	19	-	-	-
ざくろ石	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ジルコン	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ガラス質	9	25	1	63	30	17	-	8	38	38	-	1	28	13	16	3	15	100	19	9	5	2	27	-	12
濁ガラス	-	1	-	3	-	-	-	-	-	-	-	1	1	5	3	-	2	-	1	-	-	-	-	-	-
複合鉱物類																									
斑晶質	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	1	-	-	-	-	-
完晶質	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
凝灰岩質	-	6	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	7	2	-
複合雲母類	1	1	-	-	2	-	-	-	4	2	-	1	-	1	3	-	1	1	1	-	-	-	-	2	-
複合鉱物類（含雲母類）	-	-	13	-	-	-	4	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-	-	-
複合鉱物類（含角閃石類）	-	-	3	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
複合石英類（大型）	1	-	2	-	-	1	4	-	-	-	1	-	-	1	-	2	-	-	-	-	-	2	-	1	-
複合石英類（中型）	2	1	3	1	1	2	2	-	-	1	2	1	4	-	2	2	2	1	1	-	2	-	-	4	-
複合石英類（小型）	40	33	38	24	41	55	43	34	36	38	13	25	43	35	51	37	39	7	36	15	24	20	31	38	36
複合石英類（微細）	1	2	3	3	3	5	2	1	7	5	-	-	7	5	-	20	9	-	3	10	11	1	1	-	5
片理複合石英類	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
砂岩質	12	17	4	1	5	3	5	7	6	-	1	17	5	3	5	7	2	1	8	12	8	1	3	10	12
泥岩質	13	22	12	1	6	2	16	8	13	10	-	32	4	7	7	14	17	1	10	29	17	3	14	24	17
その他																									
不透明	-	2	3	-	-	-	-	-	1	-	-	1	-	1	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
不　明	-	-	2	1	1	-	1	1	-	-	1	4	4	1	-	-	3	-	3	3	-	1	-	-	-
総ポイント数	412	300	336	762	335	446	312	368	323	272	392	243	371	457	387	325	329	234	314	214	287	348	240	237	284

表９　土器胎土中の砂粒分類

			第１出現群					
			A	B	C	D	E	F
			片岩類	深成岩類	堆積岩類	火山岩類	凝灰岩類	テフラ
第2出現群	a	片岩類	－	Ｂａ	Ｃａ	Ｄａ	Ｅａ	Ｆａ
	b	深成岩類	Ａｂ	－	Ｃｂ	Ｄｂ	Ｅｂ	Ｆｂ
	c	堆積岩類	Ａｃ	Ｂｃ	－	Ｄｃ	Ｅｃ	Ｆｃ
	d	火山岩類	Ａｄ	Ｂｄ	Ｃｄ	－	Ｅｄ	Ｆｄ
	e	凝灰岩類	Ａｅ	Ｂｅ	Ｃｅ	Ｄｅ	－	Ｆｅ
	f	テフラ	Ａｆ	Ｂｆ	Ｃｆ	Ｄｆ	Ｅｆ	－

表10　胎土材料の粘土と岩石組み合わせの関係

		砂粒組み合わせ							
		B群	Ｂｃ群	Ｃｅ群	Ｃｂ群	C群	Ｅｃ群	Ｆｃ群	合 計
粘土の種類	外洋成		2						2
	汽水成							1	1
	淡水成		1	2				1	4
	(淡水成)			10		1	4	1	16
	水　成		2	7	1		5		15
	その他			7		3	2		12
	合 計	0	5	26	1	4	11	3	50

表11　土器胎土の粘土および砂粒の特徴

番号	出土遺構・出土区	器種	分類・備考	粘土の特徴								砂粒の特徴					植物珪酸体化石	その他
				分類	種類	淡水種珪藻化石	放散虫化石	海水種珪藻化石	不明種珪藻化石	骨針化石	胎土	分類	砂粒組成（幅広類、）は極稀な場合、[ ] は稀）	結晶質放散虫	ジルコン	ザクロ石類		
1	9号住居跡	高坏	高坏C類		その他						凝灰岩質	Ec	凝灰岩類〉堆積岩類〉テフラ	+	+			
2	9号住居跡	器台	器台B2類	○	(淡水成)	出現					凝灰岩質	Ec	凝灰岩類〉堆積岩類〉テフラ	+	+		多産	
3	9号住居跡	鉢	鉢B類		その他							Ce	堆積岩類〉凝灰岩類、テフラ	+	+			
4	9号住居跡	甕	甕D類(在地系)	□	水成					出現		Ce	堆積岩類〉凝灰岩類、テフラ	+	+			
5	9号住居跡	甕	甕G1類(北陸系)	□	水成				出現			Ce	堆積岩類〉凝灰岩類〉テフラ	+	+			
6	9号住居跡	甕	甕G2類(北陸系)		その他							Ce	堆積岩類〉凝灰岩類〉テフラ	+	+			
7	9号住居跡	壺	短頸壺(壺D2類)	○	淡水成	沼沢湿地型						Ce	堆積岩類〉凝灰岩類〉テフラ	+	+			
8	9号住居跡	壺	長頸壺(壺C2類)	○	(淡水成)	出現				出現		Ce	堆積岩類〉凝灰岩類〉テフラ	+	+			
9	11号住居跡	壺	広口壺(壺B1類)		その他							Ce	堆積岩類〉凝灰岩類、テフラ	+	+			
10	11号住居跡	器台	器台B類		その他							Ce	堆積岩類〉凝灰岩類、テフラ	+	+			褐色粒子多い
11	16号住居跡	甕	甕D類	○	(淡水成)	出現					凝灰岩質	Ec	凝灰岩類〉堆積岩類〉テフラ	+	+			植物遺体
12	16号住居跡	甕	甕F類(S字甕A類)	◆	海洋成		出現			出現		Bc	深成岩類〉堆積岩類、テフラ	+	+	+		
13	16号住居跡	壺	壺B類(線刻土器)	○	淡水成	湖沼型多産				多産		Fc	テフラ〉堆積岩類	+				黒色・褐色砂岩質
14	16号住居跡	鉢	鉢A類(条痕系)		その他							Ce	堆積岩類〉凝灰岩類、テフラ	+	+			
15	35号住居跡	高坏	高坏C類	○	(淡水成)	出現				出現		Ce	堆積岩類〉凝灰岩類、テフラ	+	+			褐色粒子
16	35号住居跡	器台	器台B2類	○	(淡水成)	出現					凝灰岩質	Ec	凝灰岩類〉堆積岩類〉テフラ		+			
17	35号住居跡	器台	器台B2類		その他							C	堆積岩類〉[深成岩類、凝灰岩類]	+	+			
18	35号住居跡	鉢	鉢C類		その他							C	堆積岩類〉[凝灰岩類]	+	+			
19	35号住居跡	鉢	鉢C類		その他							C	堆積岩類〉[凝灰岩類、テフラ]	+	+			
20	35号住居跡	甕	甕D類(在地系)	□	水成					出現		Ce	堆積岩類〉凝灰岩類、テフラ	+	+			
21	46号住居跡	甕	甕D類(在地系)	□	水成				出現			Ce	堆積岩類〉凝灰岩類	+	+			
22	46号住居跡	甕	甕C類(在地系)	□	水成					出現		Ce	堆積岩類〉凝灰岩類、テフラ	+	+			褐色砂岩質
23	50号住居跡	甕	甕G類(北陸系)	○	(淡水成)	出現				出現		Ce	堆積岩類〉凝灰岩類、火山岩類、[変質火成岩類]	+	+			黒色砂岩質
24	52号住居跡	甕	甕A2類(条痕系)	□	水成				出現		凝灰岩質	Ec	凝灰岩質〉堆積岩類〉テフラ		+			
25	54号住居跡	高坏	高坏C類		その他							Ce	堆積岩類〉テフラ、[凝灰岩類]	+	+			
26	54号住居跡	鉢	鉢D類	○	(淡水成)	出現				出現		C	堆積岩類〉[変質火山岩類、凝灰岩類]		+			黒色・褐色砂岩質多い
27	54号住居跡	甕	甕A2類(条痕系)	□	水成					出現	凝灰岩質	Ec	凝灰岩質〉堆積岩類〉テフラ	+	+			黒色砂岩質
28	54号住居跡	甕	甕F類(S字甕A類)	◆	海洋成		出現			多い		Bc	深成岩類〉堆積岩類〉[凝灰岩類、テフラ]		+	+		
29	54号住居跡	壺	壺A2類(パレス壺)	◆	干潟成	沼沢湿地型		干潟		多産		Fc	テフラ〉堆積岩類				多産	
30	54号住居跡	壺	壺A2類(パレス壺)	○	(淡水成)	出現					凝灰岩質	Ec	凝灰岩質〉堆積岩類〉テフラ	+	+			
31	54号住居跡	壺	壺A類(パレス壺)	○	(淡水成)	出現						Ce	堆積岩類〉凝灰岩類、テフラ	+	+			
32	57号住居跡	甕	甕F類(S字甕A類)	□	水成							Bc	深成岩類〉堆積岩類		+			黒色砂岩質含む
33	58号住居跡	甕	甕F類(S字甕A類)	○	淡水成	沼沢湿地型			出現			Bc	深成岩類〉堆積岩類、[凝灰岩類、テフラ]		+			黒色砂岩質含む
34	63号住居跡	甕	甕B類(近江系)	○	淡水成	湖沼型				多産		Ce	堆積岩類/凝灰岩類、テフラ、[変質火成岩類]	+	+			黒色砂岩質含む
35	73号住居跡	高坏	高坏C類	○	(淡水成)	出現				出現		Ce	堆積岩類〉テフラ、凝灰岩類		+			褐色粒子
36	73号住居跡	壺	壺B1類(条痕系?)	□	水成					出現		Bc	深成岩類〉[堆積岩類、凝灰岩類]		+			褐色粒子
37	81号住居跡	壺	壺B1類(条痕系)	□	水成					出現	凝灰岩質	Ec	凝灰岩類〉堆積岩類、テフラ	+	+			
38	81号住居跡	器台	器台B類	○	(淡水成)	出現						Ce	堆積岩類〉凝灰岩類、テフラ	+	+			
39	SU01(土器集積)	高坏	高坏C類	○	(淡水成)	出現				出現		Ce	堆積岩類〉凝灰岩類、テフラ、[深成岩類]	+	+			褐色粒子多い
40	SU01(土器集積)	高坏	高坏C類	○	(淡水成)	出現				出現		Ce	堆積岩類〉凝灰岩類、テフラ	+	+			褐色粒子
41	SU01(土器集積)	鉢	鉢B類(台付鉢)	□	水成					出現	凝灰岩質	Ec	凝灰岩類〉堆積岩類、テフラ	+	+			
42	SU01(土器集積)	甕	甕C類(在地系)	□	(淡水成)	出現						Ce	堆積岩類/凝灰岩類、テフラ、[変質火成岩類]	+	+			
43	SU02(土器集積)	甕	甕G1類(北陸系・月形式)	○	(淡水成)	出現				出現		Fc	テフラ〉堆積岩類					黒色砂岩質含む
44	V13グリッド	壺	壺A1類(パレス壺)		その他						凝灰岩質	Ec	凝灰岩類〉堆積岩類、テフラ	+	+			
45	V13グリッド	壺	甕D類(在地系)	○	(淡水成)	出現				出現		Ce	堆積岩類〉凝灰岩類、テフラ		+			褐色粒子
46	V12グリッド	壺	甕I類(宇田甕)	□	水成					出現		Ce	堆積岩類〉凝灰岩類、テフラ	+	+			褐色粒子
47	V12グリッド	高坏	高坏G類	□	水成					出現		Ch	堆積岩類〉深成岩類、テフラ、[凝灰岩類]		+	+		
48	2号住居跡	甕	甕D類(在地系)	□	水成					出現	凝灰岩質	Ec	凝灰岩類〉堆積岩類、テフラ	+	+			褐色砂岩質
49	7号住居跡	甕	甕C類(在地系)		その他							Ce	堆積岩類〉凝灰岩類、テフラ	+	+			
50	7号住居跡	壺	壺A類(パレス壺)	□	水成					出現		Ce	堆積岩類〉凝灰岩類、テフラ	+	+			褐色粒子多い

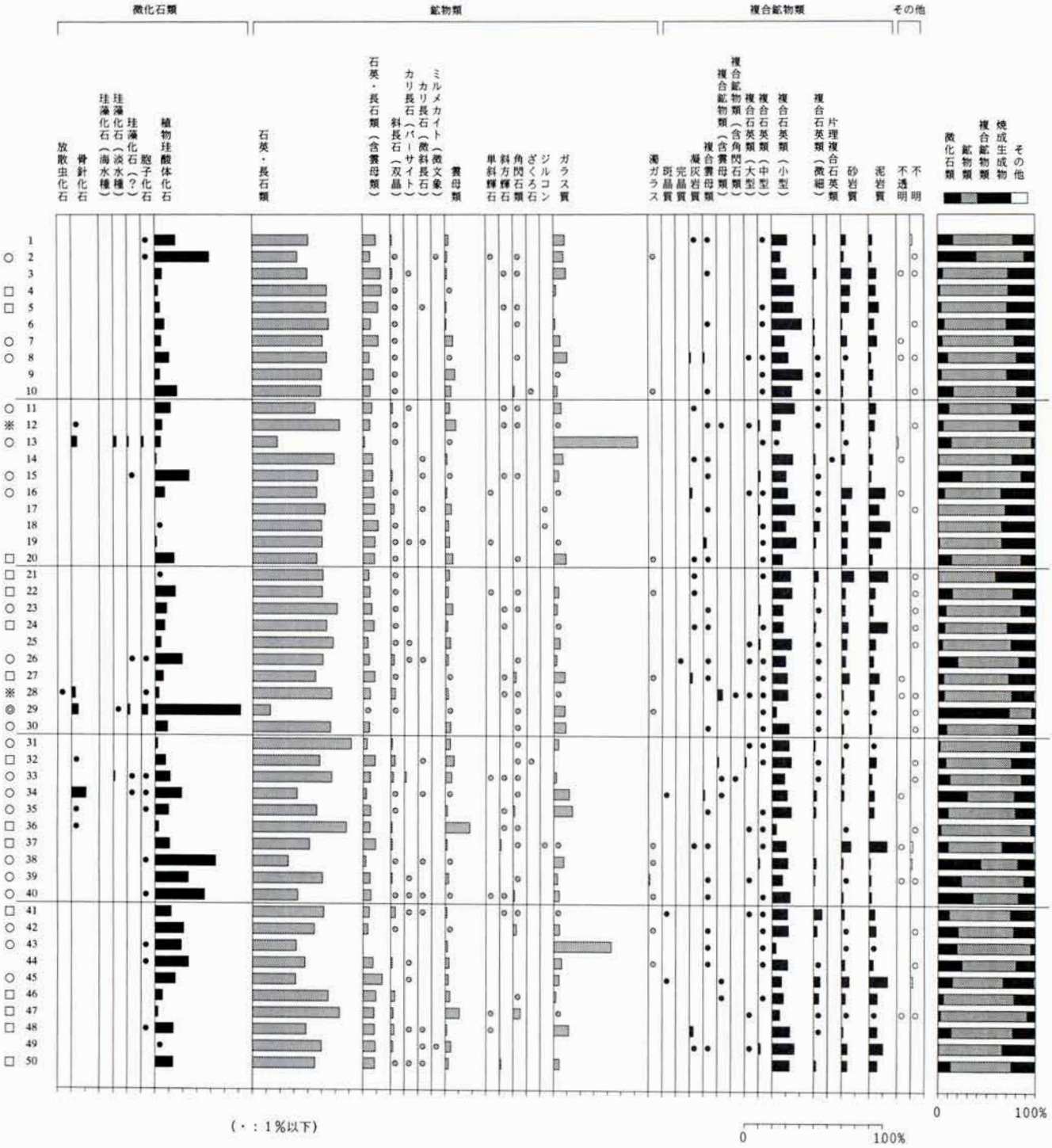


図192　胎土中の粒子組成図（全分類群を基数とした百分率で表示）

［粘土の区分（試料番号左）］

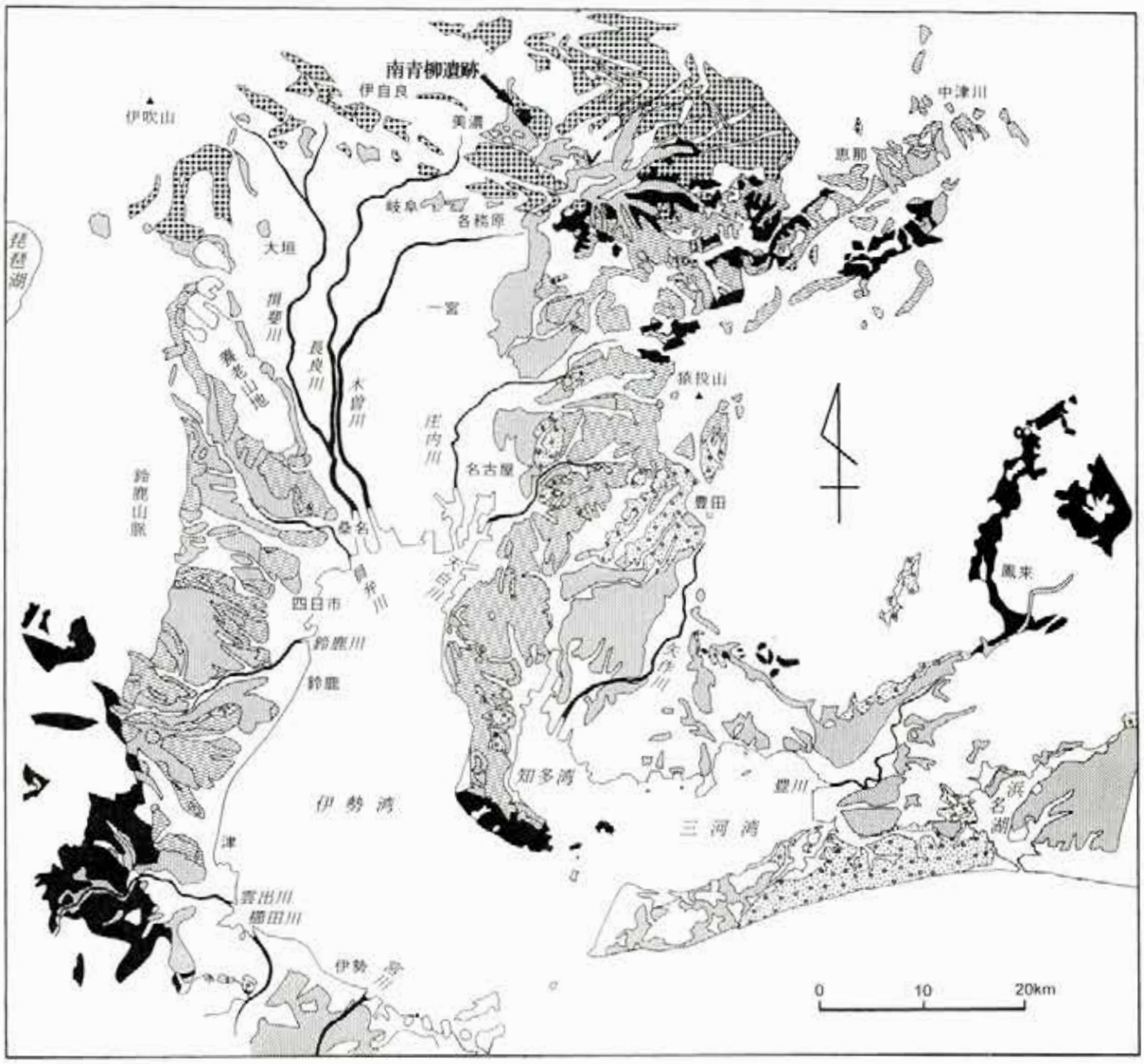
※：外洋成粘土（放散虫化石などの出現）

○：淡水成粘土（淡水成珪藻化石などの出現）

無印：水成堆積を指標とする微化石を含まない

◎：汽水成粘土（海水干潟指標種群珪藻化石などの出現）

□：水成粘土（不明種珪藻化石および骨針化石の出現）



古生代那比ユニット　新第三紀中新統　新第三紀後期中新統～鮮新統（東海層群）

第四紀中部更新統（高位段丘堆積物）　第四紀後期更新統（熱田層および相当層など）

図193　伊勢－三河湾周辺の地層分布図（藤根、1997）

第３項　南青柳遺跡の竪穴住居跡出土炭化材・南青柳古墳出土鉄剣付着木質部の樹種同定

植田弥生（パレオ・ラボ）

１　はじめに

関市下有知に所在する当遺跡の竪穴住居跡ＳＢ01・ＳＢ35・ＳＢ41・ＳＢ46・ＳＢ54・ＳＢ62から出土した炭化材22試料と、古墳から出土した鉄剣付着木質部の樹種同定結果を報告する。竪穴住居跡は弥生時代末から古墳時代初頭（２～３世紀）のものであり、同じ丘陵地の近隣する砂行遺跡や深橋前遺跡からも同時期の竪穴住居跡が検出されており、当地区一帯に一大集落が存在していたことが近年の発掘調査により明らかとなった。これら２遺跡及びやや東方に位置する同時期の遺跡である後平遺跡（加茂郡富加町）の住居跡出土炭化材においても、樹種調査が実施されている（植田、1998、2000ｂ、2000ｃ、報告中）。従って当遺跡においても同様な調査を行うことにより、弥生時代末から古墳時代初頭の当地域一帯における住居建築材の樹種利用を更に詳しく解明する目的で樹種調査が行なわれた。このほかに５世紀後半～末の古墳（南青柳古墳）から出土した鉄剣に付着していた木質部の樹種同定結果を報告する。

２　炭化材樹種同定の方法

先ず炭化材の横断面（木口）を手で割り、実体顕微鏡で横断面の特徴を観察して分類群の目安をつける。アカガシ亜属・コナラ節・クヌギ節・クリは横断面の管孔配列が特徴的であり、実体顕微鏡下の観察で同定可能であるが、それ以外の分類群については３方向の破断面（横断面・接線断面・放射断面）を走査電子顕微鏡で観察し同定を決定した。またコナラ節やクヌギ節などでも、年輪幅の狭いぬか目や逆に年輪幅の広い試料などは実体顕微鏡下では誤同定の恐れがあるので、このような試料については走査電子顕微鏡で確認した。走査電子顕微鏡で同定を決定する各分類群の試料は、３断面を５㎜角以下の大きさに整え、直径１㎝の真鍮製試料台に両面テープで固定した。試料を充分乾燥させた後、金蒸着を施し、走査電子顕微鏡（日本電子㈱製　JSM－T100型）で観察と写真撮影を行った。

３　結果

表12に同定結果の一覧を示し、表13では各遺構ごとの検出分類群とその点数を比較した。

［住居跡出土樹種］

６軒の住居跡を対象に各住居につき３～５点の炭化材の樹種同定を実施した。ＳＢ01の３点は、すべてシイノキ属であった。ＳＢ35の５点は、針葉樹１点とシイノキ属４点であり、針葉樹は保存が悪くこれ以上は分類群をしぼれなかった。ＳＢ41の５点は、クリ３点、シイノキ属２点である。ＳＢ46の３点は、ヒノキ・クリ・シイノキ属であった。ＳＢ54の３点は、クリとクワ属そして試料Ｃ３からはヒノキとシイノキ属が検出された。ＳＢ62の３点はすべてクヌギ節であった。

［古墳出土鉄剣木質部］

鉄剣木質部の試料からは、マツ属複維管束亜属とヒノキの異なる針葉樹材が検出された。いずれの材片も鉄分が染み込んでいて同様な保存状態であった。採取されていた破片数はヒノキの方が多く、マツ属複維管束亜属は１～２破片であった。

以下に樹種同定の根拠となった材組織の観察結果を分類順に記載する。

(1) マツ属複維管束亜属　*Pinus subgen.Diploxylon*　マツ科　図版52　1a - 1c (SZ01 - AY1)

垂直と水平の樹脂道があり、早材から晩材への移行はゆるやかな針葉樹材。分野壁孔は窓状。放射組織の上下端に放射仮道管があり、その内壁や有縁壁孔対の壁に鋸歯状の肥厚が認められた。

マツ属複維管束亜属はアカマツとクロマツを含む分類群で、主に暖帯から温帯下部の低地から山地の陽光地に生育する。材は耐水性に優れている。

(2) ヒノキ　*Chamaecyparis obtusa Endl.*　ヒノキ科　図版52　2a - 2c (SZ01 - AY2)

軸方向の主要素は仮道管で、晩材部の量が極めて少ない針葉樹材。分野壁孔の輪郭は円形、1分野におもに2個が水平に整然と配列している。晩材部の量が極めて少ないこと、分野壁孔の輪郭は円形でヒノキ型の可能性が高い点ことからヒノキと同定した。

ヒノキは本州の福島県以南・四国・九州のやや乾燥した尾根や岩上に生育し、材は耐久性・切削性・割裂性にすぐれている。

(3) コナラ属コナラ亜属クヌギ節　*Q. subgen. Quercus sect. Cerris*　ブナ科　図版52　3a - 3c (SB62 - C1)

年輪の始めに大型の管孔が主に1層配列し孔圏部を形成し、孔圏外は小型で厚壁の管孔が単独で放射方向に配列し、広放射組織があり、接線状・網状の柔組織が顕著な環孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は単一、チロースがある。放射組織はほぼ同性、単列のものと集合状のものがあり、道管との壁孔は柵状になる。

クヌギ節は落葉性のドングリの仲間で、クヌギとアベマキが属し、暖帯の山林や二次林に普通の高木である。材は重厚で割裂性が良い。

(4) クリ　*Castanea crenata Sieb. et Zucc.*　ブナ科 図版53　4a - 4c (SB46 - C1)

年輪の始めに大型の管孔が密に配列し除々に径を減じてゆき、晩材では非常に小型の管孔が火炎状に配列する環孔材。道管の壁孔は小型で交互状、穿孔は単一、内腔にはチロースがある。放射組織は単列同性、道管との壁孔は孔口が大きい。

クリは北海道西南部以南の暖帯から温帯下部の山野に普通の落葉高木である。材は加工はやや困難であるが耐朽性にすぐれている。

(5) シイノキ属　*Castanopsis*　ブナ科 図版53　5a - 5c (SB01 - C1)

年輪の始めに中型の管孔が間隔を開けて配列し除々に径を減じ、晩材では非常に小型の管孔が火炎状に配列する環孔材。接線断面や放射断面の形質は、前述のクリと同様である。輪始めの管孔が間隔を開けて配置していることから、クリとは異なりシイノキ属であることが判る。

シイノキ属は暖帯に生育する常緑高木で、関東以西に分布するツブラジイと福島県と新潟県佐渡以南に分布するスダジイがある。

(6) クワ属　*Morus*　クワ科　図版53　6a - 6c (SB54 - C2)

年輪の始めに中型の管孔が配列し、年輪界では小型と非常に小型の大きさのが揃いの管孔が集合し斜状・波状に配列している環孔材。道管の壁孔はやや大きくて交互状、穿孔は単一、小道管にらせん肥厚があり、内腔にはチロースがある。放射組織は異性、1～5細胞幅の紡錘形で上下端に方形細胞があり、道管との壁孔は大きくその配列は交互状である。年輪界付近まであまり径を減じないで中型

の管孔が分布していて、管孔配列はやや粗雑な印象を受けることから、節部または根張りに近い部位と思われる。

クワ属は落葉高木または低木で、温帯から亜熱帯の山中に広く分布するヤマグワと、和歌山県・中国地方・四国・九州の暖帯の山中にまれにあるケグワがある。材は重硬・強靭で心材は特に保存性が高い。

４．まとめ

弥生時代末から古墳時代初頭の住居跡６軒から出土した22試料からは、針葉樹のヒノキ、常緑広葉樹のシイノキ属、落葉広葉樹のクリ・クヌギ節・クワ属の合計５分類群が検出された。いずれの樹種も建築材として有用材で利用度も高い樹種であった。シイノキ属はほとんどの住居跡から検出され出土数も圧倒的に多いことから、当時の主要な住居建築材であったと思われる。シイノキ属が優占し、複数種類の落葉広葉樹と少数の針葉樹材が検出される当遺跡のこのような樹種構成は、近隣の砂行遺跡や深橋前遺跡そしてやや東方に位置する後平遺跡の同時期の住居跡出土炭化材樹種の調査結果（植田、1998、2000ｂ、2000ｃ、報告中）と、類似性が高いことが明らかになった。全体的には常緑広葉樹のシイノキ属が優占する住居跡が多い中で、シイノキ属は少ないかまたは検出されずに落葉広葉樹のクリあるいはクヌギ節の検出数が目立つ住居跡（ＳＢ41、ＳＢ62）があった。砂行遺跡や深橋前遺跡においても、クリまたはクヌギ節の出土が顕著な住居跡とそうでない住居があり、このような住居跡からは逆にシイノキ属がほとんど検出されていない。このように各住居跡を個別に検討した時の樹種構成の違いは、単に検討試料の偏りなのか、それともシイノキ属よりもクリまたはクヌギ節を多用した住居とシイノキ属を主体使用した住居があったのか、今後も調査の蓄積が必要と思われる。現時点においては、つぎのような解釈も考えられる。弥生時代末から古墳時代初頭の時期では、竪穴住居を建てる際は周辺の森林から適材を伐採して使用したと考えられ、調査結果の樹種は当時の森林を反映していると考えられる。当遺跡の結果からは、シイノキ属が優占する照葉樹林が広く成立しており、クリ・クヌギ節・ヒノキなどは照葉樹林内に混在していたかまたはやや標高の高い地点や谷筋に生育していたと類推される。また落葉広葉樹のクリ・クヌギ節・クワ属は、照葉樹林の林縁部や伐採跡地に成立する二次林要素の強い樹種である。自然植生のシイノキ属が集落の形成・発達に伴い敷地の拡大や建築材として多量に伐採が進行すると、その跡に育つのは陰樹のシイノキ属ではなく陽樹のクリ・クヌギ節・クワ属などである。従って、集落形成当初はシイノキ属を主体に使用していたが、集落の発達に伴い拡大した二次林の構成樹種クリ・クヌギ節などを使い始めたとも考えられる。一方、美濃加茂市の尾崎遺跡では、祭祀的要素の可能性が考えられる弥生時代後期の竪穴住居からはクリ材が多く検出された事が報告されている（藤根、1993ａ）。シイノキ属の果実も食用になるが、クリ・クヌギ節・クワ属の果実は弥生時代に先行する縄文時代には重要な食料源であった。当地域一帯が落葉広葉樹林から照葉樹林に遷移した正確な時期はまだ究明されていないが、美濃加茂市の仲迫間遺跡から出土した自然木の樹種調査によると縄文時代は落葉広葉樹林であった（藤根、1993ｂ）。弥生時代に先行する縄文時代の利用樹種の重要度やその樹種に対する民俗的な価値観などが弥生時代にも一部は引き継がれている可能性はある。今後も木材利用の実態を明らかにしてゆく為には、樹種同定結果の情報を蓄積してゆくと共に、考古遺物や発掘状況などの情報と結合させて集落全体の住居址を考察し

て行く必要があるように思えた。

５世紀後半～末の鉄剣木質部から採取された複数破片からは、マツ属複維管束亜属とヒノキが検出された。どちらの破片も鉄分が浸透して固結した状態であった。破片数はヒノキが多いことから、ヒノキが調査対象の鉄剣木質部本来の材であり、マツ属複維管束亜属はその周囲にあったものの散乱破片かも知れない。岐阜県内では、高山市の５世紀末と推定される冬頭山崎２号墳出土の剣把はカエデ属、その鞘はヒノキの可能性が高い針葉樹であった事が報告されている（植田、2000ａ）。西日本の古墳から出土した鉄剣類の残存木質部の樹種は、ツゲ・ヒノキ・マツ属複維管束亜属（二葉マツ）・シイノキ属（シイ属）が多い（林など、1993）。また柄･把部位にはツゲやカエデ属などの広葉樹材が使用され、鞘には針葉樹が多く特にヒノキが圧倒的に多い（島地・伊東、1988）。そして、藤ノ木古墳からは二葉松が検出された鞘も報告されている（林など、1993）。従って、当遺跡の樹種はいずれも古墳出土の刀剣類の木質部に利用される樹種が選択されていたと考えられた。

引用文献

藤根　久、1993a、「尾崎遺跡住居址出土炭化材の樹種」、135-138、図版 27-29、『尾崎遺跡』、財団法人岐阜県文化財保護センター。

藤根　久、1993b、「仲迫間遺跡出土木材の樹種」、93-104、図版 17-22、『仲迫間遺跡』、財団法人岐阜県文化財保護センター。

林　昭三・島地　謙・福田さよ子、1993、「石棺内出土刀剣類等の木質部の樹種」、3-11、『斑鳩　藤ノ木古墳第２・３次調査報告書』。

島地　謙、1998、『日本の遺跡出土木製品総覧』、1-296、雄山閣。

植田弥生、2000a、「冬頭山崎２号古墳の鉄剣及び鉄鏃付着木質部の樹種同定」、102-107、図版 23-24、『冬頭城跡　冬頭山崎１号墳　冬頭山崎２号墳　冬頭山崎１号横穴』、財団法人岐阜県文化財保護センター。

植田弥生、(1998、報告中)、「砂行遺跡の竪穴住居跡出土炭化材の樹種同定」、財団法人岐阜県文化財保護センター。

植田弥生、(2000c、報告中)、「深橋前遺跡出土炭化材の樹種同定」、財団法人岐阜県文化財保護センター。

表12　南青柳遺跡出土材の樹種同定結果

遺構	試料	分類群	時期	備考
SZ01 南青柳古墳	鉄剣木質部 AY1	マツ属複維管束亜属	5世紀後半～末	
	鉄剣木質部 AY2	ヒノキ	5世紀後半～末	
SB01 住居跡	C1	シイノキ属	弥生時代末～	r:5.5cm、23年輪計測
	C2	シイノキ属	古墳時代初頭	r:3.5cm、24年輪計測
	C3	シイノキ属		r:2.5cm
SB35 住居跡	C3	シイノキ属	弥生時代末～	
	C12	針葉樹	古墳時代初頭	
	C14	シイノキ属		
	C18	シイノキ属		
	C25	シイノキ属		幅5ｃｍ、大径木破片
SB41 住居跡	C1	クリ	弥生時代末～	
	C2	クリ	古墳時代初頭	
	C3	クリ		r:3.5cm、大径木破片
	C4	シイノキ属		
	C5	シイノキ属		
SB46 住居跡	C1	クリ	弥生時代末～	
	C2	シイノキ属	古墳時代初頭	r:4.0cm
	C3	ヒノキ		
SB54 住居跡	C1	クリ	弥生時代末～	
	C2	クワ属	古墳時代初頭	
	C3-1	ヒノキ		
	C3-2	シイノキ属		
SB62 住居跡	C1	クヌギ節	弥生時代末～	φ3.5cm、半割れ状
	C2	クヌギ節	古墳時代初頭	r:2.0cm
	C3	クヌギ節		

r: 放射方向径、φ：直径

表13　南青柳遺跡の各遺構別検出樹種と点数

樹種	古墳	住居跡						合計
	鉄剣木質部	SB01	SB35	SB41	SB46	SB54	SB62	
マツ属複維管束亜属	1							1
ヒノキ	1				1	1		3
針葉樹			1					1
クヌギ節							3	3
クリ				3	1	1		5
シイノキ属		3	4	4	1	1		13
クワ属						1		1
合計	2	3	5	7	3	4	3	27

第４項　南青柳遺跡出土ガラス製品の成分分析

小村美代子（パレオ・ラボ）　藤根　久（同）

１　試料と方法

試料は、南青柳遺跡の包含層から出土した、青色の算盤玉型ガラス玉片１点（３００１）と緑色のガラス玉片（３００２）１点（共に完形品ではなく一部）である（図　、図版４３）。ここでは、これら算盤玉型ガラス玉片、緑色ガラス玉片の化学組成やその特徴を検討するために、蛍光Ｘ線分析を行った。試料は全て超音波洗浄を行った後測定した。

測定は、セイコー電子工業（株）製のエネルギー分散型蛍光Ｘ線分析装置 SEA-2001L を用いた。なお、定量分析は、標準ガラス試料（BR-B2）を用いたファンダメンタルパラメータ法により行い、酸化物の合計が 100% になるように規格化した。

なお、ガラス製品の色調はマンセル色相環を用いて記載し、更に濃いものを＋、薄いものを－として記載した。

２　結果

蛍光Ｘ線分析によるスペクトル図を図 194、図 195 に示す。検出された元素はアルミニウム、ケイ素、カリウム、カルシウム、チタン、マンガン、鉄、銅、コバルト、亜鉛、鉛、ルビジウム、ストロンチウム、ジルコニウム、スズ、アンチモンなどである。

なお、ロジウム（Rh）のピークはＸ線発生部の管球（ロジウムターゲット）に由来するものであり、ガラスに含まれる元素とは関係がない。

また蛍光Ｘ線分析による定量分析結果を表１に示す。分析値は酸化物（%単位）で表した。検出された元素は、主成分元素の酸化ナトリウム（Na_2O）、酸化アルミニウム（Al_2O_3）、酸化ケイ素（SiO_2）、酸化カリウム（K_2O）、酸化カルシウム（CaO）、酸化チタン（TiO_2）、酸化マンガン（MnO）、酸化鉄（Fe_2O_3）、酸化銅（CuO）、酸化亜鉛（ZnO）、酸化スズ（SnO）、酸化鉛（PbO）である。また、アンチモン（Sb）、ルビジウム（Rb）、ジルコニウム（Zr）の＋は、検出されたことを示す。

３　考察

ここでは、肥塚（1995）による古代ガラスの研究について概略を述べ、算盤型ガラス、緑色ガラスの化学組成について考察する。

(1) ガラス研究の現状

日本ではガラスはほぼ紀元前２世紀頃から流通する。それ以降３世紀頃までに出現するガラスは例外的なものを除くと、中国で製造されたと考えられる鉛珪酸塩ガラスの鉛バリウムガラス（PbO - BaO - SiO_2 system）と、アルカリ珪酸塩ガラスのカリガラス（K_2O - (Al_2O_3) - SiO_2 system）である。弥生時代から古墳時代へと移行する３世紀後半から４世紀にかけては、鉛珪酸塩ガラスの流通は途絶えて、代わって２種類のソーダ石灰ガラス（Na_2O - CaO - SiO_2 system と Na_2O - Al_2O_3 - CaO - SiO_2 system）が多量に流通するようになる。一方、弥生時代から流通したカリガラスは出土量そのものが少なくなるが、その後も流通を続ける。しかし、６世紀後半から７世紀初頭にはカリガラスの流通は途絶え、代わって鉛ガラス（PbO - SiO_2 system）が再び流通を始め、次第にソーダ石灰ガラスも衰退していく。

(2) 出土した算盤玉型ガラス玉片、緑色ガラス玉片の化学組成（表14）

算盤玉型ガラス玉片の化学組成は、酸化ケイ素（SiO_2）が79.76%と大部分を占める。それに次いで酸化カルシウム（CaO）が8.08%、酸化アルミニウム（Al_2O_3）が5.88%、酸化カリウム（K_2O）が5.37%となり、これら４種類の酸化物が算盤玉型ガラス玉片を主に構成しているといえる。先に述べた、鉛バリウムガラスや鉛ガラスは鉛が約15%以上は含まれている。算盤玉型ガラス玉片の酸化鉛（PbO）は0.07%であり、鉛バリウムガラスや鉛ガラスではないことが分かる。カリガラスはカリウムが約18%含まれている。算盤玉型ガラス玉片の酸化カリウム（K_2O）が5.37%と少なく、カリガラスとは考えにく

い。ソーダ石灰ガラスは２種類有り、酸化アルミニウム（Al_2O_3）が高く酸化カルシウム（CaO）が低いタイプ（Na_2O-Al_2O_3-CaO-SiO_2 system）と、酸化アルミニウム（Al_2O_3）が低く酸化カルシウム（CaO）が高いタイプ（Na_2O-CaO-SiO_2 system）がある。算盤玉型ガラス玉片の酸化アルミニウム（Al_2O_3）は5.88%、酸化カルシウム（CaO）は8.08%であり、結果、算盤玉型ガラス玉片は酸化アルミニウム（Al_2O_3）が低く酸化カルシウム（CaO）が高いタイプ（Na_2O-CaO-SiO_2 system）であるものと考えられる。このタイプは、西アジアやエジプトなど地中海周辺地域で発達した典型的なガラスであることから、西方系のガラスと呼ばれている。そして、小数の例外を除くとすべての青紺色のソーダ石灰ガラスは化学組成からいうと西方系のガラスに属することが明らかになってきている。ただし、日本で出土したものが西方地域で製造されたものかどうかは明らかではない。中国でソーダ石灰ガラスが製造されだすのは６世紀頃ともいわれているし、文献（南州異物誌など）によると広東省で３世紀頃に西方からの輸入原料により製造されたともいわれている。日本で３世紀後半頃から日本で流通した青紺色ソーダ石灰ガラスは、輸入原料により中国で製造されたガラスであるとも考えられるが、いずれも推定の域をでるものではない。

緑色ガラス玉片は、酸化ケイ素（SiO_2）が63.47%と大部分を占める。それに次いで酸化カリウム（K_2O）が25.65%、酸化アルミニウム（Al_2O_3）が7.62%、酸化銅（CuO）が1.31%となり、これら４種類の酸化物が緑色ガラスを主に構成しているといえる。先ほど述べた算盤玉型ガラス玉片と同様に考察していくと、酸化カリウム（K_2O）が25.65%と多く含まれることから、緑色ガラス玉片はカリガラスと思われる。中国においてカリガラスは漢代の墳墓から多量に出土している。しかし、当時の西アジアやエジプトなどの西方諸国ではカリガラスは製造されておらず、中国製で製造されたガラスであると推定されている。また、日本で出土したカリガラスの化学組成が中国のカリガラスと特徴が極めてよく一致することなどから、中国で製造されたカリガラスが伝えられて、当時の日本で流通していたと考えられている。

③ 算盤玉型ガラス玉片、緑色ガラス玉片の色について

なお、今回分析した算盤型ガラスの青色は酸化コバルト（CoO）0.12%のコバルトイオンや酸化鉄（Fe_2O_3）0.13%の鉄イオンが関与したもの、緑色ガラスの緑色は酸化銅（CuO）1.31%の銅イオンや酸化鉄（Fe_2O_3）0.95%の鉄イオンが関与したものと思われる。

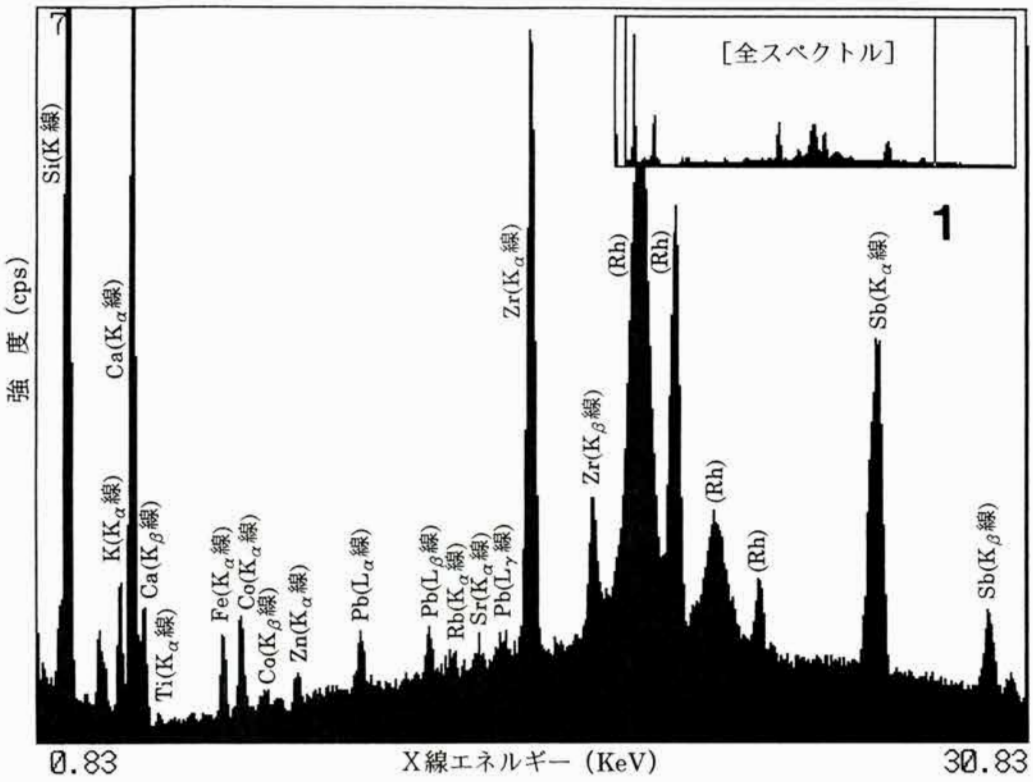
引用文献

肥塚　隆保　「古代ガラスの材質」　古代に挑戦する自然科学、第９回「大学と科学」公開シンポジウム組織委員会編、クバプロ、94 ～ 108p

表 14　ガラス製品の化学組成（%単位）（++：多く検出、+：検出、−：未検出）

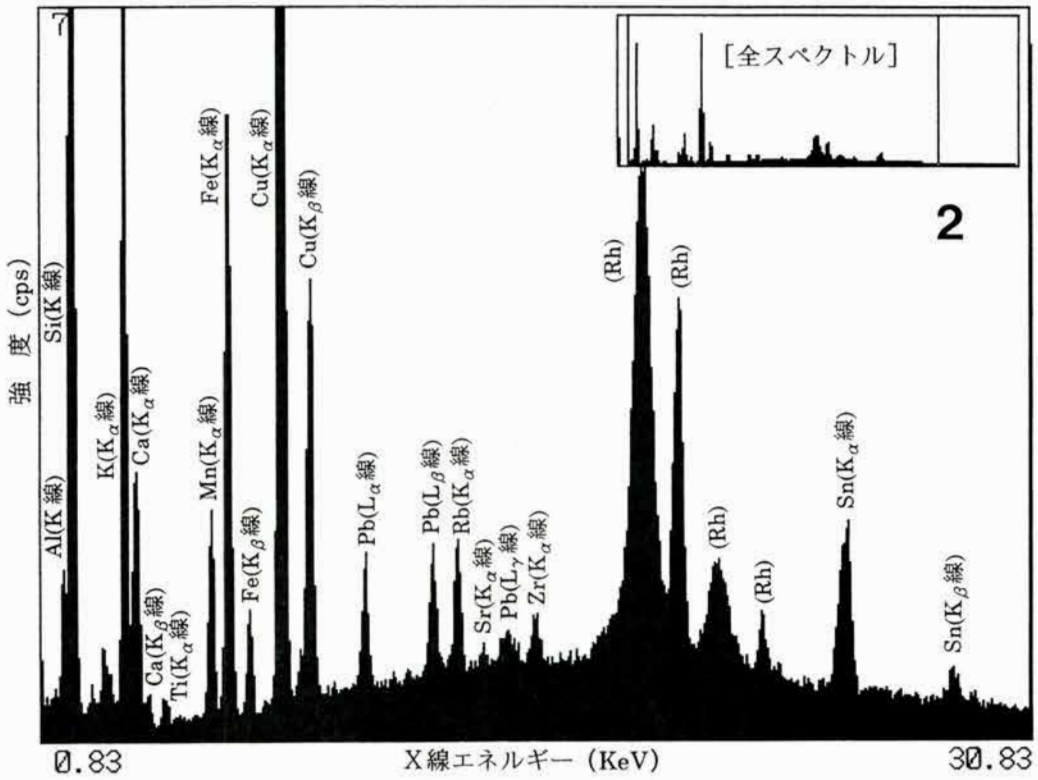
［元素記号］ Na_2O: ナトリウム、Al_2O_3: 酸化アルミニウム、SiO_2: 酸化ケイ素、P_2O_5: 酸化リン、K_2O: 酸化カリウム、CaO: 酸化カルシウム、TiO_2: 酸化チタン、MnO: 酸化マンガン、Fe_2O_3: 酸化鉄、CoO: 酸化コバルト、NiO: 酸化ニッケル、CuO: 酸化銅、ZnO: 酸化亜鉛、SnO: 酸化スズ、PbO: 酸化鉛、Sb: アンチモン、Rb: ルビジウム、Zr: ジルコニウム

試料	遺物	色調	濃淡	Na_2O	Al_2O_3	SiO_2	P_2O_5	K_2O	CaO	TiO_2	MnO	Fe_2O_3	CoO	NiO	CuO	ZnO	SnO	PbO	合計	Sb	Rb	Zr	種類
1	算盤玉型ガラス玉片	10PB	−	0.57	5.88	76.76	0.00	5.37	8.08	0.57	0.57	0.13	0.12	0.00	0.00	0.01	0.00	0.07	99.99	++	+	++	ソーダ石灰ガラス
2	緑色ガラス玉片			0.00	7.62	63.47	0.06	25.65	0.00	0.57	0.57	0.95	0.00	0.00	1.31	0.03	0.25	0.15	100.01	−	+	+	カリガラス



［元素記号］Si：ケイ素、K：カリウム、Ca：カルシウム、Ti：チタン、Fe：鉄、Co：コバルト、Zn：亜鉛、Rb：ルビジウム、Sr：ストロンチウム、Zr：ジルコニウム、Sb：アンチモン、Rh：ロジウム（X線管球ターゲットから）

図194　算盤玉型ガラス玉片の蛍光X線スペクトル図



［元素記号］Al：アルミニウム、Si：ケイ素、K：カリウム、Ca：カルシウム、Ti：チタン、Mn：マンガン、Fe：鉄、Cu：銅、Pb：鉛、Rb：ルビジウム、Sr：ストロンチウム、Zr：ジルコニウム、Sn：スズ、Rh：ロジウム（X線管球ターゲットから）

図195　緑色ガラス玉片の蛍光X線スペクトル図

第５項　南青柳遺跡出土のウマ、ウシ遺体

鹿児島大学教授　西中川　駿馬

南青柳遺跡の南谷ｖ13グリッドの第Ⅲ層（古墳時代中期から中世にかけての堆積層）から以下の獣骨が出土した。縦横80cm 四方の範囲から集中的に出土したが、これに伴う遺構は検出されなかった。包含層からの出土であるため、時期の特定はできず、いかなる性格のものかについても不明である。

これらの獣骨について、幸いにも鹿児島大学西中川駿馬教授に観察、分析をお願いできる機会を得た。以下にその結果を掲載する。

南青柳１：

ウシ、右下顎骨片（77.6ｇ）で、第二、第三後臼歯を保有している。第三後臼歯の歯冠幅×長は、38.9×14.5mm で、中心高は19.0mm ある。これらの計測値から下顎長を推測し、さらに筆者らの方法で体高を推定すると、124.3cm となり、中心高より17才と推定される。体高からみて雄と思われる。

南青柳２：

ウシ、右肩甲骨（17.29ｇ）で、関節部の一部の骨片であり、計測不可能である。

南青柳３：

ウマ、右下顎第三前臼歯（25.0ｇ）で、歯冠長×幅は、26.4×14.3mm で、中心高は41.5mm であり、これらの計測値から下顎長を推測し、林田らの方法で体高を推定すると、119.1cm となり、年齢は９才と推定される。

南青柳４：

ウマ、右下顎第二前臼歯（16.8ｇ）で、歯冠長×幅は、28. 8×11. 9mm で、中心高は20.1mm であり、これらから体高を求めると、117. 1cm となる。

南青柳５：

ウマ、右上顎第二前臼歯（25.6ｇ）で、歯冠長×幅は、32.6×20.4mm で、中心高は38.7mm であり、これらから体高を求めると、119.9cm となり、年齢は７才と推定される。

南青柳６：

ウマ、右上顎第三前臼歯（34.1ｇ）で、歯冠長×幅は、26.2×23.0mm で、中心高は50.2mm であり、推定体高118.4cm となり、年齢は７才と推定される。

南青柳７：

ウマ、右下顎第一切歯（3.5ｇ）で、歯冠長×幅は、13.5×7.5mm で、推定体高124.4cm となり、年齢は９才と推定される。

南青柳８：

ウマ、右下顎第三切歯（3.5ｇ）で、歯冠長×幅は、14.2×8.1mm で、推定体高128cm となり、年齢は12才と推定される。

南青柳９：

ウマ、右肋骨片２点（1.9ｇ）。

南青柳10:

ウマ、下顎骨片（10.2ｇ）、左下顎第一切歯片（1.0ｇ）、右　脛骨片（7.6ｇ）。

※３～６の個体は117～119の小型馬で、出土地点が同じであるので、同一個体と考えられる。
７・８は別個体のもので、３～６より少し大きい中型馬であると思われる。

第8節　まとめ

1　南青柳遺跡の竪穴住居跡と集落形態の特徴

(1)「急斜面集落」

平成9年度に隣接する砂行遺跡の調査が行われたことにより、この地域の弥生時代末から古墳時代初頭の集落（53軒）が、丘陵の尾根や中腹に群をなして展開することが明らかになった。砂行遺跡の報告書では、そうした特異な立地条件ゆえの特殊な住居形態・集落形態の特徴の抽出を試み、こうした特徴を持つこの時期の集落を「急斜面集落」と呼ぶことを提唱した。当遺跡の発掘調査にもその経験が生かされ、竪穴住居跡82軒を検出することになった。同様の集落遺跡は、当遺跡と並行して発掘調査を実施した深橋前遺跡（同一丘陵上の東方500ｍに存在）でも発見され、関市北西部の丘陵にこの時期の一大集落が存在していたことが明らかになった。

以下、砂行遺跡の報告書で抽出された急斜面集落の住居形態の特徴に準拠しつつ、当遺跡の様相をまとめてみたい。

(2) 傾斜度

砂行遺跡の竪穴住居跡が立地する斜面の平均傾斜度は、25%である。南青柳遺跡82軒の平均は27%であり、ほぼ同様の立地状況だと言える。最も傾斜度が高い住居は当遺跡では、ＳＢ25・27の43.9%であるが、砂行遺跡ではＳＢＡ38の44%であり、この点でも変わらない。40%前後の傾斜は立っているのもつらいほどの、極めて急な斜面と言えるが、35%を越える住居は当遺跡では18軒（40%を越えるのは5軒）に及び、40%前後が一つの目安として存在し、この傾斜度以下であれば、住居を築く際にほとんど躊躇しなかったことを物語っている。

(3) 住居の方位、選地

いずれの竪穴住居もその方位は、山側の壁面を等高線に対して平行になるように設定する原則が、ほぼ守られていると言ってよい。二つの尾根（北尾根・南尾根）とそこから下る3つの谷（北谷・南谷・東谷）からなる当遺跡では、それぞれの谷の斜面に谷を取り囲むように、住居が展開することになる。したがって、住居は様々な方向を向くことになる。選地については、砂行遺跡では尾根の東向き斜面を好み西向き斜面を避ける傾向が見られるというが、当遺跡では北に向かって開放する北谷、東谷にも、多くの住居が谷の奥を中心に扇形に取り囲むように密集しており、必ずしも南に向かって開放する立地にこだわることもなく、斜面を選ぶ傾向も顕著ではない。強いて言えば、谷の入り口に近い斜面には、いずれの谷においても住居は見られず、谷の奥ほど密集するという傾向が見られる。これは、谷の入り口ほど斜面の傾斜がきついためであろうが、こうした地形が選ばれているという見方もできる。

(4) 住居の平面形

「等高線に沿って方形の住居掘り方を掘削するため、住居の幅（等高線に平行する住居の長さ）を比

較的広く取ることができるが、住居の奥行き（等高線に直行する住居の長さ）には限界が生じる。」という砂行遺跡の報告書の指摘どおりで、当遺跡の竪穴住居のうち平面形が正方形と考えられるものは12軒にとどまる。これらの住居の傾斜度は平均16%で、全体の平均値をかなり下回る。南谷の東側斜面や北谷の西側斜面といった40%前後の急斜面では、後世の改変（土砂の流出等）によって傾斜度が変化している可能性を考慮したとしても、ここに正方形の平面を確保することは困難と言わざるをえない。こうした場所では、住居の床面の奥行きは、幅の三分の一前後である場合が多い（ＳＢ12、21、24、25、27、52、56など）。谷側の掘り方が残存し、平面形を確定できる事例が当遺跡では皆無であるため、正方形、長方形のいずれを志向したかを考える材料に欠くが、比較的緩やかな斜面に立地する住居には正方形の住居が見られることから、立地による制約がなければ、より広い床面積を確保できる正方形をやはり志向したのであろう。ただ、傾斜度14. 5%に立地するＳＢ16や17.3%に立地するＳＢ54は、いずれも主柱穴の位置から長方形であったと考えられ、必ずしも正方形ばかりを志向したとは言えないが、立地上の制約が平面形を決定する際、無視できない条件であったことは確かであろう。

⑤ 山側周溝

急斜面に立地する住居の場合、山側からの浸水や流土による埋没を防ぐ目的で山側周溝を設けるものが存在する。砂行遺跡では９軒の住居で確認されているが、当遺跡では３軒にとどまっている。砂行遺跡の報告書では、本来はより多くの住居に設けられていた可能性を指摘する。また、幅３ｍほどの住居には、確実に山側周溝が伴わないと断定できる例が多いことから、「住居の規模に関係する可能性もある」と述べる。当遺跡の場合、3/82というごく少数派である（砂行遺跡も9/53にすぎないが）。また、山側周溝が明瞭に確認できるＳＢ41は、住居の幅の比較では、当遺跡中ＳＢ38に次いで第２位の狭さであり、一方、ＳＢ47は最大幅の住居である。当遺跡においては、むしろ「特殊な住居」という色彩の方がより優位であり、その観点からの検討の必要も感ずる。

⑥ 住居掘り方掘削方法

竪穴住居の掘り方は、急斜面において水平な床面を形成するために山側を深く掘削する。砂行遺跡では90㎝に及ぶ深さを持つ住居も存在し、Ⅵ層（地山）の粘質土を掘り抜いて砂岩の岩盤に達する場合もある。しかし、当遺跡の住居では、ＳＢ35の68㎝が最も深く、60㎝を越えるのは３軒のみにとどまる。したがって、岩盤に到達するまで地山を掘り抜くことはなく、斜面中位以下では、地山を掘り込んで床面を形成する。岩盤を掘り抜くのは地山の堆積が薄く、岩盤がすぐ現れる斜面上部においてのみである。

砂行遺跡の報告書は、山側床面が岩盤を掘り抜くため、山からくだる地下水が山側壁面の岩盤と粘質土の境から住居内に浸入することになり、それを防ぐ手だての一つとして山側周溝が掘られ、住居内では、さらに壁溝が掘られたと言う見解を示している。この理解を当てはめると当遺跡の住居に山側周溝が少なく、壁溝を掘った住居が少ない（砂行遺跡37軒、南青柳遺跡18軒）のも説明がつく。また、地山を床面とする住居には壁溝が掘られることが稀であることもうなづける。

2　南青柳古墳の年代及び位置づけについて

(1) 南青柳古墳の築造年代

調査の結果、当古墳の墳形は造り出し付き円墳で、墳丘は二段築成であることが判明した。主体部は割竹形ないしは舟形の木棺直葬で、主体部からは鉄剣・鉄刀が完形で出土した。残念ながら被葬者の足位に当たる西側が盗掘を受けていたが、盗掘坑の埋め戻し土には多くの鉄製品の破片が残され、それにより横矧板鋲留短甲や馬具が副葬されていたことが判明した。また、墳丘上面や裾部周辺からは、小片ながら須恵器の坏蓋・無蓋高坏・甕・壺が出土し、古墳の祭祀儀礼に須恵器が供献されていたことも明らかになった。出土点数は必ずしも多くはなく、残存状況も一部を除いて良好とは言い難いが、古墳の築造年代や被葬者像、また祭祀のあり方等について多くの情報を提供していると思われる。

古墳の築造年代を考えるうえで、指標となり得るのはまずは須恵器の年代であろう。当古墳出土の須恵器は墳丘上面や裾部周辺からの出土であり、埋葬時のものであるとは断定できない。しかし、いずれもほぼ同一時期のものであり、小片に破砕され投棄・散布されたことを示すような出土状況から考えても、埋葬後長い時間を経て供献されたものとは考えにくく、埋葬儀礼に伴うものであったと考えられる。出土した須恵器は、いずれも猿投編年の城山2号窯期から東山11号窯期のものと考えらる。実年代では、5世紀の後半から末に相当する。

次に主体部及び盗掘坑から出土した鉄製品であるが、鉄刀はその大きさや関・茎の形態から5世紀代の特徴を有する。鉄剣はその形態からは年代を決定づけるものを見いだしにくいが、大きさは5世紀代によく見られるものであり、鉄刀の年代と矛盾しない。横矧板鋲留短甲はこの形式が出現するのは5世紀後半代とされる。心葉形杏葉が出現するのは、これまでの出土例からは6世紀に入ってからのものが多いが、5世紀後半代とされる中八幡古墳（岐阜県揖斐郡池田町）の出土例もあり、5世紀までさかのぼる事例が今後増える可能性は十分に考えられる。

造り出し付き円墳は、5世紀代の中期古墳を中心に採用される墳形である。美濃地域の事例としては数例が近年の調査によって知られるようになった（注18）。このうち隣接する砂行1号古墳は鉄刀・短甲といった鉄製武器・武具は出土するが、須恵器の副葬又は供献が全く認められないことから5世紀前半の築造と推定されているが、その他はいずれも須恵器を伴い、築造年代は5世紀後半代と推定されている。南青柳古墳の築造年代は、上述の出土遺物の年代観や墳形から、美濃のこれらの事例と同じく5世紀後半から末に築造された中期古墳と考えられる。

(2) 南青柳古墳の位置付け

従来、長良川中流域の首長墓の系譜の中で、5世紀代のものは知られていなかった。隣接する砂行1号古墳がその空白を埋める最初の発見であったが、当古墳は2例目の発見となった。互いに合い望める位置に隣接し、また、ともに下有知の平野部から長良川畔を見渡せる尾根頂部に築かれ、いずれも造り出し付きの円墳で、武器・武具を副葬することは、この二つの古墳の被葬者の系譜が同一のものであることをに如実に物語っているといえよう。砂行1号古墳が5世紀の前半の築造であるとすれば、5世紀後半代の南青柳古墳はその孫ないしは曾孫の世代の古墳ということになろう。砂行1号古墳が存在する尾根の直下には砂行大溝の湧水点が存在し、大溝はそこから南西方向に流路をとり、南青柳古墳の尾根から北にむけて開ける谷の入り口付近で流路を西に転じ、西方に広がる水田域に流れ

出ていたものと考えられる。この砂行大溝の湧水点や上流部では5世紀代に初期須恵器、木製祭祀具、石製模造品（有孔円盤）などを用いた水辺の祭祀が行われたことが確認されている。初期須恵器を惜し気もなく破砕し投棄していることと、祭祀の場の規模の大きさから祭祀の実修者は当地域の首長であると推定されている。古墳の直下から流れ出る湧水に対する祭祀は、旧首長の恵みに対する祭祀といった舞台設定になり、古墳祭祀と水辺の祭祀は連動していたと推測される。砂行大溝でのこうした水辺の祭祀は5世紀の前半から開始され、5世紀の末には終焉したと推定されている（注19）。南青柳古墳の被葬者は、おそらくはその最終段階の水辺の祭祀の実修者であったと考えられる。古墳の造営場所にこの地が選定されたのは、前述のような眺望や系譜上の理由に加えて、この点も十分に考慮されていると考えるべきであろう。砂行遺跡から南青柳遺跡にかけての一帯は、水源祭祀場が存在し、地域の水を管掌した首長が眠る聖なる空間であった。南青柳古墳の被葬者が、砂行1号古墳やその直下から流れ出る砂行大溝と向き合う位置に葬られたのも、この地域を潤す水をつかさどる地域王権の権威を、いっそう強く印象づける意図がそこには存在したものと思われる。

当古墳は、主体部が盗掘を受けていたとはいえ、副葬品の内容や副葬状況について多くの情報を得ることができた。また、墳丘や墳丘裾部から出土した須恵器も小片ばかりではあったが、この古墳の年代を考えるうえで、大きな指標となった。また、その出土状況は、造り出し部両脇に検出された2基の小穴とともに、古墳の祭祀のあり方を考えるうえで、貴重な資料を提供したといえる。

関市内では隣接する砂行1号古墳に次いで、2例目の中期古墳の発見・調査となった。両古墳はともに造り出し付き円墳で、副葬品にも共通点が認められることから、被葬者は同一の系譜に属する可能性が高く、砂行大溝における水辺の祭祀にも深くかかわったと考えられる。長良川中流域における首長墓の変遷を考えるうえで、貴重な資料となったことは言うまでもないが、それにとどまらず、この地域における5世紀代の首長層のあり方や畿内政権とのかかわりについても、示唆に富む豊かな情報を提供したものと思われる。

注（第2章第8節のみ）

18　大野町所在の野古墳群7号古墳（八賀他1984）・同9号古墳、関市所在の砂行1号古墳、可児市所在の宮之脇10号・11号古墳（吉田他1994）、富加町所在の後平茶臼古墳などが造り出し付き円墳として挙げられるが、いずれも5世紀後半代の築造である。

19　成瀬2000による。

参考文献（第2章8節のみ）

・成瀬正勝編　2000『砂行遺跡』 岐阜県文化財保護センター調査報告書第65集
・池田町教育委員会　1985 『中八幡古墳発掘調査報告書』
・楢崎彰一　1962『岐阜市長良龍門寺古墳』（岐阜市文化財調査報告書1、岐阜市教育委員会）
・八賀晋他　1984『史跡野古墳群調査概報（Ⅱ）』（大野町教育委員会）
・吉田英敏他　1994『川合遺跡群』（可児市教育委員会）
・吉田英敏他　2000『船来山古墳群』（糸貫町教育委員会・本巣町教育委員会）
・藤田英博　1999「後平茶臼古墳・後平遺跡現地説明会資料」［財］岐阜県文化財保護センター
・関市教育委員会　1994 『新修　関市史　考古・文化財編』関市
・関市教育委員会　1996 『新修　関市史　通史編　自然・原始・古代・中世』関市

第３章　大平前遺跡の調査

第１節　遺跡の立地と歴史的環境

１　遺跡の立地（図４、図版20・21）

大平前遺跡は関市市街地が広がる盆地の北縁を形成する丘陵上の、東に向かって突き出た尾根頂上部（標高 127m）に立地する（図４）。頂上近くにチャートの巨岩が存在し、この巨岩の周辺が遺跡の範囲である。北には、松鞍山（316.3m）から東南方向に走る200数十m級の山塊が屏風のように屹立し、その麓には「大平」と地元の人々が呼ぶ広々とした谷と高原状の低丘陵が広がっている。この遺跡は、この「大平」一帯を眼下に一望できる大変眺望に恵まれた場所に存在する。

調査前の状況は松を主体とする雑木林で、岩場を中心にコシダが繁茂し、岩場の隙間を覆っていた。巨岩も立ち木に囲まれてはいたが、斜面を尾根の稜線に沿って登ってくると、平らな巨岩の正面が眼前に印象深く姿を現すといった状況であった。また急斜面に立地し、巨岩の東は急傾斜で下る岩場であるため、巨岩前の平坦部からの眺望は立ち木の伐採前でも、非常によい状態であった。

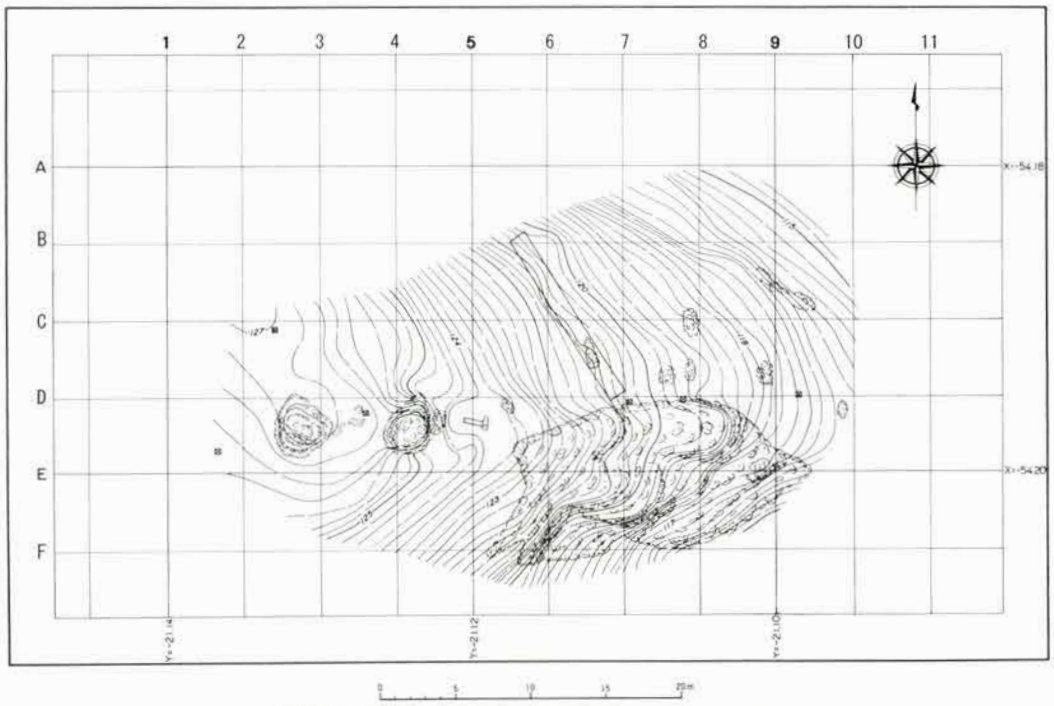


図196　大平前遺跡調査前地形測量図（1/500）

２　周辺の遺跡（図４）

南約300mには、古墳時代から平安時代に至る集落遺跡である榿ノ木洞遺跡が存在し、当遺跡とは相互に望める位置関係にある。同遺跡のすぐ近くには、榿ノ木洞１号古窯跡（灰釉陶器）、同２号古窯跡（須恵器）、さらに南に続く丘陵には末洞古窯、田之洞古窯、池之洞古窯（いずれも灰釉陶器）等の古窯跡群が点在します。また、榿ノ木洞遺跡の西80mの丘陵には、深橋前遺跡（弥生末～古墳初頭の集落跡、後期古墳、奈良～平安時代の火葬墓、灰釉陶器窯跡等）、さらに西方約500mの同一丘陵上に、南青柳遺跡（弥生末～古墳初頭の集落跡、中期古墳）、砂行遺跡（弥生末～古墳初頭の集落跡、中期古墳・古墳時代の大溝、後期古墳、奈良時代の火葬墓等）、砂行古窯跡（灰釉陶器）が存在する。

第２節　基本層序

大平前遺跡は、標高127ｍの尾根頂上部から傾斜度33%で東に向かって下る急斜面に立地する。尾根頂上部に露出したチャートの岩盤は、そのまま５ｍ下った位置に突出する巨岩まで続き、さらに巨岩前平坦部を経て巨大な岩塊を展開し、尾根中腹で地山の下へと潜り込む。巨岩の南側は突出した岩は見られないが、調査区内は全てチャートの岩盤であり、調査区の南側半分近くをチャートの岩盤が覆っていることになる。調査区の北側半分は、砂岩の岩盤が一部に露出し、それを覆うように強粘質土の地山が存在する。急斜面であるため、尾根頂上部から巨岩前平坦部あたり（標高124m付近）まで、はⅠ層（表土）直下にチャートあるいは砂岩の岩盤、または地山が広がっている。それ以下はⅡ層・Ⅲ層の堆積が見られるが、Ⅲ層はごく薄い堆積に過ぎない。

Ⅰ層：調査前の地表を覆う表土で、腐葉質である。

Ⅱ層：尾根上部のチャートあるいは砂岩の岩盤、または地山が風化や侵食によって斜面下位に流れ堆積したもので、黄褐色～明褐色の砂質土である。上述のとおり標高124m付近から下の斜面に堆積を確認できる。調査区の中央部の堆積は薄いが北へいくほど厚く堆積し、Ｃ列より北、５列より東は急に堆積を増し、そのまま調査区外へと続いている。Ｃ５グリッドに入れられた試掘確認調査時のトレンチ北端部分のⅡ層の厚さは80cm を測る。

Ⅲ層：やはり標高124m付近から下の斜面に堆積を確認できる。ごく薄い層である。褐色から暗褐色のやや粘性のある土質で、北側へ行くにつれて、やや厚みを増すが、比較的均一に堆積している。以上の各層の特徴、また堆積状況は、南青柳遺跡と基本的に同じである。当遺跡は遺物の出土点数が少なく時代幅がないため、それぞれの層の形成時期を遺物から推測することは難しいが、おおむね南青柳遺跡の例にしたがって、Ⅲ層が中世段階、Ⅱ層が近世以降と考えてよいかと思われる。南青柳遺跡では、斜面裾部から谷部にかけてⅣ層・Ⅴ層の堆積が見られるが、尾根頂上に近い斜面に位置する当遺跡ではこれに該当する土層は認められず、Ⅲ層の下はチャートあるいは砂岩の岩盤、または地山である。この層を本遺跡ではⅣ層とする（南青柳遺跡では、Ⅵ層）。

第３節　遺構と遺物

(1)　巨岩を中心にした祭祀遺構（図197・198、図版19～21）

①巨岩

標高 127ｍの尾根頂上部から東に向かって、チャートの岩盤が露出しているが、約５ｍ下った地点に、幅4.5m、長さ３ｍ、高さ2.7ｍの巨岩が突出している。巨岩は正面（東に面した部分）がややオーバーハングしながらもほぼ垂直に切り立っており、平らな面が形成されている。正面から見た形状は、将棋の駒の上下を圧縮したような形状である。正面は真東を向いている。

②巨岩前

巨岩前の約５ｍ四方は、東に向かってゆるやかに傾斜するものの、他と比べて著しく平坦である。巨岩のすぐ前には、上面が比較的平らな２つの大きな石が存在し、「祭壇」のような雰囲気をかもしだしている。この岩の東には、礫群が検出された。当初は、露出した岩盤の表面部分が風化により剥離

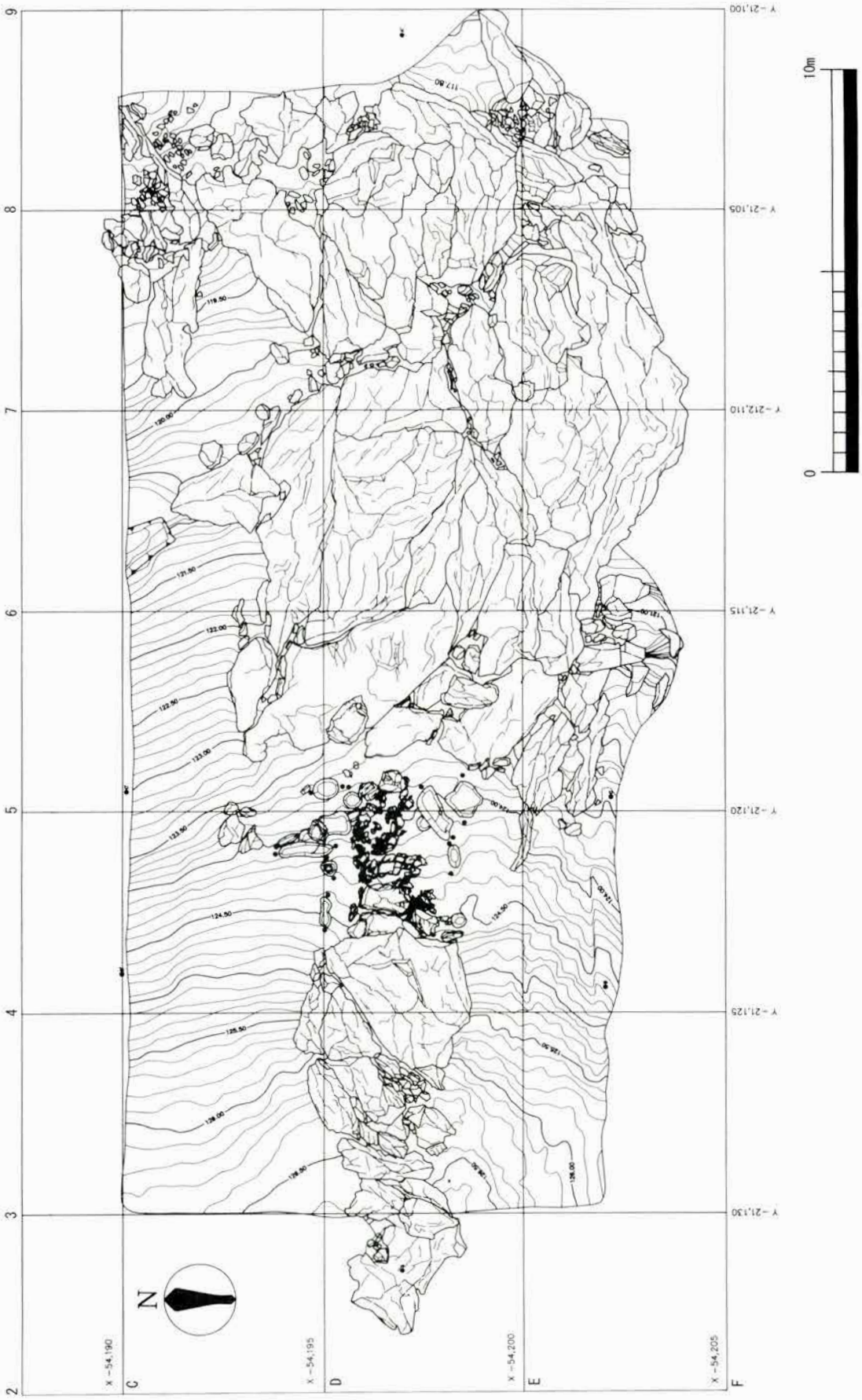


図197　大平前遺跡測量図（1/150）

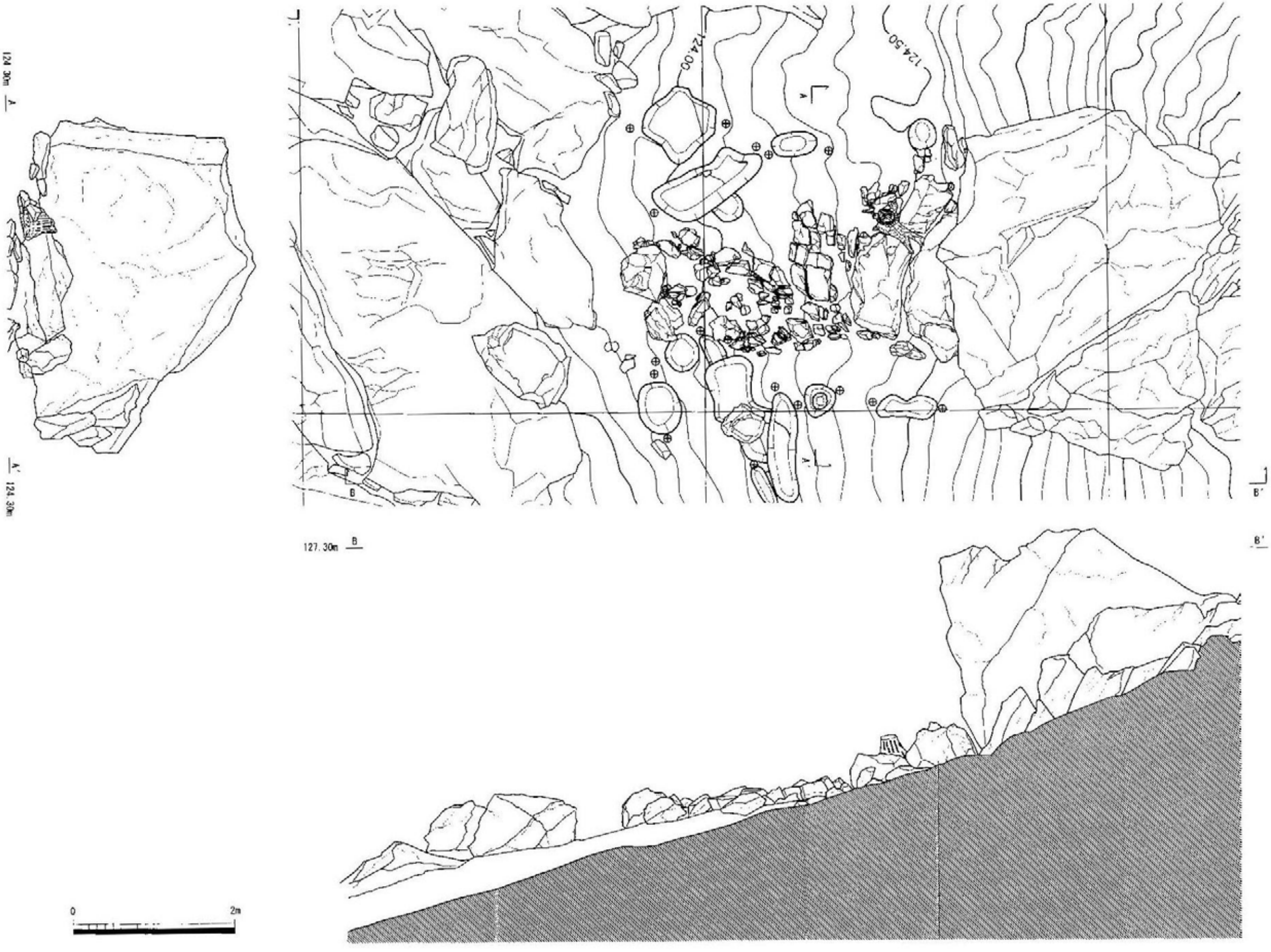


図198　大平前遺跡祭祀遺構実測図（1／50）

し、小さく割れたものとの印象を受けた。しかし、礫群の下には明褐色の強粘質土が約10cm程の厚さで存在し、その下に平らな安定したチャート岩盤が広がることが確認された。礫群は巨岩のすぐ前の平坦面に敷き詰められたように集中しており、礫の上面の高さも比較的揃っていることから、人為的に敷かれたものが風化により割れたいう判断が妥当だと思われる。

巨岩前平坦部の東端には、2つの大きさ、形状のよく似た大きな石（北側－長さ1.35m、幅0.8m、南側－長さ1.5m、幅0.8m）が存在する。これより東は急傾斜の自然の岩盤に変換しており、この2つの石は平坦部とそれより東の急傾斜の自然岩盤を区画する箇所に位置していることになる。南側の石については、この付近の岩盤の様子を観察すると当初の位置から1mほど東へ動いているという見方も可能だと思われる。とすれば、この2つの石は巨岩の主軸に対してほぼ対称の位置に意図的に置かれたものということになる。また、この2つの石は、その形状、大きさから考えると、本来は立てて置かれていたとも考えられる。

③ピット、土坑（図199・200）

巨岩前平坦部では、ピット9基、ＳＫ5基を検出した。いずれも比較的浅く柱痕跡も確認できなかったが、その配列（Ｐ01・Ｐ02・Ｐ07・Ｐ08・Ｐ05・ＳＫ05）からは、覆い屋的な施設が存在した可能性も考えられるかもしれない。これを柱列と考えた場合、桁行は2間（東西）で、北側で3.35mを測る。梁行は1間（南北）で、西側では3.25mを測る。平面形はほぼ正方形に近いが、東南隅のＳＫ05が不明瞭であり、そのため東南側がいびつになっている。ピット・土坑の埋土は、上記以外のピット・土坑も含めて、いずれも褐色土・明褐色土を基本とし大差がない。Ｐ02・Ｐ03・Ｐ04・Ｐ07・ＳＫ01・ＳＫ02・ＳＫ04はいずれも炭小片を含んでいる。

②　出土遺物

①遺物出土状況（図201）

巨岩背後の岩直上、北側裾部の岩の隙間、礫群の隙間、地山直上、Ⅰ・Ⅱ層中から、須恵器の破片50点が出土した。そのほとんどは小破片で、意図的に破砕され、投棄されたことをうかがわせる。大半は、巨岩前の礫群内、巨岩の背後および北側裾部に集中しており、地形を考慮すると、巨岩の背後から北側裾部へ流れ落ちたものとみられる。須恵器片は坏身、坏蓋ばかりで、接合状況は比較的よく形状および胎土の肉眼観察からは、10数個体程度に相当するものと推定される。

②出土遺物（図202、図版50）

須恵器坏身、蓋杯は、いずれも8世紀代の特徴を有している。

その他石鏃1点（図版50）がＣ4グリッドから出土している。

第4節　まとめ

①　遺跡の性格

この遺跡は巨岩を対象にした祭祀遺跡で、巨岩および巨岩前平坦部の「祭壇」風の石、礫群、平坦部東端の2つの石によって祭祀空間が形成されていたものと考えられる。すなわち巨岩が神が宿る磐座（いわくら）、「祭壇」風の石や礫群は祭祀を実修する祭りの場、平坦部東端の2つの石は聖なる祭りの場を区画する結界の石ということになるだろう。そして、この場所で須恵器を用いた祭祀が行わ

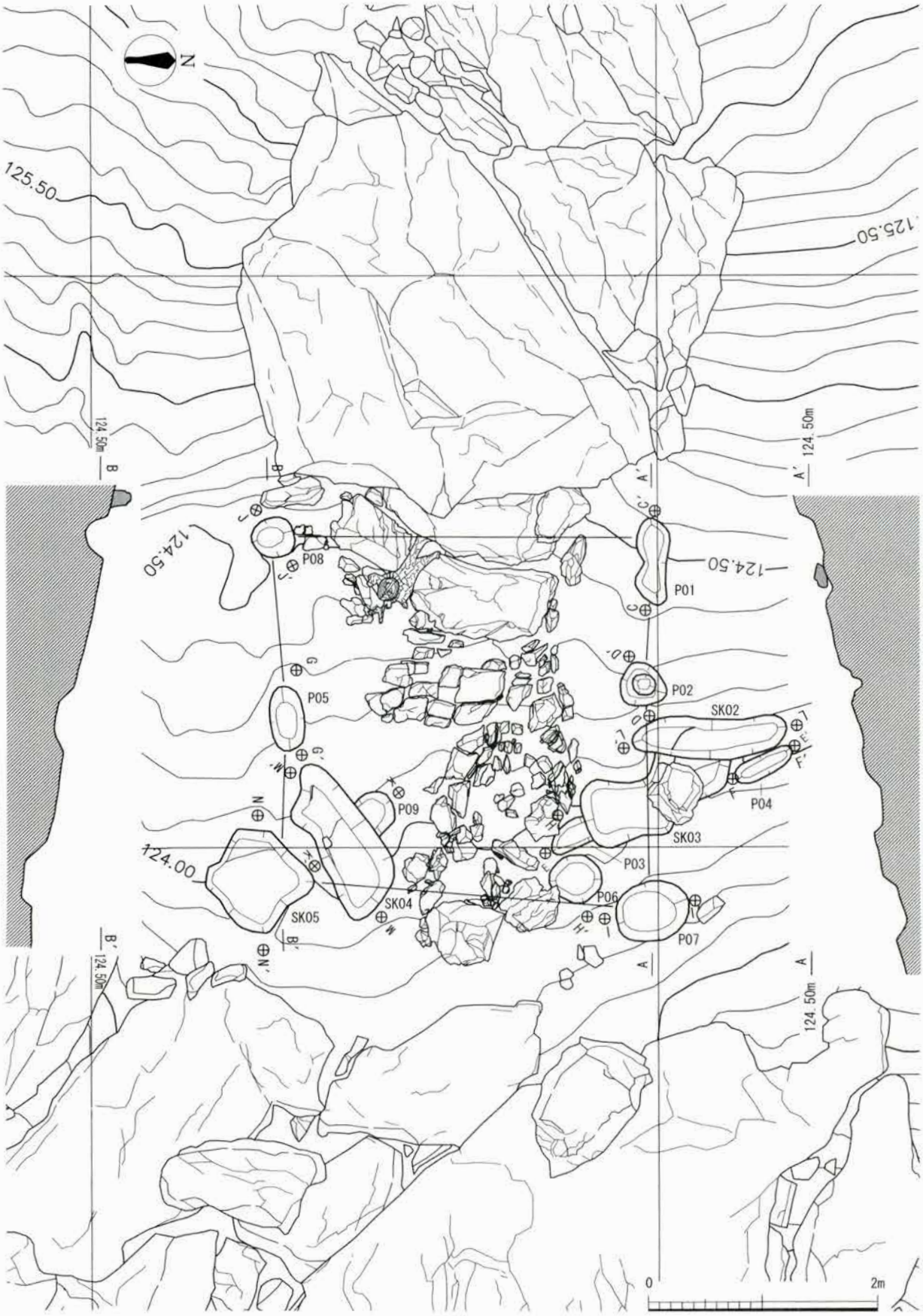
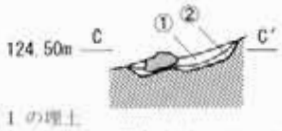


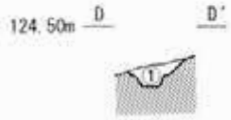
図199　大平前遺跡ピット・ＳＫ 位置図

P01



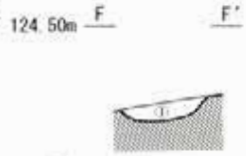
Ｐ０１の埋土
① 7.5ＹＲ 4/6　褐色土（1～2cmの角砂岩礫を多く含む。しまり有り）
② 7.5ＹＲ 5/8　明褐色土（1～2cmの角砂岩礫、チャート礫を多く含む。しまり有り）

P02



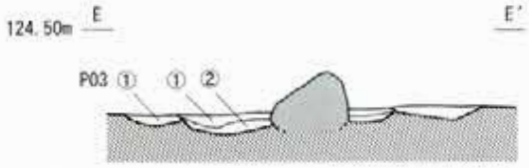
Ｐ０２の埋土
① 7.5ＹＲ 4/4　褐色土（0.5～3cmの角砂岩礫、チャート礫を多く含む。炭小片を多く含む。しまり有り）

P04



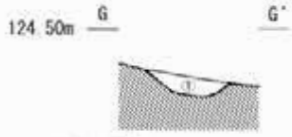
Ｐ０４の埋土
① 7.5ＹＲ 4/6　褐色土（1～2cmの角砂岩礫、チャート礫を多く含む。炭小片を多く含む。しまり有り）

P03・SK03



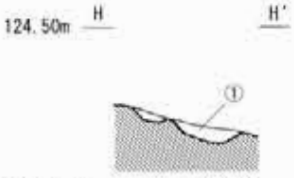
Ｐ０３の埋土
① 7.5ＹＲ 4/4　褐色土（0.5～3cmの角砂岩礫、チャート礫を多く含む。炭小片を多く含む。しまり有り）
ＳＫ０３の埋土
① 7.5ＹＲ 4/3　褐色土(1の角砂岩礫、チャート礫を多く含む。しまり無し)
② 7.5ＹＲ 5/8　明褐色土（1～2cmの角砂岩礫、チャート礫を多く含む。しまり有り）

P05



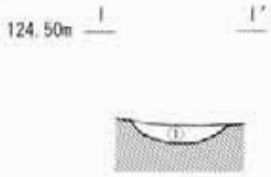
Ｐ０５の埋土
① 7.5ＹＲ 4/6　褐色土（1～3cmの角砂岩礫、チャート礫を多く含む。しまり有り）

P06



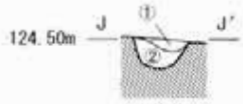
Ｐ０６の埋土
① 7.5ＹＲ 4/6　褐色土（1～3cmの角砂岩礫、チャート礫を多く含む。7.5ＹＲ 5/8　明褐色土を斑に含む。炭小片を少量含む。しまり有り）

P07



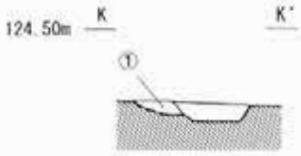
Ｐ０７の埋土
① 7.5ＹＲ 4/4　褐色土（1～5cmの角砂岩礫、チャート礫を多く含む。炭小片を多く含む。しまり有り）

P08



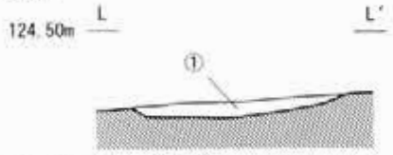
Ｐ０８の埋土
① 7.5ＹＲ 4/6　褐色土（1～3cmの角砂岩礫、チャート礫を多く含む。しまり有り）
② 7.5ＹＲ 5/8　明褐色土（1～2cmの角砂岩礫、チャート礫を多く含む。しまり有り）

P09



Ｐ０９の埋土
① 7.5ＹＲ 4/6　褐色土（1～2cmの角砂岩礫、チャート礫を多く含む。しまり有り）

SK02

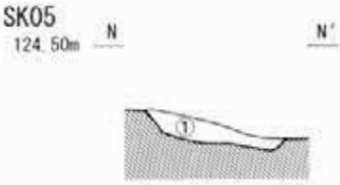


ＳＫ０２の埋土
① 7.5ＹＲ 4/4　褐色土（0.5～3cmの角砂岩礫、チャート礫を多く含む。炭小片を多く含む。しまり有り）

SK04

ＳＫ０４の埋土
① 7.5ＹＲ 4/4　褐色土（3～10cmのチャート礫を多く含む。炭小片を少量含む。しまり無し）
② 7.5ＹＲ 5/8　明褐色土（1～2cmの角砂岩礫、チャート礫を多く含む。しまり有り）

SK05



ＳＫ０５の埋土
① 7.5ＹＲ 4/4　褐色土（1～10cmのチャート礫を多く含む。しまり無し）

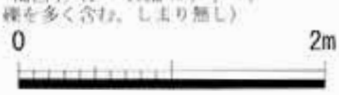


図200　大平前遺跡ピット・ＳＫ 実測図

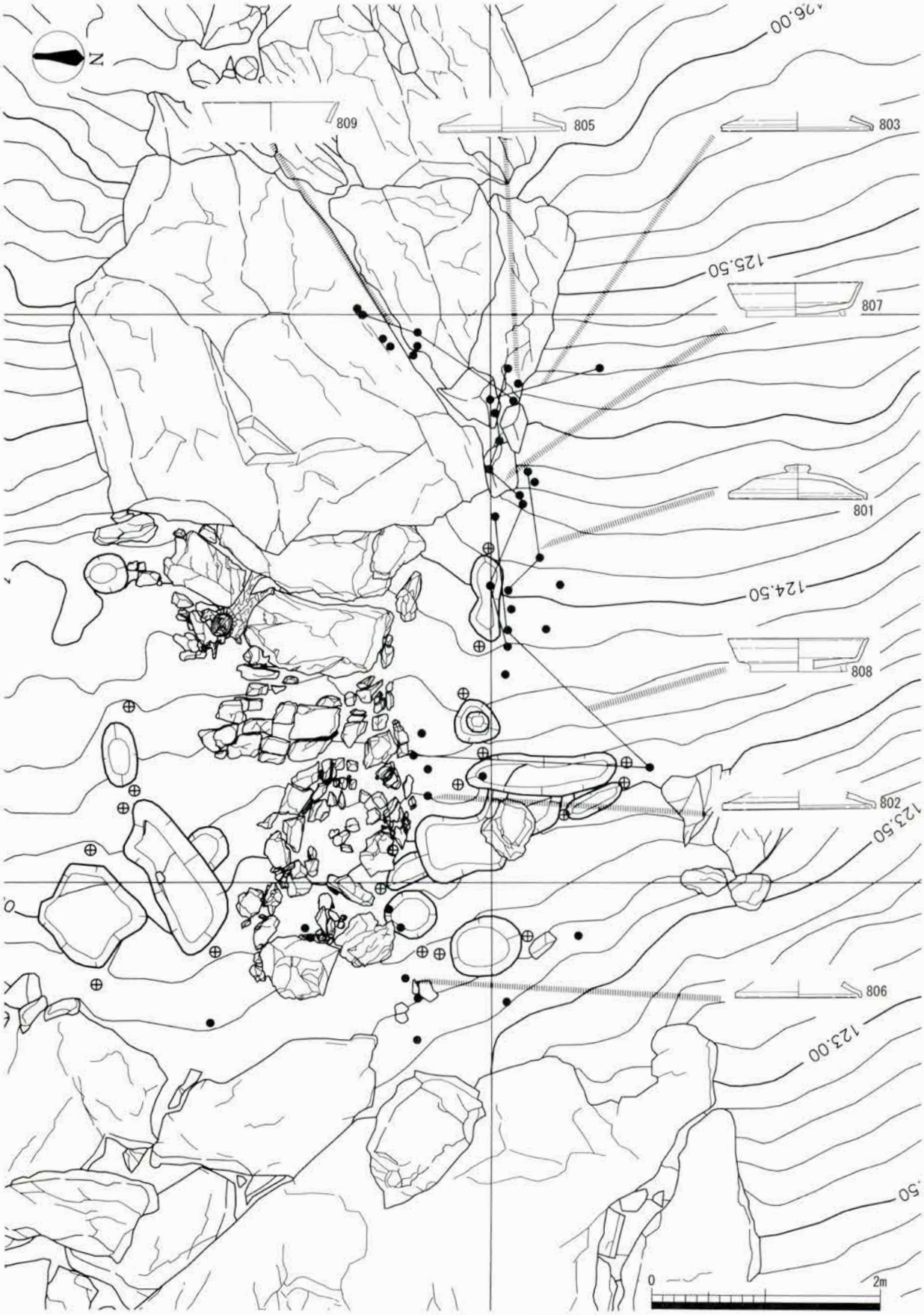


図201　大平前遺跡遺物出土状況図(1/50)

れたと考えられる。須恵器の出土状況から考えると、祭祀終了後、須恵器は巨岩の背後で打ち割られ、廃棄されたものと思われる。

祭祀の行われた時期については、出土した須恵器の特徴から奈良時代と考えられる。出土点数が少なく、形態に時期差がほとんど認められないことから、祭祀の行われた回数は少なく、期間もごく短いと考えられる。

②　祭祀遺跡の背景

大平前遺跡において巨岩を対象にした祭祀が行われた時期には、南方約300mに榿ノ木洞遺跡の集落が存在している。しかも、両遺跡は、相互に望める位置関係にあることからすれば、当遺跡は榿ノ木洞遺跡に付随する祭祀遺跡という位置づけが妥当かと思われる。

祭祀の性格については、出土遺物が須恵器坏身、坏蓋のみに限られており、遺物の上からその具体的内容を推測することは困難である。しかし、祭祀遺構のたたずまいや遺跡の立地そのものに、わずかながらその糸口があるように思われる。すなわちこの遺跡が、「大平」一帯を眼下に一望できる場所に存在する事実を重く見なければならないだろう。遺跡の立地する尾根はまさにこの「大平」に突き出した尾根であり、巨岩はその正面を「大平」一帯に向けている。北にはこの辺りではひときわ高く見える200m数十m級の山塊が険しい急斜面を連ね、屏風のように屹立している。その南麓には広々とした谷と高原状の低丘陵が広がり、とりわけ視界の果て近くの丘陵群はいわゆる神南備型（笠形）の山容を見せており、印象的である。下界から隔絶された静かで清爽の気にあふれた神秘的な雰囲気がそこには存在する。時代を大きく隔てて、風景に若干の変化はあろうとも古代の人々がこの地で抱いた思いも同じようなものであったことと思われる。しかし、人々がここに祭祀の場所を設けた理由を、その荘厳な雰囲気にのみ求めることは不十分であろう。

もう一つ、より重要な理由として、「大平」一帯が彼らにとって、まさに命の源である水を生み出す、水源の地であったことに注目しなければならない。「大平」の山塊が生み出した水は、西部にあっては榿ノ木洞遺跡を経て竜泰寺の東を南に開けていく谷に沿って、吉田沖へと流れ出ている。東部にあっては、黒屋、塔の洞の谷を経てやはり吉田沖へと流れ出ている。いつのころからかこれらの水の流れを堰き止めて、中池を初めとするいくつかの水田潅漑用のため池が作られて行くが、「大平」一帯が水源地である事実は連綿と今日まで変化はない。

吉田沖は、関市内で最も良好に大規模な条里制の区画が残っていた地域で、その水田経営は長い歴史を有する。榿ノ木洞遺跡の集落を支えた生産背景は、吉田沖における水田経営であったことだろう。つまり水稲耕作や日常生活に不可欠の水は、すべて「大平」一帯が生み出していたわけで、その「大平」を一望できる場所の磐座（巨岩）で行われた祭祀は、水分（みくまり）の地を管轄する神に対する祭祀にほかならない。大平前遺跡からは、東には水源地「大平」を一望できるばかりではなく、南には榿ノ木洞遺跡、さらにその先には丘陵の間に間に吉田沖の水田を遠望できる。まさしく榿ノ木洞の人々にとって神の宿る地にふさわしい位置を占めていると言ってよいと思われる。

③大平前遺跡の廃絶

水源地の祭祀場として絶好の場所であったにもかかわらず、ここでの祭祀が出土遺物の状況に見る

限り、ごく短期間で終了した理由は、祭祀の実修主体であった榿ノ木洞の集落が９世紀初頭で一端終焉を迎えていることに求められると思われる。榿ノ木洞遺跡（昭和63年 関市教育委員会調査、平成８・10年［財］岐阜県文化財保護センター調査）からは、９世紀の前半の空白期以後の住居跡は、計４軒（９世紀後半１軒、10世紀前半３軒）発見されている。４世紀後半から９世紀初頭までの住居跡が合計112軒あるのと比較すると、その差は歴然としており、もはや集落としての機能は失っていたのではないかと思われる。祭祀を継続する村落基盤の喪失が、大平前遺跡の廃絶をもたらしたと考えられる。

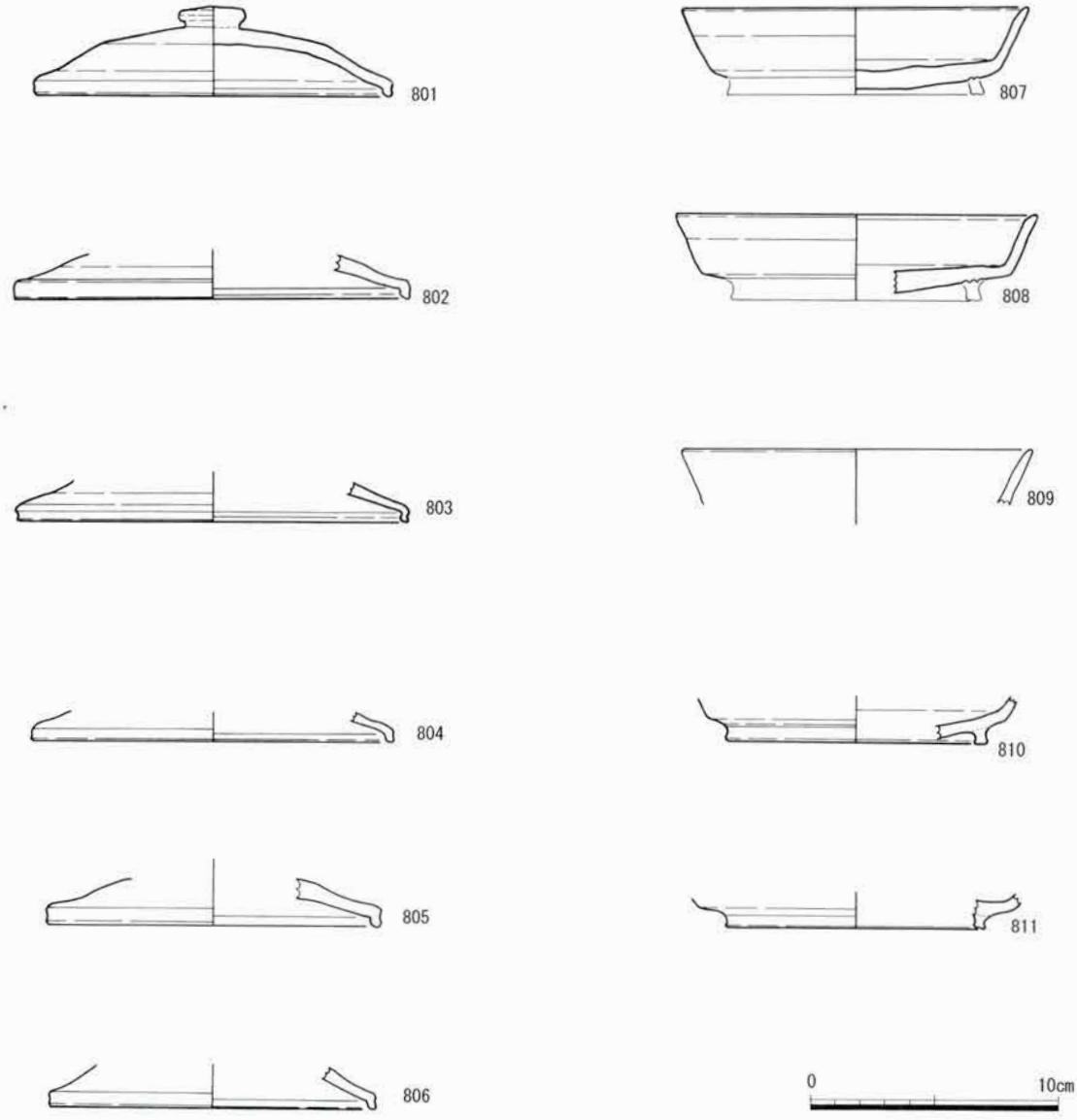


図202　大平前遺跡出土土器

遺構一覧表

遺物観察表

住居跡・ＳＤ・ＳＫ・ピット一覧表　凡例

＜各遺構一覧表共通＞

・各遺構の検出されたグリッドについては、主要なもののみを示した。

・海抜は床面中央で測定した。

・備考欄の「＞」は、その遺構を切ることを、「＜」はその遺構によって切られることを示す。

・住居跡の幅・奥行き・最大深さ、ＳＤの幅・深さ、ＳＫ・ピットの長軸・短軸・深さの単位は、cmである。

＜住居跡一覧表＞

・傾斜は、住居周辺の傾斜角を百分率で示した。

・開放方向は、壁面が開放する（床面が崩落する）谷側の方向を示す。

・主軸は、周辺の等高線に直行する方向とする。住居の幅は、等高線に沿う長さ、奥行きは主軸方向の長さとする。最大深さは、住居の山側の最大値を示す。

・隅角は丸くおさめるものを「丸」で、角張るものを「角」で示した。

＜ＳＫ・ピット一覧表＞

・埋土は上層より①→②→③の順で示した。

土器・木製品・金属製品・ガラス製品観察表　凡例

・遺物番号は、本文・挿図・図版の中で用いた番号と一致する。

・層位は、遺構出土遺物ではアラビア数字で、包含層ではローマ数字で表した。遺構出土遺物の、例えば、01層としたものは、本文・挿図の①層に対応する。なお、東谷の住居跡（SB71～85）出土土器の層位欄に「Ｆ」とあるものについては、住居跡埋土の上層からの出土であることを示している。

・土器の器種は、第２章第３節第２項の分類に対応する。

・法量で、（　）の無い数値は実測値である。（　）の付いた数値は、土器では復元・推定した値を、木製品・金属製品では欠損する遺物の残存する値を表している。また、空覧は、計測不能であることを示す。金属製品の質量は、ＬＩＢＲＯＲ600（ＳＨＩＭＡＤＺＵ製　秤量600）を用いた。

・土器の法量の単位は、cmである。

・土器の口径は、口縁端部外側で測定した。

・土器の色調は、小川正忠・竹原秀雄1996『新版標準土色帖』（日本色研事業株式会社）による。

表15　住居跡一覧表

住居番号	グリッド	傾斜 %	面積 m	開放方向	主軸方位	幅	奥行き	最大深さ	平面形	隅角	地床炉	壁溝	備考
SB01	m12	6	88.31	南	N-11°-E	424	460	26	正方形	丸・角	地床炉・石欠	残存部ほぼ全周	被熱痕跡2ヶ所、炭化材残存
SB02	m11	27.9	86.17	西	N-66°-E	328	180	32	不明	丸	地床炉・石有り	山側のみ	被熱痕跡2ヶ所有り、主柱穴不明
SB03	o13	23.8	86.16	南	N-11°-W	340	170	22	不明	丸	不明	東北隅及び東側のみ	主柱穴不明、残存状況不良、ケラス状張り出し部有り
SB04	q14	22.7	84.90	南	N-1°-E	382	160	24	不明	丸	不明	山側及び西側のみ	P11に土器埋設、主柱穴不明、残存状況不良
SB05	o10	14.8	84.52	西	S-87°-E	374	340	26	正方形	丸	不明	なし	>SB06、主柱穴不明瞭
SB06	o10	14.8	84.52	西	N-79°-E	272	142	30	不明	丸	不明	なし	<SB05、主柱穴不明、残存状況不良
SB07	o9	24	83.92	西	S-86°-E	374	148	26	不明	丸	不明	部分	
SB08	o13	21.3	86.19	南	N-10°-E	358	120	20	不明	丸	不明	山側のみ	<SB10、主柱穴不明、残存状況不良
SB09	n8	32.8	81.47	西	S-69°-E	410	142	40	不明	丸	不明	山側のみ	残存状況不良、遺物遺存状況良好
SB10	o12	20.6	85.94	南	N-13°-E	296	142	24	不明	丸	不明	なし	>SB08、残存状況不良、主柱穴不明
SB11	o10	31.2	80.64	南	N-30°-W	318	180	82	不明	丸	不明	残存部ほぼ全周	<SB35、残存状況不良、主柱穴不明瞭
SB12	r11	38.7	81.38	南	N-2°-W	486	120	32	不明	丸	不明	なし	ケラス状張り出し部有り、残存状況不良
SB13	q12	28.6	84.23	南西	N-14°-E	296	150	20	不明	丸	地床炉・石欠	なし	>SB40
SB14	p16	34.2	83.45	東	S-86°-W	310	226	12	不明	丸・角	不明	なし	
SB15	q16	14.3	83.72	南東	N-32°-W	230	340	20	不明	丸	不明	なし	<SB32、残存状況不良、主柱穴不明瞭
SB16	s11	14.8	80.48	南	N-4°-E	222	90	24	長方形	丸	地床炉・石有り	なし	
SB17	t14	32.1	81.28	南西	N-47°-E	240	90	28	不明	丸	不明	部分	>SB48、主柱穴不明、残存状況不良
SB18	u14	30.3	80.97	南西	N-65°-E	320	194	30	不明	丸	不明	なし	>SB19、残存状況不良
SB19	u15	30.3	81.28	南西	N-60°-E	344	108	30	不明	丸	不明	なし	<SB18、残存状況不良
SB20	u15	33.7	81.90	南西	N-68°-E	348	130	26	不明	丸	不明	なし	>SB21、残存状況不良、主柱穴不明瞭
SB21	u15	36.8	81.66	南西	N-70°-E	294	106	30	不明	丸	不明	なし	<SB20、残存状況不良、主柱穴不明瞭
SB22	v15	33.8	80.55	西	S-87°-E	374	134	32	不明	丸	不明	なし	残存状況不良、主柱穴不明瞭
SB23	u10	28.9	77.49	南	N-12°-W	324	226	56	正方形	丸	地床炉・石有り	なし	主柱穴不明瞭
SB24	v14	29.2	79.47	西	S-89°-E	410	138	40	不明	丸	不明	なし	残存状況不良
SB25	x14	43.9	78.44	西	S-60°-E	328	96	40	不明	丸・角	不明	なし	残存状況不良
SB26	t13	24.5	80.16	南西	N-16°-E	360	250	24	不明	丸	不明	なし	主柱穴不明瞭
SB27	x14	43.9	80.24	西	S-73°-E	296	134	46	不明	丸	不明	なし	残存状況不良
SB28	x11	22.1	80.41	南	N-12°-W	276	106	36	不明	丸	不明	なし	<SB36・46、残存状況不良、主柱穴不明
SB29	v1	14	84.31	南西	N-66°-E	316	216	14	不明	丸	地床炉・石欠	山側のみ	残存状況不良、主柱穴不明
SB30	x10	43.3	81.88	東	N-67°-W	304	112	28	不明	丸	不明	なし	残存状況不良
SB31	s7	17.3	80.96	北西	S-45°-E	354	120	32	不明	丸	不明	なし	<SB54、残存状況不良
SB32	r15	12.7	83.69	南東	N-18°-W	252	178	12	不明	丸	不明	なし	>SB15、残存状況不良
SB33	r13	15.7	88.56	南	N-2°-W	334	130	14	不明	丸	不明	なし	残存状況不良
SB34	p2	38.5	83.34	北	S-1°-E	324	170	34	不明	丸	不明	なし	
SB35	r10	23.6	78.90	南	N-2°-W	428	360	66	正方形	丸	地床炉・石有り	残存部ほぼ全周	>SB28・46、焼失住居、遺物遺存状況良好
SB36	p5	36.8	80.33	北	S-1°-E	350	110	24	不整形	丸	不明	なし	主柱穴不明瞭
SB37	w10	18.2	76.55	南東	N-58°-W	320	270	38	正方形	丸	地床炉・石欠	なし	
SB38	q7	20	84.47	北	S-4°-W	230	138	24	不明	丸	不明	なし	最小住居跡
SB39	p13	33	84.50	南西	N-14°-E	240	80	36	不明	丸	不明	なし	<SB40、残存状況不良
SB40	q12	30	84.30	南西	N-14°-E	364	172	30	不明	丸	不明	なし	<SB13、>SB39
SB41	s14	22.2	82.50	南西	N-34°-E	236	270	38	正方形	角	地床炉・石欠	なし	山側周溝（SD06）、焼失住居、被熱痕跡
SB42	r14	40.6	82.41	南西	N-27°-E	482	118	26	不明	丸	不明	部分	>SB43、<SB02、山側周溝（SD03）、残存状況不良
SB43	r13	40.6	82.62	南	N-11°-E	344	110	36	不明	丸・角	不明	なし	<SB42、残存状況不良
SB44	u18	2.5	83.11	西	N-76°-E	390	340	6	正方形（不整形）	丸・角	不明	なし	主柱穴不明瞭、残存状況不良
SB45	v17	12.5	83.12	東	S-81°-W	258	166	14	長方形	丸	不明	なし	<SB65、主柱穴不明
SB46	s11	14.8	79.93	南	N-19°-E	380	380	48	不明	丸	不明	なし	>SB16・28、<SB33、焼住居残存
SB47	s13	39.3	76.32	西	S-75°-E	612	208	40	不明	丸・角	不明	残存部ほぼ全周	山側周溝（SD06）、炭化材残存
SB48	s14	32.1	80.95	南西	S-53°-E	356	170	30	不明	丸	不明	部分	>SB17
SB49	欠番												
SB50	l2	12.3	84.09	東	S-78°-E	334	240	22	長方形	丸	地床炉・石有り	山側及び西側のみ	被熱痕跡
SB51	欠番												

住居番号	グリッド	傾斜 %	海抜 m	開放方向	主軸方位	幅	奥行き	最大深さ	平面形	隅角	地床炉	壁　溝	備　考
SB52	m3	35.7	83.54	北東	S-60°-W	330	114	32	不明	丸	不明	なし	残存状況不良
SB53	r9	28.6	82.76	南東	N-58°-W	318	148	40	不明	丸・角	不明	なし	
SB54	n7	17.3	80.91	北	S-14°-E	370	280	24	長方形	丸	不明	なし	>SB31、炭化材残存、遺物遺存状況良好
SB55	欠番												
SB56	l3	39.7	82.39	北東	S-56°-W	444	124	44	不明	丸	不明	なし	残存状況不良
SB57	m4	32.6	81.83	北東	S-69°-W	404	200	44	不明	丸	不明	なし	<SB58、被熱痕跡
SB58	m4	32.7	81.46	北東	S-59°-W	482	214	50	不明	丸	不明	なし	>SB57
SB59	o6	24.7	82.53	北東	S-25°-W	434	190	30	不明	丸	不明	なし	<SB60・63、残存状況不良
SB60	o6	23.4	81.88	北	S-9°-E	430	220	50	不明	丸	不明	なし	>SB59、<SB63
SB61	r8	17.4	84.29	東	N-77°-W	288	180	24	正方形	丸	不明	なし	
SB62	q11	26.5	83.04	南東	N-20°-W	316	210	12	不明	丸	地床炉・石有り	山側及び東側のみ	炭化材残存
SB63	o6	24.7	81.89	北東	S-27°-W	376	242	40	不明	丸	不明	なし	>SB59・60・64・65
SB64	n5	31	82.13	北東	S-41°-W	446	230	52	不明	丸・角	不明	なし	<SB63
SB65	n6	28.4	81.52	北	S-18°-W	334	176	30	不明	丸	不明	なし	<SB63
SB66	n7	20	81.21	北西	S-23°-E	338	174	30	不明	丸	不明	なし	
SB67	m5	25.5	80.68	北	S-16°-W	340	154	28	不明	丸	不明	なし	
SB68	l4	39.4	80.87	北東	S-70°-W	330	182	46	不明	角	不明	なし	<SB69、主柱穴不明瞭
SB69	m4	35.6	80.76	北東	S-62°-W	366	192	56	不明	丸	不明	なし	>SB68
SB70	t9	38.3	82.97	南東	N-57°-W	256	138	38	不明	丸・角	不明	西北隅及び北側のみ	残存状況不良
SB71	s18	38.4	80.00	東	S-89°-W	350	154	46	不明	丸	不明	なし	<SB74、主柱穴不明、残存状況不良
SB72	r18	31.6	79.52	東	N-82°-W	286	136	36	不明	丸	不明	なし	
SB73	s20	20	78.46	北	S-1°-W	402	398	48	正方形	角	不明	なし	
SB74	s19	26.7	80.00	東	S-76°-W	340	162	22	不明	丸・角	不明	なし	>SB71
SB75	s19	27.3	78.99	北東	S-59°-W	368	250	52	不明	丸	不明	なし	
SB76	r18	30.2	79.52	東	N-86°-W	286	150	32	不明	丸・角	不明	なし	<SB80
SB77	u19	25.8	81.17	北東	S-60°-W	350	202	42	不明	角	不明	なし	>SB84
SB78	r19	23.8	78.26	東	S-79°-W	416	230	52	不明	角	不明	なし	>SB84
SB79	r20	22.6	77.96	北	N-76°-E	320	230	32	正方形	丸	不明	なし	残存状況不良
SB80	s19	23.8	79.27	北東	S-57°-W	270	116	14	不明	丸	不明	なし	>SB76、残存状況不良
SB81	r19	21.9	78.36	東	S-82°-W	284	220	50	正方形	角	不明	なし	
SB82	u19	25.2	80.21	北東	S-46°-W	310	214	64	不明	角	不明	なし	
SB83	t22	31.7	80.49	北西	S-48°-E	292	220	66	正方形	丸	不明	部分	主柱穴不明
SB84	v19	26.8	81.79	北東	S-46°-W	364	262	54	不明	丸	不明	部分	<SB77
SB85	v18	21.9	82.83	北東	S-40°-W	292	200	28	不明	丸	不明	部分	>SB45、主柱穴不明

表16　ＳＤ一覧表

SD番号	グリッド	海抜 m	幅	深さ	備　考
SD01	l12・l13	88.36	215	43	最高所、土師器（35）
SD02	s15	83.01	85	8	>SB42・SD03、SB41の山側周溝、土師器（14）
SD03	r14	83.13	100	5	<SB43・SD02、SB42の山側周溝、土師器（13）
SD04	r9	83.81	85	14	SB53の山側周溝か？
SD05	r10	83.24	105	30	SB53の山側周溝か？、土師器（17）
SD06	x13・y13	77.07	45	32	SB47の山側周溝、土師器（2）

表17　ＳＫ一覧表

SK番号	グリッド	海抜 m	長軸	短軸	深さ	形状	埋土	備考＜出土遺物(遺物数)＞
SK01	k13･l13	88.43	265	112	9	隅丸長方形	本文中に記載有り	岩盤掘り抜き、被熱痕跡、炭多量、最高所
SK02	n17	81.13	132	62	16	楕円形	①10YR4/3にぶい黄褐色土②10YR5/6黄褐色土	
SK03	o10	84.60	110	52	24	楕円形	①7.5YR3/2黒褐色土②7.5YR2/3極暗褐色土③7.5YR3/4暗褐色土	
SK04	q9	83.67	130	58	16	不整楕円形	①a7.5YR3/2黒褐色土②b7.5R4/8赤色土③炭の堆積④7.5YR3/3暗褐色土	被熱痕跡、炭焼き土坑か？
SK05	o18	79.33	74	60	10	円形	①10YR2/2黒褐色土②10YR3/2黒褐色土	＞P60
SK06	q9	83.64	119	70	18	不整楕円形	①7.5YR4/4褐色土②炭の堆積	被熱痕跡、炭焼き土坑か？
SK07	o18	78.97	80	60	14	楕円形	①10YR2/2黒褐色土②10YR4/3にぶい黄褐色土	
SK08	q12	82.70	150	71	60	不整楕円形	本文中に記載あり	被熱痕跡、炭焼き土坑か？
SK09	q14	84.62	85	63	10	不整円形	①7.5YR4/4褐色土	
SK10	u20	80.95	75	55	12	円形	①10YR1.7/1黒色土②7.5YR4/6褐色土	
SK11	s16	83.18	267	194	25	不定形	本文中に記載有り	土師器（44）
SK12	s15	83.23	122	63	10	不定形	①7.5YR4/4褐色土②7.5YR5/6明褐色土	
SK13	o22	76.60	145	124	106	円形	本文中に記載有り	
SK14	w14	80.35	78	37	9	不定形	①7.5YR4/4褐色土	
SK15	w14	80.10	80	36	6	不定形	①7.5YR3/3暗褐色土②7.5YR4/6褐色土	
SK16	x14	80.77	(235)	(100)	27	不定形	①7.5YR3/3暗褐色土	＜SB27、土師器（18）
SK17	n22	79.95	84	70	16	円形	①10YR2/1黒色土②10YR3/2黒褐色土	
SK18	n22	76.29	90	44	12	楕円形	①10YR3/2黒褐色土	
SK19	u14	80.46	105	66	18	楕円形	本文中に記載有り	石器（1）、土師器(40)
SK20	u14	80.46	81	76	17	不整円形	①7.5YR2/2黒褐色土②7.5YR3/3暗褐色土	
SK21	v14	79.98	130	130	29	不定形	本文中に記載有り	
SK22	u18	82.58	105	65	15	不定形	①5YR2/1黒褐色土②2.5YR4/6赤褐色土③10YR5/8黄褐色土	被熱痕跡、河原石（円形）
SK23	s20	79.11	(158)	104	13	（長楕円形）	①10YR1.7/1黒色土	SB73の山側周溝か？土師器（70）
sk24	t3･u3	84.80	175	71	65	長方形	本文中に記載あり	被熱痕跡、炭焼き土坑か？
SK25	y10	75.00	137	112	6	不定形	本文中に記載あり	円礫主体の集積

表18　ピット一覧表

ピット番号	グリッド	海抜 m	長軸	短軸	深さ	形状	埋土	備　考
P01	v4	85.22	51	40	32	不定形（歪形）	本文中に記載有り	岩壁掘り抜き、ノミ痕跡有り、南青柳古墳付属施設
P02	p6	83.40	55	48	18	円形	①7.5YR2/3極暗褐色土②7.5YR4/4褐色土	
P03	o5	83.00	50	26	16	不整楕円形	①7.5YR2/3極暗褐色土②7.5YR3/4暗褐色土	
P04	欠番							
P05	q18	79.84	38	30	15	円形	①10YR3/2黒褐色土	
P06	欠番							
P07	q9	83.72	38	38	12	円形	①7.5YR4/4褐色土②7.5YR3/4暗褐色土	
P08	u7	85.03	60	50	30	不定形	本文中に記載有り	岩壁掘り抜き、南青柳古墳付属施設
P09	o7	82.20	48	45	13	円形	①7.5YR2/3暗褐色土	
P10	o18	79.44	34	34	8	円形	①7.5YR4/4褐色土	
P11	t16	83.16	66	50	22	円形	①7.5YR4/4褐色土②7.5YR5/6明褐色土	
P12	w14･w15	80.66	40	33	26	楕円形	①7.5YR4/4褐色土②7.5YR5/6明褐色土	
P13	u14	80.46	52	50	15	円形	①7.5YR3/4暗褐色土②7.5YR4/4褐色土	
P14	u14	80.61	23	20	26	円形	①7.5YR3/4暗褐色土②7.5YR4/4褐色土	
P15	v14	80.31	29	21	8	不整円形	①7.5YR3/4暗褐色土②7.5YR4/4褐色土	
P16	u14	80.55	35	30	23	円形	①7.5YR3/4暗褐色土	
P17	p18	78.96	62	49	10	円形	①7.5YR3/3暗褐色土②7.5YR4/6褐色土	
P18	r10	82.53	53	49	23	円形	①7.5YR2/2黒褐色土②7.5YR3/3暗褐色土	
P19	r11	82.18	49	49	14	円形	①7.5YR3/2黒褐色土②7.5YR3/4暗褐色土	
P20	u13	78.96	59	30	1	不整楕円形	①7.5YR3/2黒褐色土	
P21	u13	78.75	33	31	12	円形	①7.5YR3/2黒褐色土	
P22	v13	77.83	94	42	11	不整楕円形	①7.5YR2/2黒褐色土	
P23	v14	79.34	34	31	14	円形	①7.5YR3/2黒褐色土	

ピット番号	グリッド	海抜 m	長軸	短軸	深さ	形状	埋土	備　考
P24	v14	79.20	29	19	8	楕円形	①7.5YR3/2黒褐色土	
P25	v14	79.16	34	20	16	楕円形	①7.5YR3/2黒褐色土	
P26	v13	78.51	30	24	16	円形	①7.5YR3/2黒褐色土	
P27	v13	77.94	35	32	16	円形	①7.5YR2/3極暗褐色土	
P28	v13	77.85	20	20	10	円形	①7.5YR2/3極暗褐色土	
P29	v13	77.66	31	28	13	円形	①7.5YR2/2黒褐色土	
P30	v13	77.46	37	36	11	楕円形	①7.5YR1.7/1黒色土	
P31	v13	77.55	59	49	43	楕円形	①7.5YR3/1黒褐色土	
P32	v13	77.34	50	44	7	楕円形	①7.5YR3/1黒褐色土	
P33	v13	77.32	56	27	18	楕円形	①7.5YR2/2黒褐色土	
P34	v13	77.17	28	28	10	楕円形	①7.5YR2/2黒褐色土②7.5YR3/3暗褐色土	
P35	v12	76.99	54	30	18	楕円形	①7.5YR2/1黒色土	
P36	u13	78.41	48	46	24	円形	①7.5YR3/3暗褐色土②7.5YR4/6褐色土	
P37	u12	78.13	25	21	16	円形	①7.5YR2/2黒褐色土	
P38	u13	77.40	25	23	14	円形	①7.5YR2/2黒褐色土	
P39	u13	77.36	29	26	14	円形	①7.5YR2/2黒褐色土	
P40	u13	77.12	22	22	19	円形	①7.5YR2/2黒褐色土	
P41	u13	77.00	21	17	10	楕円形	①7.5YR2/2黒褐色土②7.5YR3/3暗褐色土	
P42	u12	76.89	19	18	8	円形	①7.5YR2/1黒色土	
P43	u12	76.98	44	24	12	不定形	①7.5YR2/1黒色土	
P44	u13	77.03	27	24	11	円形	①7.5YR2/2黒褐色土	
P45	u13	76.96	36	33	10	円形	①7.5YR2/1黒色土	
P46	u12	76.67	30	20	9	円形	①7.5YR2/2黒褐色土	
P47	u13	76.91	28	24	10	円形	①7.5YR2/2黒褐色土②7.5YR3/3暗褐色土	
P48	t13	77.74	40	22	11	楕円形	①7.5YR3/3暗褐色土	
P49	t13	77.82	48	36	15	円形	①7.5YR3/3暗褐色土	
P50	t13・t13	76.84	50	22	13	不整円形	①7.5YR3/2黒褐色土	
P51	t12	77.19	31	30	14	楕円形	①7.5YR3/3暗褐色土②7.5YR4/4褐色土	
P52	t12	77.24	34	22	11	楕円形	①7.5YR3/3暗褐色土	
P53	t13	77.64	37	32	8	円形	①7.5YR2/2黒褐色土	
P54	t13	77.51	27	25	11	円形	①7.5YR2/2黒褐色土	
P55	t13	77.50	22	20	9	円形	①7.5YR2/2黒褐色土	
P56	t12	77.14	24	22	9	円形	①7.5YR2/2黒褐色土	
P57	t12	77.08	24	24	16	円形	①7.5YR2/2黒褐色土②7.5YR4/4褐色土	
P58	t12	77.01	24	22	13	円形	①7.5YR2/2黒褐色土②7.5YR4/4褐色土	
P59	r12	81.29	36	29	26	円形	①7.5YR4/3褐色土	土師器（2）
P60	s18	79.14	56	44	10	円形	①7.5YR4/3褐色土	>SK05
P61	s18	78.83	59	50	10	円形	①7.5YR4/4褐色土	

表19　住居跡・SU・SD・SK出土土器観察表

遺物番号	出土地点	層位	器種	法量 口径	法量 器高	法量 底径	調整 外面	調整 内面	胎土	焼成	色調 外面	色調 内面	色調 断面	残存状態	備考	種別 No.	図版 No.
1	SB01	03	器台B	(15.0)			調整不明	調整不明	やや粗、2mm以下の砂粒を多く含む	良好	灰白 10YR8/2	浅黄 10YR8/3	灰 N4/0	口縁部1/12		132	34
2	SB01	01	壺B				調整不明	指ナデ	密	良好	にぶい黄橙 10YR7/4	明灰 10YR8/1	明灰 10YR8/1	体部片	横線2条以上・列点文	132	34
3	SB01	01	赤焼鉢			5.0	ミガキ	調整不明	密	良好	にぶい黄橙 10YR7/4	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	底部完存		132	34
4	SB01	02	赤焼鉢			(2.4)	調整不明	調整不明	密	良好	浅黄橙 10YR8/3	明灰 10YR8/1	明灰 10YR8/1	底部1/2		132	34
5	SB02	01	高坏C				ミガキ	調整不明	密	良好	橙 2.5YR6/8	橙 2.5YR6/6	橙 7.5YR7/6	口縁部片	口縁端部内面沈線1条	132	
6	SB02	01	高坏脚部			(12.0)	ミガキ、脚部ナデ	指オサエ	密	良好	橙 7.5YR7/6	にぶい橙 7.5YR6/4	明灰 N7/0	脚部1/2	2孔2組4穿孔	132	22
7	SB02	03	壺D	(20.0)			調整不明	調整不明	粗、2mm以下の砂粒を多く含む	良好	浅黄橙 10YR8/3	浅黄橙 10YR8/3	浅黄橙 10YR8/4	口縁部1/12	口縁部煤付着	132	34
8	SB02	03	壺D	(18.1)		5.1	ハケ後ナデ	ハケ、指ナデ、指ナデ	密	良好	明灰 10YR8/1	明灰 10YR8/1	明灰 10YR8/1	口縁部1/4、底部完存		132	22
9	SB03	02	高坏F	(17.3)			ミガキ	調整不明	密	良好	黄橙 10YR8/6	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	口縁部1/12	口縁部外面横線11条	132	34
10	SB03	02	高坏脚部				調整不明	指ナデ	密	良好	浅黄橙 10YR8/3	浅黄橙 10YR8/3	灰 N4/0	基部全周	2孔3組6穿孔、脚部絞り込み痕	132	34
11	SB03	02	壺G底			5.8	調整不明	調整不明	やや粗、1mm以下の砂粒を多く含む	良好	橙 5YR7/6	明灰 2.5YR8/1	明灰 7.5YR8/1	底部完存		132	34
12	SB04	02	壺G底			(4.6)	指オサエ	調整不明	やや粗、3mm以下の砂粒を少量含む	良好	橙 5YR7/6	にぶい橙 7.5YR7/4	明灰 7.5YR8/1	底部1/4		132	
13	SB04	02	壺G底			(5.2)	ケズリ	調整不明	密	良好	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	底部1/4		132	34
14	SB04	02	壺H	(20.1)			調整不明	調整不明	やや粗、1mm以下の砂粒を多く含む	良好	浅黄橙 10YR8/3	浅黄橙 10YR8/3	浅黄橙 10YR8/3	口縁部3/12	P01出土	132	22
15	SB05	03	壺G1	(14.1)			調整不明	調整不明	やや粗、2mm以下の砂粒を少量含む	良好	浅黄橙 7.5YR8/6	浅黄橙 7.5YR8/6	浅黄橙 7.5YR8/6	口縁部1/12		132	
16	SB05	02	壺G底			(6.2)	調整不明	板ナデ	密	良好	明赤褐 2.5YR5/6	にぶい橙 7.5YR6/4	灰褐 7.5YR4/2	底部1/4		132	
17	SB05	03	壺G底			(4.2)	調整不明	調整不明	密	良好	褐灰 10YR6/1	褐灰 10YR5/1	褐灰 10YR6/1	底部1/4		132	
18	SB05	01	壺H				調整不明	調整不明	やや粗、4mm以下の砂粒を少量含む	良好	灰 N4/0	灰 N6/0	灰 N6/0	口縁部片		132	
19	SB05	02	壺D	(20.1)			ケズリ	ケズリ	やや粗、3mm以下の砂粒を多く含む	良好	浅黄橙 10YR8/3	灰 N6/0	灰 N4/0	口縁部1/12		133	
20	SB07	03	壺K	(21.6)			ハケ	口縁部ハケ、体部ケズリ	密	良好	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	口縁部1/6	口縁端部外面刻み目、頸部外面横線14条と列点文、煤付着	133	
21	SB07	03	壺A			2.8	ミガキ	ハケ後指ナデ	密	良好	赤 2.5R4/6	橙 7.5YR6/6	灰 N4/0	底部完存	外面赤彩	133	22
22	SB09	01	高坏又は脚台脚部			(14.4)	ミガキ	ケズリ	密	良好	にぶい橙 7.5YR7/4	橙 7.5YR7/6	明褐灰 2.5YR7/1	脚部1/6	(2孔3組6穿孔)	133	
23	SB09	03	高坏C	24.2	24.9	14.7	ミガキ	体部ミガキ、脚部ケズリ後指ナデ、指オサエ	密	良好	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	口縁部5/6、体部・脚部14/12底部片	1孔2組・2孔1組4穿孔	133	22
24	SB09	01	高坏C	(19.1)			ミガキ	調整不明	やや粗、4mm以下の砂粒を少量含む	良好	橙 5YR7/6	橙 5YR7/6	橙 5YR7/6	口縁部1/12		133	
25	SB09	03	器台B2	11.4	6.9	(9.6)	ミガキ	受け部ミガキ、脚部ミガキ→指オサエ	密	良好	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	浅黄橙 10YR8/4	受け部11/12、脚部1/4		133	22
26	SB09	03	器台	(16.4)			調整不明	調整不明	密	良好	浅黄橙 7.5YR8/6	橙 7.5YR7/6	浅黄橙 7.5YR8/6	口縁部1/12		133	
27	SB09	03	器台	(11.3)			調整不明	調整不明	密	良好	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	口縁部1/6	口縁端部横線2条	133	
28	SB09	03	鉢B	(23.3)			口縁部ミガキ、体部ケズリ	ミガキ	密	良好	橙 7.5YR7/6	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	口縁部1/4	口縁端部外面横線3条と列点文、頸部外面横線9条と列点文、外面煤付着	133	22
29	SB09	03	鉢C	(12.2)			調整不明	調整不明	密	良好	にぶい黄橙 10YR7/4	橙 2.5YR6/6	にぶい黄橙 10YR7/4	口縁部1/12	口縁端部外面横線4条と列点文	133	
30	SB09	03	壺D1	19.8	19.8	5.7	ハケ	ハケ後指ナデ	密	良好	明赤褐 2.5YR5/6	にぶい橙 7.5YR6/4	にぶい橙 7.5YR6/4	口縁部1/6欠損、底部完形	外面煤付着	133	23
31	SB09	03	壺D1	19.2	19.3	5.3	ハケ	指オサエ、ケズリ、指ナデ	やや粗、3mm以下の砂粒を多く含む	良好	にぶい黄橙 10YR6/4	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	口縁部11/12、体部5/6	外面煤付着	133	23
32	SB09	03	壺D2	17.8	19.8	5.6	ハケ、ナデ、ケズリ	横ナデ、ハケ、指ナデ、指ナデ	やや粗、1mm以下の砂粒を多く含む	良好	橙 7.5YR6/8	明黄褐 10YR7/6	にぶい黄橙 10YR7/4	口縁部1/6欠損、底部完形		133	23
33	SB09	02	壺C	(18.0)			ハケ、工具による下ナデ	調整不明	やや粗、3mm以下の砂粒を多く含む	良好	にぶい黄橙 10YR7/2	にぶい黄橙 10YR6/3	褐灰 10YR5/1	口縁部1/2		133	
34	SB09	01	壺				ミガキ	ケズリ	密	良好	褐灰 N3/0	橙 5YR6/6	褐灰 7.5YR4/1	体部片	頸部横線3条以上と列点文	133	34
35	SB09	03	壺G2			6.0	ミガキ	指ナデ	密	良好	浅黄橙 10YR8/3	灰黄褐 10YR5/2	灰 N5/0	底部以下1/12完形、口縁部欠損	体部外面赤彩	133	23
36	SB09	03	壺G2	8.4	13.1	5.2	ミガキ	ハケ	密	良好	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/3	口縁部完形		133	23
37	SB09	02	壺G2	(10.0)			調整不明	調整不明	密	良好	灰白 10YR8/2	灰白 10YR8/2	灰白 10YR8/2	口縁部1/6	口縁部外面横線3条	133	34
38	SB09	01	壺K				調整不明	指ナデ	密	良好	橙 7.5YR6/6	橙 7.5YR6/3	にぶい橙 7.5YR7/4	体部片	横線2条と櫛描列点文	133	
39	SB09	01	壺D底部			(4.8)	ミガキ	調整不明	密	良好	にぶい黄橙 10YR7/4	浅黄橙 10YR8/4	褐灰 10YR6/1	底部1/4		133	
40	SB09	01	壺D底部			1.0	ケズリ	調整不明	密	良好	灰白 2.5Y8/2	黄灰 2.5Y6/1	灰白 2.5Y8/2	底部1/2		133	
41	SB11	01	器台B	(16.0)			ミガキ	ミガキ	密	良好	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	受け部1/4、基部全周	口縁端部横線2条、透かし3方向、脚部内面絞り込み痕	134	23
42	SB11	01	器台脚部				ミガキ	ケズリ	密	良好	灰白 10YR8/2	浅黄橙 10YR8/3	浅黄橙 10YR8/3	基部1/2	透かし3方向	134	23
43	SB11	01	壺D	(19.0)			ハケ	調整不明	密	良好	褐灰 10YR5/1	黄橙 10YR8/6	にぶい黄橙 10YR7/3	口縁部1/6	口縁端部刻み目	134	34
44	SB11	03	壺K	(18.0)			ハケ後ナデ	横ナデ	やや粗、3mm以下の砂粒を少量含む	良好	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄橙 10YR7/4	浅黄橙 10YR8/4	口縁部1/12	外面煤付着	134	34

遺物番号	出土地点	層位	器種	法量 口径	法量 器高	法量 底径	調整 外面	調整 内面	胎土	焼成	色調 外面	色調 内面	色調 断面	残存状態	備考	挿図No.	図版No.
45	SB11	02	甕D	(16.6)			調整不明	調整不明	密	良好	浅黄橙 10YR8/4	黄橙 10YR8/6	浅黄橙 7.5YR8/6	口縁部1/6		134	34
46	SB11	02	甕D	(15.0)			板ケズリ	調整不明	密	良好	黄橙 10YR8/6	黄橙 10YR8/6	黄橙 10YR8/6	口縁部5/12		134	24
47	SB11	03	ミニチュア土器			(3.4)	指ナデ	調整不明	密	良好	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4	浅黄橙 7.5YR8/4	台部1/4	甕台部ミニチュア土器	134	34
48	SB11	01	壺B1	26.7			ミガキ	調整不明	密	良好	浅黄橙 7.5YR8/4	浅黄橙 7.5YR8/4	浅黄橙 7.5YR8/4	口縁部3/4	口縁部内面擬回線一条とヘラ描き沈線、口縁端部擬回線3条	134	24
49	SB12	01	甕平底			(6.6)	指オサエ	指オサエ	やや粗、5mm以下の砂粒を少量含む	良好	にぶい黄橙 10YR7/4	浅黄橙 10YR8/4	にぶい黄橙 10YR7/4	底部1/2	内面煤付着	135	34
50	SB13	03	高坏E基部				調整不明	調整不明	密	良好	橙 7.5YR7/6	黄橙 10YR8/6	浅黄橙 10YR8/4	基部全周	2孔2組4穿孔	135	24
51	SB13	03	高坏脚部				ミガキ	指ナデ	密	良好	明黄褐 10YR7/6	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	脚部1/4	2孔2組4穿孔、SK01出土	135	24
52	SB13	03	甕C	(15.3)			調整不明	ハケ	やや粗、2mm以下の砂粒を少量含む	良好	明黄褐 10YR7/6	明黄褐 10YR7/6	明黄褐 10YR7/6	口縁部1/12	外面煤付着	135	34
53	SB13	02	鉢C	(11.4)			調整不明	調整不明	密	良好	黄橙 7.5YR7/8	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	口縁部1/6	口縁端部刻み目	135	
54	SB13	03	甕D	(13.6)			調整不明	調整不明	密	良好	橙 7.5YR7/6	にぶい黄橙 10YR7/4	褐灰 10YR4/1	口縁部1/12	口縁部外面煤付着	135	
55	SB13	03	甕C	(18.7)			調整不明	ハケ	やや粗、1mm以下の砂粒を少量含む	良好	にぶい黄橙 10YR6/3	にぶい黄橙 10YR6/4	にぶい黄橙 10YR7/4	口縁部1/12	外面煤付着	135	34
56	SB13	03	甕台部			(6.4)	調整不明	ハケ、根部横ナデ	密	良好	橙 7.5YR7/6	浅黄橙 7.5YR8/6	浅黄橙 7.5YR8/4	台部2/3	底部内面煤付着	135	24
57	SB13	02	甕台部			(9.2)	調整不明	調整不明	やや粗、3mm以下の砂粒を多く含む	良好	浅黄橙 10YR8/4	にぶい黄橙 10YR7/4	黄橙 10YR8/6	台部1/5		135	
58	SB13	03	壺D2	(14.0)			調整不明	調整不明	密	良好	黄橙 10YR8/6	黄橙 10YR8/6	黄橙 10YR8/6	口縁部1/6	口縁端部刻み目、外面横線5条、SK1出土	135	35
59	SB14	01	甕平底			(5.8)	指オサエ	調整不明	密	良好	にぶい橙 7.5YR7/4	橙 7.5YR7/6	にぶい橙 7.5YR6/4	底部1/4		135	
60	SB15	02	器台	(15.2)			口縁部工具によるナデ	口縁部工具によるナデ	密	良好	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	口縁部1/12		135	34
61	SB16	01	高坏C	(21.3)			ミガキ	ミガキ	密	良好	黄橙 10YR8/6	明黄褐 10YR7/6	暗灰 N3/0	口縁部1/12		136	
62	SB16	02	高坏F脚部				ミガキ	調整不明	密	良好	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	脚部3/5	2孔2組4穿孔、脚部内面絞り込み痕	136	34
63	SB16	01	高坏C基部				ミガキ	ケズリ、指ナデ	密	良好	浅黄橙 10YR8/4	にぶい黄橙 10YR7/4	暗灰 N3/0	基部2/3	2孔3組6穿孔、脚部内面絞り込み痕	136	
64	SB16	01	器台B	(18.4)			調整不明	調整不明	密	良好	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	受け部1/12		136	
65	SB16	01	高坏又は器台脚部			(9.4)	ミガキ	ハケ	密	良好	にぶい橙 7.5YR6/4	にぶい橙 7.5YR6/4	褐灰 10YR4/1	根部1/6	透かし孔有り	136	
66	SB16	01	高坏又は器台脚部			(9.8)	調整不明	調整不明	密	良好	明黄褐 10YR7/6	明黄褐 10YR7/6	にぶい黄橙 10YR7/4	根部1/4		136	
67	SB16	01	鉢				ミガキ	調整不明	密	良好	にぶい橙 7.5YR6/4	橙 7.5YR6/6	橙 7.5YR7/6	体部片	頸部外面横線7条以上と列点文	136	34
68	SB16	01	鉢A	(14.5)			柳条痕後体部下半ミガキ	口縁部ナデ、体部指ナデ、ハケ	密	良好	橙 7.5YR6/6	橙 7.5YR6/6	橙 7.5YR6/6	口縁部1/6	口縁端部刻み目及び外面列点文、頸部横線11条と柳掻き列点文	136	24
69	SB16	01	甕D	(17.6)			口縁部ハケ後ナデ、頸部板ケズリ、体部ハケ	ハケ後ナデ	密	良好	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄橙 10YR7/4	褐灰 10YR6/1	口縁部5/6、体部1/6	外面煤付着	136	24
70	SB16	02	甕C	(17.2)			調整不明	口縁部横ナデ	やや粗、2mm以下の砂粒を多く含む	良好	灰白 10YR8/2	灰白 10YR8/2	褐灰 10YR6/1	口縁部1/3		136	34
71	SB16	01	甕D	(18.8)			調整不明	調整不明	密	良好	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	灰 N4/0	口縁部1/12		136	34
72	SB16	01	甕D	(17.7)			調整不明	調整不明	密	良好	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	灰 N4/0	口縁部1/12		136	34
73	SB16	02	甕D	(20.4)			横ナデ、ハケ後ナデ	調整不明	密	良好	にぶい黄橙 10YR5/3	明黄褐 10YR7/6	灰黄褐 10YR6/2	口縁部1/12	外面煤付着	136	34
74	SB16	01	甕D	(16.1)			調整不明	ハケ	密	良好	にぶい褐 7.5YR5/3	にぶい橙 7.5YR6/4	橙 7.5YR7/6	口縁部1/12	頸部横線1条以上、外面煤付着	136	
75	SB16	01	甕D	(8.9)			板ケズリ後指オサエ、指ナデ	板ケズリ	やや粗、3mm以下の砂粒を多く含む	良好	橙 5YR7/6	橙 5YR7/6	橙 7.5YR7/6	口縁部1/6		136	35
76	SB16	02	甕平底			(5.2)	指ナデ	調整不明	やや粗、3mm以下の砂粒を多く含む	良好	橙 7.5YR6/6	橙 7.5YR6/6	橙 7.5YR6/6	底部1/4		136	35
77	SB16	02	甕F台部				ハケ	調整不明	密	良好	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄褐 10YR5/3	にぶい黄橙 10YR7/3	台基部1/3		136	
78	SB16	02	甕台部			(7.4)	調整不明	調整不明	やや粗、3mm以下の砂粒を少量含む	良好	橙 7.5YR6/6	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	台部1/4		136	
79	SB16	01	甕台部			(7.7)	調整不明	指オサエ	やや粗、2mm以下の砂粒を少量含む	良好	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	台部1/4		136	
80	SB16	01	甕台部			(6.0)	横ナデ	横ナデ	密	良好	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	台部1/4		136	35
81	SB16	01	甕台部			(5.7)	指オサエ	指ナデ	密	良好	灰褐 7.5YR5/2	灰褐 7.5YR5/2	褐灰 7.5YR5/1	台部1/4		136	35
82	SB16	02	壺B1	(16.4)			工具によるナデ	調整不明	やや粗、3mm以下の砂粒を少量含む	良好	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR6/4	暗灰 N3/0	口縁部1/12	口縁端部外面擬回線3条	136	35
83	SB16	02	壺B1	(16.3)			調整不明	調整不明	密	良好	褐灰 10YR4/1	にぶい黄褐 10YR5/3	にぶい黄褐 10YR4/3	口縁部1/12	口縁部外面擬回線4条	136	35
84	SB16	01	壺B1	(15.0)			調整不明	ミガキ	密	良好	灰白 2.5Y8/2	淡黄 2.5Y8/3	淡黄 2.5Y8/3	口縁部1/4	口縁端部外面擬回線2条	136	35
85	SB16	02	壺B1				ミガキ	指ナデ、ハケ	やや粗、5mm以下の砂粒を少量含む	良好	にぶい黄橙 10YR6/4	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	体部片	頸部横線4条2段と列点文3段、体部線刻有り、外面煤付着	136	24
86	SB16	02	壺D2	(12.4)			ミガキ	ミガキ	密	良好	浅黄橙 10YR8/3	浅黄橙 10YR8/3	浅黄橙 10YR8/2	口縁部1/6	口縁端部外面横線3条	136	35
87	SB16	02	壺B				調整不明	指ナデ	密	良好	にぶい橙 7.5YR6/4	褐 7.5YR4/3	にぶい橙 7.5YR6/4	体部片	横線2段以上と不連続の波状文	136	35

遺物番号	出土地点	層位	器種	法量 口径	法量 器高	法量 底径	調整 外面	調整 内面	胎土	焼成	色調 外面	色調 内面	色調 断面	残存状態	備考	挿図No.	図版No.
88	SB16	02	壺B				ミガキ	板ケズリ後指ナデ	密	良好	明赤褐 5YR5/6	灰褐 7.5YR4/2	灰褐 7.5YR4/2	体部片	横線2段以上と孤帯文及び列点文	136	35
89	SB16	02	壺B				ミガキ	指ナデ	密	良好	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	灰 N4/0	体部片	横線5条と列点文2段	136	35
90	SB16	01	壺D			3.1	調整不明	板ケズリ	やや粗、2mm以下の砂粒を少量含む	良好	明黄褐 10YR7/6	褐灰 10YR4/1	褐灰 10YR6/1	底部完存	底部穿孔有り	136	35
91	SB18	01	高坏又は器台脚部			(16.6)	ミガキ	ハケ	密	良好	浅黄橙 10YR8/4	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR6/3	脚部1/4		137	
92	SB18	01	甕平底			(5.4)	調整不明	調整不明	密	良好	にぶい橙 5YR7/4	黄灰 2.5YR6/1	浅黄橙 7.5YR8/4	底部1/2		137	
93	SB18	01	甕台部			(7.4)	指オサエ	調整不明	密	良好	橙 5YR6/6	橙 5YR6/6	赤橙 10R6/8	台部1/4	外面煤付着	137	
94	SB19	01	鉢B	(15.6)			ケズリ	ケズリ	やや粗、2mm以下の砂粒を多く含む	良好	灰白 2.5Y7/1	灰 N5/0	灰 N5/0	口縁部1/12		137	
95	SB19	01	高坏C基部				ミガキ	ケズリ	密	良好	橙 7.5YR7/6	明黄褐 10YR7/6	明黄褐 10YR7/6	基部全周	(2孔2組4穿孔)、P01出土	137	35
96	SB20	02	甕D	(15.5)			指オサエ	ケズリ後指ナデ	やや粗、5mm以下の砂粒を多く含む	良好	にぶい黄褐 10YR5/3	明黄褐 10YR7/6	明黄褐 10YR7/6	口縁部1/3、体部1/4	外面煤付着	137	25
97	SB23	02	鉢				調整不明	ケズリ	密	良好	橙 7.5YR6/6	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	体部1/8	頸部横線6条と列点文	138	
98	SB23	03	鉢				調整不明	調整不明	密	良好	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	体部片	横線4条以上と列点文	138	
99	SB23	01	甕D	(20.4)			板ケズリ	板ケズリ	密	良好	にぶい褐 7.5YR5/3	灰褐 7.5YR4/2	黒褐 7.5YR3/1	口縁部1/12		138	35
100	SB23	02	甕D	(20.0)			ケズリ後指ナデ	ケズリ	密	良好	浅黄橙 10YR8/4	にぶい橙 7.5YR7/4	浅黄橙 10YR8/4	口縁部1/12		138	
101	SB23	02	甕D	(17.0)			調整不明	調整不明	密	良好	橙 5YR7/6	橙 5YR7/8	褐灰 5YR4/1	口縁部1/12		138	
102	SB23	03	甕C	(14.1)			ミガキ、口縁部横ナデ	板ケズリ、口縁部横ナデ	密	良好	にぶい橙 7.5YR6/4	にぶい橙 7.5YR6/4	にぶい橙 7.5YR6/4	口縁部1/8	頸部横線1条以上	138	35
110	SB23	02	壺A底部			(7.4)	ケズリ	調整不明	密	良好	褐灰 10YR4/1	にぶい黄橙 10YR6/4	褐灰 10YR4/1	底部1/4		138	
103	SB23	02	甕平底			(6.4)	板ケズリ	調整不明	やや粗、5mm以下の砂粒を少量含む	良好	にぶい黄橙 10YR6/3	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄橙 10YR5/3	底部1/4		138	
104	SB23	02	甕平底			7.6	ハケ	板ケズリ	密	良好	明赤褐 5YR5/6	明赤褐 5YR5/6	灰褐 5YR4/2	台部完存		138	
105	SB23	03	甕台部			(6.6)	台基部指オサエ	板ケズリ	密	良好	橙 2.5YR7/6	橙 2.5YR7/6	にぶい橙 5YR6/3	台部1/4		138	25
106	SB23	02	壺台部	(12.6)			ミガキ	調整不明	密	良好	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	明黄褐 10YR7/6	口縁部1/12		138	35
107	SB23	02	壺B1	(19.6)			調整不明	調整不明	密	良好	にぶい橙 7.5YR7/4	浅黄橙 10YR8/4	にぶい橙 7.5YR7/4	口縁部1/12	口縁部内面羽状文	138	
108	SB23	03	壺A2			(5.8)	ミガキ	指ナデ	密	良好	橙 7.5YR6/6	褐灰 7.5YR4/1	褐灰 7.5YR4/1	底部1/4	外面赤彩、口縁部内面羽状文、外面縦回線	138	
109	SB23	02	壺B1	(15.0)			調整不明	ミガキ	やや粗、3mm以下の砂粒を少量含む	良好	橙 7.5YR6/8	橙 7.5YR6/6	黒褐 7.5YR3/1	口縁部1/3		138	
111	SB26	02	高坏C	(21.0)			ミガキ	調整不明	密	良好	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR6/3	褐灰 10YR5/1	口縁部1/12	口縁強部外面横線5条	138	
112	SB26	03	鉢C	(14.5)			ミガキ	ミガキ、指ナデ	密	良好	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	橙 7.6YR7/6	口縁部～体部1/6、底部完存	口縁強部外面横線3条	138	25
113	SB26	03	甕D	(15.6)			ハケ	ハケ	密	良好	灰黄褐 10YR6/2	にぶい黄橙 10YR6/4	褐灰 10YR5/1	口縁部1/12		138	
114	SB26	03	甕D	(14.0)			調整不明	ハケ、ミガキ	密	良好	灰白 2.5YR7/1	灰白 2.5YR7/1	灰白 2.5YR6/1	口縁部1/6		138	
115	SB26	02	甕G1				調整不明	調整不明	やや粗、2mm以下の砂粒を少量含む	良好	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	口縁部片	口縁部横線5条	138	
116	SB26	02	甕				調整不明	調整不明	密	良好	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/3	体部片	外面横線10条以上と列点文	138	
117	SB26	03	ミニチュア土器			(2.1)	指オサエ	指オサエ	密	良好	灰白 7.5YR8/1	灰白 7.5YR8/1	灰 7.5YR5/1	台部2/3	甕台部ミニチュア土器	138	35
118	SB26	02	壺B	(5.6)			指ナデ	指ナデ	密	良好	明黄褐 10YR7/6	褐灰 10YR6/1	褐灰 10YR6/1	底部1/4		138	
119	SB27	02	甕台部			(7.6)	指オサエ	調整不明	やや粗、5mm以下の砂粒を少量含む	良好	橙 2.5YR7/6	橙 2.5YR7/6	橙 2.5YR7/6	台部1/4		139	
120	SB28	02	甕G1	(15.3)			調整不明	板ケズリ	やや粗、4mm以下の砂粒を多く含む	良好	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	褐灰 10YR5/1	口縁部1/6		139	35
121	SB29	01	鉢C	(13.6)			調整不明	調整不明	密	良好	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	褐灰 10YR6/1	口縁部1/12	口縁強部外面横線2条	139	
122	SB30	01	高坏C				ミガキ	調整不明	密	良好	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	口縁部片	口縁強部外面横線3条	139	
123	SB30	01	甕				調整不明	調整不明	やや粗、2mm以下の砂粒を少量含む	良好	浅黄橙 10YR8/4	にぶい黄橙 10YR7/4	浅黄橙 10YR8/4	体部片	外面横線9条以上と列点文	139	
124	SB31	02	器台B	(18.1)			調整不明	ミガキ	密	良好	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	口縁部1/12		139	
125	SB31	02	器台B	(11.8)			ミガキ	ミガキ	密	良好	浅黄橙 10YR8/3	浅黄橙 10YR8/3	浅黄橙 10YR8/3	口縁部1/12		139	
126	SB31	02	壺B				調整不明	調整不明	密	良好	黄橙 10YR8/6	にぶい黄橙 10YR6/4	にぶい黄橙 10YR7/4	体部片	外面横線(7条以上)2段と列点文	139	35
127	SB31	02	甕平底			(4.6)	調整不明	調整不明	密	良好	浅黄橙 7.5YR8/6	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	底部1/4		139	35
128	SB31	02	壺底部			(4.2)	ケズリ	ケズリ	密	良好	橙 7.5YR7/6	黄灰 2.5Y5/1	にぶい黄橙 10YR7/4	底部1/2		139	35
129	SB31	02	壺底部			(6.0)	指ナデ	調整不明	密	良好	明黄褐 7.5YR7/6	にぶい黄橙 10YR7/4	褐灰 10YR5/1	底部1/4		139	
130	SB32	03	甕台部			(8.4)	調整不明	台部指ナデ	密	良好	明赤褐 2.5YR5/6	明赤褐 5YR5/6	明赤褐 5YR5/6	台部2/3		139	25
131	SB34	01	高坏C				ミガキ	ミガキ	密	良好	橙 5YR6/6	橙 5YR6/6	にぶい橙 7.5YR7/4	坏部1/8		139	
132	SB34	03	甕				ハケ	ハケ後指ナデ	やや粗、4mm以下の砂粒を少量含む	良好	明黄褐 10YR7/6	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	体部1/12	頸部外面横線7条と列点文	139	35
133	SB35	03	高坏C2	(23.2)			ミガキ	ミガキ	密	良好	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	褐灰 10YR4/1	坏部1/4	口縁強部内面横線4条	139	25
134	SB35	03	高坏C	(20.8)			ミガキ	ミガキ	密	良好	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR6/4	にぶい黄橙 10YR6/4	坏部1/6		139	35

遺物番号	出土地点	層位	器種	法量 口径	法量 器高	法量 底径	調整 外面	調整 内面	胎土	焼成	色調 外面	色調 内面	色調 断面	残存状態	備考	挿図No.	図版No.
135	SB33	03	高杯脚部				ミガキ	板ケズリ後指ナデ	密	良好	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	基部1/2	（透かし3方向）	139	30
136	SB33	03	高杯脚			(8.2)	ミガキ	ケズリ	密	良好	にぶい黄橙 10YR7/4	明黄褐 10YR7/6	にぶい黄橙 10YR7/4	杯部下半1/3、脚部2/3	1孔3穿孔	139	30
137	SB33	03	器台脚	(18.4)			調整不明	調整不明	密	良好	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	橙 10YR7/6	受け部1/6		139	30
138	SB33	03	器台脚	(20.1)	16.3	11.9	ミガキ	指頭痕ナデ	やや粗、3mm以下の砂粒を多く含む	良好	灰白 2.5YR7/1	灰白 2.5YR7/1	灰白 2.5YR7/1	受け部2/3、脚部1/2	1孔3穿孔、内外面煤付着	140	25
139	SB33	03	器台脚	11.4	8.9	8.9	ミガキ	ミガキ、指頭ナデ	密	良好	褐灰 10YR4/1	褐灰 10YR4/1	浅黄 2.5Y8/3	受け部3/4、脚部1/3正方形		140	25
140	SB33	03	器台脚	(16.4)			調整不明	調整不明	密	良好	浅黄橙 10YR8/3	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	口縁部1/12		140	
141	SB33	03	器台脚基部				ミガキ	指ナデ、板ケズリ	密	良好	にぶい橙 7.5YR7/4	橙 7.5YR7/6	褐灰 7.5YR4/1	基部1/3	（透かし3方向）	140	30
142	SB33	02	高杯又は器台			(15.0)	ミガキ	指ナデ	密	良好	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	脚部2/3	1孔3穿孔	140	25
143	SB33	01	高杯又は器台			(13.2)	ミガキ	指ナデ、ケズリ	密	良好	橙 5YR6/6	橙 5YR6/6	橙 5YR6/6	脚部2/3	1孔3穿孔	140	25
144	SB33	03	高杯又は器台			(15.0)	ミガキ	指ナデ	密	良好	橙 7.5YR7/6	にぶい橙 7.5YR7/4	橙 2.5YR7/6	脚部1/4		140	
145	SB33	02	高杯又は器台			(16.4)	ミガキ	ハケ	密	良好	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	脚部1/4		140	
146	SB33	03	高杯又は器台			(15.5)	ミガキ	調整不明	密	良好	橙 10YR7/6	橙 10YR7/6	にぶい黄橙 10YR7/3	脚部1/4		140	
147	SB33	03	鉢B	(17.3)	(10.3)	2.5	ハケ、ハケ後ナデ	指オサエ、ケズリ、ハケ→ハケ	密	良好	褐灰 7.5YR5/2	にぶい黄橙 10YR7/2	にぶい黄橙 10YR7/2	口縁部～体部1/6、底部完存	口縁部～体部内外面煤付着	140	26
148	SB33	03	鉢C	16.8	11.9	2.4	ハケ	ケズリ	密	良好	灰白 10YR8/2	灰白 10YR8/2	にぶい黄橙 10YR7/3	口縁部～体部1/12ほぼ完形、底部完存	口縁部内外面煤付着	140	26
149	SB33	03	鉢C	(23.0)			ミガキ	ミガキ	密	良好	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4	褐灰 7.5YR6/2	口縁部1/8	口縁部外面横線4条と斜行文、外面煤付着	140	31
150	SB33	03	鉢C	(10.0)			横ナデ、ミガキ	横ナデ、指ナデ	密	良好	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	口縁部1/8		140	31
151	SB33	03	鉢D				ミガキ	調整不明	密	良好	暗灰 N3/0	黒 N2/0	暗灰 N3/0	口縁部3/4	口縁部外面刷み目	140	
152	SB33	03	鉢				ミガキ	指ナデ	密	良好	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	体部1/6	頸部外面横線4条と斜行文	140	
153	SB33	01	鉢底部			(8.0)	ミガキ	調整不明	密	良好	にぶい黄橙 10YR6/4	にぶい黄橙 10YR7/4	褐灰 10YR4/1	底部1/4		140	
154	SB33	03	甕D	(15.4)			指ナデ	指ナデ	密	良好	にぶい黄橙 10YR7/2	灰白 10YR8/2	灰白 10YR8/2	口縁部～体部1/7	口縁部外面刷み目、頸部外面列点文	141	31
155	SB33	03	甕D	(21.0)			ハケ	ハケ、板ケズリ	やや粗、4mm以下の砂粒を多く含む	良好	浅黄橙 10YR8/4	黄橙 10YR8/6	黄橙 10YR8/6	口縁部1/6	外面煤付着	141	31
156	SB33	03	甕D	(15.0)			ハケ	ハケ後指ナデ	密	良好	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄橙 10YR7/3	口縁部～体部1/4	外面煤付着、YO8凹土	141	29
157	SB33	03	甕D	(15.0)			口縁部ハケ	指ナデ	やや粗、5mm以下の砂粒を多く含む	良好	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 7.5YR8/4	黄橙 10YR8/6	口縁部1/6	頸部外面横線1条、外面煤付着	141	29
158	SB33	03	甕D	(17.4)			ケズリ	ミガキ	密	良好	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	口縁部1/6	口縁部外面刷み目	141	31
159	SB33	03	甕D	(13.0)			指オサエ	板ケズリ、棒状工具によるナデ	密	良好	浅黄橙 10YR8/3	浅黄橙 10YR8/3	灰白 10YR7/4	口縁部1/12	外面煤付着	141	
160	SB33	03	甕				ハケ	指ナデ、ハケ後指ナデ	やや粗、3mm以下の砂粒を多く含む	良好	橙 7.5YR7/6	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	体部1/5	頸部外面横線8条と斜行文	141	31
161	SB33	03	甕平底			(4.0)	ケズリ	ケズリ	やや粗、3mm以下の砂粒を少量含む	良好	にぶい黄橙 10YR7/4	黄橙 10YR8/6	黄橙 10YR8/6	底部1/4		141	29
162	SB33	03	甕平底			(7.4)	ハケ	指ナデ	密	良好	橙 5YR6/6	にぶい橙 7.5YR7/3	にぶい橙 5YR6/4	底部1/4	内面煤付着	141	30
163	SB33	03	壺B1	(24.0)			調整不明	調整不明	密	良好	黄橙 7.5YR7/8	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	口縁部1/6	口縁部内面沿状文	141	30
164	SB33	03	壺B1	(15.4)			調整不明	調整不明	密	良好	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄橙 10YR7/3	口縁部1/12		141	30
165	SB33	01	壺B1	(14.2)			調整不明	調整不明	密	良好	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	口縁部1/6		141	30
166	SB33	01	壺B				調整不明	調整不明	密	良好	橙 5YR6/6	褐灰 7.5YR4/1	褐灰 7.5YR4/1	体部片	外面横線9条以上と段とで区切った竹管文及び1列の竹管文	141	31
167	SB33	03	壺E2	(16.6)			ミガキ	ミガキ	密	良好	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	口縁部1/12	口縁部内面縦位横と横線刷毛目文、口縁部棒状浮文3本1組4方向、上面及び内面赤彩	142	29
168	SB33	03	壺B				調整不明	調整不明	密	やや良	橙 7.5YR7/6	灰 N5/0	橙 7.5YR7/6	体部片	横線2段、波状文	142	30
169	SB33	02	壺A				指ナデ	指ナデ	密	良好	橙 7.5YR7/6	にぶい黄 2.5Y6/3	にぶい黄橙 10YR7/4	体部1/6	頸部外面横線14条と横線斜行文及び列点文、外面赤彩	142	30
170	SB33	03	壺C2	(6.8)			ミガキ	調整不明	やや粗、3mm以下の砂粒を多く含む	良好	浅黄 2.5Y8/3	浅黄 2.5Y8/3	浅黄 2.5Y8/3	口縁部1/12	口縁部外面横線4条	142	29
171	SB33	01	壺B底部			(7.0)	調整不明	調整不明	密	良好	灰 N6/0	灰 N4/0	灰 N6/0	底部1/4		142	
172	SB33	04	壺B底部			(4.4)	ミガキ	調整不明	密	良好	黄灰 2.5Y5/1	暗灰黄 2.5Y5/2	暗灰黄 2.5Y5/2	底部1/4		142	30
173	SB33	03	壺D底部			(3.7)	調整不明	調整不明	密	良好	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	底部1/4		142	
174	SB37	02	鉢B	(20.7)			ミガキ	ハケ	密	良好	明黄褐 10YR7/6	にぶい黄橙 10YR6/4	明黄褐 10YR6/6	口縁部1/6	口縁部外面横線1条	142	26
175	SB37	01	鉢B	(13.6)			調整不明	口縁部面上具によるナデ、横ナデ	やや粗、1mm以下の砂粒を少量含む	良好	明黄褐 10YR7/6	明黄褐 10YR7/6	明黄褐 10YR7/6	口縁部1/12	口縁部外面列点文	142	26
176	SB37	01	甕				調整不明	調整不明	密	良好	にぶい黄橙 10YR6/4	にぶい黄橙 10YR7/4	灰黄褐 10YR5/2	体部片	外面横線13条以上と列点文	142	30
177	SB37	02	甕平底			3.5	指ナデ	指ナデ	密	良好	にぶい黄橙 10YR7/4	明黄褐 10YR7/6	にぶい黄橙 10YR7/4	底部完存		142	30
178	SB37	01	甕平底			(6.0)	指ナデ	指ナデ	密	良好	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/2	褐灰 10YR6/1	底部1/4		142	30

遺物番号	出土地点	層位	器種	法量 口径	法量 器高	法量 底径	調整 外面	調整 内面	胎土	焼成	色調 外面	色調 内面	色調 断面	残存状態	備考	挿図No.	図版No.
179	SB37	02	甕平底			4.0	調整不明	調整不明	やや粗、4mm以下の砂粒を多く含む	良好	灰白 2.5Y8/2	灰白 2.5Y8/2	灰白 2.5Y8/2	底部完存		142	26
180	SB37	02	甕台部			(7.2)	板ケズリ	指ナデ	密	良好	浅黄橙 7.5YR8/6	にぶい黄橙 10YR7/3	黄橙 7.5YR8/8	台部2/3		142	26
181	SB37	02	甕台部			(7.4)	調整不明	調整不明	やや粗、2mm以下の砂粒を多く含む	良好	灰白 10YR8/2	浅黄橙 10YR8/3	灰白 10YR8/2	台部3/7		142	
182	SB37	02	脚台付き皿			6.7	ミガキ	台部ミガキ	密	良好	にぶい黄橙 10YR7/4	橙 7.5YR6/6	橙 7.5YR7/6	台部完存		142	26
183	SB38	03	高杯C	(20.4)			ミガキ	調整不明	密	良好	明黄褐 10YR7/6	明黄褐 10YR7/6	明黄褐 10YR7/6	杯部1/3		142	27
184	SB38	03	高杯F	(14.6)			ミガキ	調整不明	密	良好	橙 5YR6/6	橙 7.5YR6/6	橙 7.5YR7/6	杯部1/4	口縁部外面横線11条2段と列点文2段	142	26
185	SB38	03	甕B	(14.8)			調整不明	調整不明	密	良好	にぶい褐 7.5YR6/3	にぶい黄橙 10YR6/3	褐灰 10YR5/1	口縁部1/6		142	
186	SB40	02	高杯F				ミガキ	ミガキ	密	良好	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	杯部1/6		142	26
187	SB41	03	鉢B	(16.2)			調整不明	調整不明	密	良好	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	口縁部1/12	口縁部外面横線3条	142	
188	SB41	03	鉢C	(12.2)			ハケ	ハケ	密	良好	褐灰 10YR4/1	褐灰 10YR4/1	褐灰 10YR4/1	口縁部1/12、体部1/4		143	27
189	SB43	02	高杯C				ミガキ	ミガキ	密	良好	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	灰 N4/0	杯部底部1/4	内外面赤彩	143	30
190	SB43	02	甕B	(10.4)			ハケ	ミガキ	密	良好	にぶい赤褐 5YR5/4	にぶい橙 7.5YR6/4	にぶい橙 7.5YR6/4	口縁部1/12	口縁端部刻み目	143	
191	SB43	02	器台底部			(7.6)	板ナデ	指ナデ	やや粗、2mm以下の砂粒を多く含む	良好	橙 7.5YR6/6	黄灰 2.5Y4/1	黄灰 2.5Y4/1	底部1/5		143	30
192	SB43	02	甕平底			(4.4)	ケズリ	ケズリ	やや粗、2mm以下の砂粒を少量含む	良好	橙 7.5YR6/6	褐灰 10YR5/1	褐灰 10YR6/1	底部1/4		143	30
193	SB46	03	器台B	(14.4)			ミガキ	口縁端部ミガキ	密	良好	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	口縁部1/4		143	30
194	SB46	02	器台E	(16.3)			ミガキ	ミガキ	密	良好	橙 7.5YR6/6	橙 7.5YR6/6	にぶい橙 7.5YR7/4	受け部1/12		143	
195	SB46	01	高杯又は器台脚部			(26.1)	ミガキ、脚端部横ナデ	ハケ、ケズリ	密	良好	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	灰白 N8/0	脚部2/3	透かし孔有り	143	27
196	SB46	02	高杯又は器台脚部			(14.0)	調整不明	調整不明	密	良好	黄橙 10YR7/8	黄橙 10YR7/8	黄橙 10YR7/8	脚部1/4	透かし孔有り	143	
197	SB46		甕A				ハケ	調整不明	密	良好	浅黄橙 10YR8/3	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	口縁部片		143	30
198	SB46	02	鉢				ミガキ	調整不明	密	良好	橙 7.5YR7/6	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	体部1/6	頸部外面横線10条と列点文、外面煤付着	143	30
199	SB46	03	甕C	(21.0)			ハケ	調整不明	密	良好	橙 7.5YR7/6	明黄褐 10YR7/6	褐灰 10YR4/1	口縁部1/12	口縁部外面横線1条、頸部外面横線11条、外面煤付着	143	27
200	SB46	02	甕C	(18.4)		(22.8)	口縁部指ナデ、ハケ	指ナデ	密	良好	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR6/4	にぶい黄橙 10YR7/4	口縁部1/12、体部1/6	外面煤付着	143	27
201	SB46	02	甕平底			(7.1)	ケズリ	ケズリ	密	良好	橙 5YR6/6	にぶい褐 7.5YR5/3	褐灰 7.5YR4/1	底部1/4	内面煤付着	143	30
202	SB46	01	甕台部			(7.0)	ケズリ	指ナデ	やや粗、1mm以下の砂粒を多く含む	良好	にぶい黄橙 10YR7/3	灰黄褐 10YR6/2	にぶい黄橙 10YR7/3	台部1/2		143	30
203	SB46	02	鉢B				調整不明	指ナデ	密	良好	黄橙 10YR8/8	褐灰 10YR5/1	黄橙 10YR8/8	体部1/6	頸部外面横線1段と列点文2段	143	30
204	SB47	03	高杯脚部			(14.4)	ミガキ	指ナデ	密	良好	橙 5YR7/6	にぶい黄橙 10YR6/4	にぶい黄橙 10YR6/4	脚部1/2	1孔2組3穿孔、SK01出土	144	27
205	SB47	02	鉢C	(16.9)			ハケ	ハケ	密	良好	浅黄橙 10YR8/4	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	口縁部1/12	口縁端部外面横線1条と列点文、外面煤付着	144	28
206	SB47	03	鉢A	(11.9)			横ナデ	横ナデ	密	良好	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4	口縁部1/12	口縁端部外面刻目文	144	
207	SB47	02	甕D	(15.6)			指ナデ	口縁部横ナデ、指ナデ、ケズリ	やや粗、2mm以下の砂粒を少量含む	良好	にぶい黄橙 10YR6/3	褐灰 10YR6/1	にぶい黄橙 10YR7/3	口縁部1/12	外面煤付着	144	30
208	SB47	02	甕平底			5.6	調整不明	調整不明	密	良好	灰白 10YR8/1	灰白 10YR8/2	灰 N6/0	底部完存		144	30
209	SB47	02	甕C	(16.6)			調整不明	調整不明	やや粗、2mm以下の砂粒を少量含む	やや不良	灰白 10YR8/2	灰白 10YR8/2	灰白 10YR8/2	口縁部1/6	外面煤付着	144	30
210	SB47	03	器台E	(8.2)			調整不明	指ナデ	密	良好	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	口縁部2/3、体部1/8	口縁端部縦刻線2条、口縁部横線2条と列点文、頸部横線2段と列点文及び竹管列点文、外面赤彩	144	27
211	SB48	03	器台B脚部				ミガキ	指ナデ、ハケ	密	良好	浅黄橙 10YR8/3	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/3	基部2/3	透かし3方向	144	27
212	SB48	03	高杯F脚部				ミガキ	板ケズリ	密	良好	赤褐 10R4/4	にぶい黄橙 10YR6/4	にぶい黄橙 10YR6/4	基部全周	脚部内面絞り込み痕、外面赤彩	144	30
213	SB48	03	鉢B又はC			(17.4)	ミガキ	板ナデ	密	良好	浅黄橙 10YR8/4	にぶい黄橙 10YR7/4	褐灰 10YR5/1	体部1/6	頸部外面横線5条と列点文	144	30
214	SB48	02	甕D	(17.7)			指ナデ	板ナデ	密	良好	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	口縁部1/12	口縁端部刻み目	144	28
215	SB49	01	甕D	(17.9)			ハケ	ナデ	密	良好	灰褐 7.5YR4/2	橙 7.5YR6/6	橙 7.5YR6/6	口縁部1/12	外面煤付着	144	30
216	SB50	02	甕G2	(19.4)			調整不明	指ナデ	やや粗、5mm以下の砂粒を多く含む	良好	浅黄橙 10YR8/3	浅黄橙 10YR8/3	にぶい黄橙 10YR7/3	口縁部～体部1/8		144	27
217	SB50	02	甕G2	(20.0)			調整不明	調整不明	やや粗、2mm以下の砂粒を多く含む	良好	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	口縁部1/8		144	30
218	SB50	02	甕				調整不明	調整不明	密	良好	黄灰 2.5Y6/1	明黄褐 10YR7/6	明黄褐 10YR7/6	体部片	外面横線2条以上と列点文	144	30
219	SB50	02	甕平底			(5.2)	調整不明	調整不明	やや粗、1mm以下の砂粒を少量含む	良好	にぶい黄橙 10YR7/4	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	底部1/4		144	
220	SB50	02	器B1	(11.0)			調整不明	調整不明	やや粗、1mm以下の砂粒を少量含む	良好	橙 7.5YR7/6	明黄褐 10YR7/6	明黄褐 10YR7/6	口縁部1/12	口縁端部外面横線2条	144	30
221	SB50	02	器B				調整不明	調整不明	密	良好	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	体部片	外面高杯文2段、横線4条	144	

遺物番号	出土地点	層位	器種	法量 口径	器高	底径	調整 外面	内面	胎土	焼成	色調 外面	内面	断面	残存状態	備考	挿図No.	図版No.
222	SB50	02	壺B				調整不明	調整不明	やや粗、3mm以下の砂粒を少量含む	良好	黄橙 10YR8/6	暗灰 N3/0	暗灰 N3/0	体部片	外面不連続波状文と列点文	144	36
223	SB50	02	壺B底部			(5.0)	ミガキ	調整不明	密	良好	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR6/6	橙 7.5YR7/6	底部1/2		144	36
224	SB52	02	甕A2	(20.3)			櫛条痕	指ナデ	密	良好	明赤褐 5YR5/8	明赤褐 5YR5/8	黄褐 2.5YR5/3	口縁部1/6		145	28
225	SB53	02	高坏C	(23.9)			ミガキ	調整不明	密	良好	明黄褐 10YR7/6	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	口縁部1/12	口縁端部外面横線3条、外面煤付着	145	36
226	SB53	02	高坏C	(21.1)			ミガキ	横ナデ	密	良好	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR6/4	にぶい黄橙 10YR7/4	口縁部1/12	口縁端部外面横線6条	145	36
227	SB53	02	器台C	(17.5)			調整不明	調整不明	密	良好	浅黄橙 10YR8/3	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/3	口縁部1/12	口縁端部外面横線2条、外面煤付着	145	36
228	SB53	02	器台B	(18.0)			調整不明	調整不明	密	良好	黄橙 10YR8/6	にぶい黄橙 10YR7/4	灰黄褐 10YR6/2	受け部1/12		145	
229	SB53	02	鉢C	(14.6)			ハケ	調整不明	密	良好	灰黄褐 10YR5/2	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	口縁部1/12	口縁端部外面横線3条、外面煤付着	145	36
230	SB53	02	甕D	(15.3)			ハケ後ナデ	調整不明	密	良好	にぶい黄褐 10YR5/3	にぶい黄橙 10YR6/4	にぶい黄橙 10YR6/4	口縁部1/12	外面煤付着	145	36
231	SB53	02	甕D	(21.8)			ハケ	調整不明	やや粗、3mm以下の砂粒を少量含む	良好	にぶい褐 7.5YR5/3	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	口縁部1/2	外面煤付着	145	36
232	SB53	01	甕平底			(6.2)	板ナデ	調整不明	密	良好	にぶい黄橙 10YR6/3	褐灰 10YR5/1	灰 N5/0	底部1/4		145	36
233	SB53	02	甕平底			(4.7)	板ナデ	調整不明	密	良好	橙 7.5YR7/6	にぶい黄橙 10YR7/4	灰 N4/0	底部1/4		145	
234	SB53	01	甕平底			(2.9)	調整不明	調整不明	密	良好	灰黄褐 10YR5/2	褐灰 10YR5/1	褐灰 10YR5/1	底部1/4		145	
235	SB54	03	高坏C	(23.2)			ミガキ	ミガキ	密	良好	橙 7.5YR7/6	浅黄橙 7.5YR8/6	浅黄橙 7.5YR8/6	杯部2/3		145	28
236	SB54	03	高坏C				調整不明	調整不明	密	良好	橙 7.5YR6/6	橙 7.5YR6/6	橙 7.5YR7/6	口縁部片		145	28
237	SB54	03	高坏E又はF脚部			(7.9)	ミガキ	指ナデ	やや粗、2mm以下の砂粒を多く含む	良好	灰白 10YR8/2	灰白 10YR8/1	灰 N4/0	脚部1/4		145	28
238	SB54	03	器台B	(12.6)			ミガキ	ミガキ	密	良好	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	口縁部1/12		145	
239	SB54	03	器台	(15.2)			調整不明	調整不明	密	良好	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	口縁部1/12		145	
240	SB54	02	器台	(14.4)			調整不明	調整不明	密	良好	にぶい黄橙 10YR7/4	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	口縁部1/6		145	
241	SB54	02	器台B2脚部				調整不明	指ナデ	密	良好	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	基部全周、裾部1/5	1孔3組3穿孔	145	28
242	SB54	02	器台B2脚部				調整不明	指ナデ	密	良好	黄橙 10YR8/6	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	基部全周、裾部1/3	2孔2組4穿孔	145	28
243	SB54	03	鉢D	(15.4)		(8.6)	ケズリ、ハケ	横ナデ	やや粗、3mm以下の砂粒を多く含む	良好	浅黄橙 10YR8/3	浅黄橙 10YR8/3	浅黄橙 10YR8/3	口縁部1/12、体部1/3	頸部外面横線5条と列点文、底部穿孔有り、外面煤付着	145	28
244	SB54	03	鉢B	(21.0)			ミガキ	ミガキ	密	良好	橙 7.5YR7/6	にぶい黄橙 10YR6/4	橙 7.5YR7/6	口縁部1/12	口縁端部外面横線2条と列点文	146	36
245	SB54	03	鉢B	(20.3)			ミガキ	ハケ	密	良好	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	口縁部1/12	口縁端部外面列点文、外面煤付着	146	36
246	SB54	03	鉢B	(22.4)			ミガキ	調整不明	やや粗、3mm以下の砂粒を少量含む	良好	にぶい黄橙 10YR6/4	にぶい橙 7.5YR6/4	にぶい黄橙 10YR6/4	口縁部1/6	口縁端部外面横線2条、外面煤付着	146	36
247	SB54	03	鉢C	(19.8)			ミガキ、ハケ	ミガキ	密	良好	にぶい橙 7.5YR6/4	橙 7.5YR6/6	灰褐 7.5YR5/2	口縁部1/12	外面煤付着	146	
248	SB54	02	鉢C	(15.2)			ハケ	調整不明	やや粗、4mm以下の砂粒を少量含む	良好	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	口縁部1/12	口縁端部外面横線4条	146	
249	SB54	02	鉢C				ミガキ	横ナデ	密	良好	にぶい褐 7.5YR6/3	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	口縁部片	口縁端部外面横線2条・煤付着	146	
250	SB54	03	鉢				ミガキ	調整不明	密	良好	にぶい橙 7.5YR7/6	浅黄橙 10YR8/3	浅黄橙 10YR8/3	体部片	頸部外面横線6条と列点文	146	36
251	SB54	03	甕D	(17.5)			調整不明	調整不明	やや粗、2mm以下の砂粒を多く含む	良好	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/3	灰 N4/0	口縁部1/12		146	
252	SB54	02	甕A2	(15.8)			調整不明	櫛条痕	密	良好	橙 5YR7/8	橙 5YR6/8	にぶい褐 7.5YR5/4	口縁部1/6	口縁端部刻み目	146	36
253	SB54	03	鉢D	(14.5)			調整不明	調整不明	やや粗、3mm以下の砂粒を少量含む	良好	にぶい黄橙 10YR6/4	にぶい黄橙 10YR6/3	にぶい黄橙 10YR6/3	口縁部1/8	口縁端部刻み目、頸部横線7条と列点文、口縁部外面煤付着	146	36
254	SB54	03	甕D	(18.0)			ハケ後ナデ	ハケ	やや粗、5mm以下の砂粒を少量含む	良好	にぶい黄橙 10YR6/3	にぶい黄橙 10YR6/4	にぶい黄橙 10YR7/3	口縁部1/6	口縁端部外面横線3条と列点文、煤付着	146	36
255	SB54	03	甕D	(25.6)			ハケ	ハケ、ハケ後ナデ	やや粗、5mm以下の砂粒を多く含む	良好	橙 7.5YR6/6	橙 7.5YR6/6	橙 7.5YR6/6	口縁部1/4	口縁端部ハケ原体による刻み目	146	28
256	SB54	03	甕F	(18.2)			ハケ	工具による横ナデ、ハケ	密	良好	にぶい黄橙 10YR6/4	にぶい黄橙 10YR6/4	褐灰 10YR4/1	口縁部1/12	口縁部外面押し引き列点文	146	36
257	SB54	03	甕				ハケ	指ナデ、板ケズリ、ハケ	やや粗、5mm以下の砂粒を多く含む	良好	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄橙 10YR7/4	体部ほぼ全周	頸部外面横線7条と列点文、内外面煤付着	146	
258	SB54	03	甕平底			(4.8)	ケズリ	調整不明	やや粗、3mm以下の砂粒を多く含む	良好	橙 5YR6/6	にぶい橙 7.5YR7/4	灰 N4/0	底部1/4		146	
259	SB54	03	甕平底			(6.1)	板ナデ	指ナデ	密	良好	にぶい橙 7.5YR6/4	灰褐 7.5YR4/2	にぶい黄橙 10YR6/4	底部1/4	内面煤付着	146	36
260	SB54	02	甕平底			4.1	指ナデ	指ナデ	密	良好	暗灰 N3/0	褐灰 10YR4/1	灰 N4/0	底部完存		146	36
261	SB54	03	甕				調整不明	ハケ	密	良好	褐灰 10YR4/1	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄橙 10YR7/3	体部片	頸部外面横線6条と列点文	147	36
262	SB54	03	甕						密	良好	黄橙 10YR8/6	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	体部片	外面横線2条と列点文	147	36
263	SB54	03	甕				調整不明	調整不明	密	良好	にぶい黄橙 10YR6/3	にぶい橙 7.5YR6/4	にぶい橙 7.5YR6/4	体部片	外面横線4条以上と列点文	147	36

遺物番号	出土地点	層位	器種	法量 口径	器高	底径	調整 外面	内面	胎土	焼成	色調 外面	内面	断面	残存状態	備考	挿図No.	図版No.
264	SB54	02	壺				調整不明	調整不明	密	良好	橙 5YR6/6	橙 5YR6/6	褐灰 10YR4/1	体部片	外面横線6条以上と列点文	147	
265	SB54	03	壺				調整不明	調整不明	密	良好	にぶい黄褐 10YR5/3	にぶい褐 7.5YR5/4	にぶい黄褐 10YR5/3	体部片	頸部外面横線5条と列点文	147	
266	SB54	02	壺台部			(9.2)	指オサエ	調整不明	やや粗、2mm以下の砂粒を多く含む	良好	浅黄橙 10YR8/3	浅黄橙 10YR8/3	浅黄橙 10YR8/4	台部1/4		147	36
267	SB54	02	壺台部			(9.6)	ハケ	ハケ	やや粗、3mm以下の砂粒を少量含む	良好	灰黄褐 10YR5/2	灰黄褐 10YR5/2	灰 N4/0	台部1/4		147	36
268	SB54	02	壺台部			(9.5)	ハケ後指ナデ		やや粗、3mm以下の砂粒を少量含む	良好	浅黄橙 10YR8/3	浅黄橙 10YR8/3	灰 N4/0	台部1/4		147	
269	SB54	02	壺台部			(9.4)	指ナデ	ハケ	やや粗、2mm以下の砂粒を少量含む	良好	にぶい黄橙 10YR7/3	灰黄褐 10YR6/2	にぶい黄橙 10YR7/2	台部1/8		147	
270	SB54	03	壺A2	18.5		(7.0)	口縁部ハケ、ミガキ	口縁部ハケ	密	良好	浅黄橙 7.5YR8/6	浅黄橙 7.5YR8/6	浅黄橙 7.5YR8/6	口縁部全周、底部完存、体部欠損	口縁端部外面擬凹線2条、口縁部内面列点文2段と竹管列点文、頸部横線3段と列点文3段、口縁部内外面及び体部外面赤彩	147	29
271	SB54	03	壺A2	(20.3)			ミガキ、工具によるナデ	調整不明	密	良好	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	灰 5Y5/1	口縁部全周、1/6欠損	口縁端部外面擬凹線4条と円形浮文、口縁部内面羽状文2段、頸部竹管列点文、内外面赤彩	147	29
272	SB54	03	壺B1	(17.8)			ミガキ	ミガキ	密	良好	黄橙 7.5YR8/8	にぶい褐 7.5YR6/3	浅黄橙 7.5YR8/6	口縁部1/4	口縁端部外面擬凹線3条	147	37
273	SB54	03	壺C2				ミガキ	指ナデ	密	良好	浅黄橙 10YR8/4	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	口縁部1/3		147	36
274	SB54	02	壺A1	(16.8)			調整不明	調整不明	密	良好	にぶい黄橙 10YR7/3	浅黄橙 10YR8/3	灰 N4/0	口縁部1/12	口縁部内面赤彩	147	
275	SB54	03	壺A				調整不明	調整不明	密	良好	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	体部2/5	外面横線8条2段と列点文2段、外面赤彩	147	
276	SB54	02	壺B				調整不明	調整不明	密	良好	明黄褐 10YR7/6	にぶい黄橙 10YR7/3	灰黄褐 10YR5/2	体部片	外面横線2条以上と櫛描列点文、竹管列点文	148	
277	SB54	02	壺B				調整不明	調整不明	密	良好	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	体部片	外面横線8条2段以上と波状文	148	37
278	SB54	03	壺B			8.0	底部指ナデ	指ナデ	密	良好	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/3	浅黄橙 10YR8/3	底部完存		148	29
279	SB54	03	壺B			5.2	ミガキ	調整不明	やや粗、3mm以下の砂粒を少量含む	良好	にぶい橙 5YR6/4	橙 7.5YR7/6	にぶい黄橙 10YR7/4	底部完存		148	37
280	SB54	03	壺BC			18.5	ミガキ	ミガキ	密	良好	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR6/4	浅黄橙 10YR8/4	底部完存		148	36
281	SB54	03	壺B			(5.0)	ミガキ	調整不明	密	良好	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	底部1/4		148	37
282	SB54	02	壺A			(5.6)	指オサエ	調整不明	密	良好	にぶい赤褐 2.5YR4/4	にぶい黄褐 10YR5/3	にぶい黄褐 10YR5/3	底部1/4	外面赤彩	148	37
283	SB56	01	鉢C	(17.4)			調整不明	調整不明	密	良好	浅黄橙 10YR8/4	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	口縁部1/6		148	37
284	SB56	02	鉢底部			(2.4)	調整不明	調整不明	密	良好	浅黄橙 10YR8/4	黄灰 2.5Y5/1	黄灰 2.5Y5/1	底部1/4		148	
285	SB57	02	鉢A	(12.2)			調整不明	調整不明	やや粗、2mm以下の砂粒を多く含む	良好	浅黄橙 10YR8/3	灰白 10YR8/2	褐灰 10YR6/1	口縁部1/6		148	
286	SB57	02	壺C	(19.3)			調整不明	調整不明	密	良好	橙 7.5YR7/6	黄橙 10YR8/6	黄橙 10YR8/6	口縁部1/12		148	
287	SB57	03	壺B	(14.6)			ケズリ	横ナデ	密	良好	橙 7.5YR7/6	褐灰 7.5YR5/1	褐灰 7.5YR5/1	口縁部1/6	外面煤付着	148	37
288	SB57	03	壺F	(17.4)			口縁部工具によるナデ	口縁部工具によるナデ、頸部ハケ、指ナデ	やや粗、1mm以下の砂粒を多く含む	良好	浅黄橙 10YR8/3	浅黄橙 10YR8/3	暗灰 N3/0	口縁部1/6	口縁部外面押し引き列点文	148	37
289	SB57	03	壺か台基部				ハケ	指ナデ	やや粗、1mm以下の砂粒を多く含む	良好	にぶい黄橙 10YR5/3	灰黄褐 10YR4/2	暗灰 N3/0	台基部全周		148	
290	SB57	03	壺か基部				調整不明	指ナデ	粗、3mm以下の砂粒を多く含む	良好	淡黄 2.5Y8/3	淡黄 2.5Y8/3	淡黄 2.5Y8/3	台頸部全周		148	37
291	SB58	02	高坏か脚部				ミガキ	調整不明	密	良好	にぶい黄褐 10YR5/3	にぶい黄褐 10YR5/3	橙 7.5YR7/6	基部全周	2孔2組4穿孔	148	29
292	SB58	03	器台か基部				ミガキ	調整不明	密	良好	浅黄橙 10YR8/3	浅黄橙 7.5YR8/4	浅黄橙 10YR8/3	頸部全周	1孔3組3穿孔	148	29
293	SB58	01	鉢C	(18.4)			調整不明	調整不明	密	良好	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/3	浅黄橙 10YR8/4	口縁部1/12		149	37
294	SB58	01	鉢A	(12.6)			ミガキ、横ナデ	調整不明	密	良好	にぶい黄褐 10YR5/3	橙 7.5YR6/6	灰 N4/0	口縁部1/12	口縁端部外面横線4条	149	
295	SB58	03	鉢C	(16.1)			指ナデ	調整不明	密	良好	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	灰 N4/0	口縁部1/12	口縁端部外面列点文	148	
296	SB58	01	壺C	(21.0)			横ナデ	横ナデ	やや粗、3mm以下の砂粒を多く含む	良好	にぶい黄橙 10YR6/4	にぶい黄橙 10YR7/4	褐灰 10YR6/1	口縁部1/6	外面煤付着	148	37
297	SB58	01	壺D	(19.0)			調整不明	ハケ後指ナデ	やや粗、3mm以下の砂粒を多く含む	良好	浅黄橙 10YR8/3	浅黄橙 10YR8/3	浅黄橙 10YR8/3	口縁部1/12	外面煤付着	148	37
298	SB58	01	壺D	(13.2)		(17.1)	調整不明	調整不明	やや粗、4mm以下の砂粒を多く含む	良好	橙 2.5YR6/6	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	口縁部1/6	外面煤付着	149	37
299	SB58	02	壺F	(17.6)			ハケ	ハケ、工具によるナデ	やや粗、1mm以下の砂粒を少量含む	良好	にぶい黄橙 10YR5/3	にぶい黄橙 10YR5/3	暗灰 N3/0	口縁部1/12	口縁部外面押し引き列点文	149	37
300	SB58	01	壺平底			(7.5)	板ナデ	調整不明	やや粗、2mm以下の砂粒を少量含む	良好	橙 7.5YR7/6	橙 5YR6/6	灰褐 7.5YR5/2	底部1/2		149	37
301	SB58	02	壺平底			(6.4)	指オサエ	調整不明	やや粗、2mm以下の砂粒を多く含む	良好	橙 5YR6/8	にぶい橙 7.5YR6/4	橙 7.5YR7/6	底部1/6		149	37
302	SB58	01	壺B底部			5.6	板ナデ	指ナデ	密	良好	にぶい黄橙 10YR7/4	黄橙 10YR8/6	褐灰 10YR6/1	底部完存	外面赤彩	149	
303	SB58	02	壺B底部			(10.2)	調整不明	調整不明	密	良好	橙 7.5YR6/6	明黄褐 10YR7/6	褐灰 10YR6/1	底部1/4		149	
304	SB58	02	壺B底部			4.3	調整不明	調整不明	粗、3mm以下の砂粒を多く含む	良好	橙 5YR7/6	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4	底部完存		149	37
305	SB59	02	高坏又は器台脚部			(13.3)	ミガキ	ケズリ	密	良好	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	脚部1/4		149	
306	SB59	02	壺D				ハケ	調整不明	密	良好	にぶい褐 7.5YR6/3	にぶい褐 7.5YR6/3	にぶい褐 7.5YR5/3	口縁部片		149	
307	SB60	02	高坏C	(23.6)			ミガキ	ミガキ	密	良好	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	坏部1/12		149	37

遺物番号	出土地点	層位	器種	法量 口径	法量 器高	法量 底径	調整 外面	調整 内面	胎土	焼成	色調 外面	色調 内面	色調 断面	残存状態	備考	時期 No.	図版 No.
308	SB60	02	鉢C	(21.2)			指ナデ	ケズリ、指圧痕	密	良好	にぶい橙 7.5YR7/4	橙 7.5YR7/6	暗灰 7.5YB6/1	口縁部1/12	開部外面横線6条	149	37
309	SB60	02	鉢C				調整不明	調整不明	密	良好	浅黄橙 7.5YR8/6	浅黄橙 7.5YR8/6	暗灰 7.5YB6/1	口縁部片	口縁部外面横線2条	149	37
310	SB60	02	鉢C	(14.6)			ハケ	ハケ後ナデ	密	良好	黄橙 10YR8/6	暗灰 10YR3/1	暗灰 10YR4/1	口縁部1/6		149	37
311	SB60	02	鉢D	(17.4)			ハケ	調整不明	やや粗、3mm以下の砂粒を多く含む	良好	にぶい黄橙 10YR6/3	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	口縁部1/6	口縁部部刻み目、外面煤付着	149	37
312	SB60	02	鉢				調整不明	調整不明	密	良好	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	体部片	外面横線10条以上と刻点文	149	
313	SB60	02	鉢平底			(5.4)	ミガキ	調整不明	やや粗、2mm以下の砂粒を多く含む	良好	浅黄橙 10YR8/4	にぶい黄橙 10YR7/2	暗灰 10YR6/1	底部1/4		149	37
314	SB60	02	鉢平底			(5.0)	板ケズリ	調整不明	やや粗、3mm以下の砂粒を多く含む	良好	にぶい橙 7.5YR6/4	にぶい黄橙 10YR6/4	にぶい黄橙 10YR6/4	底部1/4		149	
315	SB60	02	壺B1	(9.1)		3.0	指ナデ	指ナデ	粗、3mm以下の砂粒を少量含む	良好	橙 7.5YR7/6	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	口縁部～体部1/5、底部完存	開部外面横線3段と櫛描列点文3段	149	29
316	SB60	02	壺B1	(14.0)			指ナデ	調整不明	密	良好	黄橙 10YR8/6	黄橙 10YR8/6	浅黄橙 10YR8/4	口縁部3/12		149	7
317	SB60	02	壺B				調整不明	調整不明	密	良好	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/3	にぶい黄橙 10YR6/3	体部片	外面横線（6条以上）2段と櫛描列点文	150	37
318	SB60	02	壺A				調整不明	調整不明	密	良好	にぶい黄橙 10YR7/3	灰黄褐 10YR5/2	暗灰 N3/0	体部片	外面横線3条以上と竹管刻点文、外面煤付着	150	37
319	SB60	02	壺B底部			(4.2)	ケズリ	ケズリ	密	良好	明黄橙 10YR7/6	にぶい黄橙 10YR7/3	暗灰 10YR6/1	底部1/4		150	
320	SB61	03	高杯C				ミガキ	ミガキ	やや粗、1mm以下の砂粒を少量含む	良好	橙 7.5YR7/6	にぶい橙 7.5YR7/4	灰 N4/0	底部1/4		150	
321	SB61	03	器台B	(18.0)			ミガキ	調整不明	密	良好	浅黄橙 7.5YR8/6	にぶい橙 7.5YR7/4	黄橙 10YR8/6	受け部1/4		150	37
322	SB62	01	壺B			(3.7)	調整不明	調整不明	やや粗、1mm以下の砂粒を少量含む	良好	灰褐 7.5YR4/2	にぶい黄橙 10YR6/3	暗灰 N3/0	底部1/4		150	
323	SB63	02	高杯C	(25.5)			ミガキ	調整不明	密	良好	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	口縁部～体部1/12		150	
324	SB63	02	高杯脚部				調整不明	指ナデ	密	良好	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	基部全周	1孔3組3単孔	150	29
325	SB63	02	器台基部				調整不明	指ナデ	密	良好	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 7.5YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	基部全周	透かし3方向	150	29
326	SB63	02	高杯又は器台脚部			(16.6)	ミガキ	指オサエ	密	良好	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	脚部1/4		150	
327	SB63	02	高杯又は器台脚部			(12.6)	ミガキ	調整不明	密	良好	にぶい黄橙 10YR7/4	浅黄橙 10YR8/4	暗灰 10YR6/1	脚部1/4		150	
328	SB63	02	鉢C	(21.2)			ハケ後指オサエ	指ナデ	密	良好	暗灰 10YR4/1	にぶい黄橙 10YR6/3	暗灰 10YR5/1	口縁部1/2	口縁端部外面刻み目、外面煤付着、近江系	150	29
329	SB63	02	鉢D	(18.2)			ハケ	調整不明	やや粗、3mm以下の砂粒を多く含む	良好	橙 7.5YR7/6	にぶい橙 7.5YR6/4	にぶい橙 7.5YR6/4	口縁部1/12		150	29
330	SB63	03	鉢B	(13.8)			調整不明	調整不明	やや粗、3mm以下の砂粒を多く含む	良好	にぶい黄橙 10YR7/3	灰白 2.5YR8/2	灰 N5/0	口縁部1/4	近江系	150	30
331	SB63	02	鉢平底			(8.3)	板ナデ	調整不明	やや粗、2mm以下の砂粒を少量含む	良好	にぶい黄橙 10YR6/3	暗灰 10YR4/1	暗灰 10YR4/1	底部1/3		150	30
332	SB63	02	鉢平底			6.0	指ナデ	調整不明	やや粗、3mm以下の砂粒を多く含む	良好	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	灰白 10YR7/1	底部1/2		150	30
333	SB63	02	壺C2	(7.8)			ミガキ	調整不明	密	良好	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	口縁部5/12		150	37
334	SB63	02	壺C3底部			(3.2)	ミガキ	調整不明	密	良好	にぶい黄橙 10YR6/4	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	底部1/2	外面煤付着	150	37
335	SB64	03	器台B	(18.2)			調整不明	調整不明	密	良好	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	口縁部1/6		150	37
336	SB64	03	器台B	(18.4)			調整不明	ミガキ	密	良好	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	口縁部1/6		150	
337	SB64	03	器台脚部				ミガキ	指ナデ	密	良好	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	灰 N5/0	基部全周	透かし3方向	151	30
338	SB64	03	高杯又は器台脚部			(12.6)	ミガキ	指オサエ	密	良好	橙 7.5YR7/6	明黄橙 10YR7/6	明黄橙 10YR7/6	脚部1/4		151	
339	SB64	02	鉢D	(14.0)			指ナデ	調整不明	密	良好	にぶい橙 7.5YR6/4	橙 7.5YR7/6	暗灰 7.5YR3/1	口縁部1/12	SB61出土	151	37
340	SB64	03	鉢B	(18.4)			口縁端部工具によるナデ	調整不明	密	良好	にぶい黄橙 10YR6/3	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	口縁部1/12	口縁部外面刻点文・煤付着、開部外面横線2条以上	151	37
341	SB64	03	器台部			(10.4)	くびれ及び脚部指ナデ	指ナデ	密	良好	にぶい赤橙 10YR6/4	にぶい黄橙 10YR7/2	にぶい赤橙 10YR6/3	台部1/4		151	31
342	SB64	02	器台部			(7.2)	指ナデ	ケズリ	密	良好	浅黄橙 10YR8/3	浅黄橙 10YR8/4	灰白 10YR8/2	台部1/4		151	
343	SB64	03	壺B1	(16.5)			調整不明	調整不明	密	良好	にぶい橙 7.5YR7/4	橙 7.5YR7/6	にぶい橙 7.5YR7/4	口縁部1/6		151	37
344	SB64	03	壺B				調整不明	調整不明	密	良好	橙 5YR7/8	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	体部片	外面横線2段以上と櫛描列代文2段	151	37
345	SB64	03	壺B底部			6.2	底部ナデ	調整不明	粗、3mm以下の砂粒を多く含む	良好	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	暗灰 10YR3/1	底部完存		151	37
346	SB65	03	高杯脚部				ミガキ	指ナデ	密	良好	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	基部全周	透かし3方向	151	30
347	SB65	02	鉢D	(16.4)			指オサエ	調整不明	密	良好	浅黄 2.5Y8/3	浅黄 2.5Y8/4	浅黄 2.5Y8/3	口縁部1/6		151	37
348	SB65	02	鉢平底			(8.8)	ケズリ	ケズリ	やや粗、4mm以下の砂粒を多く含む	良好	赤橙 2.5YR6/6	灰白 10YR8/2	暗灰 10YR6/1	底部1/4		151	37
349	SB65	02	鉢平底			(5.8)	ケズリ	調整不明	やや粗、2mm以下の砂粒を多く含む	良好	にぶい黄橙 10YR7/4	黄橙 10YR8/6	浅黄橙 10YR8/4	底部1/4		151	
350	SB65	01	器台部			(6.2)	指オサエ	調整不明	やや粗、2mm以下の砂粒を多く含む	良好	橙 2.5YR6/8	橙 5YR7/8	橙 5YR7/6	台部1/4		151	
351	SB65	02	壺B1				調整不明	調整不明	密	良好	橙 7.5YR6/6	橙 7.5YR7/6	暗灰 7.5YR3/1	口縁部片	口縁端部外面横線1条	151	
352	SB66	01	高杯C				ミガキ	ミガキ	密	良好	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	杯部1/6		151	37
353	SB66	03	鉢A				横ナデ	ハケ	密	良好	明赤褐 5YR5/6	明赤褐 5YR5/6	暗灰 5YR4/1	体部片		151	37
354	SB66	02	器台部			(2.6)	指ナデ	ケズリ、指ナデ	やや粗、3mm以下の砂粒を多く含む	良好	橙 7.5YR7/6	灰褐 7.5YR4/2	灰褐 7.5YR4/2	台部1/4		151	32

遺物番号	出土地点	層位	器種	法量 口径	法量 器高	法量 底径	調整 外面	調整 内面	胎土	焼成	色調 外面	色調 内面	色調 断面	残存状態	備考	種図No.	図版No.
355	SB66	02	壺B				調整不明	ハケ	密	良好	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄橙 10YR6/4	褐灰 10YR5/1	体部片	外面横線2段と列点文2段	151	37
356	SB66	01	壺B底部			(5.0)	ケズリ	調整不明	密	良好	褐灰 10YR4/1	黒褐 10YR3/1	灰黄褐 10YR5/2	底部1/6		151	
357	SB67	02	甕D	(15.4)			調整不明	調整不明	やや粗、4mm以下の砂粒を多く含む	良好	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	口縁部1/12		151	
358	SB67	02	甕C	(18.2)			調整不明	調整不明	やや粗、3mm以下の砂粒を多く含む	良好	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	口縁部1/12		151	
359	SB67	02	甕				ハケ	ミガキ	密	良好	にぶい黄橙 10YR6/3	灰黄褐 10YR5/2	にぶい黄橙 10YR6/3	頸部1/6	頸部外面横線6条と列点文	151	37
360	SB67	02	甕平底			(5.0)	調整不明	調整不明	粗、2mm以下の砂粒を多く含む	良好	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄橙 10YR7/3	底部1/4		151	
361	SB67	01	甕平底			(4.0)	指オサエ	調整不明	やや粗、3mm以下の砂粒を多く含む	良好	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	底部1/4		151	37
362	SB67	02	壺B1				調整不明	指ナデ	密	良好	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	褐灰 7.5YR5/1	体部1/6	頸部外面横線と羽状文、SK01出土	151	
363	SB67	02	壺B底部			(6.0)	ケズリ後指ナデ	調整不明	やや粗、3mm以下の砂粒を多く含む	良好	にぶい黄橙 10YR7/4	明黄褐 10YR7/6	褐灰 10YR6/1	底部1/2	SK01出土	151	37
364	SB67	01	壺B底部			(4.8)	調整不明	ケズリ	密	良好	橙 2.5YR6/6	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	底部1/4		151	
365	SB68	03	器台基部				ミガキ	ケズリ	密	良好	橙 7.5YR6/6	橙 7.5YR6/6/	黄灰 2.5Y4/1	基部全周	透かし3方向	152	30
366	SB68	02	甕				調整不明	調整不明	密	良好	にぶい赤褐 2.5YR5/3	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	体部片	頸部外面横線9条と列点文	152	38
367	SB69	02	高坏又は器台脚部			(14.9)	ミガキ	横ナデ、ハケ後ナデ	密	良好	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	灰 N4/0	脚部1/4	透かし孔有り	152	38
368	SB69	02	鉢B	(21.5)			横ナデ	調整不明	密	良好	明黄橙 10YR7/6	明黄橙 10YR7/6	明黄橙 10YR7/6	口縁部1/12	口縁端部外面横線1条と列点文	152	38
369	SB69	02	甕D	(18.4)			調整不明	調整不明	密	良好	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4	口縁部1/12		152	
370	SB69	02	鉢A	(16.2)			横ナデ	調整不明	密	良好	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	口縁部1/12	外面煤付着	152	38
371	SB69	02	甕平底			(4.6)	ミガキ	ケズリ	密	良好	にぶい橙 7.5YR7/4	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	底部1/4	外面煤付着	152	38
372	SB69	02	甕平底			(4.4)	ミガキ	調整不明	密	良好	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄橙 10YR7/3	褐灰 10YR6/1	底部1/4		152	
373	SB70	03	甕D	(14.8)			指ナデ	調整不明	やや粗、3mm以下の砂粒を多く含む	良好	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	口縁部1/6		152	38
374	SB72	03	甕A1	(15.4)			櫛条痕	板ケズリ	密	良好	にぶい赤褐 5YR4/4	明赤褐 5YR5/8	にぶい橙 7.5YR6/4	口縁部1/12	口縁端部刻み目、口縁部内面櫛描列点文	152	38
375	SB72	F	甕台部			(6.4)	指ナデ	指ナデ	やや粗、3mm以下の砂粒を多く含む	良好	浅黄橙 7.5YR8/6	浅黄橙 10YR8/4	褐灰 10YR5/1	台部1/4		152	38
376	SB73	F	高坏C	(23.0)			ミガキ	ミガキ	密	良好	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR6/6	にぶい黄橙 10YR7/4	坏部1/12		152	38
377	SB73	01	高坏C	(23.4)			ミガキ	ミガキ	密	良好	にぶい黄橙 10YR6/3	にぶい黄橙 10YR6/4	にぶい黄橙 10YR7/2	口縁部1/6	口縁端部内面沈線4条	152	38
378	SB73	F	高坏C	(27.2)			ミガキ	ミガキ	密	良好	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄橙 10YR7/3	坏部1/6		152	30
379	SB73	F	高坏脚部				ミガキ	指ナデ	密	良好	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄橙 10YR7/3	灰 N4/0	基部1/6	(1孔3組3穿孔)	152	
380	SB73	01	器台B	(16.6)			調整不明	脚部ケズリ	密	良好	黄橙 10YR8/6	黄橙 10YR8/6	黄橙 10YR8/6	受け部1/4		152	38
381	SB73	02	器台B	(15.6)			調整不明	調整不明	密	良好	浅黄橙 10YR8/3	浅黄橙 10YR8/3	浅黄橙 10YR8/3	口縁部1/4	口縁部外面沈線4条	152	38
382	SB73	F	高坏又は器台脚部			(13.3)	ミガキ	指ナデ	密	良好	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	脚部1/4	透かし孔有り	152	
383	SB73	F	鉢C	(20.7)			ミガキ	横ナデ	密	良好	にぶい橙 7.5YR6/4	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	口縁部1/12	口縁端部外面横線3条と列点文、煤付着	153	38
384	SB73	01	鉢C	(16.6)			調整不明	調整不明	密	良好	灰白 2.5Y8/2	灰白 2.5Y8/1	灰白 2.5Y8/1	口縁部1/12		153	
385	SB73	F	鉢				ミガキ	調整不明	密	良好	にぶい橙 7.5YR6/4	にぶい橙 7.5YR6/4	にぶい橙 7.5YR6/4	体部片	外面横線7条と列点文	153	38
386	SB73	01	甕G2				調整不明	ハケ	密	良好	灰 N5/0	灰 N5/0	灰 N5/0	口縁部片	口縁端部外面横線5条	153	
387	SB73	01	甕平底			(4.9)	調整不明	調整不明	やや粗、2mm以下の砂粒を多く含む	良好	浅黄橙 10YR8/3	にぶい黄橙 10YR7/2	灰 N4/0	底部1/4		153	
388	SB73	01	甕平底			(6.7)	ハケ	指ナデ	やや粗、3mm以下の砂粒を多く含む	良好	にぶい橙 7.5YR6/4	にぶい橙 7.5YR6/4	にぶい橙 7.5YR7/4	底部1/4		153	30
389	SB73	01	壺B1	(22.0)			調整不明	調整不明	やや粗、3mm以下の砂粒を少量含む	良好	明赤褐 5YR5/8	橙 7.5YR6/8	橙 7.5YR6/6	口縁部1/3		153	30
390	SB73	01	壺A1	(18.2)			指ナデ	調整不明	密	良好	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	灰 N5/0	口縁部1/12	内外面赤彩	153	
391	SB73	01	壺D2	(10.8)		2.6	ケズリ、板ケズリ、頸部棒状工具によるナデ	板ケズリ、指ナデ	密	良好	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	口縁部～体部1/4、底部完存		153	30
392	SB73	01	壺脚部			(10.0)	ミガキ	ケズリ	密	良好	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄橙 10YR6/4	にぶい黄橙 10YR7/3	台部1/2	1孔3組3穿孔	153	30
393	SB74	F	壺B底部			6.6	指ナデ	板ケズリ	密	良好	浅黄橙 10YR8/4	褐灰 10YR5/1	浅黄橙 10YR8/4	底部完存		153	38
394	SB75	F	高坏脚部			(8.8)	ミガキ	ケズリ	密	良好	浅黄橙 10YR8/3	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄橙 10YR7/3	脚部1/4	2孔3組6穿孔	153	
395	SB75	F	高坏脚部			(13.8)	ミガキ	指ナデ、ケズリ	密	良好	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	浅黄橙 7.5YR8/6	脚部1/6	1孔3組3穿孔	153	30
396	SB75	F	高坏脚部				ミガキ	ケズリ	密	良好	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	基部全周	透かし3方向	153	38
397	SB75	F	器台B	(18.4)			ミガキ	ミガキ	密	良好	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	受け部1/6		153	38
398	SB75	F	器台B	(20.8)			調整不明	ミガキ	密	良好	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	口縁部1/6		153	38
399	SB75	F	鉢C	(20.0)			ミガキ	調整不明	密	良好	黄橙 10YR8/6	黄橙 10YR8/6	黄橙 10YR8/6	口縁部1/12	口縁端部外面横線6条	153	38
400	SB75	04	鉢A	(13.8)			調整不明	調整不明	やや粗、1mm以下の砂粒を少量含む	良好	にぶい黄橙 10YR6/3	灰白 10YR8/2	にぶい黄橙 10YR7/3	口縁部1/12		153	38
401	SB75	04	鉢C	(15.2)			ハケ	ハケ	密	良好	灰黄褐 10YR5/2	にぶい黄褐 10YR5/3	褐灰 10YR4/1	口縁部1/12		153	38

遺物番号	出土地点	層位	器種	法量 口径	法量 器高	法量 底径	調整 外面	調整 内面	胎土	焼成	色調 外面	色調 内面	色調 断面	残存状態	備考	図版 No.	図版 No.
402	SB75	F	鉢C	(17.8)			ハケ	横ナデ	密	良好	暗灰 10YR4/1	にぶい黄橙 10YR6/4	にぶい黄橙 10YR6/4	口縁部1/12	口縁部外面横線2条・煤付着	154	39
403	SB75	01	甕				調整不明	調整不明	やや粗、3mm以下の砂粒を多く含む	良好	明黄褐 10YR7/6	黄橙 10YR8/6	黄橙 10YR8/6	体部1/2	頸部外面横線4条と列点文、煤付着	154	39
404	SB75	F	甕台脚			(8.4)	調整不明	調整不明	やや粗、4mm以下の砂粒を多く含む	良好	にぶい橙 5YR7/3	赤橙 2.5YR7/4	にぶい橙 5YR7/3	台部5/12		154	39
405	SB75	F	壺D2	(11.0)			調整不明	調整不明	密	良好	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	口縁部1/6	口縁部外面横線1条	154	39
406	SB75	F	底部1				調整不明	調整不明	密	良好	赤橙 2.5YR7/6	赤橙 2.5YR7/4	灰 N5/0	口縁部1/6		154	39
407	SB76	02	器台B	(15.6)			調整不明	ミガキ	密	良好	黄橙 7.5YR7/8	にぶい黄橙 10YR7/4	暗灰 7.5YR6/1	口縁部1/12		154	
408	SB76	02	壺SD底部			(4.8)	指ナデ	調整不明	密	良好	にぶい黄橙 10YR6/4	にぶい黄橙 10YR6/4	灰 N4/0	底部1/4		154	39
409	SB77	01	器台B	(16.2)			ミガキ	ミガキ	密	良好	浅黄橙 10YR8/3	浅黄橙 10YR8/3	浅黄橙 10YR8/3	受け部1/12		154	39
410	SB77	01	壺B				調整不明	調整不明	密	良好	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい橙 7.5YR6/4	暗灰 10YR5/1	体部片	外面横線5条以上と列点文、赤彩	154	39
411	SB77	01	甕D	(19.4)			ハケ後指ナデ	ハケ	密	良好	黒 N2/0	にぶい橙 7.5YR6/4	暗灰 N3/0	口縁部1/6		154	39
412	SB77	01	甕平底			(7.7)	板ナデ	指ナデ	やや粗、2mm以下の砂粒を多く含む	良好	にぶい橙 7.5YR6/4	浅黄橙 10YR8/3	浅黄橙 10YR8/3	底部1/4		154	39
413	SB77	01	甕平底			(4.4)	調整不明	調整不明	やや粗、3mm以下の砂粒を多く含む	良好	灰白 5Y8/2	灰白 5Y8/1	灰白 5Y7/2	底部1/4		154	
414	SB77	01	壺D底部			(5.0)	ミガキ	調整不明	密	良好	にぶい橙 7.5YR6/4	にぶい橙 7.5YR6/4	暗灰 7.5YR5/1	底部1/4		154	
415	SB78	02	器台B	(18.9)			調整不明	調整不明	密	良好	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	受け部1/12		154	
416	SB78	05	底不明部				ミガキ	指ナデ	やや粗、2mm以下の砂粒を少量含む	良好	浅黄橙 10YR8/4	にぶい黄橙 10YR7/4	灰白 10YR8/2	基部全面、脚部1/10	1孔4組4穿孔	154	39
417	SB78	04	鉢C	(15.0)			調整不明	調整不明	密	良好	淡黄 2.5Y8/3	淡黄 2.5Y8/3	淡黄 2.5Y8/3	口縁部1/6		154	39
418	SB78	01	鉢B				ミガキ	ミガキ	やや粗、2mm以下の砂粒を少量含む	良好	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	口縁部1/12	口縁部外面横線2条と列点文	154	39
419	SB78	03	鉢C	(23.0)			指オサエ	ハケ	密	良好	灰白 10YR8/1	にぶい黄橙 10YR7/2	暗灰 10YR3/1	口縁部1/12	口縁部外面横線1条と列点文	154	39
420	SB78	03	鉢				調整不明	ミガキ	やや粗、1mm以下の砂粒を少量含む	良好	にぶい黄橙 10YR7/4	明黄褐 10YR7/6	明黄褐 10YR7/6	頸部～体部1/3	頸部外面横線5条と列点文2段、煤付着	154	39
421	SB78	F	鉢			(13.0)	ミガキ	ミガキ	密	良好	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	灰 N5/0	体部1/6	頸部外面横線8条と列点文、煤付着	154	39
422	SB78	F	鉢				ミガキ	調整不明	密	良好	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	明褐灰 7.5YR7/1	体部片	外面横線6条以上と列点文、煤付着	155	39
423	SB79	F	鉢A				櫛条痕	ハケ	密	良好	明赤褐 2.5YR5/6	明赤褐 2.5YR5/6	灰赤 2.5YR4/2	体部1/4		155	39
424	SB79	03	鉢E	(15.3)			ミガキ	調整不明	密	良好	にぶい黄橙 10YR6/3	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	口縁部1/12	外面煤付着	155	39
425	SB79	03	鉢D	(14.9)			調整不明	調整不明	密	良好	にぶい黄橙 10YR6/4	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	口縁部1/12	外面煤付着	155	39
426	SB79	01	鉢D	(16.4)			調整不明	調整不明	やや粗、3mm以下の砂粒を多く含む	良好	灰黄褐 10YR6/2	にぶい黄橙 10YR5/3	橙 7.5YR6/8	口縁部1/12		155	39
427	SB79	01	甕平底			(7.0)	ケズリ	調整不明	やや粗、2mm以下の砂粒を多く含む	良好	橙 7.5YR7/6	にぶい橙 7.5YR6/4	にぶい橙 7.5YR6/4	底部1/4		156	
428	SB79	01	壺BC底部			3.8	調整不明	調整不明	やや粗、2mm以下の砂粒を多く含む	良好	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/3	灰黄 2.5Y7/2	底部完存		156	39
429	SB80	F	鉢C	(22.8)			ケズリ	ケズリ	やや粗、1mm以下の砂粒を多く含む	良好	灰白 2.5Y8/2	灰白 2.5Y8/2	黄灰 2.5Y5/1	口縁部1/12		156	
430	SB80	F	鉢G1	(18.0)			調整不明	調整不明	密	良好	灰白 10YR8/1	灰白 10YR8/2	灰 N5/0	口縁部1/12		156	
431	SB80	F	鉢				調整不明	調整不明	やや粗、3mm以下の砂粒を多く含む	良好	橙 7.5YR7/6	にぶい黄橙 7.5YR7/4	にぶい黄橙 7.5YR7/4	体部片	外面横線と列点文	156	39
432	SB80	F	壺B底部			(6.2)	調整不明	調整不明	やや粗、2mm以下の砂粒を少量含む	良好	灰白 2.5Y8/1	黄灰 2.5Y6/1	灰 N4/0	底部1/4		156	39
433	SB81	03	底部C	(22.3)			ミガキ	ミガキ	密	良好	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	暗灰 7.5YR4/1	脚部1/4	脚底部穿孔有り	156	31
434	SB81	01	器台B	(18.2)			ミガキ	ミガキ	密	良好	にぶい黄橙 10YR7/4	明黄褐 10YR7/6	灰 N5/0	受け部1/4、脚部1/2	1孔4組4穿孔	156	31
435	SB81	02	器台脚部				ミガキ	指ナデ	密	良好	黄橙 10YR8/6	黄橙 10YR8/6	暗灰 10YR6/1	基部1/4	（1孔3組3穿孔）	156	
436	SB81	02	鉢D	(17.8)			調整不明	調整不明	密	良好	橙 5YR7/8	橙 5YR7/8	灰白 10YR8/2	口縁部1/6		156	39
437	SB81	03	壺B1	(10.4)			ハケ後指ナデ	指ナデ	やや粗、2mm以下の砂粒を少量含む	良好	明赤褐 5YR5/8	黄橙 7.5YR7/8	暗灰 7.5YR5/1	口縁部1/4		156	31
438	SB81	02	壺D底部			(2.2)	板ケズリ	指ナデ	密	良好	明黄褐 10YR7/6	明黄褐 10YR7/6	明黄褐 10YR7/6	底部完存	底部に木平方向の穿孔あり	156	39
439	SB81	02	壺A				調整不明	ケズリ	粗、2mm以下の砂粒を多く含む	良好	にぶい黄橙 10YR7/4	暗灰 N3/0	暗灰 N3/0	体部1/6	外面横線2同と列点文2段、外面赤彩	156	
440	SB82	01	鉢C	(15.0)			ミガキ	調整不明	密	良好	明黄褐 10YR7/6	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	口縁部1/12	口縁端部刻み目	156	39
441	SB82	03	甕平底			(5.0)	調整不明	調整不明	やや粗、2mm以下の砂粒を多く含む	良好	にぶい赤橙 5YR6/4	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	底部1/4		156	39
442	SB82	01	甕D	(18.0)			横ナデ、ハケ	調整不明	密	良好	黄灰 2.5Y5/1	黄灰 2.5Y5/1	黄灰 2.5Y5/1	口縁部1/12		156	39
443	SB82	01	甕G2	(20.0)			調整不明	ナデ	やや粗、5mm以下の砂粒を多く含む	良好	明黄褐 10YR7/6	明黄褐 10YR7/6	暗灰 10YR4/1	口縁部1/12		156	39
444	SB84	01	甕平底			(6.2)	調整不明	調整不明	やや粗、3mm以下の砂粒を多く含む	良好	にぶい黄橙 10YR7/4	橙 7.5YR7/6	暗灰 10YR6/1	底部1/4		156	
445	SC01	01	底部C	(26.0)	23.7	(16.1)	ミガキ	ミガキ、指ナデ	密	良好	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	にぶい黄橙 10YR7/4	脚部1/2、脚部2/3	2孔3組6穿孔	156	31
446	SC01	01	底部C	(25.9)			ミガキ	ミガキ、指ナデ	密	良好	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	脚部1/4、基底全面	（1孔3組3穿孔）、脚部内面指ナデ込み痕	156	31
447	SC01	01	底部C	(22.0)			ミガキ	ミガキ	密	良好	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	脚部1/6		156	39

遺物	出土地点	層	器種	法量			調整		胎土	焼成	色調			残存状態	備考	挿図	図版
番号		位		口径	器高	底径	外面	内面			外面	内面	断面			No.	No.
448	SU01	01	高坏C	(21.8)			調整不明	ミガキ	密	良好	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	口縁部1/12		156	
449	SU01	01	高坏C				ミガキ	ミガキ	密	良好	橙 7.5YR7/6	橙 5YR6/6	灰 N5/0	坏部1/12		156	
450	SU01	01	高坏C				ミガキ	ミガキ	密	良好	浅黄橙 7.5YR8/6	浅黄橙 7.5YR8/6	浅黄橙 7.5YR8/6	坏部1/3		157	39
451	SU01	01	高坏又は器台脚部				ミガキ	指ナデ	密	良好	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	基部全周	1孔3組3穿孔、脚部内面絞り込み痕	157	31
452	SU01	01	器台B1脚部			(14.7)	ミガキ	指ナデ	密	良好	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	基部全周、脚部2/3	1孔3組3穿孔	157	31
453	SU01	04	鉢B	19.4	15.2	(6.6)	ハケ後ナデ、指オサエ	指オサエ、指ナデ、ケズリ	密	良好	橙 2.5YR6/6	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	口縁部～体部2/3、台部1/2	頸部外面横線7条と列点文	157	32
454	SU01	01	甕C	20.3	26.2	5.8	ハケ後指ナデ、ハケ	ケズリ、指ナデ	やや粗、2mm以下の砂粒を多く含む	良好	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	ほぼ完形、体部一部欠損	口縁端部横線（4条）、頸部横線（26条）と列点文、内外面煤付着	157	32
455	SU01	01	甕平底			(5.9)	ハケ後指ナデ	指ナデ	やや粗、2mm以下の砂粒を少量含む	良好	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	底部完存	内外面煤付着	157	32
456	SU02	01	鉢			1.4	ミガキ	調整不明	密	良好	橙 7.5YR7/6	明黄褐 10YR7/6	明黄褐 10YR7/6	底部完存		157	32
457	SU02	01	鉢				ミガキ	調整不明	密	良好	浅黄橙 7.5YR8/6	にぶい橙 7.5YR7/4	浅黄橙 7.5YR8/6	体部片	外面横線3条以上と列点文	157	
458	SU02	01	甕D	(17.3)			ミガキ、口縁端部横ナデ	ハケ	密	良好	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR6/6	明黄褐 10YR7/6	口縁部1/12	頸部外面横線2条以上	157	39
459	SU02	01	甕G1	(17.3)			調整不明	調整不明	粗、3mm以下の砂粒を多く含む	良好	灰白 2.5Y8/2	灰白 2.5Y8/2	灰 N5/0	口縁部1/6	口縁端部外面横線6条、外面煤付着	157	39
460	SU02	01	甕G1	(18.0)			板ナデ	調整不明	やや粗、3mm以下の砂粒を多く含む	良好	明黄褐 10YR7/6	明黄褐 10YR6/6	明黄褐 10YR7/6	口縁部1/6	口縁端部外面横線、口縁部煤付着	157	39
461	SU02	04	鉢底部			1.4	調整不明	ミガキ	密	良好	にぶい橙 7.5YR6/4	にぶい橙 7.5YR6/4	にぶい橙 7.5YR7/4	底部完存		158	39
462	SU02	01	甕平底			5.6	板ナデ	調整不明	密	良好	にぶい黄橙 10YR6/4	明黄褐 10YR7/6	にぶい黄橙 10YR7/4	底部完存		158	39
463	SU02	01	甕台部			(6.5)	指ナデ	指ナデ	やや粗、3mm以下の砂粒を多く含む	良好	浅黄橙 10YR8/3	浅黄橙 10YR8/3	暗灰 N3/0	台部1/2		158	39
464	SU02	01	壺D2	(7.2)			ミガキ	調整不明	密	良好	橙 7.5YR7/6	明黄褐 10YR7/6	明黄褐 10YR7/6	口縁部1/12	口縁部外面横線3条	158	39
465	SU02	01	壺A			(32.6)	ミガキ	指ナデ	密	良好	橙 7.5YR7/6	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	体部1/6	外面横線3段と列点文4段及び孤帯文、外面赤彩	158	39
466	SU02	01	壺A				調整不明	指ナデ、ケズリ	密	良好	橙 7.5YR7/6	浅黄橙 7.5YR8/6	浅黄橙 7.5YR8/6	体部1/4	外面横線3段と列点文3段、外面赤彩	158	
467	SU02	01	壺B				調整不明	調整不明	密	良好	橙 7.5YR7/6	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	体部片	外面横線6条以上と列点文・波状文（？）	158	
468	SU02	01	壺B			2.0	ミガキ	ミガキ	密	良好	橙 7.5YR7/6	浅黄橙 10YR8/4	黄橙 10YR8/6	底部完存		158	39
469	SU02	01	壺A			(5.0)	ミガキ	ハケ後指ナデ	密	良好	赤 10R4/6	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	底部1/4	外面赤彩	158	32
470	SK11	02	器台B	(18.1)			調整不明	ミガキ	密	良好	浅黄橙 10YR8/3	褐灰 10YR4/1	灰 N4/0	受け部1/12	口縁端部外面横線4条	158	39
471	SK11	03	甕平底			(3.7)	指ナデ	調整不明	密	良好	褐灰 10YR4/1	褐灰 10YR4/1	褐灰 10YR4/1	底部1/4		158	39
472	SK11	03	甕台部			(6.8)	調整不明	調整不明	やや粗、3mm以下の砂粒を多く含む	良好	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/3	暗灰 N3/0	台部1/4		158	39
473	SK19	04	甕台部			(9.1)	調整不明	板ケズリ	やや粗、2mm以下の砂粒を多く含む	良好	明赤褐 5YR5/6	明赤褐 5YR5/6	明赤褐 5YR5/6	台部1/4		158	
474	SK19	04	壺B底部			(5.1)	ケズリ	調整不明	密	良好	にぶい黄橙 10YR7/4	褐灰 10YR5/1	褐灰 10YR5/1	底部1/4		158	
475	SD01	01	甕J	(14.4)			ハケ後指ナデ	ハケ後指ナデ	密	良好	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	明褐灰 7.5YR7/2	口縁部1/12		158	32

表20　南青柳古墳出土土器観察表

遺物	出土地点	層	器種	法量			調整		胎土	焼成	色調			残存状態	備考	挿図	図版
番号		位		口径	器高	底径	外面	内面			外面	内面	断面			No.	No.
476	t6・n8	II	須恵器坏蓋	(14.0)			回転ヘラケズリ、回転ナデ	回転ナデ	密	良好	灰 N5/0	灰 N5/0	灰褐 5YR5/2	口縁部1/2		169	45
477	t8	II	須恵器坏蓋	(14.4)			回転ナデ	回転ナデ	密	良好	灰 5Y6/1	灰 5Y6/1	灰白 5Y6/1	口縁部1/4		169	43
478	u8	II	須恵器無蓋高坏	(17.0)			回転ナデ	回転ナデ	密	良好	灰 N5/0	灰 N5/0	灰赤 2.5YR5/2	坏部1/6	坏部外面波状文	169	43
479	t2	II	須恵器広口壺				回転ナデ	回転ナデ	密	良好	黒 2.5Y2/1	灰黄 2.5Y7/2	黄灰 2.5Y6/1	口縁部片		169	43
480	t3	II	須恵器甕				タタキ	当具痕スリケシ	密	やや不良	灰白 2.5Y7/1	灰白 2.5Y7/1	灰白 2.5Y7/1	体部片		169	43
481	t2	II	須恵器甕				タタキ	当具痕スリケシ	密	やや不良	灰 N6/0	灰黄 2.5Y6/2	灰黄 2.5Y7/2	体部片		169	43
482	t3	II	須恵器甕				タタキ	当具痕スリケシ	密	やや不良	灰白 2.5Y7/1	灰白 2.5Y7/1	灰白 2.5Y7/1	体部片		169	43
483	t2	II	須恵器甕				タタキ	当具痕スリケシ	密	良好	黄灰 2.5Y6/1	黄灰 2.5Y6/1	灰黄 2.5Y7/2	体部片		169	43
484	t7	II	須恵器甕				タタキ	—	密	良好	灰 N4/0	黄灰 2.5Y6/1	黄灰 2.5Y6/1	体部片		169	43
485	t2	II	須恵器甕				タタキ	—	密	良好	灰白 2.5Y7/1	灰黄 2.5Y7/2	灰白 2.5Y7/1	体部片		169	43
486	t3	II	須恵器甕				タタキ	—	密	やや不良	灰 N5/0	灰白 2.5Y7/1	灰黄 2.5Y7/2	体部片		169	43
487	t3	II	須恵器甕				タタキ	—	密	やや不良	灰白 10YR7/1	褐灰 10YR6/1	灰白 10YR7/1	体部片		169	43
488	v8	II	須恵器甕				タタキ	—	密	やや不良	にぶい黄橙 10YR7/2	灰黄 2.5Y6/2	灰黄 2.5Y6/2	体部片		169	43
489	s3	II	須恵器甕				タタキ	—	密	やや不良	灰白 2.5Y8/2	灰黄 2.5Y7/2	灰黄 2.5Y7/2	体部片		169	43
490	SZ01	02	鉢C				調整不明	調整不明	密	良好	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	口縁部片		169	39

遺物番号	出土地点	層位	器種	法量 口径	法量 器高	法量 底径	調整 外面	調整 内面	胎土	焼成	色調 外面	色調 内面	色調 断面	残存状態	備考	検図No.	図版No.
491	G201	02	鉢	(10.0)			ハケ	ハケ	密	良好	暗灰 10YR5/1	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄橙 10YR7/3	口縁部1/6		169	
492	G201	01	壺か底			(7.0)	指オサエ	調整不明	やや粗、2mm以下の砂粒を多く含む	良好	浅黄橙 7.5YR8/6	暗灰 10YR4/1	黒褐 10YR3/1	底部1/4		169	
493	G201	01	壺か	(16.4)			調整不明	調整不明	密	良好	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	口縁部1/12	口縁端部外面横沈線2条	169	39
494	G201	01	壺か			(6.0)	指ナデ	指ナデ	密	良好	橙 7.5YR7/6	暗灰 7.5YR5/1	暗灰 2.5YR5/1	底部1/4		169	39

表21　包含層出土土器観察表

遺物番号	出土地点	層位	器種	法量 口径	法量 器高	法量 底径	調整 外面	調整 内面	胎土	焼成	色調 外面	色調 内面	色調 断面	残存状態	備考	検図No.	図版No.
495	t11	IV	高杯A	(22.4)			調整不明	調整不明	密	良好	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	口縁部1/12		172	43
496	s20	Ⅲ	高杯B	(24.2)			ミガキ	調整不明	密	良好	にぶい黄橙 10YR7/4	灰 N4/0	灰 N5/0	口縁部1/8		172	43
497	s12	IV	高杯A				ミガキ	ミガキ	密	良好	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	暗灰 N3/0	口縁部1/8		172	43
498	s13	IV	高杯A				ミガキ	調整不明	密	良好	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	灰 N4/0	杯部1/6		172	43
499	s8	IV	高杯C	(27.4)			ミガキ	ミガキ	密	良好	明黄褐 10YR7/6	浅黄橙 10YR8/4	明黄褐 10YR7/6	口縁部1/12		172	43
500	s19	IV	高杯C	(26.2)			ミガキ	ミガキ	密	良好	にぶい橙 7.5YR7/4	浅黄橙 7.5YR8/4	明褐灰 2.5YR7/1	口縁部1/12		172	
501	s11	IV	高杯C	(19.2)			ミガキ	ミガキ	密	良好	浅黄橙 10YR8/4	明黄褐 10YR7/6	明黄褐 10YR7/6	口縁部1/12		172	
502	s12	IV	高杯C				ミガキ	ミガキ	密	良好	にぶい黄橙 10YR7/3	灰黄褐 10YR5/2	暗灰 N3/0	杯部1/6		172	
503	s13	IV	高杯F	(17.4)			調整不明	調整不明	密	良好	灰白 10YR8/2	灰白 10YR8/2	暗灰 N3/0	口縁部1/6		172	
504	p9	IV	高杯F	(15.0)			ミガキ	横ナデ、ミガキ、工具による ナデ	密	良好	橙 7.5YR7/6	明褐灰 7.5YR7/1	黄橙 2.5YR7/8	口縁部1/6		172	
505	p9	IV	高杯F	(14.4)			調整不明	調整不明	密	良好	黄橙 10YR8/8	黄橙 10YR8/8	黄橙 10YR8/8	口縁部1/6		172	43
506	s8	IV	高杯F	(11.4)			ミガキ	ミガキ	密	良好	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/3	口縁部1/4		172	43
507	t13	IV	高杯F	(15.6)			ミガキ	ケズリ	密	良好	灰白 10YR8/2	灰白 10YR8/2	灰 N6/0	口縁部1/12	口縁端部外面横沈線3条	172	
508	s8	Ⅲ	高杯F	(13.8)			ミガキ	調整不明	密	良好	橙 2.5YR7/6	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	口縁部1/12	口縁端部外面横沈線4条	172	
509	p9	Ⅱ	高杯F	(13.2)			ミガキ	指ナデ	密	良好	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	口縁部1/12	口縁端部外面横沈線5条、2孔3組6穿孔	172	32
510	t9	IV	高杯F				ミガキ	調整不明	密	良好	にぶい黄橙 10YR8/3	にぶい黄橙 10YR8/4	灰 N4/0	杯部1/3		172	43
511	s7	IV	高杯C				調整不明	調整不明	密	良好	明黄褐 10YR7/6	明黄褐 10YR7/6	明黄褐 10YR7/6	口縁部片	口縁端部内面沈線4条	173	
512	t13	Ⅲ	高杯C				ミガキ	ミガキ	密	良好	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	浅黄橙 10YR8/4	口縁部片	口縁端部内面沈線4条	173	43
513	t14	IV	高杯C				調整不明	ミガキ	密	良好	にぶい橙 7.5YR6/4	にぶい橙 2.5YR7/4	灰 N5/0	口縁部片	口縁端部内面沈線4条	173	43
514	南谷	IV	高杯脚部				ミガキ	指ナデ	密	良好	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	基部1/2	透かし3方向	173	
515	s7	Ⅲ	高杯脚部				ミガキ	指ナデ	密	良好	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	基部全周	透かし3方向、脚部内面絞り込み痕	173	43
516	t12	IV	高杯脚部				ミガキ	指ナデ	密	良好	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	褐灰 10YR5/4	基部全周	透かし3方向、脚部内面絞り込み痕	173	43
517	t13	IV	高杯脚部				ミガキ	ハケ、ケズリ	密	良好	浅黄橙 7.5YR8/4	浅黄橙 7.5YR8/4	浅黄橙 7.5YR8/4	基部1/3	(2孔3組6穿孔)	173	
518	t13	IV	高杯脚部				ミガキ	指ナデ、ケズリ	密	良好	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	基部全周	2孔3組6穿孔、脚部内面絞り込み痕	173	32
519	s21	IV	高杯脚部				ミガキ	ケズリ	やや粗、3mm以下の砂粒を多く含む	良好	灰白 10YR8/2	灰白 10YR8/2	灰白 10YR7/1	基部全周		173	43
520	s11	Ⅲ	高杯脚部				ミガキ	指ナデ	密	良好	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	基部全周	2孔3組6穿孔	173	32
521	s13	IV	高杯脚部				ミガキ	指ナデ	密	良好	橙 7.5YR6/6	橙 2.5YR6/6	橙 2.5YR6/6	基部1/3	透かし孔有り	173	43
522	s8	Ⅲ	高杯脚部			(7.8)	ミガキ	指オサエ	密	良好	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	脚部1/5	2孔3組3穿孔、脚部内面絞り込み痕	173	32
523	s14	IV	器台B				ミガキ	ミガキ	密	良好	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	口縁部1/12		173	
524	s13	IV	器台B	(19.1)			調整不明	調整不明	密	良好	黄橙 10YR8/6	にぶい黄橙 10YR7/4	橙 7.5YR7/6	口縁部1/12		173	
525	s10	Ⅲ	器台B	(19.2)			ミガキ	ミガキ	密	良好	にぶい橙 7.5YR6/4	褐灰 7.5YR5/1	にぶい橙 2.5YR7/4	口縁部1/4		173	43
526	s11	IV	器台B	(17.9)			ミガキ	調整不明	密	良好	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	口縁部1/6		173	43
527	s12	IV	器台B	(17.3)			ミガキ	調整不明	密	良好	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	灰 N4/0	口縁部1/12		173	
528	t11	IV	器台B	(16.8)			調整不明	調整不明	密	良好	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	口縁部1/6		173	
529	t14	Ⅲ	器台B	(16.8)			調整不明	調整不明	密	良好	赤 10R5/8	赤 10R5/8	赤 10R5/8	口縁部1/3		173	
530	t14	IV	器台B	(13.1)			ミガキ	ミガキ	密	良好	橙 7.5YR6/6	橙 7.5YR6/6	褐灰 10YR5/1	口縁部1/6		173	
531	t13	IV	器台B	(12.8)			ミガキ	ミガキ	密	良好	橙 7.5YR6/6	橙 7.5YR7/6	にぶい黄橙 10YR7/4	口縁部1/12		173	43
532	t19	IV	器台B	(12.6)			ミガキ	ミガキ	密	良好	浅黄橙 7.5YR8/6	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	口縁部1/12	口縁端部外面横沈線2条	173	43
533	s18	Ⅲ	器台B	(11.0)			調整不明	ミガキ	密	良好	黄橙 10YR8/6	黄橙 10YR8/6	褐灰 10YR6/1	口縁部1/4		173	43
534	t13	IV	器台B	(11.2)			ミガキ	ミガキ	密	良好	明黄褐 10YR7/6	橙 7.5YR7/6	褐灰 7.5YR6/1	口縁部1/6	口縁端部外面横沈線2条	173	
535	s20	Ⅲ	器台B	(16.8)			ミガキ	調整不明	密	良好	浅黄橙 10YR8/3	灰白 10YR8/2	灰白 10YR8/2	口縁部1/6	口縁端部外面横沈線5条	173	43

遺物番号	出土地点	層位	器種	法量 口径	法量 器高	法量 底径	調整 外面	調整 内面	胎土	焼成	色調 外面	色調 内面	色調 断面	残存状態	備考	挿図	図版
536	s20	Ⅳ	器台B	(15.0)			調整不明	調整不明	密	良好	浅黄橙 10YR8/6	灰白 10YR8/2	灰白 10YR8/2	口縁部1/8	口縁端部外面横位沈線2条	173	
537	s11	Ⅳ	高杯又は器台脚部			(14.4)	ミガキ	調整不明	密	良好	橙 7.5YR7/6	明黄褐 10YR7/6	明黄褐 10YR7/6	脚部1/4以上	透かし孔有り	174	
538	s20	Ⅳ	高杯又は器台脚部			(14.2)	調整不明	調整不明	密	良好	にぶい黄橙 10YR7/3	浅黄橙 10YR8/3	浅黄橙 10YR8/3	脚部1/4以上		174	43
539	s11	Ⅲ	高杯又は器台脚部			(7.7)	ミガキ	ミガキ	密	良好	にぶい黄橙 10YR7/4	浅黄 2.5Y7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	脚部1/4以下	透かし孔有り	174	
540	s20	Ⅲ	高杯又は器台脚部			(9.2)	ミガキ	ケズリ	密	良好	灰白 5Y8/1	灰白 2.5Y8/1	灰白 2.5Y8/1	脚部1/4以上		174	43
541	s11	Ⅱ	高杯又は器台脚部			(14.4)	ミガキ	ハケ	密	良好	にぶい橙 7.5YR6/4	にぶい橙 7.5YR6/4	褐灰 7.5YR4/1	脚部1/4以下	透かし孔有り	174	
542	s13	Ⅳ	鉢A	(15.2)			調整不明	ナデ、ミガキ	密	良好	にぶい黄橙 10YR6/3	にぶい黄橙 10YR7/3	褐灰 10YR6/1	口縁部1/12	口縁端部外面横線3条	174	
543	s7	Ⅳ	鉢A	(10.1)			調整不明	調整不明	密	良好	黄橙 7.5YR8/8	橙 5YR7/8	黄橙 7.5YR8/8	口縁部1/6	口縁端部外面横線3条	174	44
544	s9	Ⅲ	鉢B	(23.0)			調整不明	調整不明	密	良好	浅黄橙 7.5YR8/6	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	口縁部1/12	口縁端部外面横線2条	174	44
545	s13	Ⅳ	鉢B	(21.6)			調整不明	ミガキ	密	良好	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	灰 N4/0	口縁部1/12	口縁端部外面横線5条	174	44
546	s8	Ⅱ	鉢B	(15.9)			ケズリ	ケズリ	密	良好	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	口縁部1/12	口縁端部外面横線3条	174	
547	s13	Ⅳ	鉢B	(19.8)			調整不明	ミガキ	密	良好	浅黄橙 7.5YR8/6	浅黄橙 7.5YR8/6	浅黄橙 10YR8/6	口縁部1/12	口縁端部外面横線4条と列点文、頸部横線7条、口縁部外面煤付着	174	44
548	s9	Ⅳ	鉢B	(18.2)			ミガキ	調整不明	やや粗、2mm以下の砂粒を多く含む	良好	にぶい黄橙 10YR6/3	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	口縁部1/12	口縁端部刻み目、外面列点文・煤付着	174	44
549	s6	Ⅲ	鉢A	(17.1)			ナデ	調整不明	密	良好	にぶい黄橙 10YR7/4	橙 7.5YR6/8	にぶい黄橙 10YR7/4	口縁部1/6	口縁部外面櫛描列点文・煤付着	174	44
550	s10	Ⅱ	鉢B	(13.4)			調整不明	調整不明	やや粗、4mm以下の砂粒を多く含む	良好	灰白 10YR8/2	灰白 10YR8/2	褐灰 10YR6/1	口縁部1/12		174	
551	試掘東北トレ	Ⅱ	鉢B	(21.4)			調整不明	調整不明	やや粗、3mm以下の砂粒を多く含む	良好	にぶい黄橙 10YR6/3	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	口縁部1/4	口縁端部外面横線1条	174	
552	s13	Ⅳ	鉢B	(24.6)			ミガキ	ミガキ	やや粗、4mm以下の砂粒を多く含む	良好	にぶい黄橙 10YR7/4	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	口縁部1/12	口縁端部外面横線3条	174	
553	s11	Ⅳ	鉢C	(18.3)			ミガキ	ミガキ	密	良好	橙 7.5YR7/6	にぶい橙 7.5YR7/4	褐灰 10YR5/1	口縁部1/12	口縁端部外面横線2条と列点文、頸部横線7条以上	174	44
554	s8	Ⅳ	鉢C	(17.0)			調整不明	ナデ	やや粗、2mm以下の砂粒を多く含む	良好	橙 7.5YR6/6	橙 7.5YR6/6	橙 7.5YR7/6	口縁部1/6	口縁端部外面横線3条と列点文	174	44
555	s21	Ⅳ	鉢C	(21.9)			指ナデ	指ナデ	密	良好	灰 N4/0	黄灰 2.5Y6/1	暗灰 N3/0	口縁部1/12		174	44
556	s13	Ⅳ	鉢C	(13.0)			調整不明	調整不明	密	良好	にぶい黄橙 10YR7/4	浅黄橙 10YR8/4	にぶい黄橙 10YR7/4	口縁部1/6		174	44
557	s19	Ⅲ	鉢C	(12.7)			調整不明	調整不明	やや粗、3mm以下の砂粒を多く含む	良好	にぶい黄橙 10YR7/4	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	口縁部1/6		175	44
558	s13	Ⅳ	鉢E				ミガキ	ミガキ	密	良好	橙 7.5YR7/6	にぶい黄橙 10YR7/4	灰 N4/0	口縁部片	口縁端部外面横線3条	175	
559	s8	Ⅳ	鉢C				ミガキ	調整不明	密	良好	明黄褐 10YR7/6	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	口縁部片	口縁端部外面横線5条と列点文	175	44
560	s12	Ⅳ	鉢				ケズリ	指ナデ	密	良好	灰黄褐 10YR5/2	灰黄褐 10YR5/2	褐灰 10YR4/1	体部1/6	頸部横線6条以上と列点文	175	44
561	s13	Ⅳ	鉢				ミガキ	ハケ	密	良好	にぶい黄橙 10YR6/3	にぶい黄橙 10YR6/4	にぶい黄橙 10YR7/3	体部片	頸部横線5条と櫛描列点文	175	44
562	東谷	Ⅱ	鉢				調整不明	調整不明	密	良好	灰白 10YR8/2	褐灰 10YR5/1	褐灰 10YR5/1	体部片	竹管列点文	175	
563	s9	Ⅳ	鉢			(2.2)	ケズリ	ケズリ	密	良好	にぶい黄橙 10YR6/3	にぶい黄橙 10YR7/4	灰 N4/0	底部1/2以上		175	44
564	s7	Ⅳ	鉢			(2.1)	ミガキ	調整不明	密	良好	橙 7.5YR7/6	橙 5YR6/6	浅黄橙 10YR8/4	底部完存		175	44
565	s20	Ⅳ	壺A				ハケ後ナデ後櫛条痕	調整不明	密	良好	橙 2.5YR6/8	明赤褐 2.5YR5/8	にぶい赤褐 5YR5/4	体部片		175	44
566	s19	Ⅳ	壺A				ハケ後ナデ後櫛条痕	ハケ	密	良好	にぶい赤褐 5YR4/4	にぶい赤褐 5YR5/4	灰褐 5YR4/2	体部片	外面煤付着	175	
567	s7	Ⅳ	壺A平底			(7.6)	指ナデ	ケズリ	密	良好	橙 7.5YR7/6	にぶい黄橙 10YR6/3	橙 5YR6/6	底部2/4以下	底面布目圧痕、胴口縁有り	175	44
568	s6	Ⅳ	壺A平底			(6.0)	指ナデ	ケズリ	密	良好	にぶい褐 7.5YR5/4	橙 5YR6/6	灰 N5/0	底部1/4以上	底面布目圧痕、胴口縁有り	175	44
569	s11	Ⅲ	壺B	(18.2)			ケズリ	ナデ	密	良好	にぶい褐 7.5YR5/4	橙 7.5YR6/6	にぶい橙 7.5YR6/4	口縁部1/12		175	44
570	s2	Ⅱ	壺E	(16.2)			ケズリ	ケズリ	やや粗、3mm以下の砂粒を少量含む	良好	にぶい黄橙 10YR6/3	にぶい黄橙 10YR7/4	灰 N4/0	口縁部1/12		175	44
571	s11	Ⅲ	壺E	(14.6)			ナデ	ハケ、ナデ	密	良好	にぶい橙 7.5YR6/4	にぶい橙 7.5YR6/4	にぶい橙 7.5YR6/4	口縁部1/12	内面煤付着	175	44
572	s19	Ⅳ	壺	(14.1)			ハケ	ミガキ、ハケ	密	良好	灰黄褐 10YR5/2	灰褐 7.5YR5/2	褐灰 10YR4/1	口縁部1/4		175	44
573	t19	Ⅳ	壺D	(11.0)			調整不明	調整不明	密	良好	橙 5YR6/6	にぶい橙 7.5YR6/4	灰 N6/0	口縁部1/12		175	44
574	s13	Ⅳ	壺D	(13.2)			ハケ	ハケ、指ナデ、指オサエ	密	良好	にぶい黄橙 10YR7/3	褐灰 10YR4/1	褐灰 10YR6/1	口縁部7/12	口縁端部刻み目、頸部横線11条と列点文、内外面煤付着	175	33
575	東谷	Ⅱ	壺D				調整不明	調整不明	やや粗、2mm以下の砂粒を多く含む	良好	浅黄橙 7.5YR8/6	にぶい黄橙 10YR7/4	褐灰 7.5YR6/1	口縁部片		175	

遺物番号	出土地点	層位	器種	法量 口径	器高	底径	調整 外面	内面	胎土	焼成	色調 外面	内面	断面	残存状態	備考	挿図No.	図版No.
576	v13	Ⅳ	甕D				調整不明	調整不明	粗、2mm以下の砂粒を多く含む	良好	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	褐灰 7.5YR5/1	口縁部片	口縁部外面煤付着	175	
577	n4	Ⅳ	甕D	(14.3)			ケズリ	ケズリ	密	良好	浅黄橙 10YR8/3	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/3	口縁部1/12		175	44
578	u13	Ⅳ	甕D	(17.8)			指ナデ	ミガキ	やや粗、3mm以下の砂粒を多く含む	良好	明黄褐 10YR7/6	浅黄橙 10YR8/4	褐灰 10YR6/1	口縁部1/12	口縁部外面煤付着	175	44
579	q13	Ⅱ	甕D	(18.4)			ハケ	調整不明	やや粗、3mm以下の砂粒を多く含む	良好	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	褐灰 10YR5/1	口縁部1/12		175	
580	南谷	Ⅲ	甕D	(13.8)			指オサエ	ハケ	やや粗、2mm以下の砂粒を多く含む	良好	淡黄 2.5Y8/3	淡黄 2.5Y8/3	灰白 2.5Y7/1	口縁部5/12		175	
581	u12	Ⅳ	甕D	(19.2)			ハケ	ハケ	やや粗、4mm以下の砂粒を少量含む	良好	にぶい褐 7.5YR5/4	橙 7.5YR6/6	灰 N4/0	口縁部1/12		176	
582	s2	Ⅰ	甕D	(16.4)			調整不明	調整不明	密	良好	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄橙 10YR7/2	褐灰 10YR6/1	口縁部1/12	頸部横線4条以上	176	44
583	o5	Ⅱ	甕D	(16.9)			ナデ	ナデ	密	良好	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	口縁部1/12		176	44
584	s11	Ⅲ	甕D	(10.0)			調整不明	指ナデ	密	良好	浅黄橙 7.5YR8/6	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	口縁部1/6		176	44
585	v11	Ⅳ	甕				ハケ	ケズリ後指ナデ	密	良好	灰黄褐 10YR5/2	にぶい黄橙 10YR7/3	浅黄橙 10YR7/3	体部1/4	頸部横線2条以上と列点文、外面煤付着	176	
586	l6	Ⅳ	甕				ハケ	指ナデ	密	良好	橙 7.5YR6/6	橙 7.5YR6/6	褐灰 7.5YR4/1	体部片	横線8条以上と列点文	176	44
587	n6	Ⅳ	甕				調整不明	ハケ	密	良好	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄橙 10YR7/3	灰 N4/0	体部片	横線3条以上と列点文	176	44
588	p7	Ⅱ	甕				ハケ、ケズリ	ケズリ	やや粗、2mm以下の砂粒を多く含む	良好	浅黄橙 10YR8/3	浅黄橙 10YR8/3	褐灰 10YR6/1	体部片	横線4条以上と列点文	176	44
589	m7	Ⅳ	甕平底			6.2	ケズリ	ハケ	やや粗、5mm以下の砂粒を多く含む	良好	にぶい黄橙 10YR6/3	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	底部完存		176	44
590	v12	Ⅳ	甕平底			(3.0)	指オサエ、ハケ	ケズリ、指ナデ	密	良好	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	底部1/2以上		176	33
591	l1	Ⅲ	甕平底			(6.8)	調整不明	ケズリ	やや粗、5mm以下の砂粒を少量含む	良好	明黄褐 10YR7/6	にぶい橙 7.5YR6/4	明黄褐 10YR7/6	底部1/4以上		176	4
592	n8	Ⅳ	甕平底			(5.4)	ケズリ	調整不明	やや粗、2mm以下の砂粒を少量含む	良好	浅黄橙 7.5YR8/3	明褐灰 7.5YR7/1	褐灰 7.5YR6/1	底部1/4以上		176	
593	q20	Ⅳ	甕平底			(6.2)	ケズリ	ケズリ	やや粗、3mm以下の砂粒を多く含む	良好	明赤褐 2.5YR5/6	にぶい橙 7.5YR6/4	褐灰 7.5YR4/1	底部1/4以上		176	
594	u14	Ⅱ	甕平底			(7.0)	ミガキ後指ナデ	調整不明	密	良好	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4	底部1/4以上		176	44
595	s11	Ⅳ	甕平底			(5.0)	ケズリ	調整不明	密	良好	灰白 2.5YR8/2	灰 N4/0	灰 N4/0	底部1/4以上		176	
596	r14	Ⅲ	甕平底			(5.2)	調整不明	指ナデ	やや粗、3mm以下の砂粒を多く含む	良好	灰 N5/1	灰 N5/1	灰 N4/0	底部1/4以上		176	
597	r12	Ⅲ	甕平底			(5.2)	指オサエ	指オサエ	密	良好	浅黄橙 7.5YR8/4	にぶい黄橙 10YR7/3	褐灰 10YR6/1	底部1/2以上		176	
598	m7	Ⅳ	甕平底			(5.4)	ケズリ	ケズリ	密	良好	褐灰 7.5YR6/1	橙 7.5YR7/6	褐灰 7.5YR6/1	底部1/4以下		176	
599	s9	Ⅱ	甕平底				ケズリ	指ナデ	やや粗、3mm以下の砂粒を少量含む	良好	橙 5YR6/6	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	底部1/4以下		176	
600	o4	Ⅱ	甕平底			(5.0)	ケズリ	指ナデ	密	良好	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	底部1/4以上		176	
601	q21	Ⅲ	甕平底			(4.8)	指ナデ	指ナデ	やや粗、4mm以下の砂粒を多く含む	良好	橙 2.5YR6/8	灰黄褐 10YR6/2	にぶい黄橙 10YR6/3	底部1/4以上		176	44
602	s11	Ⅳ	甕平底			(5.6)	ケズリ	ケズリ	やや粗、4mm以下の砂粒を多く含む	良好	にぶい褐 7.5YR5/3	浅黄橙 10YR8/4	黄橙 10YR8/6	底部1/4以下	底部外面煤付着	176	
603	u13	Ⅳ	甕平底			(4.6)	指ナデ	指ナデ	密	良好	橙 5YR6/6	にぶい橙 7.5YR7/4	褐灰 7.5YR4/1	底部1/4以下		176	
604	n6	Ⅳ	甕平底			(4.9)	指ナデ	調整不明	粗、2mm以下の砂粒を多く含む	良好	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい暗灰 N3/0	灰 N4/0	底部1/4以上		176	44
605	u13	Ⅳ	甕平底			(6.5)	ケズリ	ケズリ	やや粗、2mm以下の砂粒を多く含む	良好	橙 7.5YR6/6	にぶい黄橙 10YR7/4	灰 N4/0	底部1/4以上		176	44
606	n6	Ⅳ	甕平底			(6.9)	指ナデ、ケズリ	ケズリ	密	良好	橙 5YR6/6	にぶい橙 7.5YR6/4	橙 5YR7/6	底部1/4以下		176	44
607	s19	Ⅳ	甕平底			(7.7)	ケズリ	指ナデ	密	良好	にぶい橙 7.5YR6/4	灰黄 2.5Y6/2	にぶい黄橙 10YR6/3	底部1/4以下		176	
608	p9	Ⅳ	甕台部			(6.4)	調整不明	ケズリ、指ナデ	密	良好	浅黄橙 10YR8/3	浅黄橙 10YR8/3	浅黄橙 10YR8/3	底部1/4以上		177	44
609	u20	Ⅲ	甕台部			(4.5)	調整不明	調整不明	やや粗、2mm以下の砂粒を多く含む	良好	淡橙 5YR8/4	灰白 10YR8/2	褐灰 5YR6/1	底部1/4以下		177	
610	t11	Ⅳ	甕台部			(6.4)	ケズリ	ケズリ	やや粗、4mm以下の砂粒を多く含む	良好	浅黄橙 7.5YR8/4	浅黄橙 7.5YR8/4	浅黄橙 7.5YR8/4	底部1/4以下		177	
611	u19	Ⅳ	甕台部			(6.2)	指ナデ	指ナデ、ケズリ、ナデ	やや粗、5mm以下の砂粒を多く含む	良好	橙 5YR7/6	にぶい黄橙 10YR7/3	橙 2.5YR7/6	底部1/4以上		177	
612	v13	Ⅳ	甕台部			(9.1)	ケズリ	指ナデ	やや粗、3mm以下の砂粒を多く含む	良好	浅黄橙 7.5YR8/4	灰白 2.5Y8/2	褐灰 7.5YR5/1	底部1/4以下		177	
613	v12	Ⅳ	甕台部			(8.0)	指ナデ	指ナデ	やや粗、3mm以下の砂粒を多く含む	良好	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/3	黄灰 2.5Y4/1	底部1/4以下		177	44
614	u19	Ⅳ	甕台部			(7.5)	ハケ	ケズリ、ハケ	やや粗、2mm以下の砂粒を多く含む	良好	橙 5YR7/6	橙 7.5YR7/6	浅黄橙 10YR8/4	底部1/2以上		177	33
615	s20	Ⅳ	甕台部			(8.4)	指ナデ	ケズリ、指ナデ	やや粗、3mm以下の砂粒を多く含む	良好	にぶい黄橙 10YR6/4	にぶい黄橙 10YR5/3	にぶい黄橙 10YR6/3	底部1/4以下	体部内外面煤付着	177	33
616	q12	Ⅱ	甕台部			(9.1)	指ナデ	調整不明	密	良好	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	底部1/4以下		177	
617	o10	Ⅱ	甕台部			(8.3)	ケズリ	ケズリ	やや粗、2mm以下の砂粒を多く含む	良好	にぶい黄橙 10YR7/4	浅黄橙 10YR8/3	にぶい黄橙 10YR7/4	底部1/4以下		177	

遺物番号	出土地点	層位	器種	法量 口径	法量 器高	法量 底径	調整 外面	調整 内面	胎土	焼成	色調 外面	色調 内面	色調 断面	残存状態	備考	検図No.	図版No.
618	r11	Ⅱ	壺台部			(6.0)	ナデ	調整不明	やや粗、4mm以下の砂粒を多く含む	良好	橙 5YR7/6	にぶい橙 10YR7/4	にぶい橙 10YR7/4	底部1/4以上	底部内面煤付着	177	44
619	s13	Ⅳ	壺台部			(6.8)	指ナデ	ケズリ	密	良好	橙 7.5YR6/6	橙 5YR6/8	橙 2.5YR6/6	底部1/4以下		177	
620	r12	Ⅲ	壺台部			(7.0)	ケズリ後指ナデ	指ナデ	密	良好	明赤褐 2.5YR5/6	橙 5YR6/6	橙 2.5YR6/8	底部1/4以上		177	44
621	s11	Ⅳ	壺台部			(7.0)	指ナデ	指ナデ	密	良好	淡赤橙 2.5YR7/4	浅黄橙 10YR8/4	褐灰 10YR5/1	底部1/4以上		177	44
622	s20	Ⅲ	壺台部				ケズリ	調整不明	やや粗、3mm以下の砂粒を多く含む	良好	灰白 10YR8/2	灰白 10YR7/1	灰白 10YR8/2	底部1/4以下		177	
623	r13	Ⅲ	壺台部			(6.3)	ケズリ	指ナデ	やや粗、4mm以下の砂粒を多く含む	良好	橙 2.5YR6/8	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR6/6	底部1/4以下		177	33
624	q12	Ⅱ	壺台部			(6.6)	指ナデ	指ナデ	やや粗、3mm以下の砂粒を多く含む	良好	浅黄橙 10YR8/4	褐灰 N3/0	浅黄橙 10YR8/4	底部1/4以上		177	44
625	p13	Ⅱ	壺台部			(7.4)	指オサエ	調整不明	密	良好	にぶい黄橙 10YR6/3	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	底部1/4以上		177	
626	n7	Ⅳ	壺	(16.2)			工具によるナデ	工具によるナデ、ハケ	密	良好	にぶい黄橙 10YR6/4	にぶい黄橙 10YR6/4	にぶい黄橙 10YR7/4	口縁部1/12	口縁部外面押引き列点文	177	44
627	m4	Ⅳ	壺				ハケ	調整不明	密	良好	橙 5YR6/6	橙 5YR6/6	オリーブ黒 5Y3/1	台部1/4		177	44
628	s12	Ⅴ	壺G1				調整不明	調整不明	やや粗、2mm以下の砂粒を少量含む	良好	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	口縁部片	口縁部外面櫛状押引き	177	44
629	r13	Ⅳ	壺G1			(16.0)	工具によるナデ	ナデ	やや粗、3mm以下の砂粒を多く含む	良好	浅黄橙 10YR8/3	灰白 2.5YR8/2	黄灰 2.5Y5/1	口縁部1/12		177	44
630	r19	Ⅳ	壺G1	(20.6)			調整不明	ハケ	やや粗、2mm以下の砂粒を多く含む	良好	灰白 10YR8/1	灰白 10YR8/1	灰白 10YR8/1	口縁部1/6	口縁部外面櫛状押引き（6条以上）	177	44
631	r14	Ⅱ	壺G1	(17.9)			工具によるナデ	調整不明	やや粗、5mm以下の砂粒を多く含む	良好	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	口縁部1/12		177	44
632	s20	Ⅳ	壺G1	(16.0)			調整不明	調整不明	粗、3mm以下の砂粒を多く含む	良好	灰白 10YR8/2	にぶい橙 7.5YR6/3	褐灰 N3/0	口縁部1/12		177	
633	r13	Ⅱ	壺G1	(15.8)			ケズリ	ケズリ	やや粗、2mm以下の砂粒を多く含む	良好	にぶい黄橙 10YR6/3	にぶい黄橙 10YR6/3	にぶい黄橙 10YR6/3	口縁部1/12		177	44
634	r11	Ⅲ	壺G2	(15.8)			指オサエ	調整不明	やや粗、4mm以下の砂粒を多く含む	良好	にぶい黄橙 10YR7/4	浅黄橙 10YR8/3	灰 N4/0	口縁部1/6		177	44
635	r13	Ⅳ	壺G2				調整不明	調整不明	やや粗、2mm以下の砂粒を多く含む	良好	浅黄橙 10YR8/3	灰白 2.5Y7/1	褐灰 N3/0	口縁部片		177	44
636	q12	Ⅲ	壺G2	(16.3)			指ナデ	ケズリ	やや粗、2mm以下の砂粒を多く含む	良好	にぶい黄橙 10YR7/2	灰白 10YR8/2	灰 N4/1	口縁部1/12		178	44
637	p12	Ⅱ	壺G2	(14.9)			ケズリ	指ナデ	やや粗、3mm以下の砂粒を多く含む	良好	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄橙 10YR7/3	褐灰 10YR4/1	口縁部1/12	口縁部外面煤付着	178	44
638	r20	Ⅳ	壺G2	(11.6)			指ナデ	指ナデ	密	良好	褐灰 10YR6/1	褐灰 10YR6/1	褐灰 10YR6/1	口縁部1/6	口縁部外面櫛状押	178	
639	r20	Ⅲ	壺G2	(14.6)			調整不明	調整不明	やや粗、2mm以下の砂粒を少量含む	良好	橙 7.5YR7/6	にぶい黄橙 10YR7/3	浅黄橙 10YR8/4	口縁部1/12		178	44
640	s19	Ⅲ	壺G2	(13.8)			調整不明	調整不明	やや粗、3mm以下の砂粒を少量含む	良好	浅黄橙 10YR8/3	灰白 10YR8/2	にぶい黄橙 10YR7/4	口縁部1/12	口縁部外面櫛状押（6条）	178	
641	s14	Ⅱ	壺G2	(20.0)			調整不明	調整不明	やや粗、3mm以下の砂粒を少量含む	良好	灰白 2.5Y8/2	灰白 2.5Y8/2	黄灰 2.5Y6/1	口縁部1/12		178	
642	表採	Ⅰ	壺G2	(24.2)			工具によるナデ	調整不明	やや粗、5mm以下の砂粒を多く含む	良好	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	口縁部1/12		178	
643	s14	Ⅲ	壺G2	(15.0)			ナデ	ケズリ	密	良好	にぶい黄橙 10YR6/4	にぶい黄橙 10YR7/3	浅黄橙 10YR8/3	口縁部1/12		178	
644	s13	Ⅲ	壺G2	(12.6)			ハケ	ケズリ	密	良好	浅黄橙 10YR8/3	浅黄橙 10YR8/3	浅黄橙 10YR8/3	口縁部1/6	口縁部外面櫛状押	178	44
645	南谷	Ⅱ	壺G2	(10.4)			調整不明	調整不明	密	良好	浅黄橙 10YR8/3	浅黄橙 10YR8/3	浅黄橙 10YR8/3	口縁部1/12		178	44
646	r13	Ⅳ	壺A1	(21.3)	(33.8)	(6.2)	指ナデ、ハケ後ナデ	ミガキ、指ナデ、指オサエ、ハケ後ナデ	密	良好	橙 7.5YR7/6	浅黄橙 10YR8/4	褐灰 10YR6/1	口縁部1/12、底部1/4以上	口縁部外面櫛状押引き2条及び内面沿状列点文、体部外面横線2段と孔雀文、内外面赤彩	178	33
647	s11	Ⅲ	壺A1				調整不明	調整不明	密	良好	橙 2.5YR7/6	黄橙 10YR8/6	褐灰 10YR5/1	口縁部片	内外面赤彩	178	
648	r11	Ⅲ	壺A2	(11.7)			調整不明	調整不明	密	良好	橙 2.5YR6/6	橙 7.5YR6/8	褐灰 7.5YR4/1	口縁部1/6	口縁部外面櫛状押引き2条と円形沿文、内外面赤彩	178	45
649	s9	Ⅲ	壺A			3.3	ケズリ、ミガキ	調整不明	密	良好	にぶい橙 2.5YR6/4	にぶい橙 7.5YR6/4	にぶい橙 7.5YR6/4	底部完存	外面赤彩	178	33
650	m6	Ⅳ	壺A			(4.3)	ケズリ	ケズリ	密	良好	にぶい黄橙 10YR7/4	黄灰 2.5Y4/1	浅黄橙 10YR8/4	底部1/2以上	外面赤彩	178	33
651	r12	Ⅳ	壺B1	(23.5)			調整不明	指ナデ	やや粗、2mm以下の砂粒を多く含む	良好	にぶい黄橙 10YR6/4	灰黄褐 10YR5/2	灰黄褐 10YR4/2	口縁部1/6	口縁部外面沿状列点文と櫛状押1条	178	45
652	r13	Ⅳ	壺B1	(14.0)			ハケ、ミガキ	ハケ、ミガキ	密	良好	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR6/4	褐灰 7.5YR5/1	口縁部1/4		178	45
653	n4	Ⅲ	壺B1	(16.4)			調整不明	調整不明	密	良好	黄橙 10YR8/6	黄橙 10YR8/6	灰白 10YR7/1	口縁部1/6	口縁部外面櫛状押2条	178	45
654	q13	Ⅳ	壺B1	(14.8)			調整不明	ミガキ	密	良好	にぶい黄橙 10YR6/4	にぶい黄橙 10YR6/4	褐灰 10YR4/1	口縁部1/12		178	45
655	北谷	Ⅰ	壺B1	(16.4)			ミガキ	ミガキ	やや粗、1mm以下の砂粒を多く含む	良好	にぶい黄橙 10YR7/3	橙 7.5YR6/8	褐灰 10YR5/1	口縁部1/12		178	
656	r13	Ⅳ	壺B1	(17.2)			ハケ	ミガキ	密	良好	にぶい橙 7.5YR6/4	にぶい橙 7.5YR6/4	褐灰 7.5YR5/1	口縁部1/4	口縁部内面沿状押3条	178	3
657	r9	Ⅱ	壺B1	(17.6)			調整不明	調整不明	密	良好	浅黄橙 10YR8/4	にぶい黄橙 10YR7/4	褐灰 10YR5/1	口縁部1/3	口縁部外面櫛状押3条	178	45
658	r9	Ⅳ	壺B1	(18.2)			指ナデ	調整不明	密	良好	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/3	口縁部1/4		178	45
659	n8	Ⅳ	壺B1	(18.0)			ミガキ	ミガキ	密	良好	浅黄橙 10YR8/4	にぶい黄橙 10YR7/2	浅黄橙 10YR8/4	口縁部1/12	口縁部外面櫛状押（2条）	178	45

遺物番号	出土地点	層位	器種	法量 口径	法量 器高	法量 底径	調整 外面	調整 内面	胎土	焼成	色調 外面	色調 内面	色調 断面	残存状態	備考	挿図No.	図版No.
660	u12	Ⅲ	壺B				指ナデ	指ナデ	密	良好	にぶい橙 7.5YR6/4	灰 N4/1	にぶい橙 7.5YR6/4	頸部1/4、体部1/6	頸部横線6条2段と孤帯文	179	45
661	v13	Ⅳ	壺B				調整不明	指ナデ	やや粗、3mm以下の砂粒を多く含む	良好	橙 7.5YR7/6	暗灰 N3/0	浅黄橙 7.5YR8/6	体部1/8	頸部外面横線3段と波状文2段及び竹管列点文	179	
662	s11	Ⅳ	壺C2	(9.8)			ミガキ	調整不明	密	良好	浅黄橙 10YR8/3	浅黄橙 10YR8/3	浅黄橙 10YR8/3	口縁部1/12	口縁端部外面横線3条	179	
663	s11	Ⅳ	壺D1	(11.8)			指ナデ	調整不明	密	良好	橙 7.5YR6/6	橙 7.5YR7/6	にぶい橙 7.5YR7/4	口縁部1/12		179	44
664	t12	Ⅳ	壺D1	(8.2)			調整不明	調整不明	密	良好	灰白 2.5Y7/1	灰黄 2.5Y7/2	灰 N4/0	口縁部1/12		179	
665	m7	Ⅳ	壺D2?	(7.3)			ミガキ	ナデ	密	良好	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	口縁部1/12	口縁部外面横線4条	179	
666	q9	Ⅱ	壺D2	(10.0)			ケズリ	ケズリ	密	良好	灰白 2.5Y8/2	灰白 10YR8/1	灰 N6/0	口縁部1/4		180	45
667	q9	Ⅱ	壺D2			(4.0)	ミガキ	ケズリ	やや粗、3mm以下の砂粒を多く含む	良好	灰白 10YR8/2	灰白 10YR7/1	灰 N5/0	底部1/2以上	666と同一個体か?	180	45
668	o8	Ⅳ	壺D3	(12.6)		16.5	ミガキ	ハケ、ケズリ	やや粗、3mm以下の砂粒を少量含む	良好	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	口縁部5/12		180	33
669	o3	Ⅲ	壺B				ハケ	調整不明	密	良好	黄橙 7.5YR7/8	にぶい黄橙 10YR6/3	にぶい黄橙 10YR6/3	体部片	体部外面横線3条と列点文	180	
670	v13	Ⅳ	壺B				調整不明	調整不明	密	良好	浅黄橙 7.5YR8/6	褐灰 10YR5/1	浅黄橙 7.5YR8/6	体部片	外面横線3条以上と列点文、半截竹管列点文2段	180	45
671	o9	Ⅱ	壺B				調整不明	調整不明	密	良好	褐灰 10YR4/1	にぶい橙 7.5YR7/4	暗灰 N3/0	体部片	外面横線6条2段と櫛描列点文2段以上及び列点文	180	45
672	v13	Ⅳ	壺B				調整不明	調整不明	密	良好	黄橙 10YR8/6	褐灰 10YR4/1	黄橙 10YR8/6	体部片	外面竹管列点文	180	45
673	v13	Ⅳ	壺B				調整不明	ケズリ後指ナデ	密	良好	橙 7.5YR6/6	褐灰 7.5YR4/1	褐灰 7.5YR4/1	体部片	外面横線3条と羽状列点文及び櫛描列点文	180	45
674	o8	Ⅲ	壺B底部			(3.2)	ミガキ	ケズリ	密	良好	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	底部完存	底部外面煤付着	180	45
675	n7	Ⅳ	壺B底部			(4.0)	指オサエ	調整不明	密	良好	にぶい黄橙 10YR7/4	灰白 10YR8/2	灰白 10YR8/2	底部1/2以上		180	45
676	n6	Ⅳ	壺B底部			(4.6)	ミガキ	ミガキ	密	良好	にぶい橙 7.5YR6/4	にぶい橙 7.5YR6/4	灰 N6/0	底部1/4以上		180	45
677	t9	Ⅱ	壺B底部			5.4	ケズリ、底面ハケ	調整不明	やや粗、1mm以下の砂粒を多く含む	良好	にぶい褐 7.5YR5/4	にぶい褐 7.5YR5/3	にぶい褐 7.5YR5/3	底部4/5		180	45
678	u14	Ⅲ	壺B底部			(5.5)	指ナデ	ケズリ	密	良好	にぶい褐 7.5YR6/3	褐灰 7.5YR5/1	褐灰 7.5YR5/1	底部1/4以上		180	45
679	s20	Ⅳ	壺B底部			(6.3)	ケズリ	調整不明	やや粗、3mm以下の砂粒を多く含む	良好	にぶい黄橙 10YR7/4	浅黄橙 10YR8/3	浅黄橙 10YR8/3	底部1/4以上		180	
680	u11	Ⅲ	壺B底部			(5.2)	調整不明	調整不明	密	良好	橙 7.5YR6/6	灰 5Y4/1	橙 7.5YR7/6	底部1/4以上		180	
681	s20	Ⅳ	壺B底部			(5.6)	調整不明	調整不明	密	良好	灰白 2.5Y8/1	黄灰 2.5Y6/1	黄灰 2.5Y6/1	底部1/4以上		180	
682	p20	Ⅳ	壺B底部			(5.0)	調整不明	指ナデ	密	良好	黄橙 7.5YR8/8	橙 7.5YR7/6	褐灰 7.5YR5/1	底部1/4以上		180	
683	q13	Ⅱ	壺B底部			(5.8)	調整不明	調整不明	やや粗、2mm以下の砂粒を少量含む	良好	灰白 10YR7/1	灰白 10YR7/1	灰白 10YR7/1	底部1/4以上		180	
684	表採	Ⅰ	壺D底部				調整不明	調整不明	密	良好	浅黄橙 10YR8/3	褐灰 10YR6/1	浅黄橙 10YR8/3	底部1/2以上		180	
685	v19	Ⅲ	壺CD底部			2.0	ナデ	指ナデ	密	良好	橙 7.5YR7/6	浅黄橙 7.5YR8/6	黒褐 10YR3/1	底部完存		180	45
686	s20	Ⅳ	壺D底部			1.7	ミガキ	調整不明	密	良好	にぶい黄褐 10YR5/3	にぶい橙 7.5YR6/4	灰 N4/0	底部1/2以上		180	45
687	o8	Ⅳ	壺D底部			2.2	ハケ	指ナデ	密	良好	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	灰 N6/0	底部完存	底部水平方向への穿孔有り	180	45
688	u11	Ⅲ	壺脚部			7.8	ミガキ	調整不明	密	良好	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	口縁部5/6	1孔3組3穿孔	180	34
689	v11	Ⅳ	土製品				—	—	密	良好	にぶい黄橙 10YR7/4	— —	灰 5Y5/1	9/10	中央付近に穿孔有り、上面指オサエ	180	45
690	SB16内P4	01	深鉢				調整不明	調整不明	やや粗、2mm以下の砂粒を多く含む	良好	にぶい橙 7.5YR7/4	暗灰 N3/0	灰褐 7.5YR5/2	口縁部片	口縁端部外面沈線及び刺突	181	45
691	SB58	02	甕				調整不明	調整不明	やや粗、1mm以下の砂粒を多く含む	良好	橙 5YR6/6	橙 5YR6/6	にぶい赤褐 5YR5/4	口縁部片	口縁端部外面凸帯文	181	45
692	y12	Ⅲ	高坏G	(20.7)			ケズリ後指ナデ	指ナデ	密	良好	橙 5YR6/6	明赤褐 2.5YR5/6	橙 5YR5/6	坏部1/6		181	45
693	y12	Ⅲ	高坏H				ミガキ及び指ナデ	ミガキ、ケズリ後指ナデ	密	良好	明赤褐 5YR5/6	明赤褐 5YR5/6	明赤褐 5YR5/6	坏部1/2		181	34
694	y12	Ⅲ	高坏脚部			(10.8)	指ナデ	指ナデ	密	良好	にぶい黄橙 10YR6/3	にぶい黄橙 10YR6/3	褐灰 10YR4/1	脚部1/4以下		181	45
695	y12	Ⅲ	高坏脚部			(8.8)	ミガキ	調整不明	密	良好	橙 5YR7/6	浅黄橙 7.5YR8/6	浅黄橙 7.5YR8/6	脚部1/4以下		181	45
696	y12	Ⅲ	高坏脚部	(10.5)			指ナデ	ケズリ	密	良好	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	脚部1/4以下		181	45
697	y12	Ⅲ	高坏脚部			(9.0)	指ナデ	調整不明	密	良好	橙 5YR6/6	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	脚部1/4以下		181	45
698	y12	Ⅲ	高坏脚部			(9.1)	指ナデ	調整不明	密	良好	橙 5YR6/6	橙 5YR6/6	橙 7.5YR6/6	脚部1/4以上		181	45
699	y12	Ⅲ	甕I	(14.3)			ハケ	ケズリ後指ナデ	やや粗、1mm以下の砂粒を多く含む	良好	橙 7.5YR6/6	にぶい褐 7.5YR5/4	橙 7.5YR6/6	口縁部1/4、体部1/5	外面煤付着	181	34
700	y12	Ⅲ	甕I			9.6	ケズリ後指オサエ	指ナデ	密	良好	にぶい黄褐 10YR5/3	にぶい黄褐 10YR5/4	にぶい黄橙 10YR6/4	台部完存		181	34
701	y12	Ⅲ	壺E	(10.6)			調整不明	ミガキ	密	良好	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	口縁部1/3		181	34
702	q10	Ⅱ	須恵器坏蓋	(12.2)			回転ナデ	回転ナデ	密	良好	灰 N5/0	灰 N5/0	灰褐 5YR5/2	口縁部1/12		181	45

遺物番号	出土地点	層位	器種	法量 口径	法量 器高	法量 底径	調整 外面	調整 内面	胎土	焼成	色調 外面	色調 内面	色調 断面	残存状態	備考	検図No.	図版No.
703	a10	Ⅲ	須恵器有蓋高杯	(13.6)			回転ヘラケズリ、回転ナデ	回転ナデ	密	良好	明灰 10BG/1	にぶい黄橙 10YR6/3	にぶい黄橙 10YR7/2	口縁部1/6		191	34
704	r14	Ⅱ	須恵器蓋	(17.4)			回転ナデ、回転ヘラケズリ	回転ナデ	密	良好	浅黄 2.5Y6/3	浅黄 2.5Y6/3	浅黄 2.5Y6/3	口縁部1/6		191	45
705	a14・r14・r1	Ⅱ	須恵器蓋	(17.0)			回転ナデ	回転ナデ	密	良好	灰 N5/0	灰 N5/0	灰 7.5Y6/1	口縁部1/6		191	45
706	r13・a14	Ⅱ・	須恵器見込蓋			(10.0)	回転ヘラケズリ、回転ナデ	回転ナデ	密	良好	灰白 10YR7/1	灰白 10YR7/1	灰白 10YR7/1	底部1/4以下	外面沈線1条、外面及び底部内面自然釉有り	191	45
707	・r19	Ⅲ	山茶碗椀	(13.2)			回転ナデ	回転ナデ	密	良好	灰白 N7/1	灰白 N7/1	灰白 2.5Y7/1	口縁部1/4	内外面自然釉有り	192	45
708	L1・r20	Ⅲ・	山茶碗椀	(13.5)			回転ナデ	回転ナデ	密	良好	灰白 2.5Y7/1	灰白 2.5Y7/1	灰白 N7/1	口縁部1/6	内外面自然釉有り	192	45
709	r14	Ⅱ	山茶碗椀	(13.6)			回転ナデ	回転ナデ	密	良好	にぶい黄橙 10YR7/2	灰白 10YR7/1	にぶい黄橙 10YR7/2	口縁部1/12		192	
710	a8・r20	Ⅲ・	山茶碗椀	(13.0)			回転ナデ	回転ナデ	密	良好	灰白 10YR7/1	灰白 10YR7/1	灰白 2.5Y7/1	口縁部1/12	内面自然釉有り	192	
711	r19	Ⅲ	山茶碗椀	(13.0)			回転ナデ	回転ナデ	密	良好	灰白 2.5Y7/1	灰白 2.5Y7/1	灰白 2.5Y7/1	口縁部1/12	内外面自然釉有り	192	
712	側溝	Ⅱ	山茶碗椀	(14.6)	4.5	(4.0)	回転ナデ	回転ナデ	密	良好	灰白 5Y7/1	灰白 5Y7/1	灰白 2.5Y7/1	口縁部1/4	内外面自然釉有り、高台に粉砕痕	192	45
713	r11	Ⅱ	山茶碗椀	(11.4)			回転ナデ	回転ナデ	密	良好	にぶい黄橙 10YR7/2	にぶい黄橙 10YR7/4	灰白 10YR7/1	口縁部1/12	内外面自然釉有り	192	
714	L1	Ⅲ	山茶碗小皿	(9.5)	(1.1)	(6.1)	回転ナデ、底面糸切り痕	回転ナデ	密	良好	灰白 10YR7/1	灰白 10YR7/1	灰白 10YR7/1	口縁部1/12		192	45
715	・a20	Ⅲ	山茶碗小皿	(9.5)	0.9	(4.2)	回転ナデ、底面糸切り痕	回転ナデ	密	良好	灰白 10YR7/1	灰白 10YR7/1	灰白 10YR7/1	口縁部1/6		192	45
716	r16	Ⅱ	青磁椀	(8.4)			—	—	密	良好	緑灰 10GY6/1	緑灰 10GY6/1	灰白 10Y8/1	口縁部1/6	全面に施釉有り、体部外面鎬蓮弁文	192	45
717	r11	Ⅱ	瓦	(10.4)			回転ナデ	回転ナデ	密	良好	にぶい赤橙 5YR6/4	にぶい赤橙 5YR6/4	にぶい黄橙 10YR7/2	口縁部1/12	内外面施釉有り	192	45
718	r5	Ⅱ	土錘又は土筆			(7.6)	回転ヘラケズリ、底面糸切り痕、回転ナデ	回転ナデ	密	良好	灰黄 2.5Y7/2	にぶい赤橙 5YR6/3	灰黄 2.5Y7/2	底部1/4以上	内外面施釉有り、外面煤付着	192	45

表26　大平前遺跡出土土器観察表

遺物番号	出土地点	層位	器種	法量 口径	法量 器高	法量 底径	調整 外面	調整 内面	胎土	焼成	色調 外面	色調 内面	色調 断面	残存状態	備考	検図No.	図版No.
801	D4	Ⅲ	杯蓋	(14.4)	3.4		回転ヘラケズリ	回転ナデ	密	良好	灰 5Y/6	灰 5Y/6	灰白 5Y/7	口縁部7/12		202	50
802	D4	Ⅲ	杯蓋	(16.0)			回転ナデ	回転ナデ	密	良好	灰白 N/7	灰白 N/7	灰白 N/7	口縁部0.7/12		202	50
803	D4	Ⅲ	杯蓋	(15.4)			回転ヘラケズリ	回転ナデ	密	良好	灰 5Y/5	灰白 5Y/7	灰白 5Y/7	口縁部2.5/12		202	50
804	D5	Ⅱ	杯蓋	(14.6)			回転ナデ	回転ナデ	密	良好	黄灰 2.5Y/5	黄灰 2.5Y/5	黄灰 2.5Y/6	口縁部0.4/12		202	
805	D4	Ⅰ	杯蓋	(13.7)			回転ナデ	回転ナデ	密	良好	灰 N5/0	灰 N5/0	にぶい黄橙 10YR6/3	口縁部1/6		202	50
806	D5	Ⅲ	杯蓋	(13.2)			回転ナデ	回転ナデ	密	良好	灰 5Y/6	灰 5Y/6	灰白 5Y/7	口縁部0.5/12		202	50
807	D4	Ⅲ	杯身	(10.6)			回転ヘラケズリ	回転ナデ	密	良好	黄灰 2.5Y/6	黄灰 2.5Y/6	灰 2.5Y/1	口縁部0.8/12		202	50
808	D4	Ⅲ	杯身	(14.6)	3.1	(10.3)	回転ヘラケズリ	回転ナデ	密	良好	灰 5Y/6	黄灰 2.5Y/6	灰白 5Y/7	口縁部1.1/12 底部1/4		202	50
809	D3・D4	Ⅲ	杯身	(15.2)			回転ナデ	回転ナデ	密	良好	灰白 10Y 7/1	灰白 10Y 7/1	灰白 5Y 7/2	口縁部1.8/12		202	50
810	D5	Ⅰ	杯身		1.4	(10.4)	回転ナデ	回転ナデ	密	良好	灰 7.5Y/6	黄灰 2.5Y/6	灰 7.5Y/5	底部1/6		202	50
811	D5	Ⅰ	杯身		1.5	(10.3)	回転ヘラケズリ	回転ナデ	密	良好	灰 N/6	灰白 N/7	灰白 N/7	底部1/6		202	50

表22　住居跡出土鉄製品観察表

遺物番号	出土古墳・地点	出土層位	種別	法量 長さ・径（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	質量（g）	残存状態	備考	挿図No.	図版No.
2001	SB35	03	鉄鏃	4.30	1.30	0.45	4.4	定形	主頭斧箭鏃	158	39
2002	SB69	03	鉋	7.00	1.30	0.40	12.1	先端部及び身部下半欠損	刃部裏すき	158	39

表23　南青柳古墳出土鉄製品観察表

遺物番号	出土古墳・地点	出土層位	種別	法量 長さ・径（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	質量（g）	残存状態	備考	挿図No.	図版No.
2003	主体部	03	鉄剣	50.00	2.60	0.60	194.1	先端部欠損	鞘木質残存，目釘残存	167	40
2004	主体部	03	鉄刀	84.10	3.20	0.80	670.1	先端部欠損	鞘木質残存，目釘穴（2穴），●装着痕	167	40
2005	主体部	03	柄頭飾金具か？	7.40	2.20	0.65	21.7	一部欠損	内面に木質残存（木心鉄板張り）	167	40
2006	主体部盗掘坑	下層	横矧板鋲留短甲片	8.20	6.15	0.80	58.6	縁部片	覆輪残存	167	41
2007	主体部盗掘坑	下層	横矧板鋲留短甲片	4.40	4.30	0.55	20.8	端部片	覆輪残存	167	41
2008	主体部盗掘坑	上層	横矧板鋲留短甲片	3.10	1.90	0.60	6.0	端部片	覆輪残存	167	41
2009	墳頂部（s5）	II	横矧板鋲留短甲片	3.00	2.10	0.60	6.1	端部片	覆輪残存	167	41
2010	西側2段目テラス（s4）	I	横矧板鋲留短甲片	3.60	2.50	0.80	8.2	端部片	覆輪残存	167	41
2011	主体部盗掘坑	下層	横矧板鋲留短甲片（蝶番金具）	6.20	4.30	1.80	38.2	端部片	鋲残存，覆輪残存	167	41
2012	主体部盗掘坑	下層	横矧板鋲留短甲片	5.40	4.40	0.25	17.4	端部片	覆輪痕跡	168	41
2013	主体部盗掘坑	上層	横矧板鋲留短甲片	4.20	2.20	0.30	9.2	端部片	覆輪痕跡	168	41
2014	主体部盗掘坑	上層	横矧板鋲留短甲片	3.20	2.30	0.30	4.2	端部片	覆輪痕跡	168	41
2015	墳頂部（s5）	I	横矧板鋲留短甲片	3.20	3.00	0.30	6.9	端部片		168	41
2016	主体部盗掘坑	下層	横矧板鋲留短甲覆輪片	5.60	1.10	0.25	4.4	覆輪小片		168	41
2017	主体部盗掘坑	下層	横矧板鋲留短甲覆輪片	2.70	0.90	0.20	1.5	覆輪小片		168	41
2018	主体部盗掘坑	下層	横矧板鋲留短甲覆輪片	2.30	0.95	0.30	1.8	覆輪小片		168	41
2019	主体部盗掘坑	下層	横矧板鋲留短甲覆輪片	2.20	1.10	0.40	1.9	覆輪小片		168	41
2020	主体部盗掘坑	下層	横矧板鋲留短甲覆輪片	2.00	1.05	0.25	1.8	覆輪小片		168	41
2021	主体部盗掘坑	上層	心葉形杏葉片	3.50	2.60	0.75	5.2	縁金具片	鋲残存	168	41
2022	主体部盗掘坑	上層	杏葉縁金具	2.30	1.50	0.30	2.3	縁金具小片		168	41
2023	主体部盗掘坑	上層	杏葉縁金具	2.30	1.90	0.40	1.7	縁金具小片		168	41
2024	主体部盗掘坑	下層	杏葉縁金具	1.60	1.30	0.20	1.2	縁金具小片		168	41
2025	主体部盗掘坑	下層	杏葉縁金具	1.80	1.15	0.15	1.3	縁金具小片		168	41
2026	墳頂部（s5）	II	鉄剣片？	2.60	1.80	0.40	4.4	刀身の小片	主体部南75cm地点出土	168	41
2027	墳頂部（s5）	下層	不明	2.50	1.20	0.30	1.5	端部小片		168	41
2028	墳頂部（s5）	上層	不明	2.05	1.30	0.45	2.4	端部小片		168	41
2029	主体部盗掘坑	上層	鉄鏃？	2.10	1.30	0.20	0.8	端部小片		168	41
2030	墳頂部（s5）	II	不明	3.25	1.70	0.45	3.4	端部小片		168	41

表24　包含層出土鉄製品観察表

遺物番号	出土古墳・地点	出土層位	種別	法量 長さ・径（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	質量（g）	残存状態	備考	挿図No.	図版No.
2031	m6	IV	曲刃鎌	4.00	3.05	0.40	9.1	刃部中央部分	SB67床面端に隣接	182	46
2032	o9	II	曲刃鎌	5.50	2.50	0.50	20.3	刃部中央部分		182	46
2033	p3	III	釘	6.95	0.95	0.35	8.9	先端部欠損	角頭	182	46
2034	n6	IV	釘	6.55	0.80	0.40	5.6	先端部及び頭部欠損		182	46

表25　包含層出土ガラス製品観察表

遺物番号	出土古墳・地点	出土層位	種別	法量 長さ・径（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	質量（g）	残存状態	備考	挿図No.	図版No.
3001	u5	I	ガラス小玉	(1.80)	(1.80)	(1.00)		約1/3残存	ソーダ石灰ガラス，穿孔有り	182	43
3002	r4	II	ガラス小玉	−	−	0.30		端部小片	カリガラス	182	43

表27　南青柳遺跡出土石器観察表

遺物番号	出土地点	層位	器種	石材	加工技術	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	所見	挿図No.	図版No.
1001	SB66	01	削器	頁岩	HD	80.4	50.7	28.2	旧石器，分厚い横長剥片の打面部をHD急角度で整形，側縁の薄い縁辺にHDで刃部を形成。	183	47
1002	SB34	02	剥片	頁岩	HD	64.1	43.6	11.0	旧石器	183	47
1003	v16	Ⅱ	二次加工剥片	頁岩	HD	28.4	52.0	14.1	旧石器，打面は折り取られている。	183	47
1004	SB26	02	剥片	頁岩	HD	26.1	37.4	8.2	旧石器	183	47
1005	v18	Ⅲ	石核	頁岩	HD	28.3	61.5	27.3	旧石器	183	47
1006	V13	Ⅳ	石鏃（有茎）	安山岩（下呂）	HP	3.4	9.0	5.0		184	47
1007	SB54	02	石鏃（有茎）	安山岩（下呂）	HP	3.2	1.7	7.0	縁辺を鋸歯状に加工	184	47
1008	3	Ⅲ	石鏃（有茎）	チャート	HP	2.1	1.3	4.0	表裏に素材面を残し，縁辺を急角度剥離。素材は両極剥片。茎部短い	184	47
1009	表採（北谷）	Ⅱ	石鏃（有茎）	チャート	HP	2.2	1.3	4.0	縁辺を鋸歯状に加工。茎部が短い	184	47
1010	r10	Ⅳ	石鏃（凹基）	凝灰岩	SP	1.7	1.7	3.0	縄文前期の可能性	184	47
1011	v13	Ⅳ	石鏃（凹基）	チャート	SP	1.9	1.9	3.0	縄文前期の可能性、裏面側脚部に素材面を残す。脚の抉りは急角度剥離。先端部わずかに欠損。	184	47
1012	SB57	02	石鏃（凹基）	チャート	HP	1.7	1.7	4.0		184	47
1013	SB35	01	石鏃（凹基）	チャート	HP	1.2	1.5	3.5		184	47
1014	6	Ⅱ	石鏃（凹基）	安山岩（下呂）	HP	1.5	1.5	5.0		184	47
1015	SB30	03	石鏃（凹基）	チャート	HP	1.9	1.3	4.0		184	47
1016	SB16	01	石鏃（凹基）	チャート	HP	1.6	1.6	5.0		184	47
1017	t18	Ⅱ	石鏃（凹基）	安山岩（下呂）	HP	1.5	1.6	4.0	先端部わずかに欠損	184	47
1018	SB16	01	石鏃（凹基）	安山岩（下呂）	HP	2.1	1.9	4.0	左側辺脚部欠損	184	47
1019	t14	Ⅱ	石鏃（凹基）	チャート	HP	2.6	1.4	4.0	左側辺脚部欠損	184	47
1020	n7	Ⅱ	石鏃（凹基）	チャート	HP	2.1	1.6	3.0	右側辺脚部と先端部わずかに欠損	184	47
1021	SB73	01	石鏃（凹基）	安山岩（下呂）	HP	8.0	8.0	3.0	脚部の破片	184	47
1022	SB63	02	石鏃（凹基）	チャート	HP	2.0	1.9	6.0	左側辺脚部欠損	184	47
1023	n3	Ⅱ	石鏃（平基）	安山岩（下呂）	HP	2.4	1.7	5.5	両側辺の中央部で抉りを入れる	184	47
1024	q5	Ⅱ	石鏃？	チャート	HP	2.5	1.7	5.0	先端部を急角度で加工。左側辺基部欠損	184	47
1025	n5	Ⅱ	石鏃?	チャート	HP	1.9	1.5	5.0	先端部は急角度剥離で整形	184	47
1026	m5	Ⅱ	石鏃（凹基）	チャート	HP	1.2	1.1	3.0	脚部欠損	184	47
1027	SB21	01	石錐?	チャート	HP	33.6	21.7	12.3		184	47
1028	SB60	02	石匙	赤チャート	HP	47.4	30.2	8.8	摘み部の抉りはHIで整形。右側辺は微細剥離が顕著	184	47
1029	n3	Ⅱ	石匙	赤チャート	HP	45.3	34.8	7.2	垂直打撃の剥片を素材とする。刃部には微細剥離が顕著	184	47
1030	表採（南谷）	Ⅱ	打製石斧	砂岩	HD	105.2	49.7	16.2	裏面に若干研磨による磨耗が見られる	185	48
1031	SB73	01	打製石斧	砂岩	HvD	68.6	45.2	15.2	左側辺はHvD潰しが強く，右側辺はHvD潰しの程度が弱い。刃部欠損。	185	48
1032	P6	Ⅱ	打製石斧	砂岩	HvD	73.1	50.7	13.6	HvDで両側縁を加工	185	48
1033	17	Ⅱ	打欠石錘	砂岩	HvD	36.4	33.7	10.5		185	48
1034	u12	Ⅳ	打欠石錘	砂岩	HvD	38.9	30.5	12.9		185	48
1035	SB75	01	打欠石錘	砂岩	HvD	65.0	45.2	18.8		185	48
1036	r9	Ⅳ	敲石	砂岩		67.3	51.6	24.6	上下端部に敲打痕明瞭。表面にわずかにアバタ状の敲打痕	185	48
1037	15	Ⅲ	敲石	砂岩		64.0	41.0	31.9	下端部に平坦面をもつ滑らかな敲打面	186	48
1038	SB63	02	敲石	砂岩		63.0	37.4	35.9	上下端部に平坦面をもつ滑らかな敲打面	186	48
1039	v12	Ⅳ	敲石	砂岩		109.9	53.2	35.6	上下端部に平坦面をもつ滑らかな敲打面	186	48
1040	SB54	03	敲石	砂岩		116.3	46.9	34.3	上下端部と右側辺に敲打面	186	48
1041	r10	Ⅱ	敲石	砂岩		103.3	49.6	31.6	上下端部と右側辺に敲打面	186	48
1042	s12	Ⅲ	敲石	砂岩		78.2	50.2	18.9	表面にアバタ状敲打痕の集中が二カ所。右側辺に敲打痕	186	48
1043	SK16	01	敲石	砂岩		136.9	78.3	32.1	上下端部と右側辺に敲打痕	186	48
1044	表採（北谷）	Ⅱ	敲石	砂岩		82.2	56.1	36.2	上部欠損。下端部と右側辺に敲打痕と表裏にアバタ状の敲打痕	187	48
1045	SB80	F	磨石	安山岩		114.0	109.4	78.3	表裏に磨面	187	48
1046	SB56	02	磨石	輝石安山岩		109.4	100.9	48.5	風化激しいが表裏に磨面	187	48
1047	SB50	02	石皿	凝灰岩		132.8	66.3	31.3	表面に磨面顕著	187	49
1048	16	Ⅱ	台石	砂岩		93.6	32.0	28.8	表裏に敲打痕。台石の断片	187	49
1049	SK19	02	砥石	砂岩		66.5	49.7	35.6	細いV字状のスジが数条各面に形成	187	49
1050	SB26	03	砥石	砂岩		83.7	63.7	24.9	表面と右側辺に細いV字状のスジが数条形成	187	49
1051	SB37	02	砥石	砂岩		99.5	80.5	14.8	表面に磨面形成，極細の線状痕が見られる	187	49
1052	SB57	03	不明石製品	砂岩		65.3	49.7	22.3	表裏側面は研磨により整形	187	47
1053	SB31	01	台石	輝石安山岩		164.0	163.1	62.5	表面の凹は自然のものであるが，凹の底面に敲打痕	188	49
1054	SB54		石皿？	砂岩		235.2	214.1	156.4	中央部に臼状の凹を形成。五輪塔の一部の可能性もある	188	49

（加工技術の凡例）
HD：ハードハンマーの直接打撃
HvD：ハードハンマーの垂直方向からの直接打撃
HI：ハードハンマーの間接打撃
HP：ハードハンマーの押圧剥離
SP：ソフトハンマーの押圧剥離

図　　版

南青柳遺跡全景

南青柳遺跡遠景（北東から）

南青柳遺跡遠景（北西から）

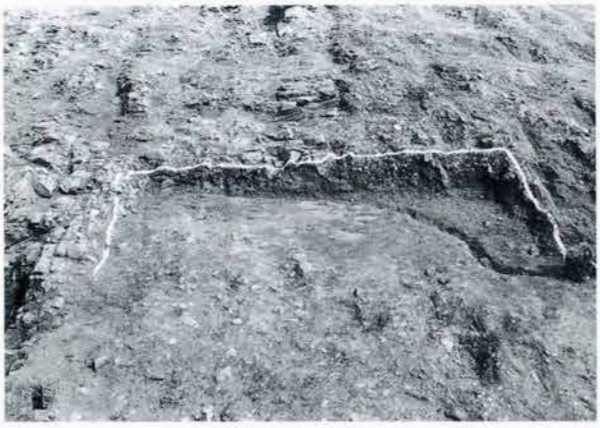
2 図版

南青柳遺跡調査前（南から）

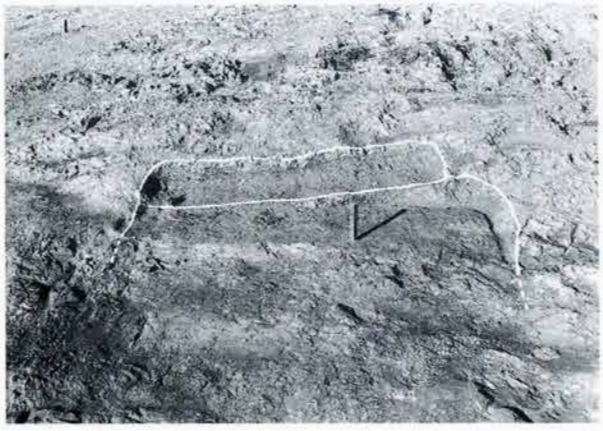
北尾根西部遺構検出状況

ＳＢ01

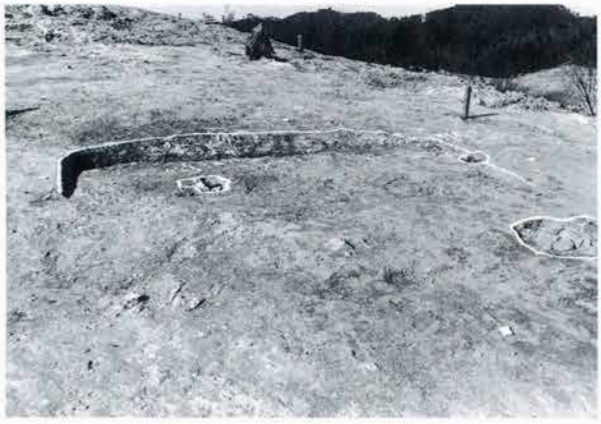
ＳＢ01・ＳＤ01・ＳＫ01



ＳＢ02



ＳＢ03



ＳＢ04

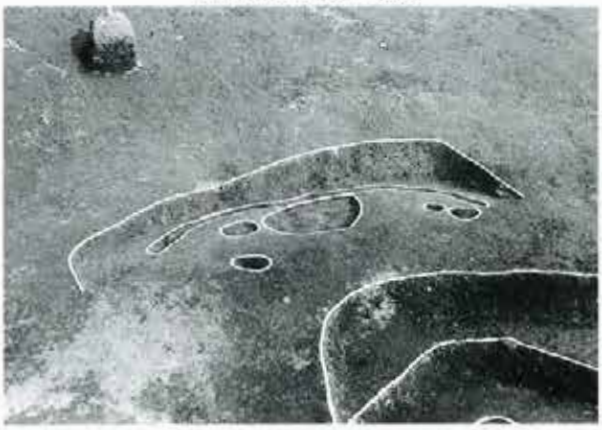
ＳＢ04内Ｐ04遺物検出状況

ＳＢ05・06

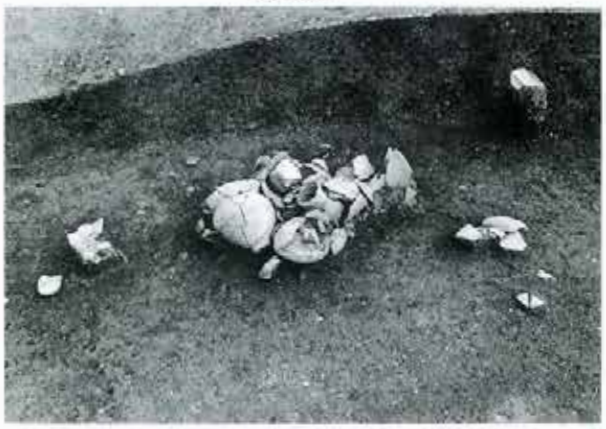
ＳＢ07

ＳＢ07遺物検出状況

ＳＢ08



ＳＢ09



ＳＢ09遺物出土状況

ＳＢ10

ＳＢ11遺物出土状況

S B 13・39・40（遠景）

S B 13

S B 14

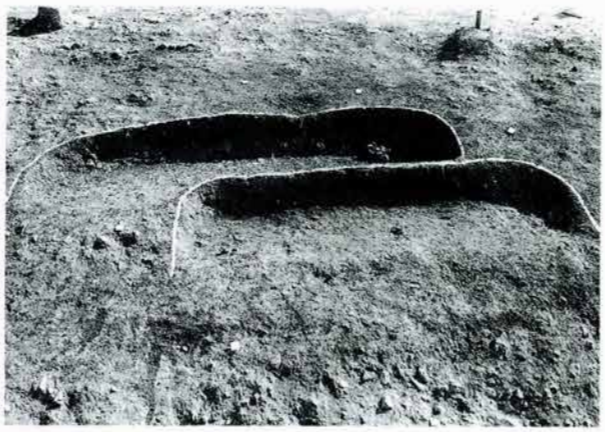
S B 15・32

S B 16

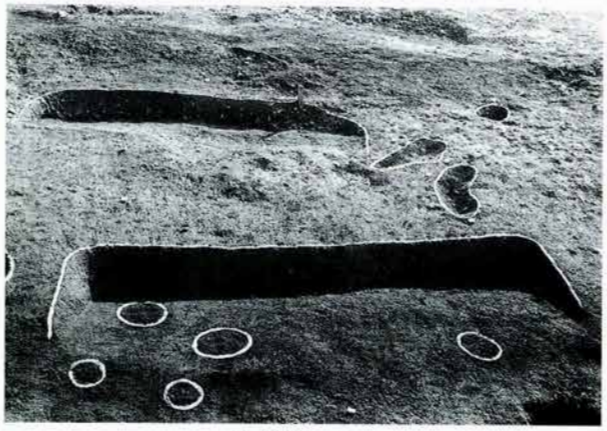
南谷遺構検出状況（西から）

S B 17（上）・48（下）

S B 18・19

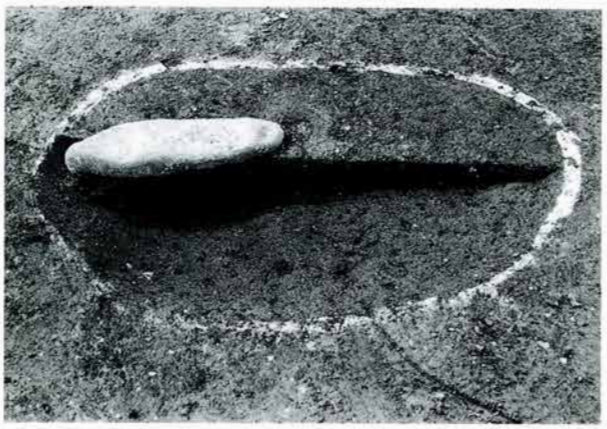


ＳＢ20・21

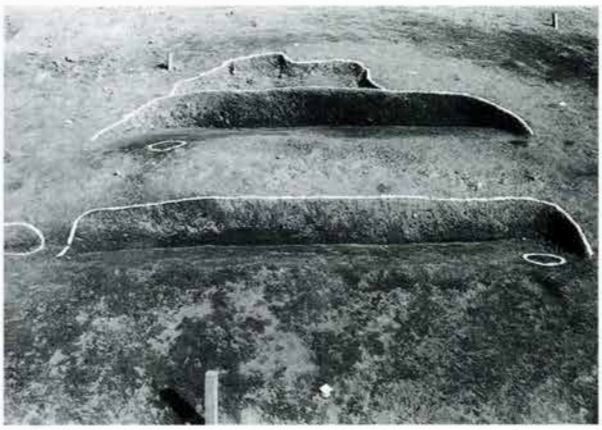


ＳＢ22・24

ＳＢ23遺物出土状況



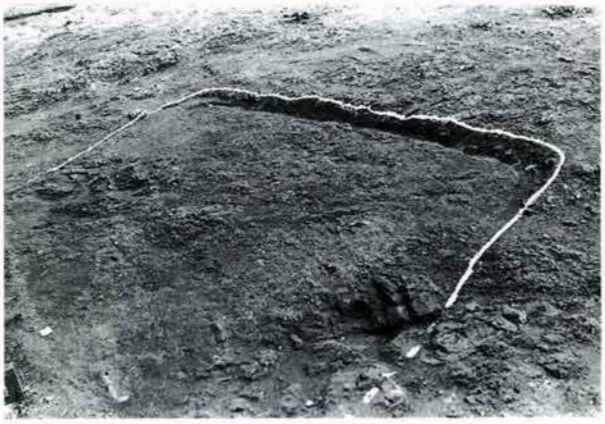
ＳＢ23地床炉半掘状況



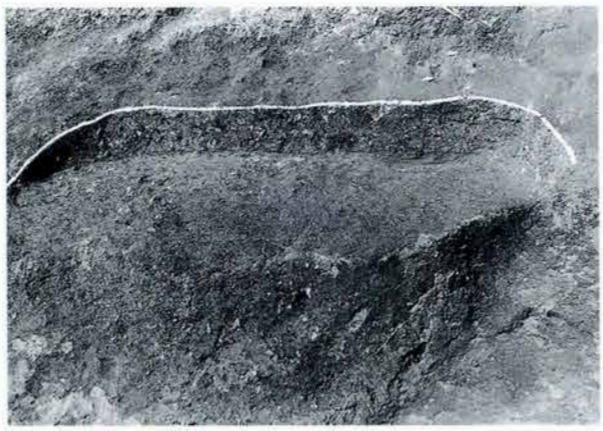
ＳＢ25・27・ＳＫ16

ＳＢ26

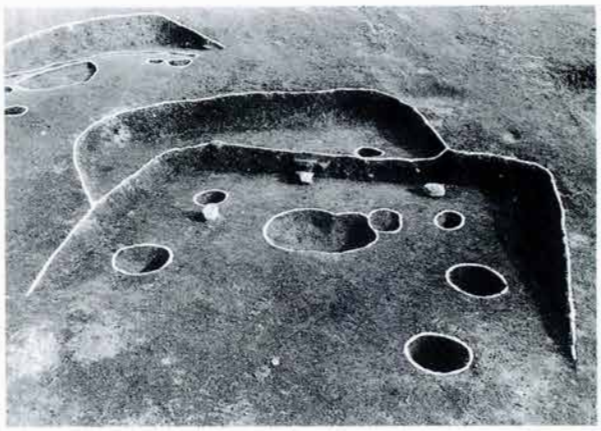
ＳＢ11（左上）・ＳＢ35（中央）・ＳＢ28（右上）



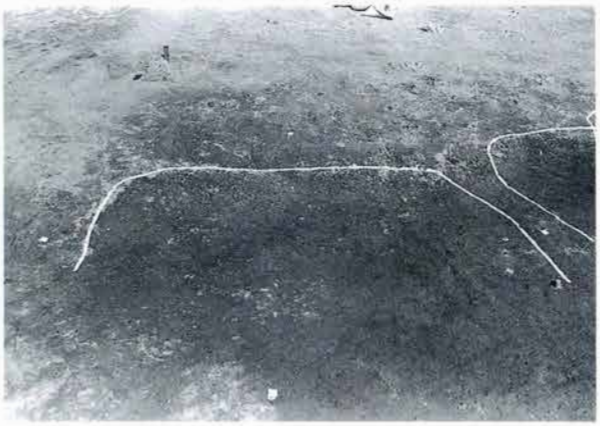
ＳＢ29



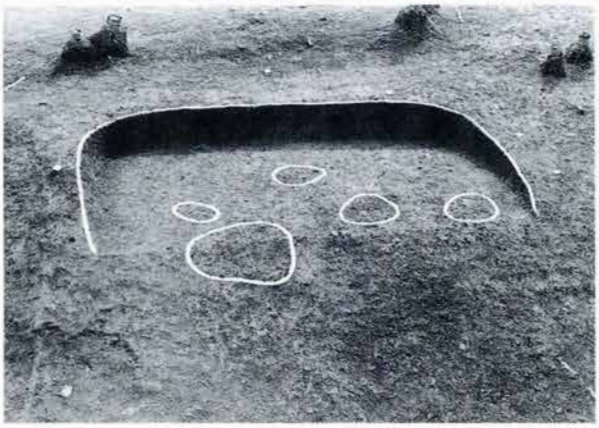
ＳＢ30



ＳＢ31(上)・54(下)



ＳＢ33



ＳＢ34

南谷上部（ＳＢ35・46・16付近）遺構検出状況

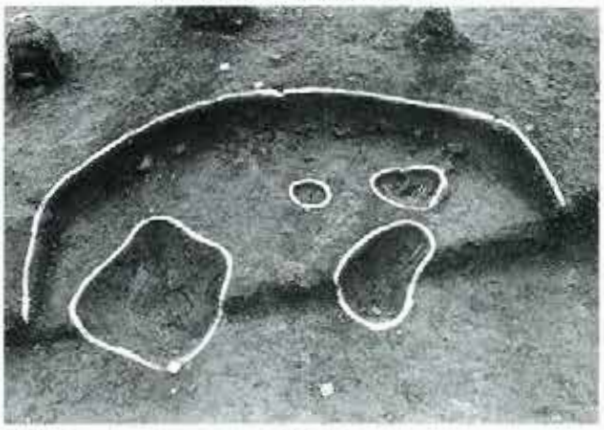
ＳＢ35炭化材検出状況

ＳＢ35

ＳＢ35鉄鏃出土状況

ＳＢ35遺物（器台）出土状況

南谷西部遺構検出状況

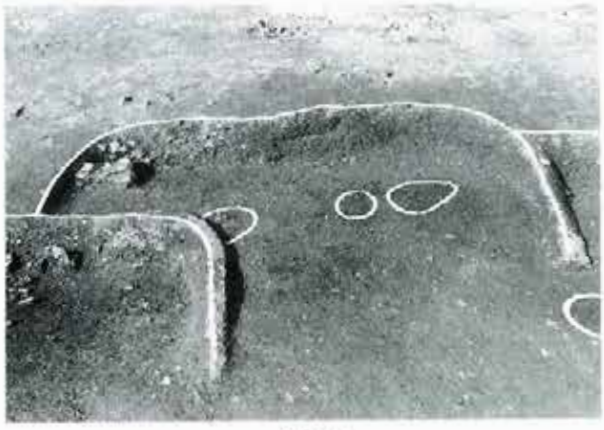


ＳＢ36

ＳＢ37遺物出土状況

ＳＢ38

ＳＢ39（右）・40（左）

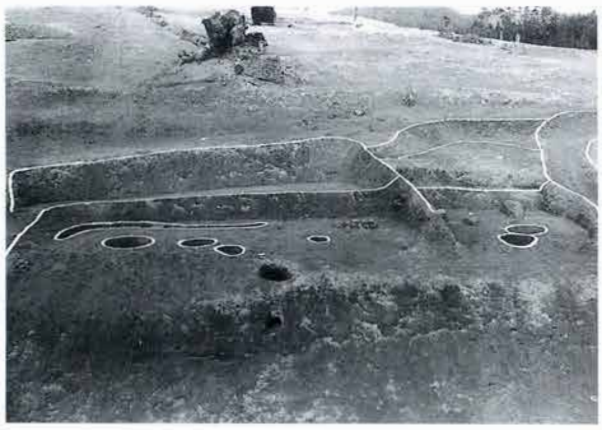


ＳＢ40

南谷上部遺構検出状況

S B41

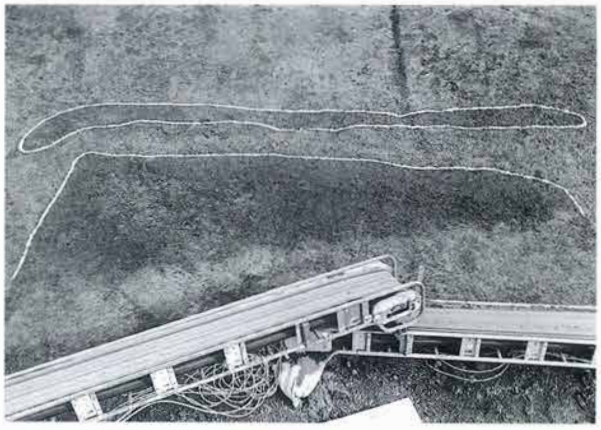
S B41炭化材検出状況



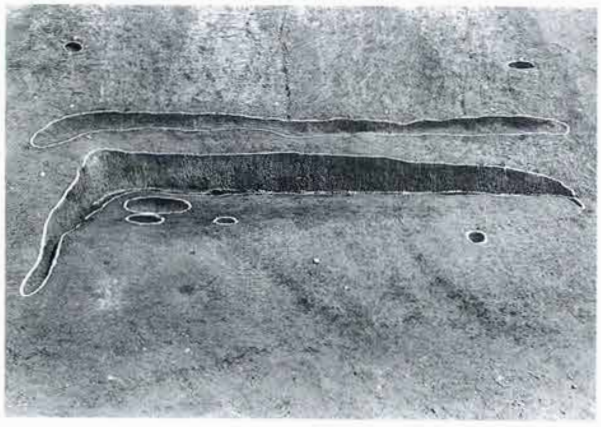
S B43（上）・42（下）

S B43(上)

S B44



S B47検出状況



S B47

S B17（上）・48（下）

北谷遺構検出状況（西北より）

ＳＢ50

ＳＢ50地床炉検出状況

ＳＢ52

ＳＢ53

ＳＢ09（上）・ＳＢ31（中）・ＳＢ54（下）

ＳＢ56

北谷遺構検出状況（東より）

S B58

S B59

S B60

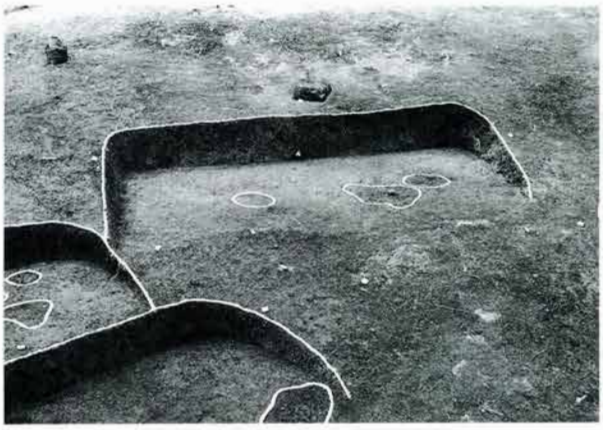
S B61

S B62

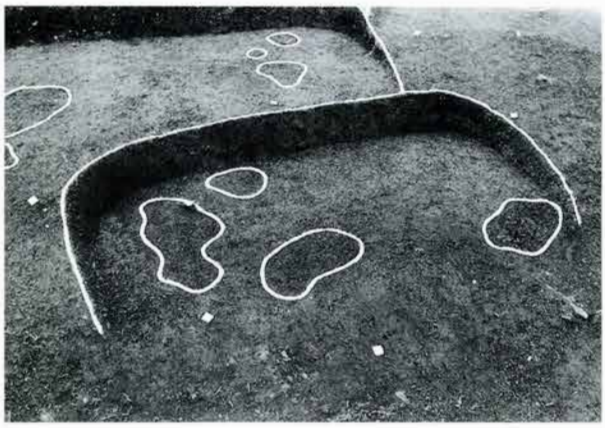
S B62地床炉検出状況

S B36（上）・59（中上）・63（中下）・65（下）

S B63



S B64



S B65

S B66

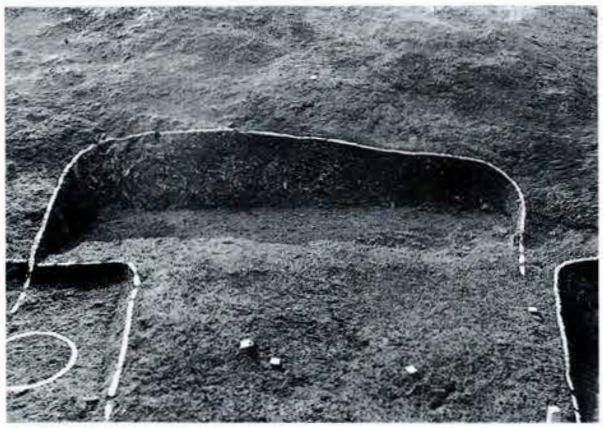
S B67

S B68

S B69

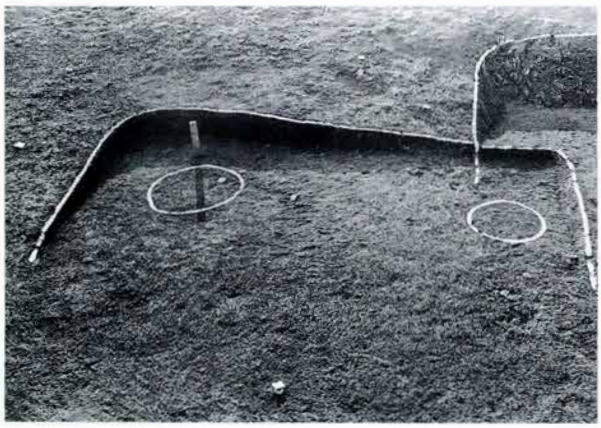
東谷遺構検出状況（西北より）

東谷遺構検出状況（南東より）

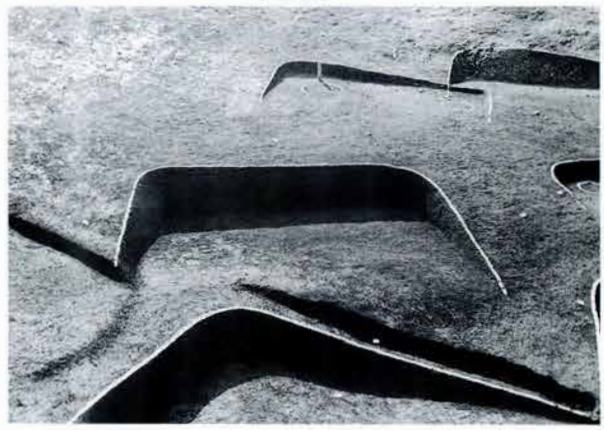


S B 71

S B 73

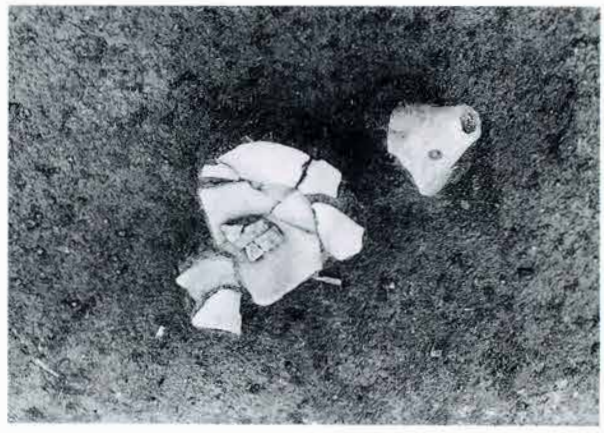


S B 74

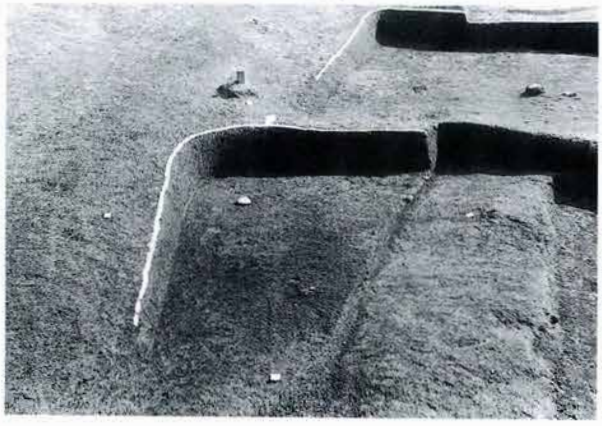


S B 75

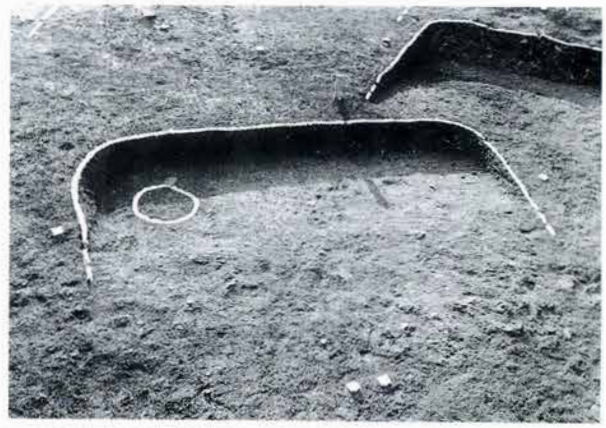
S B 76



S B 78遺物出土状況



S B 79



S B 80

S B81

S B82

S B83

S B85

S U01

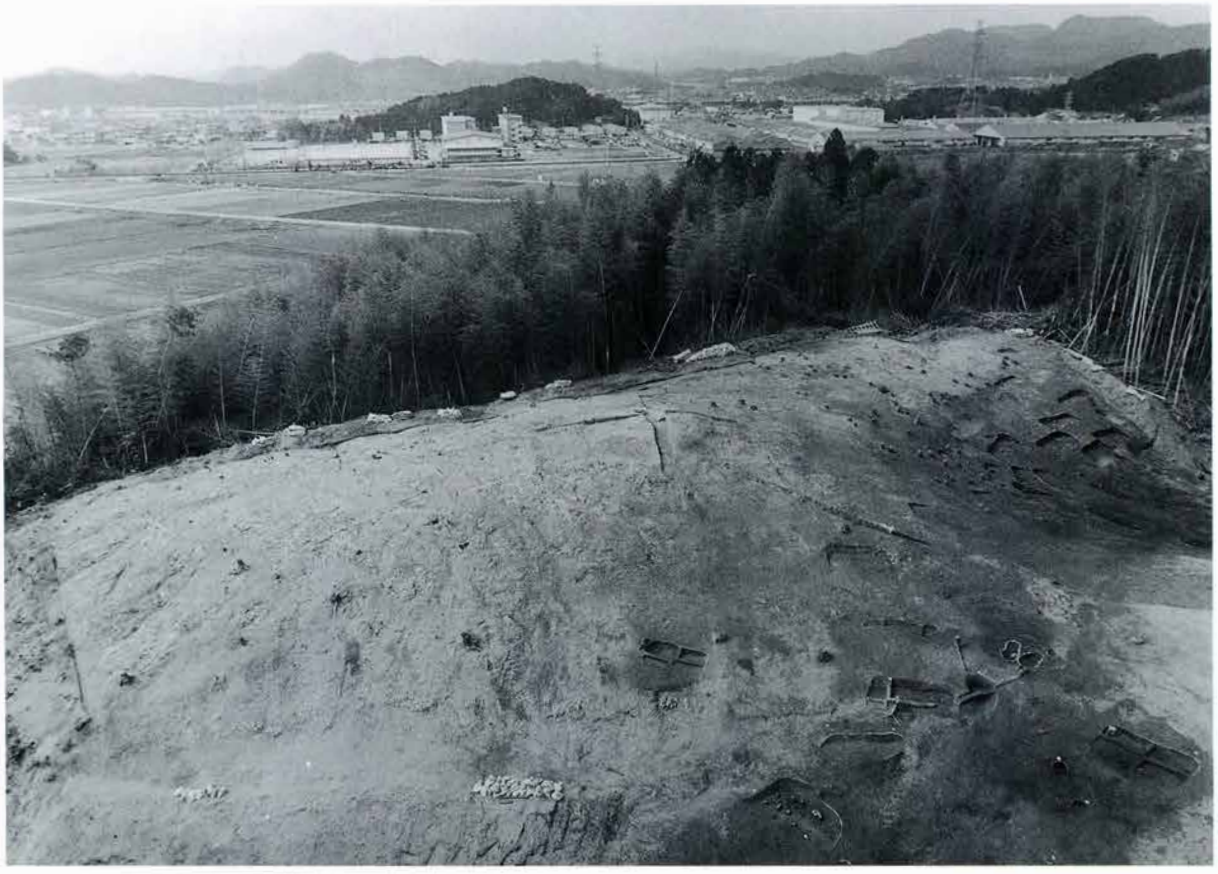
S U02

南谷東部遺構検出状況（南西より）

S B01より砂行遺跡を望む

14 図版

南青柳古墳遠景（南西より）



南青柳古墳遠景（東より）

南青柳古墳遠景（北西より）

南青柳古墳全景（真上上空から）

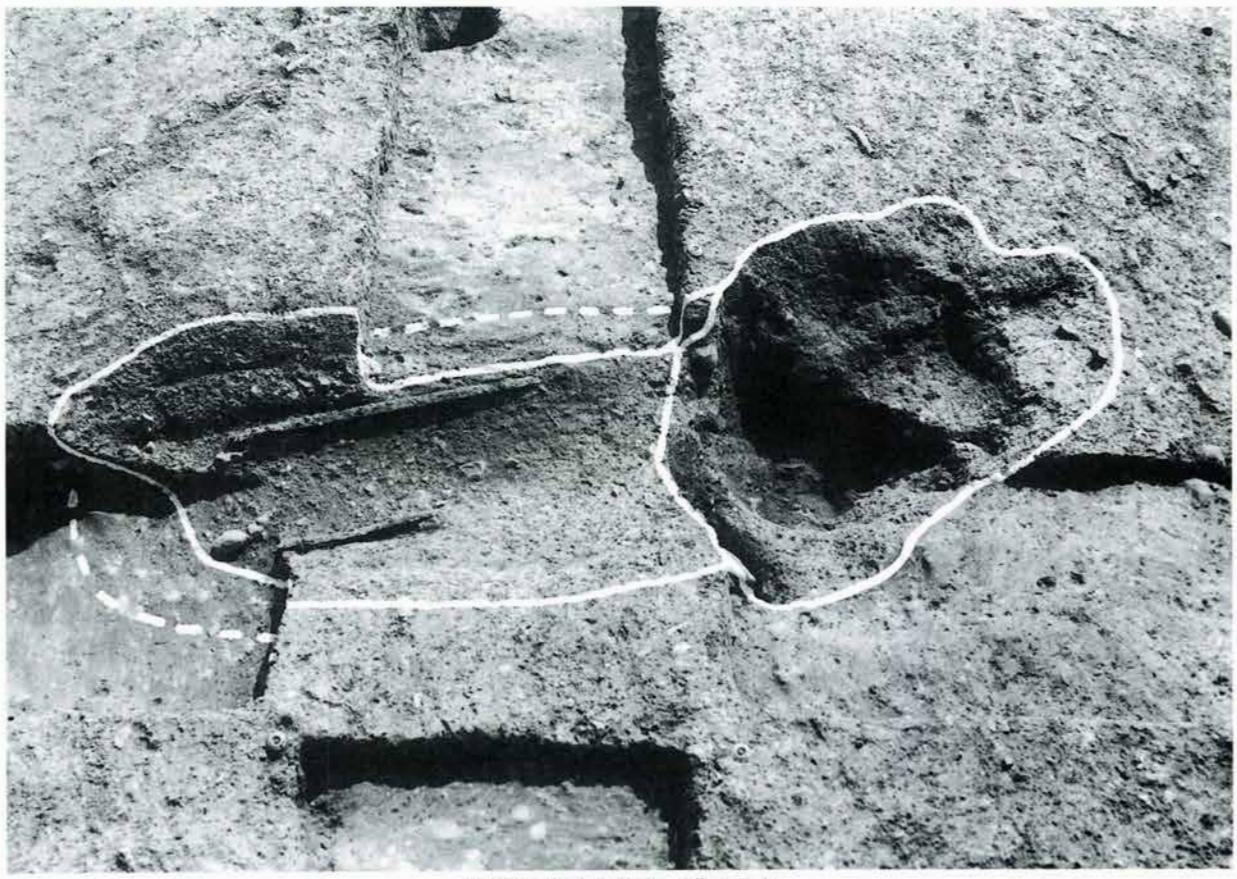
南青柳古墳造り出し部付近

南青柳古墳調査前（北東より）

南青柳古墳（北東より）

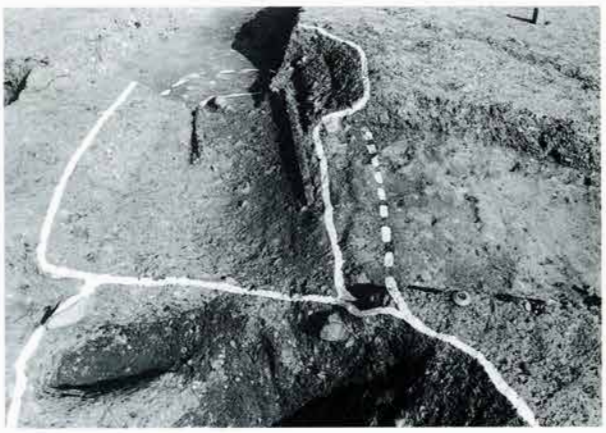
南青柳古墳（南西より）

南青柳古墳（北西より）

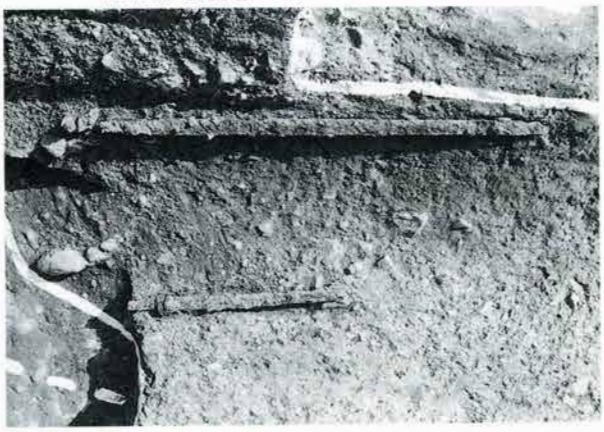


南青柳古墳主体部（北から）

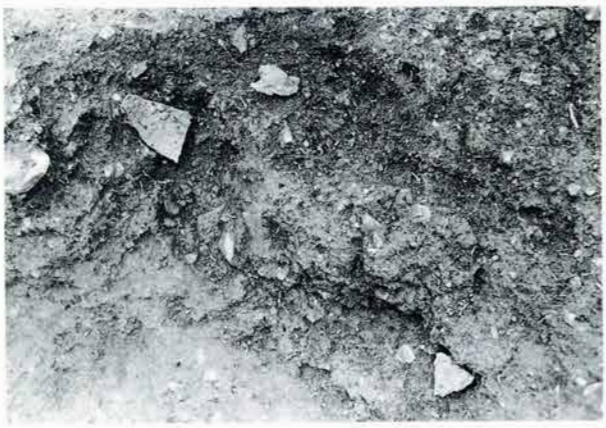
南青柳古墳墳丘断ち割り状況（北側）



南青柳古墳主体部（西から）



主体部鉄剣・鉄刀出土状況



盗掘坑遺物出土状況

P01検出状況

P01半掘状況

P01完掘状況

P08完掘状況

南青柳古墳から南西を望む

SD01

SK01検出状況

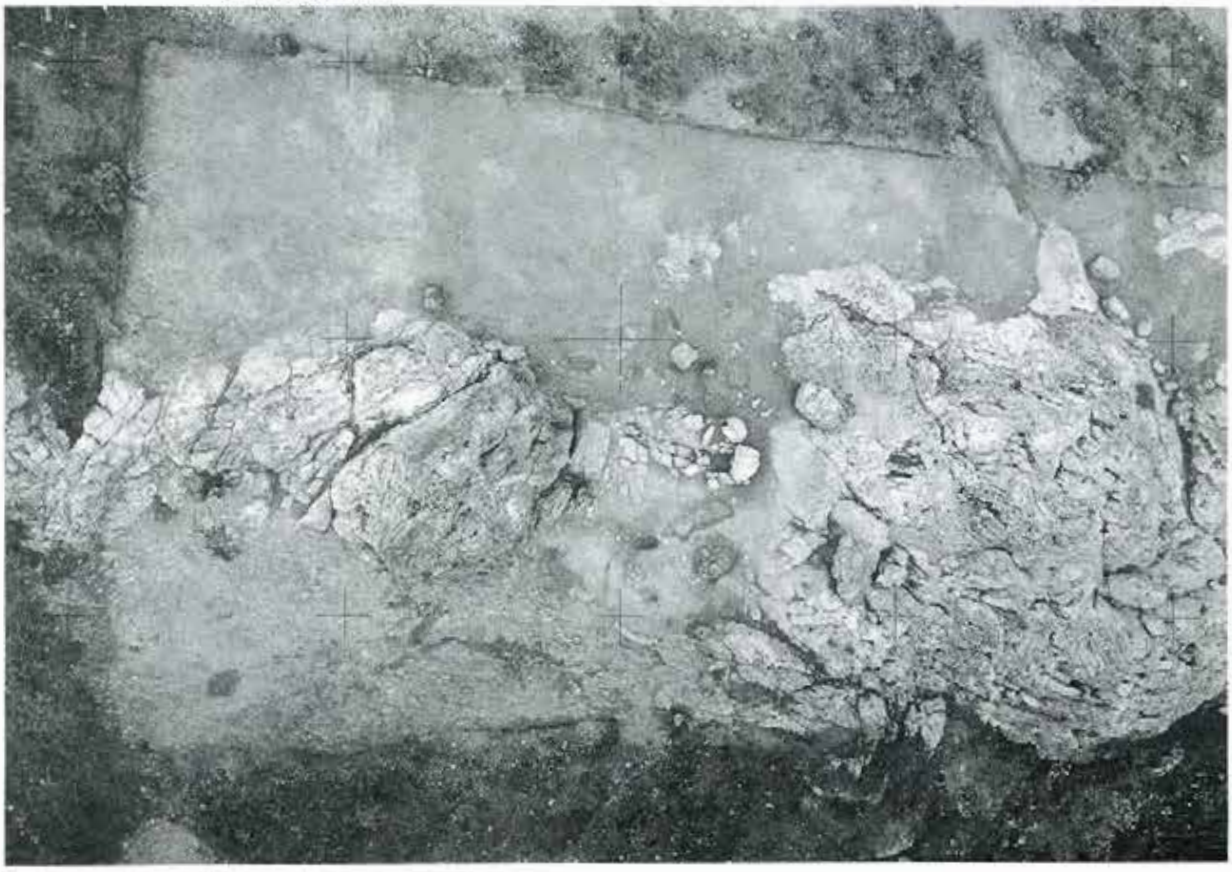
SK01完掘状況

ＳＤ01・ＳＫ01

ＳＫ22半掘状況

ＳＫ08検出状況

ＳＫ25検出状況



大平前遺跡全景（真上から）

大平前遺跡遠景（東から）

祭祀遺構（東から）

大平前遺跡調査前（東から）

大平前遺跡調査前（西から）

祭祀遺構（東から）

祭祀遺構（西南から）

巨岩前礫群（東から）

祭祀遺構（西北から）

巨岩前礫群（西から）

礫群除去後

S B02 (6)

S B07 (21)

S B02 (8)

S B09 (23)

S B04 (14)

S B09 (25)

S B07 (20)

S B09 (28)

住居跡出土土器(1)

S B09 (30)

S B09 (32)

S B09 (31)

S B09 (36)

S B 11 (41)

S B09 (35)

S B 11 (42)

住居跡出土土器 (2)

S B 11（46）

S B 11（48）

S B 13（50）

S B 13（51）

S B 13（56）

S B 16（63）

S B 16（68）

S B 16（69）

S B 16（85a）

S B 16（85b・85c）

住居跡出土土器（3）

S B 20（96）

S B 26（112）

S B 23（105）・S B 32（130）

S B 35（133）

S B 35（138）

S B 35（136）

S B 35（142）

S B 35（139）

S B 35（143）

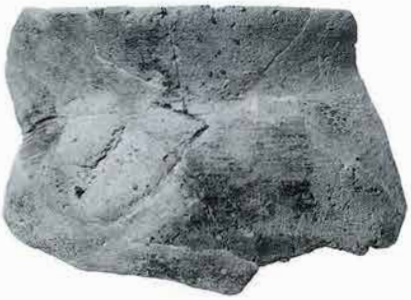
住居跡出土土器（4）

S B 35（147）

S B 35（156）

S B 35（148）

S B 35（167）



S B 35（157）

S B 35（170）

S B 35（161）

S B 37（182）

S B 37（174）

S B 38（184）

住居跡出土土器（5）

S B 38（183）

S B 46（195）

S B 41（188）

S B 47（204）

S B 46（199）

S B 47（210）

S B 48（211）

S B 46（200）

S B 50（216）

住居跡出土土器（6）

S B 52（224）

S B 54（235）

S B 54（237）

S B 54（243）

S B 54（241）

S B 54（242）

S B 54（255）

S B 54（257）

住居跡出土土器（7）

S B 54 (270)

S B 54 (271)

S B 54 (278)

S B 54 (270)

S B 58 (292) ・S B 63 (325)

S B 58 (291)

S B 63 (324)

S B 60 (315)

S B 63 (328)

S B 63 (329)

住居跡出土土器 (8)

S B 63 (332)

S B 64 (337) ・S B 68 (365)

S B 65 (346)

S B 73 (389)

S B 73 (391)

S B 73 (392)

S B 73 (378)

S B 73 (388)

S B 75 (395)

S B 78 (416)

住居跡出土土器 (9)

S B 81（434）

S B 81（433）

S B 81（437）

S U 01（446）

S U 01（445）

S U 01（452）

S U 01（451）

住居跡出土土器（10）・S U出土土器（1）

ＳＵ 01（453）

ＳＵ 01（454）

ＳＵ 01（455）

ＳＵ 02（456）

ＳＵ 02（469）

ＳＤ 01（475）

包含層（509）

包含層（520・518）

ＳＵ出土土器（2）・ＳＤ出土土器・包含層出土土器（1）

522

574

590

615

650　623　614

646

656

668

649

包含層出土土器（2）

688

693

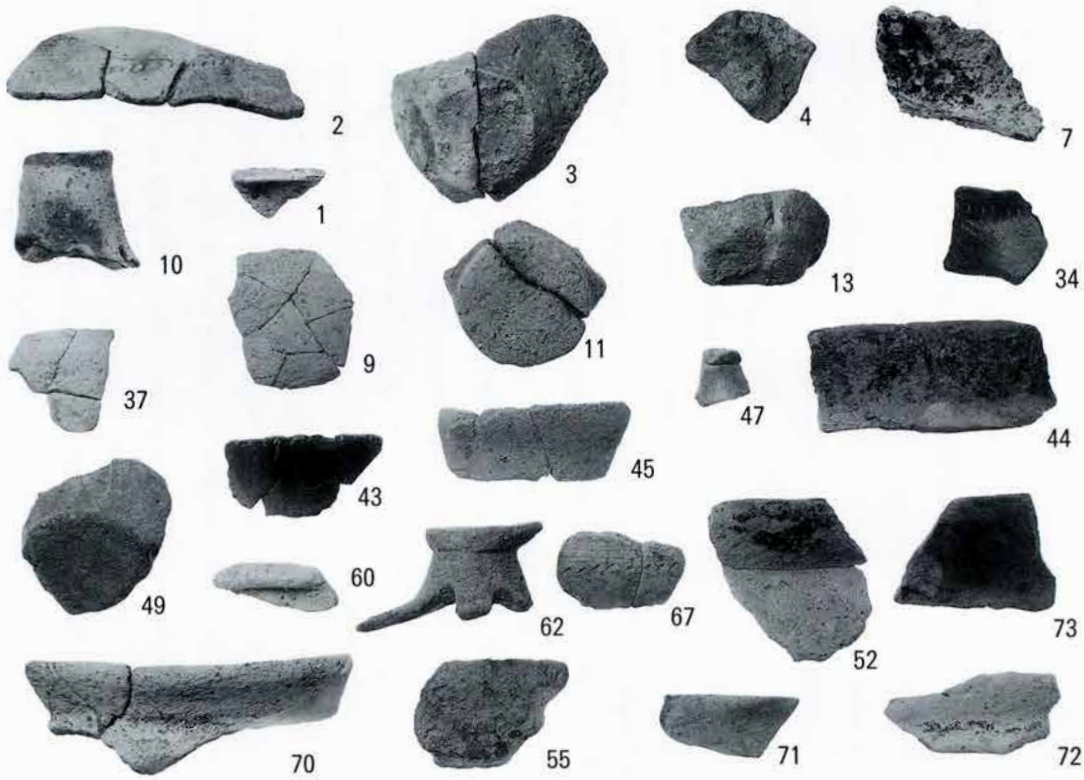
699

701

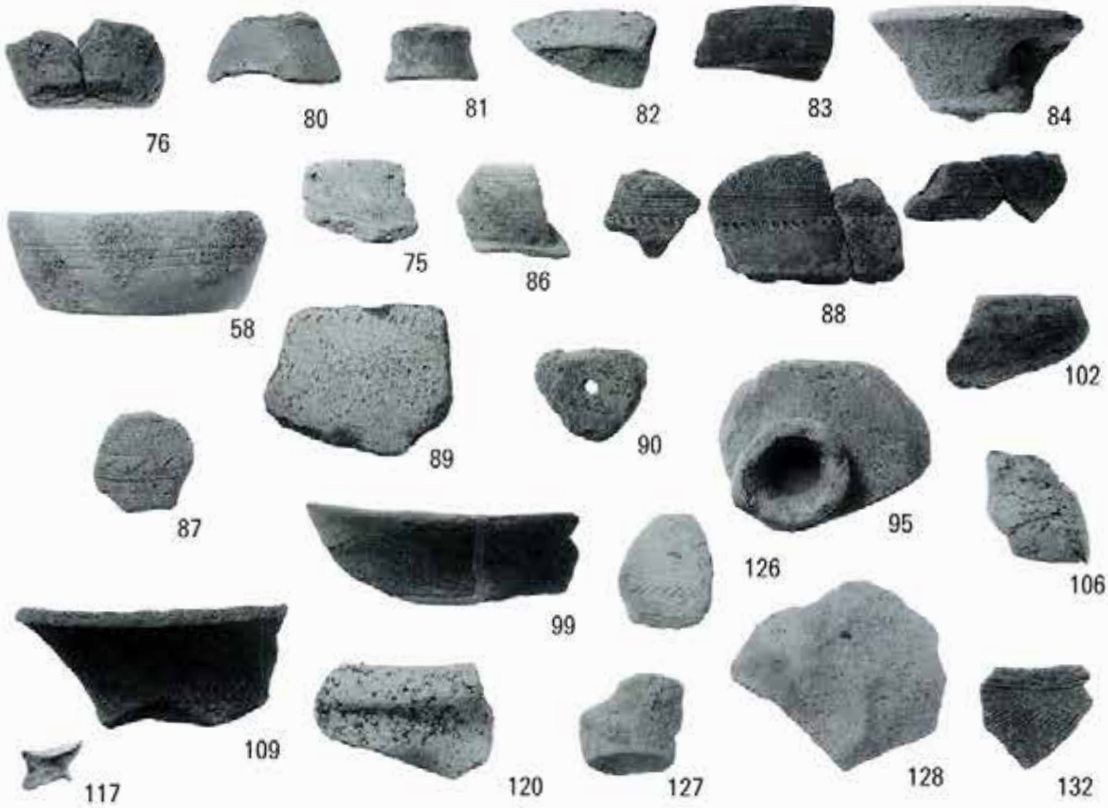
700

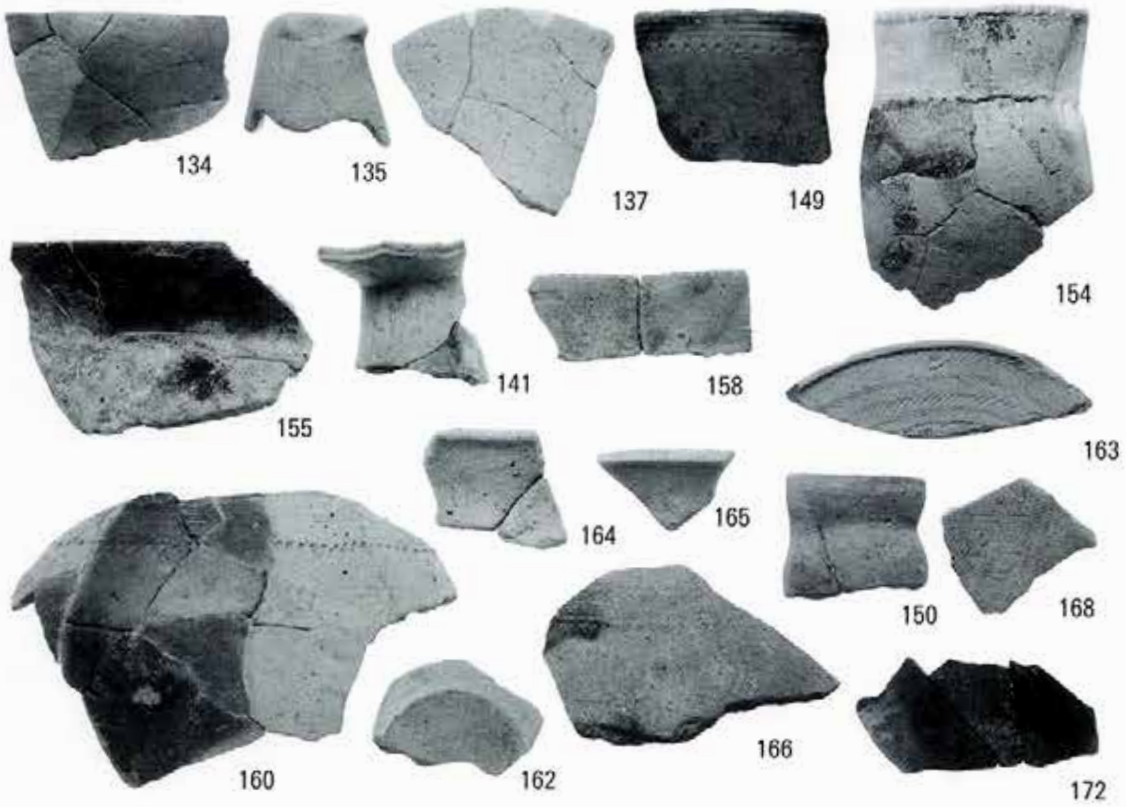
703

包含層出土土器（3）

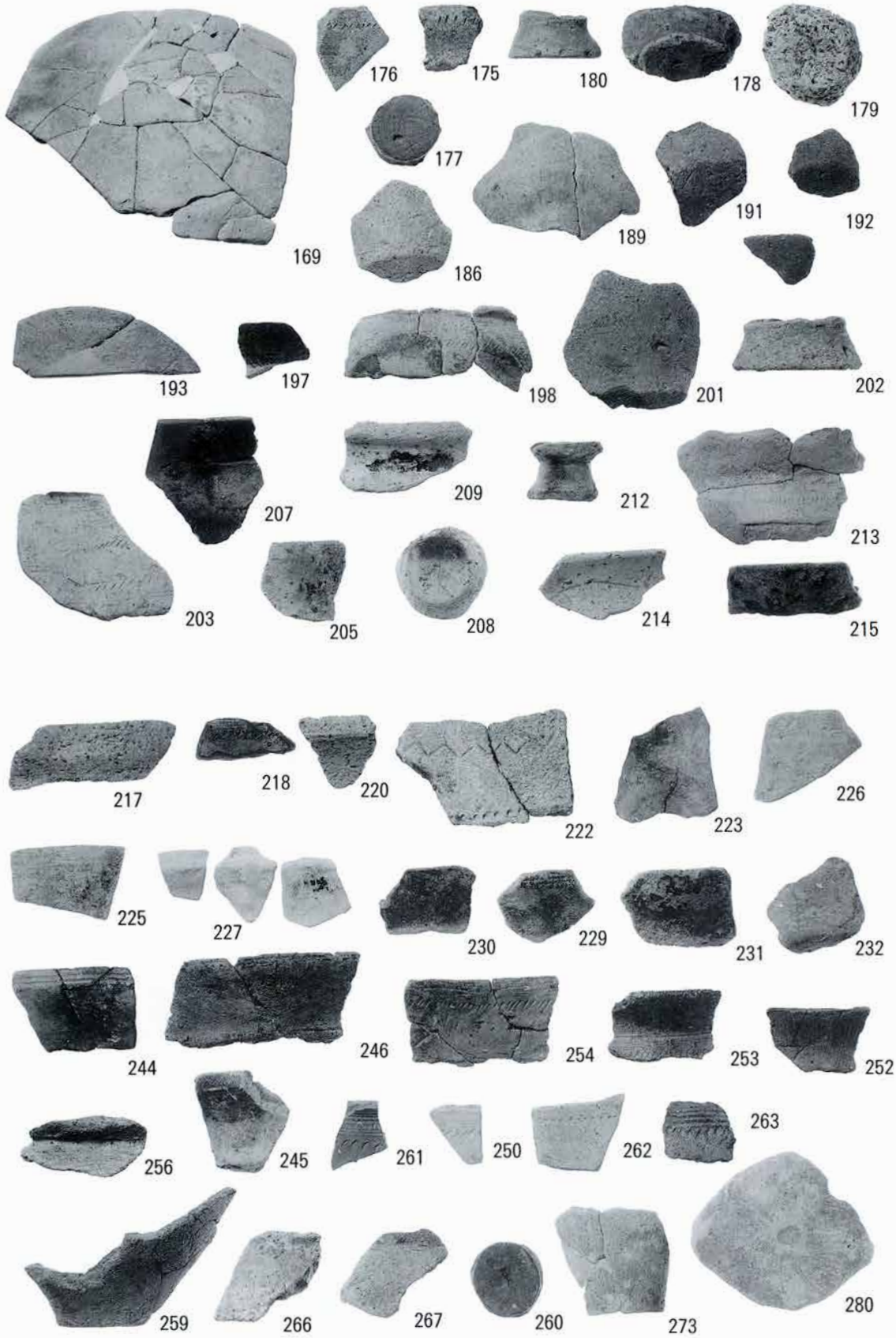


住居跡出土土器（11）

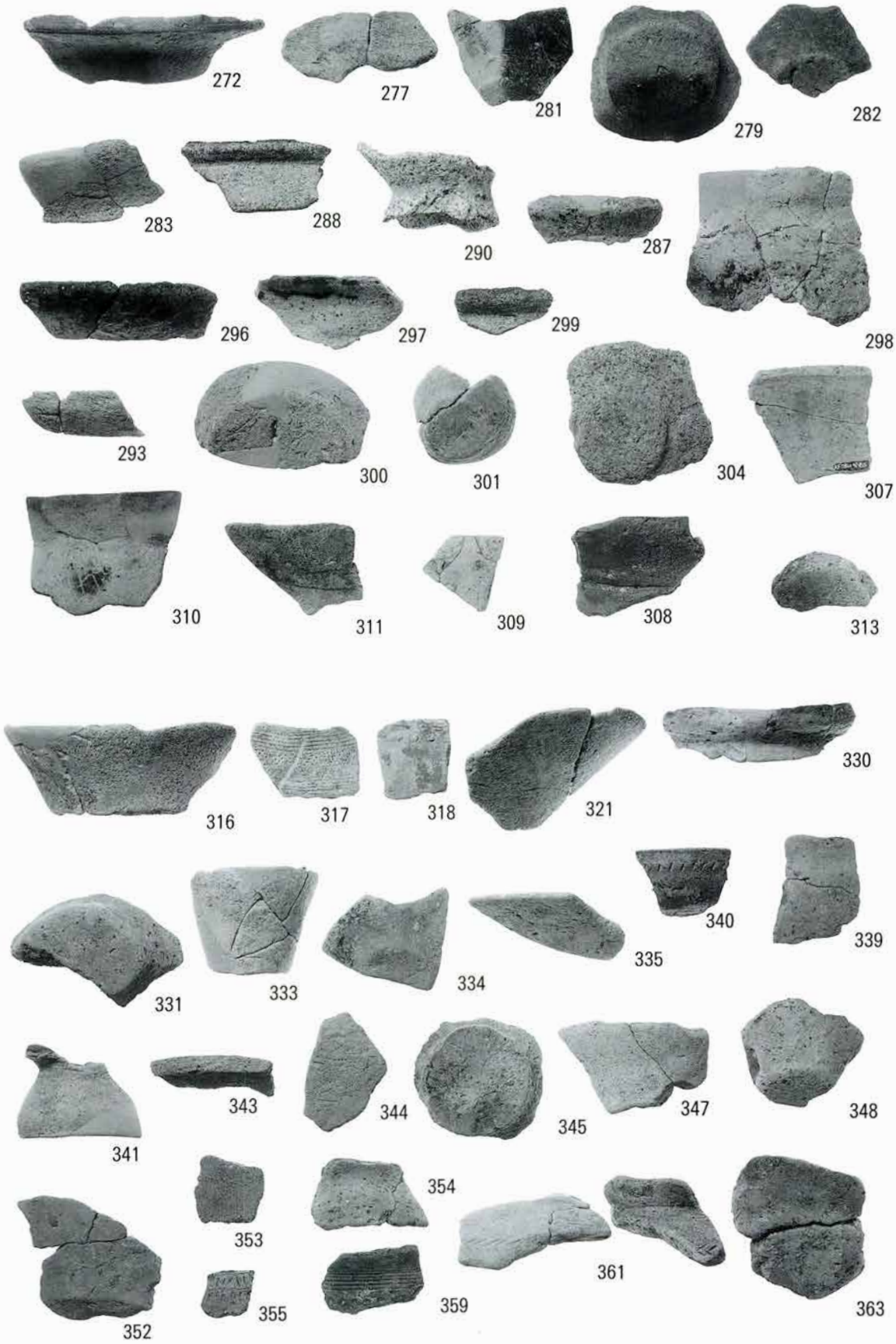

76
80
81
82
83
84
75
86
58
88
102
89
90
87
95
106
126
99
109
117
120
127
128
132


134
135
137
149
154
155
141
158
163
164
165
150
168
160
162
166
172

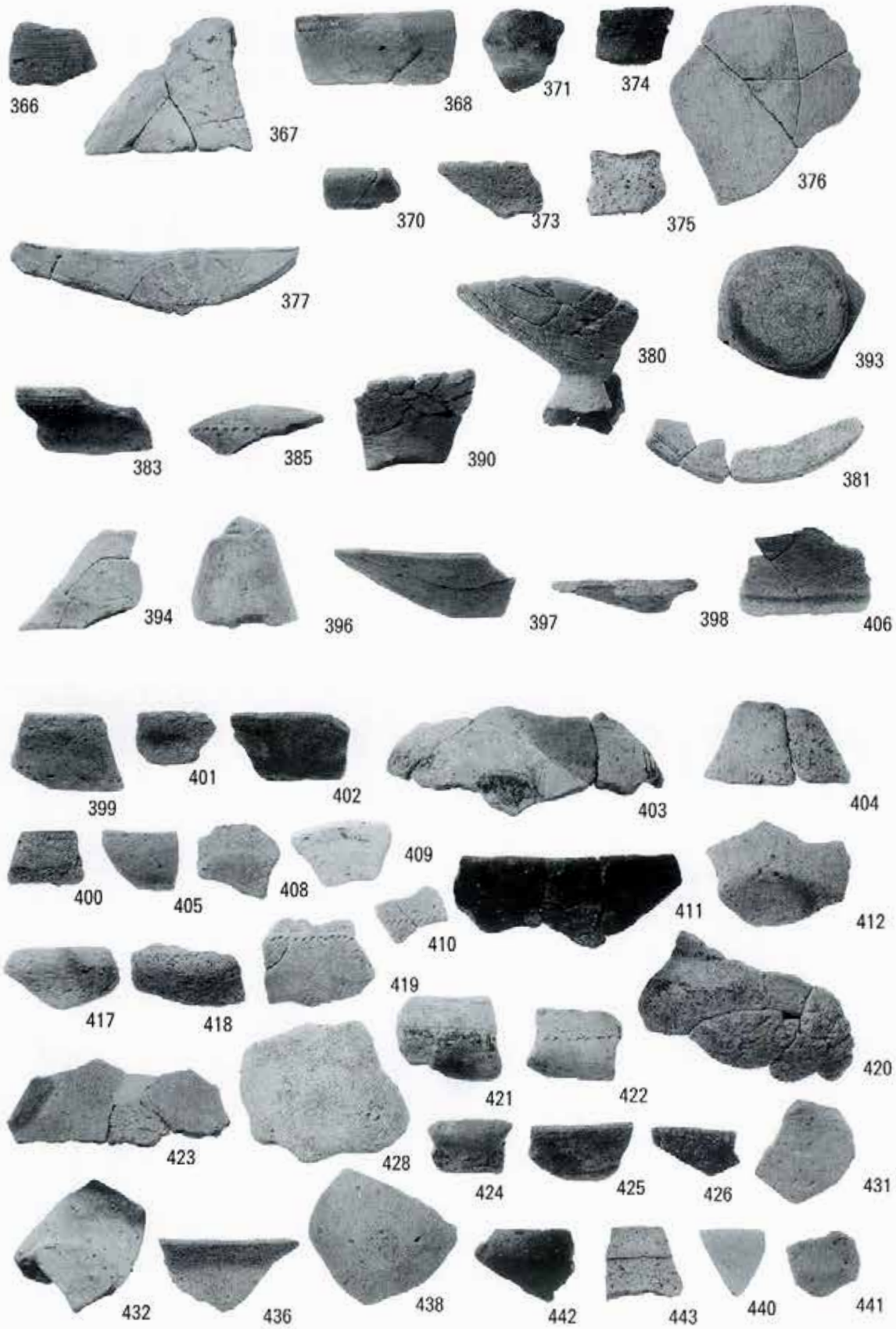
住居跡出土土器（12）


176
175
180
178
179
177
169
186
189
191
192
193
197
198
201
202
207
209
212
213
203
205
208
214
215
217
218
220
222
223
226
225
227
230
229
231
232
244
246
254
253
252
256
245
261
250
262
263
259
266
267
260
273
280

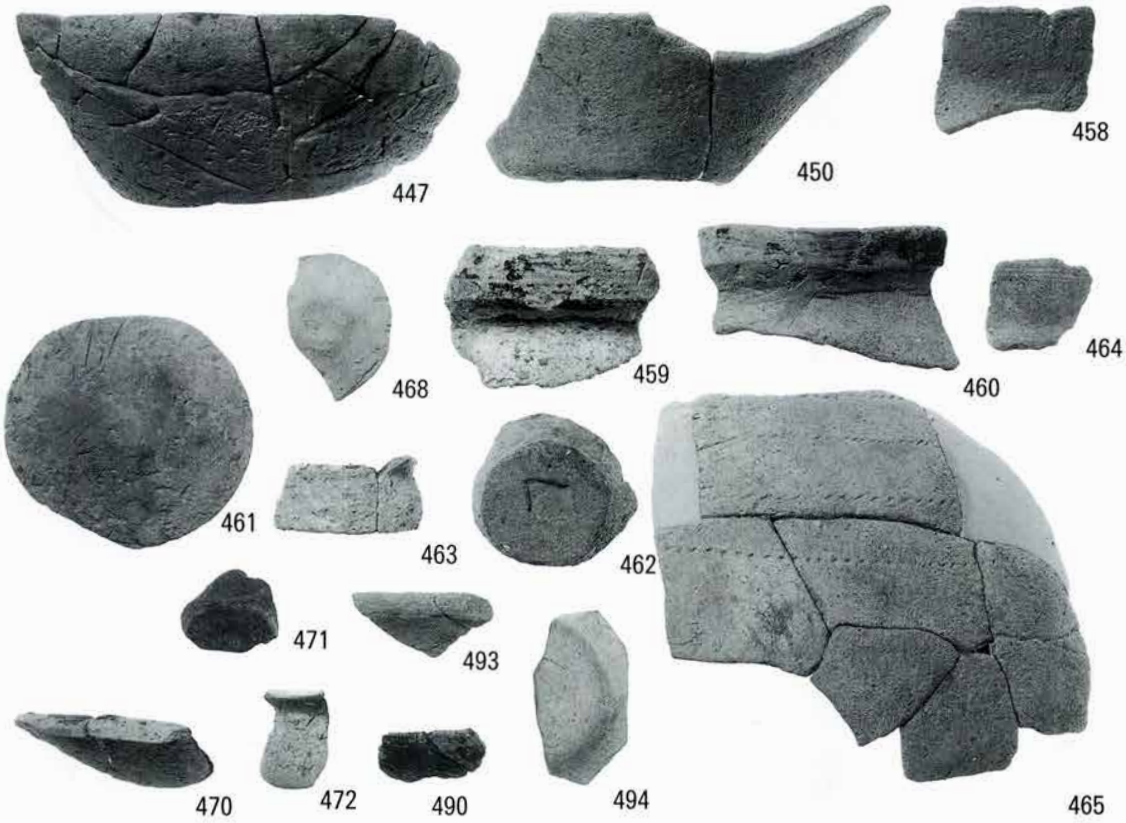
住居跡出土土器（13）


272
277
281
279
282
283
288
290
287
298
296
297
299
293
300
301
304
307
310
311
309
308
313
316
317
318
321
330
331
333
334
335
340
339
341
343
344
345
347
348
352
353
354
355
359
361
363

住居跡出土土器（14）

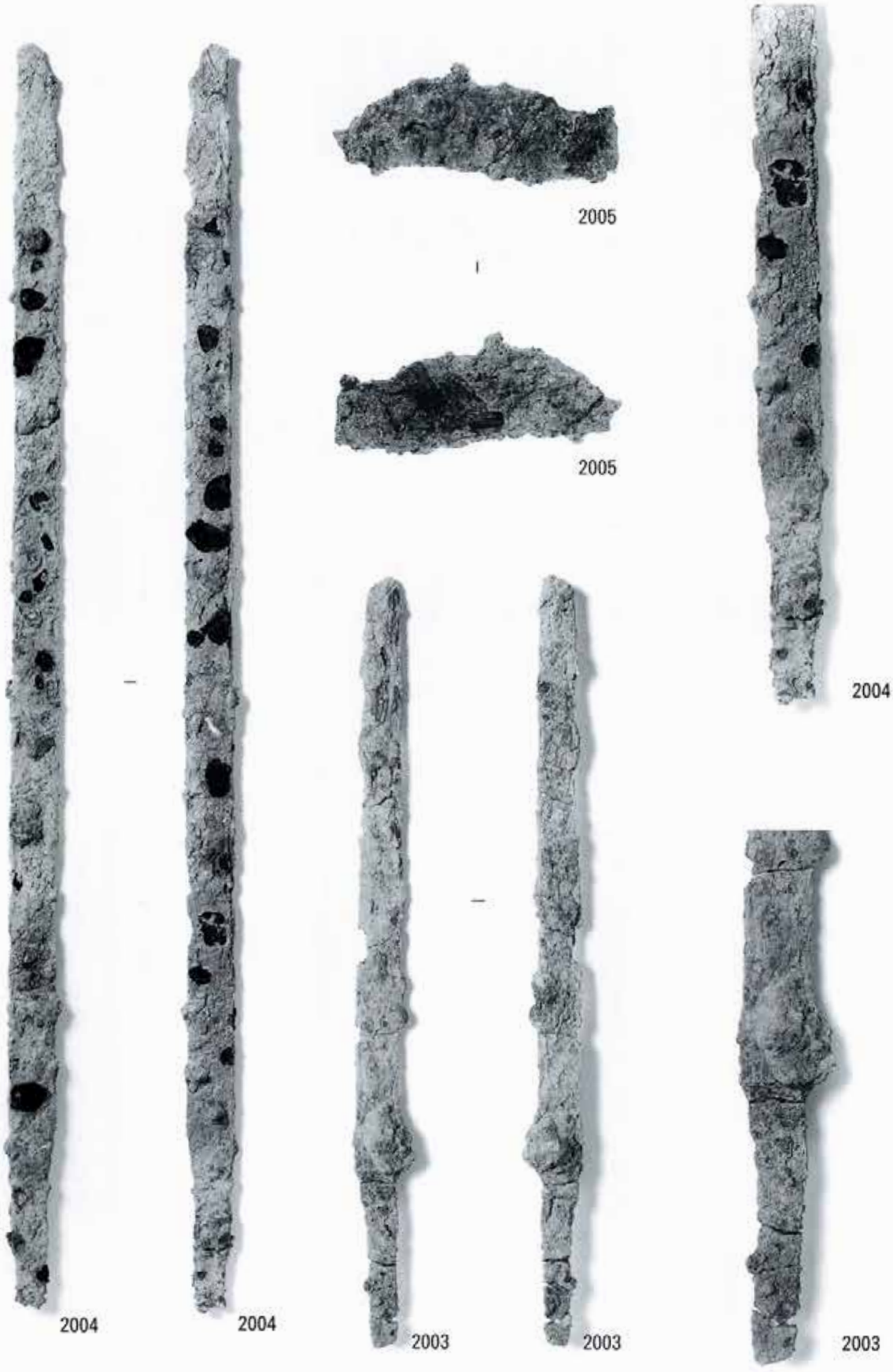

366
367
368
371
374
376
370
373
375
377
380
393
383
385
390
381
394
396
397
398
406
399
401
402
403
404
400
405
408
409
411
412
410
417
418
419
420
421
422
423
428
424
425
426
431
432
436
438
442
443
440
441

住居跡出土土器（15）

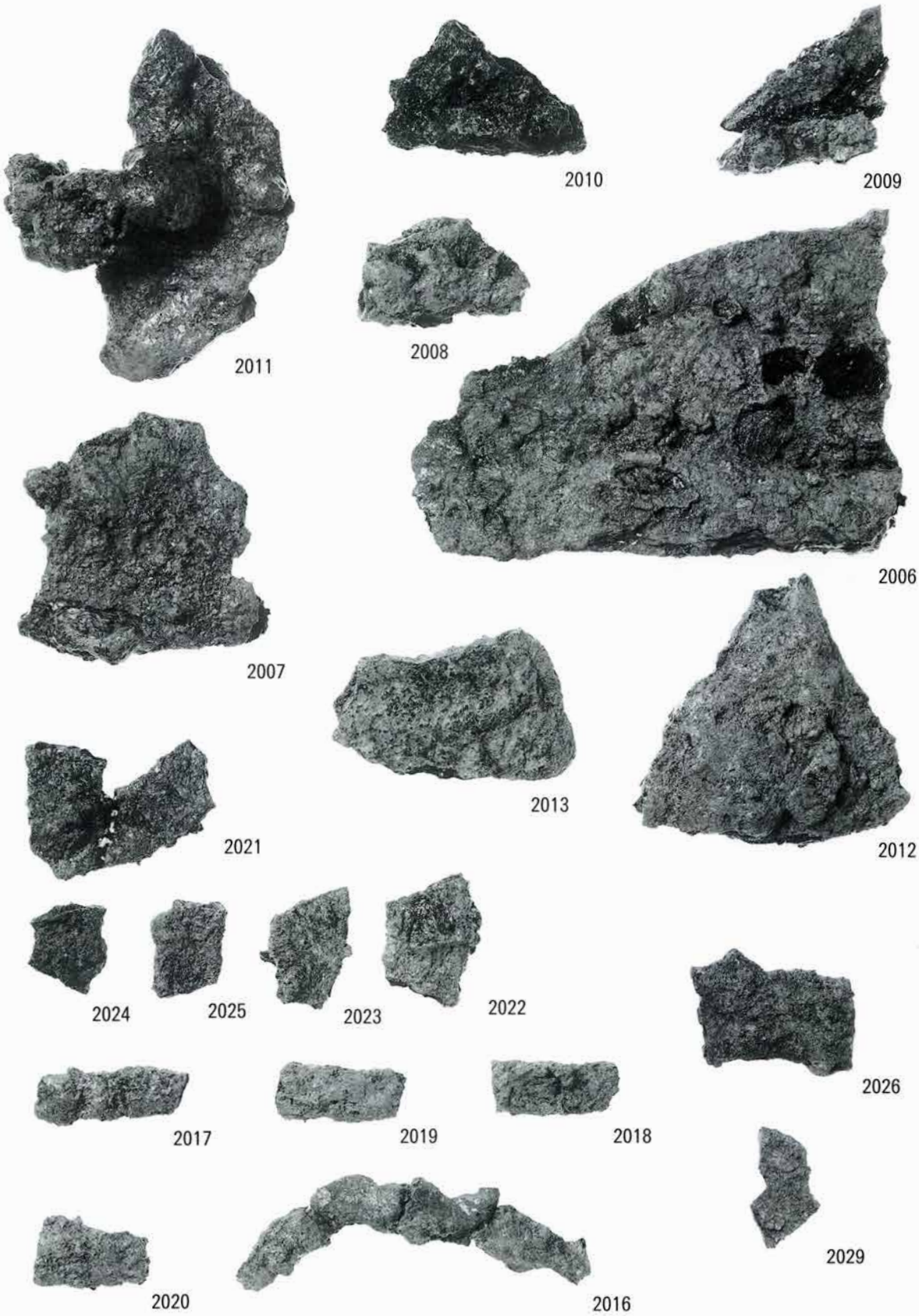


ＳＵ・ＳＫ・南青柳古墳盛土内出土土器

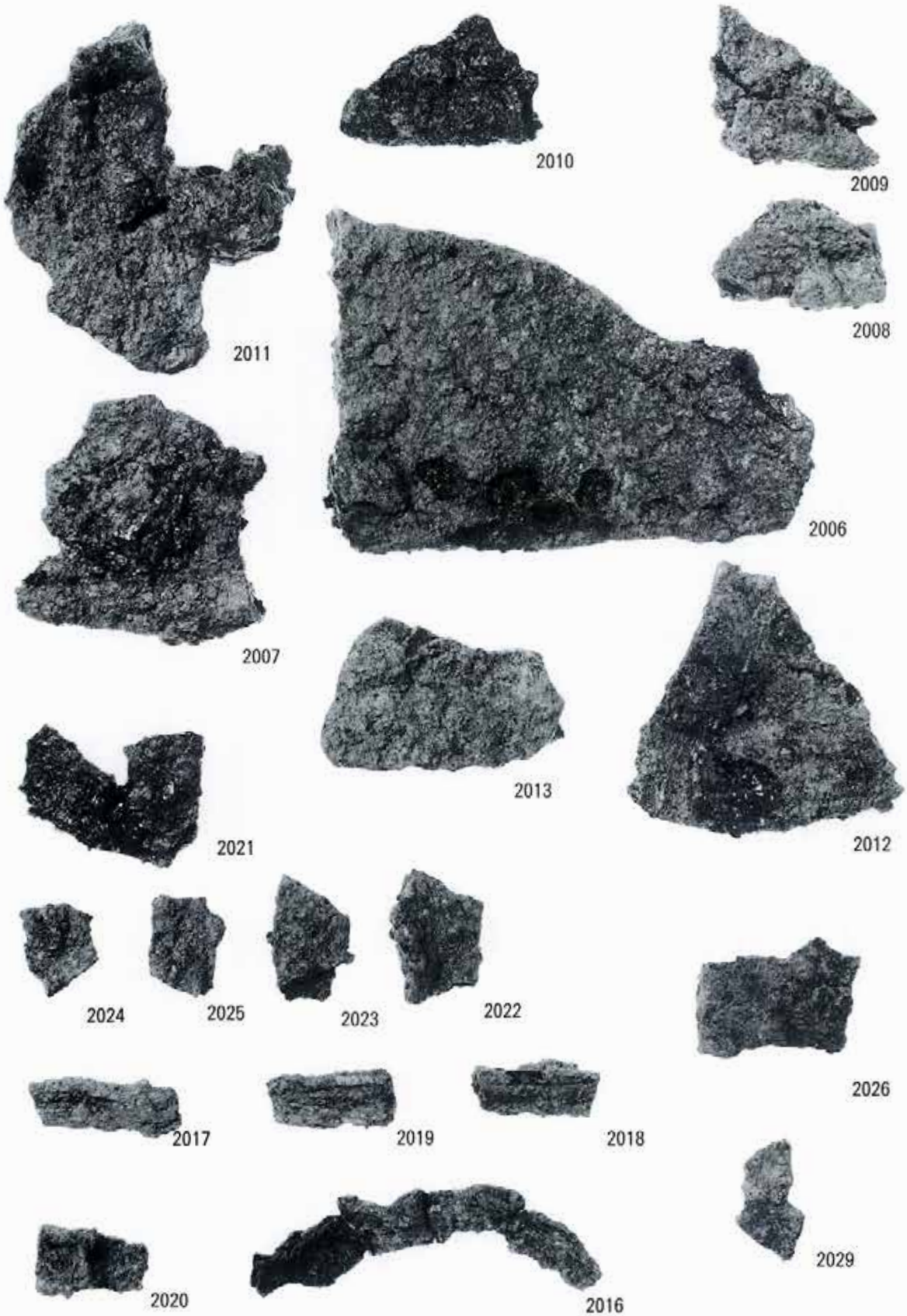
住居跡出土鉄製品



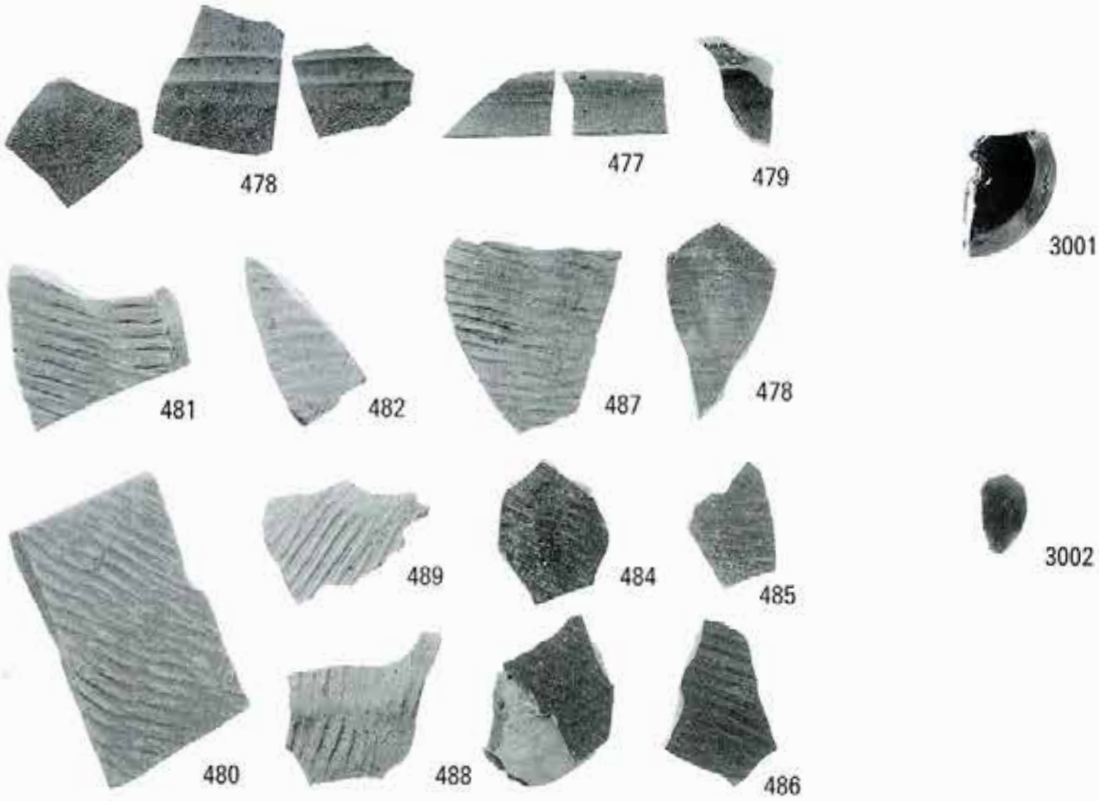
南青柳古墳主体部出土鉄製品



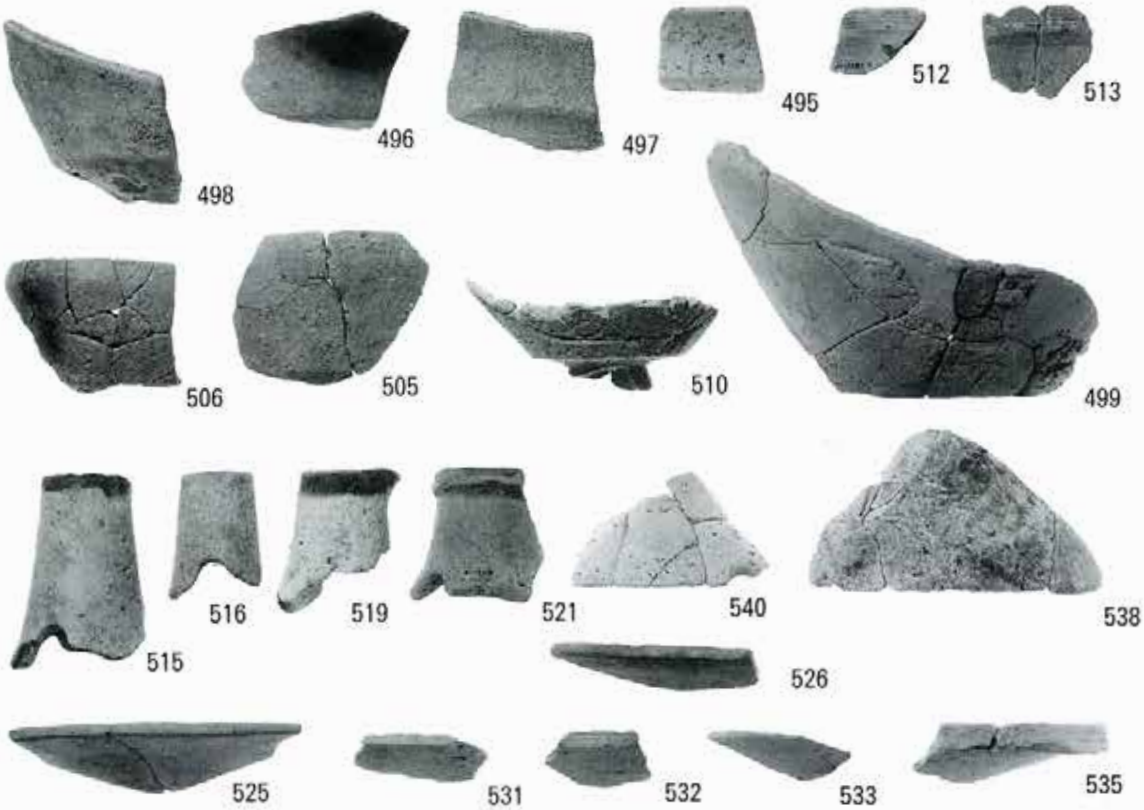
南青柳古墳盗掘坑等出土鉄製品（表面）



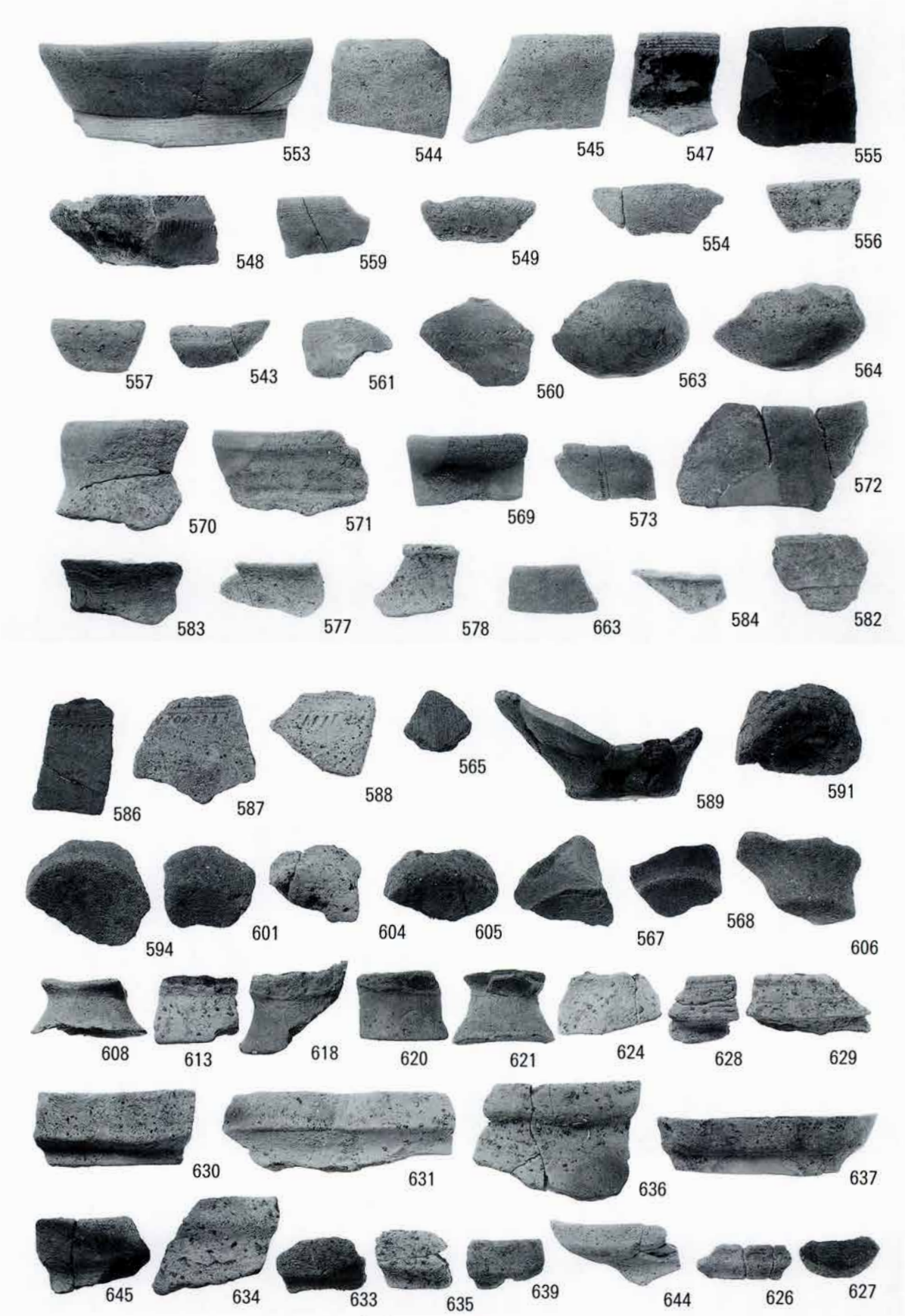
南青柳古墳盗掘坑等出土鉄製品（裏面）



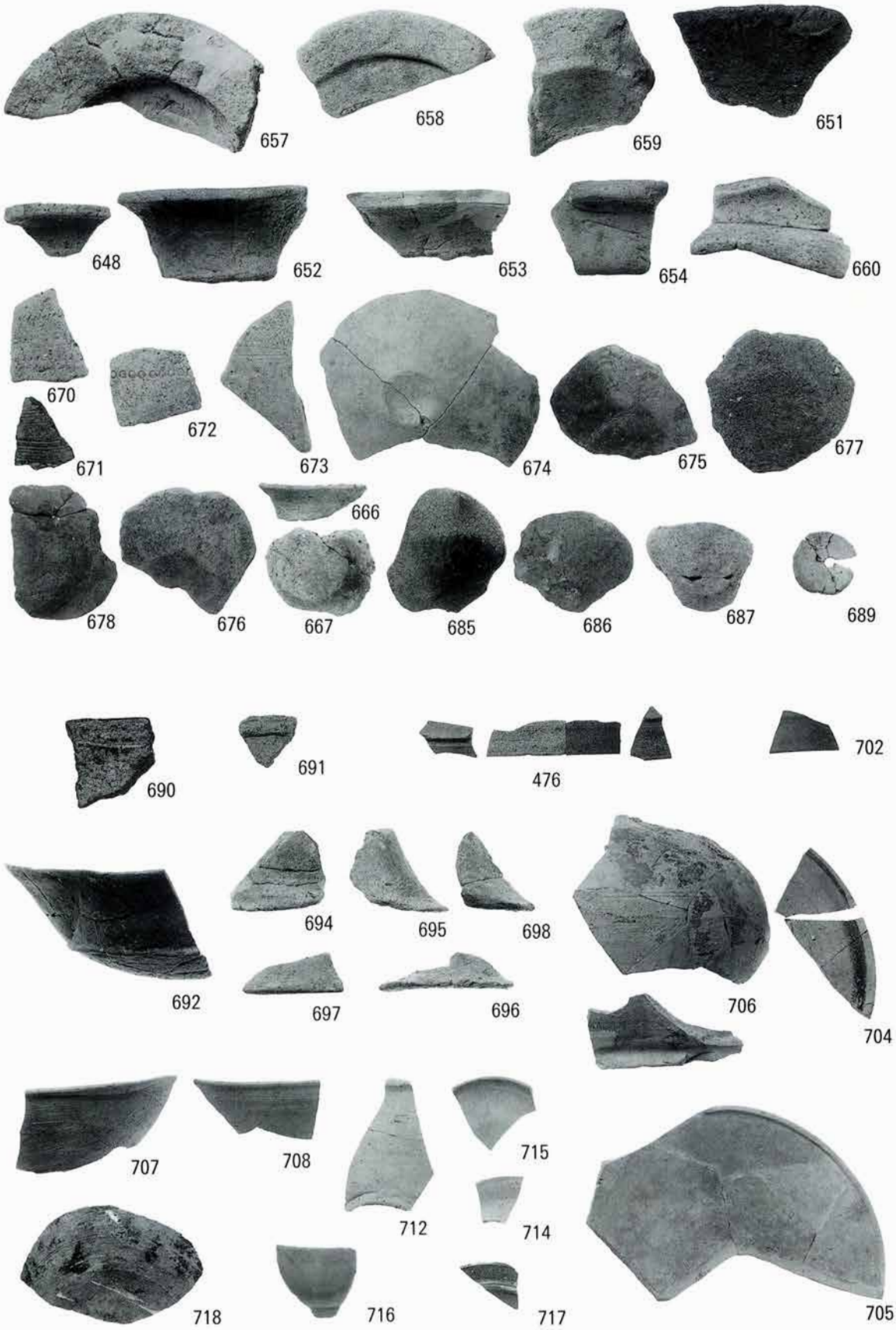
南青柳古墳墳丘上面・裾部周辺出土土器　　包含層出土ガラス製品



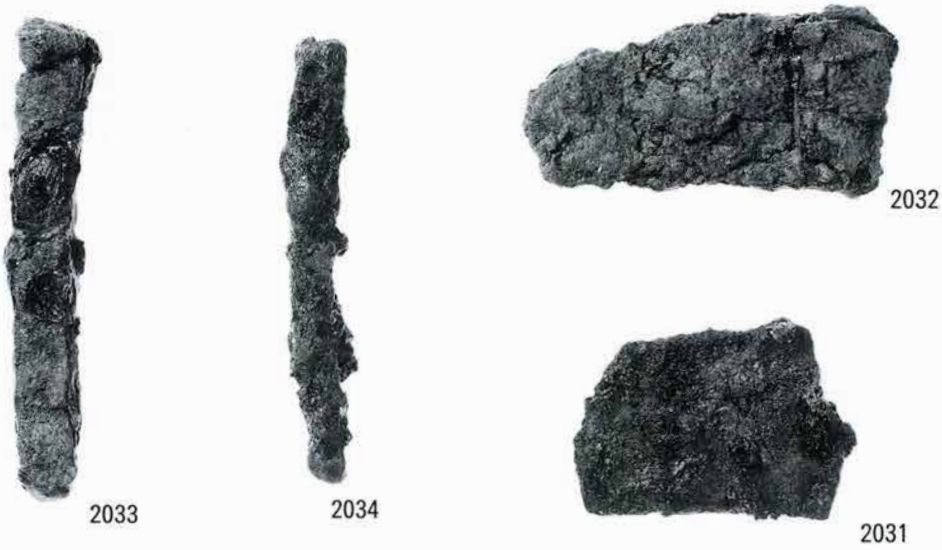
包含層出土土器（4）


553
544
545
547
555
548
559
549
554
556
557
543
561
560
563
564
570
571
569
573
572
583
577
578
663
584
582
586
587
588
565
589
591
594
601
604
605
567
568
606
608
613
618
620
621
624
628
629
630
631
636
637
645
634
633
635
639
644
626
627

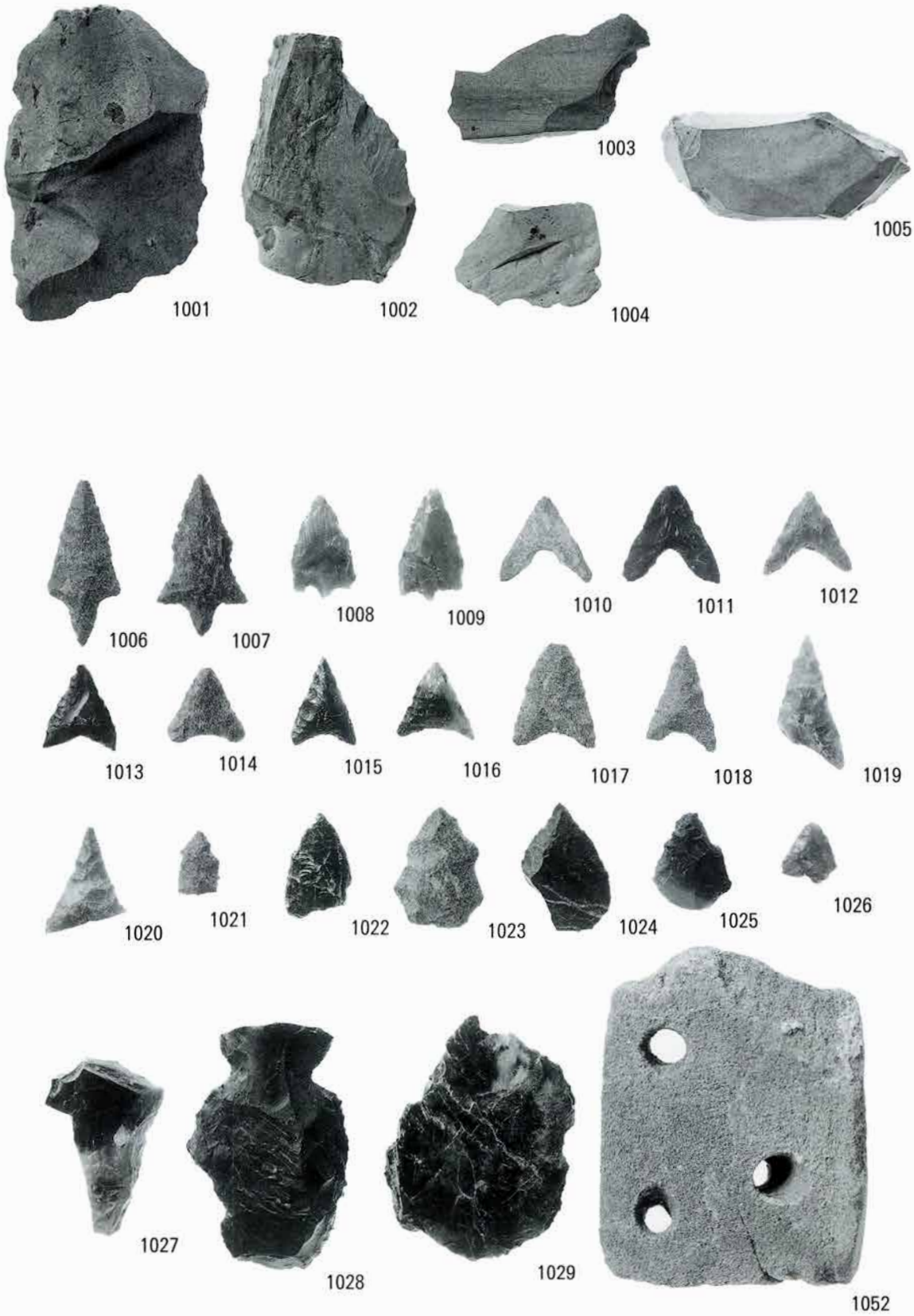
包含層出土土器（5）



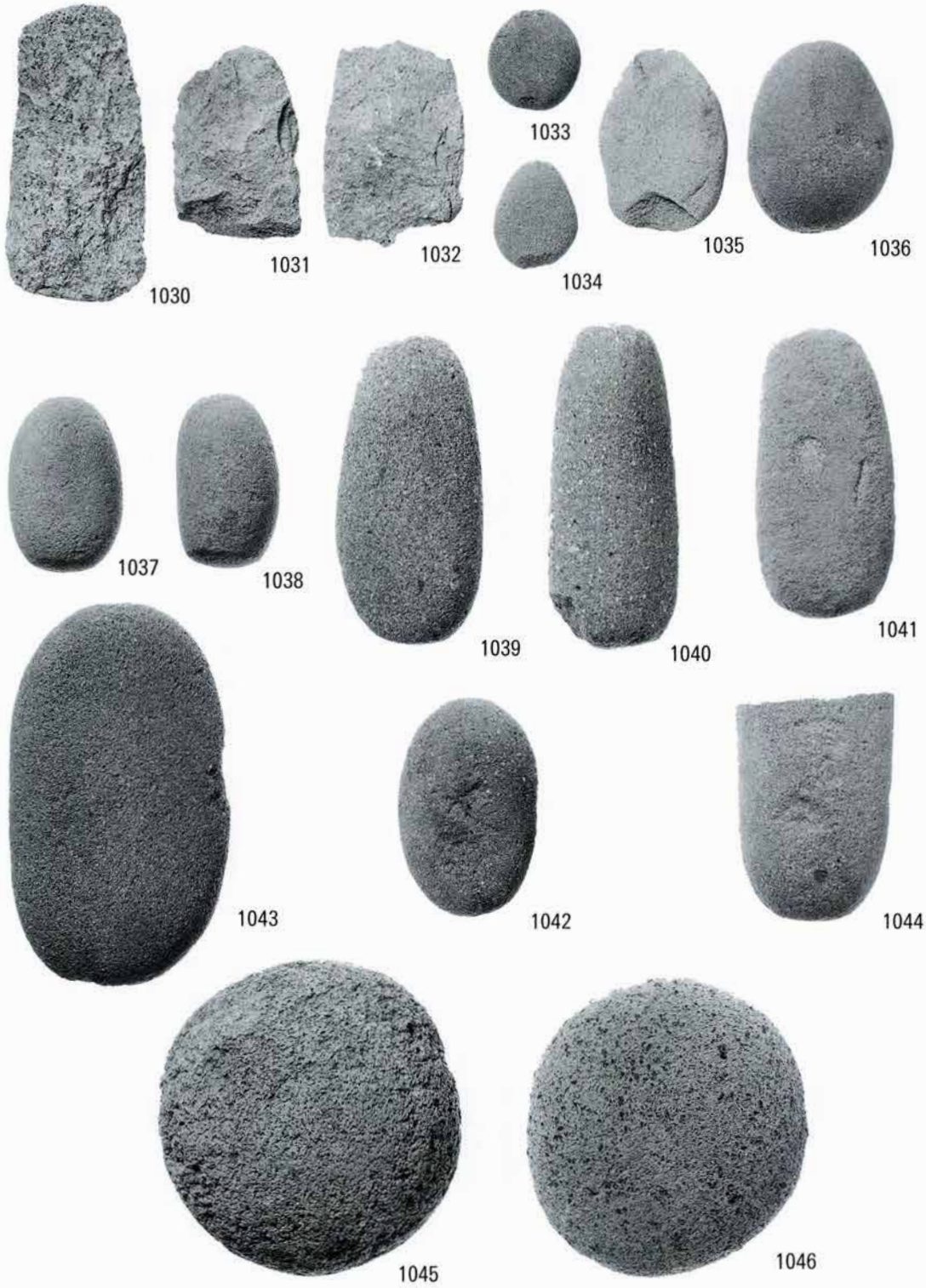
包含層出土土器（6）・土製品



包含層出土鉄製品


1001
1002
1003
1004
1005
1006
1007
1008
1009
1010
1011
1012
1013
1014
1015
1016
1017
1018
1019
1020
1021
1022
1023
1024
1025
1026
1027
1028
1029
1052

南青柳遺跡出土石器（1）


1030
1031
1032
1033
1034
1035
1036
1037
1038
1039
1040
1041
1042
1043
1044
1045
1046

南青柳遺跡出土石器（2）

1047

1051

1049

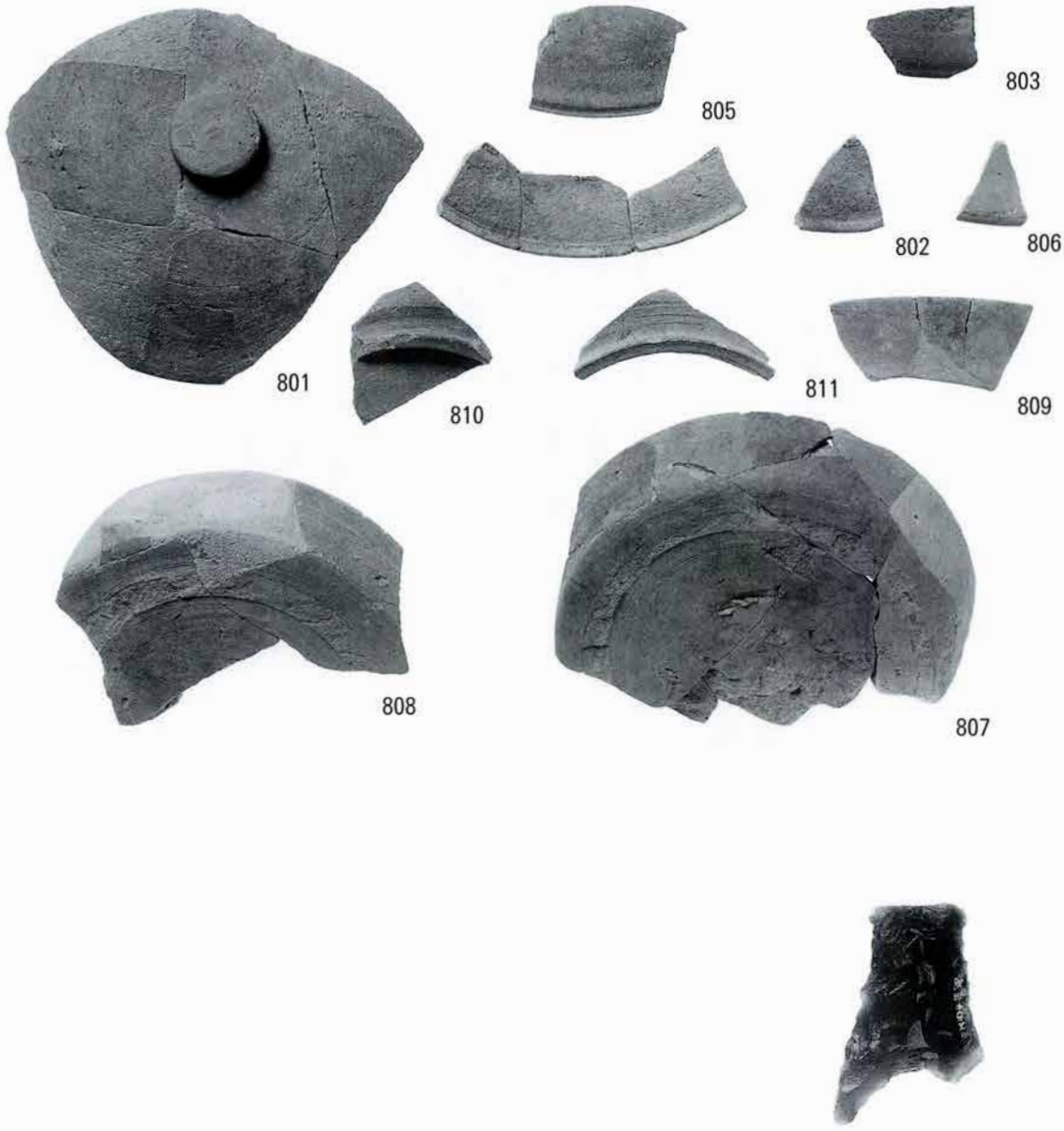
1048

1050

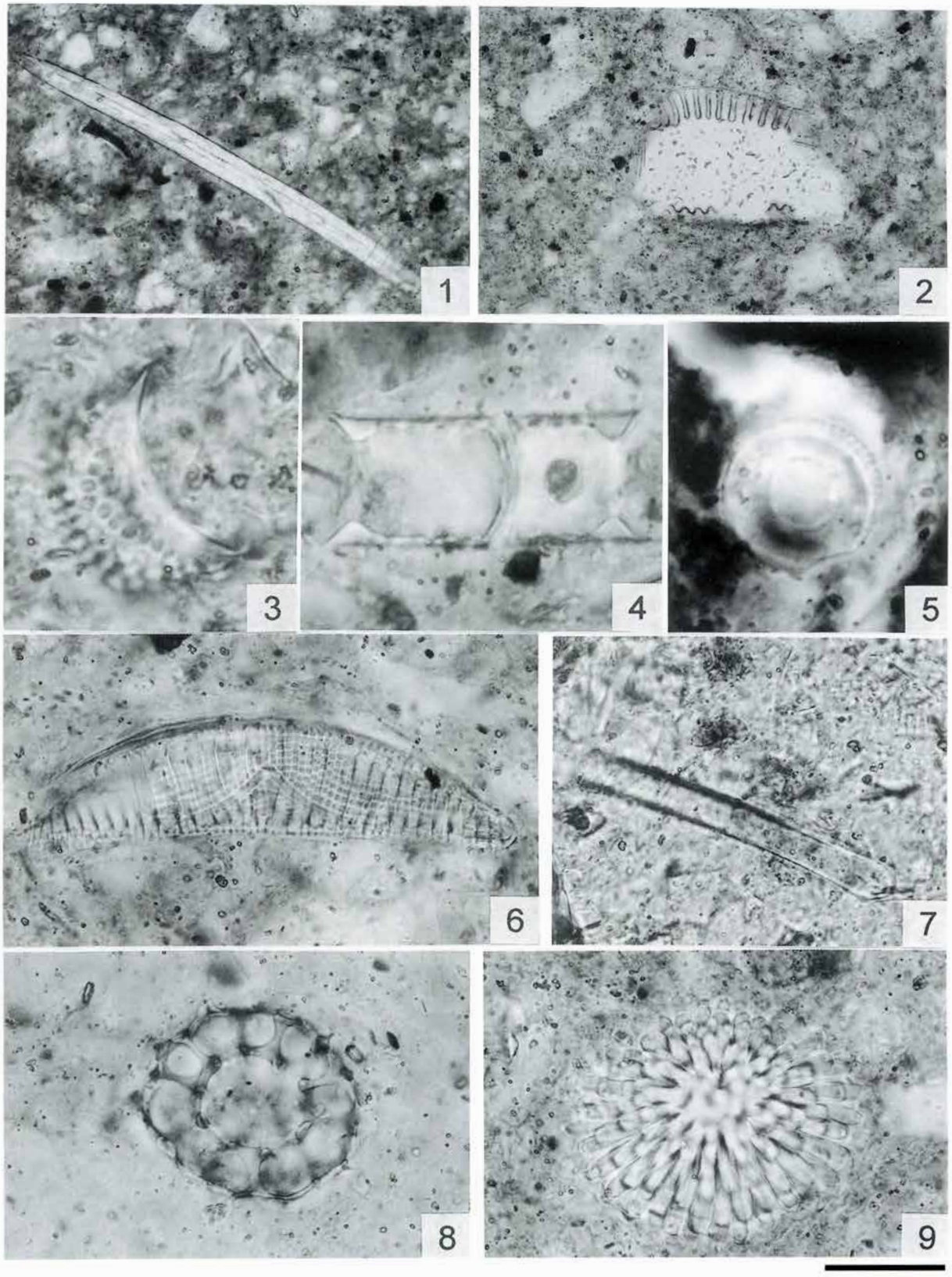
1053

1054

南青柳遺跡出土石器（3）



大平前遺跡出土土器・石器



南青柳遺跡土器胎土中の粒子顕微鏡写真（スケール；No.1 が 50 μ m、No.2 が 00 μ m、No.3 ～ 5 が 10 μ m、No.6 ～ 9 が 20 μ m）

1．骨針化石　No.32　　2．珪藻化石（*Surirella* 属）　No.30　　3．珪藻化石（湖沼浮遊生指標種群 *Melosira Granulata*）　No.29

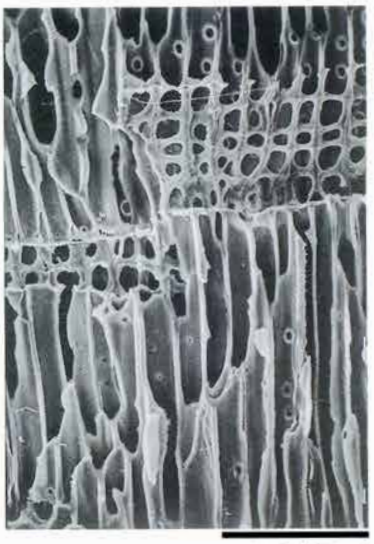
4．珪藻化石（湖沼浮遊生指標種群 *Melosira Granulata*）　No.34　　5．珪藻化石（湖沼浮遊生指標種群 *Melosira* 属）　No.4

6．珪藻化石（*Epithemia turgidula*）　No.33　　7．珪藻化石（Eunotia biareofera）No.29　　8．放散虫化石　No.28

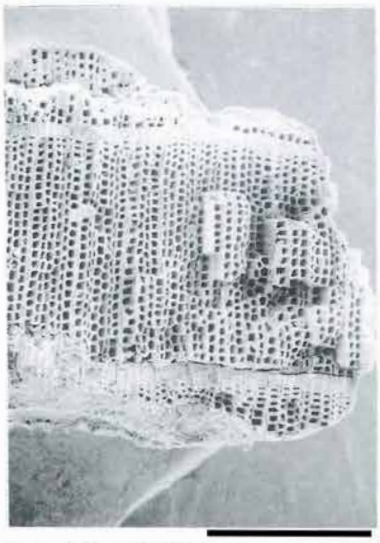
9．放散虫化石　No.28

1a マツ属複維管束亜属（横断面）
SZ01-AY1　bar:1.0mm

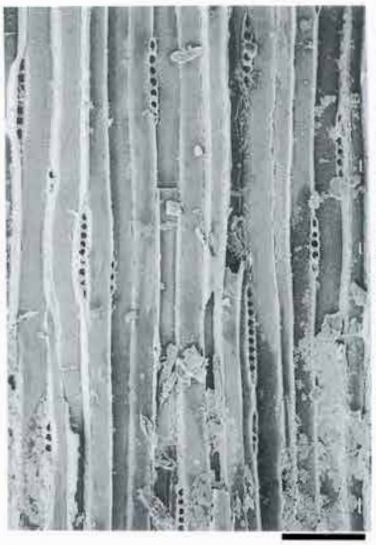
1b マツ属複維管束亜属（接線断面）
SZ01-AY1　bar:0.1mm



1c マツ属複維管束亜属(放射横断面)
SZ01-AY1　bar:0.1mm



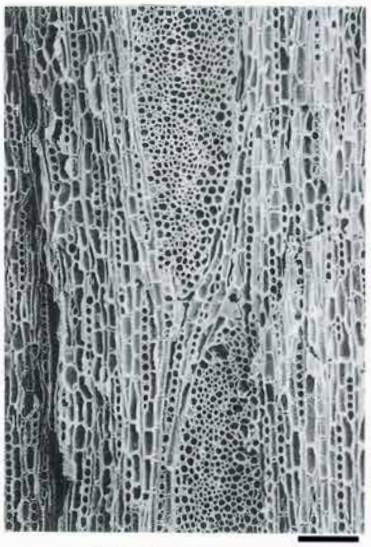
2a ヒノキ（横断面）
SZ01-AY2　bar:0.5mm



2b ヒノキ（接線断面）
SZ01-AY2　bar:0.1mm

2c ヒノキ（放射断面）
SZ01-AY2　bar:0.1mm

3a クヌギ節（横断面）
SB62-C1　bar:1.0mm



3b クヌギ節（接線断面）
SB62-C1　bar:0.1mm

3c クヌギ節（放射断面）
SB62-C1　bar:0.1mm

南青柳遺跡出土炭化材（1）

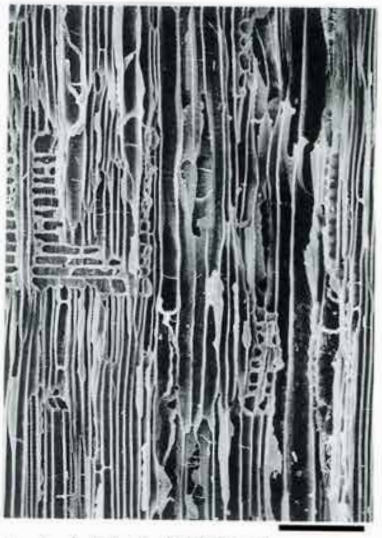
4a クリ（横断面）
SB46-C1　bar:1.0mm

4b クリ（接線断面）
SB46-C1　bar:0.1mm

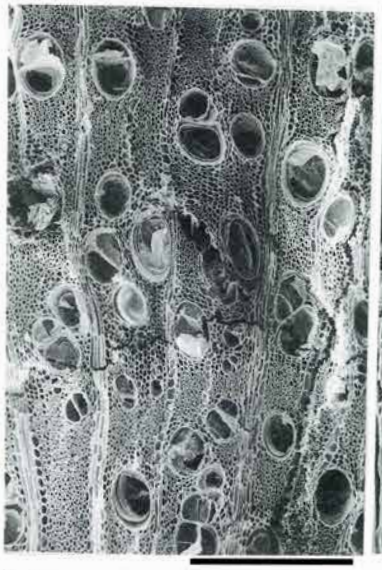
4c クリ（放射断面）
SB46-C1　bar:0.1mm

5a シイノキ属（横断面）
SB01-C1　bar:1.0mm

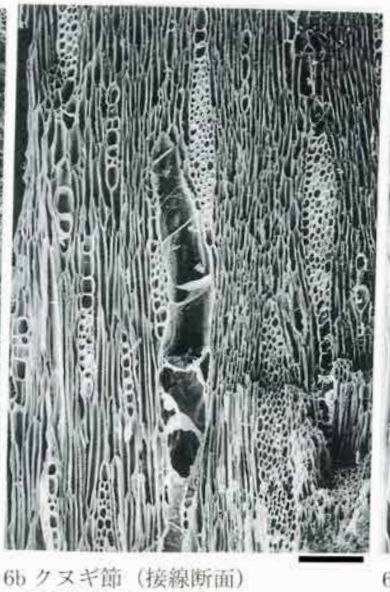
5b シイノキ属（接線断面）
SB01-AY2　bar:0.1mm



5c シイノキ属（放射断面）
SZ01-AY2　bar:0.1mm



6a クワ属（横断面）
SB54-C2　bar:0.5mm



6b クヌギ節（接線断面）
SB54-C2　bar:0.1mm

6c クヌギ節（放射断面）
SB54-C2　bar:0.1mm

南青柳遺跡出土炭化材（2）

報告書抄録

ふりがな	みなみあおやぎいせき　みなみあおやぎこふん　おおひらまえいせき
書名	南青柳遺跡　南青柳古墳　大平前遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	岐阜県文化財保護センター　調査報告書
シリーズ番号	第68集
編著者名	岡田吉孝　西中川駿馬　藤根　久　植田弥生　今村美智子　Lomtatize Zauri
編集機関	財団法人岐阜県文化財保護センター
所在地	〒502-0003　岐阜県岐阜市三田洞東1-26-1　TEL058-237-8550
発行年月日	西暦2002年3月29日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在名	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間 調査面積	調査原因
みなみあおやぎいせき 南青柳遺跡 みなみあおやぎこふん 南青柳古墳	ぎふけんせきしもうの 岐阜県関市下有知 わざみなみあおやぎ　すきょう 字南青柳・砂行	21205	06350 09074	35°30′44″	136°55′30″	19980427～19990323 5,700m²	関テクノハイランド開発事業に伴う
おおひらまえいせき 大平前遺跡	おおひらまえ　しんでほら 同字大平前・荘洞		09241	35°30′29″	136°55′55″	19990506～19990707 600m²	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
南青柳遺跡 南青柳古墳	集落跡 古墳	弥生末～古墳	竪穴住居　82軒 古墳　1基	土師器 須恵器 白瓷系陶器 鉄製器 ガラス製品 石器	弥生時代末～古墳時代初頭の急斜面集落と一括性の高い土器資料(SB09・35・54・SU01)・鉄製品(鉈・鉄鏃)古墳時代中期の造り出し付き円墳
大平前遺跡	祭祀遺構	奈良	祭祀遺構　1基	須恵器	尾根頂上部の巨岩を対象にした祭祀遺構

岐阜県文化財保護センター調査報告書　第68集

南青柳遺跡
南青柳古墳
大平前遺跡

2002年3月29日

編集・発行　財団法人　岐阜県文化財保護センター
岐阜県岐阜市三田洞東1-26-1

印　　刷　株式会社　コームラ